

水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告

1992

財団法人 東大阪市文化財協会
東大阪市教育委員会

は し が き

近鉄東大阪線が開通して5年余の月日が過ぎております。その間、国道308号線周辺の開発が急激に進み、大阪の東西を結ぶ幹線道路として、経済活動に占める役割はますます増大してまいりました。

また、近年では、従来から計画されていた第2阪奈有料道路の建設が、関西新空港の完成を間近に控え、その完成が急がれております。

今回の調査報告は、これらの大規模な開発に先立ち、埋蔵文化財の確認を目的とした第2次試掘調査の結果であります。調査では、水走遺跡の存在を明らかにし、また、鬼虎川遺跡の範囲を再確認するなど、貴重な資料を提示することができました。

この調査に基づいて、数次に及ぶ発掘調査が実施され、多大な成果がもたらされております。今後、当報告と合わせ、貴重な資料を提供できるものと考えております。

最後に、調査、整理に際して貴重なご指導、ご協力を賜った関係諸機関、諸氏に深く感謝するとともに、今後ともなお一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成4年3月31日

財団法人 東大阪市文化財協会
理事長 森 分 最

例 言

1. 本書は、東大阪生駒電鉄株式会社（現近畿日本鉄道株式会社）が計画した東大阪都市高速鉄道東大阪線（現近畿日本鉄道東大阪線）建設に伴う第2次試掘調査の結果報告である。
2. 本調査は、財団法人東大阪市文化財協会が、東大阪生駒電鉄株式会社の委託を受けて実施した。
3. 現地調査は昭和57年6月14日より昭和58年4月28日まで実施した。
4. 事務局の体制は下記の通りである。

調査当時

理事長	木寺 宏（東大阪市教育委員会教育長）
事務局長	寺澤 勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事・文化財課長）
庶務部長	小川 満（東大阪市教育委員会文化財課主幹）
調査部長	原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主査）
庶務部	安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）
調査部	上野節子

平成4年3月現在

理事長	森分 最（東大阪市教育委員会教育長）
事務局長	池田和幸（東大阪市教育委員会文化財課長）
事務局付	小寺健夫（東大阪市教育委員会文化財課長代理）
調査部長	原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主幹）
庶務部長	下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主査）
調査部	上野節子
庶務部	浅田直美
庶務部	大林 享

調査担当 上野利明（東大阪市教育委員会文化財課）
才原金弘（東大阪市教育委員会文化財課）

調査・整理補助

相田 正明	有山 淳司	浦元 英俊	長峰 繁巳	山口 靖弘	高石 俊哉
落合 信生	大野 佳子	梅本 敦子	金 弘美	田中 幹久	椎木 竜治
岡村多美子	高江千津子	平井二美子	本田けい子	高岡 史子	新谷久美子
高須 明美	松尾 美絵	浅川由美子	清水 美香	広瀬実佐江	長谷川喜子
久保喜代香	今井 喬子	今井 樹彦	小田千鶴子	大西ひとみ	

5. 調査における土色名は、農林水産省農林水産技術事務所監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』によった。

6. 本書の執筆は遺構・層位関係を上野、出土遺物を才原が担当した。また、第V章については、大阪市立大学医学部解剖学第2講座、多賀谷 昭氏より報文を賜った。記して謝意を表す。

遺構写真は調査担当者が、遺物写真はスタジオG.F.プロ、谷川喜一氏に委託して、撮影した。

7. 調査に際しては、大阪市立自然史博物館那須孝悌・樽野博幸両氏に土層観察、動物遺体、植物遺体鑑定について多大なるご指導、ご教示を賜った。記して謝意を表す。

本文目次

序

例言

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	4
1. 調査の方法	4
2. No.1 トレンチの調査	6
3. No.2 トレンチの調査	13
4. No.3 トレンチの調査	14
5. No.4 トレンチの調査	20
6. No.5 トレンチの調査	37
7. No.6 トレンチの調査	46
8. No.7 トレンチの調査	52
9. No.8 トレンチの調査	57
10. No.9 トレンチの調査	65
IV. 出土遺物	67
1. 土器	67
2. 木製品	119
3. 石製品	136
4. 土製品	137
5. 骨角牙製品	138
6. 金属器	139
V. 東大阪市水走遺跡出土の中世人骨について	142
VI. まとめ	143

挿 図 目 次

第1図	水走遺跡周辺遺跡分布図(1/50,000).....	3
第2図	調査地点、地区割図.....	4・5
第3図	No.1 トレンチ断面図.....	7・8
第4図	No.1 トレンチ足跡平面図.....	9
第5図	No.1 トレンチ遺構平面図.....	10
第6図	SD1 断面図.....	10
第7図	SD2 断面図.....	10
第8図	No.2 トレンチ断面図.....	11・12
第9図	No.3 トレンチ断面図.....	15・16
第10図	No.3 トレンチ足跡面2 平面図.....	17・18
第11図	No.3 トレンチ足跡面1 平面図.....	19
第12図	No.4 トレンチ断面図.....	21・22
第13図	No.4 トレンチ落ち込み断面図.....	23
第14図	No.4 トレンチ自然流路平面図.....	24
第15図	No.4 トレンチ遺構面1 平面図.....	25・26
第16図	No.4 トレンチ遺構面1' 平面図.....	27・28
第17図	No.4 トレンチ遺構面2 平面図.....	29・30
第18図	No.4 トレンチSK16・18平面図.....	31
第19図	SK16・18断面図.....	32
第20図	SK16・18南側施設実測図.....	32
第21図	SK16・18北側施設実測図.....	33
第22図	No.4 トレンチ土塚墓実測図.....	34
第23図	No.4 トレンチ足跡平面図.....	35
第24図	No.5 トレンチ断面図.....	39・40
第25図	堤防実測図.....	41・42
第26図	堤防前面杭列実測図.....	43
第27図	落ち込み平面図.....	45
第28図	No.6 トレンチ断面図.....	47・48
第29図	No.6 トレンチ足跡平面図.....	49・50
第30図	落ち込み平面図(第11層上面).....	51
第31図	No.7 トレンチ断面図.....	53・54
第32図	No.7 トレンチ足跡平面図.....	55・56
第33図	No.8 トレンチ自然流路平面図.....	58

第34図	No.8 トレンチ断面図	59・60
第35図	No.8 トレンチ足跡平面図	61・62
第36図	No.8 トレンチ落ち込み平面図	63
第37図	No.8 トレンチ落ち込み内杭列実測図	64
第38図	No.9 トレンチ断面図	65
第39図	No.9 トレンチ河道実測図	66
第40図	No.1 トレンチ出土土器実測図	77
第41図	No.1 トレンチ出土土器実測図	79
第42図	No.1 トレンチ出土土器実測図	80
第43図	No.1 トレンチ出土土器実測図	81
第44図	No.1 トレンチ出土土器実測図	82
第45図	No.1 トレンチ出土土器実測図	83
第46図	No.2 トレンチ出土土器実測図	84
第47図	No.3 トレンチ出土土器実測図	86
第48図	No.4 トレンチSK17出土土器実測図	87
第49図	No.4 トレンチSK17出土土器実測図	88
第50図	No.4 トレンチSK17出土土器実測図	89
第51図	No.4 トレンチSK17出土土器実測図	90
第52図	No.4 トレンチSK17出土土器実測図	91
第53図	No.4 トレンチSK17出土土器実測図	92
第54図	No.4 トレンチSK17出土土器実測図	93
第55図	No.4 トレンチSK16出土土器実測図	95
第56図	No.4 トレンチSK16出土土器実測図	96
第57図	No.4 トレンチSK16出土土器実測図	97
第58図	No.4 トレンチSK16出土土器実測図	98
第59図	No.4 トレンチSK16出土土器実測図	99
第60図	自然流路・土壇墓・土壇・溝・柱穴出土土器実測図	101
第61図	No.4 トレンチ土器溜り出土土器実測図	102
第62図	No.4 トレンチ包含層出土土器実測図	103
第63図	No.4 トレンチ包含層出土土器実測図	104
第64図	No.4 トレンチ包含層出土土器実測図	105
第65図	No.4 トレンチ包含層出土土器実測図	106
第66図	No.4 トレンチ包含層出土土器実測図	107
第67図	No.4 トレンチ包含層出土土器実測図	108
第68図	No.5 トレンチ出土土器実測図	110

第69図	No. 6 トレンチ出土土器実測図	111
第70図	No. 7 トレンチ出土土器実測図	111
第71図	No. 8 トレンチ落ち込み出土土器実測図	113
第72図	No. 8 トレンチ落ち込み出土土器実測図	114
第73図	No. 8 トレンチ落ち込み・自然流路出土土器実測図	115
第74図	No. 8 トレンチ落ち込み出土土器拓影	116
第75図	No. 8 トレンチ出土土器実測図	117
第76図	No. 9 トレンチ出土土器実測図	118
第77図	No. 1 トレンチ出土木製品実測図	120
第78図	No. 1 トレンチ出土木製品実測図	121
第79図	No. 2 トレンチ出土木製品実測図	122
第80図	No. 3 トレンチ出土木製品実測図	123
第81図	No. 4 トレンチ出土木製品実測図	125
第82図	No. 5 トレンチ出土木製品実測図	126
第83図	No. 6 トレンチ出土木製品実測図	128
第84図	No. 6 トレンチ出土木製品実測図	130
第85図	No. 8 トレンチ出土木製品実測図	132
第86図	No. 8 トレンチ出土木製品実測図	133
第87図	No. 9 トレンチ出土木製品実測図	135
第88図	石製品実測図	136
第89図	石製品実測図	137
第90図	土製品実測図	138
第91図	骨・角・牙製品実測図	139
第92図	金属器実測図	140

表 目 次

表 1	瓦器碗分類表	69
表 2	土師器皿分類表	70
表 3	羽釜分類表	72
表 4	摺鉢・捏鉢分類表	74
観察表		145

図 版 目 次

図版 1	No.1 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. SD 1 2. SD 2
図版 2	No.1 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. 足跡 2. 第10層遺物出土状況
図版 3	No.1 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. 第10層鉄斧出土状況 2. 第10層刀子出土状況
図版 4	No.1 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. 第2トレンチ全景 2. 第2トレンチ南壁断面
図版 5	No.3 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. トレンチ全景(東より) 2. 足跡面1遺構
図版 6	No.3 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. 足跡面1遺構 2. 足跡面1遺構
図版 7	No.3 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. 足跡面1遺構 2. 足跡面1遺構
図版 8	No.3 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. 西壁断面 2. 足跡面2
図版 9	No.4 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. 遺構面1・1' 2. 遺構面1 落ち込み1・2・4
図版10	No.4 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. 遺構面1 落ち込み1 2. 遺構面1 SK3他
図版11	No.4 トレンチ遺構	<ol style="list-style-type: none"> 1. 遺構面1 柱穴

		2. 遺構面 1・1'
図版12	No.4 トレンチ遺構	1. 遺構面 2 SK17 2. 遺構面1'・2
図版13	No.4 トレンチ遺構	1. 遺構面 1・1' 柱穴、土器溜り 2. 遺構面 1・1' 柱穴
図版14	No.4 トレンチ遺構	1. 遺構面 1・1' 土器溜り 2. 遺構面 2
図版15	No.4 トレンチ遺構	1. 南壁断面 2. 南壁断面、SK17
図版16	No.4 トレンチ遺構	1. 遺構面 2 遺物出土状況 2. 遺構面 2 遺物出土状況
図版17	No.4 トレンチ遺構	1. SK16・18全景 2. SK16断面
図版18	No.4 トレンチ遺構	1. SK16杭列 2. SK16北側施設
図版19	No.4 トレンチ遺構	1. SK16北側施設 2. SK16北側施設
図版20	No.4 トレンチ遺構	1. SK16南側施設 2. SK16・18全景
図版21	No.4 トレンチ遺構	1. 土塚墓全景 2. 土塚墓人骨頭部
図版22	No.4 トレンチ遺構	1. 土塚墓人骨下半 2. 土塚墓人骨下半
図版23	No.5 トレンチ遺構	1. 堤防 2. 堤防
図版24	No.5 トレンチ遺構	1. 堤防上面 2. 堤防東面杭列、葦
図版25	No.5 トレンチ遺構	1. 堤防東面杭列、葦、前面杭列 2. 堤防東面杭列、葦
図版26	No.5 トレンチ遺構	1. 堤防東面杭列、葦、前面杭列 2. 堤防東面杭列、葦、前面杭列
図版27	No.5 トレンチ遺構	1. 堤防東面杭列、葦 2. 堤防東面杭列、葦断面
図版28	No.5 トレンチ遺構	1. 堤防東面杭列、葦 2. 堤防東面杭列、葦断面

図版29	No.5 トレンチ遺構	1. 堤防東面内部 2. 堤防基礎部
図版30	No.5 トレンチ遺構	1. 堤防基礎部 2. 堤防基礎部
図版31	No.5 トレンチ遺構	1. 堤防基礎部 2. 堤防断面
図版32	No.5 トレンチ遺構	1. 南壁断面 2. 南壁断面
図版33	No.5 トレンチ遺構	1. 南壁断面 2. 南壁断面
図版34	No.5 トレンチ遺構	1. 最下層落ち込み 2. 最下層落ち込み断面
図版35	No.5 トレンチ遺構	1. 西壁断面 2. トレンチ全景
図版36	No.6 トレンチ遺構	1. 落ち込み 2. 足跡
図版37	No.6 トレンチ遺構	1. 足跡 2. 足跡
図版38	No.6 トレンチ遺構	1. 第10層遺物出土状況 2. 第10層遺物出土状況
図版39	No.6 トレンチ遺構	1. 第10層遺物出土状況 2. 第10層遺物出土状況
図版40	No.6 トレンチ遺構	1. 第10層遺物出土状況 2. 第17層縄文土器出土状況
図版41	No.7 トレンチ遺構	1. 足跡 2. 西壁断面
図版42	No.8 トレンチ遺構	1. 第17・18層上面攪乱状況 2. 自然流路
図版43	No.8 トレンチ遺構	1. 自然流路断面 2. 西壁断面
図版44	No.8 トレンチ遺構	1. 落ち込み 2. 落ち込み内杭列
図版45	No.8 トレンチ遺構	1. 落ち込み内杭列 2. 落ち込み西壁断面
図版46	No.8 トレンチ遺構	1. 足跡

		2. 足跡
図版47	No.9 トレンチ遺構	1. 河道全景 2. 北壁断面
図版48	遺物	No.1 トレンチ出土土器 弥生土器・布留式土器
図版49	遺物	No.1 トレンチ出土土器 土師器・須恵器・製塩土器
図版50	遺物	No.1 トレンチ出土土器 土師器
図版51	遺物	No.1 トレンチ出土土器 土師器
図版52	遺物	No.1 トレンチ出土土器 土師器
図版53	遺物	No.1 トレンチ出土土器 土師器・須恵器・瓦器
図版54	遺物	No.1 トレンチ出土土器 瓦器
図版55	遺物	1. No.1 トレンチ出土土器 弥生土器 2. No.1トレンチ出土土器 弥生土器・庄内式土器・布留式土器
図版56	遺物	1. No.1 トレンチ出土土器 土師器 2. No.1 トレンチ出土土器 土師器
図版57	遺物	1. No.1 トレンチ出土土器 土師器 2. No.1 トレンチ出土土器 土師器
図版58	遺物	1. No.1 トレンチ出土土器 土師器 2. No.1 トレンチ出土土器 須恵器・瓦器
図版59	遺物	1. No.1 トレンチ出土土器 製塩土器(表) 2. No.1 トレンチ出土土器 製塩土器(裏)
図版60	遺物	No.2 トレンチ出土土器 須恵器・土師器・瓦器
図版61	遺物	1. No.2 トレンチ出土土器 須恵器・土師器・瓦器 2. No.2 トレンチ出土土器 瓦器
図版62	遺物	1. No.3 トレンチ出土土器 須恵器・土師器・瓦器 2. No.3 トレンチ出土土器 土師器・輸入磁器
図版63	遺物	No.4 トレンチSK17出土土器 瓦器
図版64	遺物	No.4 トレンチSK17出土土器 瓦器
図版65	遺物	No.4 トレンチSK17出土土器 瓦器
図版66	遺物	No.4 トレンチSK17出土土器 瓦器
図版67	遺物	No.4 トレンチSK17出土土器 瓦器・須恵器・土師器
図版68	遺物	No.4 トレンチSK17出土土器 土師器
図版69	遺物	No.4 トレンチSK17出土土器 土師器
図版70	遺物	No.4 トレンチSK16・17出土土器 土師器・瓦器
図版71	遺物	No.4 トレンチSK16出土土器 瓦器・須恵器・土師器
図版72	遺物	No.4 トレンチSK16出土土器 土師器

図版73	遺物	No. 4 トレンチ土塚墓・SK13出土土器 瓦器・土師器
図版74	遺物	No.4トレンチSK2・13・18、SD2、自然流路出土土器 土師器・瓦器
図版75	遺物	No.4トレンチ自然流路、SP16・133、土器溜り出土土器 土師器・瓦器
図版76	遺物	No. 4 トレンチ自然流路出土土器 瓦器
図版77	遺物	1. No. 4 トレンチSK17出土土器 瓦器 2. No. 4 トレンチSK17出土土器 土師器
図版78	遺物	1. No. 4 トレンチSK17出土土器 瓦器 2. No. 4 トレンチSK17出土土器 瓦器
図版79	遺物	1. No.4トレンチSK17出土土器 須恵器・瓦器・陶器・輸入磁器 2. No. 4 トレンチSK16出土土器 瓦器
図版80	遺物	1. No. 4 トレンチSK16出土土器 瓦器 2. No. 4 トレンチSK16出土土器 須恵器・瓦器
図版81	遺物	1. No. 4 トレンチSK16出土土器 瓦器 2. No. 4 トレンチSK16出土土器 陶器
図版82	遺物	1. No. 4 トレンチSK16出土土器 瓦器 2. No. 4 トレンチSK16出土土器 瓦器
図版83	遺物	1. No. 4 トレンチSK16出土土器 土師器 2. No. 4 トレンチSK16出土土器 瓦器
図版84	遺物	1. No. 4 トレンチSK16出土土器 輸入磁器 2. No.4トレンチSD1・4、SK18、SP23・98出土土器 瓦器・輸入磁器
図版85	遺物	No. 4 トレンチ包含層出土土器 瓦器
図版86	遺物	No. 4 トレンチ包含層出土土器 瓦器
図版87	遺物	No. 4 トレンチ包含層出土土器 瓦器
図版88	遺物	No. 4 トレンチ包含層出土土器 須恵器・土師器・陶器・瓦器
図版89	遺物	No. 4 トレンチ包含層出土土器 土師器
図版90	遺物	No. 4 トレンチ包含層出土土器 土師器
図版91	遺物	No. 4 トレンチ包含層出土土器 土師器
図版92	遺物	No. 4 トレンチ包含層出土土器 土師器
図版93	遺物	No. 4 トレンチ包含層出土土器 土師器
図版94	遺物	1. No. 4 トレンチ包含層出土土器 土師器・瓦器 2. No. 4 トレンチ包含層出土土器 土師器・瓦器
図版95	遺物	1. No. 4 トレンチ包含層出土土器 瓦器 2. No. 4 トレンチ包含層出土土器 瓦器
図版96	遺物	1. No. 4 トレンチ包含層出土土器 須恵器・陶器・瓦器 2. No. 4 トレンチ包含層出土土器 陶器・輸入磁器

図版97	遺物	No. 5～7 トレンチ出土土器 須恵器・土師器・瓦器
図版98	遺物	1. No. 5 トレンチ出土土器 須恵器・土師器・瓦器 2. No. 6 トレンチ出土土器 縄文土器
図版99	遺物	No. 8 トレンチ出土土器 縄文土器・弥生土器・土師器
図版100	遺物	1. No. 8 トレンチ出土土器 縄文土器 2. No. 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器
図版101	遺物	1. No. 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器 2. No. 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器
図版102	遺物	1. No. 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器 2. No. 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器
図版103	遺物	No. 9 トレンチ出土土器 瓦器
図版104	遺物	1. No. 9 トレンチ出土土器 縄文土器・弥生土器 2. No. 9 トレンチ出土土器 黒色土器・瓦器・土師器・須恵器
図版105	遺物	1. No. 1・6・8・9 トレンチ出土石製品 2. No. 1・3・4・6・8 トレンチ出土石製品
図版106	遺物	1. No. 1～4 トレンチ出土土製品 2. No. 1・8 トレンチ出土骨・角・牙製品
図版107	遺物	No. 1・8 トレンチ出土金属器
図版108	遺物	No. 1・3・4・8 トレンチ出土金属器
図版109	遺物	No. 1・4・6 トレンチ出土金属器
図版110	遺物	No. 1 トレンチ出土木製品
図版111	遺物	No. 1・2 トレンチ出土木製品
図版112	遺物	No. 1・2 トレンチ出土木製品
図版113	遺物	No. 3・4 トレンチ出土木製品
図版114	遺物	No. 4 トレンチ出土木製品
図版115	遺物	No. 5 トレンチ出土木製品
図版116	遺物	No. 5・6 トレンチ出土木製品
図版117	遺物	No. 6 トレンチ出土木製品
図版118	遺物	No. 8 トレンチ出土木製品
図版119	遺物	No. 8 トレンチ出土木製品
図版120	遺物	No. 8・9 トレンチ出土木製品
図版121		No. 4 トレンチ出土中世人骨

I. 調査に至る経過

東大阪市内を東西に貫く国道308号線は、中河内地域のほぼ中央部に位置し、東西方向の交通網における基幹道路となっている。しかしながら、増加し続ける交通量により道路機能の大半が麻痺状態となり、交通渋滞解消の対策が急がれていた。

また、一方で、ベットタウン化の激しい奈良県からの鉄道輸送量の増大により、関西学術研究都市構想とも相俟って、新たな鉄道輸送網の確保が臨まれた。

このような状況から、昭和46年の都市交通審議会において、新たな鉄道路線の建設が必要との答申が出され、国道308号線の整備及び阪神高速道路の延長計画と合わせ、実施されることが決定された。

この決定により、東大阪教育委員会では原因者である東大阪生駒電鉄株式会社（現在、近畿日本鉄道株式会社）、及び、阪神高速道路公団と協議を開始し、先ず、計画路線内に周知の遺跡以外の埋蔵文化財包蔵地の確認調査を実施することとなった。この調査は、東大阪市遺跡保護調査会により、恩智川・長田間約1.8kmの間にわたって実施され、現在、水走遺跡として周知されるに至っている。また、鬼虎川遺跡の範囲が拡大する結果を得た。^{注1}

その後、既に周知されている鬼虎川遺跡の範囲内において、発掘調査が行われ、弥生時代中期の方形周溝墓、環濠、溝等を確認した。^{注2}

発掘調査が進む一方で、発掘調査の迅速を図るため、大阪府教育委員会、東大阪教育委員会の協議を経て、昭和56年に国道308号線関係遺跡調査会が設立された。本調査会では、恩智川以东の遺跡確認調査を実施、神並遺跡の存在を確認した他、鬼虎川遺跡第13・15次調査を実施した。^{注3}

昭和57年には東大阪市遺跡保護調査会、国道308号線関係遺跡調査会、瓜生堂遺跡調査会を解散、財団法人東大阪市文化財協会が設立され、整理作業他を引き継ぎ、調査を継続することとなった。先ず、神並遺跡第1次調査に着手した。^{注4}

そして、当初に実施された試掘調査結果から、水走遺跡の範囲をより明確にする必要があり、試掘調査を実施することとなった。

注1 「東大阪市長田・恩智川間の遺跡確認調査」『調査会ニュース』No.18 1981.1

注2 『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』（財）東大阪市文化財協会 1987

注3 『鬼虎川遺跡—東大阪都市高速道路東大阪線計画事業に伴う発掘調査概要(その2)』1981 国道308号線関係遺跡調査会

『鬼虎川遺跡—東大阪都市高速道路東大阪線計画事業に伴う発掘調査概要(その2-2)』1983 財団法人 東大阪市文化財協会

注4 『神並遺跡Ⅰ』東大阪教育委員会 財団法人 東大阪市文化財協会 1986

『神並遺跡Ⅱ』東大阪教育委員会 財団法人 東大阪市文化財協会 1987

Ⅱ．位置と環境

水走遺跡は、東大阪市の東部、東大阪市水走到位置し、現在国道308号線を中心にして東西に広がっている。この付近一帯は、今まで低湿地であるため、水田等に利用され、開発の進んでいない地域であった。近年では、鉄道及び道路網の整備により大きく変貌している。

低湿地として現在に至っている原因は、縄文海進による河内湾の出現に始まる。河内湾については、梶山彦太郎・市原実両氏によって研究が為され、^{注5}変化する河内湾の状態が明らかにされている。さらに、那須孝悌・樽野博幸両氏は発掘調査の成果を加え、河内湾～河内潟の姿に修正を加えて^{注6}いる。詳細は前記の研究成果を参照されたい。

ところで、水走遺跡が営まれ始めた12世紀の段階は、旧大和川の分流である玉櫛川が、河内湖から続く沼地となっていた水走遺跡の付近を北流していた。その兩岸に形成された自然堤防上に当遺跡が立地している。なお、現在東大阪地域では玉櫛川沿いに遺跡は確認されていないが、八尾地域から当市にかけて発掘調査が実施されている池島遺跡や、玉串遺跡の詳細が明らかになりつつあり、玉櫛川流域の状態が明確になるであろう。

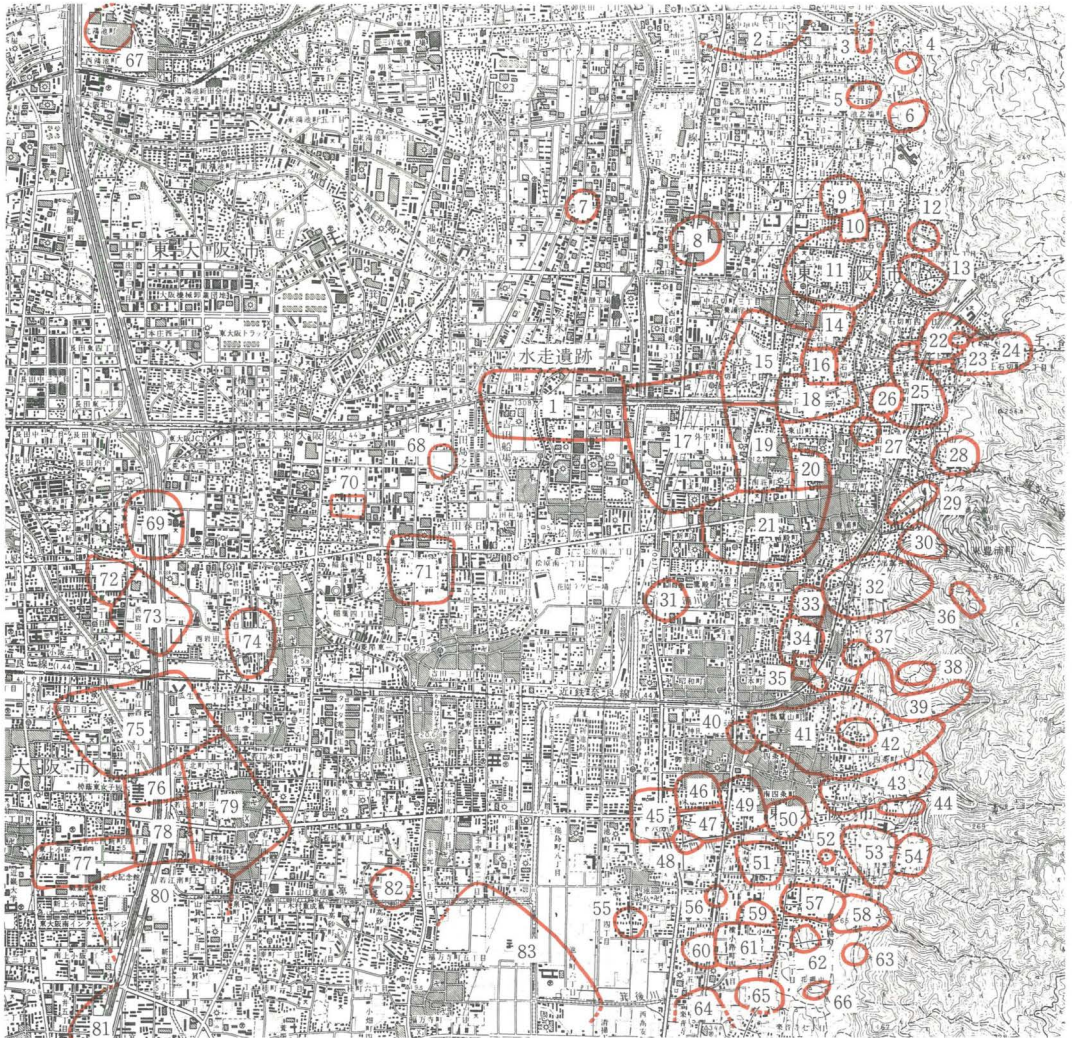
当遺跡の周辺には、縄文時代早期の神並遺跡が最も古い時期の遺跡である。神並遺跡は古墳時代中～後期、鎌倉時代まで続く。縄文時代中期に始まる鬼塚遺跡は、後期を中心にして晩期から弥生時代前期、中期、さらに、古墳時代中～後期、平安～室町時代まで断続しながら続く。弥生時代に始まる遺跡としては、前期に始まり、中期を中心とする鬼虎川遺跡がある。西ノ辻遺跡は弥生時代中期より後期、古墳時代中期、室町時代と断続的に続く。植附遺跡、和泉遺跡は、中期の遺跡として周知されている。

このように、水走遺跡の中心となる鎌倉時代から室町時代の遺跡は、上記の神並遺跡、西ノ辻遺跡、鬼塚遺跡などがあり、縄文時代、弥生時代の遺跡に比べて、多くはないと言えよう。

当地には、地方豪族であった水走氏の存在が文献上でも知られており、鎌倉時代に始まる水走氏の開発との関連が課題として挙げられている。遺跡の分布、立地とともに大きな問題点として検討されることを期待したい。

注5 梶山彦太郎・市原実『大阪平野発達史』1972 『大阪平野発達史』1985 古文物学研究会

注6 那須孝悌・樽野博幸『河内平野の生いたち』1981 大阪市立自然史博物館



- | | | | | |
|-------------|------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 水走遺跡 | 2. 中垣内遺跡 | 3. 足立氏館跡 | 4. 善根寺山遺跡 | 5. 善根寺遺跡 |
| 6. 池端遺跡 | 7. 加納遺跡 | 8. 和泉遺跡 | 9. 日下遺跡 | 10. 馬場遺跡 |
| 11. 芝ヶ丘遺跡 | 12. 正法寺山遺跡 | 13. 芝坊主山遺跡 | 14. 辻子谷遺跡 | 15. 植附遺跡 |
| 16. 法通寺跡 | 17. 鬼虎川遺跡 | 18. 神並遺跡 | 19. 西ノ辻遺跡 | 20. 額田寺跡 |
| 21. 鬼塚遺跡 | 22. 千手寺山遺跡 | 23. 箸尾古墳群 | 24. 辻子谷古墳群 | 25. 神並古墳群 |
| 26. 正興寺山遺跡 | 27. 若宮古墳群 | 28. 額田山古墳群 | 29. みかん山古墳群 | 30. 豊浦谷古墳群 |
| 31. 鶴立遺跡 | 32. 出雲井遺跡群 | 33. 孤塚遺跡 | 34. 皿池遺跡 | 35. 河内寺跡 |
| 36. 神津嶽祭祀遺跡 | 37. 水走氏館跡 | 38. 五条山古墳群 | 39. 客坊山遺跡群 | 40. 市尻遺跡 |
| 41. 山畑古墳群 | 42. 山畑遺跡 | 43. 花草山古墳群 | 44. 五里山古墳群 | 45. 北鳥池遺跡 |
| 46. 五合田遺跡 | 47. 段上遺跡 | 48. 下六万寺遺跡 | 49. 縄手遺跡 | 50. 上六万寺遺跡 |
| 51. 船山遺跡 | 52. 桜井古墳群 | 53. 岩滝山遺跡 | 54. 往生院金堂跡 | 55. 池島東遺跡 |
| 56. コモ田遺跡 | 57. 半堂遺跡 | 58. 浄土寺谷古墳群 | 59. 北屋敷遺跡 | 60. 西代遺跡 |
| 61. 馬場川遺跡 | 62. 具花遺跡 | 63. 浄土寺跡 | 64. 楽音寺遺跡 | 65. 西の口遺跡 |
| 66. 萩山古墳 | 67. 北鴻池遺跡 | 68. 吉田遺跡 | 69. 新家遺跡 | 70. 菱江寺跡 |
| 71. 稲葉遺跡 | 72. 意岐部遺跡 | 73. 西岩田遺跡 | 74. 岩田遺跡 | 75. 瓜生堂遺跡 |
| 76. 巨摩庵寺遺跡 | 77. 上小阪遺跡 | 78. 若江北遺跡 | 79. 若江遺跡 | 80. 山賀遺跡 |
| 81. 友井東遺跡 | 82. 玉串遺跡 | 83. 池島遺跡 | | |

第1図 水走遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

Ⅲ．調査の概要

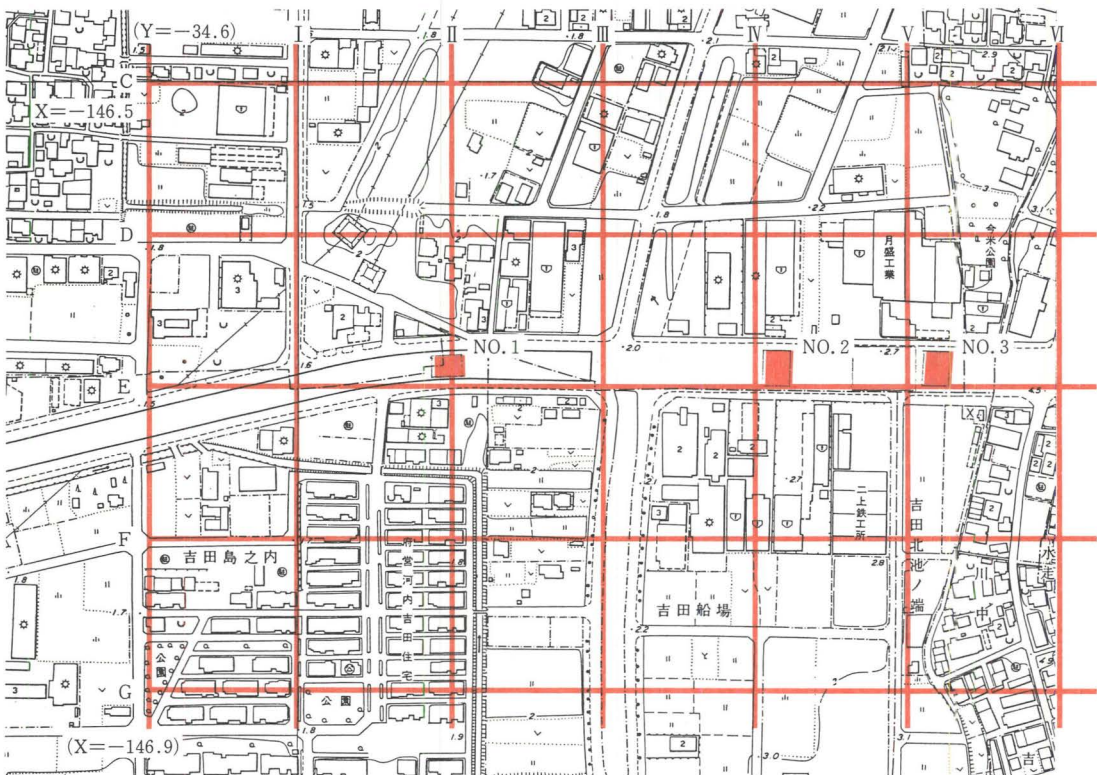
1. 調査の方法

今回の調査は、前述したように水走遺跡の範囲確認と、全面調査の有無を決定する目的を有していた。そのため、第1次試掘調査で遺物包含層が存在すると考えられる範囲内をさらに細かく、広範囲に確認すべく調査箇所を設定した。

調査に際しては、全面調査の必要があった場合を想定して、国土座標を使用して地区設定を行った。調査地点は橋脚予定地とし、恩智川西際から約1.6km間に9箇所である。国土座標に基づく地区割りとは別に、西よりNo.1トレンチとし、No.9トレンチまで設定した。

上層は掘削用機械を使用し、国道308号線建設時の盛土のみを除去し、以下を人力により掘削、調査を進めた。下層については、東に隣接する鬼虎川遺跡において、弥生時代の包含層が現地地表下約5.5m付近に存在するため、試掘調査では約6mまでを対象とした。

さらに、土層観察を大阪市立自然史博物館第四紀研究室、那須孝悌・樽野博幸両氏に依頼し指導を受けて調査を進めた。また、各トレンチで分析用土壌サンプルを採取し、花粉分析、珪藻分析他の分析を両氏に依頼した。これらの成果は、前記の両氏論文にその一部が生かされている。



第2図 調査地点・地区割り図

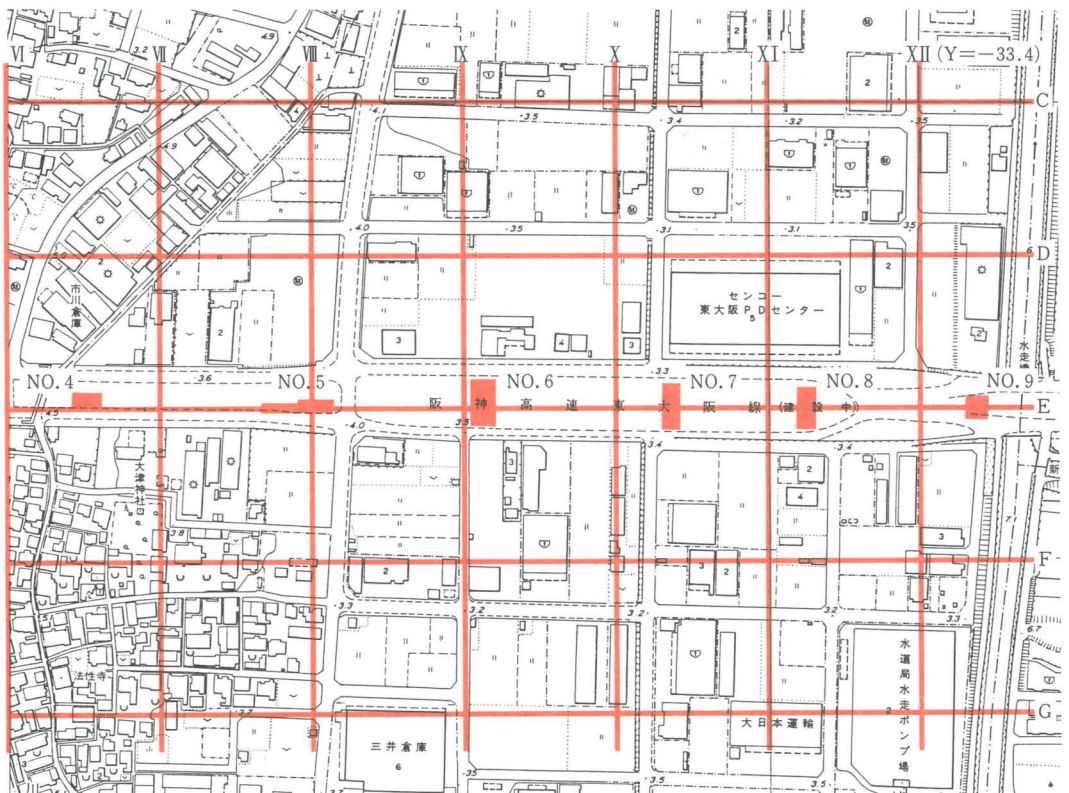
地区割りの方法は、水走遺跡から神並遺跡に至る範囲をまとめる必要から、原点を東大阪市川中（座標値では、 $X=-146.200\text{km}$ 、 $Y=-34.600\text{km}$ ）に設定した。

その上で、100方角を大地区とし、さらに大地区を5m方角に分割し、小地区とした。地区の名称は、各々の地区割りラインに名称を与え、直行する2方向のライン名称の組み合わせにより地区名称を表した。

大地区のライン名称は、原点を通るラインは南北、東西方向ともに名称は無く、南北ラインが原点より東に向かって、I ($Y=-34.500$)、II ($Y=-34.400$)、III ($Y=-34.300$) と続き、東西ラインが原点より西に向かって、A ($X=-146.300$)、B ($X=-146.400$)、C ($X=-146.500$) となる。小地区のライン名称は大地区と同様に、南北ラインを1、2、3とし、東西ラインをa、b、cとした。従って、原点を含む西北端の小地区の名称は、IA1aとなり、IA地区（大地区）の東南端は、IA20tとなる。

なお、遺物の取り上げでは、遺構内出土は遺構番号、遺構内層位で、包含層出土遺物は層位名で行い、地区割り毎の取り上げは行っていない。各トレンチの調査面積は下記の通りである。

No.1 トレンチ	約250㎡	No.4 トレンチ	約130㎡	No.7 トレンチ	約320㎡
No.2 トレンチ	約390㎡	No.5 トレンチ	約290㎡	No.8 トレンチ	約400㎡
No.3 トレンチ	約390㎡	No.6 トレンチ	約560㎡	No.9 トレンチ	約220㎡



2. No.1 トレンチの調査

1) 層位

No.1 トレンチでは、第3層がシルト質粘土と極細粒砂の互層、第7a～7c、9層がシルト質粘土と細粒砂の互層、及び細～中粒砂である。これらの層は、No.4 トレンチ付近から検出している旧玉櫛川の氾濫による堆積層と考えられる。堆積時期については今回の調査では確認できなかったが、上層は近代以降と考えられる。下層については、第10～12層で庄内期から平安期の遺物が出土しており、少なくとも平安時代以降の堆積であろう。

このような上下2時期の氾濫による砂粒の堆積は、旧玉櫛川西岸一帯に広がっている。第7a・7b・7c層は、トレンチ南西部で見られなくなり、第9層上面が乱れている。人為的な行為による攪乱と考えられる。第7b層は灰オリーブ色の細粒砂で、中粒砂・極細粒砂を少量含む。第7c層は、粘土質シルトと細粒砂の互層であるが、細粒砂は上部では非常に薄く、下部はやや厚く入る。

第8層は、非常に薄く、上層の第7層とともにトレンチ南西部で攪乱され、見られなくなる。第9層上面に部分的にブロック状に残る。

第9層は中部で極細～中粒砂とシルトが攪乱気味に混じっている。第10層上面で検出した足跡は、第9層中より踏み込まれたものである可能性が高い。

第10・11層の層界は調査時には明解ではなく、断面観察で認められた。そのため、奈良期から平安期の遺物が出土しており、堆積時期は、幅を持たざるを得ない。第12層はトレンチ北西端で僅かに認められるに過ぎない。

第13層上面では浅い落ち込み状の遺構を検出した。第13層はベース面として捉えて入る層であり、最終面である。

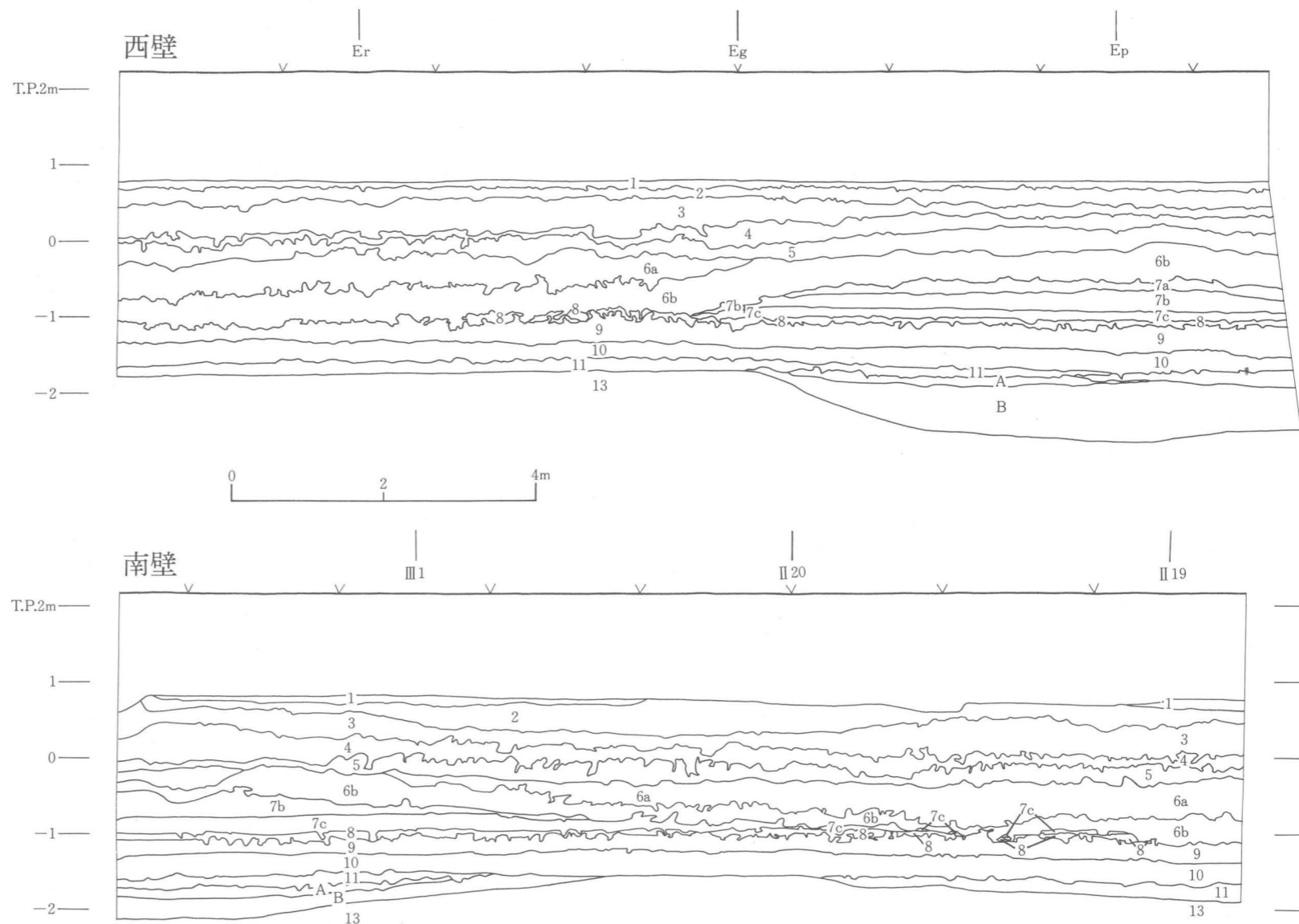
第13層より下層は部分的に掘り下げ、層位のみを確認した。第13層上部は第12層粘土と第13層灰色(10Y 4/1)粘土が混ざり、約20cmの厚さで第13層のみの層になる。第13層は厚さ約40cmである。第14層は暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土にシルトがブロック状に混ざり、植物遺体を少量含む。厚さは40cm以上である。

2) 遺構

足跡

第10層上面で検出した。足跡はトレンチ北半部に集中し、西南端に僅かに点在する。北半部の足跡に、水田等に関係するような規則性はあまり認められない。僅かに南東―北西、南西―北東の両方向に向いている。自然地形に起因することも考えられる。

足跡の踏み込み面は、第10層からではなく、前述したように、第9層中部が乱れていることから、第9層の堆積中に行われたと考えられる。



第3図 No.1 トレンチ断面図

- | | | | |
|------|--|------|--|
| 第1層 | 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土、細～中粒砂多量に含む | 第7a層 | 灰色(10Y 4/1)シルトと細砂の互層、下部は灰オリブ色(7.5Y 4/2)粘土質シルト、植物遺体は上部に多く、下部に行く程少なくなる |
| 第2層 | 暗緑灰色(5G 4/1)シルト質粘土、細～中粒砂多量に含む、炭化物微量含む | 第7b層 | 砂層 |
| 第3層 | 緑灰色(10G 5/1)シルト質粘土と極細粒砂の互層 | 第7c層 | 暗オリブ灰色(5GY 4/1)粘土質シルトと細砂の互層 |
| 第4層 | 暗オリブ灰色(2.5GY 4/1)粘土、炭化物多く、植物遺体微量含む | 第8層 | 灰色(10Y 4/1)粘土質シルト、極細粒砂、植物遺体を微量含む |
| 第5層 | 暗オリブ灰色(2.5GY 3/1)シルト質粘土、植物遺体、炭化物、酸化第1鉄少量含む | 第9層 | 上部は細～中粒砂層に灰色(7.5Y 4/1)粘土質シルトが混入、下部は砂層(細礫含む)、上部に植物遺体を微量含む |
| 第6a層 | オリブ黒色(7.5Y 3/2)シルト質粘土、全体的にシルトの量が多く、炭化物、植物遺体を多量に含む | 第10層 | 暗オリブ灰色(5GY 3/1)粘土、上部は極細粒砂を微量に含み、下部に行く程少量になる、上部は植物遺体を多量に含む上面で足跡検出 |
| 第6b層 | 灰色(10Y 4/1)粘土質シルト、中～下部にかけて細粒砂がラミナ又はブロックで入る、植物遺体を少量含む | 第11層 | オリブ黒色(10Y 3/1)粘土、植物遺体を多量に含み、酸化第1鉄が少量混入、細粒砂を多量に含む(一部切れ切れのラミナが入る) |
| | | 第12層 | 黒色(5Y 2/1)粘土に黒色(N 1.7/1)粘土が混入、植物遺体、炭化物を多量に含む |

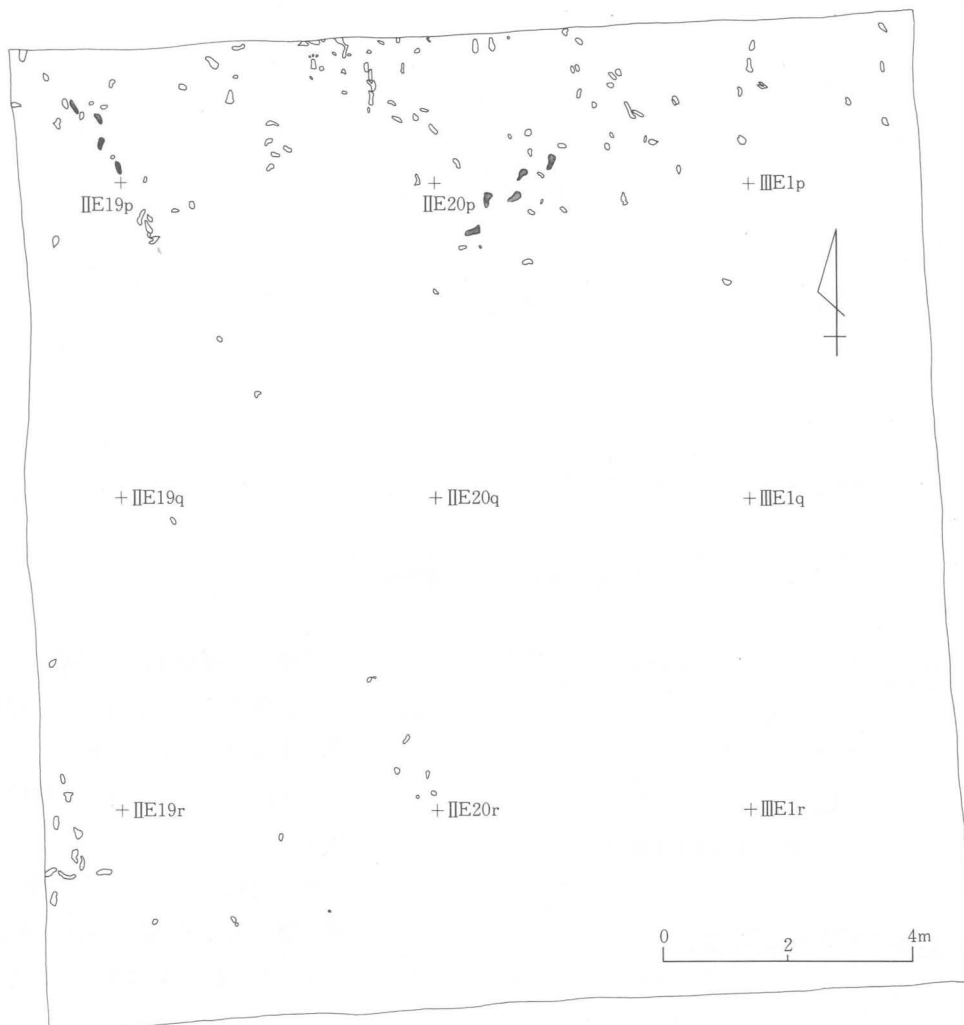
SD 1

第13層上面で検出した。溝状遺構として取り扱ったが、土壇の可能性もある。トレンチ北西部にあり、平面プランは僅かに弧状を呈している。断面は浅い碗状を呈する。検出範囲での規模は、深さ1.1m、径3.4mを測る。遺構内の堆積土は、A層が、オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土に第12層とB層が混入する。B層はオリーブ黒色(5Y 3/1)粘土で、植物遺体を多量に含み、下部に炭化物を少量含む。

出土遺物は古墳時代～平安時代までのものがあり、出土量は僅かである。

SD 2

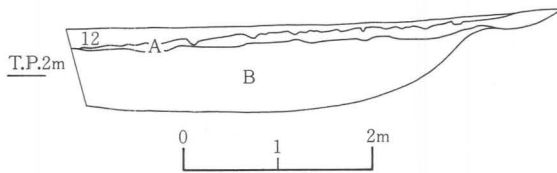
SD 1と同様第13層上面で検出した。トレンチ南東部にあり、南東に向かって傾斜する。検出範囲が狭く、性格等は不明である。



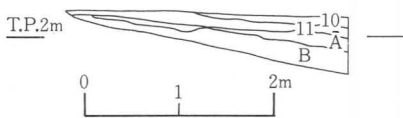
第4図 No.1 トレンチ足跡平面図



第5図 No.1 トレンチ遺構平面図



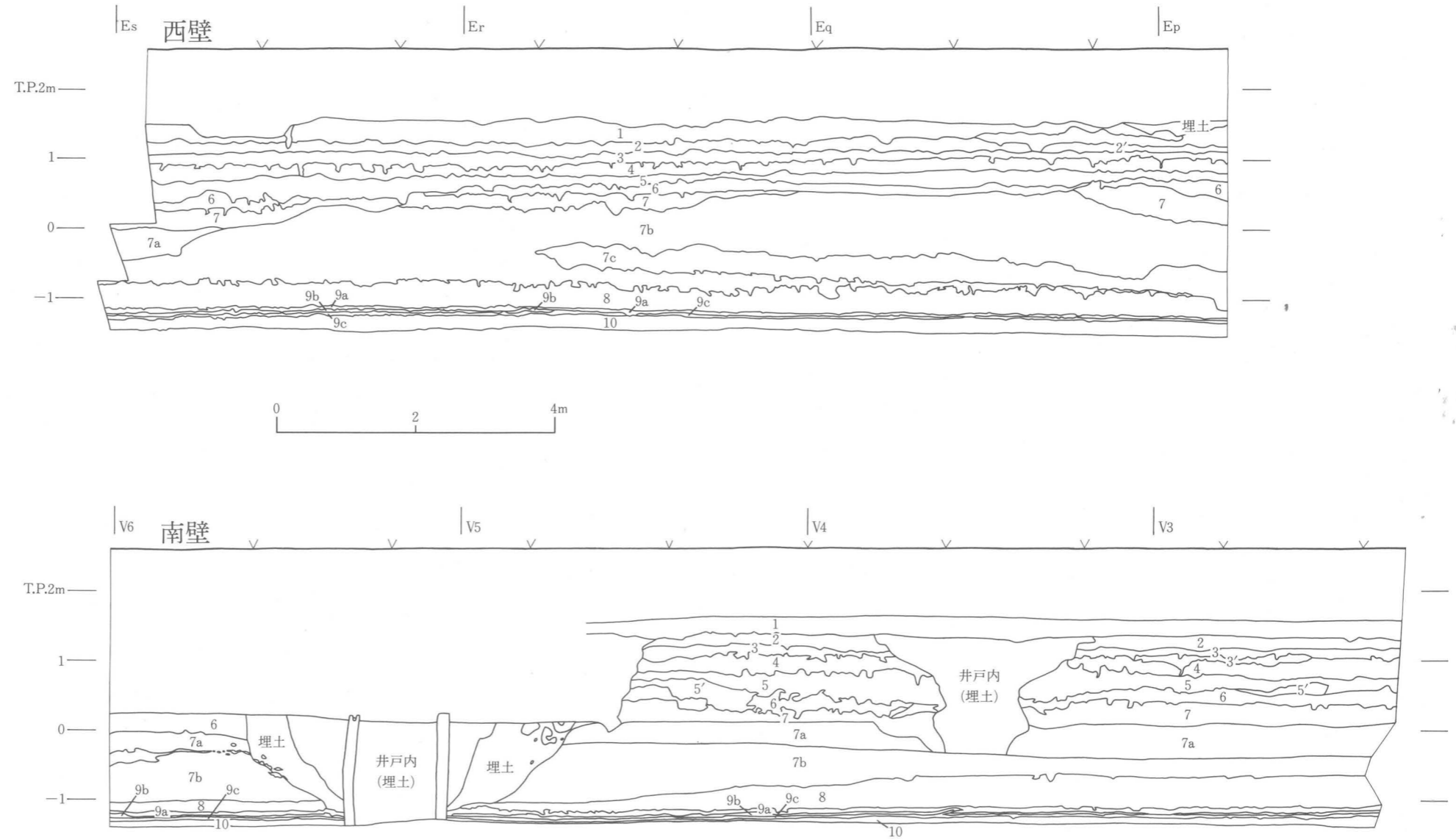
第6図 SD1 断面図



第7図 SD2 断面図

遺構内の堆積土は、A層がオリ
ーブ黒色(7.5Y 3/1)粘土で、植物
遺体を多量に含む。B層は、オリ
ーブ黒色(5Y 3/1)粘土で、植物遺
体を多量に含む。

出土遺物としては、弥生時代後
期の甕が大半で、壺の底部がある。
いずれも、出土量は僅かである。



第8図 No.2 トレンチ断面図

- 第1層 旧耕土、暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土
- 第2層 暗緑灰色(5G 4/1)シルト質粘土
- 第3層 暗緑灰色(5G 4/1)シルト質粘土と極細～細粒砂の互層
- 第4層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土、北に行く程、中～粗粒砂が多くなる
- 第5層 灰色(10Y 4/1)粘土と極細～粗粒砂の互層
- 第6層 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土と砂質シルトの互層
- 第6'層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)粘土とシルト～中粒砂の互層
- 第7層 暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む
- 第7a層 粗粒砂
- 第7b層 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土、極細粒砂、植物遺体を少量含む
- 第8層 上部は粗～細粒砂と灰色(10Y 4/1)シルト質粘土の互層
- 第9a層 黒褐色(10YR 3/1)シルト質粘土、腐植土
- 第9b層 オリーブ黒色(5Y 3/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む
- 第9c層 黒色(10YR 2/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む
- 第10層 黒色(7.5YR 2/1)粘土、植物遺体を多量に含む

3. No.2 トレンチの調査

No.2 トレンチでは層位の大半が砂粒であり、遺構は確認できなかった。これらの砂粒の堆積は、No.1 トレンチと同様に旧玉櫛川から供給されたものである。特に下層の砂粒の堆積は河道に近くなるため、No.1 トレンチよりも厚い。第9a層から第10層は非常に薄くなり、遺物もほとんど認められない。

層位

第1層は耕土で、耕土直下より現代の井戸1基を検出した。南断面で見る井戸は、上部が崩れたため、不明であるが、近世以降であろう。

第2層は、下部で暗緑灰色(5G 4/1)シルト質粘土、シルトに変わり、部分的に極細粒砂がブロック状にまじる。

第3層は南断面東側でシルト～極細粒砂になり、暗緑灰色シルト質粘土がブロック状に混じる。西断面ではシルト～極細粒砂の互層に、シルト質粘土がラミナ状に入り、南側で途切れながら続く。

第4層は細粒砂が多量に混じり、粗粒砂、細礫を僅かに含む。

第6層は南側断面では暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土に極細粒砂がブロック状に混じり、西断面及び南断面の西側でシルト質粘土と砂質シルトの互層となる。第6'層はこの互層が乱れた状態になっている。

第7b層は、南断面で見ると、シルト～極細粒砂、暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)粘土質シルト、極細粒砂～細粒砂、シルト質粘土の互層が安定して堆積する。また、植物遺体のラミナが4～6層含まれる。西断面では、北半分で上記の層が攪乱されている。

第8層上部は大半が乱れている。下部では安定した互層となる。最下部は暗オリーブ灰色(5GY 4/1)の薄いシルト層がトレンチ全体に入る。

第9層は全体に植物遺体の細片が入る腐食土層である。最下部では植物遺体層の密度の違いで、互層となっている。

第11層はオリーブ灰色(2.5GY 5/1)粘土で、第10層は入り乱れている。約20cmの厚さである。

第12層は灰色(10Y 5/1)粘土、植物遺体を微量含む。層厚約30cm。

第13層は暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土で、全体に極細粒砂が僅かに混じり、部分的に極細粒砂のブロックが混じる。植物遺体を極く少量含む。層厚約30cm。

第14層は暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルトに極細粒砂が少量混じる。植物遺体を微量含む。層厚40cm以上である。

各層の堆積時期は、出土遺物が殆んど無く、不明であるが、No.1 トレンチとの対応から、第7～8層はNo.1 トレンチの第7～9層に相当し、平安時代以降と考えられる。

また、第9～10層は、No.1 トレンチ第10・11層に相当し、古墳時代前期～平安時代と考えられる。

4. No.3 トレンチの調査

1) 層位

No.3 トレンチでは、近世以降と考えられる河道の堆積を検出した。第5～6層は、砂、粘土質シルトと砂の互層を呈しており、旧玉櫛川の一時期の河道と考えられる。方向はこの地点では、南西から北東へ流れている。河道より上層では、第4層がシルト、粘土の互層、シルト質粘土となり、この層を挟んで砂層となる。上部の砂層は、現代にも及ぶが、小規模なものであり、旧玉櫛川の堆積が殆ど無くなっていたことを示している。旧玉櫛川は、1704年に大和川が現在の位置に付け替えられてからは、小規模な井路となっており、この河道は旧大和川の最後の堆積であり、第4層より上部の堆積は、少なくとも、1704年以降の時期と考えられる。

第7層以下は、第7a層が砂層で、他はシルト質粘土となり、第7b層上面で足跡(足跡面1)を検出した。足跡の踏み込み面は、第7a層の堆積中であろう。第7b層の粘土・砂の混合層は、砂の堆積中に踏み込まれた結果と考えられる。

第9～10a層は砂の堆積で、出土遺物から奈良～平安時代の河道の痕跡と思われる。この河道は、中世に上部が別の河道(第7層)によって削られ、さらに、前述の近世の河道で東側を切られている。

第11層は粘土質シルトで、植物遺体を多量に含む層である。また、第10b層はシルト質粘土に極細～細粒砂のラミナが認められ、鬼虎川遺跡から続く弥生時代中期～後期の堆積層と考えられる。第11a層、第10b層上面では、足跡を検出した。

第12～13層は黒色粘土、シルト質粘土で、鬼虎川遺跡では遺物包含層となっている層である。弥生時代前期～中期の時期であろう。

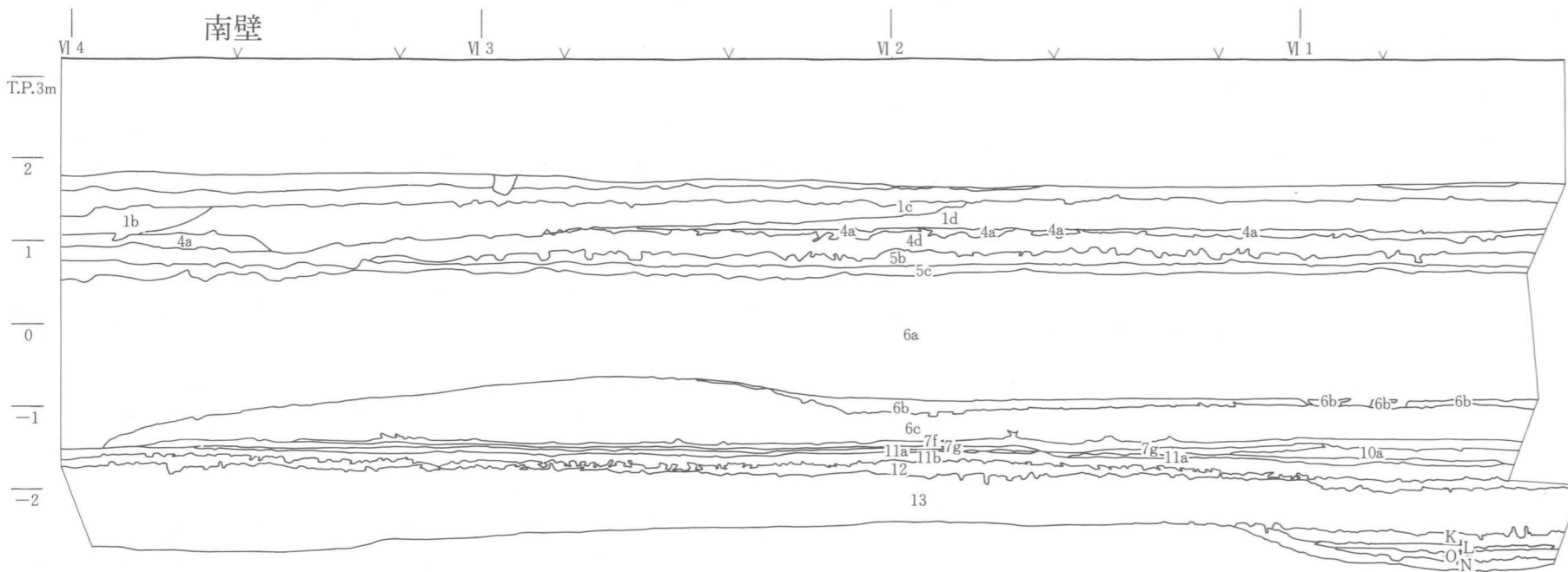
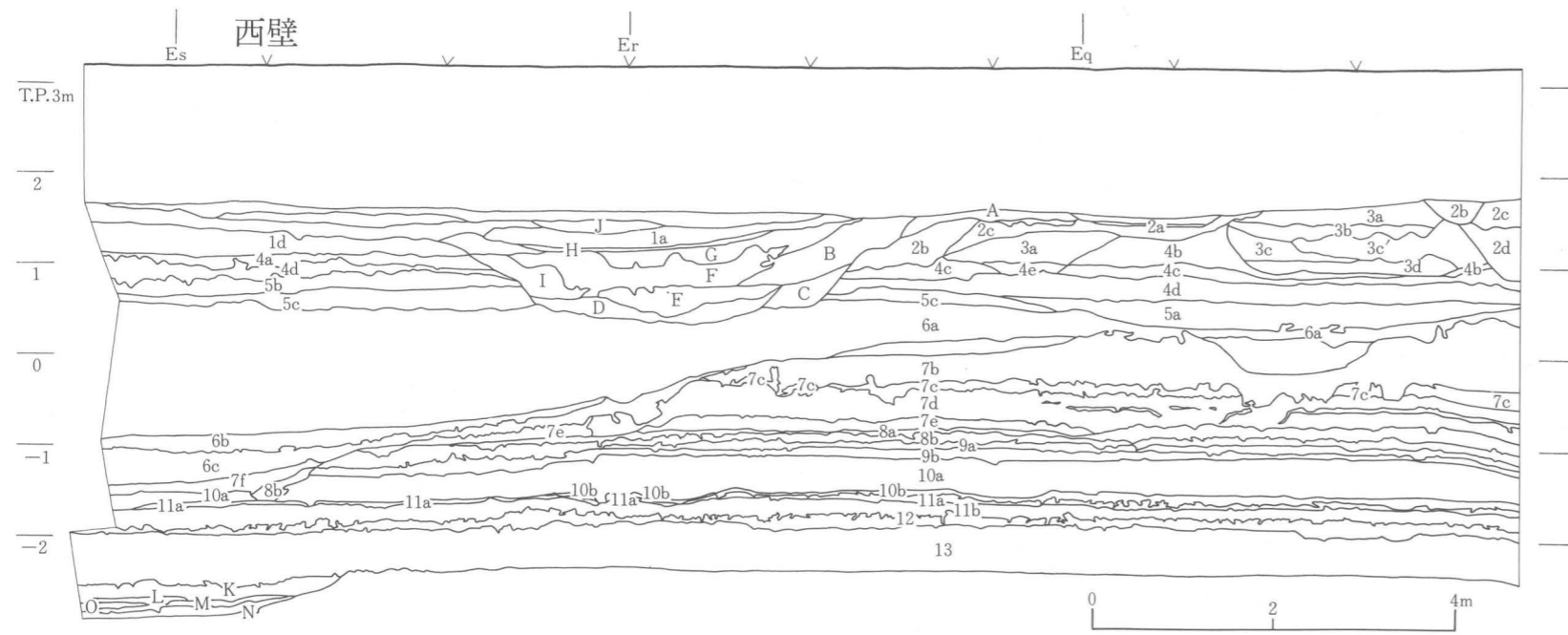
第14層は暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)シルトで、各トレンチの最終面となっている。上面では、トレンチ南西端で南西方向に下がる落ち込みを検出した。落ち込み内の堆積土は粘土～シルト質粘土で、植物遺体の細片を多量に含むが、遺物は出土しなかった。堆積状況から人為的なものではなく、河内潟の汀線付近に形勢された自然地形であろう。

上述のように、No.3 トレンチでは各時期毎の旧河道が、僅かに位置を変化させながら主に北方向へ流れていたことが明らかである。この河道は後述するが、水走遺跡全体に及んでおり、その影響を受けながら集落が営まれていたことが窺える。

2) 遺構

足跡面1

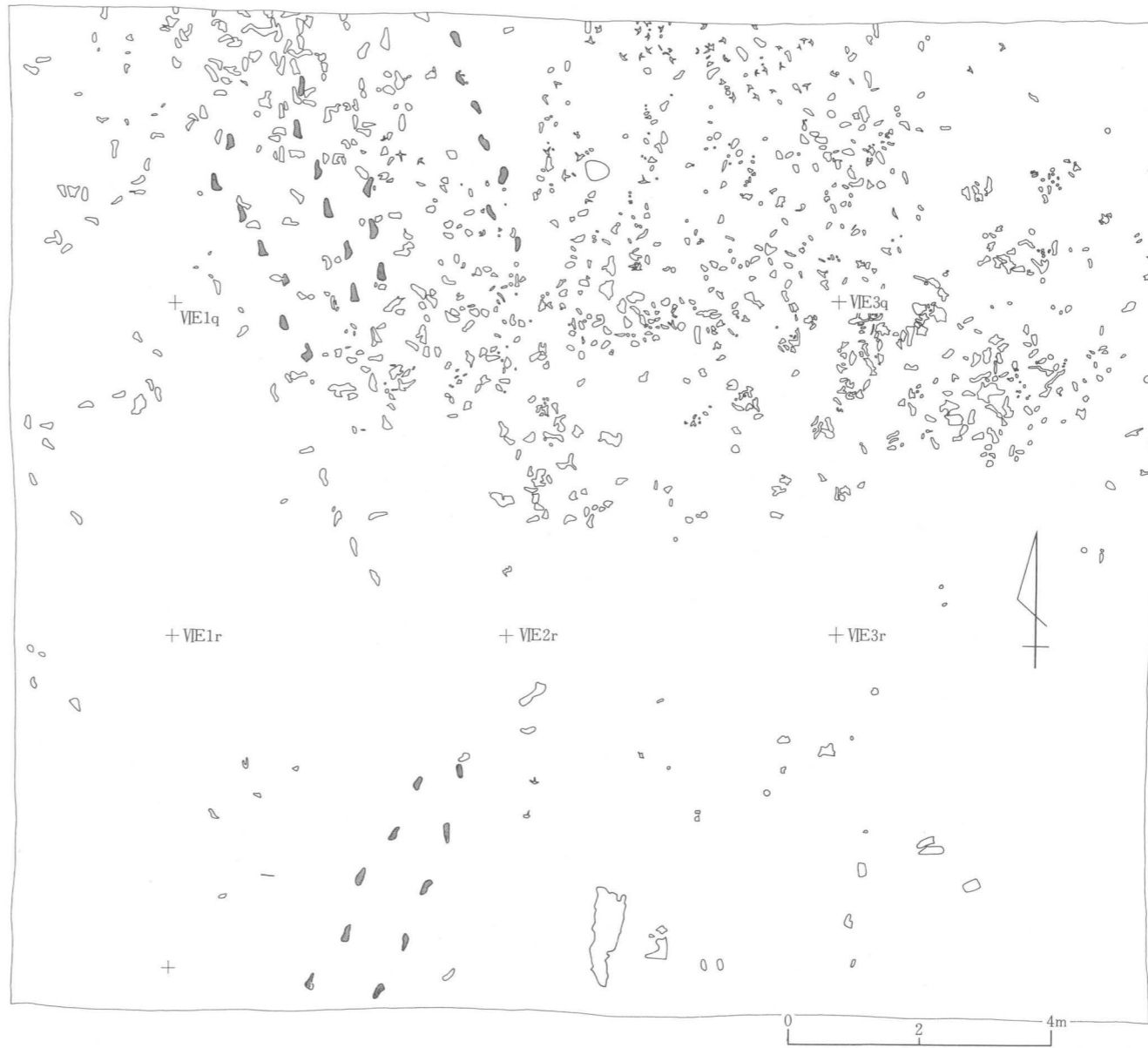
第7d層上面で検出した。足跡は近世の河道により南東部と南側が削られている。残った範囲の主として中央部に集中している。足跡の方向性は明確には認められないが、僅かに南東から北西方向にかけての足跡が見られる。



第9図 No.3 トレンチ断面図

- | | |
|---|---|
| A 暗緑灰色(5G 4/1)シルト、粗粒砂を微量に含む | K 黒色(5Y 2/1)粘土、下部に植物遺体を多量に含む |
| B 砂層に灰オリブ色(5Y 4/2)粘土がブロック又はラミナ状で含まれる | L 黒色(10YR 2/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む、酸化第1鉄を微量に含む |
| C 極細～細粒砂とオリブ黒色(7.5Y 3/2)粘土質シルトがほぼ均等に混ざる | M オリブ黒色(5Y 3/1)シルト質粘土、植物遺体、酸化第1鉄を多量に含む |
| D 細～粗粒砂に灰オリブ色(7.5Y 4/2)粘土をブロックに含む | N オリブ黒色(5Y 3/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む、酸化第1鉄を微量に含む |
| E 細～中粒砂に暗オリブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土をブロックで含む | O オリブ黒色(5Y 3/1)粘土、極細粒砂、酸化第1鉄を微量に含む、植物遺体を多量に含む |
| F 暗オリブ灰色(2.5GY 3/1)粘土、極細～細粒砂がラミナ状に入る | |
| G 暗緑灰色(5G 4/1)粘土質シルト、細～中粒砂を多量に含む | |
| H 暗緑灰色(5G 4/1)粘土、北に行く程、極細～中粒砂が多くなる | |
| I 細～中粒砂に灰オリブ色(7.5Y 4/2)シルト質粘土がブロックで入る | |
| J 細～中粒砂、粗粒砂を微量に含む | |

- | | |
|-------|---|
| 第1a層 | 極細～細粒砂、細礫を微量に含む |
| 第1b層 | 極細～細粒砂、細礫を微量に含む暗オリブ灰色(5GY 4/1)粘土をブロック状に含む |
| 第1c層 | 極細～中粒砂、一部暗緑灰色シルトのラミナが入る |
| 第1d層 | 上部は緑灰色(7.5GY 5/1)シルトとオリブ灰色(2.5GY 5/1)粘土質シルト、下部は中粒砂～中礫、細～粗粒砂及び極細～細粒砂が2～3cm厚で入る |
| 第2a層 | 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土、細～中粒砂を多量に含む、粗粒砂、細礫を微量に含む |
| 第2b層 | 極細粒砂を多量に含む、中～粗粒砂を微量に含む、下部で暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土をラミナ状に含む |
| 第2c層 | 極細粒砂を多量に含む、細粒砂を微量に含む |
| 第2d層 | 暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土質シルトと暗オリブ灰色(5GY 4/1)粘土質シルトが混入 |
| 第3a層 | 極細～細粒砂(砂礫を微量に含む) |
| 第3b層 | 極細～粗粒砂(砂礫を微量に含む) |
| 第3c'層 | 暗緑灰色(5G 4/1)粘土質シルト、極細～中粒砂を多量に含む、砂礫を微量に含む |
| 第4a層 | 緑灰色(5G 6/1)粘土、オリブ灰色(2.5GY 5/1)シルト、極細～中粒砂の互層 |
| 第4b層 | 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土、細～粗粒砂を多量に含む |
| 第4c層 | 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土、砂礫を微量に含む |
| 第4d層 | 砂層、下部は極細～細粒砂に灰オリブ色(7.5Y 4/2)シルト質粘土がブロックで入る |
| 第4e層 | オリブ灰色(2.5GY 5/1)シルト質粘土、細～中粒砂を多量に含む、砂礫を微量に含む |
| 第5a層 | 砂層、暗オリブ灰色(5GY 4/1)粘土質シルトが、ブロックで入る |
| 第5b層 | 暗オリブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土、細～粗粒砂を多量に含む |
| 第5c層 | オリブ灰色(2.5GY 5/1)シルト、下部は砂礫を微量に含む |
| 第6a層 | 砂層、暗オリブ灰色(2.5GY 4/1)粘土をブロックで少量含む |
| 第6b層 | 暗オリブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土、細粒砂を少量含む |
| 第6c層 | 暗オリブ灰色(5GY 4/1)粘土質シルトと細粒砂の互層、南に行く程、砂礫、細～中粒砂の砂層となる |
| 第7a層 | 砂層、植物遺体を微量に含む |
| 第7b層 | 暗オリブ灰色(2.5GY 4/1)粘土と、極細～細粒砂の混合、植物遺体を微量に含む |
| 第7c層 | 暗オリブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土、植物遺体を少量含む |
| 第7d層 | 暗オリブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土、極細粒砂を微量に含む |
| 第7e層 | 砂層 |
| 第8a層 | 暗オリブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土、極細粒砂、植物遺体を微量に含む |
| 第8b層 | 灰色(10Y 4/1)シルト質粘土、植物遺体をやや多く含む |
| 第9a層 | 砂層、オリブ黒色(10Y 3/1)粘土質シルトがブロックで入る、植物遺体を微量に含む |
| 第9層 | 砂層、暗オリブ灰色(2.5GY 4/1)粘土質シルトが30～40%含まれ、植物遺体を少量含む |
| 第10a層 | 砂層 |
| 第10b層 | 上部は、極細～細粒砂の薄い層が全体にあり、下部は、灰色(10Y 4/1)シルト質粘土に細～極細粒砂のラミナが入る植物遺体を少量含む |
| 第11a層 | 黒褐色(5YR 2/1)粘土質シルト、腐植土、第10b層と第11a層に足跡検出 |
| 第11b層 | 黒褐色(10YR 3/1)粘土質シルト、植物遺体を多量に含む |
| 第12層 | 黒色(7.5YR 2/1)粘土、植物遺体を多量に含む、上面はかなり乱れている |
| 第13層 | オリブ黒色(5Y 3/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む |



第10図 No.3 トレンチ足跡平面図



第11図 No.3 トレンチ足跡面1 平面図

足跡以外には、トレンチ北側に幅28cm、深さ約20cmの東西方向の溝、1.6m南に同規模の溝、土壇などがある。いずれも、性格は不明である。足跡の踏み込み面は、足跡内の埋土が砂層である点から、前述したように、第7b層、あるいは、第7c層の堆積中と考えられる。時期は出土遺物が微量であるため、明確ではないが、中世期に入る時期と言えよう。

足跡面 2

第10b～11a層上面で検出した。踏み込み面は第10a層堆積中か、第10b層の堆積中である。第10b層は河道の底にあたり、河道の堆積が緩やかな時と考えられる。足跡の時期は、10a層が奈良～平安時代の河道の堆積であることから、近い時期の所産であろう。

足跡面以外では、第12層上面が乱れていることが挙げられる。明確な遺構は確認していないが、人為的なものであり、足跡の可能性もと考えられる。鬼虎川遺跡の層位から弥生時代中期頃であろう。

第14層上面に認められた落ち込みは、出土遺物が全く無く、断定はできないが、鬼虎川遺跡の層位から推定して、縄文時代晩期～弥生時代前期の可能性はある。河内潟の汀線付近あるいは河内潟内にあたる地点での河口の状態を示しているのではなかろうか。第14層上面からの、このような落ち込みはNo.5 トレンチまで認められている。

5. No.4 トレンチの調査

1) 層位

第2層は旧玉櫛川の自然堤防上に堆積した整地層である。砂粒を多量に含んだ砂質シルトである。第3～6層は自然堤防の堆積である。トレンチ南西部で検出した河道の自然堤防の一部であろう。第9～10層は、シルト質粘土、粘土と砂の互層である。トレンチ南西端で盛り上がりがある。この盛り上がりは河道の方向、南西から北東に沿って認められ、北東にむかって低くなり、トレンチ端では周囲と同じ高さとなる。正確は不明。中世期の堆積と考えられる。

第11層は植物遺体を多量に含むシルト質粘土で、上面で足跡を検出した。この層は、第10層の下部が植物遺体を多量に含む層であり、上部が粘土・細粒砂・細礫の互層であることから、同一時期に堆積したと考えられる。従って、足跡の踏み込み面は、第10層の堆積中と考えられる。

第12～13層は、砂層、及びシルト質粘土・細粒砂の互層で、No.5 トレンチで確認した層位関係から12世紀以降の堆積層である。第9～11層にかけては、大きく見て、12世紀以降と考えられる。

第14～16層は、No.3 トレンチの第13層に相当し、弥生時代前期～中期と考えられ、このトレンチでは弥生時代後期から奈良・平安時代に相当する層は第10～13層の堆積によって削られている。

第17～18層はNo.3 トレンチでも認められた縄文晩期～弥生前期と考えられる落ち込みに相当する。このトレンチでは、ほぼ南東から北西方向にかけての溝状となって検出した。

2) 遺構

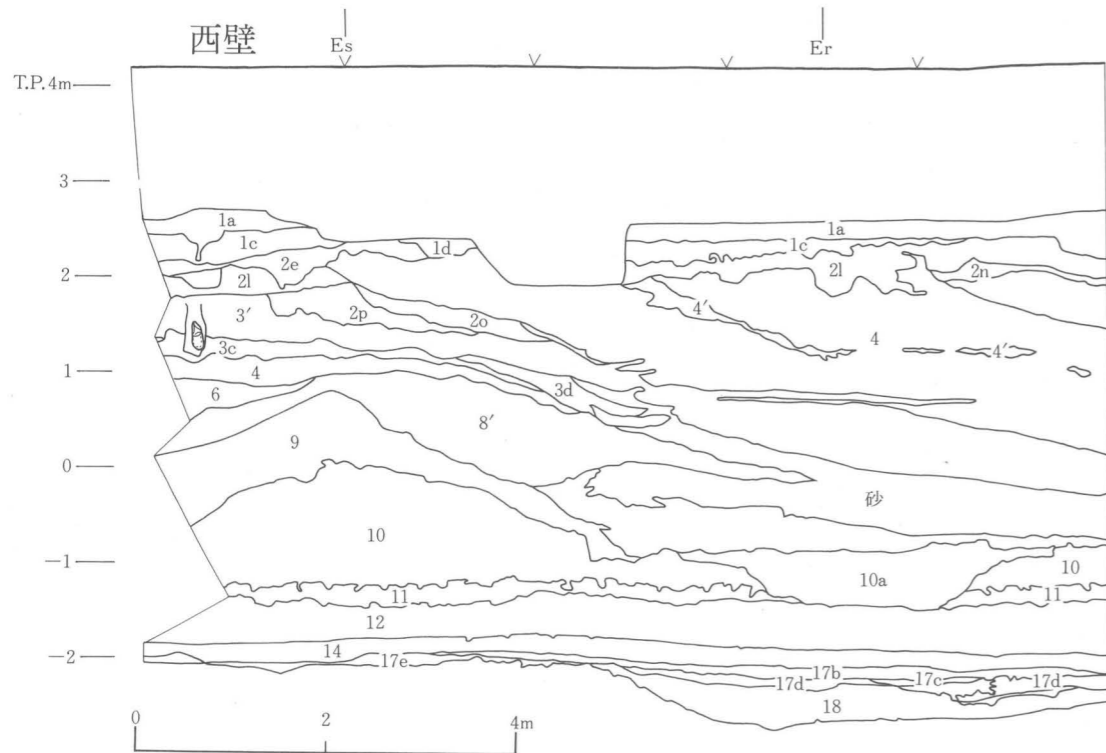
No.4 トレンチでは、遺構面を3面検出している。

遺構面1

遺構面1は第2b～2c～2h層上面で検出した。トレンチ東半では落ち込み1～4、西半では溝、土壇、柱穴がある。

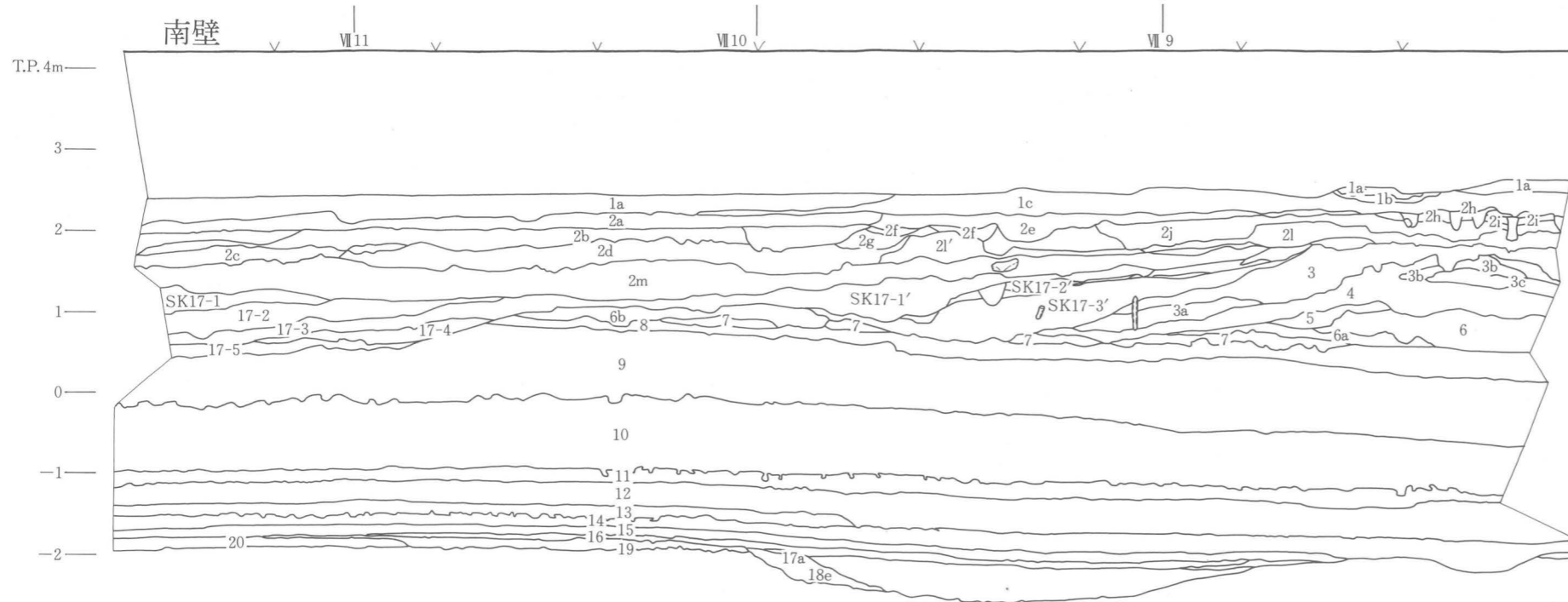
落ち込み1～4

落ち込み1は長辺144cm、短辺112cm、72cmを計り、長方形を呈する。落ち込み2は長辺168cm、短辺96cm、深さ64cmの長方形を呈する。落ち込み3は長辺132cm、短辺96cm、深さ60cmの長方形である。落ち込み4は長辺144cm、短辺104cm、深さ64cmを計り、長方形を呈する。長軸の方向は、落ち込み1～3が断面が長方形であるのに比べて、浅い椀状を呈する。また、落ち込み1・2が東南東～西北西、落ち込み4がそれに直交するのにならべて、落ち込み3のみが東西方向である。また、遺構面1'で検出したが、落ち込み5が落ち込み1～4と同様の形態を持ち、長辺144cm、短辺96cmを計り、長軸が落ち込み1と平行して隣接している。



- 第1a層 暗緑灰色(5G, 4/1)砂質シルト、細～粗粒砂を多量に含む、旧耕土
- 第1b層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)砂質シルト、細～粗粒砂を多量に含む、旧耕土
- 第1c層 灰色(10Y 6/1)粘土質シルト、細～粗粒砂を多量に含む、旧耕土
- 第2a層 オリーブ灰色(2.5GY 5/1)砂質シルト、中～極粗粒砂、細礫を含む
- 第2b層 暗黄褐色(2.5Y 5/2)砂質シルト、中～極粗粒砂、細礫を含む
- 第2c層 灰黄褐色(10YR 4/2)砂質シルト、中～極粗粒砂、細礫、黄色土を含む
- 第2e層 灰黄褐色(10YR 5/2)砂質シルト、細～粗粒砂を含む
- 第2f層 灰色(5Y 5/1)砂質シルト、細～粗粒砂を含む
- 第2g層 黄灰色(2.5Y 5/1)砂質シルト、細～粗粒砂を含む
- 第2h層 黄灰色(2.5Y 5/1)砂質シルト、にぶい黄橙色(10YR 6/4)粘土質シルトの互層
- 第2i層 にぶい黄橙色(10YR 6/4)粘土質シルト、暗黄褐色(2.5Y 5/2)細粒砂の互層
- 第2j層 褐灰色(7.5YR 4/1)砂質シルトに、にぶい黄褐色(10YR 5/4)粘土がブロックで入る
- 第2k層 褐灰色(10YR 4/1)砂質シルト、細～極粗粒砂を含む
- 第2l層 灰色(5Y 4/1)砂質シルトと灰オリーブ色(5Y 5/2)シルト質粘土の互層、極細～極粗粒砂を多量に含む
- 第2m層 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)粘土質シルト、細～極粗粒砂を含む
- 第2n層 オリーブ灰色(10Y 5/2)シルト、中～粗粒砂を少量含む、細～極細粒砂を多量に含む
- 第2o層 暗緑灰色(10GY 4/1)砂混じりシルト質粘土
- 第2p層 暗緑灰色(5G 4/1)シルト質粘土と細粒砂の互層、部分的に粗粒砂の層が乱れて入る
- 第3層 暗緑灰色(10GY 4/1)粘土質シルト、細～粗粒砂を多量に含む
- 第3'層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土とシルトの互層、植物遺体(小枝・根)が目立って見られる

- 第3a層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)中粒砂混じり粘土質シルト
- 第3b層 暗緑灰色(10GY 4/1)粘土と極細粒砂の互層
- 第3c層 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土と細～粗粒砂、細礫の互層
- 第3d層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土質シルトと細粒砂の互層
- 第4層 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土、細～粗粒砂、細礫が混入
- 第5層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土と極細粒砂の互層
- 第6層 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土と細粒砂の互層に中～粗粒砂、細礫が混入
- 第6a層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土、粗粒砂、砂礫を多量に含む、植物遺体を少量含む
- 第6b層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土、粗粒砂、細礫を多量に含む、植物遺体を少量含む
- 第7層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土に細～粗粒砂、細礫が混入した互層
- 第8層 暗緑灰色(5G 4/1)シルト質粘土、粗粒砂、植物遺体を少量含む
- 第9層 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土と細～粗粒砂、細礫の互層
- 第10層 暗緑灰色(10GY 4/1)粘土と細粒砂、細礫の互層、下部に行く程植物遺体を多量に含む
- 第11層 灰色(10Y 4/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む、細粒砂のブロック有り
- 第12層 砂層、細～粗粒砂、細礫
- 第13層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土と細粒砂の互層
- 第14層 オリーブ黒色(10Y 3/1)粘土、植物遺体を多量に含む(腐植土)
- 第16層 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土、植物遺体を少量含む
- 第17a層 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土、植物遺体、炭化物を多量に含む
- 第17b層 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土
- 第17c層 黒色(N1.5/0)粘土にオリーブ黒色(5Y 3/1)が混入
- 第17d層 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土、植物遺体を少量含む
- 第17e層 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土、植物遺体、炭化物を多量に含む
- 第18a層 黒褐色(2.5Y 3/1)粘土、植物遺体を多量に含む
- 第18層 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土、植物遺体を多量に含む
- 第19層 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土に、黒色(N1.5/0)粘土と灰色(5Y 4/1)粘土が混入
- 第20層 黒色(N2/0)粘土、植物遺体を少量含む、下部はベースの粘土が巻き上っている



第12図 No.4 トレンチ断面図

柱穴群

柱穴はトレンチ南西端から北東方向にかけて広がり、幅約4mの範囲で帯状に検出した。明確な建物は確認できなかった。

この柱穴の広がり、自然流路が南西から北東方向に向かって流れており、その自然堤防上に集落を営んでいたことから、その自然堤防の方向に建物の配置が行われたためと考えられる。また、遺構面1'の柱穴群は、遺構面1の柱穴群と明確な時期差が認められず、建て替えによる切り合い関係にあると考えられる。

溝 (SD1)

溝の方向は、柱穴群と同様に南西から北東方向にのび、幅0.4~0.96m、深さ0.1~0.2mを測る。

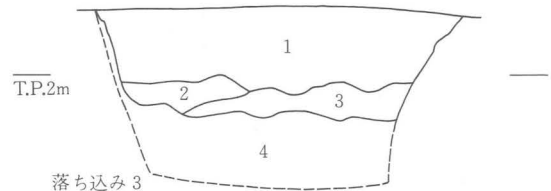
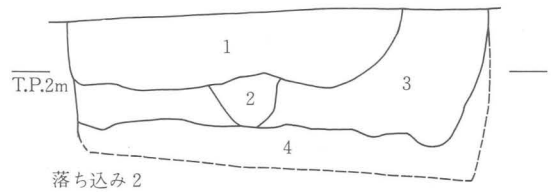
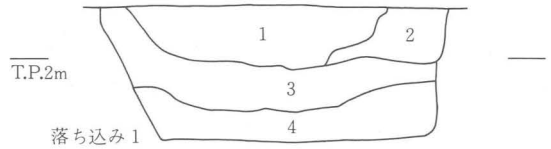
これらの遺構は出土遺物から、15世紀中頃と考えられる。

遺構面1'

遺構面1'は、トレンチ東部では第2b~2c層、西部では第2i層上面で検出した。遺構面1と殆ど同一面であり、西部における柱穴群のみ分層できる状態で検出した。しかしながら、柱穴群は前述のように、建て替えによるものが多く含まれると考えられる。

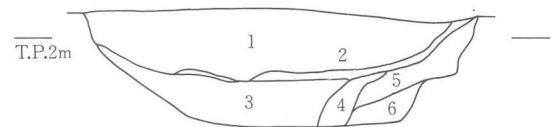
柱穴群

遺構面1で検出した柱穴群の範囲より東側に広がる。遺構面1と同様に南西から北東方向にかけて認められる。トレンチ南西端の柱穴は、遺構面1で建て替えが認められるが、明確な建物になるものは無い。



落ち込み1~3

- 第1層 青灰色(5BG 6/1)粘土質シルト、細~粗粒砂多量
- 第2層 緑灰色(10GY 5/1)粘土質シルト、細~粗粒砂多量
- 第3層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト、極細~粗粒砂多量
- 第4層 緑灰色(10GY 5/1)粘土質シルト、極細~中粒砂多量



落ち込み4

- 第1層 緑灰色(10GY 5/1)極細~中粒砂多量、粘土質シルトがブロック状に混じる
- 第2層 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土、極細粒砂少量
- 第3層 暗緑灰色(10GY 4/1)砂混じり粘土質シルト、極細~中粒砂少量、粗粒砂微量
- 第4層 暗緑灰色(10GY 4/1)砂混じり粘土質シルト、砂礫が多量に混じる
- 第5層 暗緑灰色(10GY 3/1)シルト質粘土、極細粒砂~小礫少量
- 第6層 灰色(10Y 4/1)シルト質粘土、極細~細粒砂多量



第13図 No.4 トレンチ落ち込み断面図

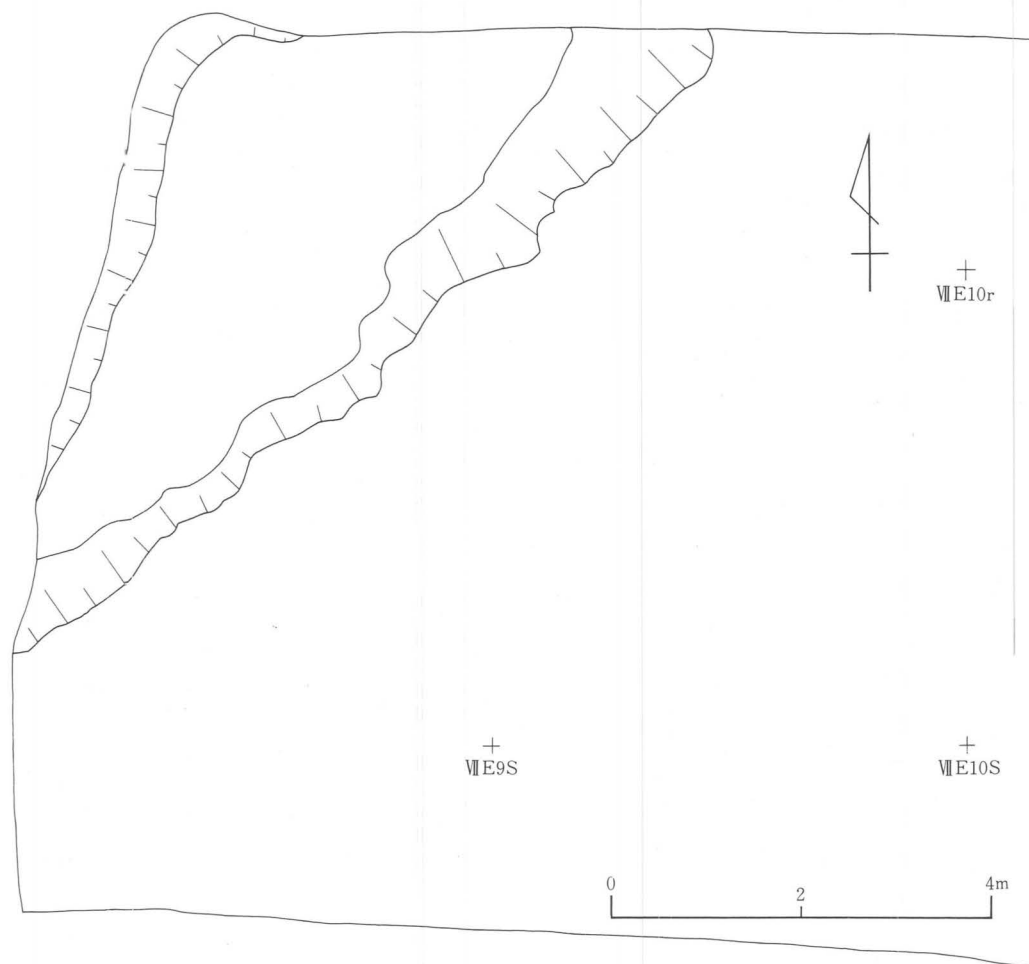
SK14

不整形な半円形を呈し、北東及び南東方向へ溝が延びる。現状での直径は約4.1m、深さ約14cmを測る、浅い土壇である。上部が削平されているため、溝が延びていたと考えられるが、性格は不明である。

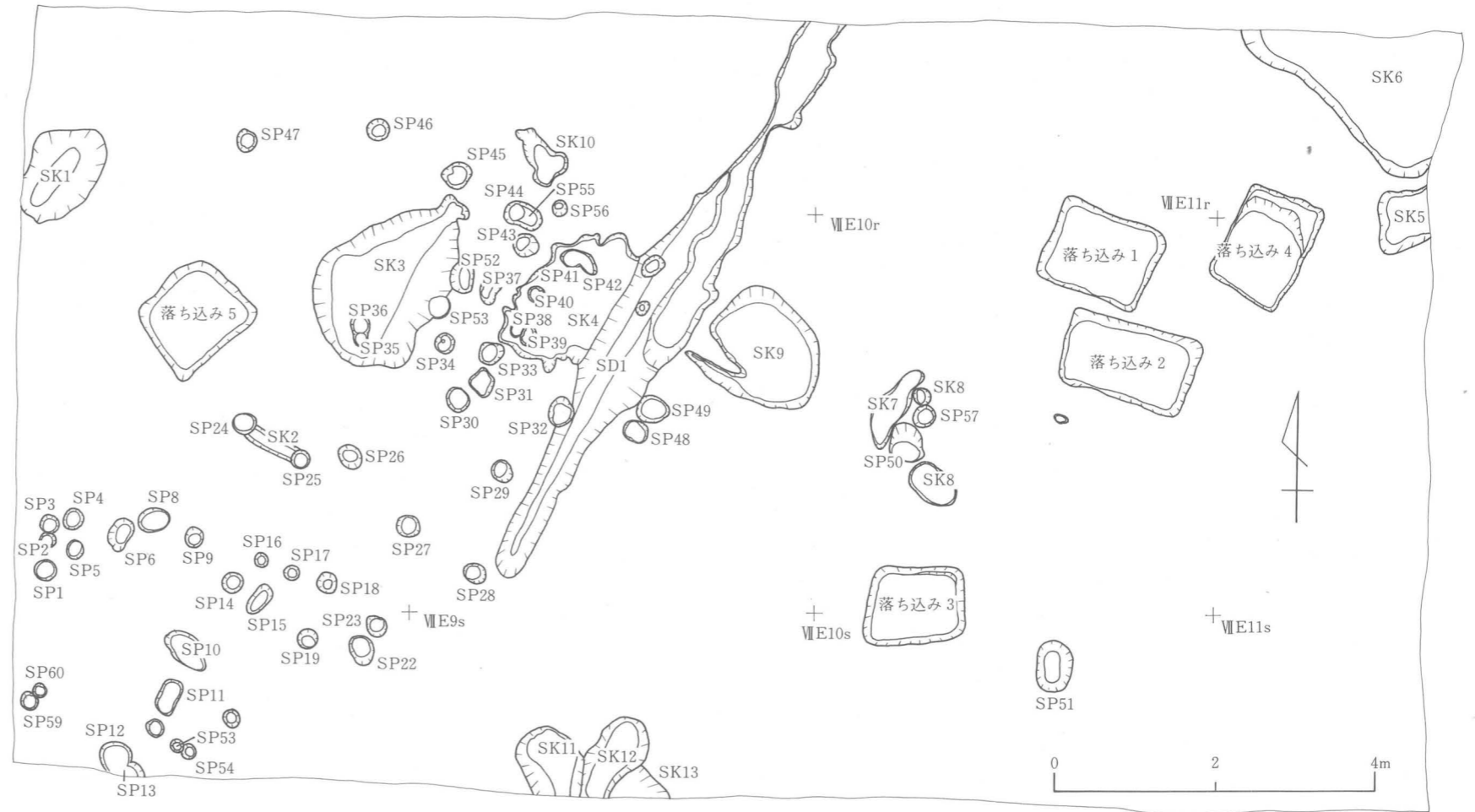
遺構面1'は、出土遺物から15世紀前半頃と考えられるが、柱穴、落ち込みなどのように検出面が重なっていることから、僅かな時期差が認められるものの、本来同一面として扱うべきと思われる。

自然流路

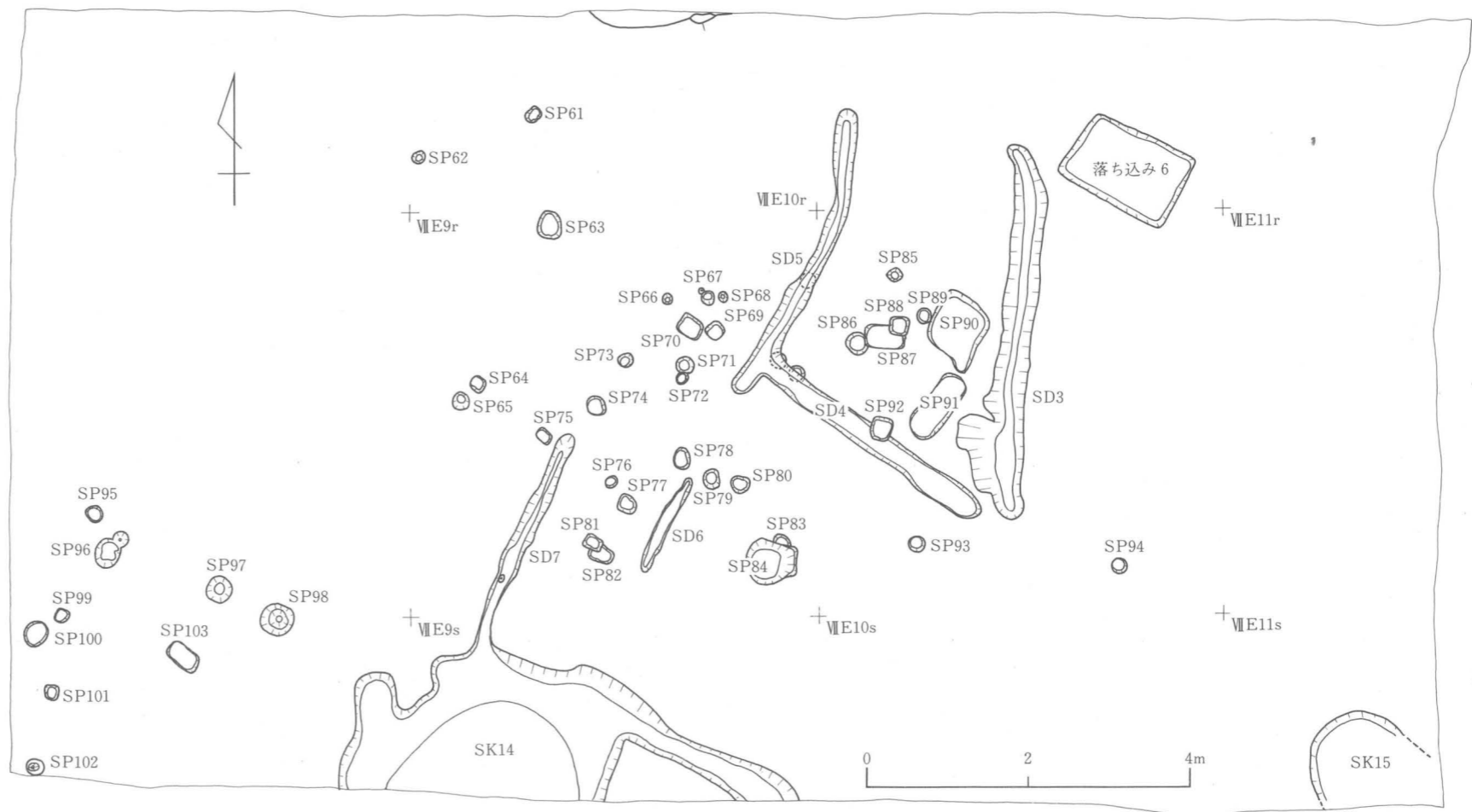
遺構面2で検出した。南東から北西方向に流れ、旧玉櫛川の一部である。河道上層の堆積物内で13世紀中～後半の遺物が出土している。下層は、12世紀以降に堆積した第9～10層の上部に砂層が覆っていることから、12～13世紀の間にこの位置に河道が形勢されたことが窺える。



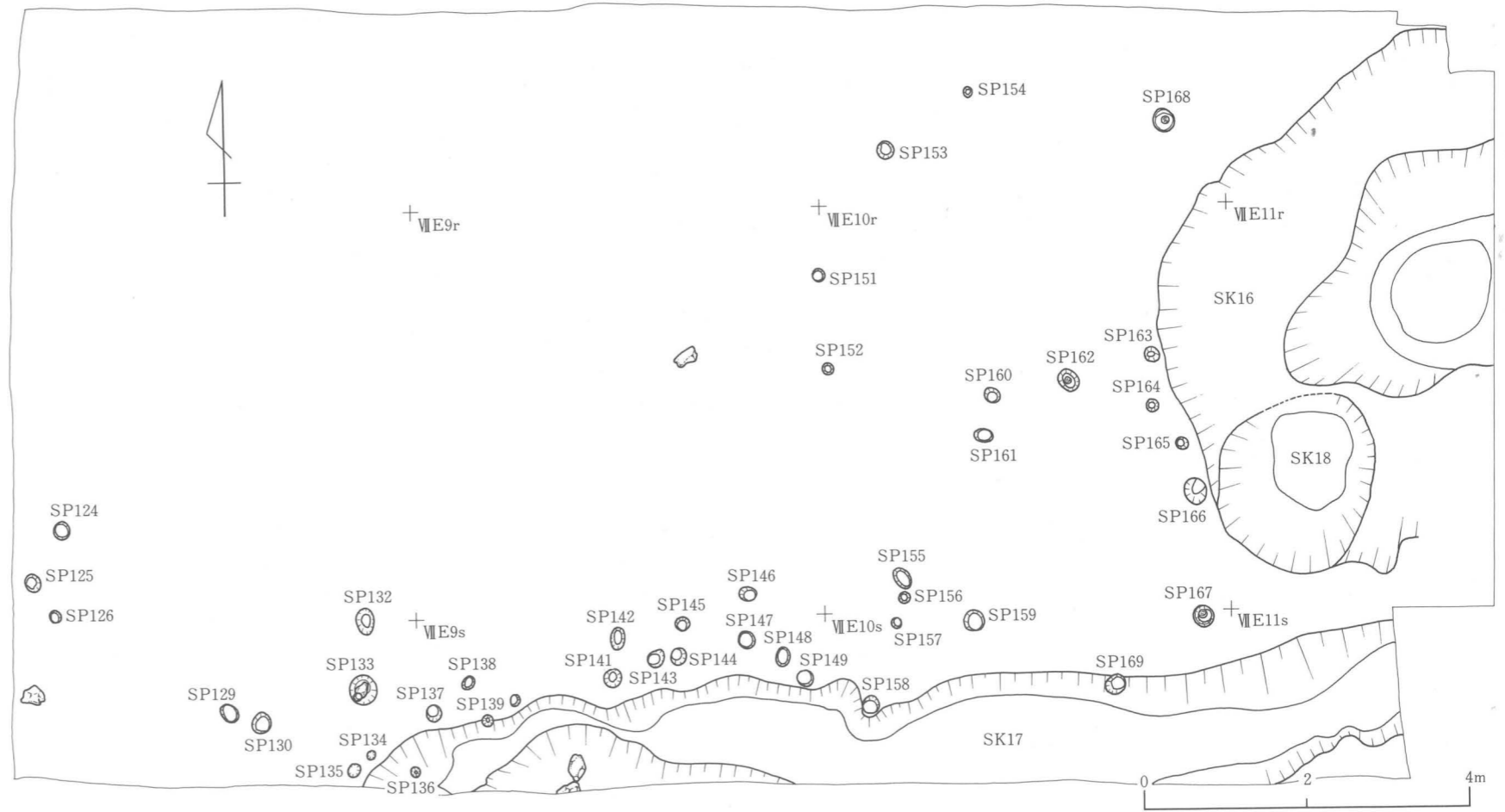
第14図 No.4 トレンチ自然流路平面図



第15図 No. 4 トレンチ遺構面1 平面図



第16図 No. 4 トレンチ遺構面1'平面図



第17図 No.4 トレンチ遺構面2 平面図

遺構面 2

第3層上面で検出した。土壇・土壇墓・柱穴がある。

柱穴群

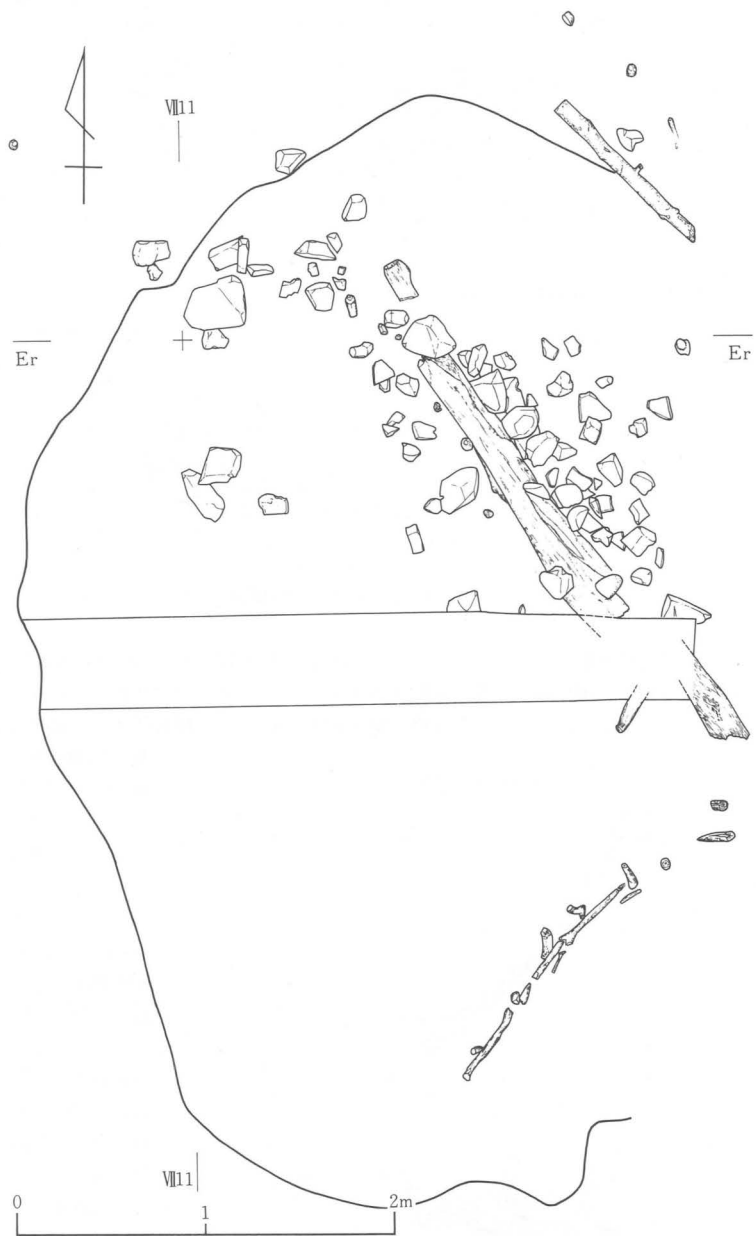
SK16・18の周囲、及びSK17の周囲に散在する。他はまばらに認められ、建物として確定できるものは無い。各土壇に伴う施設の柱穴になる可能性が考えられる。

SK17

トレンチ南端で検出した。長楕円形を呈する土壇である。現状で長辺12.8m、短辺1.84m、深さ約0.5mを測る。最深部に人頭大の石を2個置く。性格は不明。

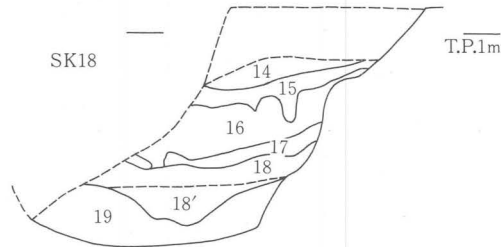
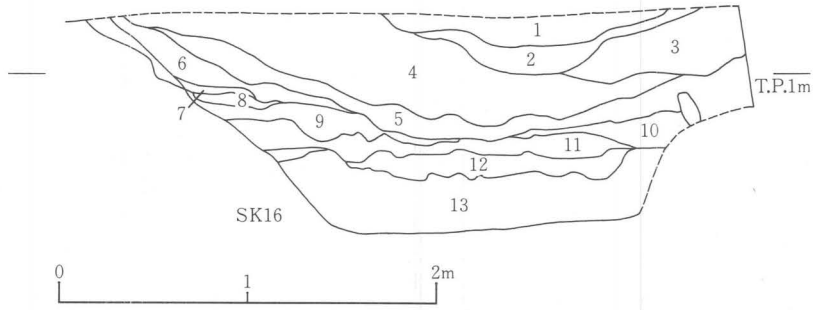
SK16・18

トレンチ東部で検出した。東部は長さ範囲外である。楕円形を呈し、周囲に4～5個の柱穴がある。上面で柱材を南東から北西方向



第18図 No.4 トレンチSK16・18平面図

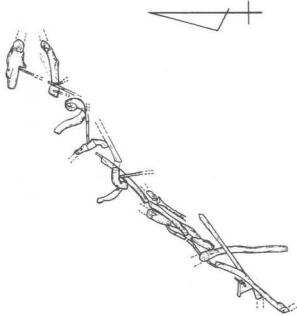
に置き、その周囲に人頭大の石を多量に置き(北側施設)、南側では、この柱材に直行するように細い杭が打たれ、杭間に同様の細い材を渡している(南側施設)状態が確認できた。これらの施設の下部構造は、北側施設の場合、まず杭材を外側へ向けて打ち込み、杭間に細い材を渡す。さらに、石材・柱材を杭の上部へ渡し外側に石材を詰める。南側施設では、細い杭材を約20cmの間隔に8本を垂直に打ち込み、上部をツル材で編むようにしてつないでいる。土壇内の堆積状況は、下部については、これらの施設が設置された状態で、人為的な遺物とともに水が



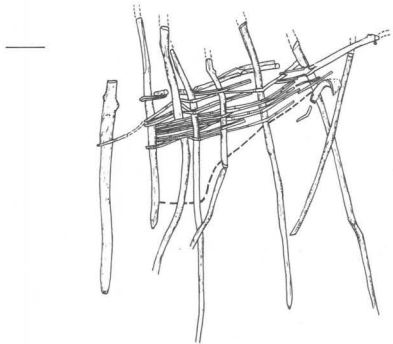
第19図 SK16・18断面図

- 1-灰色(10Y 4/1)粘土質シルト、細粒砂～粗粒砂多量。細礫少量。
- 2-灰色(7.5Y 4/1)粘土質シルト、上部に植物遺体のラミナあり。植物遺体多量。
- 3-暗オリーブ灰色(5GY 4/1)粘土質シルトと灰色(7.5Y 4/1)粘土質シルトのブロック。
- 4-オリーブ黒色(7.5Y 3/1)粘土質シルト、粗粒砂、細礫多量。
- 5-オリーブ黒色(7.5Y 3/1)シルト質粘土

土、植物遺体多量。 6-オリーブ黒色(7.5Y 3/1)粘土質シルト、植物遺体多量。 7-オリーブ黒色(7.5Y 3/1)粘土質シルト、細粒砂の互層、植物遺体多量。 8-暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土。 9-暗緑灰色(7.5GY 3/1)粘土質シルト、炭化物、植物遺体微量。 10-暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土、シルト、中粒砂の互層、植物遺体少量。



- 11-暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土、植物遺体多量。
- 12-暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)シルト質粘土、細～中粒砂多量、植物遺体多量。
- 13-暗オリーブ灰色(5GY 4/1)砂混じり粘土質シルト、中～粗粒砂、細礫の混合。
- 14-暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土、細礫～中礫微量。
- 15-暗緑灰色(7.5GY 3/1)シルト質粘土、粘土質シルトの互層。
- 16-暗緑灰色(7.5GY 3/1)シルト質粘土。
- 17-暗緑灰色(7.5GY 3/1)シルト質粘土。
- 18-暗緑灰色(7.5GY 3/1)シルト質粘土、植物遺体少量。
- 18'-18に中粒砂混じる。植物遺体多量。
- 19-暗緑灰色(7.5GY 3/1)砂混じりシルト質粘土、植物遺体少量。

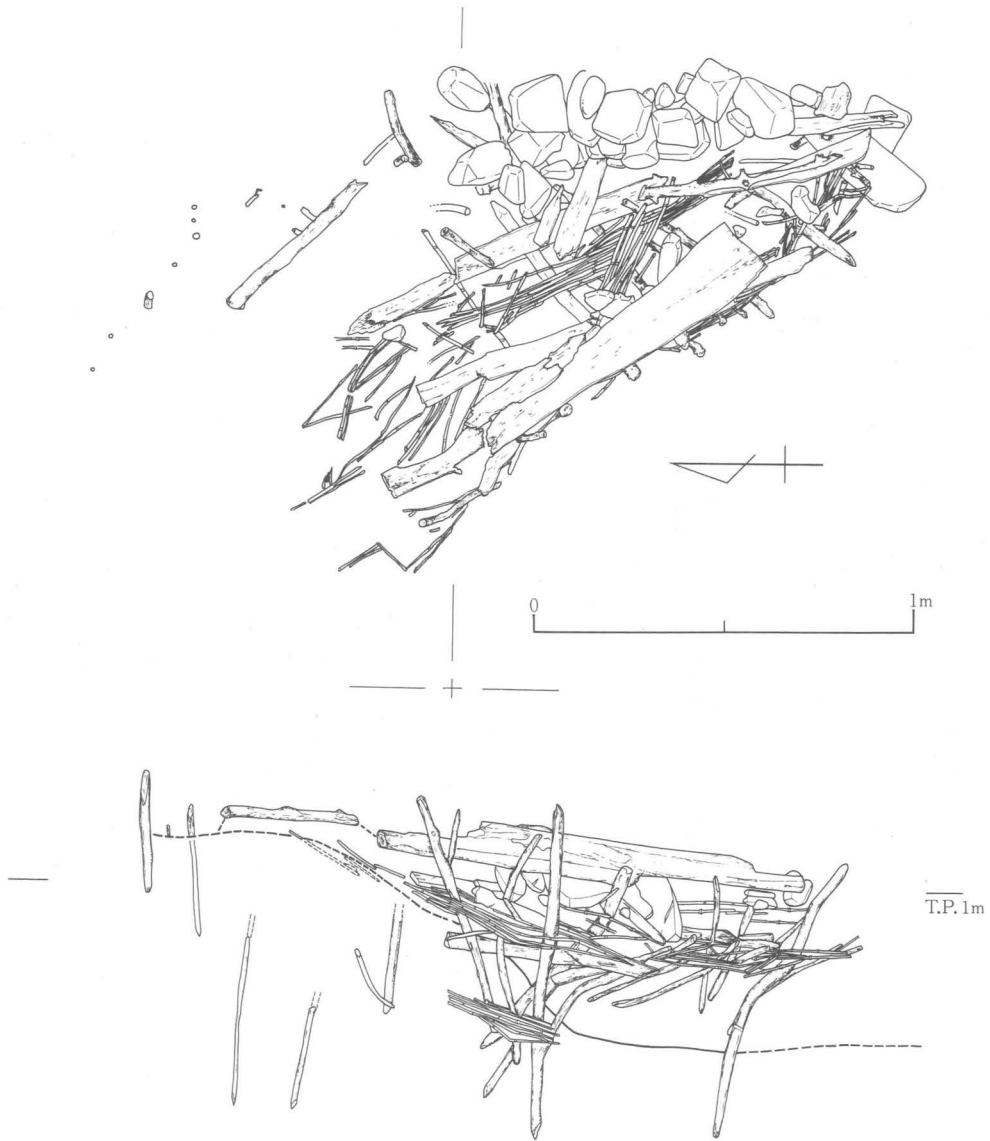


T.P. 1m



第20図 SK18杭列実測図

溜りながら、徐々に粘土～シルト質粘土が堆積している。上部は、砂粒を多く含んだ粘土質シルトが殆どで、植物遺体、炭化物が少量混じる第4層のように、人為的に埋められた層も認められる。第2層の堆積では、凹状になって埋まった経

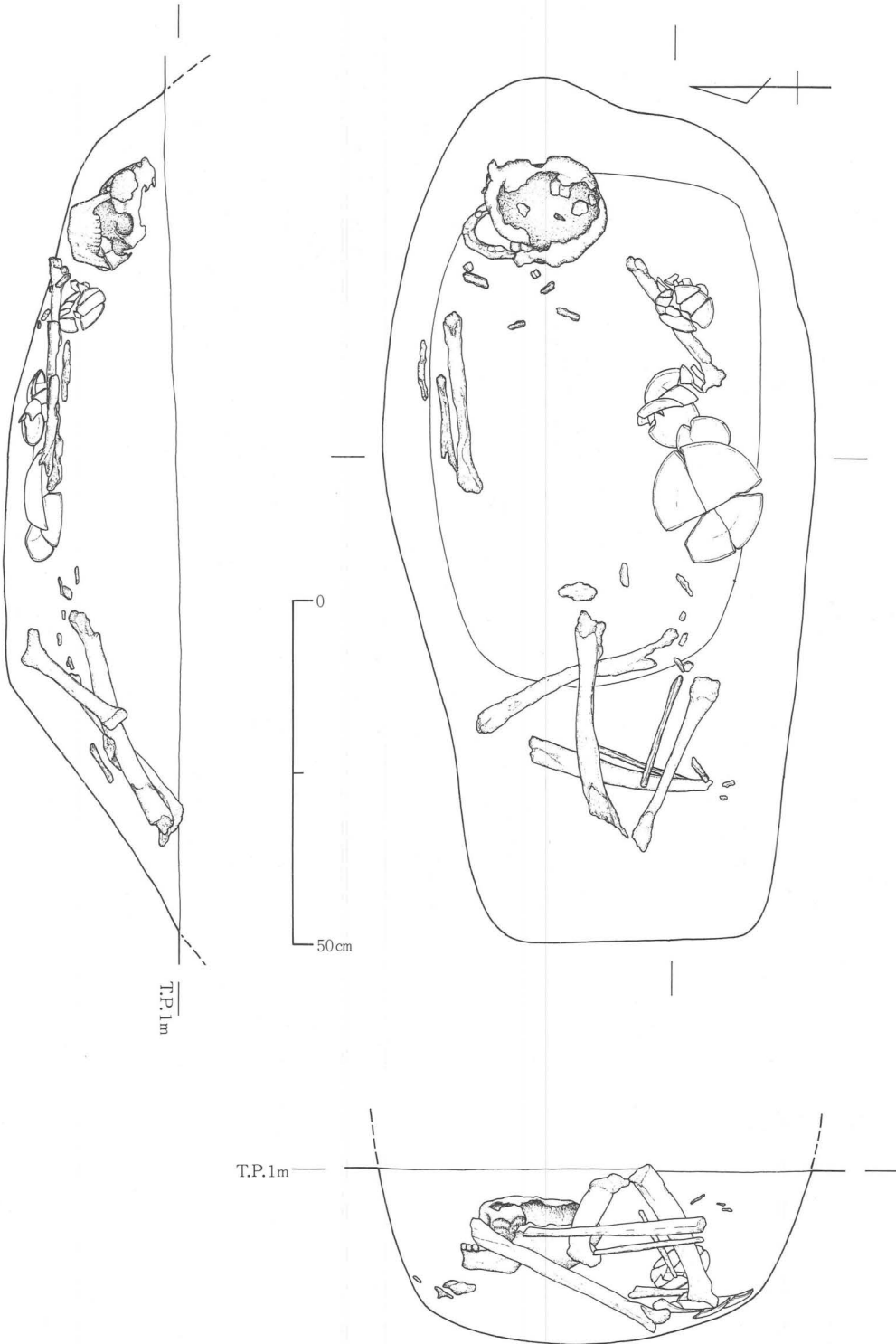


第21図 SK16・18北側施設実測図

過が観察できる。

SK16・18は調査当初、SK16のみの土塚として取り扱っていたが、出土遺物が大きく13世紀代と、15世紀代のものに分かれ、土塚内の堆積層が南側で異なることから、2つの土塚が切りあい関係にあることが判明した。第19図上段はSK16の東西断面、下段はSK18の南北断面である。SK16の平面プランはこのような状況の調査であったため明確ではないが、南北両施設を含んだ楕円形に近いものであったと推定できる。SK18については南西部で僅かに残存していたようである。

SK16は出土遺物から15世紀始め、SK18は13世紀末～14世紀始めの時期である。



第22図 No. 4 トレンチ土塚墓実測図

SK16については、今回の調査をもとに実施された本調査(水走遺跡第4次調査)で、同様の施設を有する土塚が1基検出されており、この土塚には、淡水産の貝類が土器とともに多量に出土しており、廃棄場としての様相を呈していた。また、2本の溝が付随し、内1本がSK16の東側にまでその溝が延びていたとされている。このことから推定すると、SK16はこれらの土塚、溝と一連の遺構となる可能性があるが、性格等の詳細については現在のところ不明であり、第4次調査の結果報告に譲りたい。

土塚墓

遺構面2で検出した。主軸を東方向に向けた不整楕円形を呈する墓塚内に、成人男性の人骨が遺存する。墓塚の規模は、長辺126.5cm、短辺63.5cm、最深部26.0cmを測る。人骨の遺存状態はあまり良くない。頭骨は顔面を右(北側)に向けた状態にあり、頭頂部は欠損している。他の部位は上腕骨、大腿骨などの下肢骨が遺存する。下肢は膝を曲げた屈葬である。頭骨はほぼ現位置を保っている。

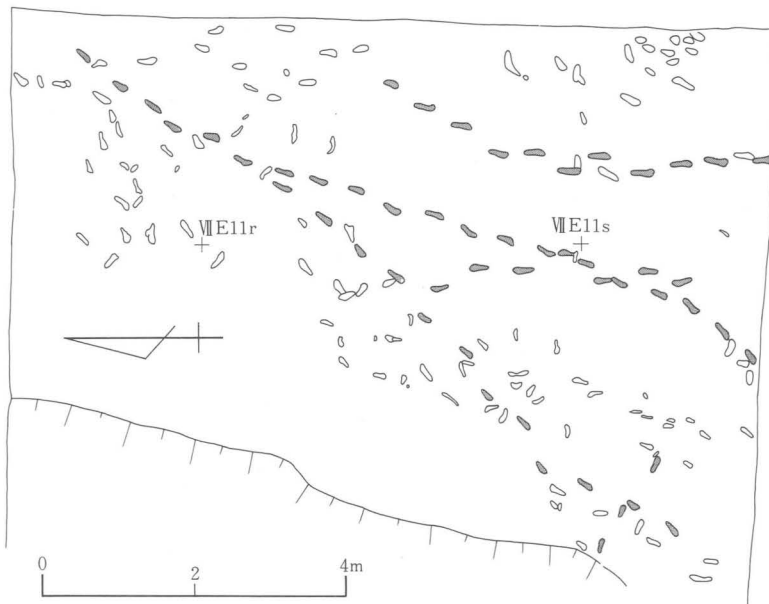
墓塚内には、左上腕骨の上に土師器小皿が1点あり、また、この小皿から東西方向に土師器小皿が合計5点、瓦器椀1点が並ぶように置かれている。供献用の土器であろう。遺体の南側上部に置かれ、落ち込んだものである。

鉄釘の出土は無く、墓塚内の堆積層の観察によっても、木棺の可能性は無い。

出土遺物から13世紀前半と考えられる。

足跡

第13層上面で検出した。第13層は第12層・砂層と連続した堆積層で、検出面は第13層である



第23図 No.4 トレンチ足跡平面図

が、第12層の堆積中に踏み込まれたと考えられる。第13層はトレンチ北西端では見られなくなり、一見落ち込み状に見えるが、人為的な遺構とはならない。

足跡は、前述の各トレンチであったような不規則なものではないが、水田畦畔に伴うような規則性は認められない。大きく見れば、北東から南西方向に進んでいる。

足跡の時期は、出土遺物が無いため、明確ではないが、12世紀以降と考えられる。

最下層落ち込み

第17・18層が堆積する落ち込みである。No.3トレンチで認められた第14層上面からのものと同一と考えられる。出土遺物は無く、時期は不明である。

6. No.5 トレンチの調査

1) 層位

第7層までは近世以降の堆積である。第8層は植物遺体を多量に含み、ヒシの実が出土している。第9層は植物遺体のラミナがあり、第8層と合わせ、湿地であったことを推定させる。

第8層、第9層ともに西側で薄くなり層界が乱れている。この両層は第4次調査でハス田として検出されている。ハス田として利用される際に、畦畔が築かれ、No.4 トレンチ付近までハス田が広がっている。

ハス田層の時期は後述するように16世紀末を余り廻らない時期と考えられる。

第13層上面で溝を検出した。平面的には明確でないが、東北東へ延びている。規模はNo.5 トレンチでは全容を把握できなかったが、推定5m以上になる。深さは1.44mを測る。

また、トレンチ東半で浅い溝状遺構を検出した。時期は前述の溝と同様であろう。第13層は大きく捉えると、シルト質粘土、粘土質シルト、砂層の互層で南東方向から流れてきた流路の堆積の一部である。この層の広がりにはNo.8 トレンチ付近までその痕跡を残しており、かなり大規模なながれであったことがうかがえる。

第13層の下面では、この流れに対するように堤防状の遺構が築かれている。堤防状遺構は第21a層の上に築かれ、その後も砂層が覆う状況が観察できる。

第21a・b層は古墳時代から奈良時代にかけての堆積層である。第22層は遺物は出土していないが弥生時代中期～後期に相当する。

第23層・第24層は縄文時代晩期～弥生時代前期に相当する。

第25層(ベース面)からの落ち込みがある。No.5 トレンチでの落ち込みは、No.4 トレンチまでで検出した落ち込みに比して、最大規模を有している。また、落ち込みが埋まったあと、さらにA層が溝状に堆積する。

上部ではこのA層の真上に自然流路ができています。自然流路の時期は遺物が出土していないため、断定はできないが弥生時代中期末頃と推定される。

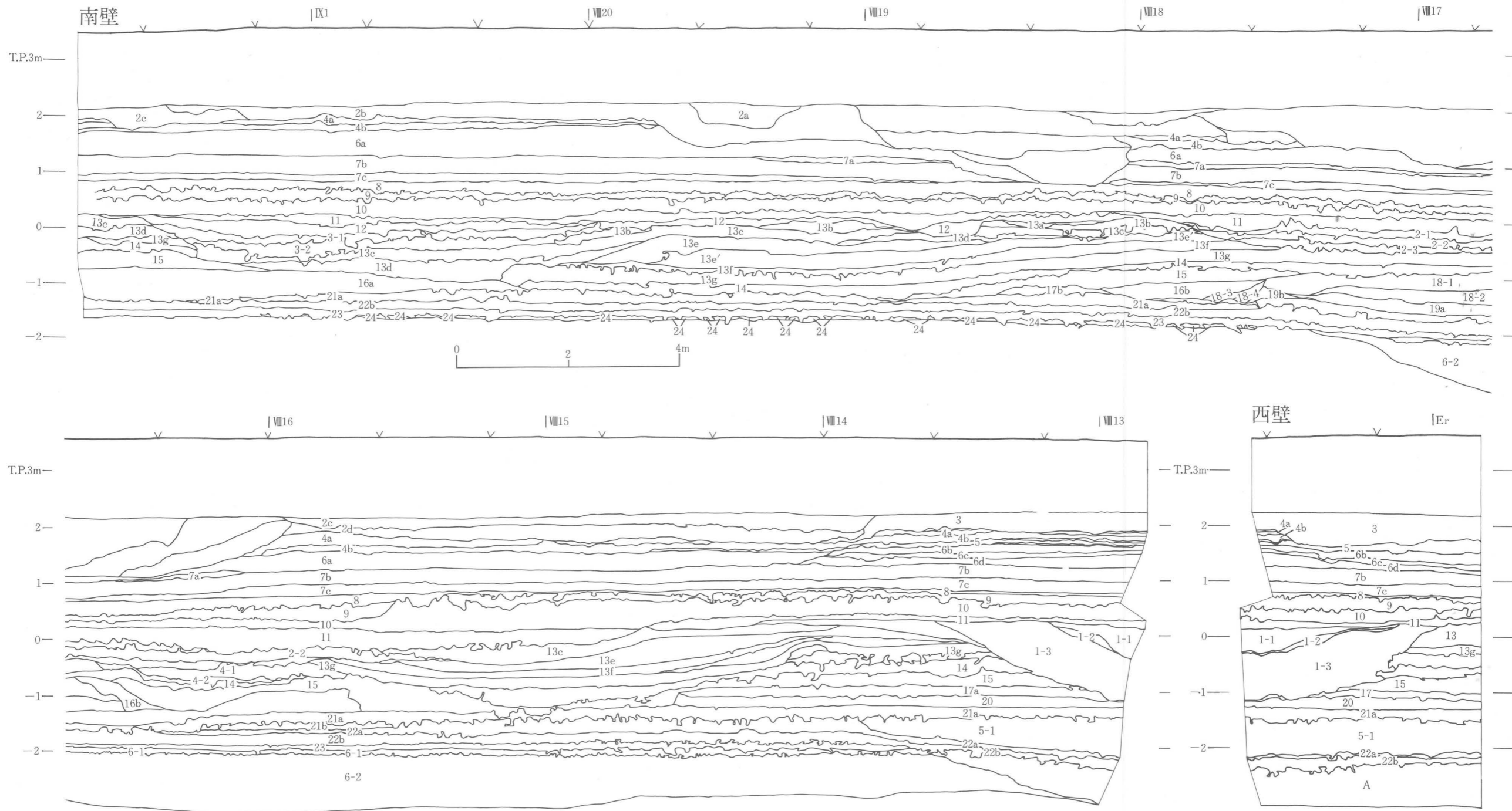
2) 遺構

堤防

南南西から北北東にかけて築かれている。幅5.2m、高さ約0.4mを測る。東面には上部に杭が打ち込まれ、さらに前面には葦の束が貼り付けられたように置かれている。

上部の砂層の堆積状況を観察すると、南東方向からの水流が堤防にあたっていたと考えられ、堤防が築かれた後も、緩やかではあるが水流が堤防に当たり、また、上を越えていたことが解る。堤防の構築方法は、堤防内下面に葦の束を置き、一部は細い杭材によって留められていたようである。その上に土砂を置く。この際、埋土と自然堆積の砂層の堆積が同時にあったことが断面観察より推定でき、この堤防が水流がある中で構築されたことがうかがえる。

- 第1層 旧耕土、黒色の砂混じりシルト
- 第2a層 浅黄色、細～中粒砂
- 第2b層 緑灰色、細～中粒砂
- 第3層 灰色(5Y 4/1)シルト質粘土混じり細～粗粒砂と、暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土混じり細～粗粒砂の互層、細礫を含む
- 第4b層 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土質シルト
- 第5層 オリーブ褐色(2.5Y 4/4)シルト～極細粒砂
- 第6a層 浅黄色細～粗粒砂、細礫を含む
- 第6b層 灰白色細～粗粒砂
- 第6c層 上部は極細粒砂、下部は緑灰色(10GY 5/1)シルト質粘土と極細粒砂の互層
- 第6d層 青灰色～灰白色、細～粗粒砂、植物遺体のラミナ有り
- 第7a層 細粒砂
- 第7b層 緑灰色(10GY 5/1)粘土、暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土と、シルト～細粒砂の互層
- 第7c層 緑灰色中粒砂と暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土質シルトの互層
- 第8層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む、ヒシ出土
- 第9層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土、植物遺体のラミナ有り
- 第10層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土、細～中粒砂を少量含み、植物遺体を多量に含む
- 第11層 暗緑灰色(10GY 3/1)シルト質粘土、細～粗粒砂を多量に含み、細礫を少量含む、東に行く程、粘土の量が増える
- 第12層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土、植物遺体を少量含む
- 第13a層 暗緑灰色(10GY 4/1)粘土質シルト
- 第13b層 細～粗粒砂、細礫を少量含む
- 第13c層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土と極細粒砂の互層
- 第13d層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土と暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土質シルトの互層、細～粗粒砂が混入
- 第13e層 細～粗粒砂、細礫を含む、暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土のラミナ有り
- 第13e'層 細～粗粒砂、細礫を微量に含む
- 第13f層 灰色(10Y 4/1)シルト質粘土と細粒砂の互層、植物遺体を少量に含む
- 第13g層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土と粘土質シルトの互層、植物遺体のラミナが多く、特に下部に見られる
- 第14層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)粘土質シルト、極細粒砂、酸化第1鉄を少量含む
- 第15層 細～粗粒砂、下部に暗緑灰色(10GY 4/1)シルトのラミナ有り
- 第16a層 粗粒砂～細礫、オリーブ黒色(10Y 3/1)シルト質粘土のブロック(こぶし大)有り
- 第16b層 粗粒砂～細礫、暗オリーブ灰色(5GY 3/1)シルト質粘土を少量含む
- 第17a層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)粘土、植物遺体を多量に含み、酸化第1鉄、シルトを少量含む
- 第17b層 灰色(10Y 4/1)粘土、植物遺体を多量に含み、シルトを少量含む
- 第19a層 粗粒砂～細礫
- 第19b層 暗オリーブ灰色(2.5GY 3/1)粘土質シルトと細粒砂の互層
- 第20層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土と極細粒砂の互層、下部に粗粒砂が混入
- 第21a層 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土、植物遺体を微量に含む
- 第21b層 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む

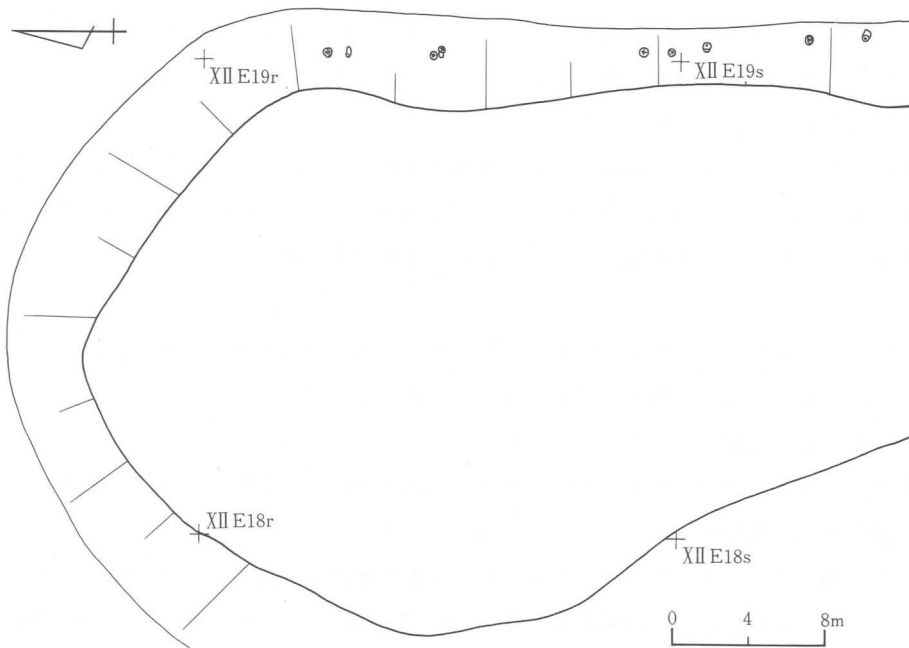


第24図 No.5 トレンチ断面図



第25图 堤防实测图

- 第22a層 黒褐色(2.5Y 3/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む
 第22a'層 オリーブ黒色(10Y 3/1)粘土、植物遺体を少量含み、極細粒を微量に含む
 第22b層 褐灰色(10YR 4/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含む
 第22b'層 オリーブ黒色(7.5Y 3/1)粘土、極細粒砂を微量に含み、植物遺体を多量に含む
 第23層 黒色(7.5YR 2/1)粘土、植物遺体を多量に含む
 第24層 黒色(2.5Y 2/1)粘土、第23層・第25層と混合
 A層 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土、極細粒砂を微量に含み、植物遺体を少量含む落ち込み部分
- 落ち込み部分
- 1-2 暗緑灰色(10GY 4/1)粘土(植物遺体を微量含む)と灰オリーブ色(7.5Y 4/2)シルト質粘土(植物遺体を多量に含む)の互層
 1-3 中～粗粒砂、細礫を含む、暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土のラミナ有り
 2-1 暗緑灰色(10G 3/1)シルト質粘土、細～粗粒砂が多量に混入、植物遺体を少量含み、炭化物を微量に含む
 2-2 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土、植物遺体を多量に含み、炭化物を微量に含む、不均一に細～中粒砂を含む
 2-3 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土に中～粗粒砂が多量に、不均一に混じる。暗緑灰(7.5GY 4/1)粘土が少量ブロックで混じる、炭化物、植物遺体が少量混じる、酸化第1鉄が極少量有り
 3-1 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)粘土、酸化第1鉄を少量含む
 3-2 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土、中～粗粒砂が不均一に多く混じる
 4-1 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土、極細～中粒砂が不均一に混じり、酸化第1鉄を少量含む
 4-2 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土、中～粗粒砂のラミナ有り
 5-1 オリーブ黒色(5Y 3/1)シルト質粘土、植物遺体が帯状に入る
 6-1 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土、植物遺体を微量に含む
 6-2 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土、植物遺体をやや多く含む
- 堤防部分
- 18-1 中～粗粒砂、暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土がこぶし大で多量に混じる
 18-2 中粒砂～細礫
 18-3 オリーブ黒色(7.5Y 3/1)シルト質粘土と細粒砂の互層、上面に葦の直立稈有り
 18-4 灰色(7.5Y 4/1)シルト質粘土、植物遺体を少量含む



第26図 堤防前面杭列平面図

堤防の土砂が置かれる途中では、補強のためであろうか、杭列の前後に竹を並べている。また、葦の束は大きく2層に堤防内に敷かれている。基礎とするための意図であろう。

東面は上面と同様に、竹を杭列の間に並べ、葦の束を貼り付ける。葦の束は東面では杭等による固定作業は行われていない。これは、水流を利用して自然に東面に固定したと考えられる。堤防の土砂が水流によって流されないための用途に使用されたのであろう。東面の葦の束は、2回程度の貼り付けが施されている。

堤防の築造時期は、出土遺物から11世紀末～12世紀始めと考えられる。また、堤防内からは人形が出土しており、水を治める呪術的な意味合いをもって埋められたのであろうか。

堤防前面杭列

堤防とは別の遺構として取り挙げたが、堤防に付随するものとするのが妥当である。幅約3.6m、長さ4.8m(現状)以上の範囲で、周囲より約15cm高くなる部分があり、その東側に杭列がある。堤防の東端から約50cmの幅は低くなり、この高まりに続く。堤防に沿って浅い溝状を呈しているような地形が造られている。

これは断定できないが、当初に堤防を築き始めた地点であり、なんらかの理由により、検出位置に移ったと考えられる。杭列はその当初の作業の結果であろう。

以上がNo.5トレンチの範囲内のみで観察できる堤防の状況であるが、No.5トレンチをコの字形に囲むように第4次調査が実施されており、その結果を簡単に紹介し、この堤防の用途を考えてみたい。

第4次調査は堤防部分の南北両側を検出している。その状況は、先ず北側では堤防はあるものの、杭列、葦の束等の施設は無く、堤防内の層位も大半が人為的な盛土である。

南側も同様で、その高さは周囲との比高が約40cmと、No.5トレンチ部分に比してかなり高くなっている。堤防の幅は大きな違いは無い。また、南端では堤防の西側に多量の盛土を行い、埋め立てとも言える状況が観察できる。

以上の点から、この堤防はNo.5トレンチの西側を集落、或は生産地域として利用するために堤防を築き、埋め立てを行ったと考えられる。その途中で河川の氾濫から堤防の一部が決壊し、補修工事として行われたのがNo.5トレンチの部分であったと考えられる。

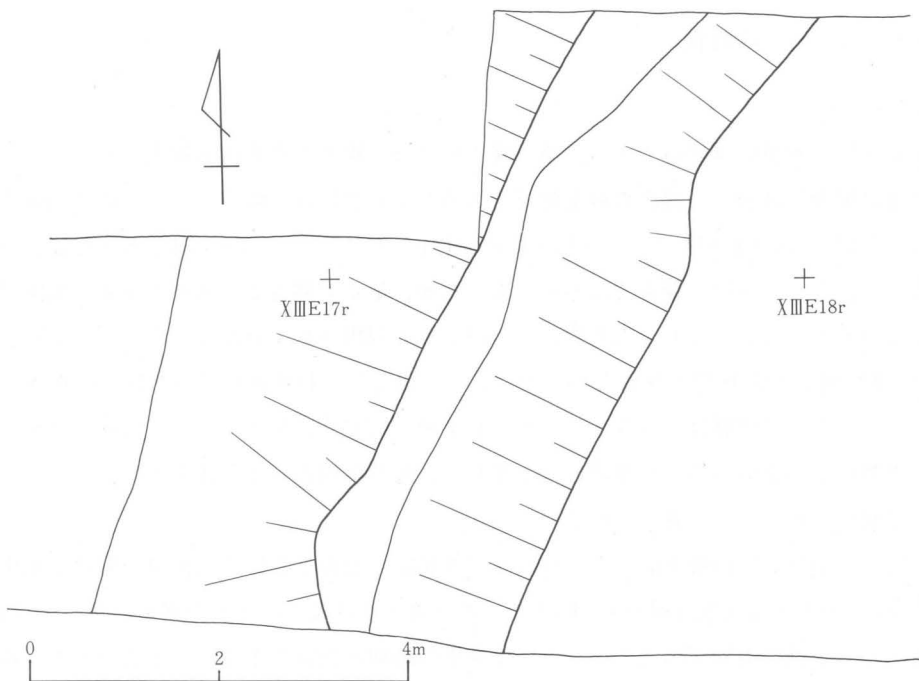
落ち込み

最下層からの落ち込みである。西側のトレンチで検出した落ち込みの中では、最大の規模である。No.5トレンチ内での幅は約22mに及ぶ。深さは1.3mである。

方向は南西から北東方向にかけて延びる。

西端では、落ち込み内が埋まった後、別の落ち込みが新たに出現する。さらに前述したように、河道が上部に出現する。

上部の河道によって削られた範囲を含めると、第4次調査の結果を含めて幅約71mに及んでいる。上部の河道は弥生時代中期末頃と考えられているが、殆ど地点であることが観察される。このような現象はNo.3トレンチ、No.8トレンチでも観察でき、最下層からの落ち込みが、縄文



第27図 落ち込み平面図

晩期から弥生時代始めにかけての河内潟のなかにできた、大規模な溝状の落ち込みであったことをうかがわせる。時期は遺物の出土例が無く、不明であるが、層位関係から縄文時代晩期から弥生時代前期の間に相当すると考えられる。

7. No.6 トレンチの調査

1) 層位

第8層までは近世の堆積層である。第9層上面では、樹木の根を11本検出した。

第10層は植物遺体層で、湿田の最上部層である。この湿田は、No.5 トレンチでは明確でなかったが、第11～12a・12b層でハスの実が多量に出土したことから、ハス田であったことが明らかとなった。また、今回の調査では不明であったが、第4次調査でハス田の畦畔と推定できるものが検出されたことから、人為的にハス田として利用されていたことをうかがわせる。

第11～12c層までの層界が乱れているのは、ハス田として利用されていた時に攪乱されたことによる。このハス田層は、No.5 トレンチから東側に広がり、No.8 トレンチ付近で見られなくなる。恩智川と旧玉櫛川の自然堤防にはさまれた、後背湿地という自然環境にあった形でハス田として利用されていたと考えられる。

ハス田の時期は、第11層上面より、鉄製品、木製品、土器など16世紀末頃の遺物が出土し、それらから近世初頭まで引き続き利用されていたと考えられる。ハス田の開始時期については、第12層内から中世の遺物が出土し、この層が中世の時期と推定できるが、上部からの踏み込みが中世の堆積層まで達していたために、ハス田層の一部になったと考えられ、中世にハス田の開始を求めることはできない。また、第12層の出土遺物と、第11層上面の土器の時期差を見ると、連続したものではないことが明らかであり、このことからハス田の開始は16世紀末を余り遡らない時期というのが現状である。

なお、ハス田層出土のハスの実は、その後、大阪市立自然史博物館の那須孝悌氏により、発芽したとの報告を頂いている。

第13層はシルト質粘土、極細～細粒砂、細～中礫の互層で、下部(第13'層)のシルト質粘土には植物遺体が多くなる。No.5 トレンチの堤防上に堆積した砂層に相当する層であろう。

第14層上面では足跡を検出した。No.5 トレンチの堤防築造時の面に対応すると考えられる。

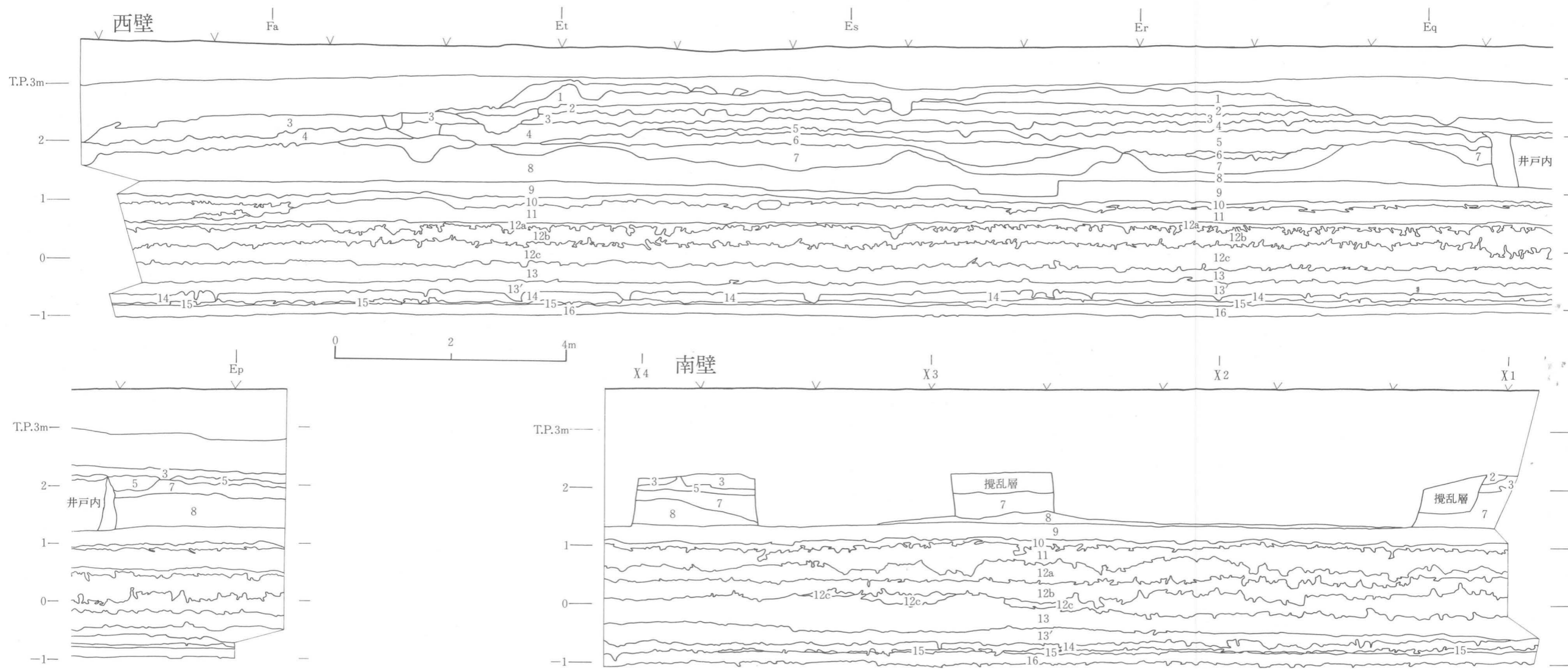
第14層以下は出土遺物が全く無く、堆積時期は周辺のトレンチの層位関係から観察する以外に求めることができない。そのことを前提に以下の層位を見ると、第12層は古墳時代～奈良時代の堆積層である。第15層は弥生時代後期、第16層は弥生時代前期～中期頃と推定できる。

第17層は暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)粘土で、ベースとなっている層である。この層中より縄文時代後期の土器が1個体分出土している。特に遺構に伴うような出土状況にはない。

2) 遺構

落ち込み(第11層上面・第30図)

トレンチ南側で検出した。北東～南西方向より南東側に落ち込み、深さ約50～60cmを測る。ハス田層の上部より落ちており、下面はハス田層内の踏み込みで乱れている。出土遺物は殆ど無く、人為的な遺構になるかどうかは断定できない。

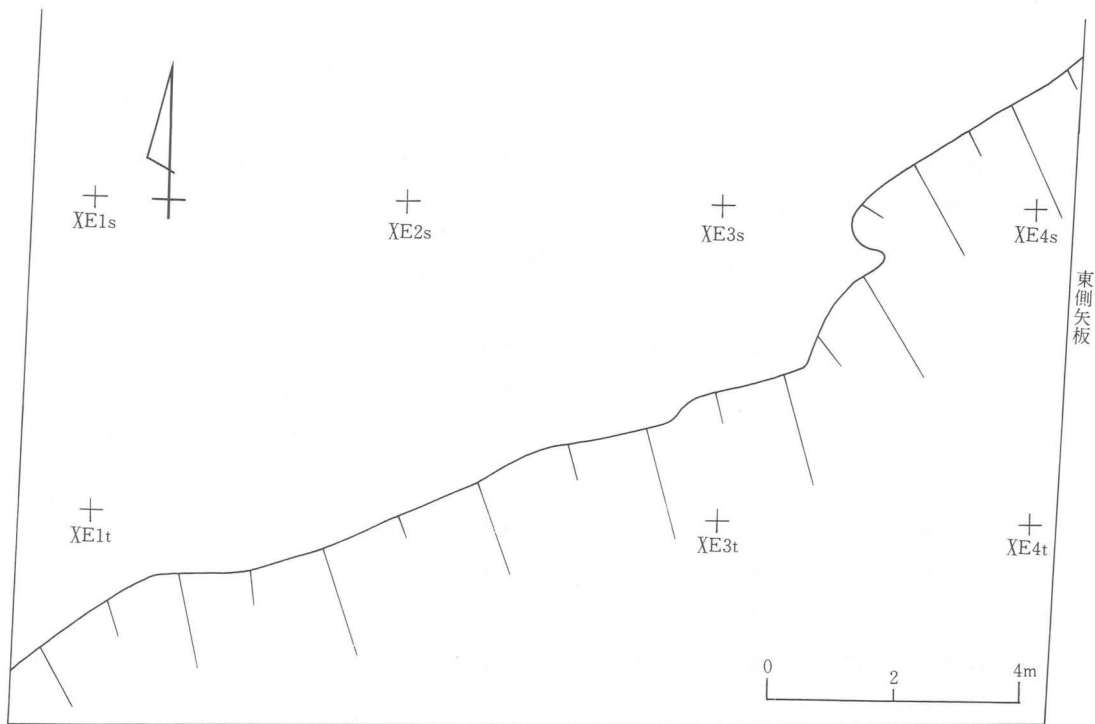


第28図 No.6 トレンチ断面図

- | | |
|--|--|
| <p>第1層 旧耕土、オリブ黒色(5Y 3/1)砂混じり粘土質シルト</p> <p>第2層 褐灰色(10YR 4/1)砂混じり粘土質シルト</p> <p>第3層 暗緑灰色(5G 4/1)砂混じりシルト質粘土</p> <p>第4層 暗緑灰色(10GY 4/1)砂混じりシルト質粘土</p> <p>第5層 暗緑灰色(10GY 4/1)砂混じりシルト質粘土</p> <p>第6層 暗緑灰色(10GY 4/1)砂混じりシルト質粘土、暗緑灰色シルト質粘土と灰黄色中粒砂がブロックで混じる</p> <p>第7層 緑灰色(10GY 5/1)粘土、砂混じり粘土と灰白色細～中粒砂が混じる、下部は暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土質シルトと細粒砂の互層</p> <p>第8層 粗粒砂</p> <p>第9層 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土と灰黄色中粒砂の混合</p> <p>第10層 上部は1～2cmの植物遺体層、中部は2～3cmの植物遺体層と、緑灰色(7.5GY 5/1)粘土の互層、下部は灰色(7.5Y 5/1)粘土、緑灰色(7.5GYGY 5/1)粘土のラミナ有り</p> | <p>第11層 2～3cmの植物遺体層と、緑灰色(7.5GY 5/1)粘土の互層、植物遺体多量、少量のシルトが混じる</p> <p>第12a層 オリブ黒色(5Y 3/1)粘土、植物遺体多量に含む</p> <p>第12b層 オリブ黒色(10Y 3/1)粘土、植物遺体多量に含む</p> <p>第12c層 暗オリブ灰色(2.5GY 4/1)粘土、植物遺体多量に含む</p> <p>第13層 灰色(10Y 4/1)シルト質粘土、極細～細粒砂、細～中礫含む、下部は植物遺体多量に含む</p> <p>第14層 オリブ黒色(7.5Y 3/1)シルト質粘土、植物遺体含む</p> <p>第15層 黒色(7.5YR 2/1)粘土、植物遺体多量に含む</p> <p>第16層 黒色(10YR 1.7/1)粘土、植物遺体少量含む</p> |
|--|--|



第29図 No.6 トレンチ足跡平面図



第30図 落ち込み平面図(第11層上面)

足跡

第14層上面で検出した。第13・13'層がシルト質粘土、極細～細粒砂、細～中礫の互層であり、足跡内にこれらの堆積物があることから、第13・13'層の堆積中から踏み込まれたと考えられる。水田の畦畔等の遺構は検出できない。

足跡はトレンチ北西部は少なく、中央から南東部にかけて密集する。規則性は余り観察できないが、一部に南西から北東に向かって歩いた跡が認められる。また、直行する方向の足跡が僅かに残る。全体的には南西～北東方向の幅広い帯状に分布することがうかがえる。

足跡の時期は、出土遺物が無いため断定はできないが、No.5 トレンチ及びNo.7 トレンチの層位関係から、No.5 トレンチの堤防が築かれた時期に近いと考えられる。12世紀代であろう。

8. No.7 トレンチの調査

1) 層位

第1層から第4層は近世以降の堆積層である。第5層は植物遺体層、第6層から第9層までは、植物遺体を多量に含み、葦の直立稈が多く、湿地であったことがわかる。この層はNo.6 トレンチではハス田層に相当するものであるが、No.7 トレンチではハスの実の出土は確認できていない。

No.6 トレンチとNo.7 トレンチの間を調査した第3次調査では、No.6 トレンチ第11～12層が途中で消滅し、代ってNo.7 トレンチ6～9層が確認されている。詳細は第3次調査報告に待つとして、ハス田としての湿地の利用が、No.7 トレンチ付近まで及んでいなかったことが推定できる。

第5層は湿地全体に広がり、No.8 トレンチでも検出した。16世紀末頃の堆積である。

第10層は出土遺物より13世紀代の堆積層である。第10～12層が乱れているのは、上層からの踏み込みによると考えられる。

第13層はシルト質粘土と細粒砂の互層で、層の途中より足跡の踏み込みが見られるが、検出面としては第14層上面である。

第14層～第16層は古墳時代から奈良時代である。

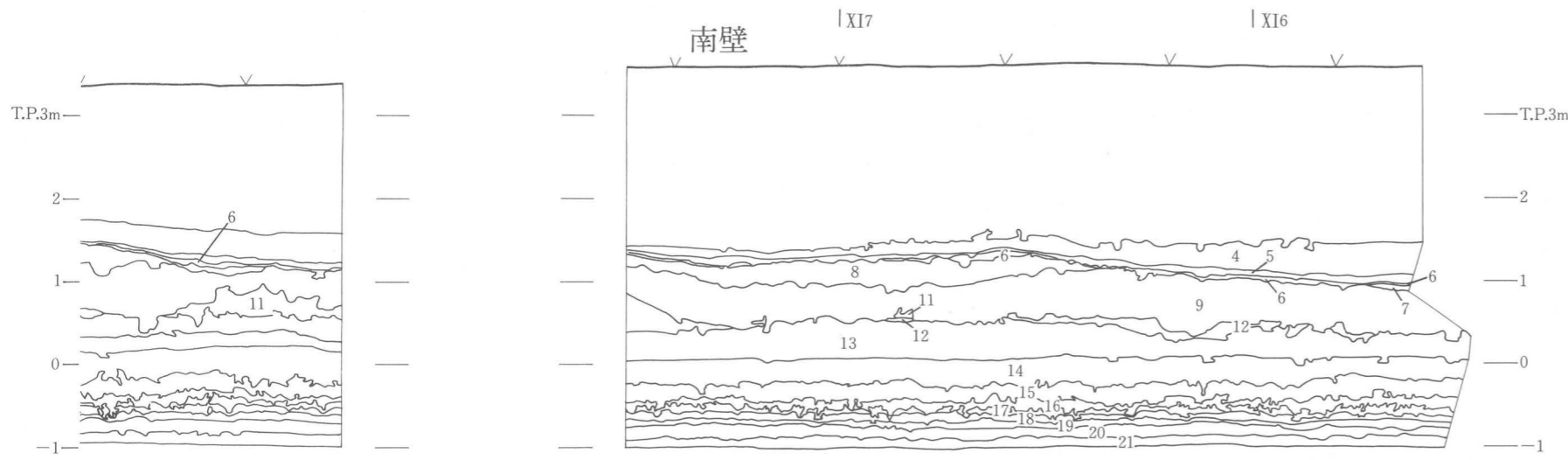
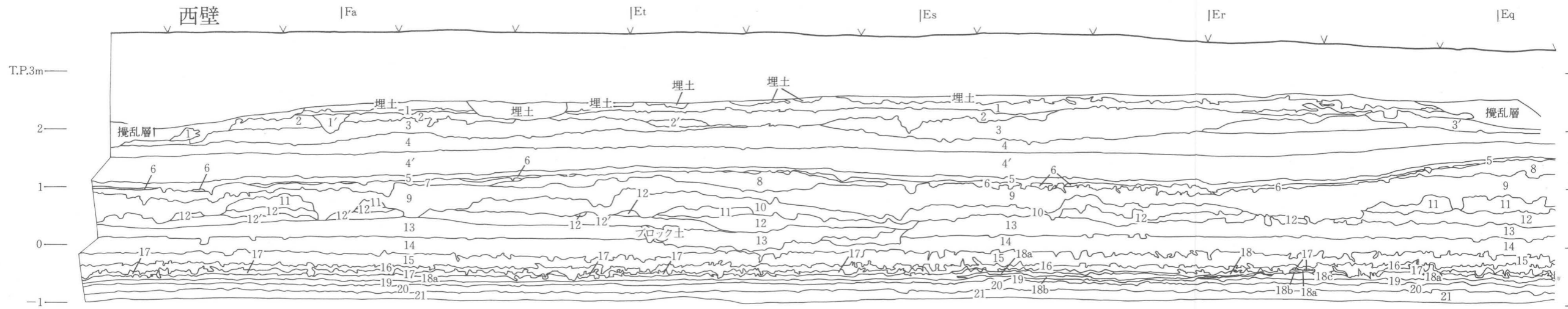
第17層～第21層は薄く、鬼虎川遺跡の基本層位に近くなっているが、出土遺物が少ない為、細かい時期は確定できない。弥生時代を通じての堆積層である。

2) 遺構

足跡

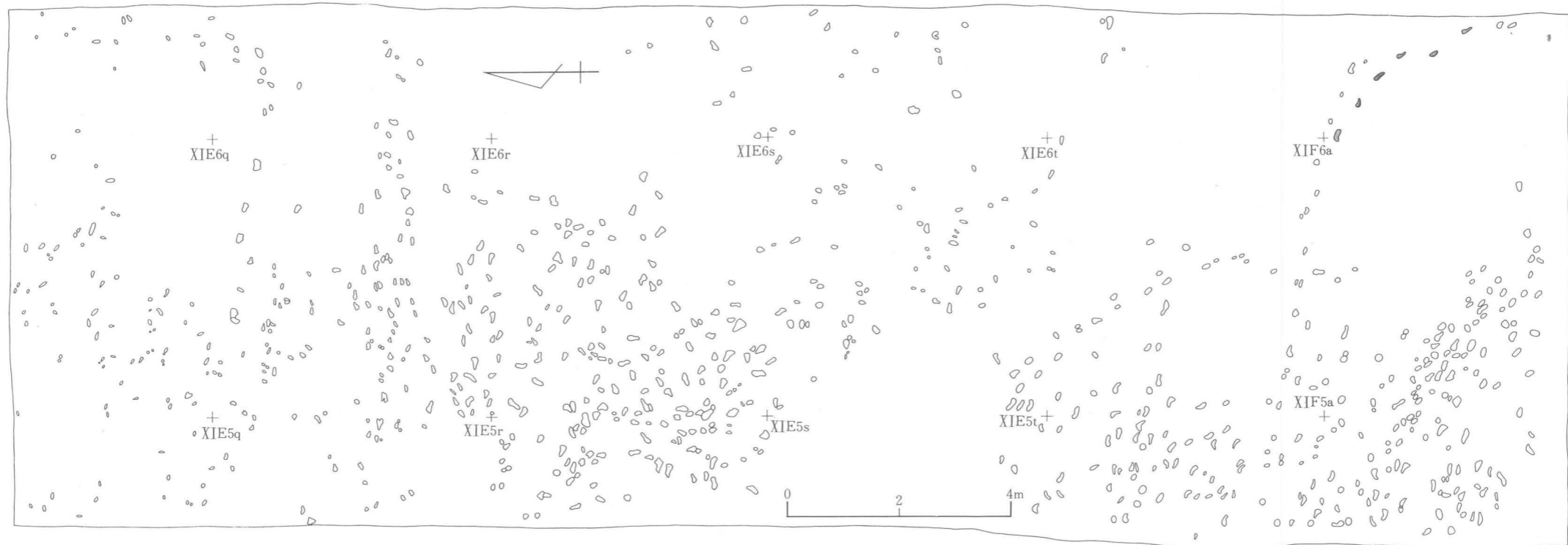
第14層上面で検出したが、踏み込み面は第13層の堆積中である。水田の畦畔等の遺構は検出できなかった。足跡は部分的に集中する箇所があるものの、規則性は無い。

足跡の時期は、No.5 トレンチから連続する層位関係から、12世紀以降と考えられる。



第31図 No.7 トレンチ断面図

- | | | |
|--|---|--|
| <p>第1層 旧耕土、暗緑灰色(7.5GY 3/1)シルト質粘土、炭化物、植物遺体少量含む</p> <p>第2層 暗緑灰色(10GY 4/1)砂混じりシルト質粘土、中礫含む。炭化物微量含む</p> <p>第3層 オリーブ灰色(5GY 5/1)シルト質粘土と粘土が不均一に混じる、中礫、炭化物微量含む</p> <p>第4層 上部、暗緑灰色(5G 4/1)シルト質粘土と、極細～細粒砂の互層
下部、暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土と、極細粒砂の互層、最下部に植物遺体のラミナ有り</p> <p>第4'層 緑灰色(7.5GY 5/1)シルト質粘土と極細粒砂の互層、下部植物遺体含む、植物遺体ラミナ有り</p> <p>第5層 オリーブ灰色(2.5GY 5/1)植物遺体混じり粘土、上部1~3cmは植物遺体濃密</p> <p>第6層 緑灰色(5G 6/1)粘土、部分的に植物遺体、炭化物混じる、葎の直立稈有り</p> <p>第7層 緑灰色(10GY 6/1)粘土、中間に3~5cmの細粒砂が混じる植物遺体層有り</p> | <p>第8層 オリーブ灰色(5GY 5/1)砂混じり粘土、植物遺体多量、葎の直立稈有り</p> <p>第9層 暗オリーブ灰色(2.5GY 4/1)砂質粘土、植物遺体、炭化物多量、部分的に細粒砂のラミナ有り</p> <p>第10層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)細粒砂混じり粘土、植物遺体部分的に含む、炭化物やや多い</p> <p>第11層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)シルト質粘土、極細粒砂微量、植物遺体やや多し</p> <p>第12層 緑灰色(10GY 5/1)シルト質粘土、極細粒砂微量</p> <p>第12'層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土</p> <p>第13層 暗緑灰色(10GY 4/1)シルト質粘土(植物遺体ラミナあり)と緑灰色(10GY 5/1)細粒砂の互層</p> <p>第14層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土質シルト、上面で足跡検出、下部は第15層が部分的にブロック状に混じる</p> | <p>第15層 オリーブ黒色(5Y 3/1)シルト質粘土、植物遺体含む</p> <p>第16層 黒褐色(2.5Y 3/1)シルト質粘土、緑灰色(7.5GY 5/1)シルト質粘土がブロック状に混じる、植物遺体少量混じる</p> <p>第17層 黒褐色(5YR 2/1)粘土(腐食土)</p> <p>第18a層 オリーブ黒色(7.5Y 3/1)粘土と、オリーブ黒色(7.5Y 3/2)粘土の互層、植物遺体多量</p> <p>第18b層 黒色(10YR 2/1)粘土、植物遺体少量</p> <p>第18c層 灰オリーブ色(7.5Y 4/2)粘土と、灰色(10Y 4/1)粘土の互層、植物遺体少量</p> <p>第19層 黒色(7.5YR 2/1)粘土、植物遺体少量、下部に青灰色粘土のラミナ有り</p> <p>第20層 オリーブ黒色(5Y 2/2)粘土、植物遺体多量</p> <p>第21層 黒色(5Y 2/1)粘土、植物遺体少量</p> |
|--|---|--|



第32図 No.7 トレンチ断面図

9. No.8 トレンチの調査

1) 層位

第1層から第7層までは近世の堆積層である。第8・9層は湿地の最上部の植物遺体層である。第10層から第16層までは中世の堆積層で、第16層はNo.7トレンチ第13層に相当する層であるが、シルト質粘土の層中に極細～粗粒砂、細～中礫がラミナ状となり、薄くなっている。

第17層上面では足跡を検出した。12世紀以降の時期である。

第17層は弥生時代後期の堆積層である。第18層は中期末の遺物包含層であるが、遺物の出土量は少ない。第19層～第20層上面で自然流路を検出した。弥生時代中期末の流路である。

第19層～第20層の上面が乱れているのは、人為的な踏み込み、攪乱のためである。遺構となるような明確なものは検出できなかった。第19層、第20層は弥生時代中期の堆積層である。

第21層上面では溝状の落ち込みを検出した。

第22層から第24層までは弥生時代前期から中期の堆積層である。遺物の出土量は少ない。植物遺体を多量に含み、滞水状態にあることが推定できる。

第25・25'層は今回の調査ではNo.8トレンチのみで検出した。上部(第25'層)は極細～中粒砂で、木片や植物遺体が多量に混じる。下部(第25層)は上部砂層と粘土質シルトの互層で、同様に木片、植物遺体が多量に混じる。縄文土器片が僅かに出土した。

河内潟の汀線付近にあたりと考えられる。

今回の調査地点では、No.8トレンチ付近からのみ弥生時代の遺構、遺物を検出しており、また、中世の遺構、遺物は殆ど認められない事から、この付近が鬼虎川遺跡の北西限と考えられる。

2) 遺構

足跡

第17層上面で検出した。水田畦畔は確認できなかった。足跡はトレンチ全体に散在するように分布し、目立った規則性は認められないが、大きく見ると、南西～北東、南東～北西の方向に、より多くの足跡がついている。

踏み込まれた時期は、前述の各トレンチの層位関係から12世紀以降に求められる。

自然流路

幅6.4mで、西北西～東南東方向に延びる。北岸が南岸よりも高く、北岸からの深さは、西側で81cm、東側で90cmと東側が低くなる。標高差約20cmである。流路内の堆積は細～極粗粒砂が大半で、一時に堆積している。

流路の位置、及び方向は後述する溝状の落ち込みと殆ど同位置である。元々、周囲より低くなった部分に流れ込んだものであろう。

流路内からは弥生時代中期末の土器が出土していることから、近い時期に流路の時期を求め

られる。

このような一時に砂層を堆積させる自然流路は、鬼虎川遺跡、西ノ辻遺跡でも複数確認されており、弥生時代中期末における自然環境の急激な変化の一端をうかがわせる。

落ち込み

第21層上面で検出した、溝状の落ち込みである。西北西～東南東方向で最大幅10.7mを測る。東半で2本に分かれている。深さは西半で112cm、東半北側で68cm、南側で109cmである。底部の標高差は東半が約5cm高くなる。

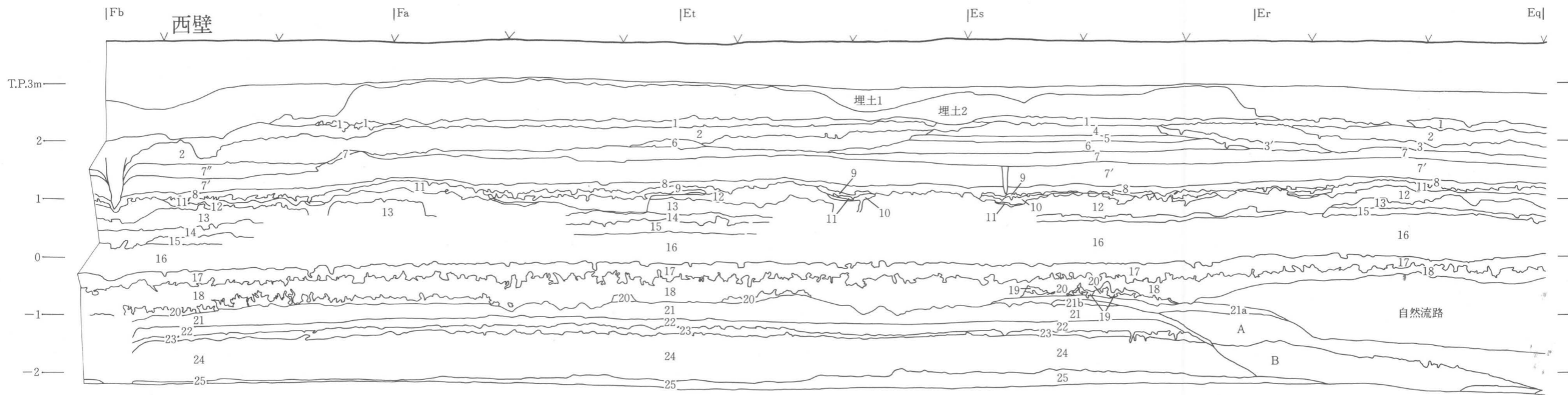
トレンチ東半では杭列を検出した。杭列は落ち込みに直行するように打たれ、1.2mの幅でしがらみ状に認められる。しかしながら、細い杭材を使用し、杭以外に他の施設が全く見られないことから性格は確定できない。杭列は2本に分かれた南側に多く、北側では僅かに肩部に打たれているに過ぎない。

落ち込み内の堆積は、A層が黒色(2.5Y 2/1)粘土で、植物遺体が少量混じる。B層は黒褐色(2.5Y 3/1)粘土で、下部はシルト質粘土に変る。植物遺体が多量に混じる。この堆積層は落ち込み内が常に滞水していたことを推定させている。

落ち込み内の出土遺物は、弥生時代前期から中期、縄文土器がある。遺物から落ち込みの時期は弥生時代中期中頃と考えられる。

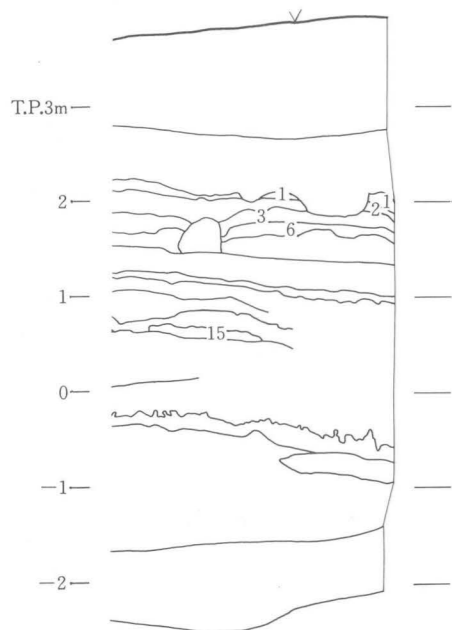


第33図 No.8 トレンチ自然流路平面図

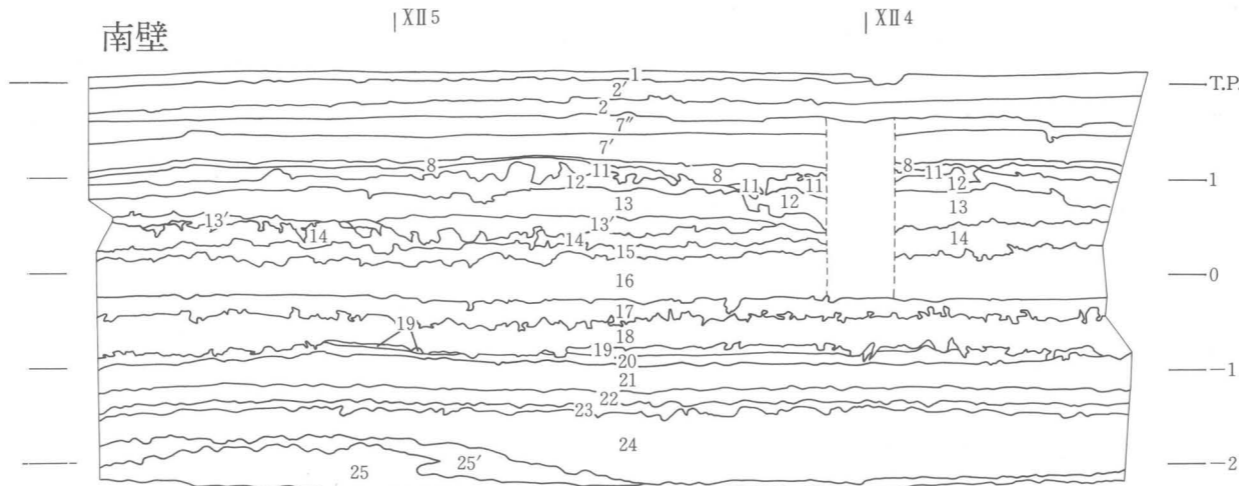


- 第1層 旧耕土、灰オリーブ色(5Y 4/2)砂混じりシルト質粘土
- 第2層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)砂混じりシルト質粘土、植物遺体、炭化物微量
- 第3層 灰色(7.5Y 5/1)粘土、炭化物微量
- 第3'層 オリーブ灰色(2.5GY 5/1)砂質シルト、シルト質粘土不均一に混じる
- 第4層 にぶい黄色(2.5Y 6/4)砂質シルト
- 第5層 灰オリーブ色(7.5Y 6/2)極細～細粒砂
- 第6層 緑灰色(10GY 6/1)粘土と砂質シルトの互層
- 第7層 青黒色(5B 1.7/1)シルト質粘土と極細～中粒砂の互層
- 第7'層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土と緑灰色(10GY 6/1)粘土の互層
- 第7''層 灰オリーブ色(5Y 5/3)砂
- 第8層 灰オリーブ色(5Y 5/2)粘土、植物遺体多量

- 第9層 灰色(7.5Y 4/1)砂質粘土、植物遺体多量
- 第10層 上部、暗オリーブ灰色(5GY 4/1)粘土
下部、暗緑灰色(10GY 4/1)粘土
- 第11層 暗緑灰色(10GY 4/1)砂混じり粘土
- 第12層 灰色(7.5Y 5/1)シルト質粘土、植物遺体細片多量、暗緑灰色シルト質粘土がブロックに混じる
- 第13層 暗緑灰色(10GY 3/1)シルト質粘土
- 第13'層 暗緑灰色(10GY 3/1)砂混じり粘土、植物遺体、炭化物少量
- 第14層 暗オリーブ灰色(5GY 3/1)粘土、植物遺体、炭化物少量
- 第15層 暗緑灰色(7.5GY 3/1)粘土、不均一にシルト～極細粒砂多量に含む
- 第16層 暗緑灰色(7.5GY 4/1)シルト質粘土、植物遺体微量、北側では極細～粗粒砂、細～中礫のラミナが認められる



南壁

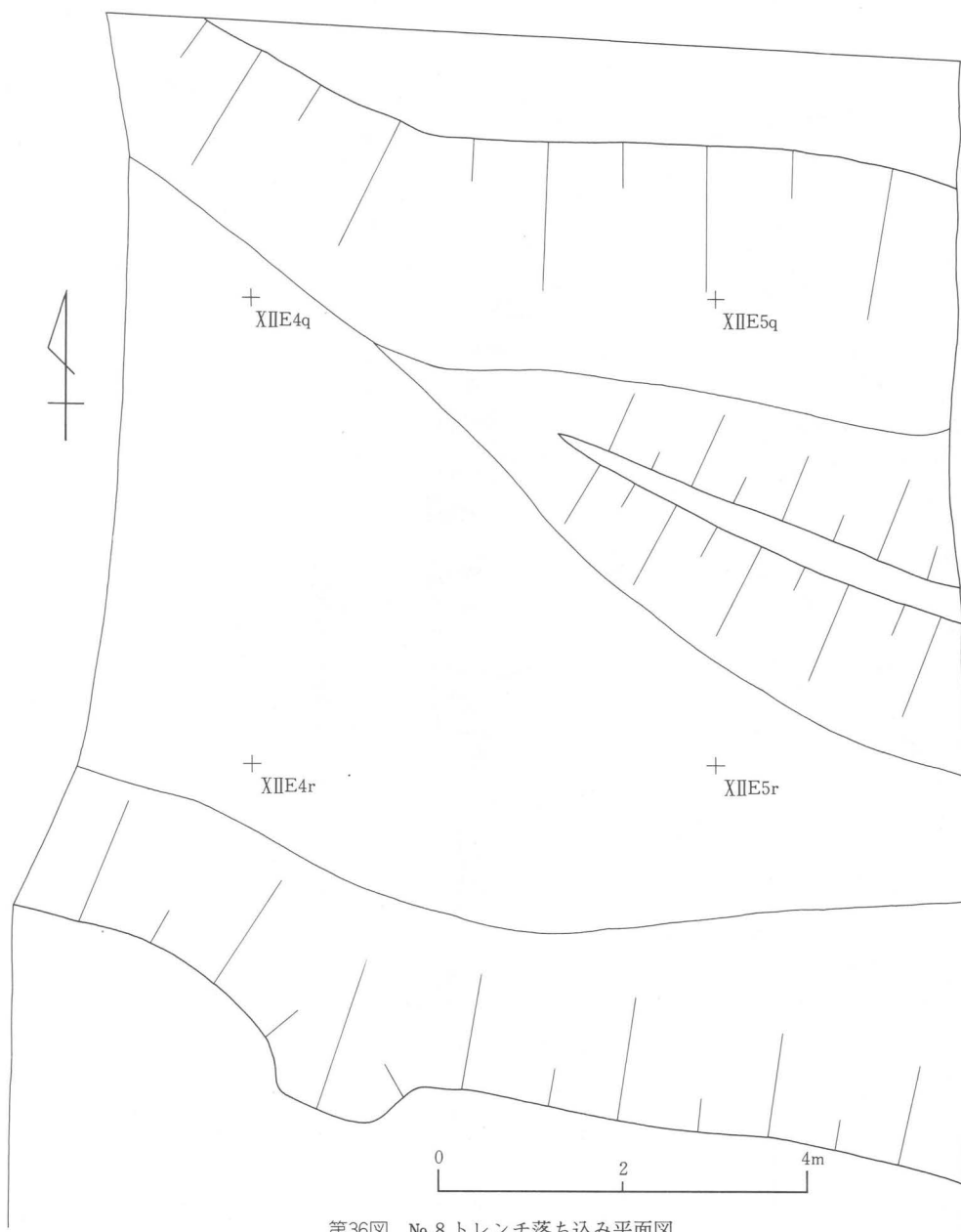


- 第17層 暗オリーブ灰色(5GY 4/1)粘土、上面で足跡検出、下部は第18層上部が乱れて混じる
- 第18層 上部、オリーブ黒色(10Y 3/1)粘土
下部、黒色(10YR 1.7/1)粘土
- 第19層 黒褐色(5YR 2/1)粘土、腐食土
- 第20層 黒色(7.5Y 2/1)粘土
- 第21a層 黒褐色(2.5Y 3/1)粘土、植物遺体多量、炭化物のラミナ有り
- 第21b層 オリーブ黒色(7.5Y 3/2)粘土、植物遺体多量
- 第21層 黒色(7.5YR 1.7/1)粘土、植物遺体多量
- 第22層 黒色(2.5Y 2/1)粘土、植物遺体多量、上部に炭化物のラミナ有り
- 第23層 黒色(5YR 1.7/1)粘土
- 第24層 オリーブ黒色(5Y 2/2)シルト質粘土、植物遺体含む、下部でシルトが混じる
- 第25層 黒色(2.5Y 2/1)粘土質シルトと、灰色(7.5Y 5/1)極細～中粒砂の互層、上部は植物遺体多量、縄文土器出土
- 第25'層 灰色(7.5Y 5/1)極細～中粒砂

第34図 No.8 トレンチ断面図



第35図 No.8 トレンチ足跡平面図

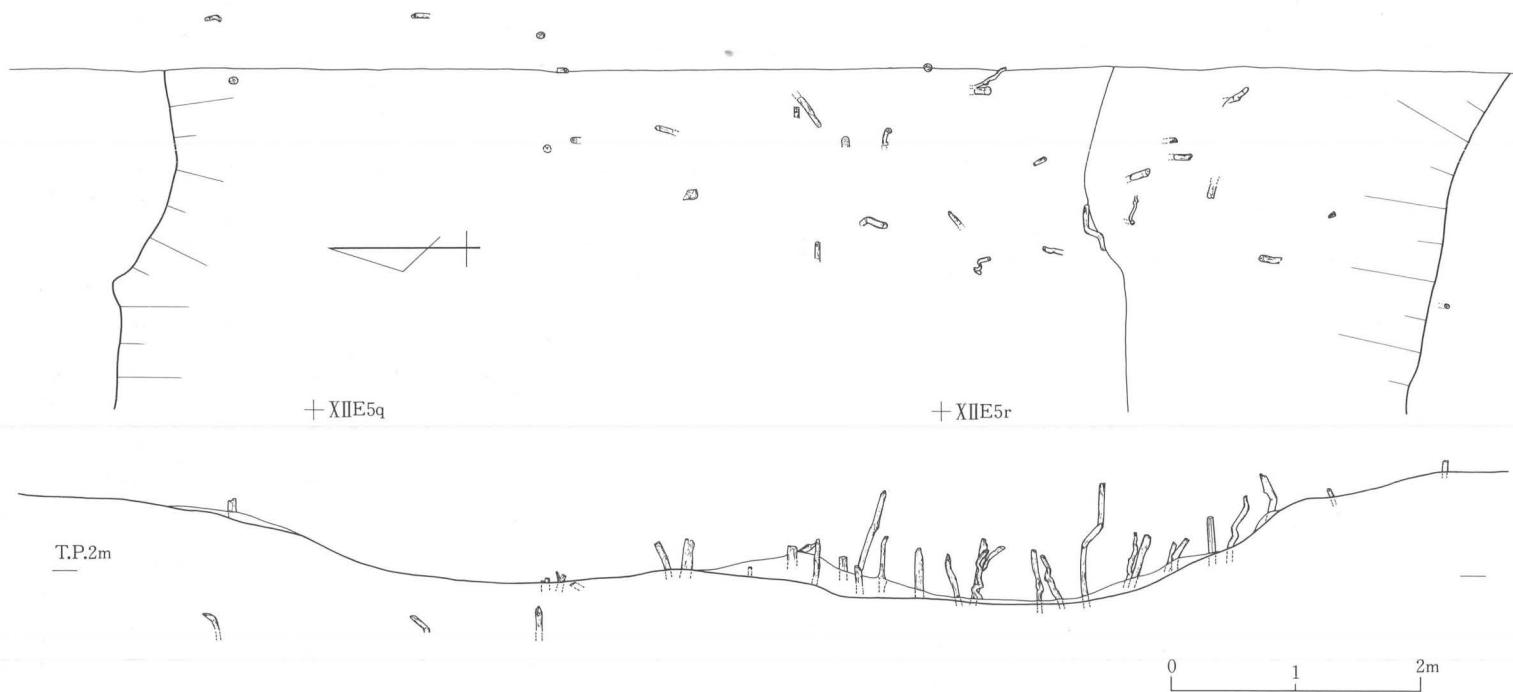


第36図 No.8 トレンチ落ち込み平面図

人為的な遺構ではないが、第25・25'層は、第3次調査他でNo.8トレンチ周辺のみ確認されている。特にNo.8トレンチの東側で貝塚が検出され、カキ、セタシジミなどの貝類が出土した。

また、弥生時代前期中段階と、縄文時代晩期の長原式の土器が貝塚内より出土している。他に浅い溝状遺構、土壇などがある。

従来の鬼虎川遺跡の範囲からは、相当の距離があり、この地点の地形、堆積環境については不明な点が多く、第3次調査他の報告書刊行にその解明を残したい。



第37図 No.8 トレンチ落ち込み内杭列実測図

10. No.9 トレンチの調査

1) 層位

現在の恩智川の左岸、堤防際にあたり、上部に陸橋が架かっているため、調査に際しては、東西方向にのみ断面観察のアゼを設置して実施した。

第1層から第4層までは近世の堆積層である。第4層上面で溝状の遺構を検出した。

第6層上面では、南北方向に流れる河道を検出した。出土遺物から近世以降の河道と考えられる。

第7・7層はNo.8 トレンチ第16層から続く粘土質シルト、シルトの互層で、12世紀以降の堆積層である。

以下の層位は出土遺物が非常に少なく、前後の層位関係から推定せざるを得ない。しかしながら、基本的な層位は、鬼虎川遺跡に類似していると見えよう。

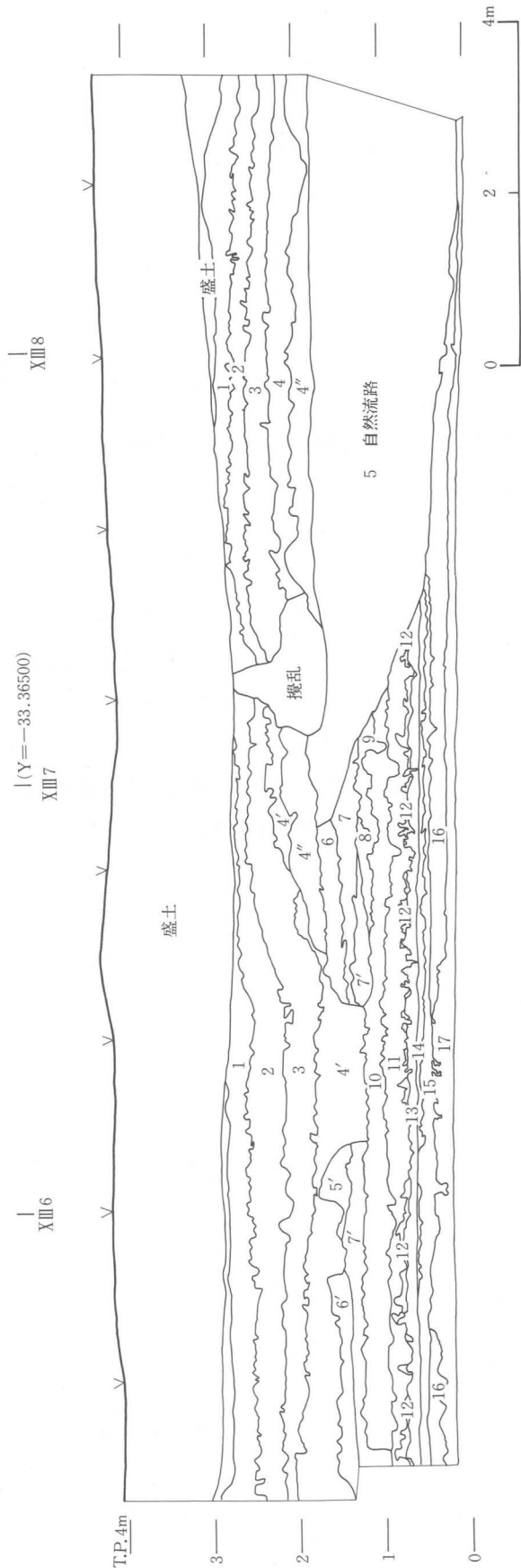
第11層は弥生時代後期と考えられる。

第12層～第13層上面が乱れているのは、人為的な踏み込みであろう。

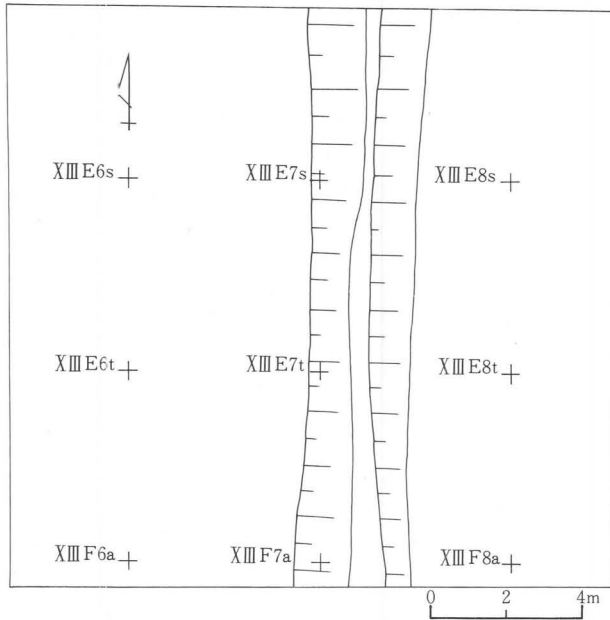
第12層～第13層は弥生時代中期～後期にかけて、第14層はNo.8 トレンチ第19層に相当し、弥生時代中期であろう。

第15層から第17層までは弥生時代中期～前期と考えられる。

第16層は第17層の粘土が混じり、植物遺体を多量に含み、滞水した状態で堆積したものであるが、明確な



第38図 No.9 トレンチ断面図



第39図 No.9 トレンチ河道実測図

ではないかと予測されていた。今回検出した河道は一部ではあるものの、恩智川の初限を考えるうえで、重要な資料と考えられる。

遺構とはならないが、人為的な落ち込みであろう。

2) 遺構

遺構ではないが、河道を検出した。

第6層上面で確認し、南から北へ流れる。現状での規模は、幅8m、深さ約1.5mを測る。河道内はすべて中粒砂～細礫で、一時に堆積している。堆積の時期は近世と考えられる。

これまでの調査では、弥生時代に相当する時期に、恩智川の痕跡が確認されておらず、少なくとも古墳時代以降になってからの河道

IV. 出土遺物

1. 土器

1) 土器の概要

今回の調査では縄文時代後期～近世に至る時期の土器が出土した。土器の出土量は各トレンチで異なっており、No.1・4・8トレンチでは多く、No.2・3・5・6・7・9トレンチでは少ない。中世の土器は散発的ではあるが、各トレンチで認められた。中世以外の土器は出土したトレンチと出土しなかったトレンチがある。土器の詳細は観察表に記した。

縄文土器

縄文土器は極少量が出土した。No.6トレンチで後期のものが破片で十数点出土したが同一個体と考えられる。また、No.8・9トレンチでは晩期のものがある。

弥生土器

弥生土器はNo.1トレンチで後期、No.8トレンチで前期～中期、No.9トレンチで前期と後期のものが出土した。No.1トレンチでは遺物包含層内と溝からである。No.8トレンチでは落ち込みと自然流路から出土した。落ち込みからのものが圧倒的に多い。全体の出土量からみると弥生土器は少量である。

庄内～布留式の土器

庄内～布留式の土器は極少量ではあるが、No.1トレンチより出土した。

古墳～奈良時代の土器

古墳～奈良時代の土器は、No.1トレンチで比較的多く出土した。奈良時代のミニチュアカマド、甕、甑、壺なども多く認められた。また、No.2・5・7・9トレンチでも出土したが、散発的である。

平安時代以降の土器

平安時代以降の土器は、各トレンチで出土した。特にNo.4トレンチでは中世の土器が遺構と遺物包含層より多量に出土している。黒色土器、瓦器、土師器、須恵器、輸入磁器、陶器などがある。以下、詳細を記すが、瓦器椀、土師器皿、羽釜、捏鉢・摺鉢は量が多いので型式分類をおこない各表に掲載した。瓦器椀は瓦器、土師器皿は土師器の項で記し、羽釜と捏鉢・摺鉢は末尾で各型式の説明を記す。

黒色土器

黒色土器は、No.1・5トレンチで極少量出土した。器種は椀である。

瓦器

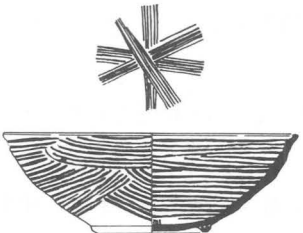
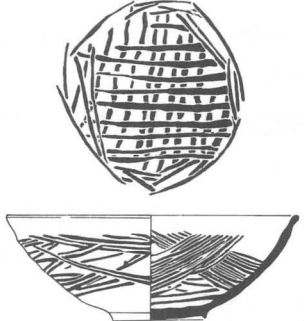
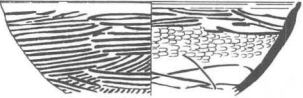
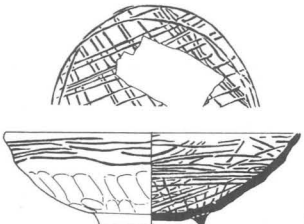
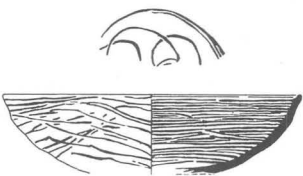
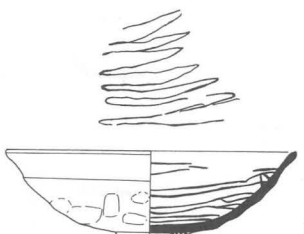
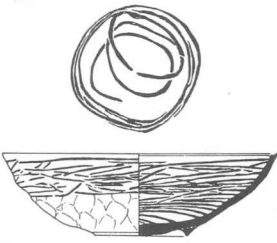
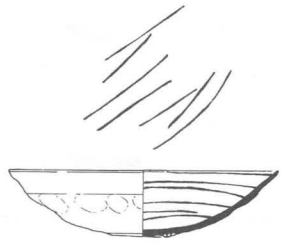
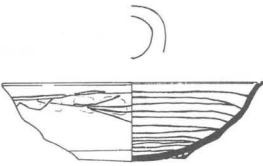




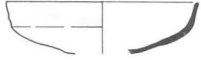
瓦器は椀、皿、甕、壺、鍋、鉢、羽釜、摺鉢がある。圧倒的に椀の量が多く、羽釜、摺鉢も比較的多い。皿、甕、壺、鍋、鉢は少量である。羽釜はI・J・K・L型式、摺鉢はA・B型式のものがある。

椀（表1）

椀は大きくA型式とB型式に分類できる。A型式は所謂、大和型、B型式は和泉型・河内型と呼ばれているものである。A・B型式は、さらに形態、調整などから細分した。A型式はA₁～A₇型式、B型式はB₁～B₇型式に分類した。A₁とB₁型式は時期的な並行関係を示したものではない。

- A₁ 体部は深く、口縁部がゆるく外反する。口縁端部には1条の沈線をめぐらす。高台はやや高い。体部内外面は密なヘラミガキ。外面は4分割のヘラミガキ。見込みは米状や斜格子の暗文を施す。胎土、色調は黒色土器に近い。
- A₂ 体部は深く、口縁部がゆるく外反する。口縁端部には1条の沈線をめぐらす。体部内外面は密なヘラミガキ。外面は分割のヘラミガキであるが分割数は不明。内面はうろこ状のヘラミガキを部分的に施す。
- A₃ 体部はA₂より浅くなる。体部内面は密なヘラミガキ。外面は粗い5～6分割のヘラミガキ。内面は部分的にうろこ状のヘラミガキを施すものもある。見込みは連結輪状の暗文を施す。
- A₄ A₃よりさらに体部が浅くなり、口径も小さくなる。高台はやや低く、断面形が逆三角形を呈する。体部外面は指押えの後、粗いヘラミガキ。分割のヘラミガキは消失し、指頭圧痕が顕著に認められる。内面はやや粗いヘラミガキ。見込みは連結輪状の暗文。
- A₅ A₄より口径がさらに小さくなる。高台は低く、断面形が逆三角形や逆台形を呈する。また、高台の粘土紐が途中で途切れるものも認められ、全体的に粗雑な作りである。体部内外面のヘラミガキは粗く、外面は口縁部付近のみヘラミガキをする。見込みは連結輪状の暗文を施す。炭素の付着が悪いものが多い。
- A₆ A₅より口径がさらに小さくなるが、体部は深い。高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。体部内面のみをヘラミガキする。見込みの暗文は消失。
- A₇ 形態、調整はA₆と同様であるが、高台が消失する。
- B₁ 体部は深く、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終る。高台はやや高く、断面形が逆三角形を呈する。体部内外面に密なヘラミガキ。外面は分割のヘラミガキ。A型式に比してヘラミガキの幅が広い。見込みは格子の暗文。
- B₂ 体部がB₁より浅くなる。体部内面は密なヘラミガキ。体部外面は指押えの後、口縁部付近を粗いヘラミガキ。指頭圧痕が顕著に認められる。見込みは斜格子の暗文。
- B₃ 体部がB₂より浅くなり、高台も低くなる。体部外面のヘラミガキは消失し、指押えで終る。内面のヘラミガキは粗い。見込みはジグザグ状の暗文。
- B₄ B₃より体部がさらに浅くなり、口径も小さくなる。高台は低く、断面形が逆三角形や逆台形を呈する。高台の粘土紐が途中で途切れるものがある。内面のヘラミガキは粗い。炭素の付着が悪い。
- B₅ 形態、調整はB₄と同様であるが、見込みの暗文が消失する。体部内面は4～7重の渦巻

表1 瓦器碗分類表

A ₁		113	B ₁		124
A ₂		115	B ₂		740
A ₃		129	B ₃		502
A ₄		741	B ₄		586
A ₅		544	B ₅		220
A ₆		618	B ₆		600
A ₇		619	B ₇		380

状の暗文。

B₆ 体部がB₅よりさらに浅くなり、皿状を呈する。口径も小さくなり、高台は消失する。

B₇ 形態はB₆と同様であるが、体部内面の暗文が消失する。


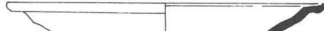
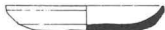




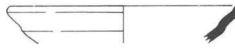
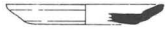

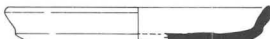


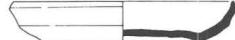





土師器

土師器は皿、羽釜がある。羽釜はA・B・C・D・E・F・G・H型式のものがある。

皿（表2）

皿は口径より小皿、中皿、大皿としてあつかう。小皿は10cm未満のもの、中皿は10～12cmのもの、大皿は12cm以上のものである。形態の特徴から大きく3型式に分類でき、A・B・C型式がある。B型式はB₁～B₅型式、C型式はC₁・C₂型式に細分できる。観察表に記した色調は褐色系と白色系で記した。

表2 土師器皿分類表

	小 皿	中 皿	大 皿
A		 843	 132
B ₁	 237	 704	 722
B ₂	 260	 706	 301
B ₃	 433	 707	 308
B ₄	 288	 297	 305
B ₅	 293		
C ₁	 439	 711	
C ₂	 688	 716	

- A 平底の底部より、体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反した後、内弯する。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。
- B₁ 平底の底部より、口縁部が外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終るものと尖り気味に終るものがある。
- B₂ 平底の底部より、口縁部が外反する。口縁端部は丸く終るものと尖り気味に終るものがある。
- B₃ 平底の底部より、口縁部が外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終る。口縁部と体部境の外面には明瞭な段がつく。
- B₄ 形態はB₃とほぼ同様であるが、口縁端部が内側へ肥厚する。
- B₅ 平底の底部より、口縁部が内傾しながら上方へ伸びる。口縁端部はつまみ上げ気味に終る。
- C₁ 平底の底部より、口縁部が大きく逆八字形に伸びる。口縁端部は丸く終るものと尖り気味に終るものがある。上げ底を呈するものもある。
- C₂ 平底の底部より、口縁部が外反した後、大きく逆八字形に伸びる。口縁端部は丸く終るものと尖り気味に終るものがある。上げ底を呈するものもある。

須恵器

須恵器は捏鉢がある。捏鉢はD・E・F型式のものであり、東播系のものである。

輸入磁器

輸入磁器は出土量が少ない。青磁と白磁がある。青磁は椀、白磁は椀と台付皿がある。

陶器


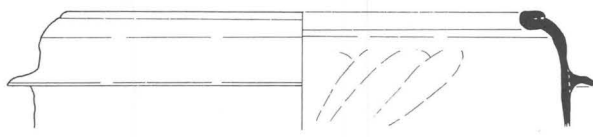
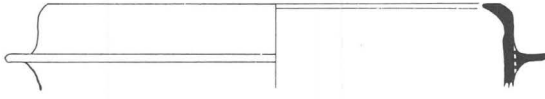
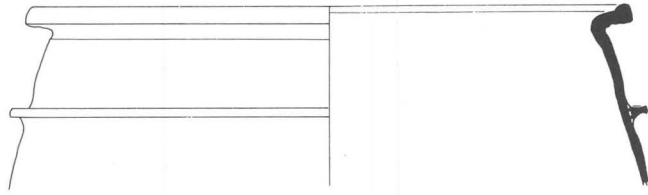
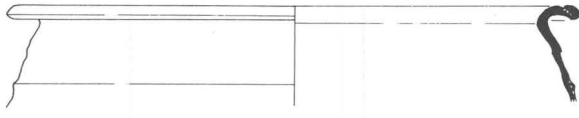
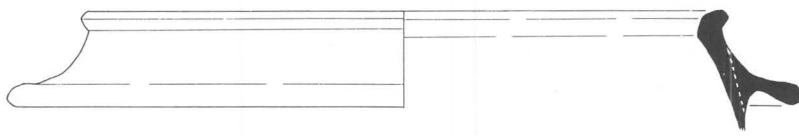

陶器は備前焼、常滑焼、瀬戸焼がある。備前焼は甕、壺、摺鉢の器種がある。摺鉢はF型式のものである。常滑焼は甕、瀬戸焼は椀がある。

羽釜（表3）

今回の調査では12型式の羽釜が出土しており、形態、調整などからA～L型式に分類した。土師器と瓦器のものがある。

- A 土師器。張りの少ない体部より、口縁部が強く内弯する。口縁端部は外側へ肥厚する。鏝は長い。
- B 土師器。張りの少ない体部より、口縁部が強く内弯する。口縁端部は外側へ折り曲げるように肥厚する。鏝は長い。
- C 土師器。張りの少ない体部より、口縁部が内傾した後、さらに水平方向に伸びる。口縁端部は丸く終る。鏝は長い。
- D 土師器。やや張りのある体部より、口縁部がくの字形に外折する。口縁端部は内側へ巻き込む。鏝は短い。
- E 土師器。やや張りのある体部より、口縁部が強く外反する。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。鏝は非常に短い。

表 3 羽釜分類表

A		320
B		561
C		410
D		314
E		560
F		553
G		311

羽釜分類表(つづき)

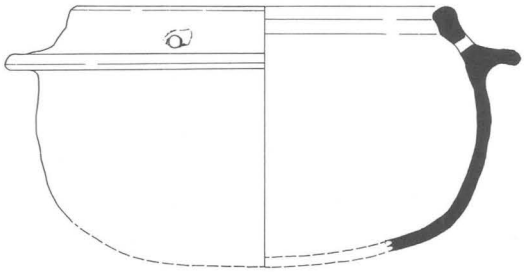
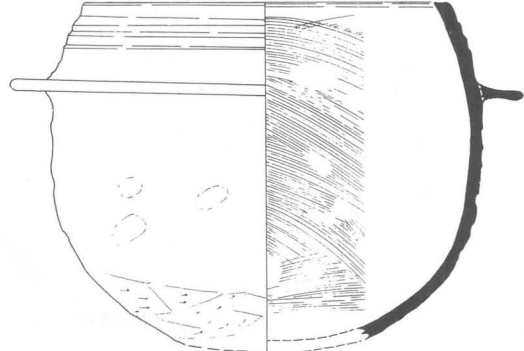

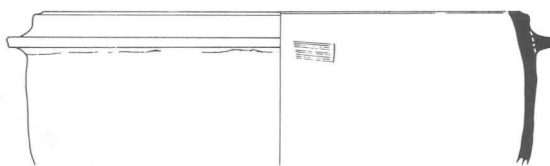
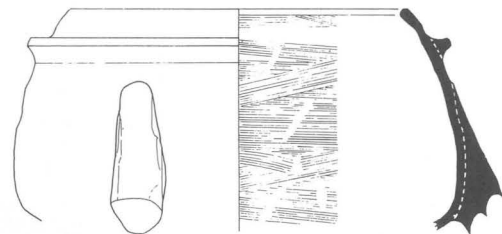
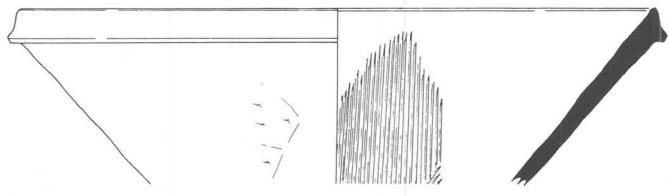
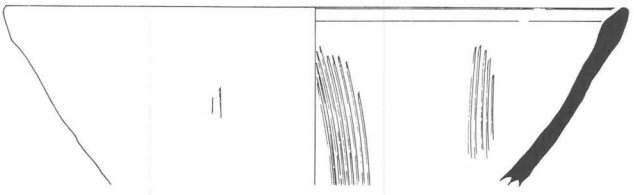
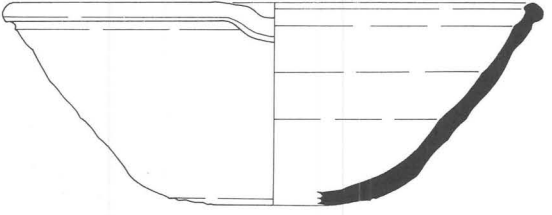
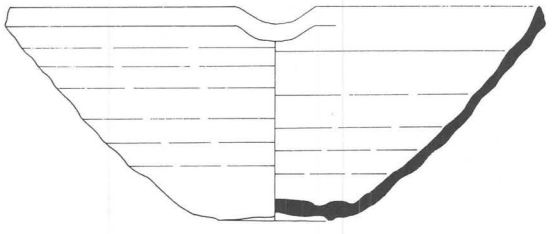
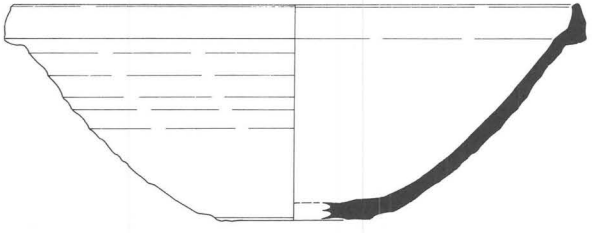
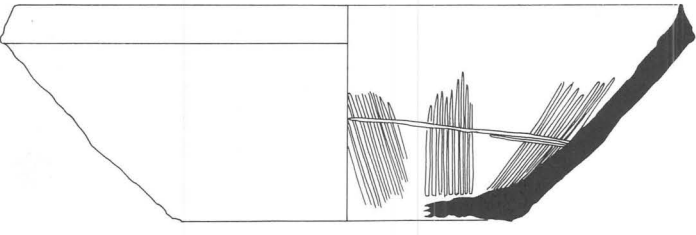
H		564
I		391
J		395
K		566
L		324

表4 摺鉢・捏鉢分類表

A		385
B		382
C		613
D		339
E		614
F		616

- F 土師器。張りのある体部より、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終る。鏝は長い。
- G 土師器。張りのある体部より、口縁部がわずかに外反する。口縁端部は丸く終る。鏝は長い。
- H 土師器。張りの少ない体部より、口縁部が内傾する。口縁端部は丸く終る。鏝は長い。
- I 瓦器。球形の体部より、口縁部が内傾する。口縁端部は面をもつ。口縁部外面に2～4条の凹線をめぐらす。鏝は長い。
- J 瓦器。張りの少ない体部より、口縁部が内傾する。口縁端部は面をもつ。口縁部外面に3～4条の段をめぐらす。鏝は長い。
- K 瓦器。張りの少ない体部より、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は面をもつ。鏝は口縁端部直下につき、短い。
- L 瓦器。体部は球形を呈し、口縁部は内傾する。口縁端部は面をもつものと丸く終るものがある。体部外面に3本の棒状を呈する長い脚がつく。鏝は短い。

摺鉢・捏鉢（表4）

今回の調査では6型式の摺鉢・捏鉢が出土しており、形態、調整などからA～F型式に分類した。瓦器、須恵器、備前焼のものがある。

- A 瓦器摺鉢。体部が大きく逆八字形に伸びる。口縁端部は上方へ拡張し、幅広の面をもつ。体部内面におろし目を施す。おろし目は20～30条のものが多い。
- B 瓦器摺鉢。体部が大きく逆八字形に伸びる。口縁端部は丸く終るものと尖り気味のものがある。体部内面におろし目を施す。おろし目は4～8条のものが多い。
- C 須恵器捏鉢。体部が大きく逆八字形に伸びる。口縁端部は上方へやや肥厚する。東播系である。
- D 須恵器捏鉢。体部が大きく逆八字形に伸びる。口縁端部は上方へ拡張し、面をもつ。東播系である。
- E 須恵器捏鉢。体部が大きく逆八字形に伸びる。口縁端部は上下へ拡張し、幅広の面をもつ。東播系である。
- F 備前焼摺鉢。体部が大きく逆八字形に伸びる。口縁端部は上方へ拡張し、面をもつ。体部内面におろし目を施す。おろし目は6～8条のものが多い。

2) No.1 トレンチ出土土器 (第40~45図)

No.1 トレンチでは多量の土器が出土した。弥生土器、庄内式土器、布留式土器、古墳時代の須恵器・土師器・製塩土器、奈良時代の須恵器・土師器、平安時代以降の黒色土器・瓦器・土師器などがある。これらの遺物は第9~11層に混在したものが多く、分層することはできなかった。以下、各土器の概略を記す。

弥生土器

弥生土器は第10・11層の遺物包含層とSD 2より出土した。器種は甕(1~15)と壺の底部(16)がある。甕は体部外面にタタキを施すものである。口縁部が外反するものが大部分であるが、外折するもの(6)もある。口縁端部は面をもつものと丸く終るものがあるが、上方へつまみ上げ気味に終るもの(13)も1例ある。壺(16)は上げ底を呈する平底より、体部は上方へ大きく伸びる。内外面はヘラミガキ調整する。

庄内式土器

庄内式土器は第11層の遺物包含層より出土した。壺(17)と甕(18~20)の器種がある。壺は球形の体部より口縁部が大きく外折するものである。甕は口縁部から体部にかけて残るもの(18・19)と底部(20)がある。底部は尖り底であり、体部の張りが大きい。口縁部はくの字形に外折し、口縁端部をつまみ上げて終る。体部外面は細いタタキを施し、内面はヘラケズリ調整する。口縁部と体部境の内面にはヘラケズリによる明瞭な稜が残る。

布留式土器

布留式土器は第10・11層の遺物包含層とSD 2より出土した。甕(21・22)、壺(23・25)、小型丸底壺(24)の器種がある。甕は球形の体部より、口縁部が内弯気味に外折する大形のもの(21)と口縁部が外反する小形のもの(22)がある。口縁端部は内傾して面をもつ。壺(23・25)は球形の体部より、口縁部が大きく外折する。小型丸底壺(24)は球形の体部より、口縁部が強く外折する。口縁部と体部の境に明瞭な稜が残る。

古墳時代の土器

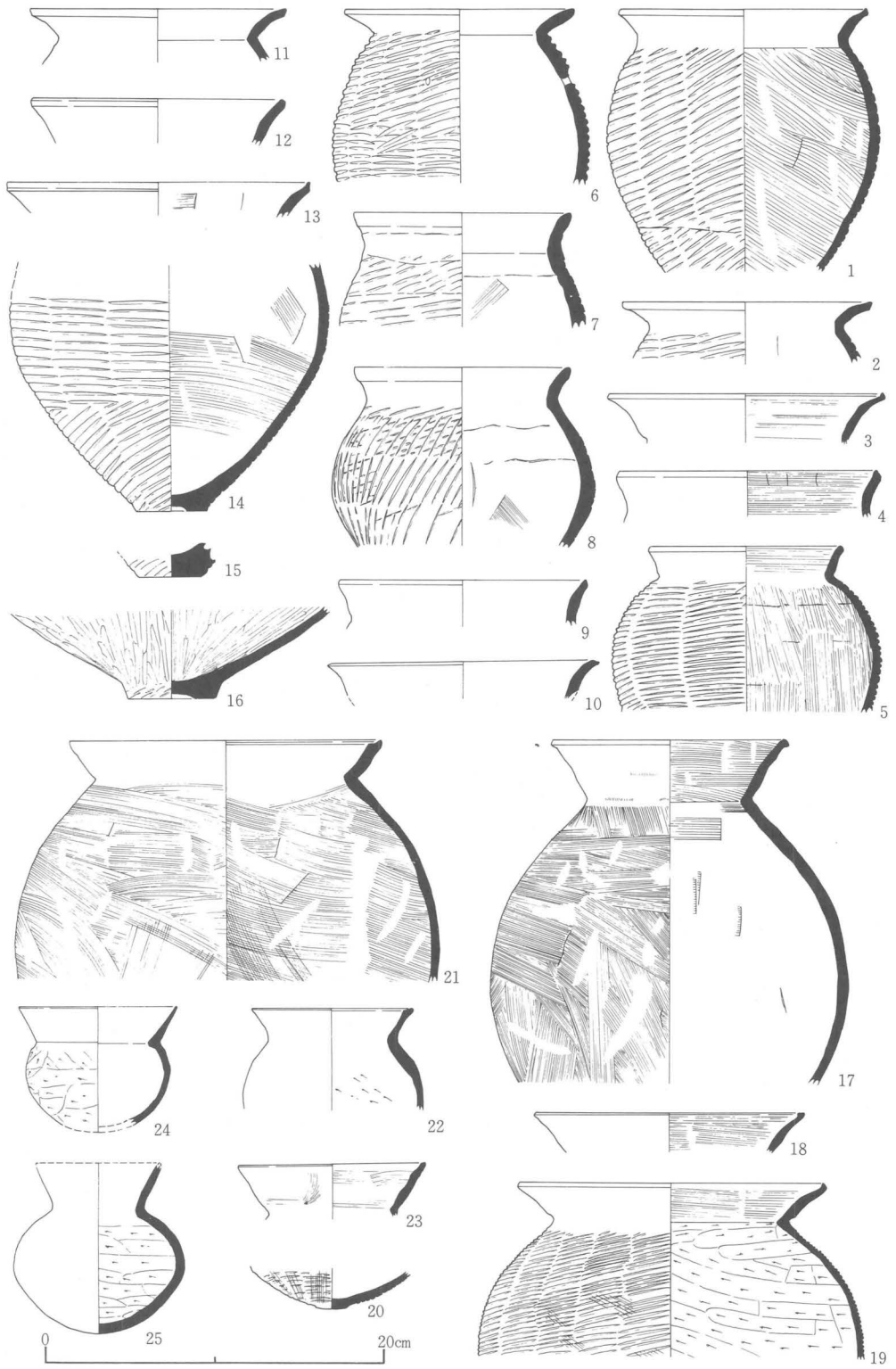
古墳時代の土器は第10・11層の遺物包含層より出土した。須恵器と製塩土器がある。

須恵器 蓋(94・95)、杯(96・97)、壺(100)、甕(101)の器種がある。蓋は天井部が丸く口縁端部がやや面をもつ大形のもの(94)と丸く終る小形のもの(95)がある。杯は体部が深く、口縁端部に沈線をめぐらすもの(96)と体部が浅く、口縁端部が丸く終るもの(97)がある。壺(100)は口縁部を欠損するが広口壺と考えられる。体部は球形を呈し、外面はカキメ調整する。甕(101)は口縁部が大きく外反するものである。

製塩土器 球形の体部より、口縁部が上方へ伸びる大形のもの(105)と小形のもの(106・107)がある。大形のものには体部外面は指押え、内面はナデ調整する。小形のものには体部外面をタタキ、内面をナデ調整する。

奈良時代の土器

奈良時代の土器は第9~10層の遺物包含層とSD 2より出土した。出土量が多い。須恵器、土



第40図 No.1 トレンチ出土土器実測図

師器、ミニチュア土器、墨書土器がある。

須恵器 杯(98・99・102)と鉢(103)の器種がある。杯は体部が浅いもの(98・99)と深いもの(102)がある。鉢(103)は平底である。

土師器 甕(26～35)、羽釜(36～38)、鉢(39～46)、杯(47～66)、皿(67～72)、甑(104・109)、蓋(108)、高杯(110)の器種がある。甕は張りの少ないもの(26・27・29)と球形に近いもの(28・30・31～35)がある。体部外面はハケメ調整するものとナデ調整するものがある。羽釜(36～38)は張りの少ない体部より、口縁部が大きく外反する。鏝は水平方向に長く伸びる。鉢は体部内面に暗文を施すもの(41・43・44)と施さないもの(39・40・45・46)がある。暗文は2帯の放射状のもの(41)、放射状の上に斜格子のもの(43)、1帯の放射状のもの(44)がある。杯は体部内面に暗文を施すもの(47・48・66)と施さないもの(49～65)がある。暗文は放射状のもの(47・48)と2帯の連結輪状のもの(66)がある。体部外面の調整はヘラミガキ調整(47・66)、ナデ調整(48)、ヘラケズリ調整(49)、指押え(50～65)がある。皿は口縁部が短く外反するものが多い。甑は体部が外上方へ伸びるもの(104)と角状を呈する把手(109)がある。蓋(108)は口縁部を欠損するが中央に円形のつまみがつく。高杯(110)は皿状を呈する杯部であり、内面に放射状の暗文を施す。

ミニチュア土器 カマド(73～76)、甕(77～80)、甑(81～83)、壺(84～91)の器種がある。いずれも土師器である。カマド(73～76)は体部が八字形に開き、口縁部と底部を円形に切り取った中空のものである。体部の1ヶ所に台形を呈する切り込みを入れ、焚口とする。体部外面は指押え、内面はハケメの後ナデ調整する。甕は底部が丸底に近いもの(77)と尖底のもの(78～80)がある。口縁部は強く外反する。粘土紐のつなぎ目が顕著に残っており、巻き上げてつくっている。体部外面は指押え、内面はナデ調整する。甑は体部が球形を呈するもの(81・82)と長胴のもの(83)がある。長胴のものは底部に焼成後の円孔を穿っている。体部外面は指押え、内面はナデ調整する。壺は球形の体部より、口縁部が強く外反する。口縁端部に沈線をめぐらすもの(84～86)と丸く終るもの(87～91)がある。体部外面は指押え、内面はナデ調整する。

墨書土器 須恵器の杯(92)には「参」、土師器の台付杯(93)の底部裏面には「本」の字が書かれている。

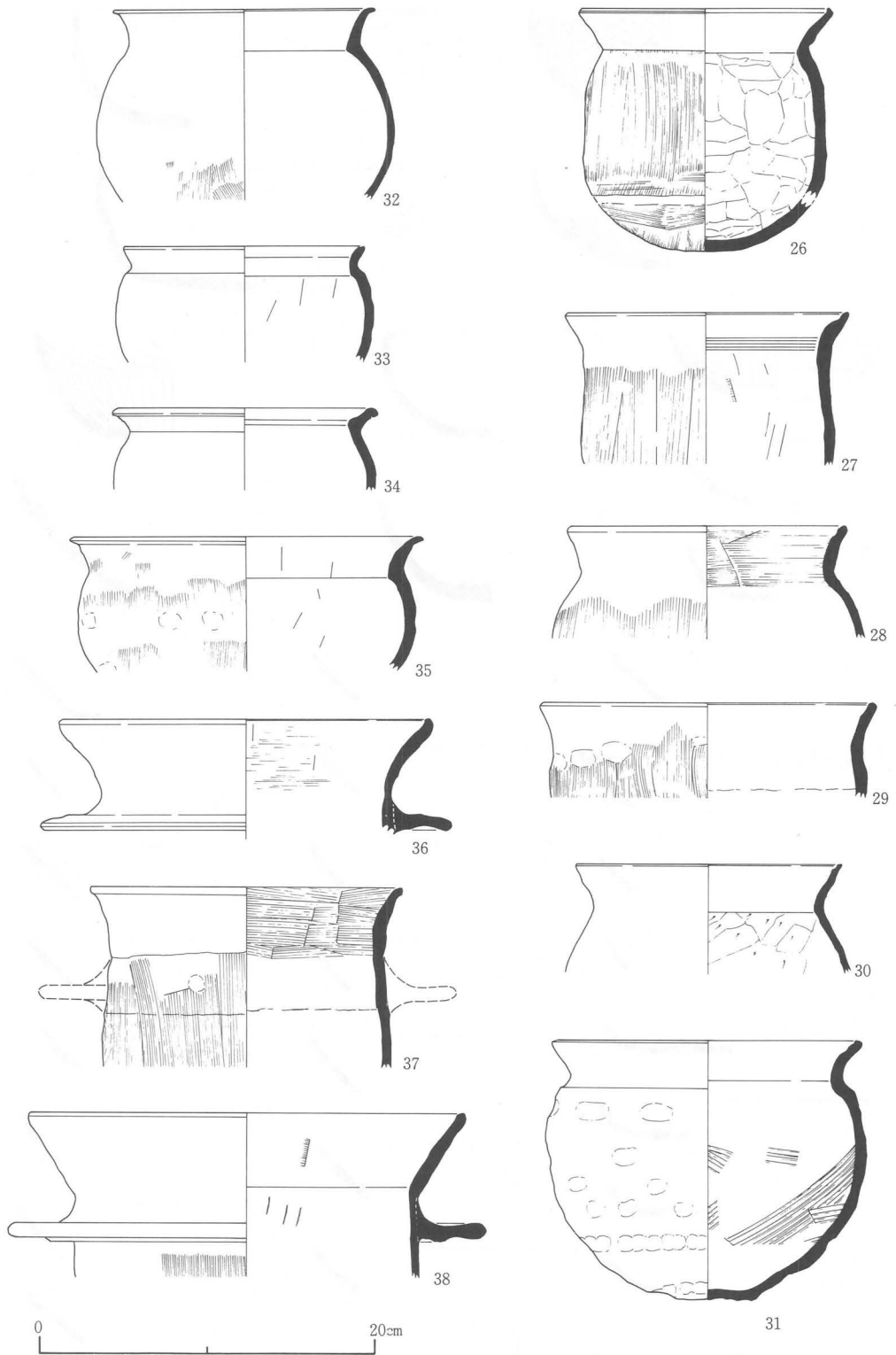
平安時代以降の土器

平安時代以降の土器は第6・8・9・10層の遺物包含層より出土した。黒色土器、瓦器、土師器がある。

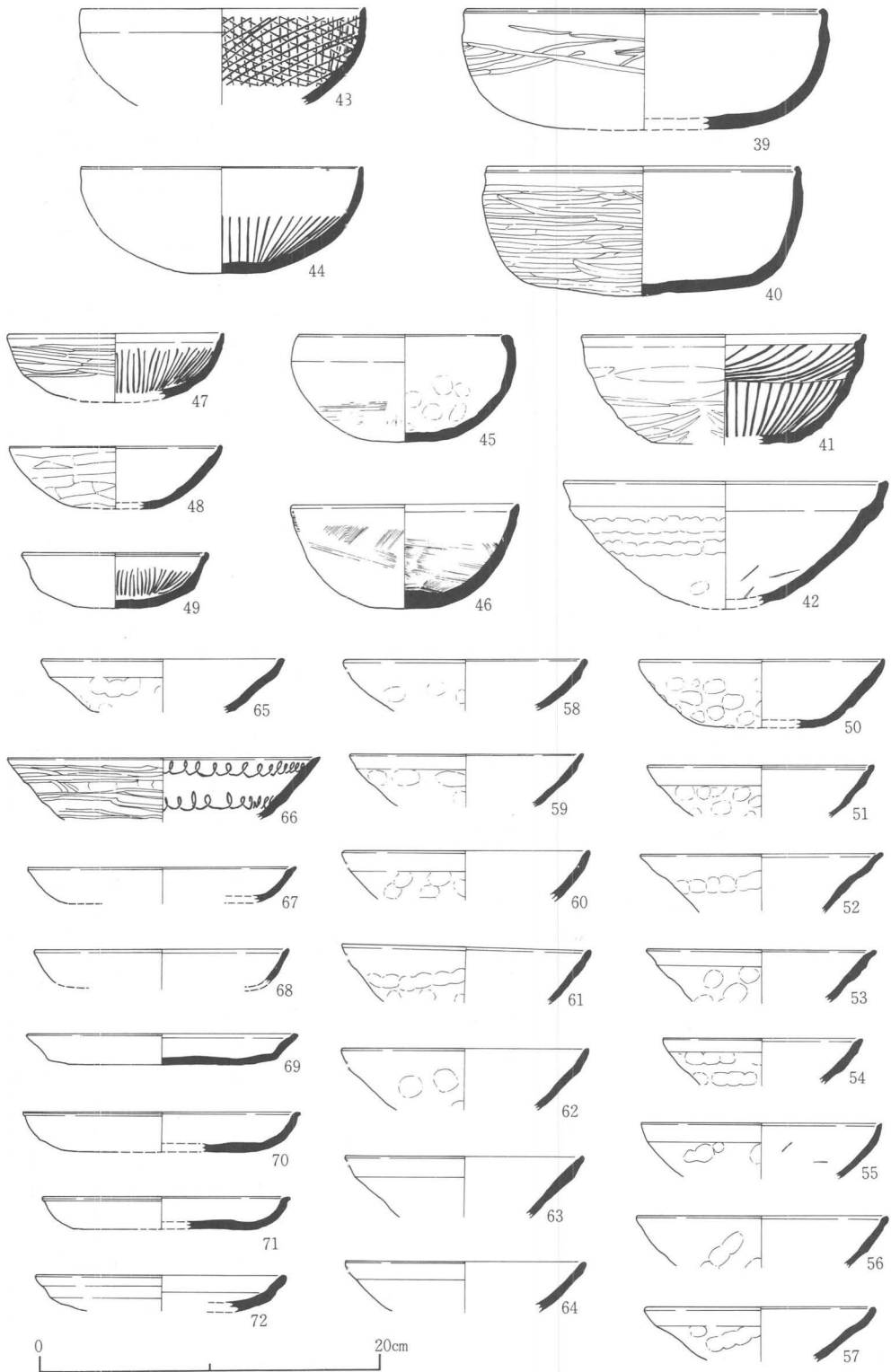
黒色土器 椀(112)がある。平底の底部より体部が深く内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。高台は低い。内黒である。

瓦器 椀(113～115・116)と摺鉢(117)の器種がある。椀はA₁型式のもの(113・114)、A₂型式のもの(115)、B₆型式のもの(116)がある。摺鉢(117)はA型式である。

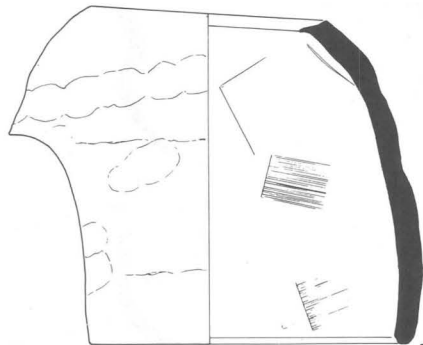
土師器 中皿(111)がある。A型式のものである。



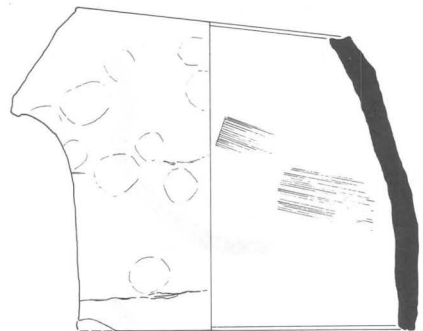
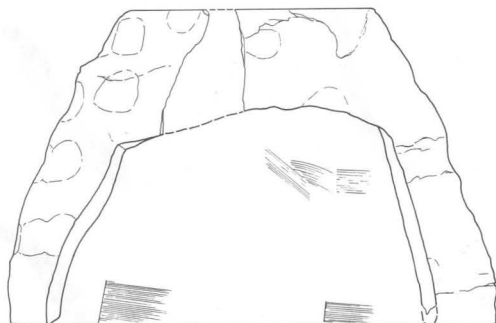
第41図 No.1 トレンチ出土土器実測図



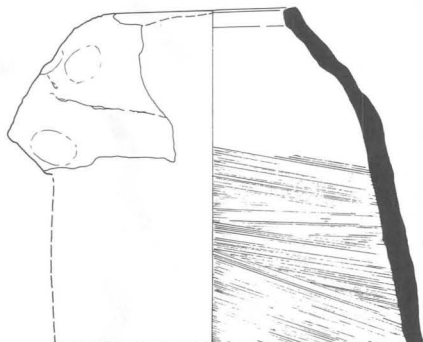
第42図 No.1 トレンチ出土土器実測図



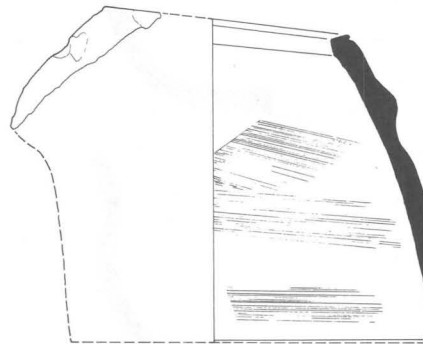
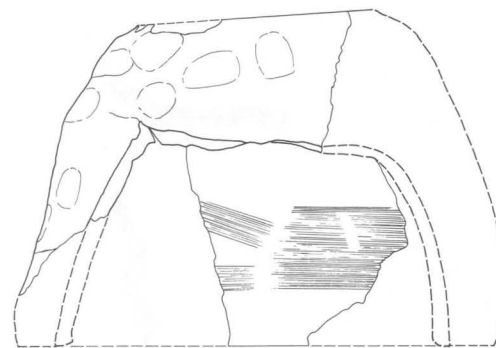
73



74



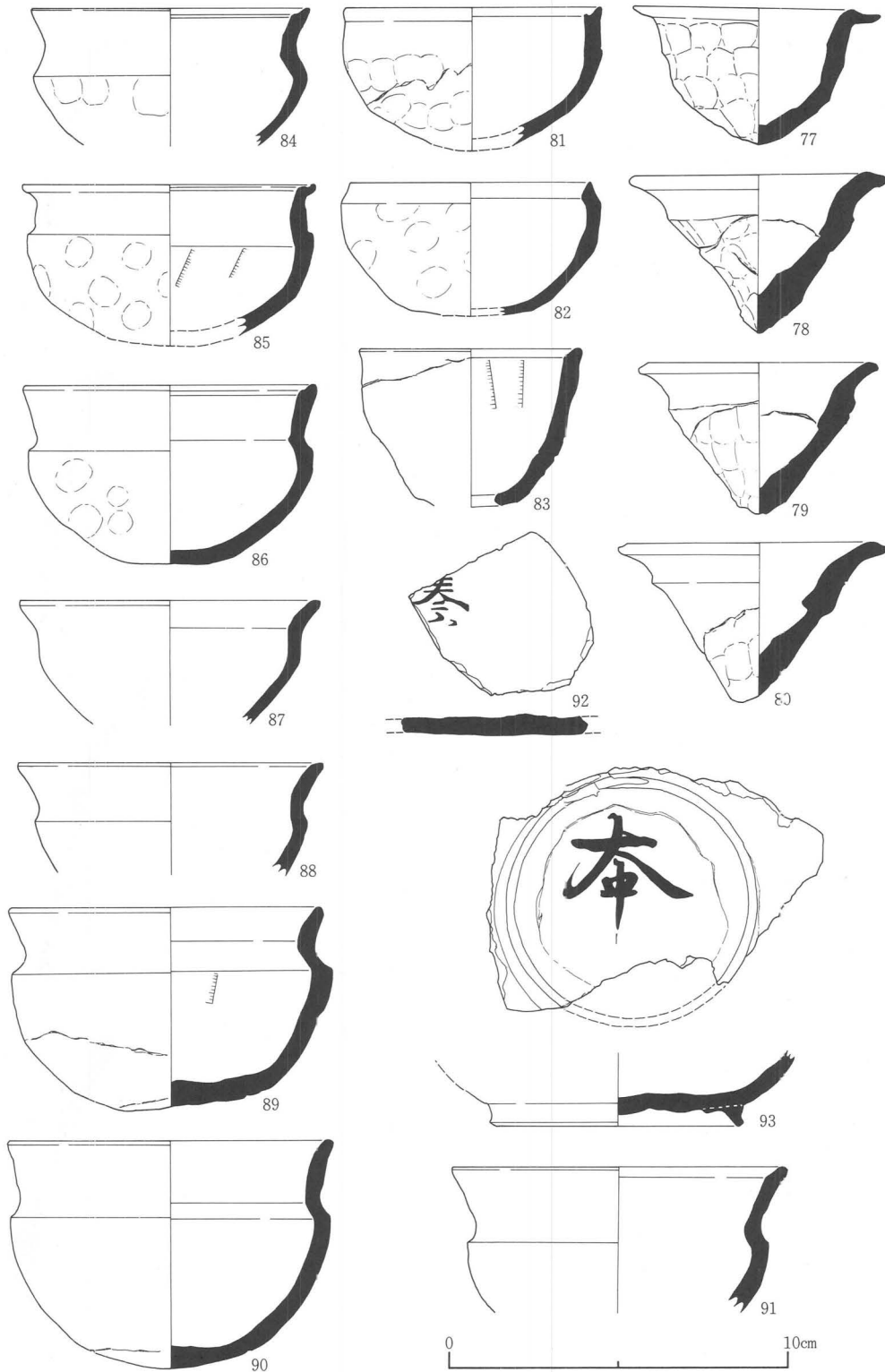
75



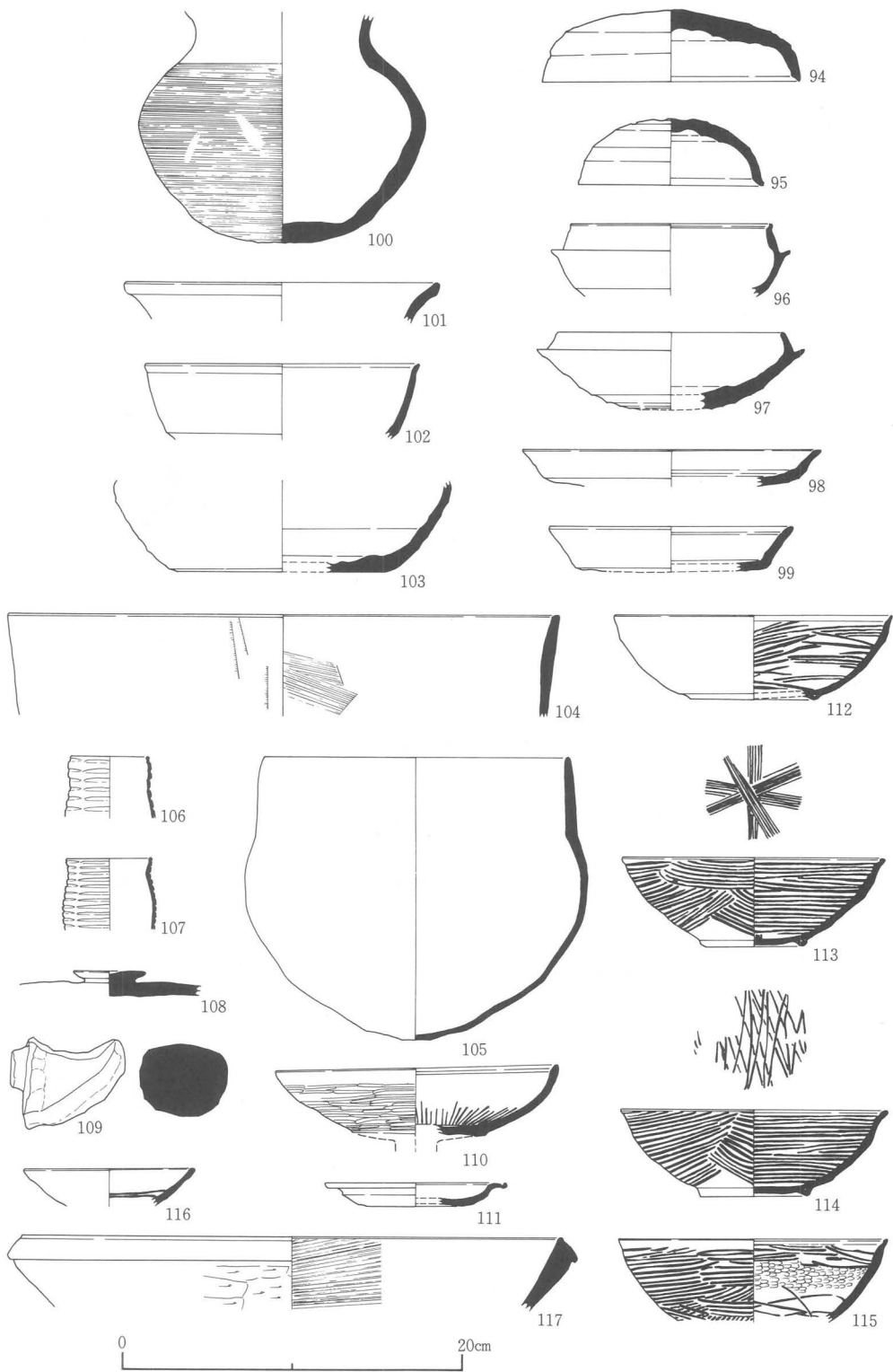
76

0 10cm

第43図 No.1 トレンチ出土土器実測図



第44図 No.1 トレンチ出土土器実測図



第45図 No.1 トレンチ出土土器実測図

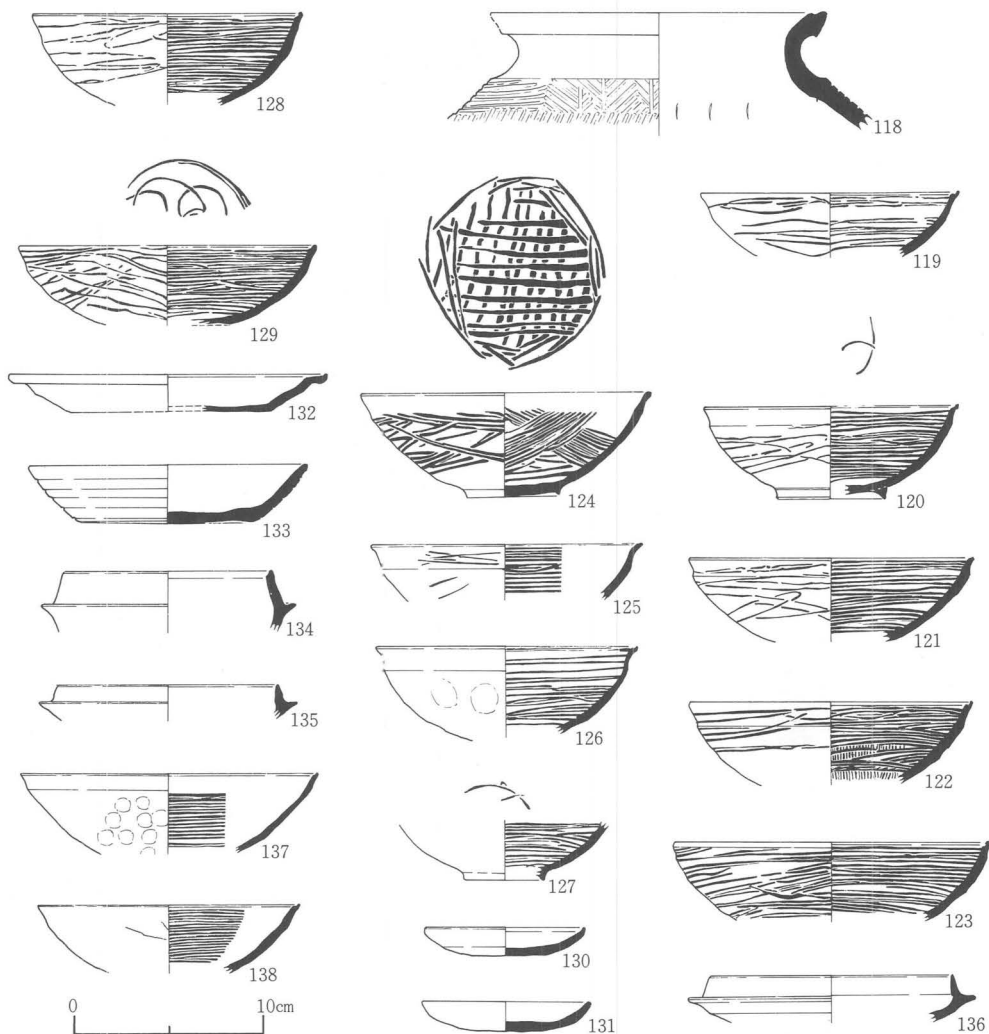
3) No.2 トレンチ出土土器 (第46図)

No.2 トレンチでは土器の出土量は少ないが古墳時代～中世のものがある。第5・6・7・8・9層より出土した。瓦器、土師器、須恵器がある。

瓦器 甕(118)と椀(119～129・137・138)の器種がある。甕は張りのある体部より、口縁部が強く外反するもの(118)である。体部外面は綾杉状のタタキを施す。椀はA₃型式のもの(123・128・129)、A₄型式のもの(120～122)、A₅型式のもの(119・125～127・137・138)、B₁型式のもの(124)がある。

土師器 B₁型式の小皿(130・131)とA型式の大皿(132)がある。

須恵器 杯(133～136)がある。平底の底部より口縁部が外上方へ伸びるもの(133)と受部が水平方向に伸び、口縁部が内傾するものがある。口縁端部は面をもつもの(134)と丸く終るもの(135・136)がある。



第46図 No.2 トレンチ出土土器実測図

4) No.3 トレンチ出土土器 (第47図)

No.3 トレンチでは土器の出土量は少ないが中世のものがある。第2・3・3c・3d・4・4d・5・6層とSD2より出土した。土師器、輸入磁器、瓦器、須恵器がある。

土師器 皿(139~153)と羽釜(155・156)の器種がある。皿は小皿、中皿、大皿がある。小皿はC₁型式のもの(140~142・145・149・150)、C₂型式のもの(143)、B₁型式のもの(144)がある。中皿はC₁型式のもの(146・147・151)とC₂型式のもの(148)がある。大皿はB₁型式のもの(139・152・153)がある。羽釜はA型式のもの(155)とE型式のもの(156)がある。

輸入磁器 青磁(164)と白磁(165・166)がある。青磁は椀(164)であり、体部が逆八字形に伸びる。体部外面に蓮弁文を描く。白磁は台付皿(165)と椀(166)がある。台付皿は体部が大きく逆八字形に開き、高台にアーチ状の袂りを入れる。椀は高台が高く、体部が深く内弯気味に立ち上がる。

瓦器 羽釜(154・157~159)、摺鉢(160)、鉢(163)、椀(168~173)の器種がある。羽釜はすべてK型式のものである。摺鉢はB型式のものである。鉢は口縁部が外上方へ伸びるものである。椀はB₆型式のもの(168~170・172・173)とA型式のもの(167・171)がある。

須恵器 捏鉢(161・162)がある。E型式のものである。東播系である。

5) No.4 トレンチ出土土器

No.4 トレンチでは中世の土器が多量に出土した。遺構と遺物包含層より出土しており、以下各遺構及び遺物包含層に分けて説明を記す。

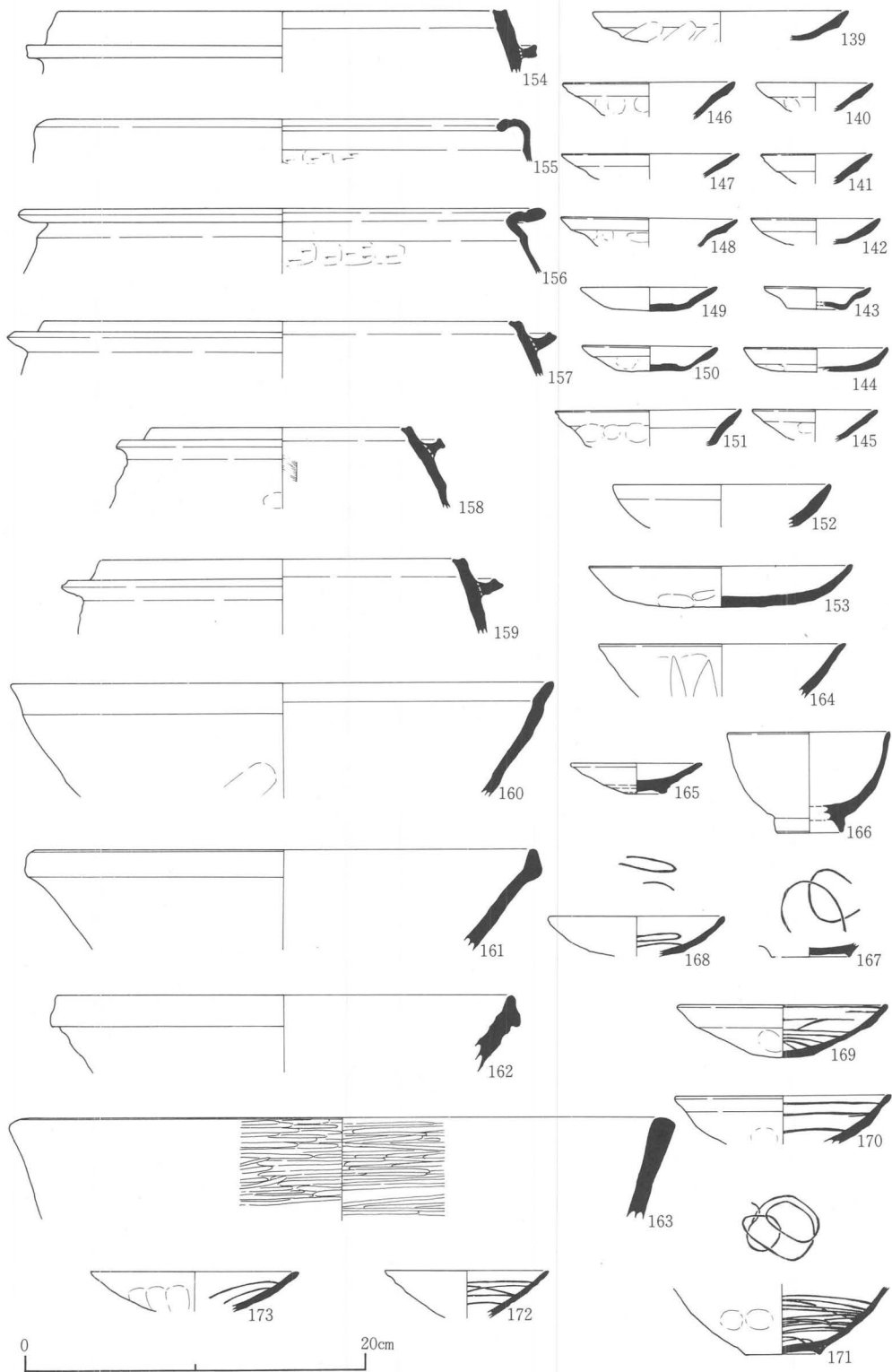
SK17出土土器 (第48~54図)

SK17では瓦器、土師器、須恵器、陶器、輸入磁器が出土した。

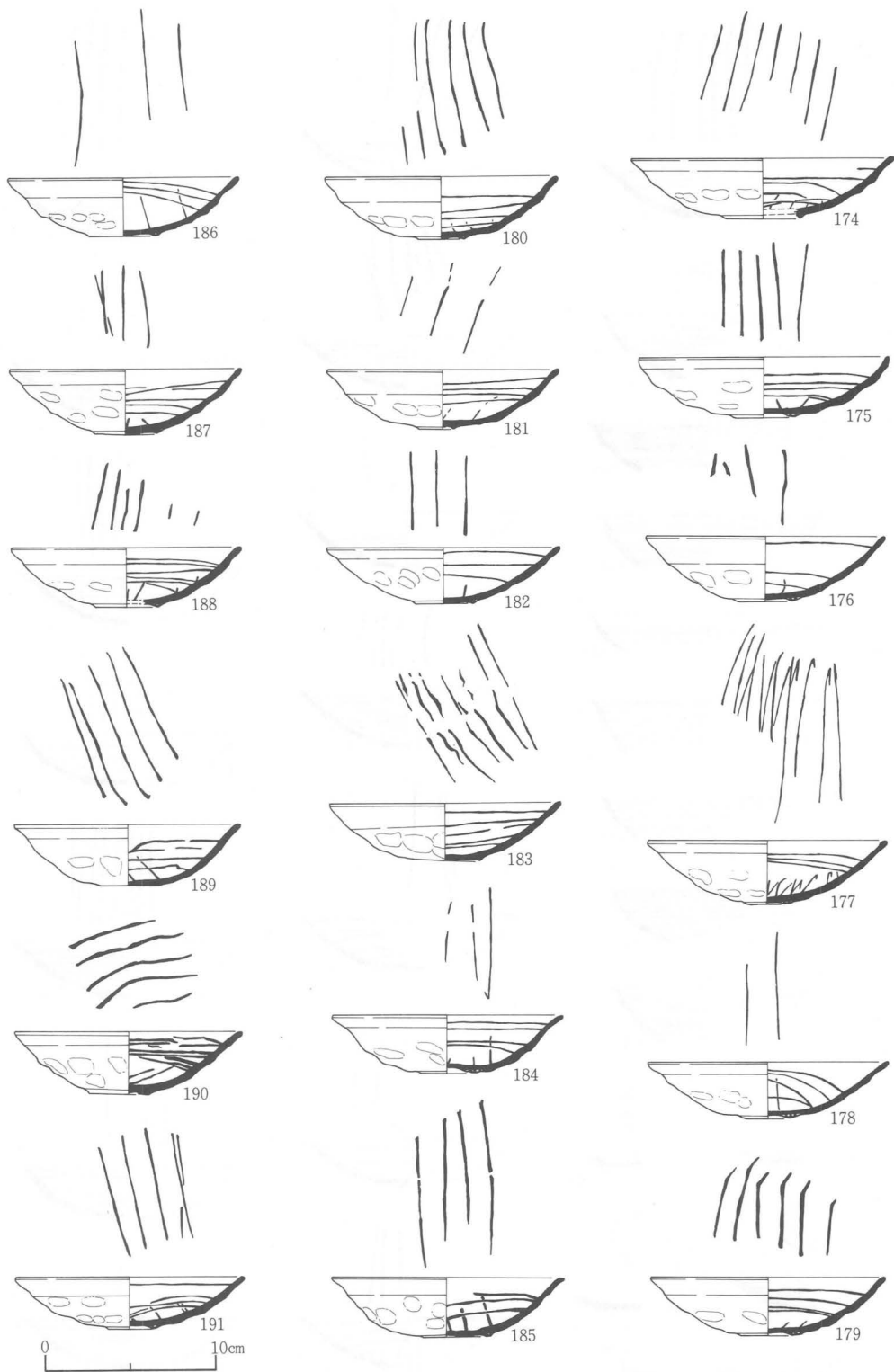
瓦器 椀(174~236)、羽釜(315・316・321~337)、鉢(351・352)の器種がある。特に椀の出土量が多い。椀はB₄型式のもの(174~206)、A₅型式のもの(207~218)、B₅型式のもの(219~233)、B₆型式のもの(234~236)がある。羽釜はI型式のもの(315)、K型式のもの(316)、L型式のもの(321~337)がある。鉢は丸底の底部より体部が逆八字形に伸びる。口縁端部が面をもつもの(351)と尖り気味に終るもの(352)がある。

土師器 皿(237~309)と羽釜(310~314・317~320)の器種がある。特に皿の出土量が多い。皿は小皿、中皿、大皿がある。小皿はB₁型式のもの(237~259)、B₂型式のもの(260~287)、B₄型式のもの(288~292)、B₅型式のもの(293)がある。中皿はB₁型式のもの(294)とB₂型式のもの(295~297)がある。大皿はB₁型式のもの(298~300)、B₂型式のもの(301~303)、B₄型式のもの(304~307)、B₃型式のもの(308・309)がある。羽釜はF型式のもの(310)、G型式のもの(311・312)、H型式のもの(313)、D型式のもの(314・318)、E型式のもの(317)、A型式のもの(319・320)がある。

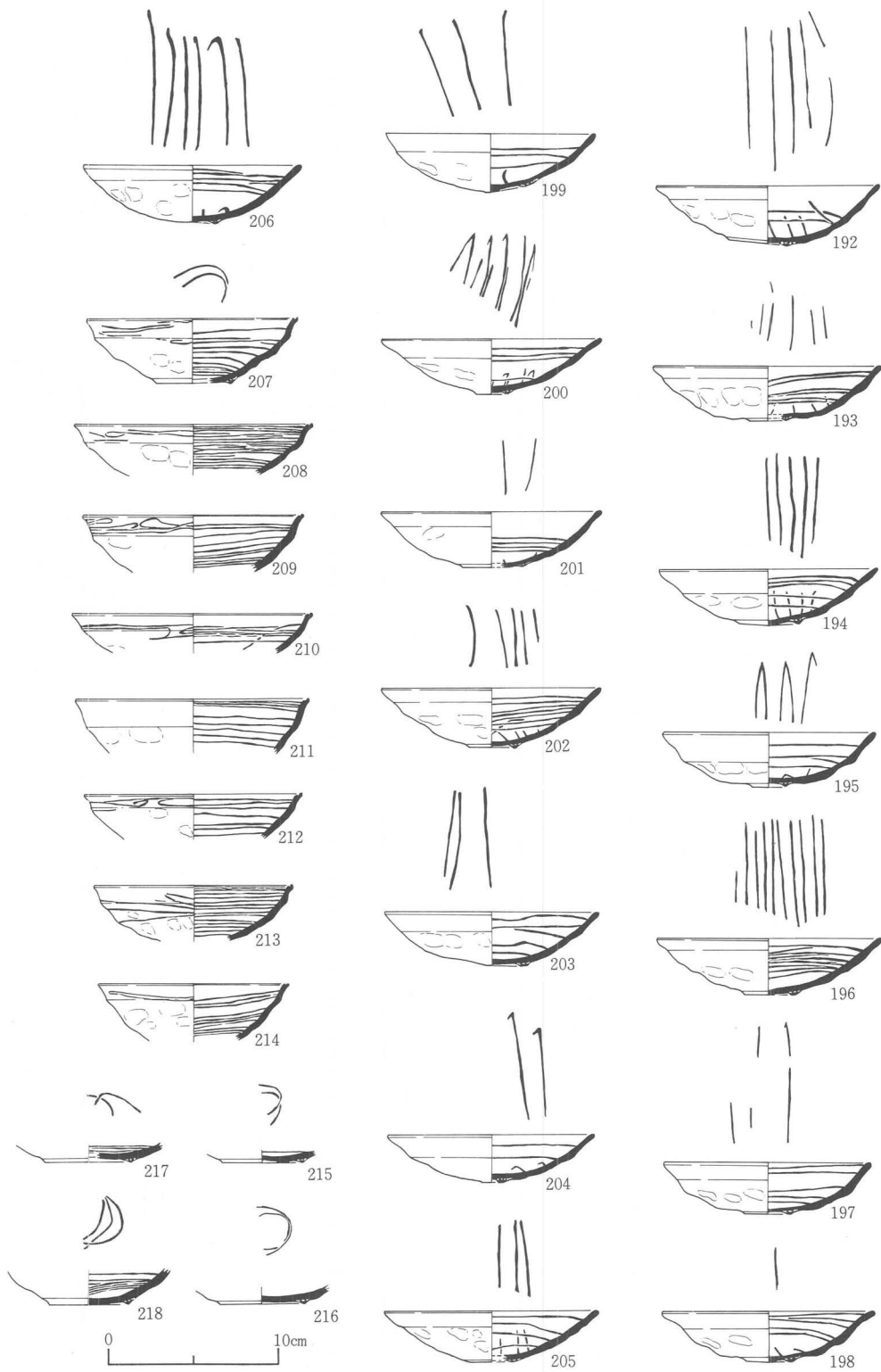
須恵器 捏鉢(338~349)がある。捏鉢はD型式のもの(338~344)、C型式のもの(345~347)、底部のみ残存するもの(348・349)がある。東播系の土器である。



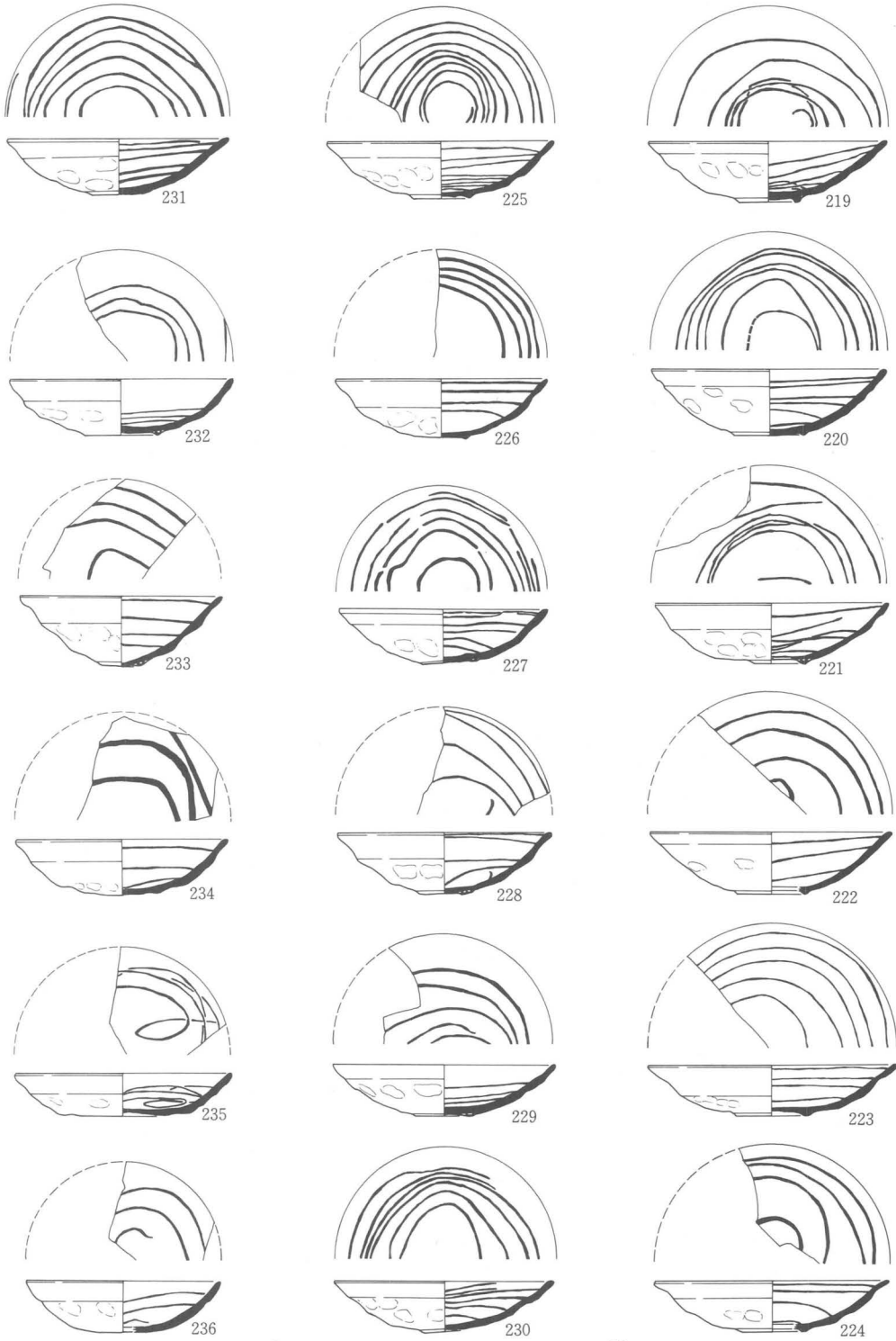
第47図 No.3 トレンチ出土土器実測図



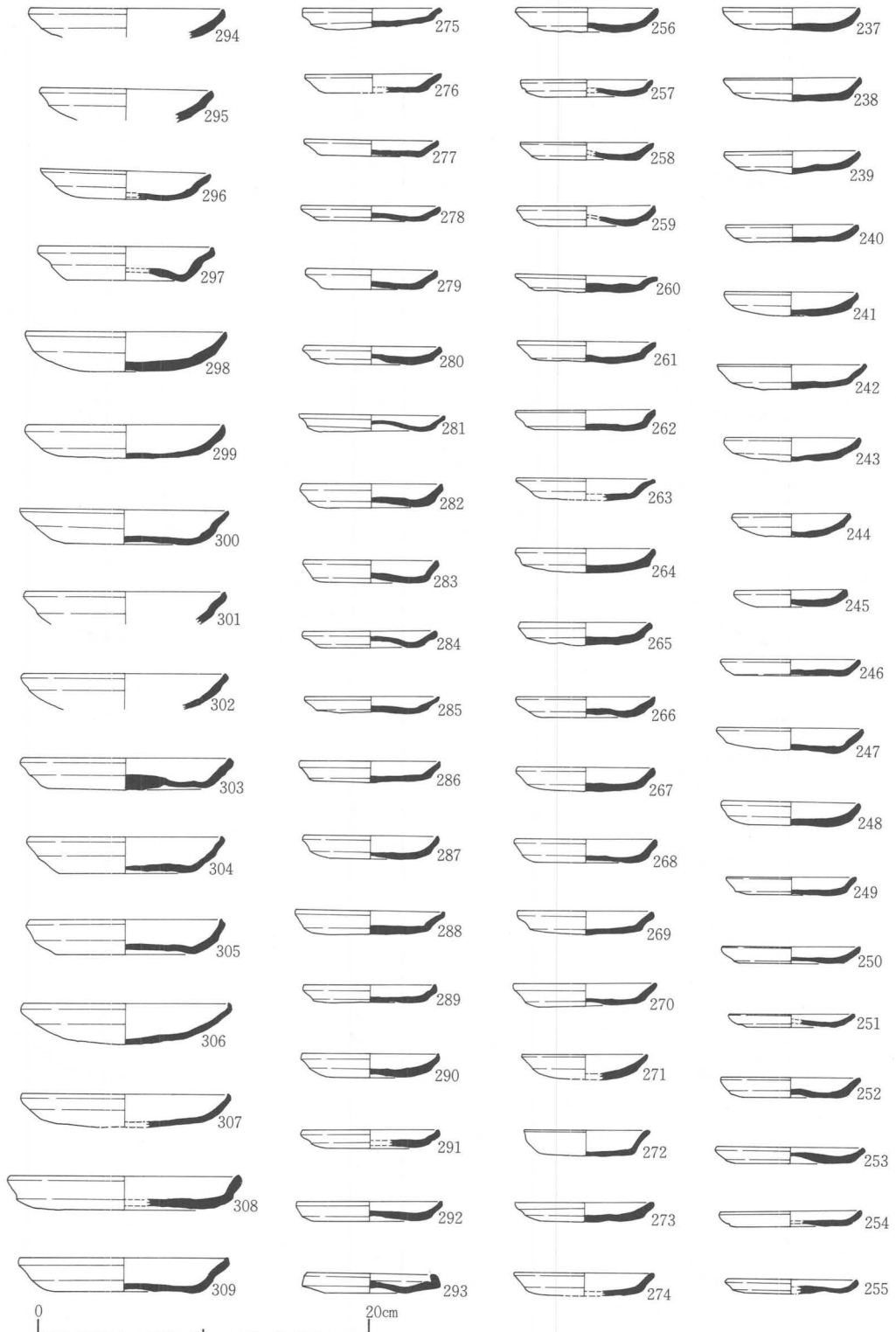
第48図 No.4 トレンチSK17出土土器実測図



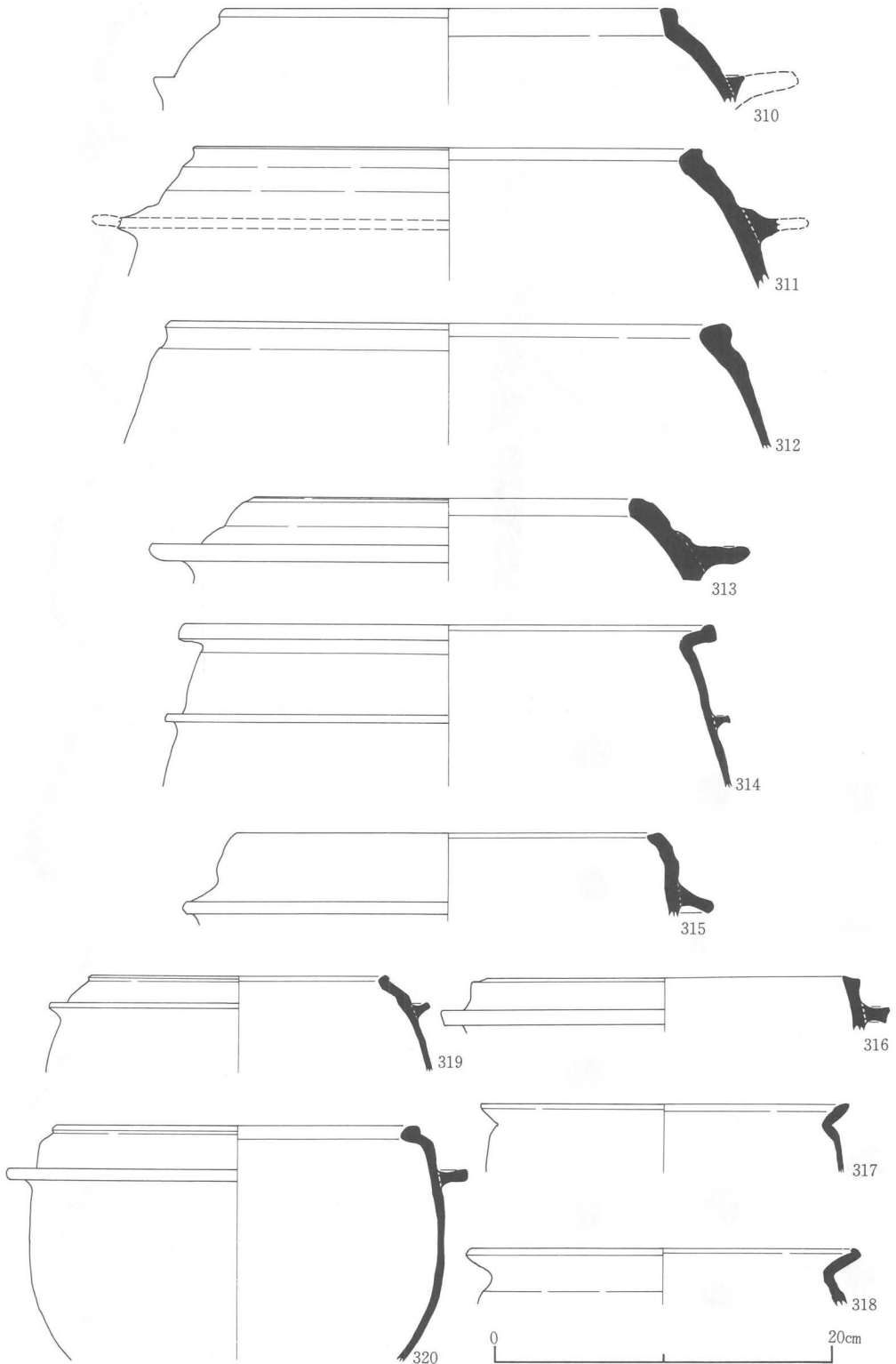
第49図 No.4 トレンチSK17出土土器実測図



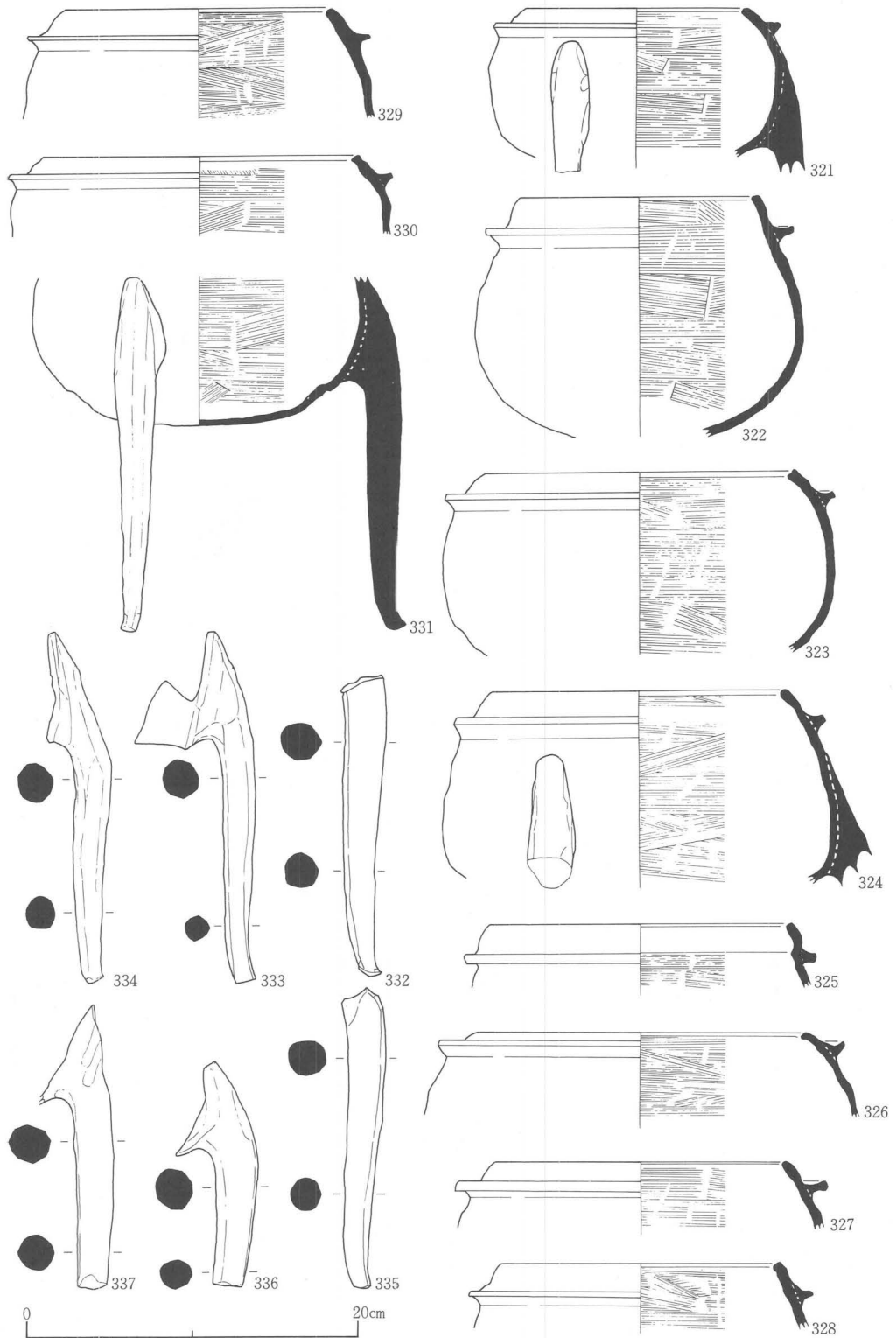
第50図 No.4 トレンチSK17出土土器実測図



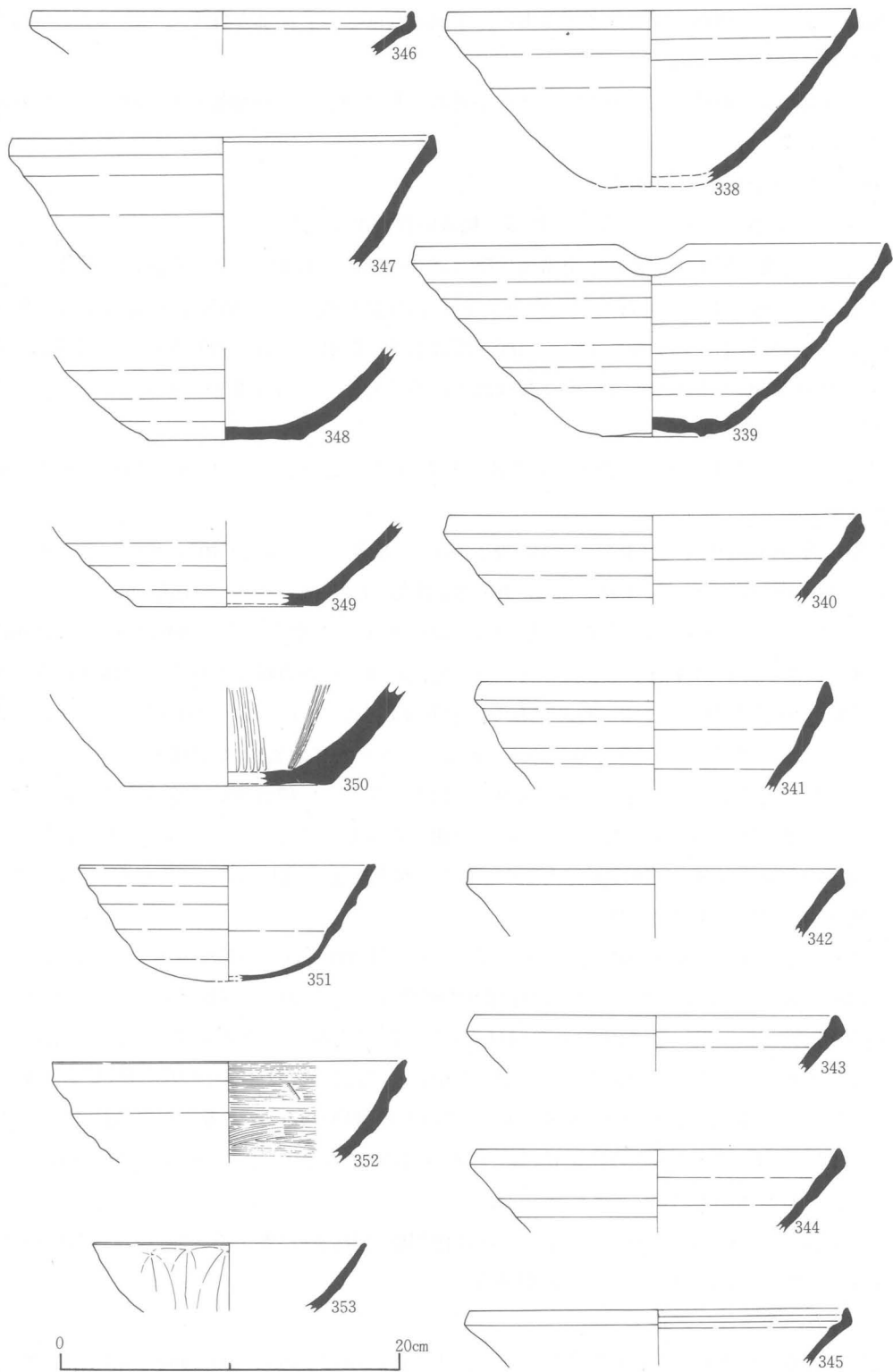
第51図 No.4 トレンチSK17出土土器実測図



第52図 No.4 トレンチSK17出土土器実測図



第53図 No.4 トレンチSK17出土土器実測図



第54図 No.4 トレンチSK17出土土器実測図

陶器 備前焼の摺鉢(350)の底部がある。平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。体部内面に5条のおろし目を施す。

輸入磁器 青磁の椀(353)がある。体部が逆八字形に伸び、口縁端部が丸く終る。体部外面に蓮弁文を描く。

SK16出土土器(第55～59図)

SK16では陶器、須恵器、瓦器、土師器、輸入磁器が出土した。

陶器 常滑焼と備前焼がある。常滑焼は甕(354～356)がある。平底の底部のみが残るもの(354)、球形の張りのある体部が残るもの(356)、口縁部が残るもの(355)がある。355は内傾する頸部より、口縁部が強く外反する。口縁端部は上下へ拡張し、幅広の面をもつ。備前焼は壺(357)と摺鉢(358)の器種がある。壺は口縁部がゆるく外反し、口縁端部が玉縁状を呈する。摺鉢はF型式のものである。

須恵器 捏鉢(359～362)がある。D型式のもの(359)とE型式のもの(360～362)がある。東播系である。

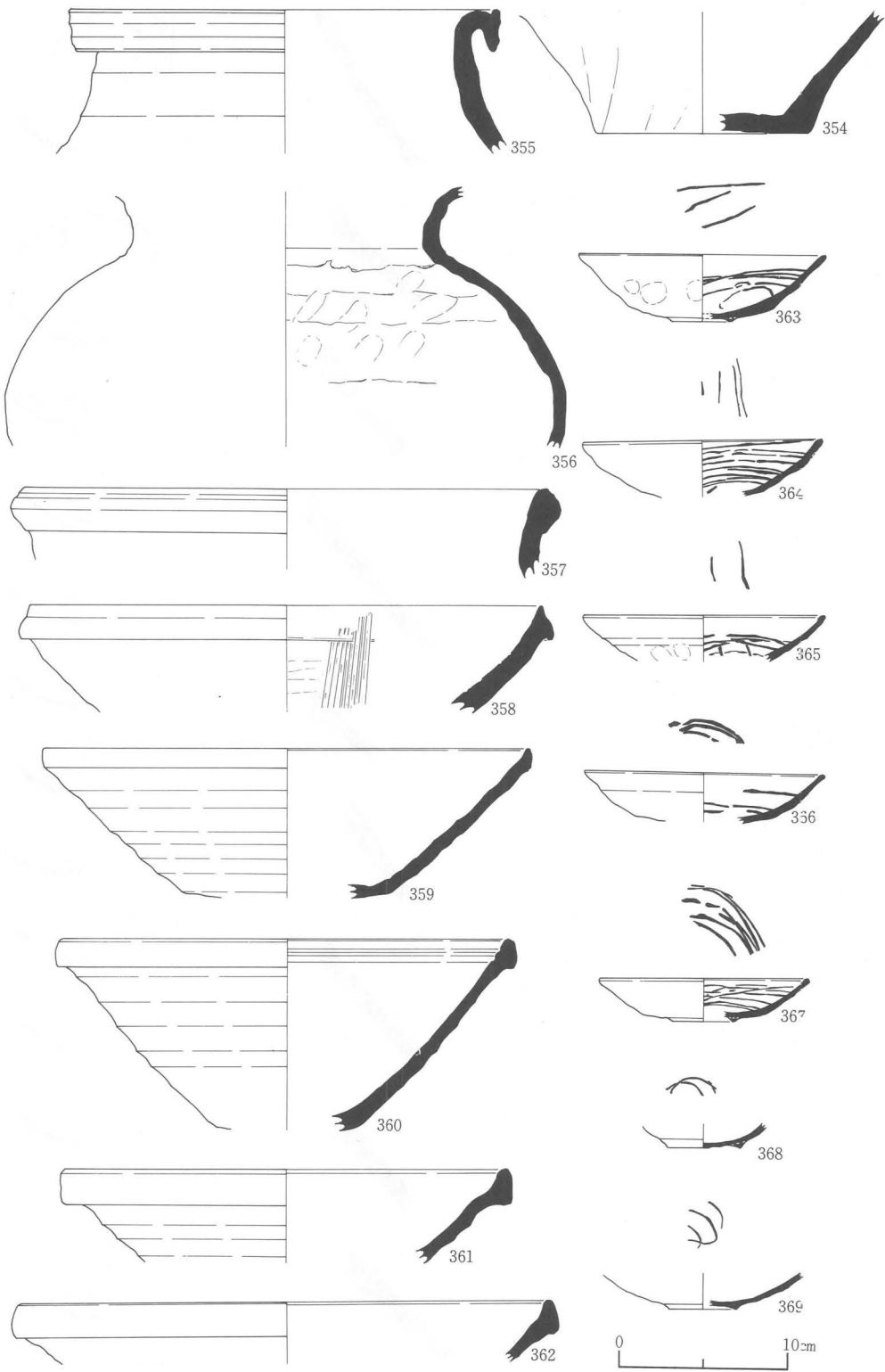
瓦器 椀(363～380)、皿(381)、摺鉢(382～390)、羽釜(391～402・405・406)、ミニチュア羽釜(404)、甕(416～420)の器種がある。椀はB₄型式のもの(363～365)、B₅型式のもの(366・367)、A型式のもの(368・369)、B₆型式のもの(370～379)、B₇型式のもの(380)がある。皿(381)は丸底の底部より、口縁部がゆるく外反する。見込みは平行線の暗文を施す。摺鉢はB型式のもの(382)とA型式のもの(383～390)がある。羽釜はI型式のもの(391～394・405・406)、J型式のもの(395)、L型式のもの(396～402)がある。ミニチュア羽釜(404)は張りの少ない体部より、口縁部が内傾する。口縁部外面にはゆるい段が1条つく。鏝は短い。甕は張りのある体部より、口縁部が強く外反するもの(416～420)と張りの少ない体部より、口縁部が短く外反するもの(419)がある。416は口縁端部を上下へ拡張し、体部外面に綾杉状のタタキを施す。417・418は体部外面に並行のタタキを施す。

土師器 ミニチュア羽釜(403)、羽釜(407～415)、皿(421～485)の器種がある。ミニチュア羽釜(403)は張りの少ない体部より、口縁部が内傾する。鏝は短い。羽釜はA型式のもの(408)、C型式のもの(409・410)、E型式のもの(411～415)、G型式のもの(407)がある。皿は小皿、中皿、大皿がある。小皿はB₁型式のもの(421～426)、B₂型式のもの(427～431)、B₃型式のもの(432～438)、C₁型式のもの(439～448)、C₂型式のもの(449～471)がある。中皿はB₂型式のもの(472・473)、B₄型式のもの(474)、C₁型式のもの(475・476)、C₂型式のもの(477～484)がある。大皿はB₁型式のもの(485)がある。

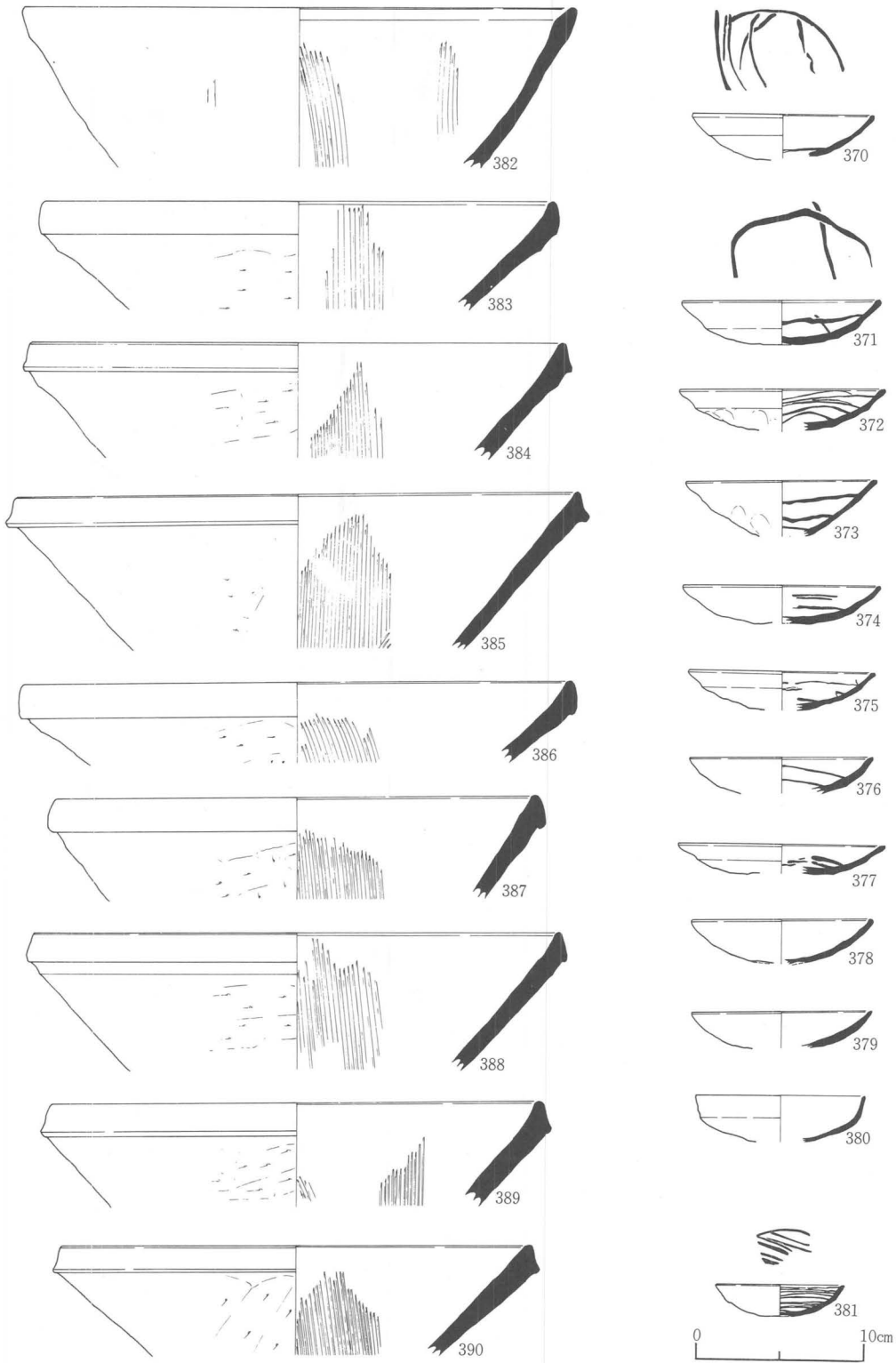
輸入磁器 青磁椀(486～488)がある。486は体部が内弯気味に外上方へ伸びる。体部外面には蓮弁文を描く。487・488は底部のみが残る。

自然流路出土土器(第60図)

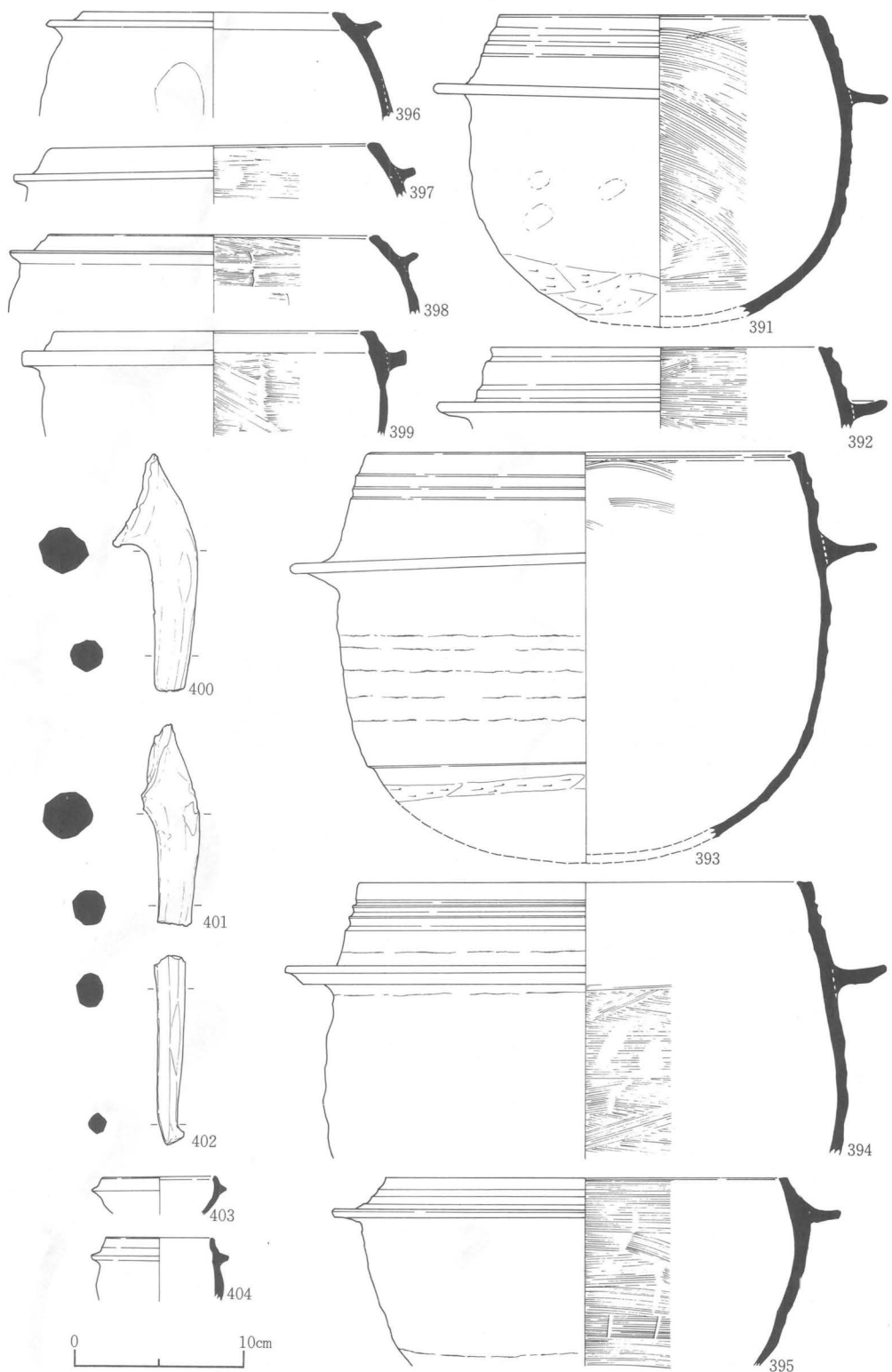
瓦器と土師器が出土した。瓦器は椀があり、B₄型式のもの(489・490・492・495)とB₅型式のもの(491・493・494)がある。土師器は小皿と中皿がある。小皿はB₂型式のもの(496～498)



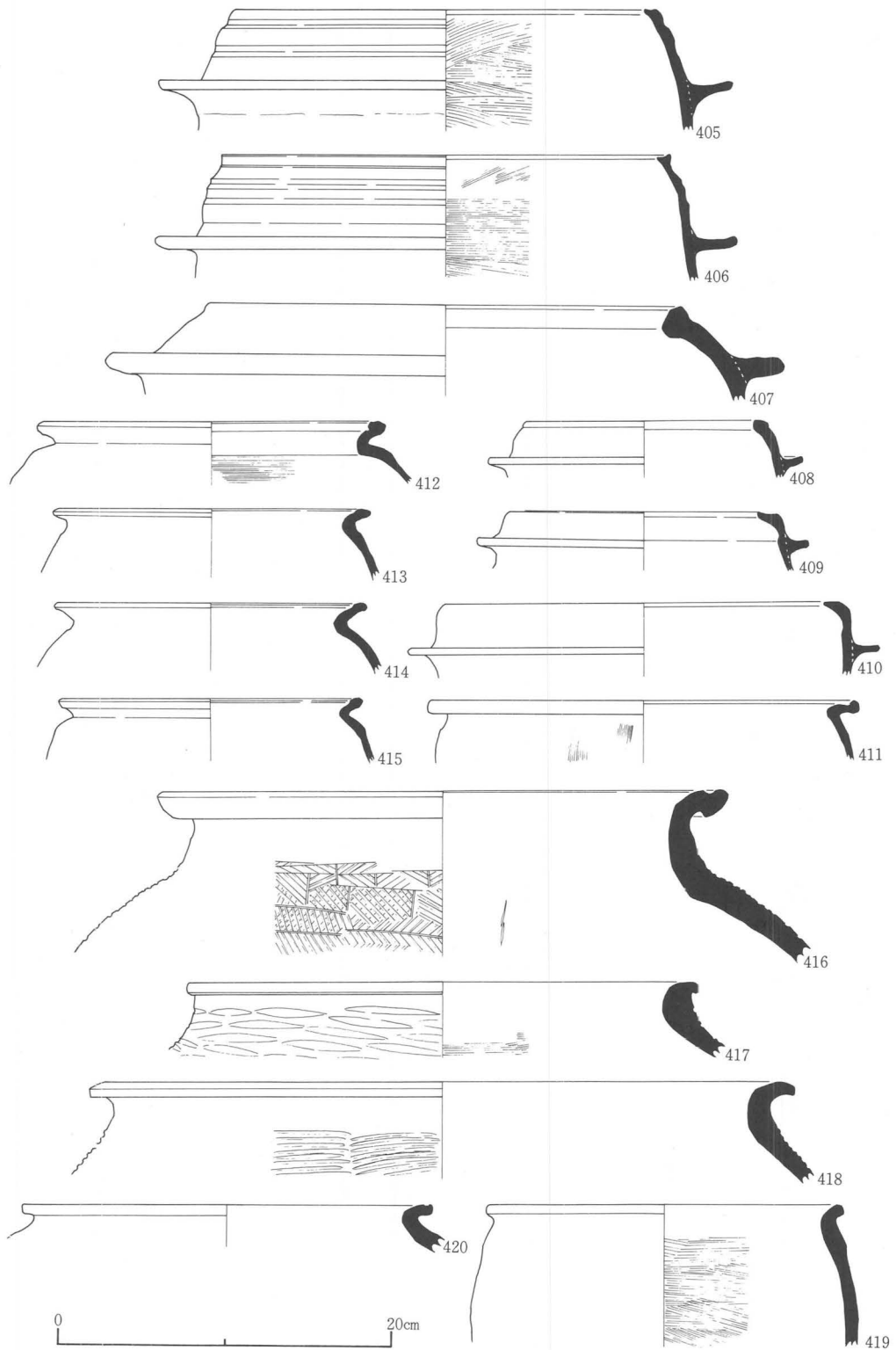
第55図 No.4 トレンチSK16出土土器実測図



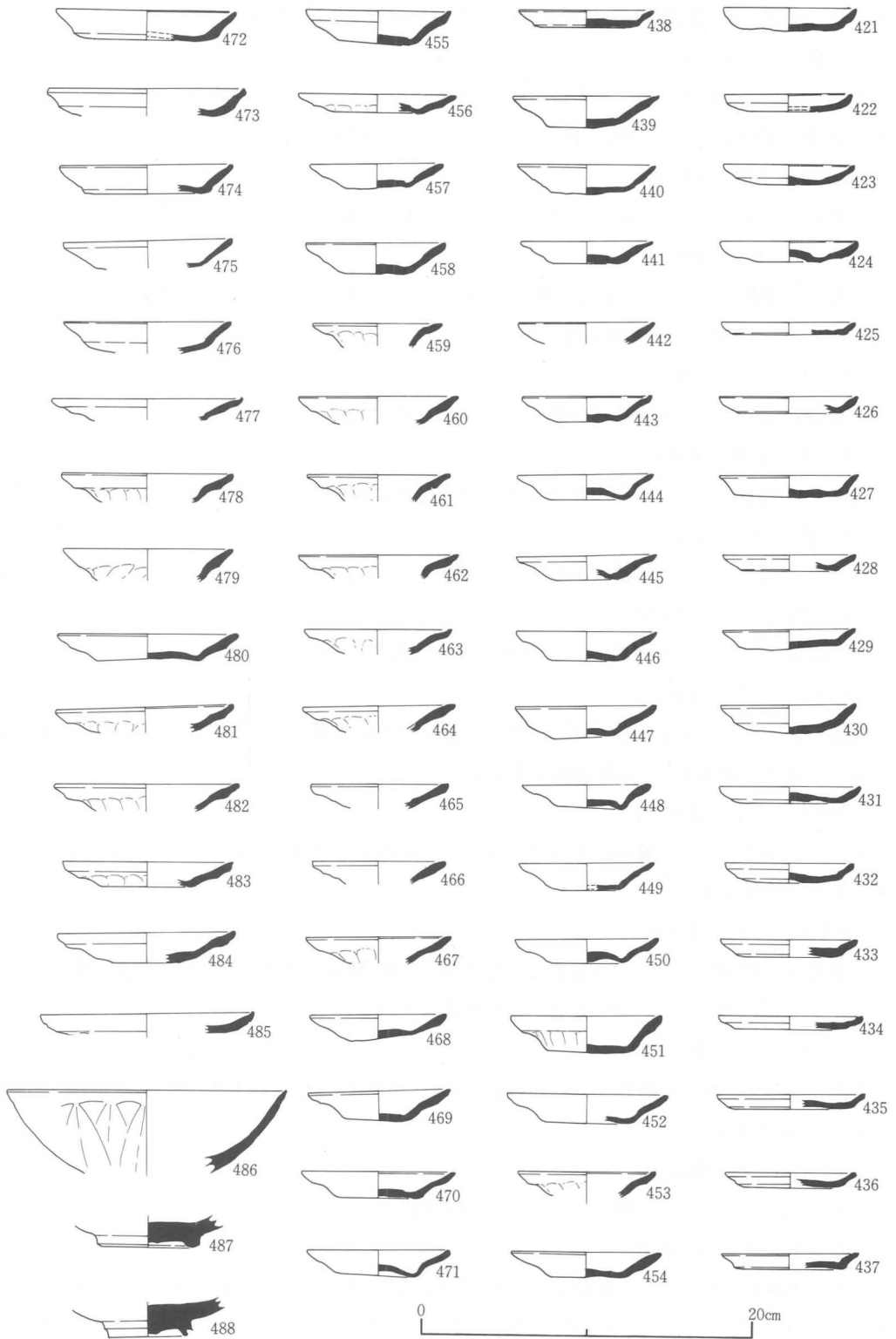
第56図 No.4 トレンチSK16出土土器実測図



第57図 No.4 トレンチSK16出土土器実測図



第58図 No.4 トレンチSK16出土土器実測図



第59図 No.4 トレンチSK16出土土器実測図

がある。中皿はB₁型式のもの(499)とB₂型式のもの(500・501)がある。

土壇墓出土土器(第60図)

瓦器と土師器が出土した。瓦器は椀(502)があり、B₃型式のものである。土師器は小皿があり、B₁型式のもの(503~505)とB₂型式のもの(506・507)がある。

SK13出土土器(第60図)

土師器が出土した。土師器は小皿(508~513)があり、B₁型式のものである。

SK18出土土器(第60図)

瓦器と土師器が出土した。瓦器は羽釜(514)があり、L型式のものである。土師器は小皿(515・516)があり、B₁型式のものである。

SK2出土土器(第60図)

土師器が出土した。土師器は小皿(517)があり、C₁型式のものである。

SK4出土土器(第60図)

土師器が出土した。土師器は中皿(518)があり、B₁型式のものである。

SP16出土土器(第60図)

土師器が出土した。土師器は小皿(519)があり、C₁型式のものである。

SP133出土土器(第60図)

土師器が出土した。土師器は小皿(520)があり、B₂型式のものである。

SP23出土土器(第60図)

瓦器が出土した。瓦器は壺(521)であり、張りのある体部より、口縁部が短く外反する。体部外面に直線と連続するU字状の暗文を施す。

SP98出土土器(第60図)

輸入磁器が出土した。輸入磁器は青磁椀(522)である。口縁部を欠損するが、高台は高く、断面形が方形を呈する。

SD1出土土器(第60図)

土師器と瓦器が出土した。土師器は小皿であり、B₁型式のもの(523)とC₁型式のもの(524)がある。瓦器は摺鉢(525・526)があり、B型式のものである。

SD2出土土器(第60図)

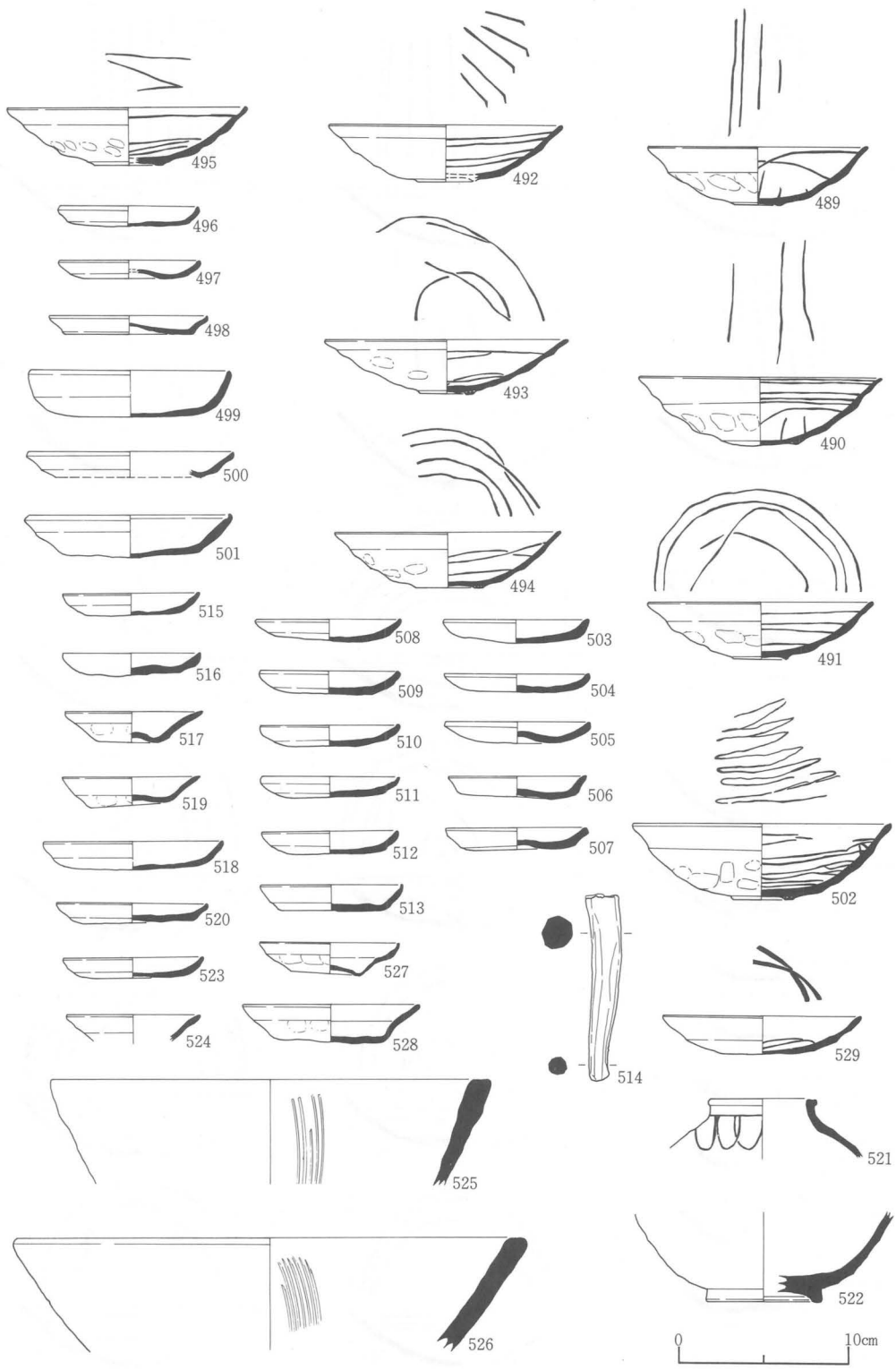
土師器が出土した。土師器は小皿と中皿があり、小皿はC₂型式のもの(527)、中皿はC₁型式のもの(528)である。

SD4出土土器(第60図)

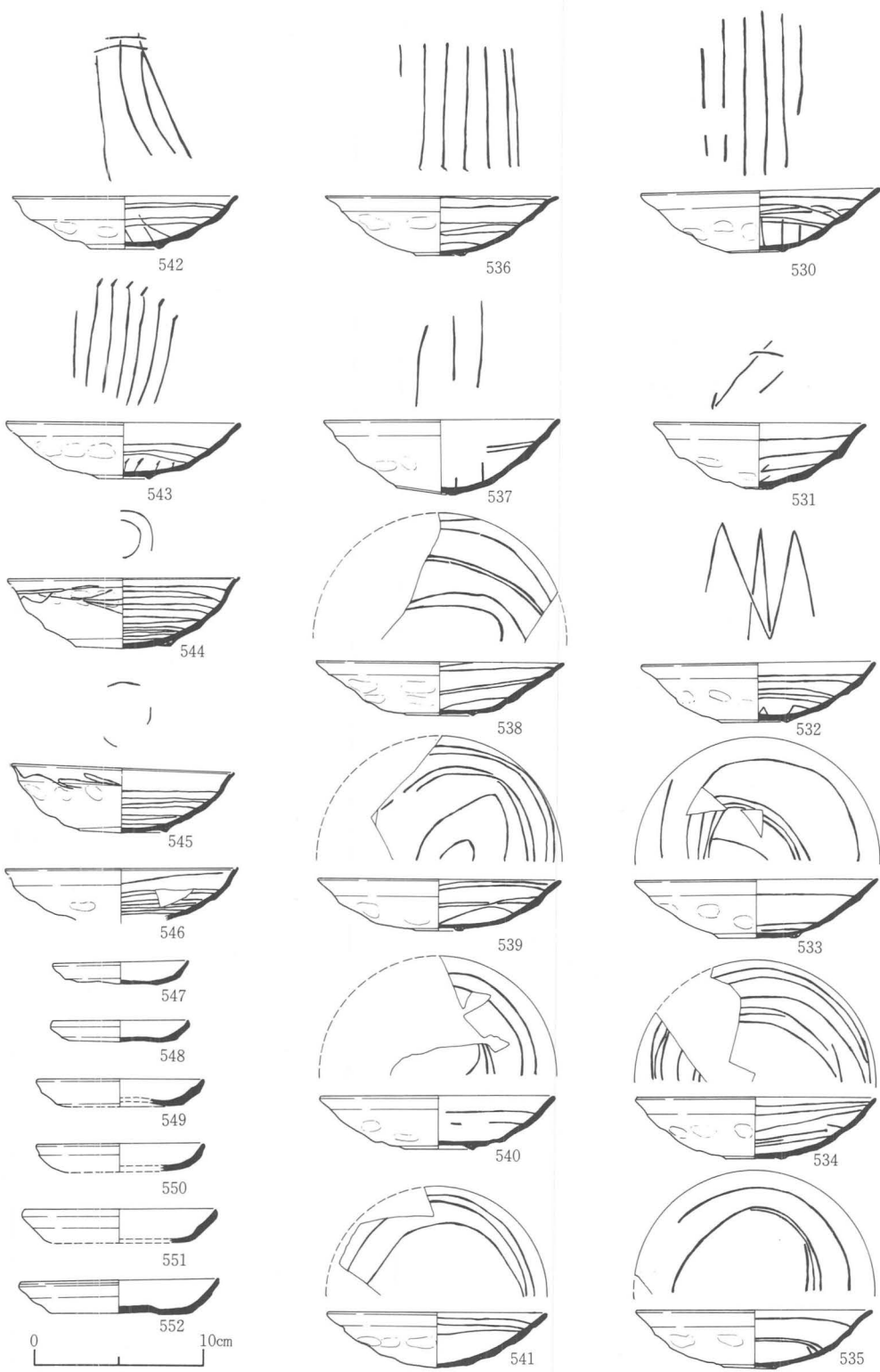
瓦器が出土した。瓦器は椀(529)があり、B₆型式のものである。

土器溜り出土土器(第61図)

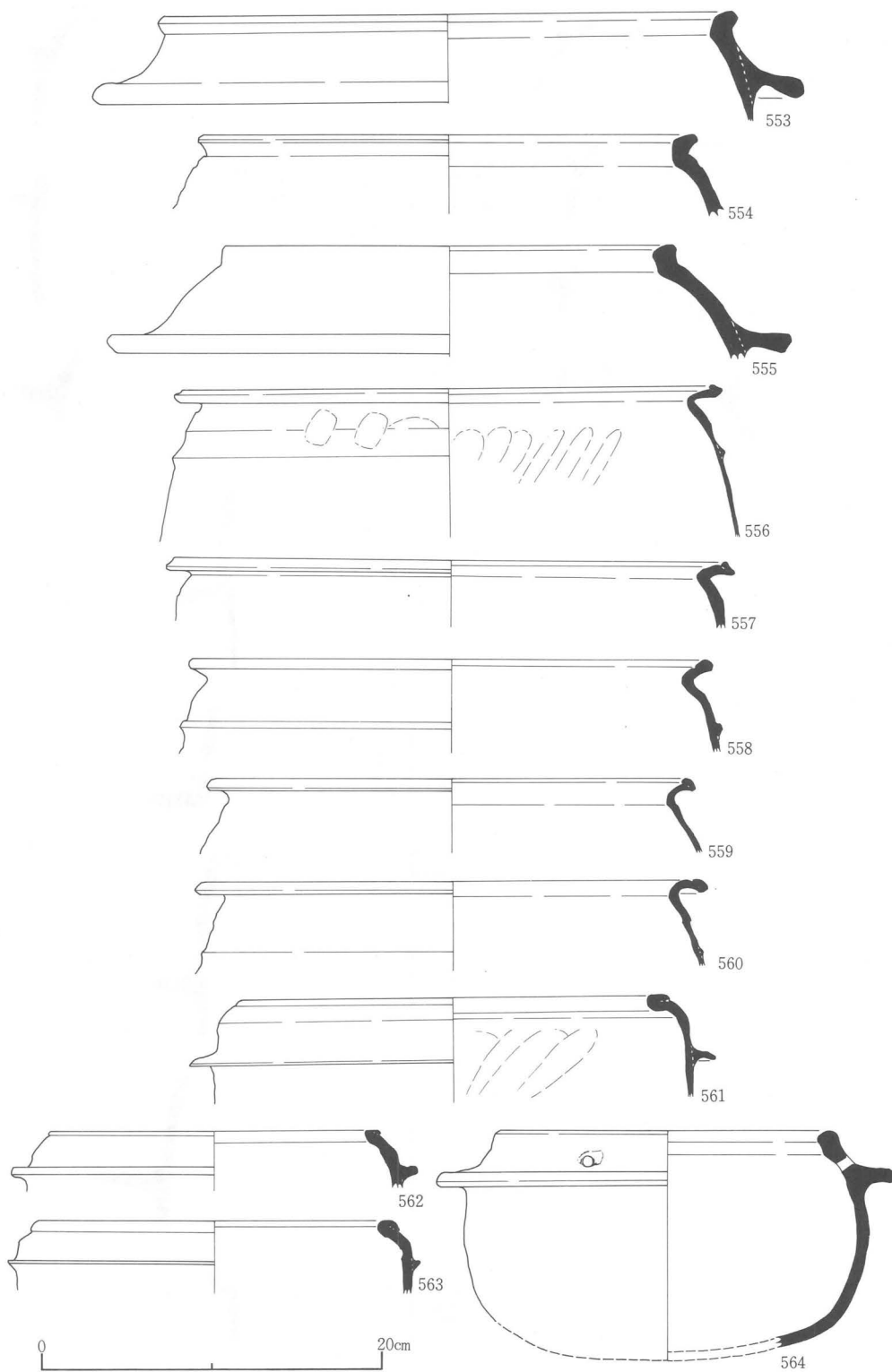
瓦器と土師器が出土した。瓦器は椀があり、B₄型式のもの(530~532・536・537・542・543)、B₅型式のもの(533~535・538~541)、A₅型式のもの(544~546)がある。土師器は小皿と中皿がある。小皿はB₂型式のもの(547~550)であり、中皿はB₁型式のもの(551・552)である。



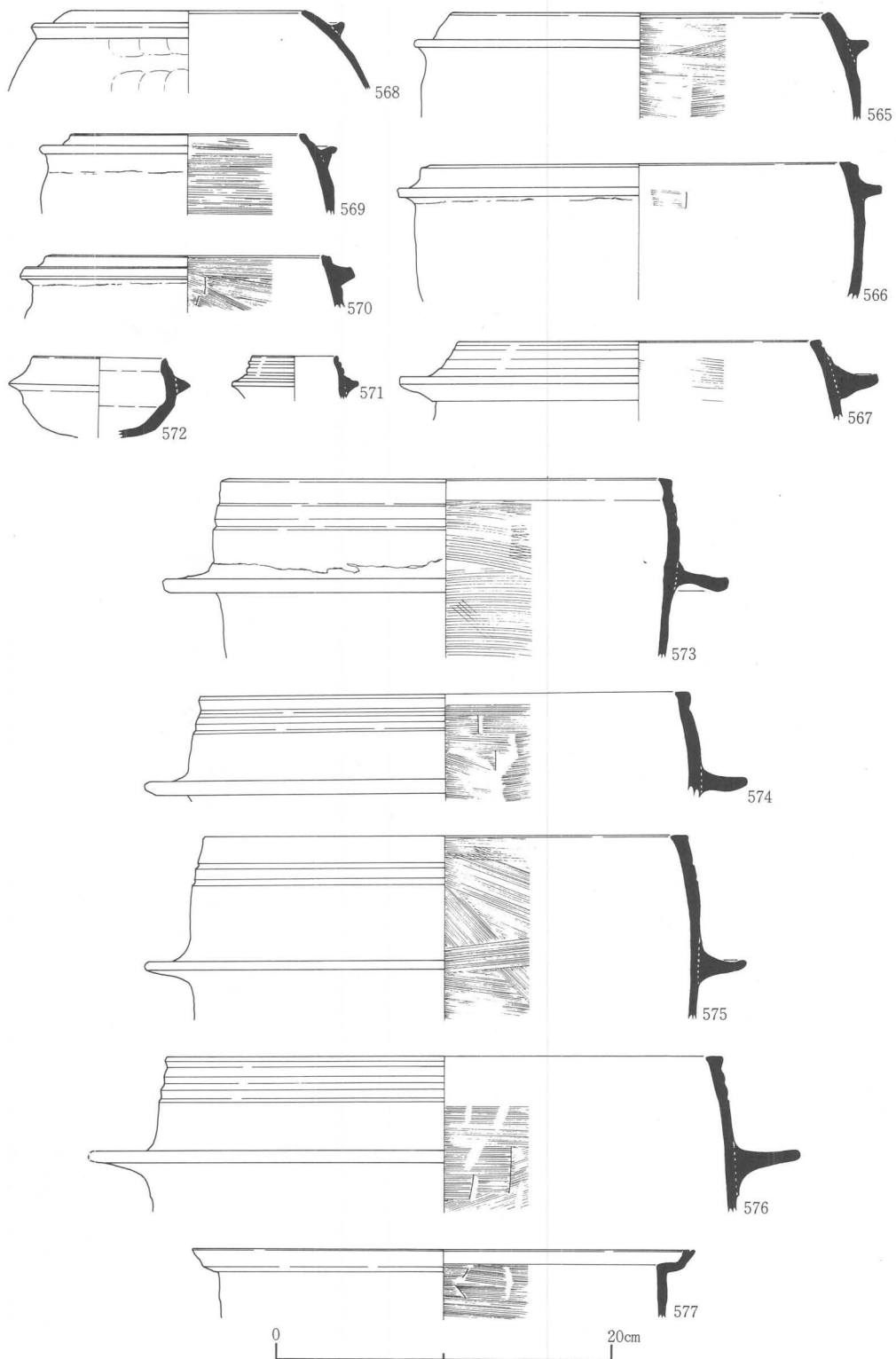
第60图 自然流路・土埴墓・土埴・溝・柱穴出土土器実測図



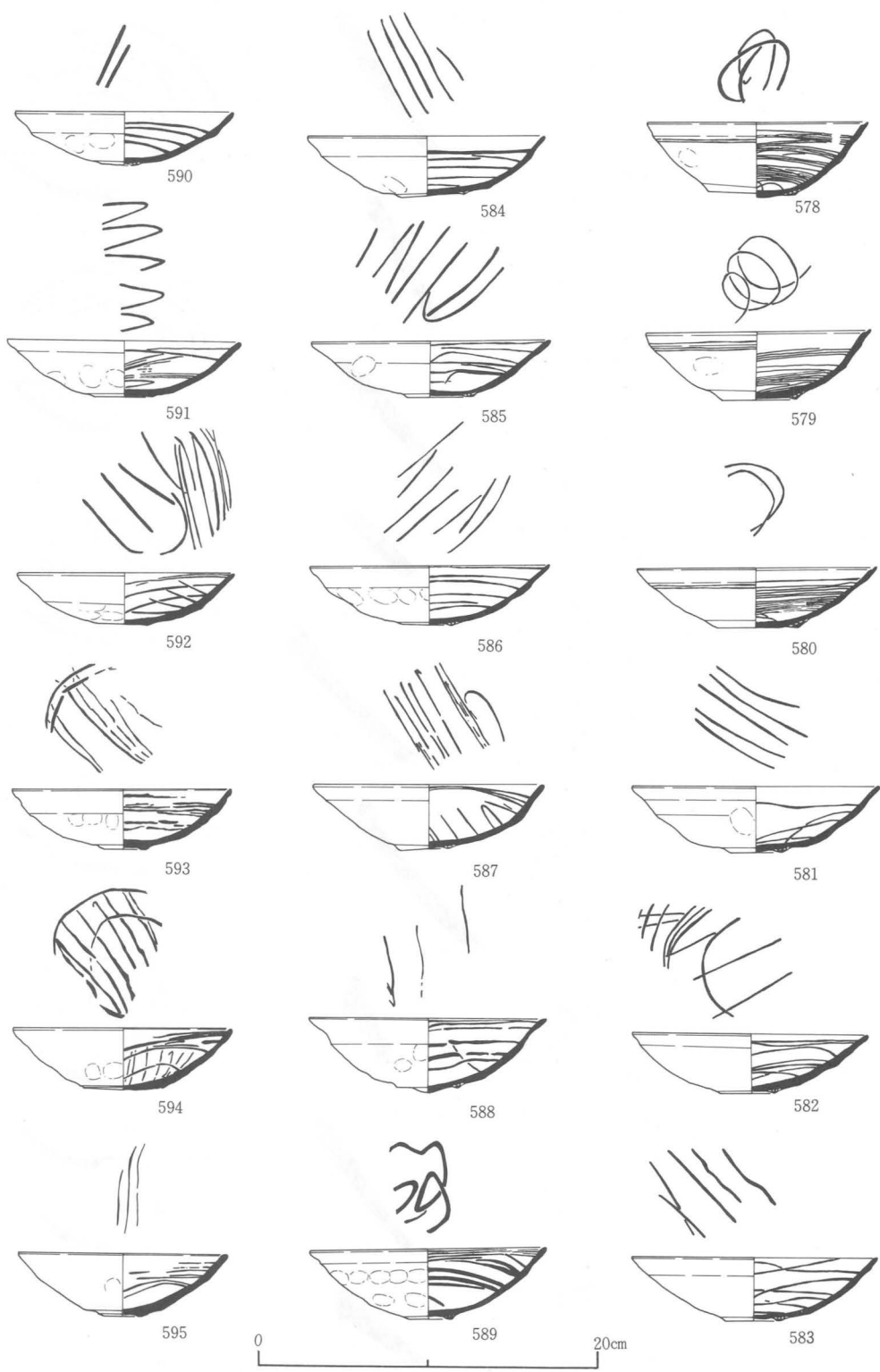
第61図 No.4 トレンチ土器溜り出土土器実測図



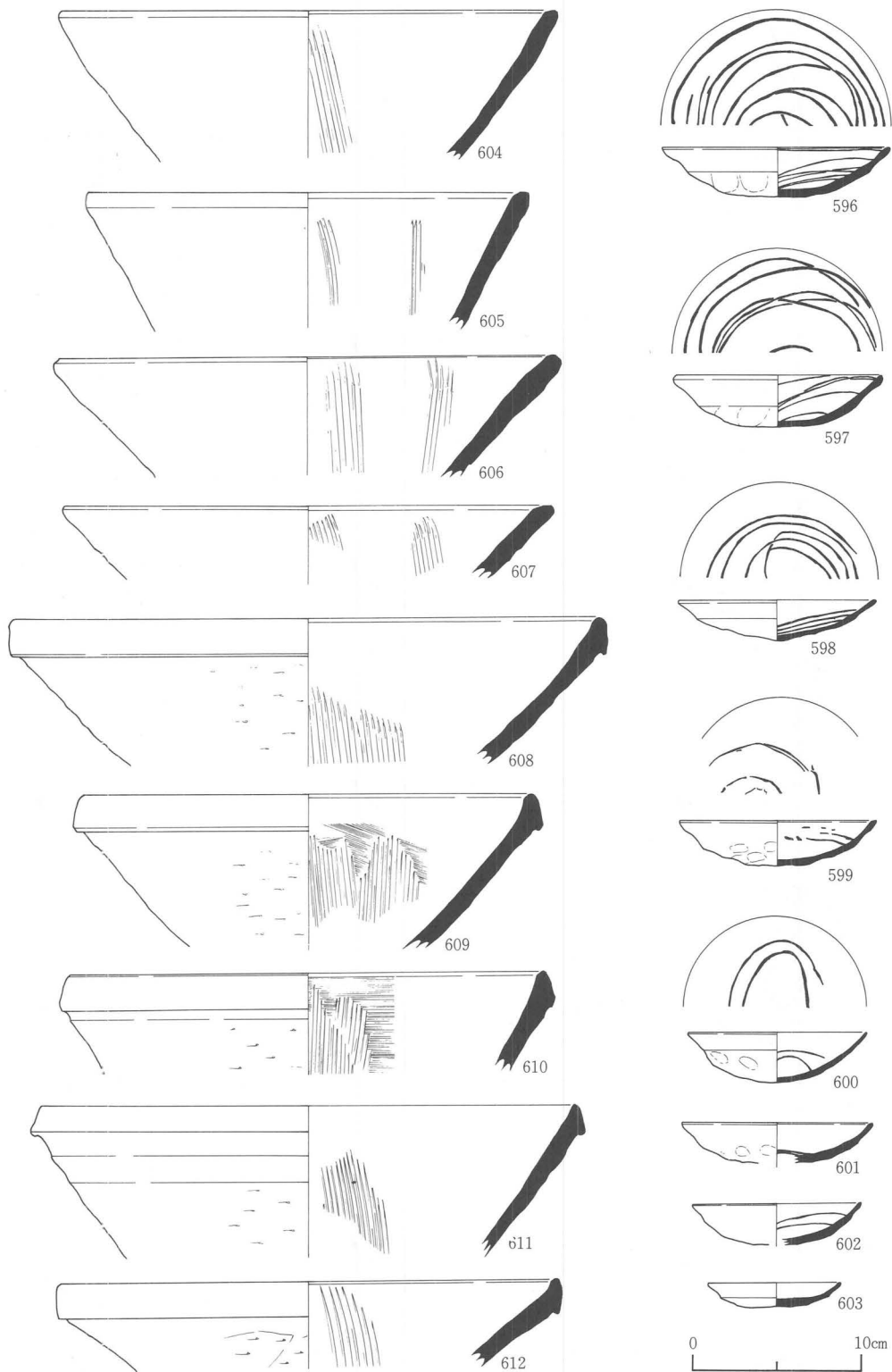
第62図 No.4 トレンチ包含層出土土器実測図



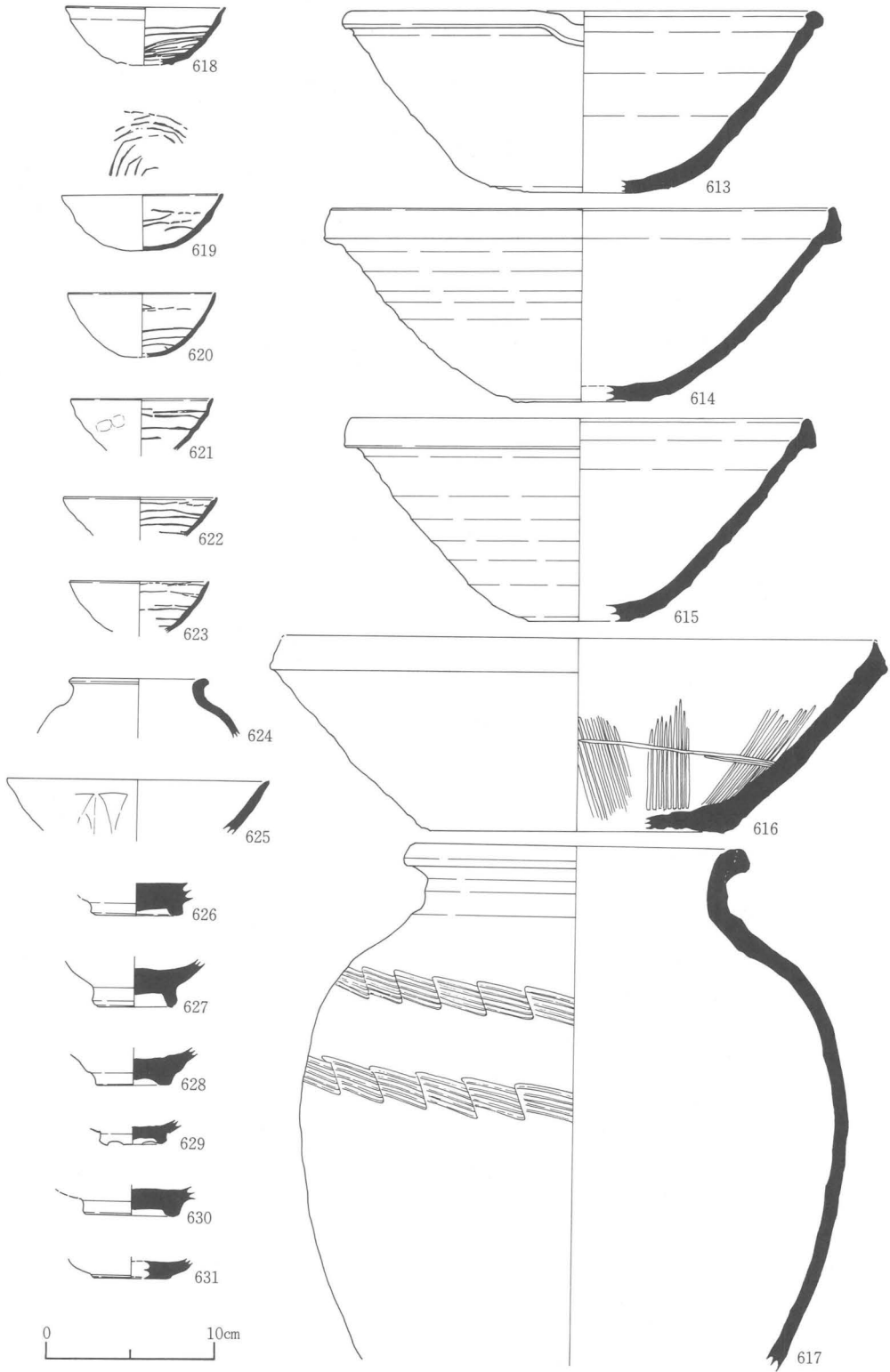
第63図 No.4 トレンチ包含層出土土器実測図



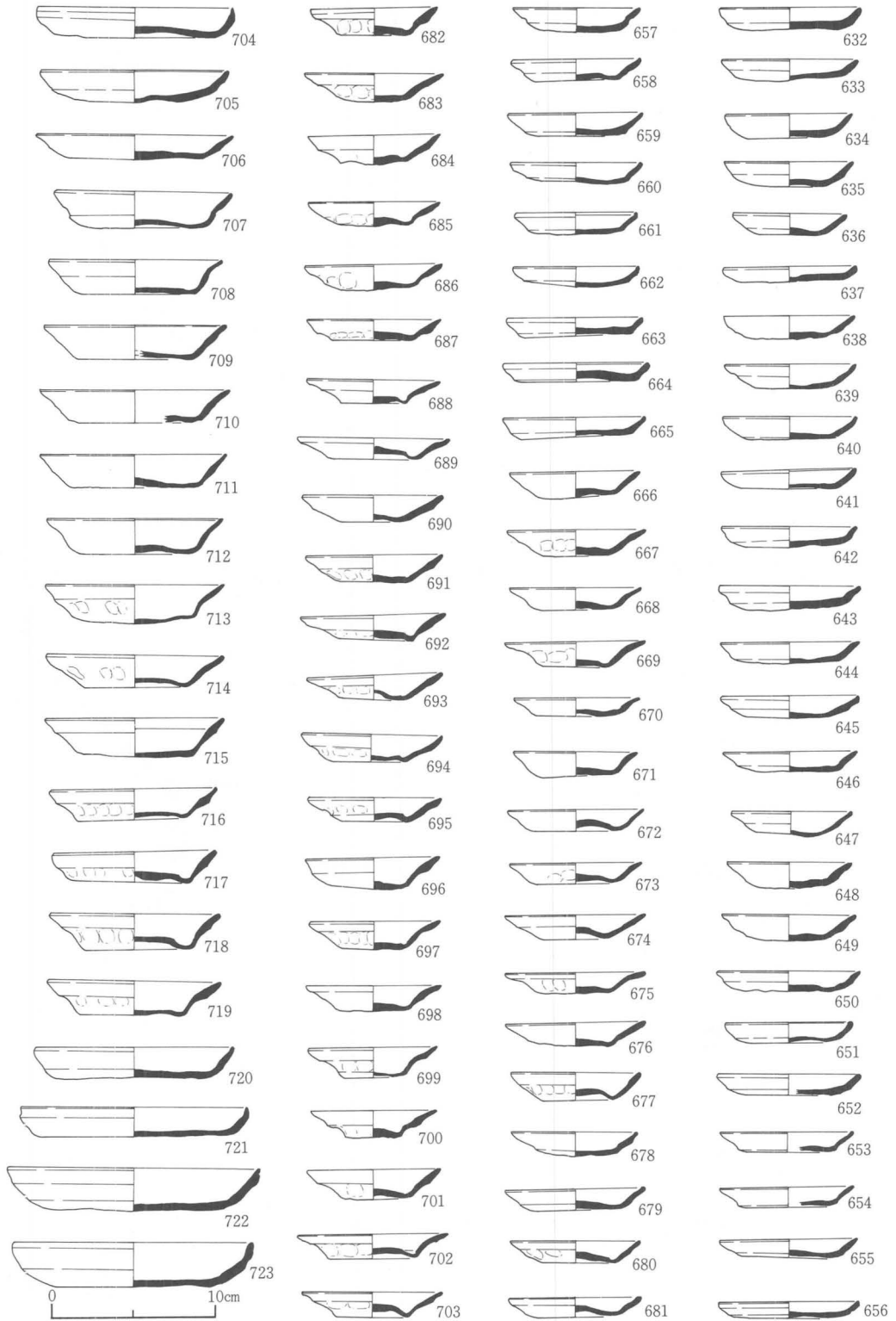
第64図 No.4 トレンチ包含層出土土器実測図



第65図 No.4 トレンチ包含層出土土器実測図



第66図 No.4 トレンチ包含層出土土器実測図



第67図 No.4 トレンチ包含層出土土器実測図

包含層出土土器 (第62～67図)

第2～4層より出土した。土師器、瓦器、須恵器、陶器、輸入磁器がある。

土師器 羽釜(553～564)、ミニチュア羽釜(572)、皿(632～723)の器種がある。羽釜はF型式のもの(553～555)、E型式のもの(556～560)、B型式のもの(561～563)、H型式のもの(564)がある。ミニチュア羽釜(572)は張りの少ない体部より、口縁部が内傾する。鏝は短く水平方向に伸び、端面が尖る。皿は小皿、中皿、大皿がある。小皿はB₁型式のもの(632～642・651・652)、B₂型式のもの(643～650)、B₃型式のもの(653～660・663～665)、B₄型式のもの(661・662)、C₁型式のもの(666～681)、C₂型式のもの(682～703)がある。中皿はB₁型式のもの(704・705)、B₂型式のもの(706)、B₃型式のもの(707・708)、C₁型式のもの(709～714)、C₂型式のもの(715～719)がある。大皿はB₁型式のもの(720～723)がある。

瓦器 羽釜(565～570・573～576)、ミニチュア羽釜(571)、鍋(577)、椀(578～602・618～623)、皿(603)、摺鉢(604～612)、壺(624)の器種がある。羽釜はL型式のもの(565・568・569)、K型式のもの(566・570)、J型式のもの(567)、I型式のもの(573～576)がある。ミニチュア羽釜(571)は口縁部が内傾し、水平方向に鏝が伸びる。口縁部外面に3条の段がつき、J型式の小形品である。鍋(577)は張りの少ない体部より、口縁部が外反した後、角度を変えて上方へ伸びる。椀はA₅型式のもの(578～580)、B₄型式のもの(581～595)、B₆型式のもの(596～602)、A₆型式のもの(618)、A₇型式のもの(619～623)がある。皿(603)は丸底に近い平底の底部より、口縁部がゆるく外反する。摺鉢はB型式のもの(604～607)とA型式のもの(608～612)がある。壺(624)は張りの少ない体部より、口縁部が強く外反する。

須恵器 捏鉢(613～615)がある。捏鉢はC型式のもの(613)とE型式のもの(614・615)がある。東播系である。

陶器 備前焼(616・617)と瀬戸焼(630・631)がある。備前焼は摺鉢(616)と壺(617)の器種がある。摺鉢はF型式のものである。壺は張りのある体部より、口縁部が短く外反する。口縁端部は外側へ肥厚し、玉縁状を呈する。肩部に楡描きの文様を2帯施す。瀬戸焼は椀(630・631)があり、底部のみが残存する。

輸入磁器 青磁椀(625～628)と白磁台付皿(629)がある。625は体部が逆八字形に伸び、口縁部がゆるく外反する。体部外面に蓮弁文を描く。626～628は底部のみ残る。白磁台付皿は高台をアーチ状に挟る。

6) No.5 トレンチ出土土器 (第68図)

No.5 トレンチでは土器の出土量は少ないが古墳時代～中世の土器がある。第3・10・12・13・16a・21層より出土した。瓦器、土師器、須恵器、黒色土器がある。

瓦器 椀(724～729・737～739)がある。椀はB₂型式のもの(724・739)、B₃型式のもの(725～727)、A₃型式のもの(728・737)、A₄型式のもの(729・738)がある。

土師器 古墳時代の甕(730)と小皿(735)がある。甕は張りのある体部より、口縁部が外折す

るものである。小皿はB₂型式のものである。

須恵器 古墳時代のものであり、杯(731・733・734)と蓋(732)の器種がある。杯は受部が水平方向に伸び、口縁部が長く伸びるもの(731)と短く外反するもの(733・734)がある。蓋(732)はやや平坦な天井部より、口縁部が内弯気味に終る。

黒色土器 椀(736)があり、内黒である。

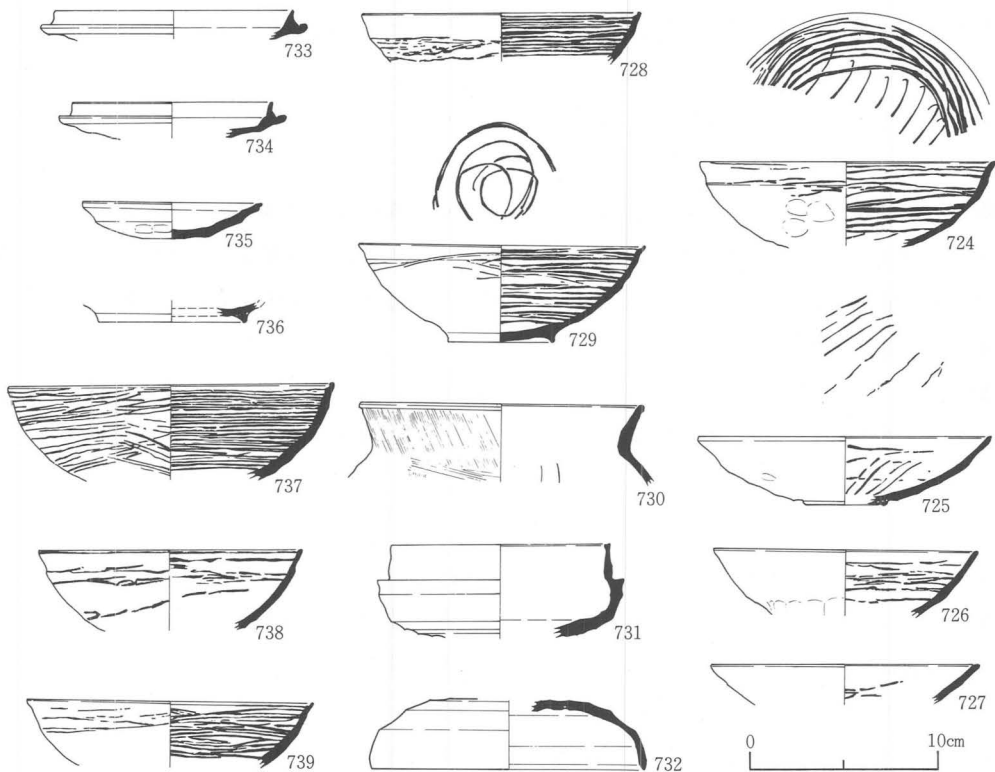
7) No.6 トレンチ出土土器 (第69図)

No.6 トレンチでは土器の出土量は少ないが縄文時代の土器と中世の瓦器、土師器がある。第11・12・13・14・15・17層より出土した。

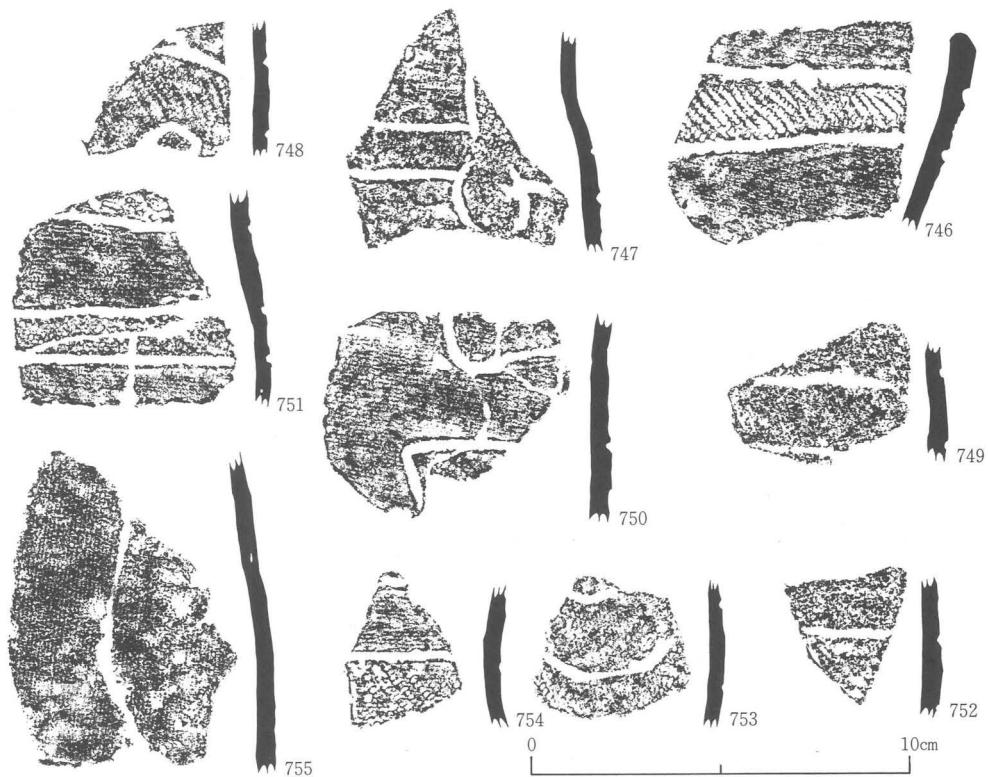
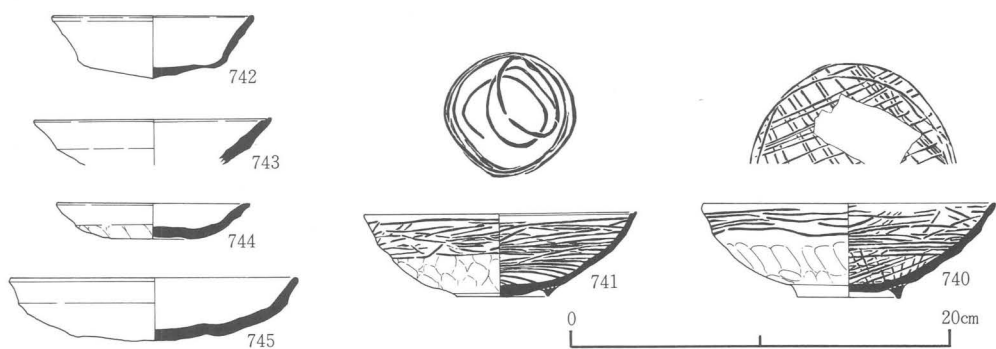
縄文土器 深鉢(746~755)がある。いずれも破片であるが同一個体と考えられる。後期中津式のものである。上半部に直線と曲線を組み合わせたヘラ描き沈線を施す。沈線間に縄文を施し、他は研磨する。

瓦器 椀(740・741)がある。椀はB₂型式のもの(740)とA₄型式のもの(741)がある。

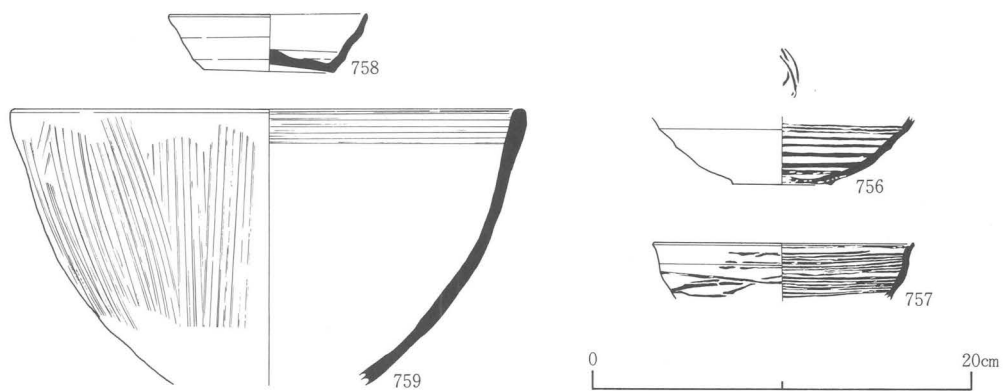
土師器 杯(742)と皿(743~745)の器種がある。杯は尖り気味の底部より、口縁部がゆるく外反するものである。皿は大皿と小皿がある。大皿はB₂型式のもの(743・745)であり、小皿はB₁型式のもの(744)である。



第68図 No.5 トレンチ出土土器実測図



第69図 No.6 トレンチ出土土器実測図



第70図 No.7 トレンチ出土土器実測図

8) No.7 トレンチ出土土器 (第70図)

No.7 トレンチでは土器の出土量は非常に少ないが弥生時代～中世のものがある。弥生土器、須恵器、瓦器がある。第6・7・10・16層より出土した。

弥生土器 鉢(759)がある。体部が外上方へ伸び、口縁部がやや上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く終る。

須恵器 杯(758)がある。上げ底の底部より、口縁部が外上方へ伸びる。口縁端部は丸く終る。

瓦器 椀がある。A₅型式のもの(756)とA₄型式のもの(757)がある。

9) No.8 トレンチ出土土器

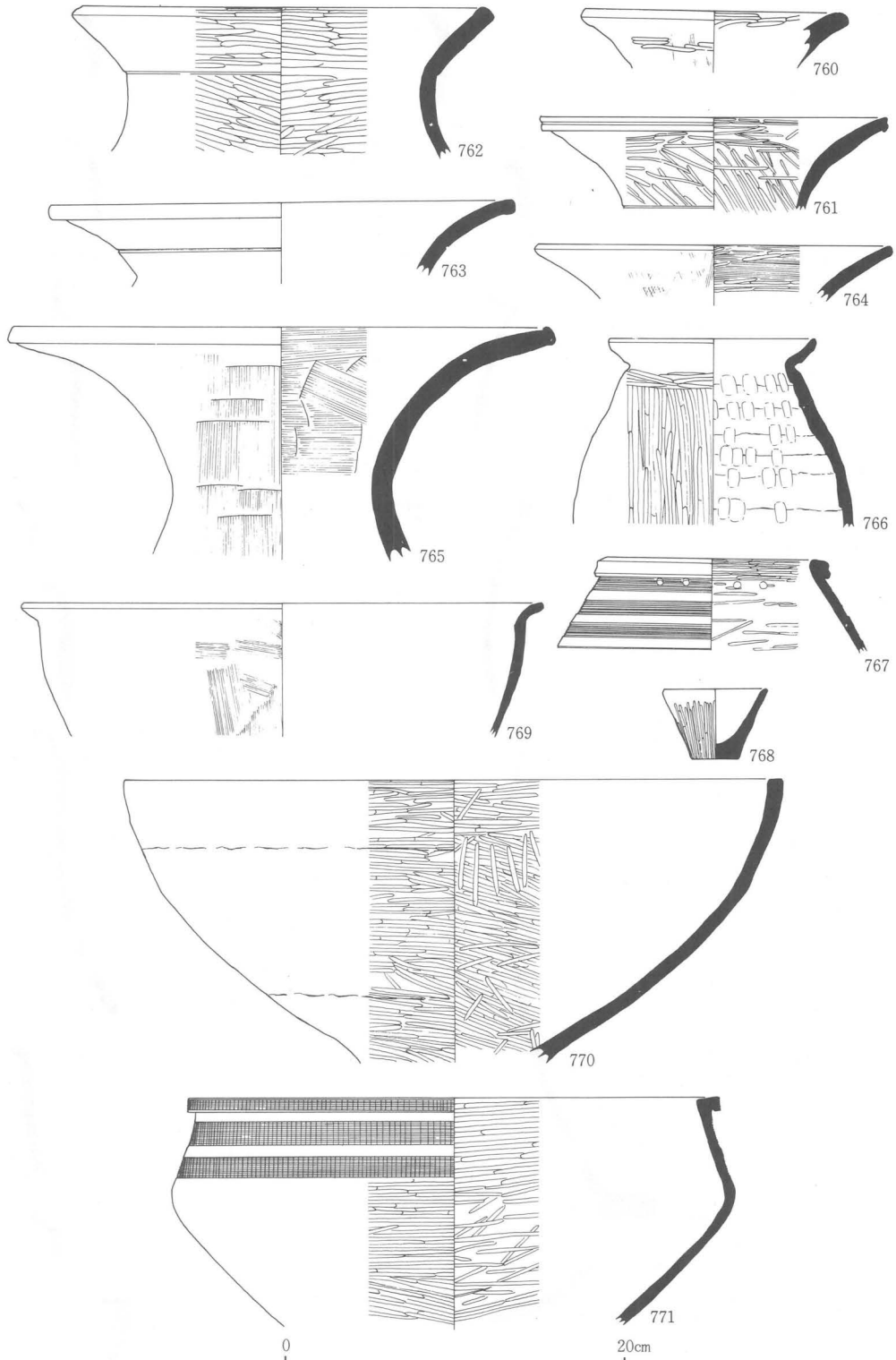
No.8 トレンチでは落ち込み、自然流路、遺物包含層より縄文時代～中世の土器が出土した。以下、遺構と遺物包含層に分けて説明を記す。

落ち込み出土土器 (第71～74図)

縄文土器と弥生土器がある。

縄文土器 長原式のものであり、浅鉢(801)と深鉢(802・803)がある。浅鉢は丸底の底部より、体部が内弯気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部に連続する山形状の突起を施す。深鉢は底部のみが残存する。尖り気味の底部より、体部が外上方へ伸びる。他に破片ではあるが凸帯にキザミ目を施すもの(806～820)もある。

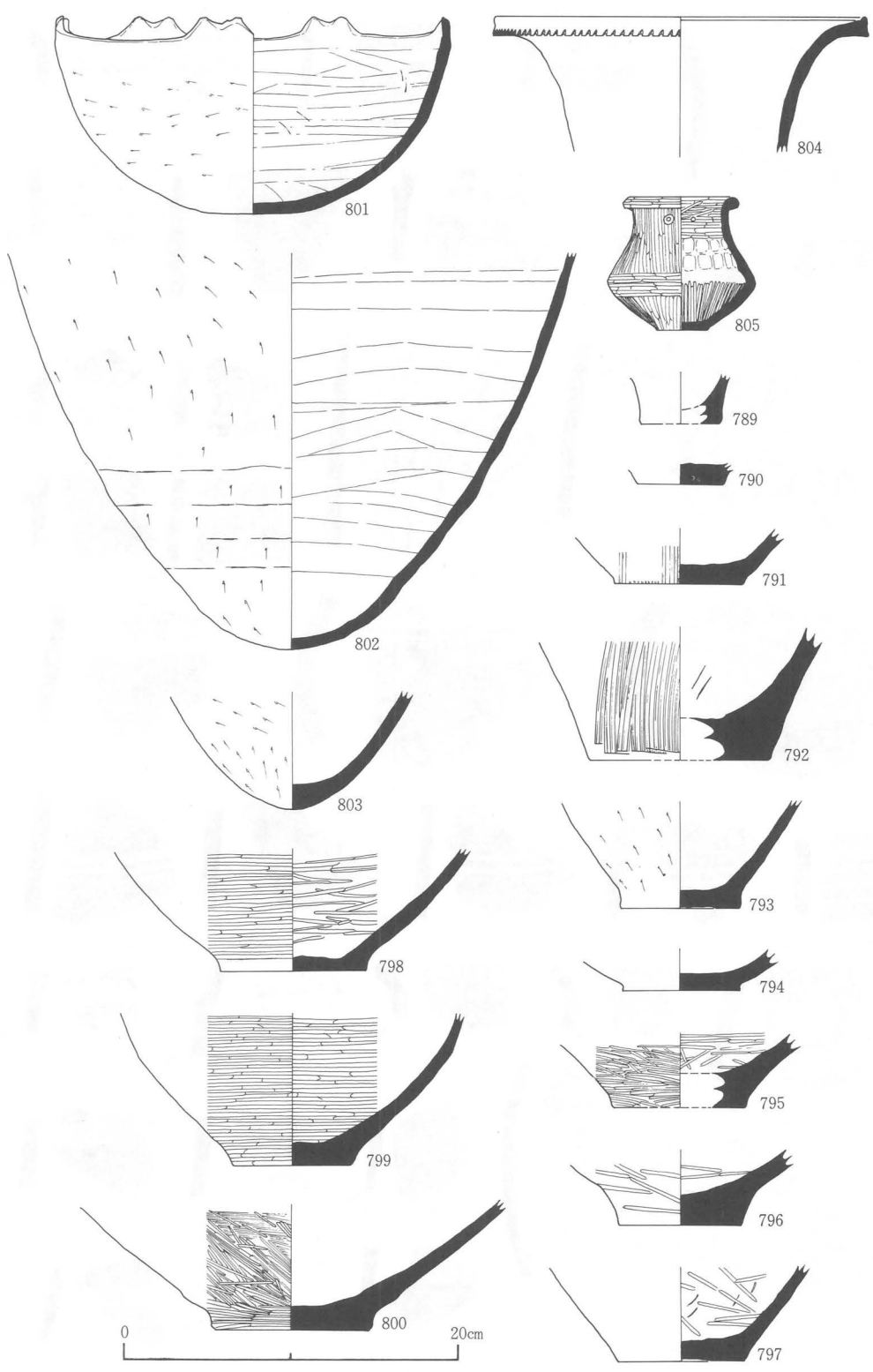
弥生土器 第Ⅰ～Ⅲ様式のものがある。第Ⅰ様式の土器は壺(760～764)と甕(772～777)がある。壺は口縁部が短く外反するもの(760・762)と大きく外反するもの(761・763・764)がある。762は頸部と口縁部の境に段がつく。761と763はヘラ描き沈線文を施す。甕は張りの少ない体部より口縁部が外反する。体部にヘラ描き沈線文を施すもの(772)、体部にヘラ描き沈線文と口縁端部にキザミ目を施すもの(773～775)、口縁端部にキザミ目を施すもの(776・777)がある。第Ⅱ様式の土器は壺(765・766)、鉢(768～770)、甕(778～783)、蓋(788)がある。壺は口縁部が大きく外反するもの(765)と口縁部が短く外反するもの(766)がある。鉢は体部が外上方へ伸びる小形のもの(768)、口縁部が外反するもの(769)、体部が内弯気味に立ち上がるもの(770)がある。甕は張りの少ない体部より口縁部が外反するものである。体部外面をハケメ調整するもの(778～781)、ヘラミガキ調整するもの(782)、ナデ調整のもの(783)がある。778は口縁端部にキザミ目を施す。蓋(788)は甕用のものであり、体部の立ち上がりが少なく、口縁部が裾広がりになる。第Ⅲ様式の土器は無頸壺(767)、鉢(771)、甕(784～787)がある。無頸壺は体部が内傾し、口縁部に段がつくものである。体部外面は櫛描き直線文を施す。口縁部直下に2孔1対の小円孔を穿つ。鉢は口縁部が強く外折するものであり、口縁端部と体部に櫛描き簾状文を施す。甕は張りのある体部より、口縁部がくの字形に外折するものである。体部外面はハケメ調整するもの(784)とヘラミガキ調整するもの(785～787)がある。他に平底を呈する底部(789～800)と文様を施す破片(821～840)がある。821～833は前期のものであり、ヘラ描き



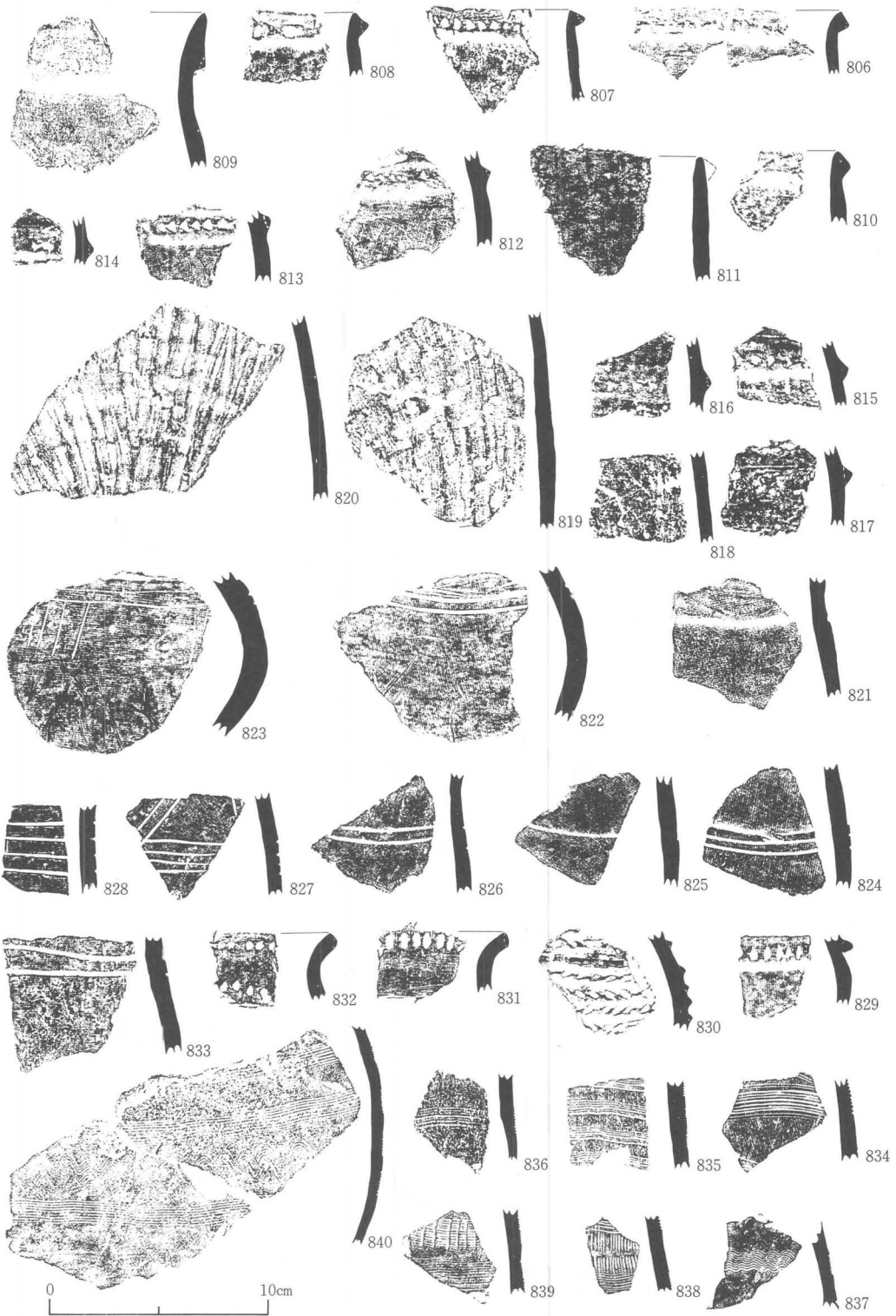
第71図 No.8 トレンチ落ち込み出土土器実測図



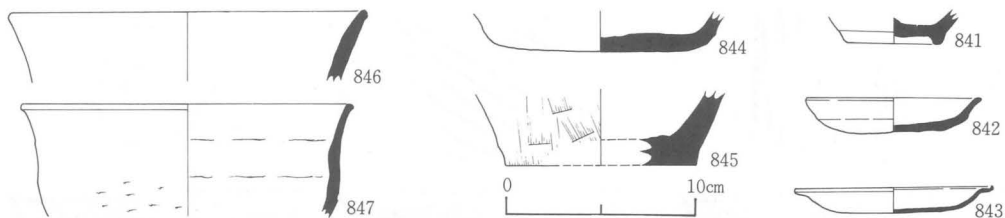
第72図 No.8 トレンチ落ち込み出土土器実測図



第73図 No.8 トレンチ落ち込み・自然流路出土土器実測図



第74図 No.8 トレンチ落ち込み出土土器拓影



第75図 No.8 トレンチ出土土器実測図

文様を施すもの(821~828・833)、貼り付け凸帯の上にキザミ目を施すもの(829・830)、キザミ目を施すもの(831)、キザミ目と刺突文を施すもの(832)がある。834~840は中期のものであり、櫛描き文様を施す。

自然流路出土土器(第73図)

弥生土器がある。弥生土器は第Ⅱ・Ⅲ様式の壺がある。第Ⅱ様式の壺は長い頸部より、口縁部が大きく外反するもの(804)がある。口縁端部にキザミ目を施す。第Ⅲ様式の壺は体部が算盤玉状を呈するもの(805)であり、口縁部が短く外反する。内外面はヘラミガキ調整する。頸部の相対する位置に小孔を穿つ。

包含層出土土器(第75図)

出土量は少ないが縄文時代~中世のものがある。陶器、土師器、弥生土器、縄文土器がある。第7・10・18・19・25層より出土した。

陶器 椀(841)の底部のみが残る。高台は低い。

土師器 皿(842・843)がある。皿はB₂型式の小皿(842)とA型式の中皿(843)がある。他に器形は不明であるが底部(844)がある。

弥生土器 平底を呈する底部(845)がある。

縄文土器 深鉢(846)と浅鉢(847)がある。

10) No.9 トレンチ出土土器(第76図)

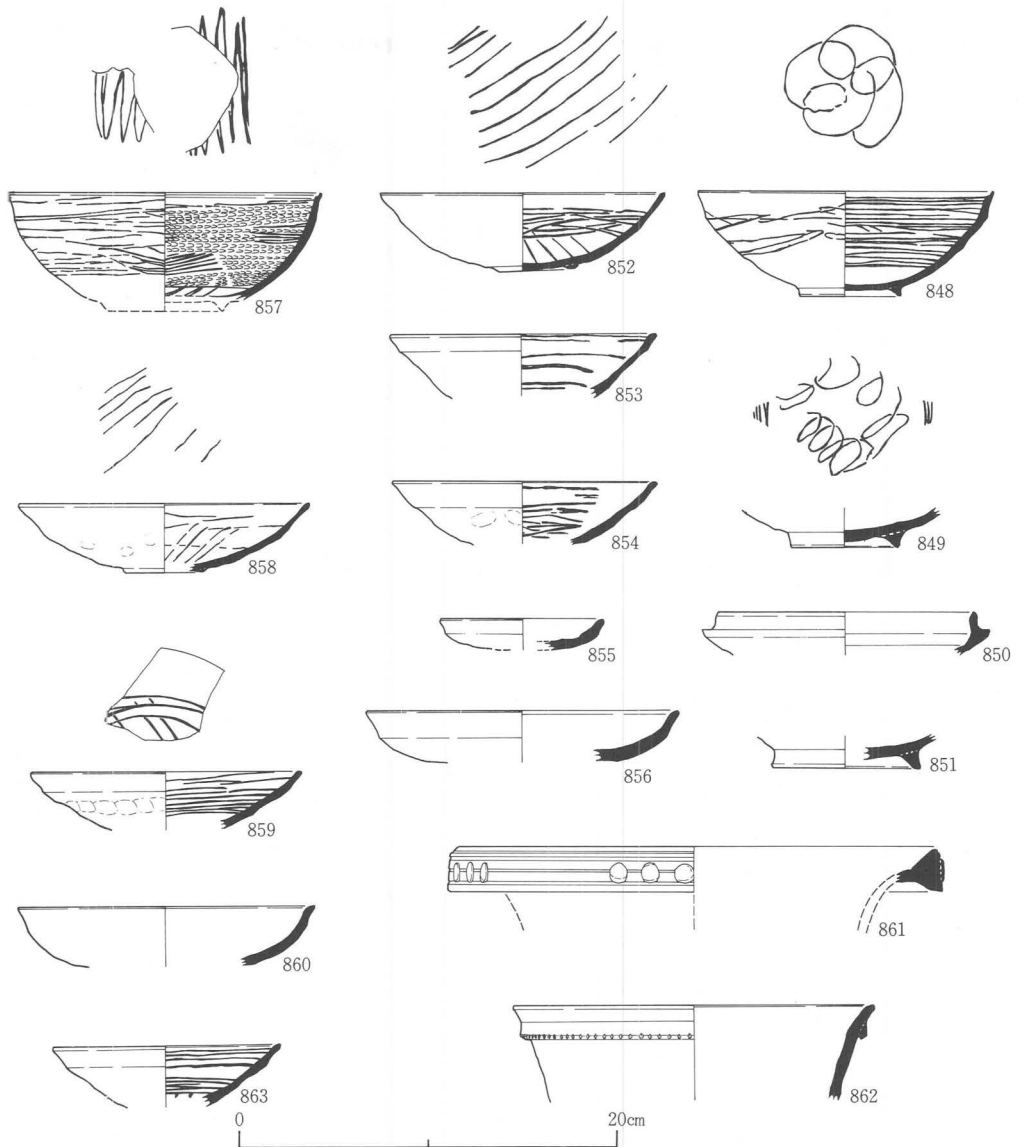
No.9 トレンチでは土器の出土量は少ないが、縄文時代~中世のものがある。自然流路と第5・6・7・8・10・11層より出土した。瓦器、土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器がある。

瓦器 椀(848・849・852~854・857~859・863)がある。A₄型式のもの(848)、A型式のもの(849)、B₄型式のもの(852~854・858・859・863)、A₃型式のもの(857)がある。

土師器 椀(851)と皿(855・856・860)の器種がある。椀は底部のみ残存しており、高い高台がつく。皿はB₂型式の小皿(855)と大皿(856・860)がある。

須恵器 杯(850)がある。受部が水平方向に伸び、口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終る。

弥生土器 壺(861)がある。口縁端部が幅広の面をもつ。口縁端部に4条の擬凹線を施し、3個単位の円形浮文を貼り付ける。



第76図 No.9 トレンチ出土土器実測図

縄文土器 長原式の深鉢 (862) がある。口縁部が外上方へ伸びる。口縁部に凸帯を貼り付けた後、キザミ目を施す。

2. 木製品

1) No1 トレンチ (第77・78図)

1は火鑽臼である。角材の一面に円形の凹みを削り込み、側面には火種を落すV字形の溝を切り込む。3孔が残存しており、使用による焼けた痕跡が残る。残存長8.5cm、最大幅1.8cm、最大厚1.5cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

2は火鑽臼である。断面が方形を呈する角材を使用する。身の中央よりやや下部に2孔の円形を呈する凹みを削り込み、側面には火種を落すV字形の溝を切り込む。削り痕が顕著に認められる。焼けた痕跡がなく、未使用である。全長34.2cm、最大幅2.5cm、最大厚2.0cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

3は全形の約 $\frac{2}{3}$ を欠損するが下駄である。歯は長方形に削り出しており、使用による磨り減りが著しく認められる。鼻緒の孔は先端と末端に1孔ずつ残る。残存長16.6cm、残存幅4.2cm、最大厚1.8cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

4は握部を欠損するが杓子である。握部より刃部に向かって幅広になり、撓形を呈する。刃部はやや丸く削る。握部と身の一部に焼けた痕跡が残る。残存長16.5cm、最大幅6.4cm、最大厚0.6cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

5は曲物の底板である。約 $\frac{2}{3}$ を欠損するが、本来は円形を呈していたと考えられる。最大長16.4cm、残存幅3.7cm、最大厚0.8cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

6は曲物の底である。円周部にそった1ヶ所に小孔を穿つ。小孔内には桜の樺が残る。最大長15.4cm、残存幅4.0cm、最大厚0.9cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

7は曲物の底である。6と同様に小孔を穿ち、桜の樺が残る。最大長16.2cm、残存幅4.8cm、最大厚0.9cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

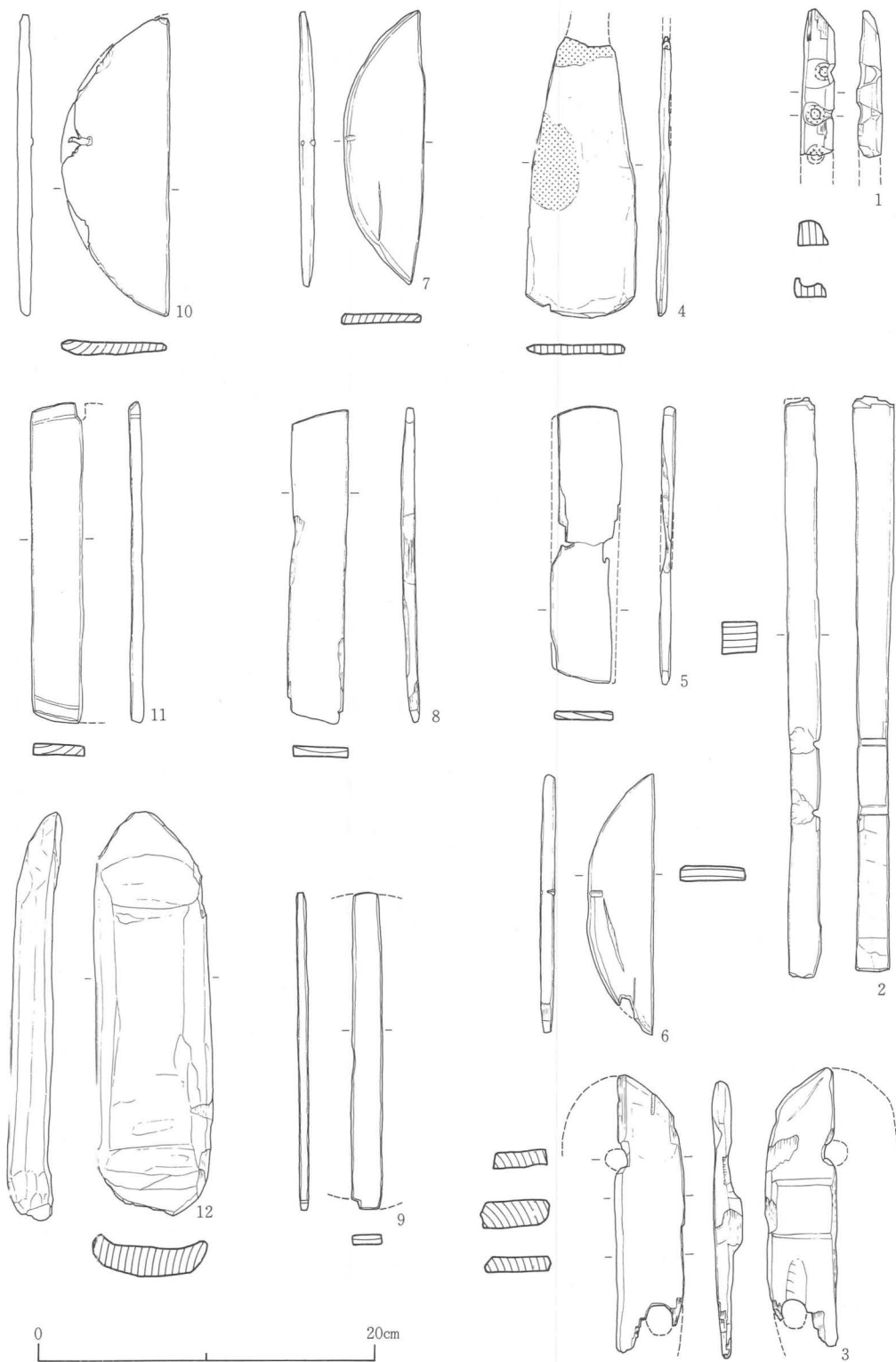
8は曲物の底である。円周部の1ヶ所にL字形を呈するえぐりを入れる。最大長18.6cm、残存幅3.5cm、最大厚0.8cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

9は曲物の底である。8と同様にえぐりを入れる。最大長18.8cm、残存幅1.8cm、最大厚0.6cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

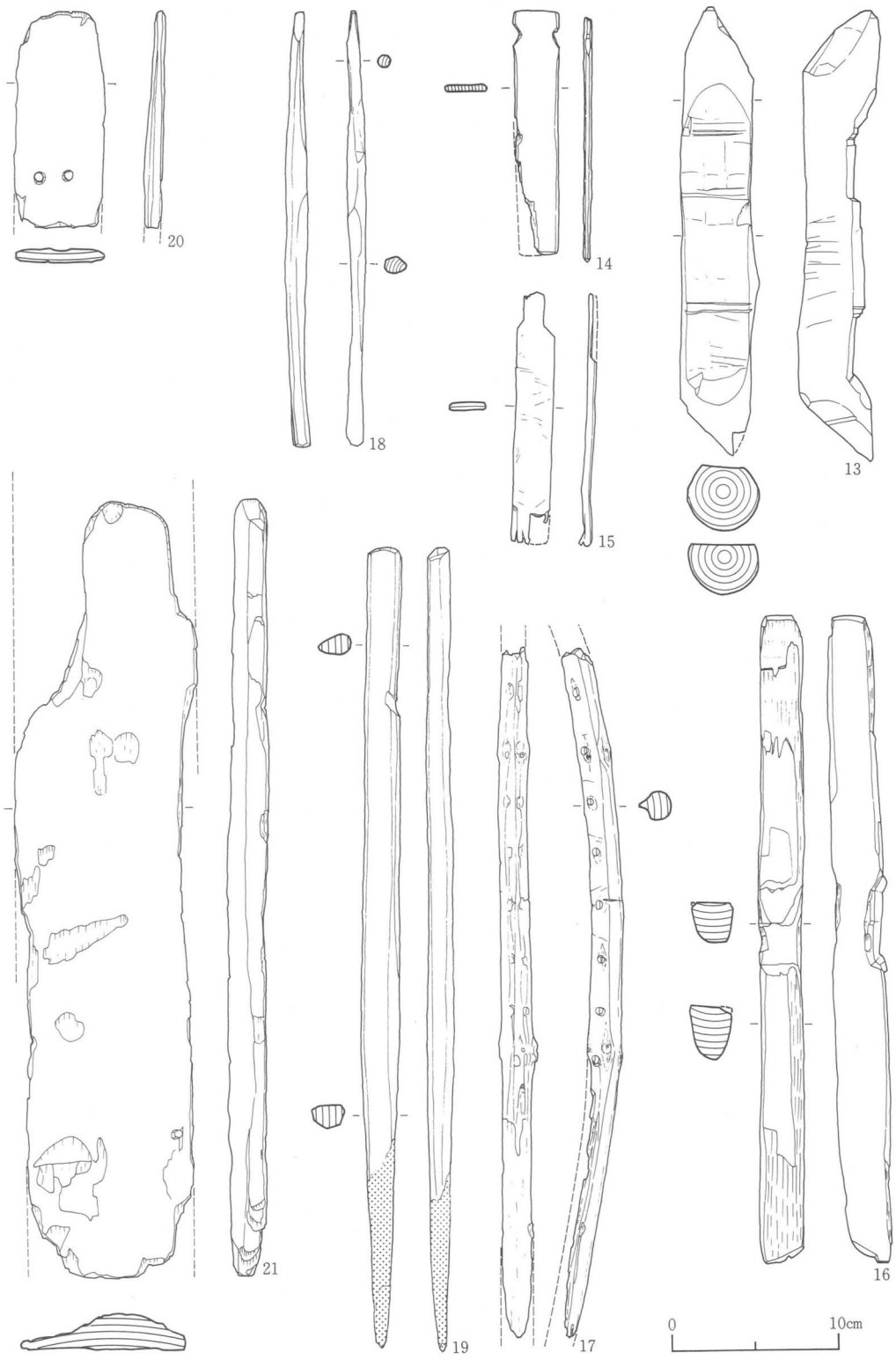
10は曲物の底である。円周部にそった1ヶ所に小孔を穿つ。中央部付近に刃幅2～3cmの工具痕が顕著に残る。最大長17.4cm、残存幅6.3cm、最大厚0.9cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

11は曲物の底である。円周部にそった1ヶ所にL字形のえぐりを入れる。円周部にそって幅約1cmで側板の当たった痕跡が残る。残存長19.0cm、最大幅3.0cm、最大厚0.6cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

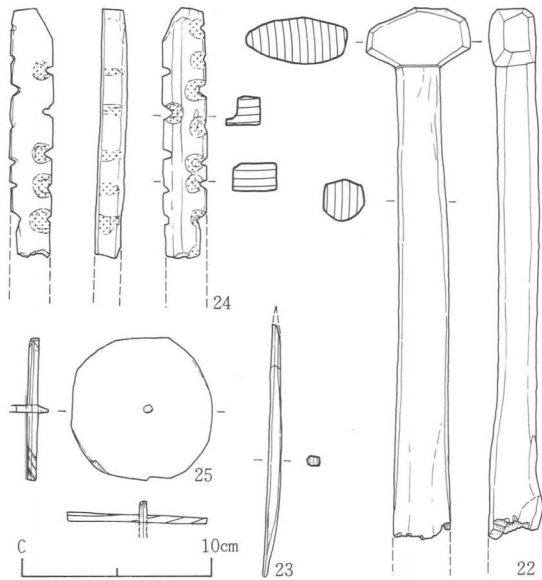
12はミニチュア舟である。長方形の板を削り出して舟とする。小口の一端を尖らして舟先と



第77図 No.1 トレンチ出土木製品実測図



第78図 No.1 トレンチ出土木製品実測図



第79図 No.2 トレンチ出土木製品実測図

し、他の一端を丸く削って舟尾とする。中央は長方形を呈する凹みを削る。断面がゆるいU字形を呈する。舟底は弧を呈する。全体的に削り痕が顕著に残る。全長24.2cm、最大幅6.8cm、最大厚1.8cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

13は舟形を呈する木製品である。棒材の両小口を鋭く尖らせる。円周の約 $\frac{1}{4}$ にえぐりを入れる。えぐりの中央は一段高く削り出す。裏面は自然面で終る。側面には刃幅2～3cmの工具の当たった痕跡が顕著に残る。全長26.8cm、最大幅4.6cm、最大厚3.8cmを測る。芯持材を使用する。第10層

出土。弥生時代後期～奈良時代。

14はえぐり入り板である。小口よりやや下の両側縁にV字形を呈するえぐりを入れる。全長14.5cm、最大幅2.7cm、最大厚0.4cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

15はえぐり入り板である。小口の一端にえぐりを入れる。弭状を呈する。全長14.8cm、最大幅2.3cm、最大厚0.5cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

17は網棹である。棒材の円周部約 $\frac{1}{2}$ を削り取り、他を自然面で残す。削り取った位置に小孔を約3～4cm間隔で穿つ。8孔が残存する。横断面がみかんの房状を呈する。残存長41.2cm、最大幅1.8cm、最大厚1.8cmを測る。芯持材を使用する。SD 3 出土。弥生時代後期。

18は尖頭棒である。小口の一端を細く尖らせる。全長25.8cm、最大幅1.5cm、最大厚1.1cmを測る。割り材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

19は尖頭棒である。形態は18と同様。尖頭部に焼けた痕跡が残る。全長47.8cm、最大幅2.6cm、最大厚1.6cmを測る。割り材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

20は有孔板である。身の中央に2孔の小孔を穿つ。残存長12.6cm、最大幅5.6cm、最大厚1.1cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

21は有孔板である。側縁部にそった所に小孔を1孔穿つ。残存長46.6cm、最大幅9.8cm、最大厚2.2cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

2) No.2 トレンチ (第79図)

22は鋤の柄である。下部を欠損する。一木より削り出して作っており、握部がT字形を呈する。残存長27.3cm、最大幅5.6cm、最大厚2.5cmを測る。割り材を使用する。第8層出土。12世紀。

23は刺突具である。棒材の両端を細く尖らす。先端部を欠損する。残存長13.2cm、長径0.7cmを測る。割り材を使用する。第9層出土。11世紀。

24は火鑽臼である。板材に円形を呈する凹みを削り込み、側縁に火種を落とすV字形の溝を切り込む。凹みは表面に9孔、裏面に5孔が残存する。使用による焼けた痕跡が顕著に認められる。小口から側縁にかけて斜めに削る。残存長13.0cm、最大幅2.3cm、最大厚1.5cmを測る。板目材を使用する。第8層出土。12世紀。

25は有孔円板である。円形を呈する板の中央に小円孔を1孔穿つ。孔には棒状を呈する軸を差し込むが、両端を欠損する。長径7.4cm、最大厚0.4cmを測る。軸は1.2cm残存。板目材を使用する。第9層出土。11世紀。

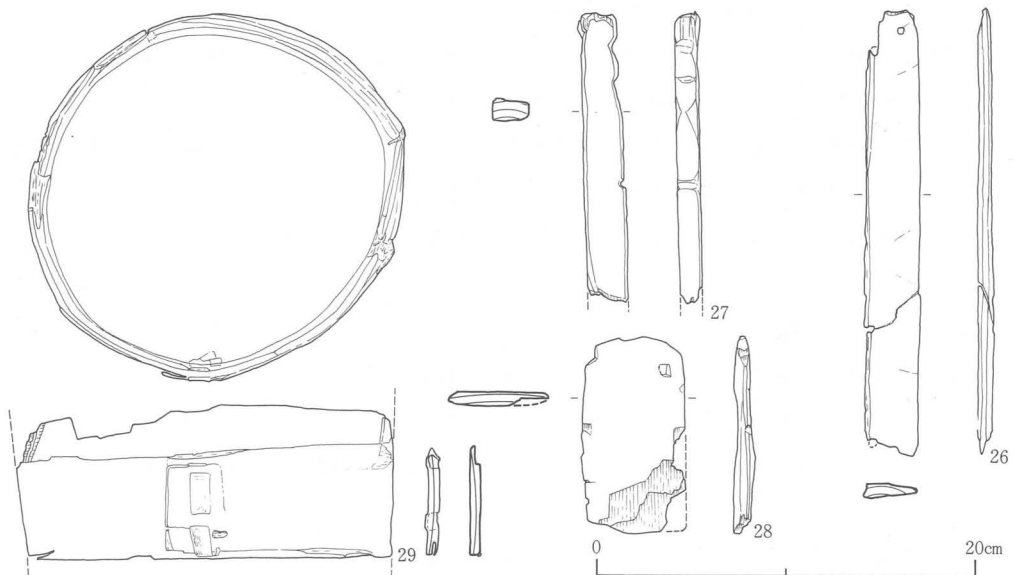
3) No.3 トレンチ (第80図)

26は有孔板である。3孔の小円孔を穿っているが、2孔は一部を欠損する。残存長23.6cm、残存幅3.0cm、最大厚0.8cmを測る。板目材を使用する。第8層出土。時期不明。

27はえぐり入り板である。小口は両側縁よりえぐりを入れ、有頭状を呈する。右側縁にはさらに2ヶ所えぐりを入れる。残存長15.2cm、最大幅2.2cm、最大厚1.2cmを測る。板目材を使用する。第5層出土。16世紀。

28は有孔板である。側縁のちかくに小孔を1孔穿つ。残存長10.4cm、最大幅5.4cm、最大厚0.8cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。時期不明。

29は曲物の側板である。厚さ0.5cmの板を2重から3重に曲げて円形とする。上下を欠損する。円周部に孔を穿ち、桜の樺で止める。最大径20.0cmを測る。板目材を使用する。第10層出土。時期不明。



第80図 No.3 トレンチ出土木製品実測図

4) No 4 トレンチ (第81図)

30は下駄である。歯は一木より削り出してあり、身より幅広に作る。身の部分に鼻緒の孔を3孔穿つ。歯は使用による磨り減りが認められる。残存長20.0cm、最大幅11.2cm、最大厚4.6cmを測る。柁目材を使用する。SK17出土。13～14世紀。

31は身の約 $\frac{2}{3}$ を欠損するが下駄である。鼻緒の孔が2孔残存する。残存長8.2cm、最大幅8.5cm、最大厚1.2cmを測る。板目材を使用する。SK16出土。13～15世紀。

32は杓子である。板材の一端を細く削り取って握部とする。身は幅広になり、撥形を呈する。握部は身に対してやや厚く作る。残存長22.4cm、最大幅9.3cm、最大厚1.1cmを測る。柁目材を使用する。SK16出土。13～15世紀。

33は杓子である。形態は32とほぼ同様であるが、握部と身の厚さが同一である。全長29.0cm、残存幅6.0cm、最大厚0.6cmを測る。第3層出土。13～15世紀。

34は有孔板である。小口部はやや丸く、側縁を直線的に削る。方形か長方形を呈すると考えられる孔を1孔穿つ。残存長8.8cm、最大幅7.0cm、最大厚1.3cmを測る。柁目材を使用する。SK16出土。13～15世紀。

35は栓状を呈する木製品である。全体を丸く削り出してあり、小口の1端に段をつける。長径4.8cm、短径4.4cm、最大厚3.4cmを測る。芯持材を使用する。第3層出土。13～15世紀。

36はえぐり入り棒である。側縁の1端にV字形を呈するえぐりを入れる。残存長19.8cm、最大幅1.5cm、最大厚0.8cmを測る。割り材を使用する。SK18出土。13～14世紀。

37は曲物の底板である。本来は円形を呈するが、約 $\frac{2}{3}$ を欠損する。最大長15.4cm、残存幅8.0cm、最大厚0.6cmを測る。柁目材を使用する。SK16出土。13～15世紀。

38は曲物の底板である。形態は39と同様。最大長13.8cm、残存幅2.2cm、最大厚0.6cmを測る。柁目材を使用する。SK16出土。13～15世紀。

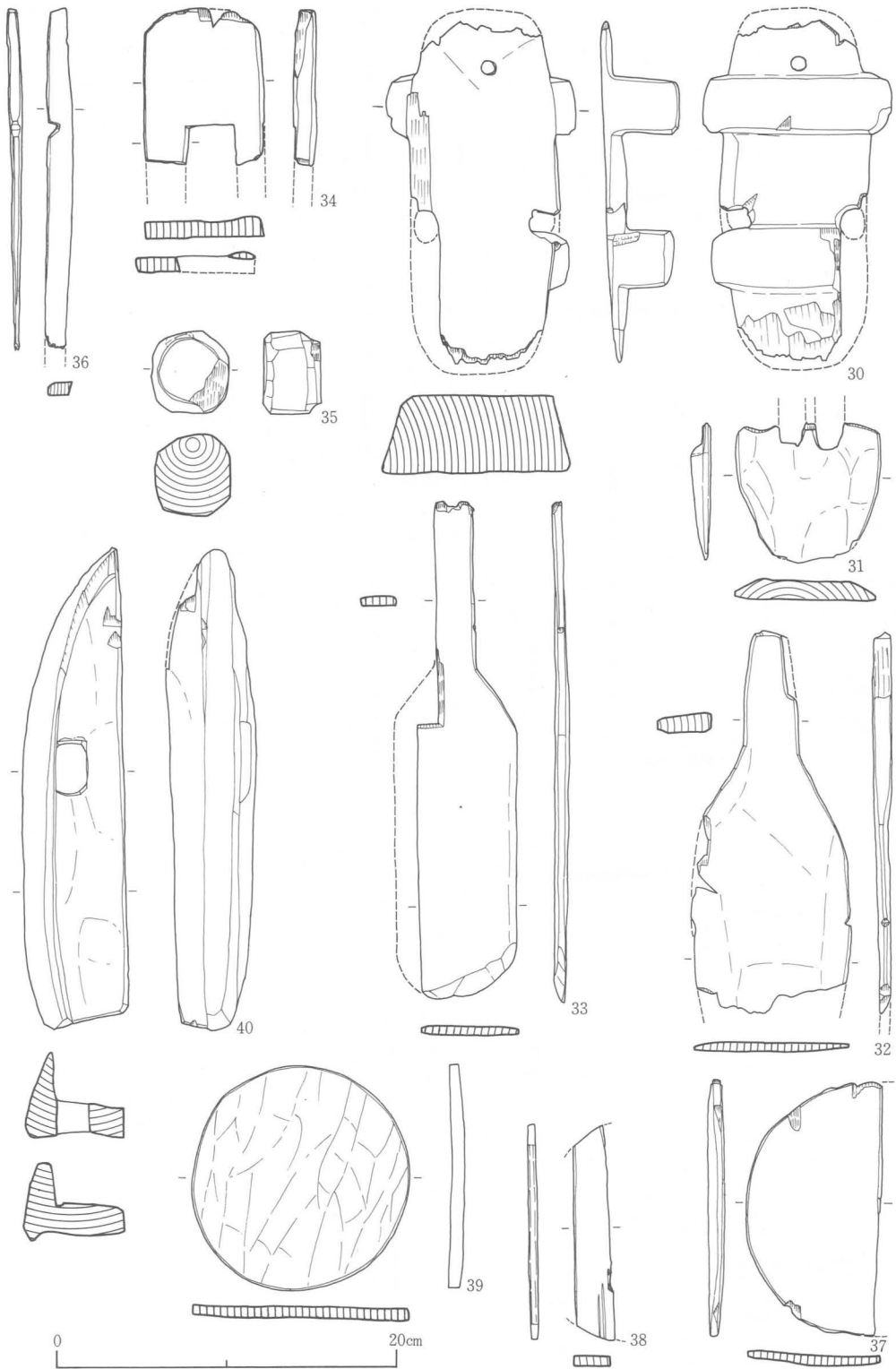
39は全形を知ることのできる曲物の底である。全面に加工痕が認められる。最大径12.7cm、最大厚0.7cmを測る。柁目材を使用する。SK16出土。13～15世紀。

40は突起付き板である。身の中央に長方形を呈する突起を削り出す。突起の1ヶ所に隅丸長方形を呈する孔を穿つ。底部はゆるくU字形に弯曲しており、使用による磨減が著しく認められる。残存長28.2cm、残存幅5.0cm、最大厚6.0cmを測る。割り材を使用する。出土層位は不明。

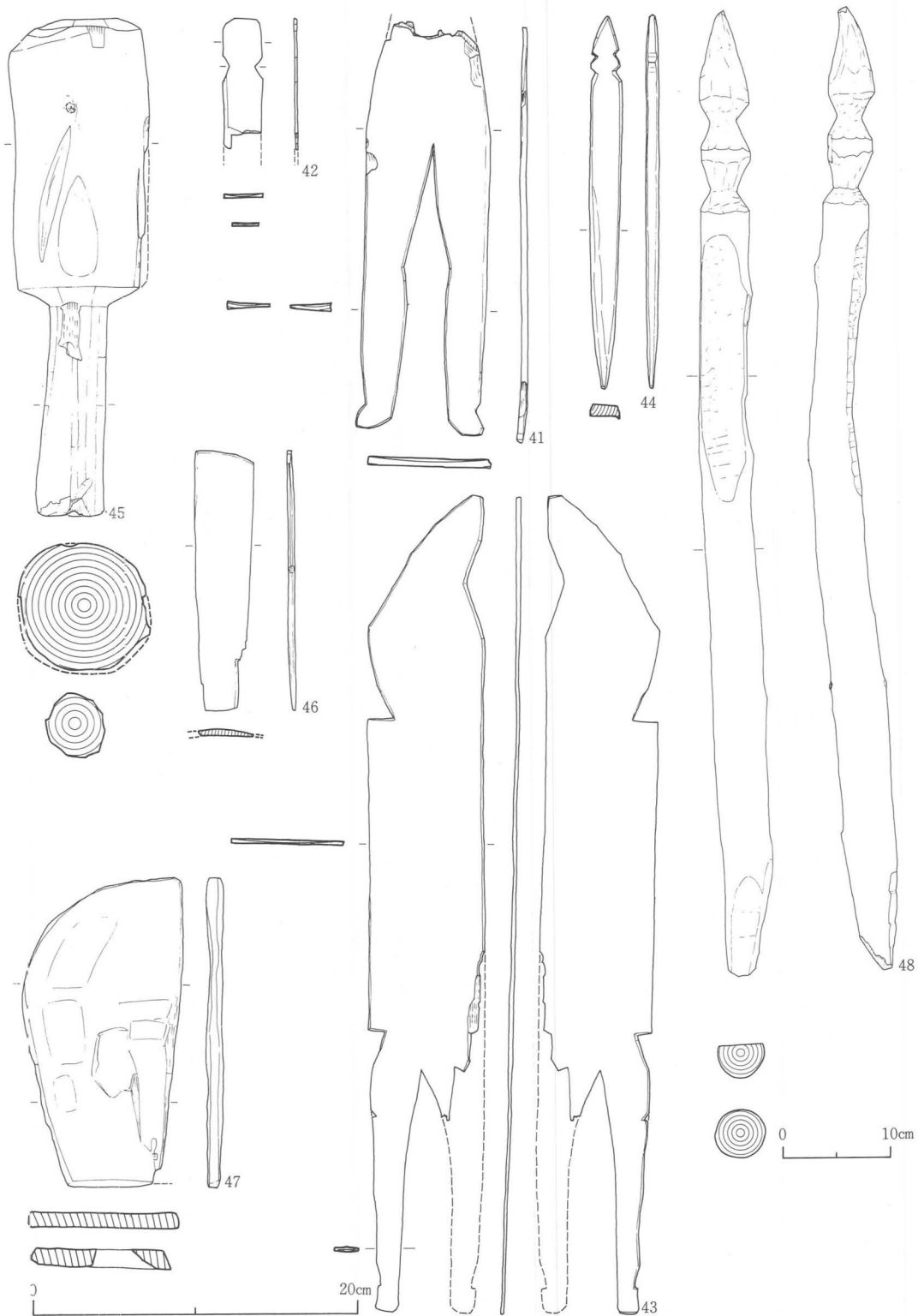
5) No 5 トレンチ (第82図)

41は人形である。胴部より上を欠損する。腰は曲線的に削り出す。脚はV字形に切り込みを入れ、膝も内側で切り込みを入れて大腿と下腿を表現する。足は外側で切り込みを入れて表現する。残存長25.6cm、最大幅7.6cm、最大厚0.6cmを測る。板目材を使用する。堤防内出土。11世紀。

42は人形である。胴部より下を欠損する。頸部は両側縁よりV字形の切り込みを入れ、顔と体部を表現する。残存長8.1cm、最大幅2.3cm、最大厚0.3cmを測る。板目材を使用する。堤防内



第81図 No.4 トレンチ出土木製品実測図



第82図 No.5 トレンチ出土木製品実測図

出土。11世紀。

43は人形である。脚の片側を欠損する。腰より上を側面観、下を正面観で表現する。上部は両側縁に1ヶ所づつえぐりを入れ、烏帽子をかぶった顔を表現する。腰はえぐりを入れ、曲線的につくる。足の部分にもえぐりを入れ、脚との境とする。全長50.3cm、最大幅7.1cm、最大厚0.3cmを測る。板目材を使用する。堤防内出土。11世紀。

44は卒塔婆である。小口の両端は細く尖らせる。小口の一端よりやや下の両側縁にV字形を呈するえぐりを2ヶ所づつ入れる。全長22.9cm、最大幅1.9cm、最大厚0.8cmを測る。柁目材を使用する。第13層出土。11～12世紀。

45は横杵である。棒材に段を入れ、握部を細く削り出す。端部に向かってやや径が大きくなる。槌部は小口のみを削り、他は自然面で終る。全長30.4cm、最大径8.4cmを測る。芯持材を使用する。第3層出土。11～12世紀。

46は曲物の底板である。本来は円形を呈するが、約2/3を欠損する。最大長16.0cm、残存幅3.6cm、最大厚0.4cmを測る。柁目材を使用する。落ち込み3出土。11～12世紀。

47は有孔板である。側縁は丸く削っている。一端の側縁は欠損のため不明。身のほぼ中央に隅丸長方形を呈する孔を1孔穿つ。全長19.1cm、残存幅9.6cm、最大厚1.2cmを測る。柁目材を使用する。第3層出土。11～12世紀。

48は卒塔婆である。棒材の下端は杭の先端部のように尖らせる。上端は2ヶ所の円周部を削り込む。上端の下は円周部を細長く削り取るが、他は自然面で終る。加工痕が明瞭に残る。全長88.8cm、最大径4.8cmを測る。芯持材を使用する。堤防内出土。11世紀。

6) No.6 トレンチ (第83・84図)

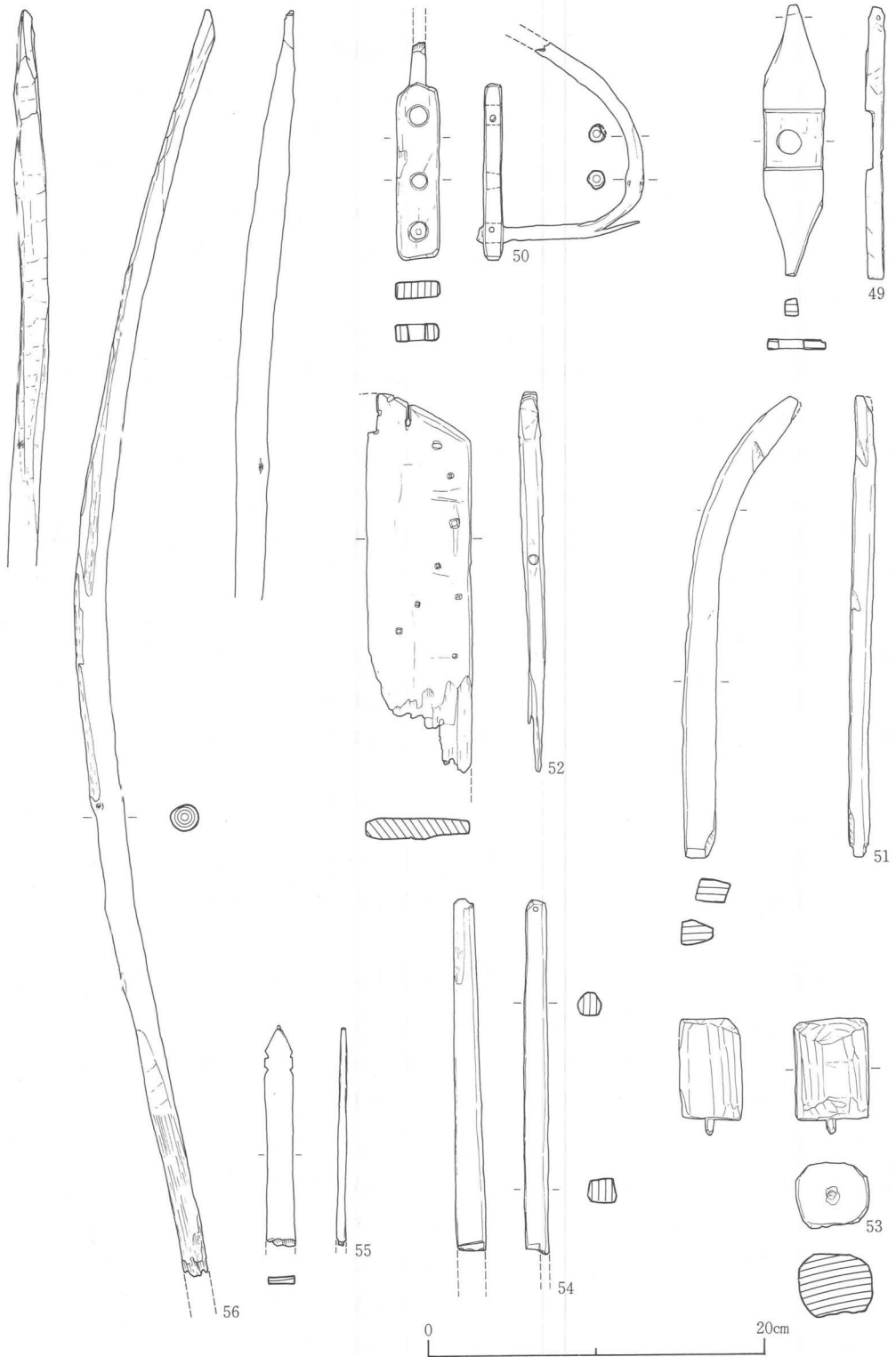
49は糸巻具の部品である。両小口を三角形に削り出す。中央に方形の段を切り込み、円孔を1孔穿つ。全長16.0cm、最大幅3.6cm、最大厚1.1cmを測る。板目材を使用する。第11層出土。近世。

50は鼻輪である。長方形を呈する板材とU字形の棒材を組み合わせて作る。板材の3ヶ所に円孔を穿つ。両端の円孔にU字形の棒材の両小口を差し込み、目釘で止める。中央の円孔は紐を結ぶためのものである。板材は全長10.4cm、最大幅2.5cm、最大厚1.0cmを測る。割り材を使用する。棒材は伸展長22.0cm、最大径1.1cmを測る。芯持材を使用する。第11層出土。近世。

51はJ字形を呈する細長い板材である。下端の小口にえぐりを入れる。全長27.2cm、最大幅2.0cm、最大厚1.6cmを測る。板目材を使用する。第11層出土。近世。

52は有孔板である。小口は曲線的、側縁は直線的に削り出す。縁にそって小円孔をほぼ等間隔に穿つ。身の中央にも小円孔を数ヶ所に穿つ。側縁には2ヶ所認められる。残存長22.4cm、残存幅6.1cm、最大厚1.3cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。近世。

53は軸を差し込んだ棒材である。小口の一端に小円孔を穿ち、短い軸棒を差し込む。全長6.8cm、最大径4.4cmを測る。割り材を使用する。第10層出土。近世。



第83図 No.6 トレンチ出土木製品実測図

54はえぐり入りの材である。小口の下には小円孔を1孔穿つ。残存長21.0cm、最大幅1.8cm、最大厚1.4cmを測る。割り材を使用する。第12層出土。12世紀。

55は卒塔婆である。下部は欠損する。小口の下側の両側縁にV字形を呈する切り込みを2ヶ所づつ入れる。残存長12.9cm、最大幅1.6cm、最大厚0.4cmを測る。板目材を使用する。第13層出土。12世紀。

56は尖頭棒である。小口より約30cmの間は円周部の約 $\frac{2}{3}$ を削り、他は自然面で終る。下部は全周を自然面で終る。残存長75.2cm、最大径2.0cmを測る。芯持材を使用する。第12層出土。12世紀。

57は赤漆塗りの漆器碗である。高台は高く、やや八字形に開く。体部は内弯しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終る。体部外面と見込み部に黒漆で絵柄を描く。口径17.4cm、器高7.8cmを測る。柁目材を使用する。第11層出土。近世。

58は赤漆塗りの漆器碗である。形態は57とほぼ同様であるが、器体と高台がやや低い。見込み部に黒漆で絵柄を描く。口径14.6cm、器高5.0cmを測る。柁目材を使用する。第11層出土。近世。

59は赤漆塗りの漆器碗である。形態は57と同様。体部外面と見込み部に黒漆で絵柄を描く。口径15.6cm、器高7.9cmを測る。柁目材を使用する。第11層出土。近世。

60は赤漆塗りの漆器皿である。高台は低く、八字形に開く。体部はゆるく内弯しながら立ち上がり、口縁端部は丸く終る。見込み部には黒漆で絵柄を描く。口径9.8cm、器高2.6cmを測る。柁目材を使用する。第11層出土。近世。

61は漆塗りの漆器皿と考えられるが、漆は剝離する。形態は60とほぼ同様であるが、高台の裏側は削り貫かずに終る。体部外面には3条の沈線を施す。口径9.6cm、器高3.1cmを測る。柁目材を使用する。第11層出土。近世。

62は桶の側板である。長方形を呈する板をゆるくU字形に削る。最大長20.0cm、最大幅8.0cm、最大厚0.8cmを測る。柁目材を使用する。第11層出土。近世。

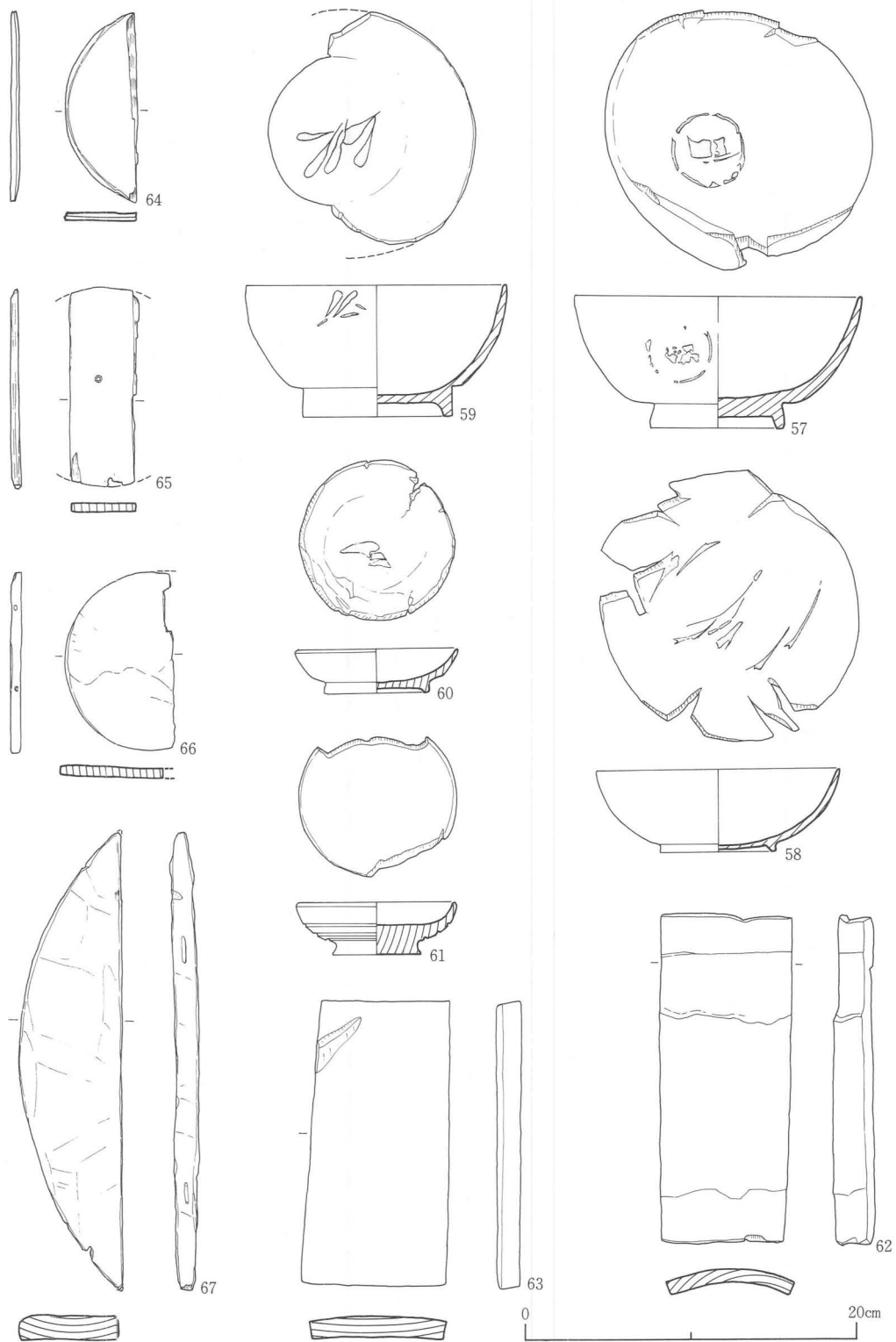
63は桶の側板である。形態は62と同様。最大長17.1cm、残存幅8.8cm、最大厚1.2cmを測る。板目材を使用する。第11層出土。近世。

64は曲物の底板である。本来は円形を呈していたと考えられるが、約 $\frac{2}{3}$ を欠損する。最大長11.6cm、残存幅4.4cm、最大厚0.5cmを測る。板目材を使用する。第11層出土。近世。

65は曲物の底板である。形態は64と同様。中央部に小円孔を1孔穿つ。最大長12.0cm、残存幅4.0cm、最大厚0.5cmを測る。柁目材を使用する。第10層出土。近世。

66は曲物の底板である。形態は65と同様。円周部の2ヶ所に小円孔を穿つ。最大長10.7cm、残存幅6.4cm、最大厚0.6cmを測る。柁目材を使用する。第9層出土。近世。

67は径が大きく、厚いことから桶の底板と考えられる。形態は三日月形を呈し、4～5枚を組み合わせて円形にしたと考えられる。側縁には接続用の目釘穴を2ヶ所に施す。最大長27.6cm、最大幅6.1cm、最大厚1.4cmを測る。板目材を使用する。第11層出土。近世。



第84図 No.6 トレンチ出土木製品実測図

7) No 8 トレンチ (第85・86図)

68は丸木弓である。弭部は先端を尖らせ、その下にえぐりを入れて瘤状にする。弭部より約14cm下までは円周の約 $\frac{1}{2}$ を削り、他は自然面で終る。残存長26.0cm、最大径1.2cmを測る。芯持材を使用する。第25層出土。縄文時代晩期。

69は丸木弓である。弭部は両側よりえぐりを入れ、長方形に削り出す。弭部より約16cm下までは円周の約 $\frac{1}{2}$ を削り、他は自然面で終る。弭部など2ヶ所に焼けた痕跡が残る。残存長57.2cm、最大径2.0cmを測る。芯持材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

70は手斧の柄である。着装部の先端は欠損する。着装部は平坦面を一面削り出しており、断面が半円形を呈する。握部はゆるく弯曲し、自然面で終る。着装部と握部に焼けた痕跡が残る。残存長48.6cm、握部最大径3.0cmを測る。芯持材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

71は櫛状を呈する木製品である。約 $\frac{1}{2}$ を欠損する。柄部を細く削り出し、身は長楕円形を呈する。刃部で最も薄くなる。刃部の上に小円孔を1孔穿っており、補修孔と考えられる。全長45.2cm、残存幅5.8cm、最大厚1.7cmを測る。板目材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

72は鋤状を呈する木製品である。身は楕円形を呈し、上端に長方形の突起を削り出す。身中央に楕円形を呈する孔を2孔穿つ。孔間には磨り減った痕跡が残る。突起と孔の2ヶ所で柄を結んでいたと考えられる。全面に焼けた痕跡が残る。全長22.4cm、最大幅16.6cm、最大厚1.3cmを測る。柾目材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

73は有頭棒である。小口の一端はえぐりを入れ、瘤状に削り出す。下部はくの字形に曲がる。部分的に焼けた痕跡が残る。全長26.4cm、最大径5.4cmを測る。芯持材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

74は有頭棒である。小口の一端にえぐりを入れ、瘤状に削り出す。上端より約13cm下までは円周の約 $\frac{1}{2}$ を削り、他は自然面で終る。残存長75.6cm、最大径2.4cmを測る。芯持材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

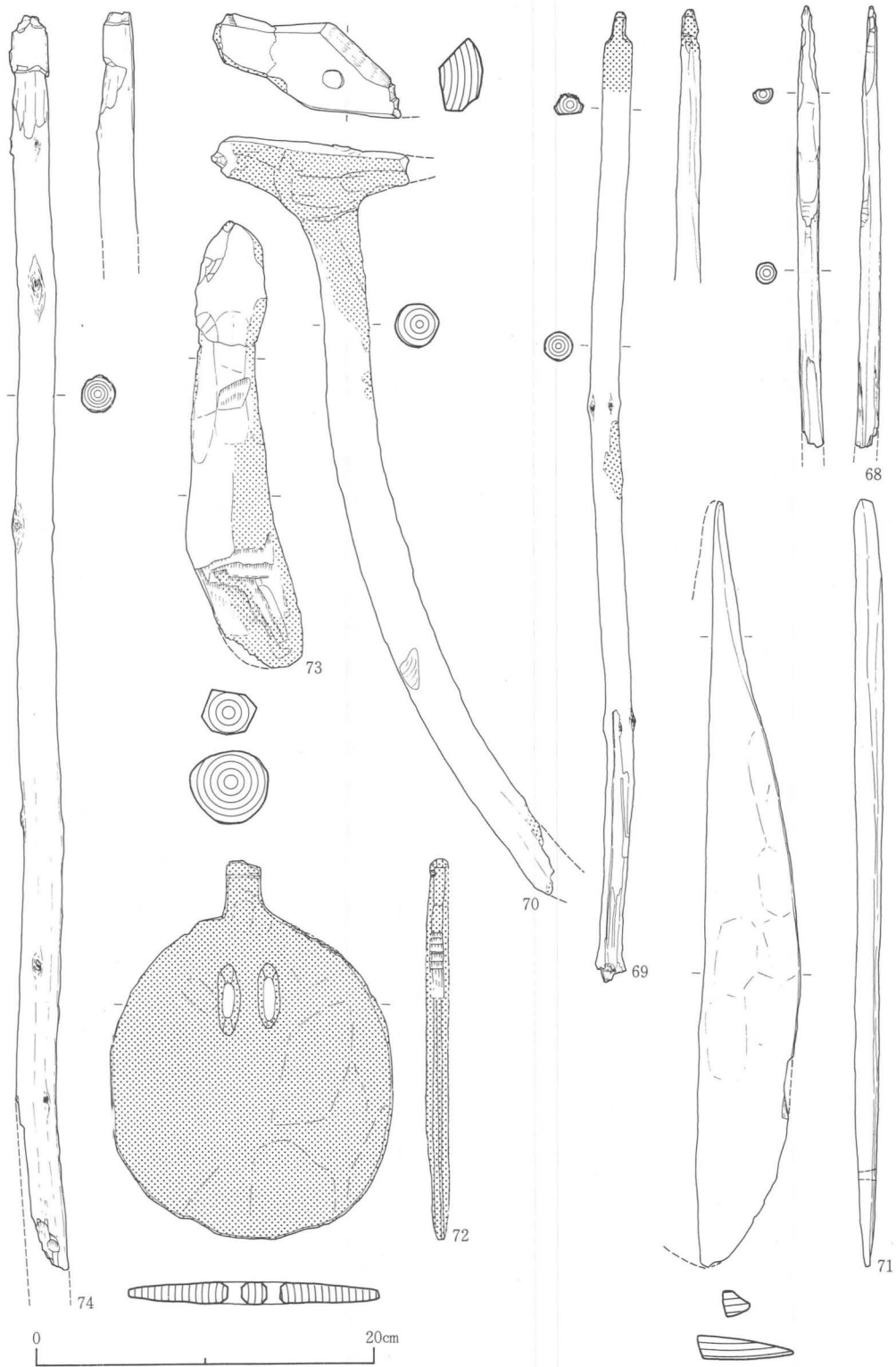
75は刺突具である。棒材の両小口を細く尖らせる。基部より先端部が鋭い。基部に焼けた痕跡が残る。全長21.8cm、最大径0.8cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

76は刺突具である。形態は75と同様。基部と先端部を欠損する。残存長16.4cm、最大径0.8cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

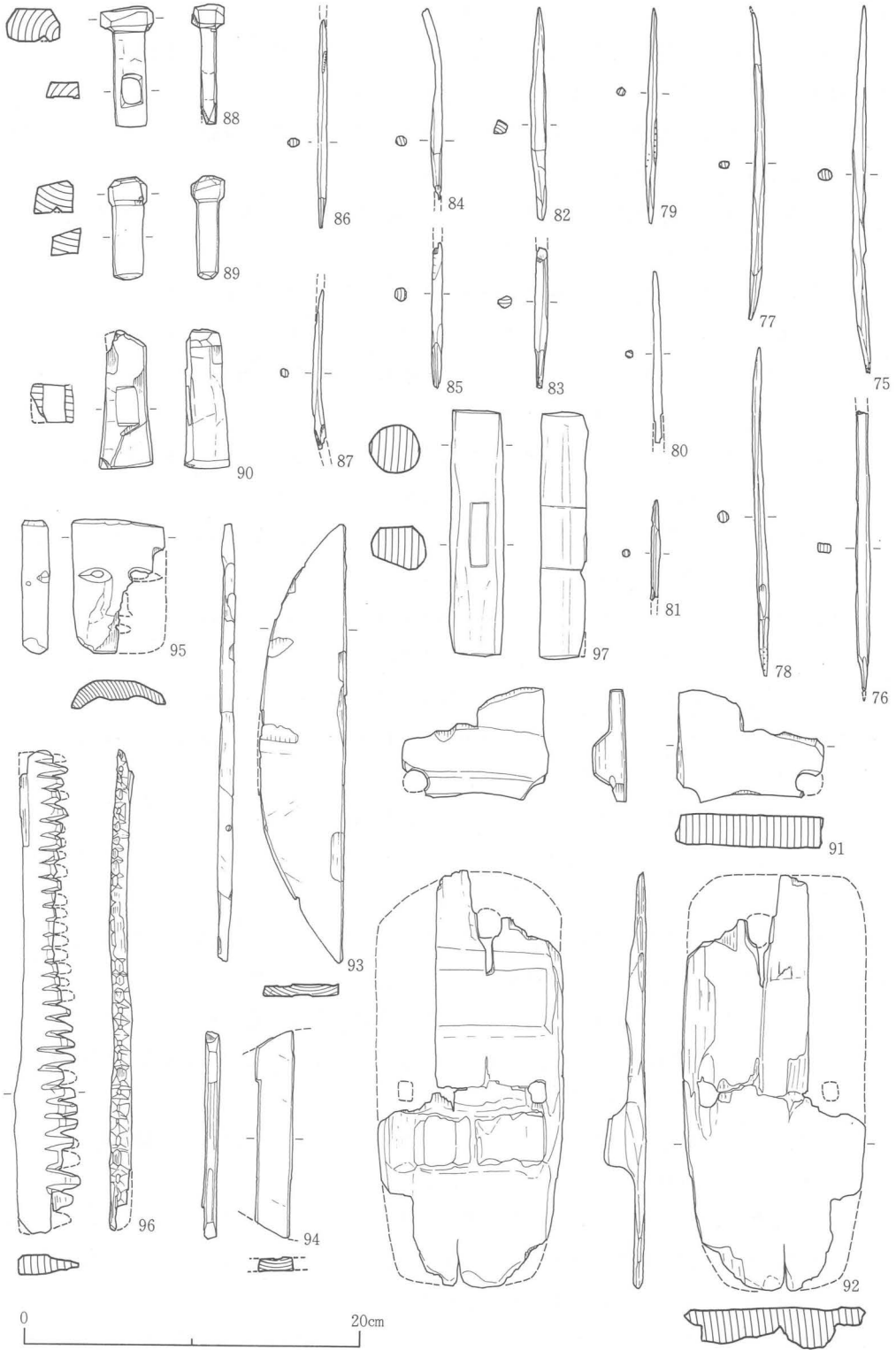
77は刺突具である。形態は75と同様。先端部を欠損する。残存長18.2cm、最大径0.6cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

78は刺突具である。形態は75と同様。基部に焼けた痕跡が残る。全長19.6cm、最大径0.7cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

79は刺突具である。形態は75と同様。焼けた痕跡が残る。全長12.8cm、最大径0.6cmを測る。



第85図 No.8 トレンチ出土木製品実測図



第86図 No.8 トレンチ出土木製品実測図

割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

80は刺突具である。形態は75と同様。基部を欠損する。残存長10.2cm、最大径0.5cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

81は刺突具である。形態は75と同様。基部を欠損する。残存長6.0cm、最大径0.5cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

82は刺突具である。形態は75と同様。全長12.3cm、最大径0.8cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

83は刺突具である。形態は75と同様。先端部を欠損する。基部に焼けた痕跡が残る。残存長8.4cm、最大径0.8cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

84は刺突具である。形態は75と同様。先端部と基部を欠損する。残存長11.0cm、最大径0.7cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

85は刺突具である。形態は75と同様。先端部と基部を欠損する。残存長8.6cm、最大径0.6cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

86は刺突具である。形態は75と同様。先端部を欠損する。残存長12.4cm、最大径0.6cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

87は刺突具である。形態は75と同様。先端部と基部を欠損する。残存長9.6cm、最大径0.6cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

88は栓状を呈する木製品である。小口の一端を瘤状に削り出す。下部は長方形に削っており、中央に隅丸長方形の孔を1孔穿つ。全長7.1cm、最大幅3.2cm、最大厚1.8cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

89は栓状を呈する木製品である。形態は88とほぼ同様であるが、下部に孔を穿っていない。全長6.5cm、最大幅2.5cm、最大厚2.0cmを測る。割り材を使用する。落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

90は有孔材である。台形を呈する材の中央に長方形を呈する孔を1孔穿つ。全長8.2cm、最大幅3.5cm、最大厚2.7cmを測る。割り材を使用する。出土層位は不明。

91は下駄である。身の大部分を欠損するが、歯と鼻緒の孔が1孔残存する。歯は使用による磨り減りが著しく認められる。残存長6.7cm、残存幅8.6cm、最大厚2.0cmを測る。柁目材を使用する。第16層出土。11世紀。

92は下駄である。鼻緒の孔は2孔、歯は1ヶ所が残存する。全長24.8cm、最大幅10.6cm、最大厚2.6cmを測る。柁目材を使用する。第19層出土。奈良時代。

93は桶の底板である。三日月形を呈し、4～5枚を組み合わせると円形にしたと考えられる。側縁には接続用の目釘穴を施し、1孔が残存する。最大長26.2cm、最大幅5.0cm、最大厚0.9cmを測る。板目材を使用する。第19層出土。奈良時代。

94は曲物の底板である。本来は円形を呈するが、約 $\frac{3}{4}$ を欠損する。最大長12.4cm、残存幅2.2cm、最大厚0.7cmを測る。板目材を使用する。第18層出土。11世紀。

95は人の顔を描いた木製品である。目、鼻、口を表現する。目、口に孔を穿っており、鼻は線刻で表わす。耳の位置には小円孔を穿つ。横断面がゆるいU字形を呈する。全長8.0cm、最大幅5.4cm、最大厚1.2cmを測る。柾目材を使用する。第16層出土。11世紀。

96は鋸歯状を呈する木製品である。側縁の1辺にV字形のえぐりを入れ、鋸歯状に削り出す。断面がみかんの房状を呈する。全長28.9cm、最大幅3.6cm、最大厚1.3cmを測る。柾目材を使用する。第19層出土。奈良時代。

97は柄状を呈する木製品である。棒材の中央に長方形を呈する孔を1孔穿つ。孔内には軸棒が残る。全長14.6cm、最大幅3.2cm、最大厚2.4cmを測る。割り材を使用する。第9層出土。時期不明。

8) No.9 トレンチ (第87図)

98は刺突具である。棒材の両小口を細く尖らせる。基部より先端が鋭い。全長15.4cm、最大径0.6cmを測る。割り材を使用する。第13層出土。弥生時代。

99は刺突具である。形態は98と同様。先端部を欠損する。残存長15.0cm、最大径0.6cmを測る。割り材を使用する。第13層出土。弥生時代。

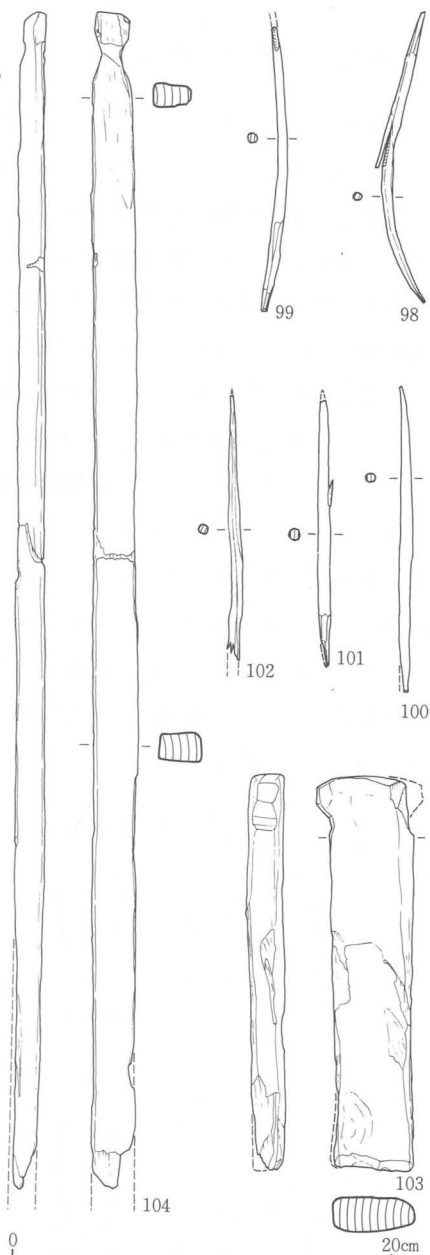
100は刺突具である。形態は98と同様。全長16.2cm、最大径0.7cmを測る。割り材を使用する。第13層出土。弥生時代。

101は刺突具である。形態は98と同様。先端部と基部を欠損する。残存長14.0cm、最大径0.6cmを測る。割り材を使用する。第13層出土。弥生時代。

102は刺突具である。形態は98と同様。基部を欠損する。残存長14.0cm、最大径0.6cmを測る。割り材を使用する。第13層出土。弥生時代。

103は有頭棒である。小口の一端に側縁よりえぐりを入れ、瘤状に削り出す。全長20.8cm、最大幅4.6cm、最大厚1.8cmを測る。割り材を使用する。第14層出土。弥生時代。

104は有頭棒である。小口の一端を瘤状に削り出す。残存長61.6cm、最大幅2.4cm、最大厚1.5cmを測る。割り材を使用する。出土層位は不明。



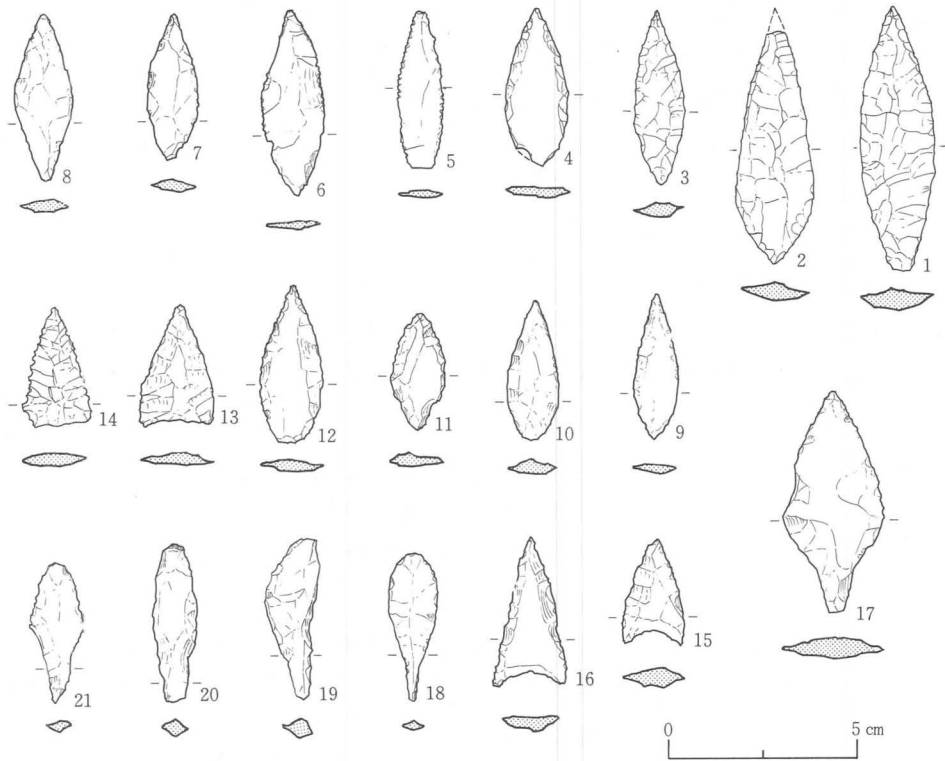
第87図 No.9 トレンチ出土木製品実測図

3. 石製品 (第88・89図)

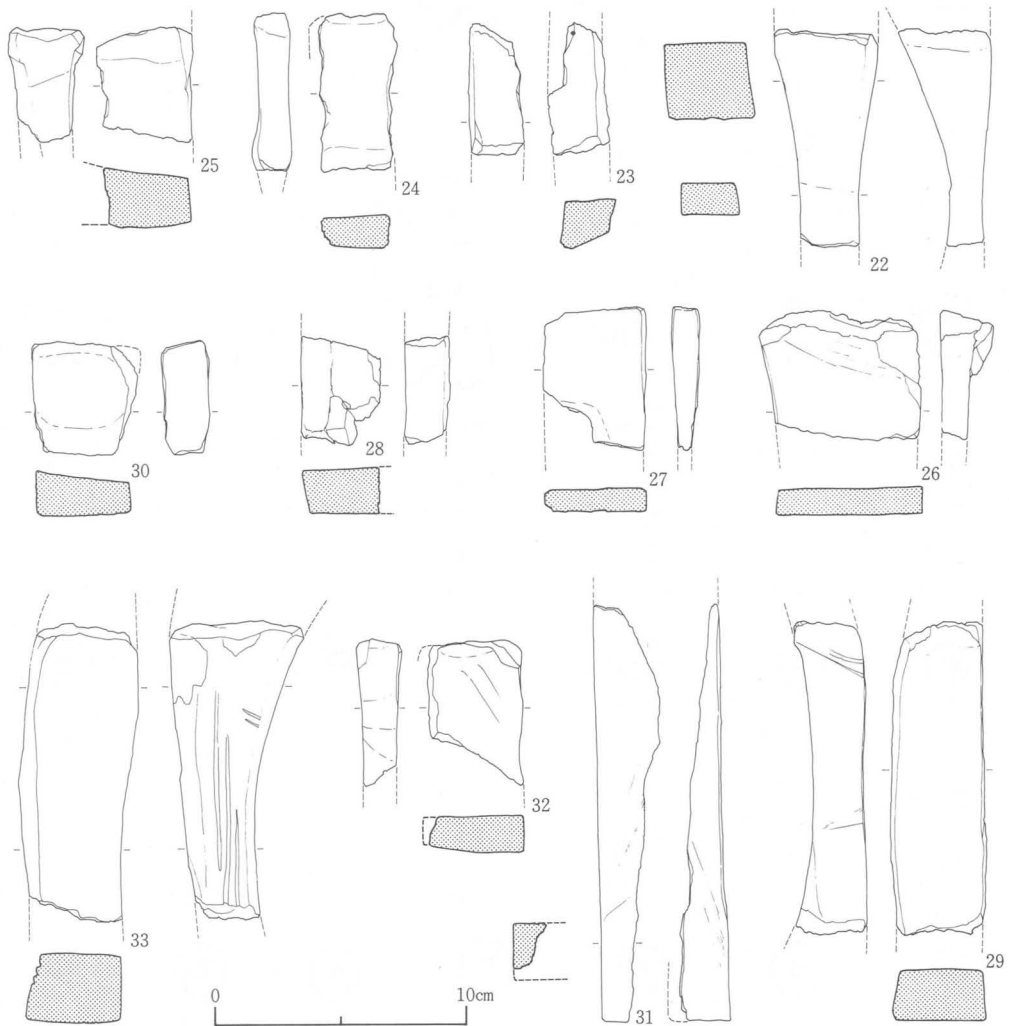
No.1・2・6・8・9トレンチより石鏃と石錐が出土した。No.1・3・4・6・8トレンチより砥石が出土した。

石鏃と石錐は打製のものである。1～16は石鏃である。石鏃は大形のもの(1)や小形のもの(15)などがある。1～12は柳葉形のものである。13・14は平基式、15・16は凹基式の三角形鏃である。17は有茎式のものである。1～6・13～15・17はNo.8トレンチ落ち込み出土。弥生時代前期～中期。7はNo.1トレンチ第11層出土。弥生時代。8～10・16はNo.9トレンチ第13層出土。弥生時代。11はNo.9トレンチ第15層出土。弥生時代。12はNo.6トレンチ第15層出土。弥生時代。18～21は石錐である。上方を幅広につくり、先端に向かって細く尖らせる。18～20はNo.8トレンチ落ち込み出土。弥生時代前期～中期。21はNo.2トレンチ第10層出土。弥生時代。

22～33は砥石である。砥石は長方形を呈するものである。大部分のものは4面を使用しており、磨り減った痕跡が著しい。22はNo.1トレンチ第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。23はNo.3トレンチ第4層出土。16世紀。24～26はNo.4トレンチSK16出土。13～15世紀。27・28はNo.4トレンチ第2層出土。13～15世紀。29はNo.4トレンチSK17出土。13～14世紀。30はNo.6トレンチ第11層出土。12世紀。31・32はNo.6トレンチ第10層出土。12世紀。33はNo.8トレンチ第19層出土。奈良時代。



第88図 石製品実測図

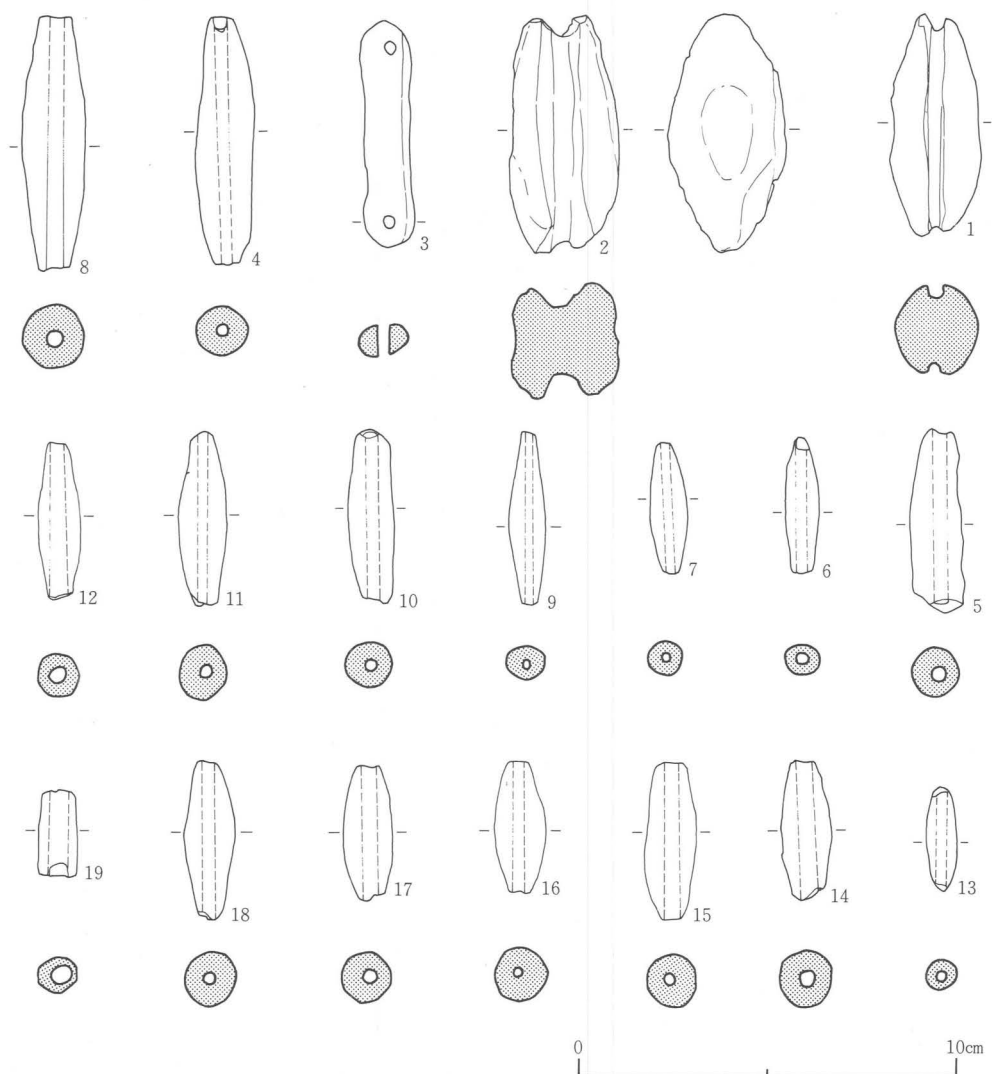


第89図 石製品実測図

4. 土製品 (第90図)

No.1・2・3・4トレンチより出土した。

土錘がある。1・2は長楕円形を呈するものである。長辺の円周上に溝を1周めぐらす。3は長楕円形を呈するものであり、両端に小円孔を1孔ずつ穿っている。4～19は両端で径が最も小さく、中央で最大径を有するものである。中央に孔を穿つ。1～7はNo.1トレンチ第10層出土。弥生時代後期～古墳時代。8はNo.2トレンチ第8層出土。12世紀。9はNo.3トレンチ第11層出土。14世紀以前。10はNo.3トレンチ第6層出土。14世紀。11・12はNo.4トレンチ第2層出土。13～15世紀。13はNo.4トレンチSK17出土。13～14世紀。14はNo.4トレンチSK13出土。13～14世紀。15～19は出土トレンチは不明。



第90図 土製品実測図

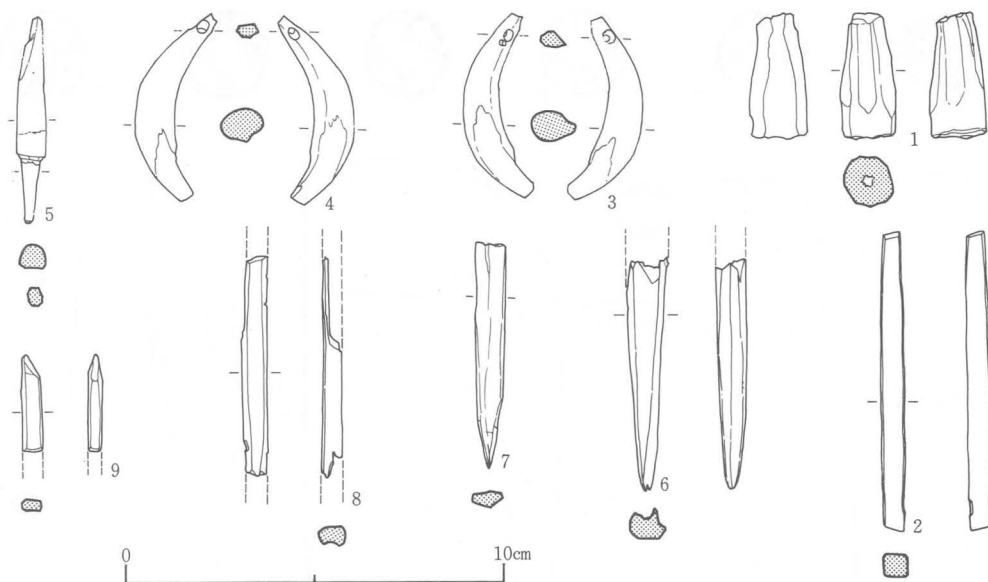
5. 骨角牙製品 (第91図)

No.1・8 トレンチより出土した。

1は柱状を呈する小口の一端を尖らせる。中空であり、尖らせた方に向かって径が小さくなる。鉄製品の14(鏃)に装着されているものの未製品と考えられる。全長3.4cm、最大径1.5cmを測る。角製品。No.1 トレンチSD2より出土。弥生時代後期～奈良時代。

2は長方形を呈するものである。全面に削り痕が顕著に残る。断面形が方形を呈する。用途は不明。全長7.9cm、最大厚0.7cmを測る。角製品。No.1 トレンチ第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

3・4は装身具である。孤状を呈し、小口の一端に小円孔を1孔穿つ。孔は両側より穿って



第91図 骨・角・牙製品実測図

おり、3には未貫通の孔が残る。全長5.0cm、最大径1.0cmを測る。牙製品。No.8トレンチ落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

5は先端部を欠損するが鎌である。茎の部分は段をつけて細く削り出す。削り痕が顕著に残る。残存長5.4cm、最大径0.8cmを測る。角製品。No.8トレンチ落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

6～9は刺突具である。基部と先端部を細く尖らせるが、6・7は先端部、8・9は先端部と基部を欠損する。6は残存長6.1cm、最大径1.0cm、7は残存長6.0cm、最大径0.8cm、8は残存長5.8cm、最大径0.6cm、9は残存長2.6cm、最大径0.5cmを測る。骨製品。No.8トレンチ落ち込み出土。弥生時代前期～中期。

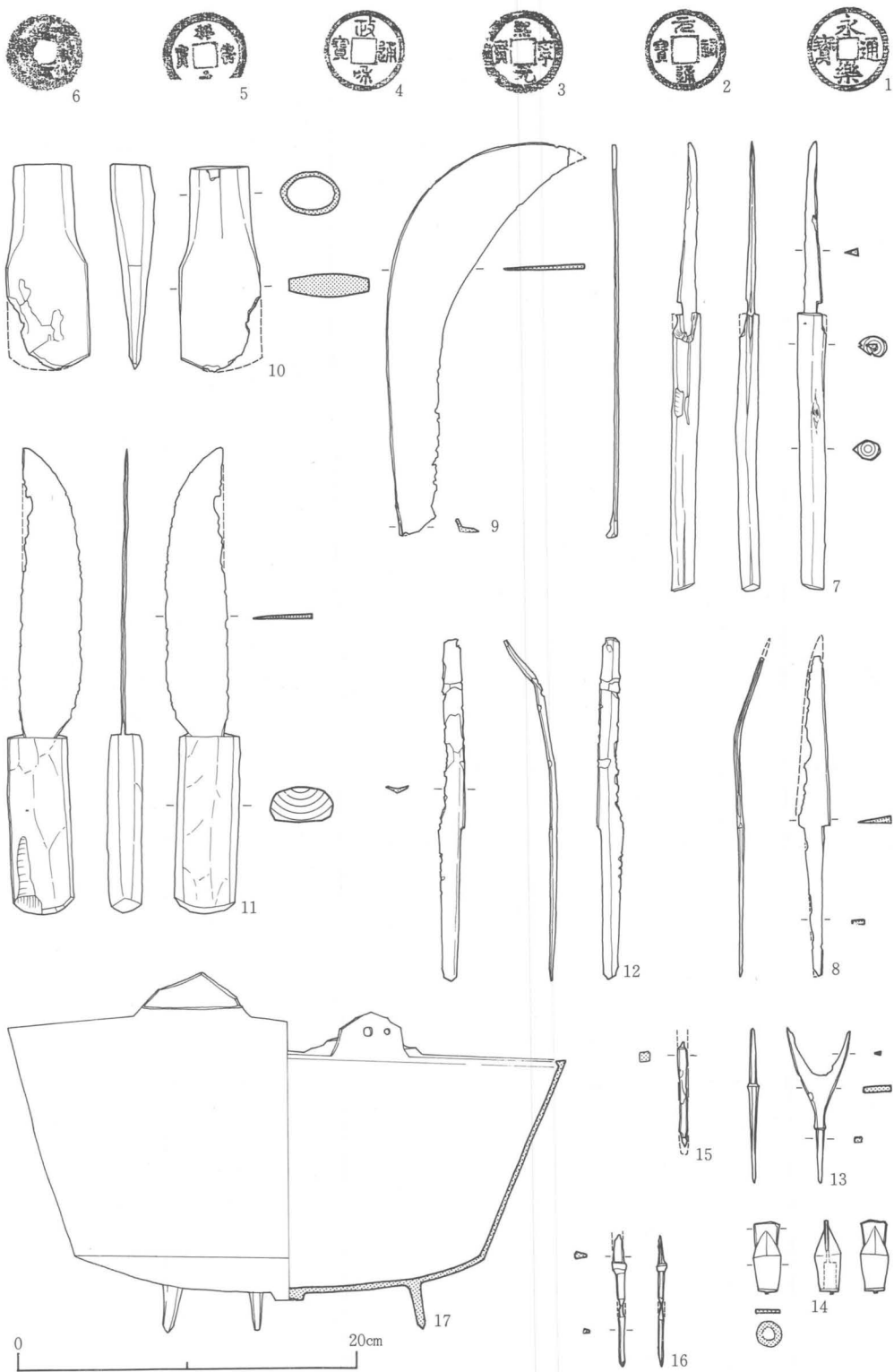
6. 金属器 (第92図)

No.1・3・4・6・8トレンチより出土した。

1～6は銭貨である。1は永楽通宝である。No.3トレンチ第5層出土。2は元祐通宝である。No.4トレンチSK16出土。3は熙寧元宝である。No.4トレンチ出土。4は政和通宝である。No.4トレンチSK16出土。5は祥符元宝である。No.4トレンチSK17出土。6は文字の判読は不明。No.4トレンチ第2m層出土。

7は刀子である。刃部と茎の境は背の部分に段がつく。刃部は先端部に向かって細くなる。刃部の断面形は三角形を呈する。柄は芯持材を使用しており、小口の一端に茎を挿入する穴を穿っている。全長26.3cm、柄長16.2cm、長径1.6cm、短径1.2cmを測る。刃部最大幅1.2cm、最大厚0.4cmを測る。No.1トレンチ第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

8は刀子である。茎と刃部の境は両側に段がつく。刃部は先端部に向かって、茎は基部に向



第92图 金属器实测图

かって細くなる。刃部は刃先を欠損する。土圧によってくの字形に変形する。刃部は断面形が三角形を呈する。残存長18.8cm、最大幅1.8cm、最大厚0.4cmを測る。No.8トレンチ第19層出土。奈良時代。

9は鎌である。刃先を欠損する。基部より刃部中央に向かって幅広になり、先端部で幅狭になる。刃部はJ字形に弯曲する。基部はL字形に折り曲げる。全長23.0cm、最大幅4.8cm、最大厚0.3cmを測る。No.8トレンチ第19層出土。奈良時代。

10は斧である。装着部は柱状を呈し、刃部に向かって撓形に開く。装着部は中空であり、断面形が楕円形を呈する。刃部は中央で最も厚く、側縁に向かって狭くなる。側縁は面をもつ。刃部は尖る。全長12.0cm、装着部長径3.4cm、短径2.5cm、刃部最大幅4.7cm、最大厚1.4cmを測る。第1トレンチ第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

11は庖丁である。背部は直線であり、刃部がJ字形を呈する。基部は柄に装着されており、形状は不明である。刃部は断面形が三角形を呈する。柄は断面形が楕円形を呈する棒材の小口の1端に穴を穿っている。他の小口は円形に削る。柄は割り材を使用する。全長27.4cm、柄長10.5cm、長径3.6cm、短径2.0cm、刃部最大幅3.6cm、最大厚0.3cmを測る。No.6トレンチ第11層出土。近世。

12は用途不明の鉄製品である。側縁の1ヶ所に段がつく。下部の断面形は長方形、上部はゆるいU字形を呈する。土圧によってくの字形に変形する。全長20.0cm、最大幅1.5cm、最大厚0.4cmを測る。No.4トレンチSK16出土。13～15世紀。

13は雁股式の鍬である。先がU字形に開き、茎との境は段がつく。茎は基部に向かって細くなる。全長9.0cm、茎長3.2cmを測る。No.8トレンチ第19層出土。奈良時代。

14は角製品に装着した鍬である。角製品は小口の一端を杭状に尖らせており、中空である。基部は円形、先端部は鍬の厚さで長方形に削る。先端部には逆台形を呈する鍬を装着し、茎が基部に向かって伸びる。鍬は全長4.2cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cmを測る。No.1トレンチ第10層出土。弥生時代後期～奈良時代。

15・16は鍬の茎である。大部分を欠損する。15は残存長6.2cm、最大厚0.6cmを測る。16は茎の境に段がつく。残存長7.8cm、最大幅0.8cm、最大厚0.6cmを測る。No.8トレンチ第19層出土。奈良時代。

17は鍋である。底部は弯曲しており、体部が外上方へ伸びて口縁部に至る。口縁端部は内側へ内傾して面をもつ。口縁部には相対する位置に山形を呈する突起がつく。突起には2孔の円孔を穿つ。底部には先の尖った棒状の脚を3ヶ所に施す。底部中央には円形を呈する突起がつく。口径32.8cm、器高21.0cmを測る。No.6トレンチ第10層出土。近世。

V. 東大阪市水走遺跡出土の中世人骨について

多賀谷 昭

(大阪市立大学医学部解剖学第2講座)

昭和58年、水走遺跡から、12世紀後半とされる土塚墓に、東を頭位として埋葬された人骨1体分が出土した。残存部位は歯を伴う頭蓋骨と四肢の長骨で、胴骨は残っていない。保存状態は全般に不良で、頭蓋骨の顔面上半部や四肢骨の骨端部などはほとんど残っていない。以下に述べるように、仰臥ないし横臥屈位で葬られた熟年以上の男性と推定される。

骨の配置には移動や攪乱の形跡は認められず、埋葬時の状態をほぼ保っていると考えられる。頭部は顔面を右に向け、下顎もこれと自然な位置関係にある。肘・膝関節とも強く屈曲され、下半身は右を下にして横向きの状態で埋葬されている。上半身の姿勢については、上肢骨の保存が著しく悪く、形態のみで左右を判定することが困難で、腹・背何れが上に向いているかを確実に判定することはできないが、頭蓋骨の顔面の向きから考えると、前面を上に向けていたと考えるのが自然である。上肢骨についての以下の記述は、このような埋葬姿勢を仮定している。しかし、下半身がうつ伏せに近い状態であることと、何れの前腕骨も上腕骨の下に位置することからすると、胴体の後面が上に向いていた可能性も否定できない。

頭蓋骨では、左側頭部を除く脳頭部の大部分が残存するが、風化が著しく、細部の形態は観察できない。上顎骨から上の顔面部は失われており、下顎骨はほぼ全体が残っているが、著しく風化している。下顎骨には右第2、第3大臼歯以外の全ての歯が釘植しているが、風化による破損が著しい。何れの歯も咬合面のほぼ全体にわたって象牙質が露出している。なお、これ以外に下顎第3大臼歯と思われる歯の歯冠部が遊離して存在するが、他の歯に比べて保存状態がはるかに良く、別個体のものである可能性がある。

上肢では、左右上腕骨の骨体の大部分、右尺骨の骨体近位 $\frac{2}{3}$ 、右橈骨の骨体の破片、左前腕骨の近位端付近と思われる破片などが残っているが、保存が著しく悪く、左と推定される上腕骨以外は取り上げることができなかった。また、取り上げた骨もその特徴を観察することはできなかった。

下肢骨では、左右の大腿骨、脛骨、腓骨の何れも骨体の大部分が残存する。これらのうち、右大腿骨と左右の脛骨は比較的よく保存されている。大腿骨・脛骨とも太く、計測値は何れも推定値であるが、右大腿骨中央周101(mm)、左脛骨中央周85、最小周76である。土圧による変形のため、骨体断面の形状は観察できない。大腿骨の粗線と殿筋粗面の発達は比較的弱い。

年齢は、歯の咬耗から熟年ないし老年と推定される。性別については、下肢骨の計測値から男性と判定できる。

VI. まとめ

今回の調査は、第1次試掘調査で確認した東西1.1kmに及ぶ範囲内に、合計9箇所の橋脚部分を設定して実施した第2次試掘調査であり、遺跡の範囲を再確認することを目的とした。したがって、遺構の性格や分布等について不明な点も多く、また層位関係も個々の調査地点毎に観察できたのみであり、全体的な考察は以後の調査報告に委ねたい。ここでは、各調査地点で検出した遺構・遺物について判明した点、あるいは、今後の問題点を列記することでまとめたい。

- 1) No.8 トレンチで検出した弥生時代の包含層は、以西では遺物を包含していない。このことから、鬼虎川遺跡の西限がNo.8 トレンチ付近であると推定できる。
- 2) No.6 トレンチで検出したハス田は近世初頭に比定できる。今回の調査では、木製品、鉄製品等の遺物が出土したのみで、人為的なハス田として使用されたかは不明であったが、第4次調査でハス田の畦畔が確認されており、旧玉櫛川の東側に広がる後背湿地を利用してハスの栽培が行われていたことが推定できる。
- 3) No.5 トレンチで検出した堤防は、洪水時に西側一帯を守るための護岸工事であることを先に述べた。第4次調査においても南北両側に堤防がのび、今回のように木杭、葦束等の使用が認められないことから、No.5 トレンチの範囲内は洪水によって決壊した部分にあたると思われる。決壊部分の補修に木杭、葦束を使用したと推定できる。

また、堤防内の出土遺物から12世紀前半頃であると考えられる。この時期は、水走付近を領地としていた在地領主である「水走氏」が開発を開始した時期にあたる。今後、水走遺跡と「水走氏」の関わりを考えるうえで重要な遺構であろう。

- 4) No.1 トレンチでは弥生時代～中世に至る各時期の遺物が出土している。土器、木製品、金属製品、石製品、骨製品などがあるが、中でも奈良時代の祭祀具と考えられているミニチュアカマド、甕、甑の3点セットは興味ある資料である。ミニチュアの3点セットは日常に使用していた土器を小形化し、模倣したものである。平城京や長岡京などの都では多量に出土するが、地方では出土量が少ない。今回の調査で出土した図73～83はカマド、甕、甑がセットで出土しており、河内地方における祭祀を考える上では重要な資料である。
- 5) 奈良時代以降の祭祀遺物として木製の人形がある。木製の人形は人を模したものであり、水辺の祭祀で使用されていたと考えられている。今回の調査ではNo.5 トレンチで図41～43の3点が出土している。いずれも堤防内より出土している。堤防状の遺構は川が氾濫した際に決壊部分を補強した施設である。堤防内に入れた状態で出土しており、人形の使用方法の1例を知ることができる。また、人形は通例では正面観か側面観で表現するが、図43は上部を側面観、下部を正面観で表現しており、1体を2方向から形づくっている。時期は11世紀代のものであり、奈良時代以降の人形の形式変遷を考える上では興味ある資料である。

6) No.1～No.9 トレンチでは量の多少はあるが中世の土器が出土している。中世の土器は近年の研究で産地が明確になりつつある。中でも瓦器椀、羽釜、摺鉢などは研究が進んでいる。当遺跡での瓦器椀の出土例を見ると11～12世紀は大和、楠葉型が比較的多く搬入されていることがわかる。しかし、13世紀以降は比率が低くなり河内、和泉型が中心になる。また、大和型の羽釜、摺鉢も14世紀以降に多く搬入されている。

観 察 表

凡 例

種類	器種	番号	法 量 (cm)		備 考
瓦 器	碗 A ↓ 型式番号	○	○口14.2 → 口径 ○高 5.2 → 器高 ○底 5.6 → 底径 ○径38.6 → 径高指数 径高指数 = 器高 ÷ 口径 × 100 (復) → 復元値 (残) → 残存値 (平) → 平均値		○精緻、黒色砂粒 → 胎土 ----- ○----- → 色調
		9	↓ 土器番号		

(挿図・図版は共通の番号)

No.1 トレンチ (第40~45図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
弥 生 土 器	甕	1	○口14.7 ○高15.3(残)	○卵形を呈する体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は左下がりのタタキ。 ○胴部内面は横方向のハケメ。	○精緻。1~4 mmの石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○赤褐色。 ○SD 3 出土。
		2	○口14.6(復) ○高 3.5(残)	○内弯する胴上半部より口縁部が強く外反する。 ○口縁端部はやや尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は並行のタタキ。 ○胴部内面はハケメの後ナデ。	○精緻。2~5 mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○灰茶色。 ○SD 3 出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥 生 土 器	甕	3	○口16.4(復) ○高 2.8(残)	○口縁部は大きく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内面は横方向のハケメの後横ナデ。外面は横ナデ。	○精緻。1～4mmの石英、長石、クサリ礫、角閃石、雲母を含む。 ○淡灰褐色。 ○SD3出土。
		4	○口15.6(復) ○高 2.7(残)	○口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は尖り気味に面をもつ。	○口縁部内外面は横方向のハケメの後横ナデ。	○精緻。1～4mmの石英、長石、クサリ礫、角閃石、雲母を含む。 ○淡灰褐色。 ○第11層出土。
		5	○口11.5(復) ○高 9.4(残)	○張りのある胴部より口縁部がくの字形に外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横方向のハケメの後横ナデ。 ○胴部外面は並行のタタキ。内面は縦方向のハケメ。接合痕が残る。	○精緻。2～10mmの石英、長石、角閃石、クサリ礫を含む。 ○暗灰茶色。 ○第10層出土。
		6	○口13.5 ○高10.1(残)	○やや張りのある胴部より口縁部が強く外折する。 ○口縁端部は尖り気味に面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は並行及び左下がりのタタキ。内面はナデ。 ○胴部に焼成後の小円孔を穿つ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、雲母、角閃石を含む。 ○暗黒褐色。 ○第10層出土。
		7	○口12.7(復) ○高 6.7(残)	○張りの少ない胴部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は左下がりのタタキ。内面はハケメの後ナデ。接合痕が残る。	○精緻。2～8mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○灰茶色。 ○第11層出土。
		8	○口12.7(復) ○高10.6(残)	○張りのある胴部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は左下がりのタタキ。内面はハケメの後ナデ。接合痕が残る。	○精緻。2～5mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗灰茶色。 ○第10層出土。
		9	○口14.6(復) ○高 2.5(残)	○口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部はやや尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○淡灰褐色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕	10	○口16.0(復) ○高 2.2(残)	○口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。2～5mmの石英、長石、クサリ礫、角閃石を含む。 ○乳灰色。 ○第11層出土。
		11	○口15.0(復) ○高 3.1(残)	○口縁部が強く外折する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、雲母を含む。 ○明灰色。 ○第10層出土。
		12	○口14.9(復) ○高 2.6(残)	○口縁部は外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、角閃石、雲母を含む。 ○暗灰茶色。 ○第10層出土。
	壺	13	○口17.8(復) ○高 2.0(残)	○口縁部は外反する。 ○口縁端部は上方へつまみ上げ気味に終る。	○口縁部内面は横方向のハケメの後横ナデ。外面は横ナデ。	○精緻。2～5mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○茶褐色。 ○第10層出土。
		14	○高14.4(残) ○底 4.0	○底部は上げ底を呈する平底である。 ○胴部は外上方へ伸びた後内傾する。	○胴部外面の下半部は左下がり、上半部は並行のタタキ。内面は横方向のハケメの後ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○灰茶色。 ○第10層出土。
		15	○高 1.9(残) ○底 3.8	○底部は平底である。	○外面は左下がりのタタキ。内面はナデ。	○精緻。2～5mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○暗灰茶色。 ○第10層出土。
	壺	16	○高 5.2(残) ○底 5.2	○底部は上げ底を呈する平底である。 ○胴部は外上方へ大きく伸びる。	○外面は左下がりのタタキの後、縦方向のヘラミガキ。内面は縦方向のヘラミガキ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○灰茶色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
内 式 土 器	壺	17	○口14.0 ○高20.0(残)	○球形の胴部より口縁部が大きく外折する。 ○口縁端部は下方へやや肥厚する。	○口縁部外面はハケメの後横ナデ。内面は横方向のハケメ。 ○胴部外面は縦及び斜め方向のハケメ。内面はハケメの後ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○淡茶褐色。 ○第11層出土。
		18	○口15.9(復) ○高 2.4(残)	○口縁部は外反する。 ○口縁端部はつまみ上げ気味に内側へ肥厚する。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。	○精緻。1mm大の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○灰褐色。 ○第10層出土。
	甕	19	○口18.2(復) ○高10.2(残)	○張りのある胴部より口縁部がくの字形に外折する。 ○口縁端部は上方へつまみ上げ気味に終る。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。 ○胴部外面は左下がりのタタキの後、部分的なハケメ。内面は横及び斜め方向のヘラケズリ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗茶褐色。 ○第10層出土。
		20	○高 2.2(残)	○底部は尖り底である。	○外面は左下がりのタタキ。内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、クサリ礫、雲母を含む。 ○暗黒灰色。 ○第10層出土。
布 留 式 土 器	甕	21	○口18.4 ○高14.0(残)	○球形の胴部より口縁部が内湾気味に外折する。 ○口縁端部は内側へ内傾して面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部内外面は横及び斜め方向のハケメ。	○精緻。2～3mmの石英、長石、角閃石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○SD 2 出土。
		22	○口 9.5(復) ○高 5.8(残)	○球形の胴部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内傾して面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面はナデ。内面はヘラケズリ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、角閃石、雲母を含む。 ○淡灰茶色。 ○第11層出土。
	壺	23	○口11.0(復) ○高 3.2(残)	○口縁部はやや内湾気味に外折する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はハケメの後、横ナデ。	○精緻。2～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡灰茶色。 ○第11層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
布留式土器	小型丸底壺	24	○口 9.2(復) ○高 7.0(残)	○球形の胴部より口縁部が強く外折する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は横及び斜め方向のヘラケズリ。内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡灰褐色。 ○第10層出土。
	壺	25	○高 9.8(残)	○底部は丸底である。 ○球形の胴部より口縁部が大きく外上方へ伸びる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面はハケメの後ナデ。内面は横方向のヘラケズリ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○乳白色。 ○第10層出土。
土師器	甕	26	○口15.0(復) ○高14.2	○底部は丸底である。 ○胴部の張りは少なく、上部で内弯した後、口縁部が外折する。 ○口縁端部はつまみ上げ気味に内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ。部分的に横方向のハケメ。内面は不定方向のヘラケズリ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、雲母を含む。 ○淡緑灰色。 ○第10層出土。
		27	○口16.8(復) ○高 9.0(残)	○胴部の張りは少なく、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終るがやや内側へ肥厚する。	○口縁部外面は横ナデ。内面はハケメの後、横ナデ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ。内面はハケメの後ナデ。	○精緻。1～4mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○灰茶褐色。 ○SD 2 出土。
		28	○口16.5(復) ○高 6.6(残)	○張りのある胴部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終るがやや内側へ肥厚する。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ。内面は炭化物の付着が著しく調整法は不明。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○暗茶褐色。 ○第10層出土。
		29	○口20.0(復) ○高 5.6(残)	○張りの少ない胴部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ。内面はナデ。接合痕が残る。	○精緻。2～3mmの石英、長石、角閃石、クサリ礫、雲母を含む。 ○灰茶褐色。 ○第10層出土。
		30	○口15.8(復) ○高 6.4(残)	○張りのある胴部より口縁部が内弯気味に外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は煤の付着が著しく調整法は不明。内面は斜め方向のヘラケズリ。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡赤褐色。 ○SD 2 出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
土 師	甕	31	○口18.3 ○高15.4	○底部は丸底である。 ○胴部は球形を呈し、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○口縁部と胴部の境には明瞭な稜が残る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は指押え。内面は斜め方向のハケメの後ナデ。	○精緻。1～8mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○暗青灰色。 ○第10層出土。	
		32	○口15.3 ○高11.2(残)	○球形の胴部より口縁部がゆるく外反した後、角度を変えてさらに外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面はハケメの後ナデ。内面はヘラケズリの後ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○白灰褐色。 ○第10層出土。	
		33	○口14.3(復) ○高 6.7(残)	○球形の胴部より口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○口縁部と胴部の境に明瞭な稜が残る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は煤の付着が著しく調整法は不明。内面はハケメの後ナデ。	○やや粗。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。	
		34	○口15.7(復) ○高 4.8(残)	○張りの少ない胴部より口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は面をもつが下方へやや肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部内外面は風化が著しく調整法は不明。	○粗。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡茶褐色。 ○第10層出土。	
		35	○口21.0(復) ○高 7.9(残)	○張りの少ない胴部より口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は縦方向のハケメの後、ナデ。内面はナデ。	○やや粗。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡褐色。 ○第10層出土。	
	器	羽 釜	36	○口22.1(復) ○高 6.8(残)	○口縁部は大きく外反した後、やや内弯する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。 ○鏝はやや下方へ伸び、端面は丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ、内面は横方向のハケメ。 ○鏝は横ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○暗灰茶色。 ○第10層出土。
			37	○口18.5(復) ○高10.6(残)	○張りの少ない胴部より口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は下方へやや肥厚する。 ○鏝は欠損するが剝離痕が残る。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ。内面はナデ。接合痕が残る。	○精緻。1～3mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○淡褐色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	羽釜	38	○口25.8 ○高 9.6(残)	○張りの少ない胴部より口縁部が大きく外折する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鏝は水平方向に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面は縦方向のハケメ。内面はハケメの後ナデ。 ○鏝は横ナデ。	○精緻。1～4mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡褐色。 ○第10層出土。
		39	○口21.2 ○高 7.0	○底部は平底である。 ○体部は内弯気味に立ち上がる。口縁部は外反した後、やや内弯する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は横ナデの後、部分的なヘラミガキ。内面は横ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
	鉢	40	○口18.4(復) ○高 7.6	○形態は39と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は密な横方向のヘラミガキ。内面は横ナデ。	○精緻。1～5mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		41	○口16.6 ○高 6.4	○底部は平底である。 ○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は尖る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は横及び斜め方向のヘラケズリの後ナデ。内面はナデ。 ○体部内面に2段の放射状暗文を施す。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		42	○口19.0(復) ○高 7.2(残)	○体部は外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内傾して面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はハケメの後、ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
43	○口16.3(復) ○高 5.6(残)	○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は風化が著しく調整法は不明。内面はナデ。 ○体部内面は放射状の暗文の上に斜格子の暗文を施す。	○やや粗。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。		

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	鉢	44	○口16.5(復) ○高 6.2	○底部は丸底である。 ○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面は風化が著しく調整法は不明。 ○体部内面に放射状の暗文を施す。	○粗。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		45	○口12.6(復) ○高 6.2	○底部は丸底である。 ○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部が内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。2～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		46	○口13.3 ○高 6.1	○底部は丸底に近い平底である。 ○体部は外上方へ伸び、口縁部がわずかに外反する。 ○口縁端部は内傾して面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメの後ナデ。内面は横及び斜め方向のハケメ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡緑灰色。 ○第10層出土。
	杯	47	○口12.6(復) ○高 3.8(残)	○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部の外面は上半を横方向のヘラミガキ、下半をナデ。内面はナデ。 ○体部内面には放射状の暗文を施す。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○乳青灰色。 ○第10層出土。
		48	○口10.8 ○高 3.2	○底部は平底に近い丸底である。 ○体部は外上方へ伸び、口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内側に沈線をめぐらす。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面は横ナデ。 ○体部内面に放射状の暗文を施す。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○淡褐色。 ○第10層出土。
		49	○口12.4(復) ○高 3.6(残)	○体部は外上方へ伸び、口縁部がやや内弯する。 ○口縁端部は内側へやや肥厚する。	○口縁部外面はヘラケズリ、内面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ、内面は横ナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		50	○口14.4(復) ○高 4.0(残)	○体部は外上方へ伸び、口縁部がやや内弯する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横ナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 器	杯	51	○口13.3(復) ○高 3.0(残)	○形態は50と同様。	○調整は50と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		52	○口14.2(復) ○高 3.4(残)	○体部は外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○調整は50と同様。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		53	○口13.5(復) ○高 3.0(残)	○形態は52と同様。	○調整は50と同様。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡乳褐色。 ○第10層出土。
		54	○口11.6(復) ○高 2.7(残)	○形態は52とほぼ同様であるが、口縁端部が尖り気味に終る。	○調整は50と同様。	○やや粗。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		55	○口14.0(復) ○高 3.2(残)	○形態は52と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はハケメの後、ナデ。	○精緻。1～4mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		56	○口14.7(復) ○高 3.0(残)	○形態は52とほぼ同様であるが、口縁端部が尖り気味に終る。	○調整は50と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		57	○口13.5(復) ○高 3.1(残)	○体部は外上方へ伸び、口縁部がやや内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。	○調整は50と同様。	○やや粗。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 器	師 杯	58	○口14.3(復) ○高 3.0(残)	○形態は57と同様。	○調整は50と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		59	○口13.7(復) ○高 3.0(残)	○形態は57と同様。	○調整は50と同様。	○やや粗。1～5mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		60	○口14.5(復) ○高 2.9(残)	○形態は57と同様。	○調整は50と同様。	○やや粗。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		61	○口14.6(復) ○高 3.2(残)	○形態は57と同様。	○調整は50と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		62	○口14.5(復) ○高 3.6(残)	○形態は57と同様。	○調整は50と同様。	○やや粗。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		63	○口13.9(復) ○高 3.6(残)	○形態は57と同様。	○調整は50と同様。	○やや粗。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		64	○口14.0(復) ○高 2.9(残)	○形態は57と同様。	○調整は50と同様。	○やや粗。1～2mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土器	杯	65	○口14.2(復) ○高 3.1(残)	○形態は57と同様。	○調整は50と同様。	○やや粗。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		66	○口18.2(復) ○高 3.6(残)	○体部と口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は横方向のヘラミガキ。内面は横ナデ。 ○体部内面には2帯の連結輪状の暗文を施す。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
	皿	67	○口15.7(復) ○高 2.1(残)	○体部が外上方へ伸び、口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		68	○口14.7(復) ○高 2.0(残)	○体部と口縁部が内弯気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部と体部内外面は横ナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		69	○口15.9 ○高 1.9	○底部は平底である。 ○体部と口縁部が外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		70	○口16.2(復) ○高 2.4	○形態は67と同様。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		71	○口14.5(復) ○高 2.0	○形態は67と同様。	○風化が著しく調整法は不明。	○粗。1～2mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	皿	72	○口14.6(復) ○高 2.1(残)	○体部が外上方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横ナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
	ミニニ	73	○口 6.3 ○高 8.6 ○底12.4	○口縁部と底部は中空である。 ○体部は八字形を呈する。体部の1ヶ所に台形を呈する切り込みを入れ焚口とする。 ○口縁端部と底部端面は面をもつ。	○体部外面は指押え。外面は凹凸が著しい。接合痕が残る。内面は横方向のハケメの後ナデ。	○精緻。1～4mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
	チユア	74	○口 6.4 ○高 8.1 ○底12.8	○形態は73と同様。	○調整は73と同様。	○精緻。1～4mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
	カマ	75	○口 5.4(復) ○高 8.8 ○底12.9(復)	○形態は73と同様。	○調整は73と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○青灰色。 ○第10層出土。
	ド	76	○口 6.3(復) ○高 8.5 ○底12.2(復)	○形態は73と同様。	○調整は73と同様。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○青灰色。 ○第10層出土。
	ミニチュア・甕	77	○口 7.2 ○高 4.0	○底部は丸底に近い尖底である。 ○体部は外上方へ立ち上がり、口縁部が水平方向に外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。凹凸が著しい。内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○灰色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土	ミニチユア	78	○口 7.5 ○高 4.7	○底部は尖底である。 ○体部が逆円錐形に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部がやや面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。凹凸が著しい。内面はナデ。内外面に接合痕が残る。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		79	○口 7.2 ○高 4.4	○形態は78と同様。	○調整は78と同様。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		80	○口 8.0 ○高 4.6	○形態は78と同様。	○調整は78と同様。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
器	ミニチユア 甑	81	○口 7.5(復) ○高 4.0(残)	○底部は丸底である。 ○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部が内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		82	○口 7.1(復) ○高 3.9(残)	○形態は81と同様。	○調整は81と同様。	○精緻。1～5mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		83	○口 6.5 ○高 4.6	○体部が外上方へ伸び、口縁部がわずかに外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○底部は焼成後に穿孔する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面はハケメの後ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	ミ	84	○口 8.2(復) ○高 4.0(残)	○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内傾して面をもち、浅い沈線を施す。 ○体部と口縁部の境に明瞭な稜が残る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
		85	○口 8.4(復) ○高 4.5(残)	○形態は84と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はハケメの後、ナデ。	○精緻。1～4mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
	チ	86	○口 8.6 ○高 5.3	○形態は84と同様。	○調整は84と同様。	○精緻。1～8mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		87	○口 8.8(復) ○高 3.6(残)	○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○乳青灰色。 ○第10層出土。
	ア	88	○口 8.9(復) ○高 3.2(残)	○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○口縁部と体部の境に明瞭な稜が残る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		89	○口 9.1 ○高 6.1	○形態は88と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面はハケメの後、ナデ。 ○体部外面に接合痕が残る。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
	壺	90	○口 9.6 ○高 6.7	○形態は88と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。 ○体部外面に接合痕が残る。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	ミニチュア・壺	91	○口 9.8(復) ○高 4.3(残)	○形態は88と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え、内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
須恵器	墨書土器	92	○— ○—	○杯の細片と考えられる。 ○杯部外面に「季」の文字を書く。	○内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○明灰色。 ○第10層出土。
土師器	墨書土器	93	○高 2.2(残) ○底 7.4	○台付杯の底部である。 ○体部は内弯気味に立ち上がる。底部は貼り付け高台であり、八字形に開く。 ○底部裏面に「本」の文字を書く。	○体部内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
須	蓋	94	○口15.0 ○高 4.2	○やや丸い天井部より、口縁部が外方へ広がる。 ○口縁端部は面をもち、わずかに沈線がめぐる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○天井部外面の $\frac{2}{3}$ は回転ヘラケズリ、他は横ナデ。 ○天井部内面は横ナデ。 ○見込み部はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		95	○口10.8(復) ○高 3.8	○丸い天井部より、口縁部が外方へ広がる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○天井部外面の $\frac{2}{3}$ は回転ヘラケズリ、他は横ナデ。 ○天井部内面は横ナデ。	○精緻。1～4mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青黒灰色。 ○第10層出土。
恵 器	杯	96	○口11.8(復) ○高 4.2(残)	○受部は外上方へ伸び、端部が尖り気味に終る。 ○口縁部は内傾した後、わずかに外反する。 ○口縁端部は面をもち、沈線をめぐらす。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面の下半は回転ヘラケズリ、上半は横ナデ。 ○体部内面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		97	○口13.2(復) ○高 4.4(残)	○受部は外上方へ伸び、端部が丸く終る。 ○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面の下半は回転ヘラケズリ、上半は横ナデ。 ○体部内面は横ナデ。	○精緻。1～5mmの石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
		98	○口17.4(復) ○高 2.1(残)	○体部が外方へ伸び、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○乳灰色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須 惠 器	杯	99	○口14.2(復) ○高 2.6(残)	○形態は98と同様。	○調整は98と同様。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○乳青褐色。 ○第10層出土。
	壺	100	○高13.2(復)	○底部は丸底である。 ○体部はやや扁球形を呈し、口縁部が外反する。 ○口縁端部は欠損する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はカキメ、内面は横ナデ。 ○底部外面はカキメ、内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
	甕	101	○口18.4(復) ○高 2.2(残)	○口縁部は大きく外反する。 ○口縁端部がやや下方へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡黒灰色。 ○第10層出土。
	杯	102	○口16.0(復) ○高 4.4(残)	○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部と体部の内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○乳灰色。 ○第10層出土。
	鉢	103	○高 5.2(残)	○底部は平底である。 ○体部は内弯気味に立ち上がる。	○体部内外面は横ナデ。	○精緻。2～5mmの石英、長石を含む。 ○暗青灰色。 ○第10層出土。
土 師 器	甑	104	○口32.1(復) ○高 5.9(残)	○体部と口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はハケメの後、ナデ。	○やや粗。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡黄褐色。 ○第10層出土。
	製塩	105	○口17.8 ○高16.5	○底部は尖り気味の丸底である。 ○体部は球形を呈し、口縁部が上方へ大きく伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。指頭圧痕が顕著に残る。	○精緻。1～5mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。 ○第10層出土。
	土器	106	○口 4.5(復) ○高 3.5(残)	○張りの少ない体部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○外面は並行のタタキ、内面はナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗褐色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土器	製塩土器	107	○口 4.9(復) ○高 4.2(残)	○形態は106と同様。	○調整は106と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○褐灰色。 ○第10層出土。
	蓋	108	○高 1.5(残)	○円形のつまみが残る。	○体部外面はヘラミガキ、内面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青灰色。 ○第10層出土。
	甌	109	○ ○	○角状を呈する把手である。	○把手はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡黄褐色。 ○第10層出土。
	高杯	110	○口16.4 ○高 4.2(残)	○杯部は浅い皿状を呈し、内弯気味に立ち上がる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。 ○杯部下半の外面に稜がつく。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○杯部外面は横方向のヘラミガキ。内面は横ナデ。 ○杯部内面に放射状の暗文を施す。	○粗。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡青褐色。 ○第10層出土。
	中皿A	111	○口10.7(復) ○高 1.4	○底部は平底である。 ○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○白色系。 ○第10層出土。
黒色土器	椀	112	○口16.1(復) ○高 4.9 ○底 7.4(復) ○径30.4	○平底の底部より体部が内弯気味に深く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。 ○高台は低く、断面形が台形を呈する。	○口縁部外面は横ナデ。内面は密なヘラミガキ。 ○体部外面は指押え。内面は密なヘラミガキ。 ○高台は横ナデ。 ○内面のみを黒色に燻す。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○乳茶色。 ○第10層出土。
瓦器	椀A ₁	113	○口15.4 ○高 5.2 ○底 5.6 ○径33.8	○平底の底部より体部が外上方へ伸びる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内側に沈線をめぐらす。 ○高台は低く、断面形が逆台形を呈する。	○外面は4分割の密なヘラミガキ、内面も密なヘラミガキ。 ○見込み部は*状の暗文を施す。	○精緻。1～2mmの砂粒を含む。 ○黒色。 ○第9層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	椀 A ₁	114	○口15.7 ○高 5.1 ○底 6.3 ○径32.5	○形態は113と同様。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○調整は113と同様。 ○見込み部は斜格子の暗文を施す。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒色。 ○第9層出土。
	椀 A ₂	115	○口15.6(復) ○高 4.8(残)	○体部は内弯気味に深く立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。内面に沈線をめぐらす。	○口縁部外面は横ナデ。内面はヘラミガキ。 ○体部外面は密な分割のヘラミガキ。分割数は不明。内面はうろこ状のヘラミガキの上に連続する細いヘラミガキ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒色。 ○第8層出土。
	椀 B ₆	116	○口10.0(復) ○高 2.1(残)	○体部は浅い皿状を呈し、口縁部がやや内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、渦巻状の暗文。2重残存。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○淡黒灰色。 ○第6層出土。
	摺鉢 A	117	○口31.5(復) ○高 4.1(残)	○口縁部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。 ○体部外面はヘラケズリ、内面は横方向のハケメ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○暗黒灰色。 ○第6層出土。

No. 2 トレンチ (第46図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	甕	118	○口17.6(復) ○高 6.1(残)	○張りのある体部より口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は面をもち、内側に沈線をめぐらす。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は綾杉状のタタキ。内面はハケメの後、ナデ。	○精緻。2～3mmの石英、長石、雲母を含む。 ○淡黒灰色。 ○第5層出土。
	椀 A ₅	119	○口13.6 ○高 3.3(残)	○体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内側に沈線をめぐらす。	○口縁部内外面は横ナデの後、部分的なヘラミガキ。 ○体部外面は指押えの後、粗いヘラミガキ。内面は横ナデの後、粗いヘラミガキ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。 ○第6層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考		
瓦	A ₄	椀	120	<ul style="list-style-type: none"> ○口13.4 ○高 4.9 ○底 5.7 ○径36.7 <ul style="list-style-type: none"> ○体部は内弯気味に深く立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内側に沈線をめぐらす。 ○高台は高く、断面形が逆三角形を呈する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部外面は横ナデ、内面はヘラミガキ。 ○体部外面は指押えの後、やや粗いヘラミガキ。内面は密なヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。 	<ul style="list-style-type: none"> ○精緻。1mm大の砂粒を含む。 ○黒灰色。 ○第6層出土。 		
			121	<ul style="list-style-type: none"> ○口15.0(復) ○高 4.4(残) <ul style="list-style-type: none"> ○形態は120と同様。 	<ul style="list-style-type: none"> ○調整は120と同様。 	<ul style="list-style-type: none"> ○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗黒灰色。 ○第6層出土。 		
			122	<ul style="list-style-type: none"> ○口14.8 ○高 4.3(残) <ul style="list-style-type: none"> ○形態は120と同様。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押えの後、やや粗いヘラミガキ。内面は縦方向のハケメの後、密なヘラミガキ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○暗灰黒色。 ○第6層出土。 		
	A ₃	椀	123	<ul style="list-style-type: none"> ○口16.7(復) ○高 4.1(残) <ul style="list-style-type: none"> ○体部は深く内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内側に沈線をめぐらす。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内外面は横ナデの後ヘラミガキ。 ○体部外面は指押えの後、内面よりやや粗いヘラミガキ。内面は密なヘラミガキ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗黒灰色。 ○第6層出土。 		
			B ₁	椀	124	<ul style="list-style-type: none"> ○口14.2 ○高 5.5 ○底 4.9 ○径38.7 <ul style="list-style-type: none"> ○体部はやや深く内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○底部はやや低く、断面形が逆三角形を呈する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はやや粗いヘラミガキ。 ○見込みは格子状の暗文。 	<ul style="list-style-type: none"> ○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗黒灰色。 ○第7層出土。
					A ₅	椀	125	<ul style="list-style-type: none"> ○口14.3(復) ○高 3.0(残) <ul style="list-style-type: none"> ○やや浅い体部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内側に沈線をめぐらす。
126	<ul style="list-style-type: none"> ○口13.7(復) ○高 4.6(残) <ul style="list-style-type: none"> ○形態は125と同様。 	<ul style="list-style-type: none"> ○調整は125と同様。外面は風化が著しく調整法は不明。 	<ul style="list-style-type: none"> ○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒灰色。 ○第7層出土。 					
127	<ul style="list-style-type: none"> ○高 3.1(残) ○底 4.2(復) <ul style="list-style-type: none"> ○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。 ○高台はやや高く、断面形が逆三角形を呈する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体部外面は指押え。内面は密なヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。 	<ul style="list-style-type: none"> ○精緻。1～2mmの砂粒を含む。 ○黒灰色。 ○第7層出土。 					

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦	椀	128	○口14.2(復) ○高 4.8(残)	○体部はやや深く内弯気味に立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内面に沈線をめぐらす。	○口縁部内外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面は指押えの後、内面よりやや粗いヘラミガキ。内面は密なヘラミガキ。	○精緻。砂粒を含まない。 ○暗黒灰色。 ○第8層出土。
		A ₃ 129	○口15.6(復) ○高 4.0(残)	○形態は128と同様。	○調整は128と同様。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗黒灰色。 ○第8層出土。
土師器	小皿 B ₁	130 ・ 131	○口 8.6(平) ○高 1.6(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○褐色系。 ○第7層出土。
	大皿 A	132	○口16.6(復) ○高 1.9	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。砂粒をほとんど含まない。 ○褐色系。 ○第9層出土。
須恵器	杯	133	○口14.6 ○高 3.0 ○底 9.0	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面と底部外面は横ナデ。 ○見込みはナデ。	○粗。2～5mmの石英、長石、クサリ礫、雲母を含む。 ○淡茶色。 ○第9層出土。
		134	○口11.0(復) ○高 3.1(残)	○受部は外上方へ伸び、端部が丸く終る。 ○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。	○内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○青灰色。 ○出土層位は不明。
		135	○口11.7(復) ○高 1.8(残)	○受部は外上方へ伸び、端部は丸く終る。 ○口縁部は短く内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○青灰色。 ○出土層位は不明。
		136	○口12.9(復) ○高 2.5(残)	○形態は135と同様。	○調整は135と同様。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○暗青灰色。 ○第7層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	椀 A ₅	137	○口15.6(復) ○高 4.2(残)	○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内側に沈線をめぐらす。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は風化が著しく調整法は不明。内面は密なヘラミガキ。	○精緻。1～2mmの砂粒を含む。 ○黒灰色。 ○出土層位は不明。
		138	○口13.7(復) ○高 3.6(残)	○形態は137と同様。	○調整は137と同様。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○淡黒灰色。 ○出土層位は不明。

No.3 トレンチ (第47図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	大 皿 B ₁	139	○口15.0(復) ○高 1.7(残)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横ナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第3層出土。
			小 皿 C ₁	140 } 142	○口 7.0(平) ○高 1.6(平)	○平底の底部より体部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。
	小 皿 C ₂	143	○口 6.2(復) ○高 1.3(残)	○上げ底を呈する底部より体部と口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横ナデ。	○精緻。1～2mmのクサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第5層出土。
	小 皿 B ₁	144	○口 8.4(復) ○高 1.4(残)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。1～2mmのクサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○SD 2 出土。
	小 皿 C ₁	145	○口 7.3(復) ○高 1.9(残)	○口縁部が大きく外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmのクサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第3b層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	中皿 C ₁	146 ・ 147	○口10.2(平) ○高 1.3(平)	○口縁部が大きく外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmのクサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第4層出土。
	中皿 C ₂	148	○口10.4(復) ○高 1.7(残)	○体部と口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第5層出土。
	小皿 C ₁	149	○口 8.0 ○高 1.4	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第6層出土。
		150	○口 8.0 ○高 1.5	○平底の底部より体部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第6層出土。
	中皿 C ₁	151	○口10.9(復) ○高 2.1(残)	○体部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横ナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○出土層位は不明。
	大皿 B ₁	152 ・ 153	○口14.2(平) ○高 2.5(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第6層出土。
瓦 器	羽釜 K	154	○口26.4(復) ○高 3.5(残)	○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鏝は短く外上方へ伸び、端部が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面はナデ。	○精緻。1～2mmの砂粒を含む。 ○灰色。 ○SD 2 出土。
土 師 器	羽釜 A	155	○口27.0(復) ○高 2.5(残)	○口縁部は折れ曲るように内弯する。 ○口縁端部は外側へ巻き込むように肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内面は横方向のヘラケズリ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○乳褐色。 ○第3c層出土。
	羽釜 E	156	○口30.8(復) ○高 3.8(残)	○張りのある体部より口縁部が強く外折する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面は横方向のヘラケズリ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○乳褐色。 ○第5層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜	157	○口27.8(復) ○高 3.1(残)	○張りのある体部より口縁部が短く内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鏝は短く外上方へ伸び、端部が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1～4mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第5層出土。
		158	○口15.1(復) ○高 4.7(残)	○形態は157と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面はハケメの後ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○黒灰色。 ○第4層出土。
	K	159	○口21.8(復) ○高 4.3(残)	○形態は157と同様。	○調整は157と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第5層出土。
	摺鉢B	160	○口31.7(復) ○高 6.6(残)	○体部が逆八字形に開き、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はナデ。	○やや粗。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○灰色。 ○第2層出土。
須恵器	捏鉢E	161	○口29.8(復) ○高 5.9(残)	○体部が逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は上方へ拡張し、面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡青灰色。 ○第6層出土。
		162	○口26.6(復) ○高 4.5(残)	○形態は161とほぼ同様であるが、口縁端部を上下へ拡張する。	○調整は161と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青灰色。 ○第5層出土。
瓦器	鉢	163	○口38.9(復) ○高 5.9(残)	○体部は外上方へ伸びる。 ○口縁端部はやや丸く終る。	○内外面は横方向のヘラミガキ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○黒色。 ○第4層出土。
輸入磁器	青磁・椀	164	○口14.6(復) ○高 3.1(残)	○体部は逆八字形に開き、口縁部がわずかに外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。 ○体部外面にヘラ描きによる蓮弁文。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 淡青灰色。 ○釉 緑青色。 ○第5層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入 磁器	白磁・台付皿	165	○口 7.2(復) ○高 1.8 ○底 2.4(復)	○平底の底部より体部が大きく逆八字形に開く。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低くアーチ状に決る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 ○釉 灰白色。 ○第4層出土。
	白磁・椀	166	○口 9.6(復) ○高 5.9 ○底 3.9(復)	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は高く、断面形が逆三角形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 ○釉 淡青白色。 ○第4層出土。
瓦	椀 A	167	○高 0.8(残) ○底 4.6(復)	○平底の底部である。 ○高台は低く、断面形が三角形を呈する。	○内外面はナデ。 ○見込みに連結輪状の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○黒色。 ○第4層出土。
	椀	168	○口10.4(復) ○高 2.3(残)	○浅い皿状を呈する体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、渦巻状の暗文。3重残存。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰色。 ○第4層出土。
		169	○口12.4(復) ○高 3.1(残)	○やや深い皿状を呈する体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○底部は消滅。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面に指押え。 ○体部内面はナデの後、8重の渦巻状の暗文。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第4層出土。
		B。	170	○口12.8(復) ○高 2.8(残)	○形態は169と同様。	○調整は169と同様。 ○体部内面に渦巻状の暗文。3重残存。
	椀 A	171	○高 4.0(残) ○底 4.4	○平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がる。 ○高台は低く、断面形が三角形を呈する。	○体部外面は指押え。内面はナデの後、やや粗いヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第6層出土。
	椀 B。	172	○口 9.6(復) ○高 2.8(残)	○形態は169と同様。	○調整は169と同様。 ○体部内面に渦巻状の暗文。5重残存。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○灰色。 ○出土層位は不明。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 B ₆	173	○口12.0(復) ○高 2.3(残)	○形態は169と同様。	○調整は169と同様。 ○体部内面に渦巻状の暗文。 2重残存。	○精緻。1～3mmの砂粒を含む。 ○黒灰色。 ○出土層位は不明。

No.4 トレンチSK17 (第48～54図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 B ₄	174	○口15.4 ○高 3.5 ○底 4.4 ○径22.7	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みは7条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。
		175	○口14.6 ○高 3.5 ○底 3.5 ○径24.0	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは5条の平行線の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒褐色。
		176	○口14.0 ○高 3.8 ○底 3.0 ○径27.1	○形態は174と同様。 ○高台の粘土紐が途中で切れる。	○調整は174と同様。 ○見込みは4条の平行線の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗黒灰色。
		177	○口14.0 ○高 3.7 ○底 2.1 ○径26.4	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは9条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○灰褐色。
		178	○口14.0 ○高 3.3 ○底 2.6 ○径23.6	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは2条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗灰褐色。
		179	○口13.7 ○高 3.4 ○底 3.0 ○径24.8	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは6条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰色。
		180	○口13.6 ○高 3.6 ○底 2.6 ○径26.5	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは6条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
瓦	椀	181	○口13.6 ○高 3.5 ○底 2.0 ○径25.7	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは 3 条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
		182	○口13.6 ○高 3.3 ○底 3.3 ○径24.3	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは 3 条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。	
		183	○口13.5 ○高 3.4 ○底 3.9 ○径25.2	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは 7 条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○暗黒褐色。	
		184	○口13.5 ○高 3.4 ○底 3.0 ○径25.2	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは 3 条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。	
		185	○口13.6 ○高 3.5 ○底 3.9 ○径25.7	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは 5 条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。	
		186	○口13.5 ○高 3.4 ○底 4.0 ○径25.2	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは 3 条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。	
	器	B ₄	187	○口13.6 ○高 3.8 ○底 3.8 ○径27.9	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは 4 条の平行線の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。
			188	○口13.4 ○高 3.5 ○底 3.6 ○径26.1	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは 6 条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。
			189	○口13.2 ○高 3.7 ○底 3.1 ○径28.0	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは 5 条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	椀	190	○口13.3 ○高 3.7 ○底 3.5 ○径27.8	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは5条の平行線の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。
		191	○口13.4 ○高 3.1 ○底 2.7 ○径23.4	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは5条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の砂粒を含む。 ○灰褐色。
		192	○口13.2 ○高 3.4 ○底 3.6 ○径25.8	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは5条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡灰褐色。
		193	○口13.6(復) ○高 3.2 ○底 2.1(復) ○径23.5	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは平行線の暗文。 6条残存。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		194	○口13.0(復) ○高 3.3 ○底 3.5(復) ○径25.4	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは平行線の暗文。 5条残存。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○淡灰褐色。
		195	○口12.6(復) ○高 3.2 ○底 2.0(復) ○径25.4	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みはジグザグの暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。
	B ₄	196	○口13.4 ○高 3.4 ○底 3.0 ○径25.4	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは10条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		197	○口12.3 ○高 3.0 ○底 2.8 ○径24.4	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは3条の平行線の暗文。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		198	○口12.6(復) ○高 3.0 ○底 2.5(復) ○径23.8	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは平行線の暗文。 1条残存。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考		
瓦	椀	199	○口12.3 ○高 3.5 ○底 2.2 ○径28.5	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは3条の平行線の暗文。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○黒灰色。		
		200	○口13.0(復) ○高 3.3 ○底 1.9(復) ○径25.4	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは平行線の暗文。9条残存。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。		
		201	○口13.0(復) ○高 3.3 ○底 3.6(復) ○径25.4	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは平行線の暗文。2条残存。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。		
		202	○口12.9 ○高 3.5 ○底 2.6 ○径27.1	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは5条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。		
		203	○口12.7 ○高 3.2 ○底 2.4 ○径25.2	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは3条の平行線の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。		
		204	○口11.8 ○高 4.1 ○底 2.1 ○径34.7	○形態は174と同様。 ○高台は断面形が逆台形。	○調整は174と同様。 ○見込みは2条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡灰色。		
	器	B ₄	205	○口12.6(復) ○高 3.0 ○底 2.5(復) ○径23.8	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは平行線の暗文。3条残存。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。	
			206	○口12.8 ○高 3.4 ○底 2.4 ○径26.6	○形態は174と同様。	○調整は174と同様。 ○見込みは6条の平行線の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
		椀	A ₅	207	○口12.4(復) ○高 3.8 ○底 4.2(復) ○径30.6	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、端面に沈線をめぐらす。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部外面は横ナデの後、粗いヘラミガキ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、外面より密なヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦	椀	208	○口14.0(復) ○高 3.0(残)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		209	○口13.0(復) ○高 3.3(残)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		210	○口14.2(復) ○高 2.3(残)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		211	○口13.7(復) ○高 3.2(残)	○形態は207と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はハケメの後、ヘラミガキ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		212	○口12.8(復) ○高 2.7(残)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		213	○口11.8(復) ○高 3.3(残)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		214	○口11.2(復) ○高 3.3(残)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		215	○高 0.7(残) ○底 4.6(復)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		216	○高 1.0(残) ○底 5.0(復)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		217	○高 1.0(残) ○底 5.0(復)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。 ○見込みは連結輪状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
器	A ₅	218	○高 2.0(残) ○底 4.6(復)	○形態は207と同様。	○調整は207と同様。 ○見込みは連結輪状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦	椀	219	○口14.0 ○高 3.5 ○底 3.5 ○径25.0	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○底部は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、6重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。
		220	○口13.8 ○高 3.8 ○底 4.0 ○径27.5	○形態は219と同様。	○調整は219と同様。 ○体部内面に6重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰色。
		221	○口13.7 ○高 3.5 ○底 3.0 ○径25.5	○形態は219と同様。	○調整は219と同様。 ○体部内面に6重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。
		222	○口14.1 ○高 3.6 ○底 4.1 ○径25.5	○形態は219と同様。	○調整は219と同様。 ○体部内面に4重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		223	○口14.6(復) ○高 3.0 ○底 4.3 ○径20.5	○形態は219と同様。 ○高台の断面形は逆台形。	○調整は219と同様。 ○体部内面に5重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		224	○口13.7(復) ○高 3.0 ○底 3.7(復) ○径21.9	○形態は219と同様。 ○高台の断面形は逆台形。	○調整は219と同様。 ○体部内面に4重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		225	○口13.2 ○高 3.3 ○底 3.3 ○径25.0	○形態は219と同様。	○調整は219と同様。 ○体部内面に8重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		226	○口12.4(復) ○高 3.5 ○底 2.5(復) ○径28.2	○形態は219と同様。	○調整は219と同様。 ○体部内面に4重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		227	○口12.2 ○高 3.2 ○底 3.2 ○径26.2	○形態は219と同様。 ○高台の断面形は逆台形。	○調整は219と同様。 ○体部内面に7重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
瓦	椀	228	○口12.6(復) ○高 3.5 ○底 3.0(復) ○径27.8	○形態は219と同様。 ○高台の断面形は逆台形。	○調整は219と同様。 ○体部内面に4重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
		229	○口13.0 ○高 3.0 ○底 3.4 ○径23.1	○形態は219と同様。 ○高台の断面形は逆台形。	○調整は219と同様。 ○体部内面に5重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。	
		230	○口12.8 ○高 3.0 ○底 2.5 ○径23.4	○形態は219と同様。	○調整は219と同様。 ○体部内面に6重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡灰褐色。	
		231	○口12.8 ○高 3.2 ○底 3.4 ○径25.0	○形態は219と同様。	○調整は219と同様。 ○体部内面に6重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。	
		232	○口13.0 ○高 3.3 ○底 4.3 ○径25.4	○形態は219と同様。	○調整は219と同様。 ○体部内面に4重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。	
		233	○口11.8(復) ○高 4.1 ○底 2.0(復) ○径34.9	○形態は219と同様。	○調整は219と同様。 ○体部内面に4重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～8mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。	
	器	椀	234	○口12.5(復) ○高 3.3 ○径26.1	○丸底に近い平底の底部より、体部が浅い皿状を呈する。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は消失する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、3重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○淡灰褐色。
			235	○口12.7(復) ○高 2.5 ○径19.7	○形態は234と同様。	○調整は234と同様。 ○体部内面に4重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		B ₆	236	○口11.3(復) ○高 3.0 ○径26.5	○形態は234と同様。	○調整は234と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
二 師 器	小皿 B ₁	237 } 259	○口 8.2(平) ○高 1.2(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は面をもつものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	小皿 B ₂	260 } 287	○口 8.2(平) ○高 1.5(平)	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもつものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	小皿 B ₄	288 } 292	○口 8.3(平) ○高 1.3(平)	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	小皿 B ₅	293	○口 8.0 ○高 1.2	○やや上げ底を呈する底部より、口縁端部が短く内傾する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 B ₁	294	○口11.8(復) ○高 1.7	○形態は237と同様。	○調整は237と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 B ₂	295 } 297	○口10.4(平) ○高 1.4(平)	○形態は260と同様。	○調整は260と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B ₁	298 } 300	○口12.2(平) ○高 2.1(平)	○形態は237と同様。	○調整は237と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B ₂	301 } 303	○口12.5(平) ○高 2.0(平)	○形態は260と同様。	○調整は260と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	大皿 B ₄	304 } 307	○口12.4(平) ○高 2.2(平)	○形態は288と同様。	○調整は288と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土	大皿 B ₃	308	○口13.3(平) ○高 2.1(平)	○平底の底部より口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
		309				
	羽釜 F	310	○口26.7(復) ○高 5.5(残)	○張りのある体部より、口縁部が短く外折する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鏝は欠損する。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横ナデの後、横方向のハケメ。 ○体部外面はナデ。内面は横方向のハケメ。	○やや粗。1~2mmの石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○茶褐色。
	羽釜 G	311	○口30.0(復) ○高 7.5(残)	○張りのある体部より口縁部がわずかに外反する。 ○口縁端部は外側へ肥厚する。 ○鏝は欠損する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1~5mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○暗茶褐色。
		312	○口32.7(復) ○高 7.2(残)	○形態は311と同様。 ○鏝は欠損する。	○調整は311と同様。	○精緻。1~5mmの石英、長石を含む。 ○暗茶褐色。
	羽釜 H	313	○口23.0(復) ○高 4.7(残)	○張りのある体部より口縁部が内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鏝は水平方向に伸び、端面が丸く終る。 ○鏝の下で体部を切り取っている。(2次加工)	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1~8mmの石英、長石、クサリ礫を含む。 ○暗灰褐色。
器	羽釜 D	314	○口26.5(復) ○高 5.5(残)	○体部はやや張り、口縁部がくの字形に外折する。 ○口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。 ○鏝はやや外上方へ短く伸び、端面が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面は横ナデ。	○精緻。1~2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○乳褐色。
	羽釜 I	315	○口25.0(復) ○高 5.0(残)	○口縁部は内弯する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鏝はやや下方へ伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1~2mmの石英、長石を含む。 ○暗褐色。
			○口20.9(復) ○高 3.1(残)	○口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鏝は水平方向に短く伸び、端面が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1~2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
	羽釜 K	316				

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
二 師 器	羽 釜 E	317	○口21.6(復) ○高 4.0(残)	○張りの少ない体部より口縁部がくの字形に外反する。 ○口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。 ○鏝は欠損する。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○乳褐色。
			羽 釜 D	318	○口22.5(復) ○高 3.2(残)	○口縁部は大きく外反する。 ○口縁端部は上方へつまみ上げ気味に終る。 ○鏝は欠損する。
	羽 釜 A	319 320			○口17.7(復) ○高 5.6(残)	○張りの少ない体部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は外側へ肥厚する。 ○鏝は外上方へ短く伸び、端面が面をもつ。
			○口21.2(復) ○高13.9(残)	○形態は319と同様。 ○鏝は水平方向に伸びる。	○調整は319と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○乳褐色。
瓦 器	羽 釜	321 322	○口13.2(復) ○高 8.8(残)	○体部は球形を呈し、口縁部は内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鏝は外上方へ短く伸び、端面が面をもつ。 ○体部に棒状を呈する脚がつく。本来は3本である。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横ナデの後、横方向のハケメ。 ○体部外面は指押え。内面は横方向のハケメ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○暗灰褐色。
			○口14.3(復) ○高14.4(残)	○形態は321と同様。	○調整は321と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
	L	323 324	○口18.4(復) ○高10.8(残)	○形態は321と同様。	○調整は321と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰色。
			○口17.7(復) ○高11.0(残)	○形態は321と同様。	○調整は321と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦	羽	325	○口19.6(復) ○高 5.0(残)	○形態は321と同様。	○口縁部外面は横ナデ。内面はハケメの後、横ナデ。 ○体部外面は指押え、内面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰褐色。
		326	○口18.0(復) ○高 3.7(残)	○形態は321と同様。	○口縁部外面は横ナデ。内面はハケメの後、横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横方向のハケメ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡灰褐色。
		327	○口17.4(復) ○高 3.8(残)	○形態は321と同様。	○調整は321と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。
		328	○口16.7(復) ○高 3.7(残)	○形態は321と同様。	○調整は325と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。
		329	○口15.9(復) ○高 6.5(残)	○形態は321と同様。	○調整は325と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。
	釜	330	○口19.0(復) ○高 4.6(残)	○形態は321と同様。	○調整は321と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰色。
		331	○高21.3(残)	○形態は321と同様。	○調整は321と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰褐色。
		332	○高17.9(残)	○脚部のみ残存。 ○棒状を呈し、端部に向かって細くなる。端部でくの字形に曲がる。	○ナデで終る。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。
		333	○高21.2(残)	○形態は332と同様。	○調整は332と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。
		334	○高21.2(残)	○形態は332と同様。	○調整は332と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○灰褐色。
器	L					

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜	335	○高18.1(残)	○形態は332と同様。	○調整は332と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		336	○高13.5(残)	○形態は332と同様。	○調整は332と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰褐色。
	L	337	○高17.1(残)	○形態は332と同様。	○調整は332と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
須臾器	捏鉢	338	○口23.9(復) ○高10.1(残)	○体部は大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は上方へ拡張し、面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は横ナデ。内面はナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		339	○口27.6(復) ○高11.2 ○底 5.9(復)	○形態は338と同様。 ○底部は平底である。	○調整は338と同様。 ○底部は糸切り。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。
		340	○口24.0(復) ○高 5.3(残)	○形態は338と同様。	○調整は338と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。
	D	341	○口20.2(復) ○高 6.5(残)	○形態は338と同様。	○調整は338と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰色。
		342	○口21.8(復) ○高 4.4(残)	○形態は338と同様。	○調整は338と同様。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰褐色。
		343	○口21.2(復) ○高 3.3(残)	○形態は338と同様。	○調整は338と同様。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰褐色。
		344	○口21.3(復) ○高 4.8(残)	○形態は338と同様。	○調整は338と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須 恵 器	捏鉢	345	○口22.1(復) ○高 3.3(残)	○形態は 338 とほぼ同様であるが、口縁端部が上方へつまみ上げ気味になる。	○調整は338と同様。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青灰色。
		346	○口22.1(復) ○高 2.5(残)	○形態は345と同様。	○調整は338と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青灰色。
		347	○口24.8(復) ○高 7.6(残)	○形態は345と同様。	○調整は338と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○青灰色。
	捏鉢 (底部)	348	○高 5.3(残) ○底 9.0(復)	○形態は339と同様。	○調整は 339 とほぼ同様であるが、底部はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰褐色。
		349	○高 5.0(残) ○底10.6(復)	○形態は339と同様。	○調整は339と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○淡灰褐色。
陶器	備前焼・摺鉢	350	○高 5.9(残) ○底10.3(復)	○平底の底部より体部が逆八字形に伸びる。	○体部外面は横ナデ。内面はナデ。 ○内面に5条のおろし目を施す。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○紫灰色。
瓦器	鉢	351	○口17.3(復) ○高 6.8(残)	○丸底の底部より体部が逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		352	○口20.8(復) ○高 5.9(残)	○体部が逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。 ○体部外面は指押え。内面は横方向のハケメ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
輸入磁器	青磁・椀	353	○口16.1(復) ○高 4.1(残)	○体部は大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。 ○体部外面にヘラ描きによる蓮弁文。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰色。 ○釉 黄緑色。

No.4 トレンチSK16 (第55~59図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
陶器	常滑焼・甕	354	○高 7.6(残) ○底12.3(復)	○平底の底部より体部が逆八字形に伸びる。	○内外面はナデ。 ○内面に自然釉がかかる。	○精緻。1~3mmの石英、長石を含む。 ○淡赤灰色。
		355	○口25.3(復) ○高 8.4(残)	○張りのある体部より口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は上下へ拡張し、幅広の面をもつ。	○内外面は横ナデ。	○精緻。1~5mmの石英、長石を含む。 ○灰色。
		356	○高15.2(残)	○口縁部を欠損する。 ○球形の体部より口縁部が大きく外反する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面は指押え。接合痕が残る。 ○体部外面に自然釉がかかる。	○精緻。1~3mmの石英、長石を含む。 ○淡橙褐色。
	備前焼・壺	357	○口31.1(復) ○高 5.2(残)	○口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は玉縁状を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○紫褐色。
	備前焼・摺鉢F	358	○口30.1(復) ○高 6.3(残)	○体部は大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は下方へやや拡張し、幅広の面をもつ。	○内外面は横ナデ。 ○体部内面に9条のおろし目を施す。	○精緻。1~5mmの石英、長石を含む。 ○淡紫灰色。
須恵器	捏鉢D	359	○口28.7(復) ○高 8.8(残)	○体部は大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は上方へつまみ上げ気味に終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。1~3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		360	○口26.8(復) ○高11.2(残)	○体部は大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は上方へ拡張し、幅広の面をもつ。	○内外面は横ナデ。	○精緻。2~4mmの石英、長石を含む。 ○灰白色。
	鉢E	361	○口26.1(復) ○高 5.4(残)	○形態は360と同様。	○調整は360と同様。	○精緻。1~2mmの石英、長石を含む。 ○暗青灰色。
		362	○口31.4(復) ○高 3.6(残)	○形態は360と同様。	○調整は360と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○青灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
瓦	椀	363	○口14.5(復) ○高 3.9 ○底 3.5(復) ○径26.9	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面形が逆台形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はナデの後、ヘラミガキ。 ○見込みは平行線の暗文。3条残存。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
		364	○口14.2(復) ○高 3.3(残)	○形態は363と同様。	○調整は363と同様。 ○見込みは平行線の暗文。4条残存。	○精緻。1～6mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。	
		B ₄ 365	○口14.3(復) ○高 2.8(残)	○形態は363と同様。	○調整は363と同様。 ○見込みは平行線の暗文。2条残存。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。	
	椀	366	○口14.2(復) ○高 2.9(残)	○体部が浅く立ち上がり、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、3重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。	
		B ₅ 367	○口12.3(復) ○高 2.5 ○底 3.5(復) ○径20.3	○形態は366と同様。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○調整は366と同様。 ○体部内面に6重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
	椀	368	○高 1.5(残) ○底 4.4(復)	○平底を呈する底部である。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○見込み部に連結輪状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。	
		A 369	○高 2.1(残) ○底 4.1(復)	○形態は368と同様。	○調整は368と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
	器	椀	370	○口10.7 ○高 2.7(残)	○浅い皿状を呈する体部より口縁部が内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は消失する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、4重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。
			B ₆ 371	○口11.8(復) ○高 2.7 ○径22.9	○形態は370とほぼ同様であるが、口縁部がゆるく外反する。	○調整は370と同様。 ○体部内面には1重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○褐灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	椀	372	○口12.2(復) ○高 2.5(残)	○形態は371と同様。	○調整は371と同様。 ○体部内面には5重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
		373	○口11.4(復) ○高 3.3(残)	○形態は371と同様。	○調整は371と同様。 ○体部内面には3重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		374	○口11.8(復) ○高 2.3(残)	○形態は371と同様。	○調整は371と同様。 ○体部内面には3重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○やや粗。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。
		375	○口11.1(復) ○高 2.3(残)	○形態は371と同様。	○調整は371と同様。 ○体部内面には3重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		376	○口10.8(復) ○高 2.2(残)	○形態は371と同様。	○調整は371と同様。 ○体部内面には2重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1~2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰色。
		377	○口12.2(復) ○高 1.7(残)	○形態は371と同様。	○調整は371と同様。 ○体部内面には2重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		378	○口10.8(復) ○高 2.7(残)	○形態は370と同様。	○調整法は風化が著しいので不明。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。1~2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○赤褐色。
	379	○口10.8(復) ○高 2.2(残)	○形態は370と同様。	○調整法は風化が著しいので不明。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。1~2mmの石英、長石を含む。 ○白灰色。	
	椀 B ₇	380	○口10.0(復) ○高 2.8(残)	○形態は370と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横ナデ。 ○体部内面の暗文は消失。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○白灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考				
器	瓦	皿	381	○口 7.7(復) ○高 1.9	○丸底の底部より体部が内弯する。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、やや粗いヘラミガキ。 ○見込みは平行線の暗文。7条残存。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。			
				摺鉢 B	382	○口32.6(復) ○高 9.3(残)	○体部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面は横ナデ。 ○体部内面に7条のおろし目を施す。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
						摺鉢	383	○口32.6(復) ○高 9.3(残)	○体部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は上方へ拡張し、幅広の面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラケズリ。内面は横ナデ。 ○体部内面に12条のおろし目を施す。
	鉢	A	384	○口31.6(復) ○高 6.8(残)	○形態は383と同様。			○調整は383と同様。 ○体部内面に19条のおろし目を施す。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○暗青灰色。	
				385	○口33.2(復) ○高 9.1(残)	○形態は383と同様。	○調整は383と同様。 ○体部内面におろし目を施す。25条残存。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰白色。		
					386	○口32.6(復) ○高 4.8(残)	○形態は383と同様。	○調整は383と同様。 ○体部内面におろし目を施す。21条残存。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
						387	○口28.4(復) ○高 6.0(残)	○形態は383と同様。	○調整は383と同様。 ○体部内面におろし目を施す。26条残存。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
							388	○口31.2(復) ○高 8.1(残)	○形態は383と同様。	○調整は383と同様。 ○体部内面におろし目を施す。18条残存。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
瓦	摺鉢	389	○口28.9(復) ○高 6.1(残)	○形態は383と同様。	○調整は383と同様。 ○体部内面におろし目を施す。12条残存。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○黒灰色。	
		A 390	○口27.7(復) ○高 6.5(残)	○形態は383と同様。	○調整は383と同様。 ○体部内面におろし目を施す。25条残存。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
	羽釜	391	○口19.2(復) ○高18.3(残)	○球形の体部より口縁部が内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○口縁部外面には3条の凹線をもつ。 ○鏝は水平方向に伸び、端面は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面の上半はナデ。下半はヘラケズリ。 ○体部内面は横方向のハケメ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
			392	○口20.2(復) ○高 4.7(残)	○形態は391と同様。 ○口縁部外面には2条の凹線をもつ。 ○鏝はやや外上方へ伸びる。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○黒灰色。
		I	393	○口25.7 ○高24.3(残)	○形態は391と同様。 ○口縁部外面には3条の凹線をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面の上半はナデ。下半はヘラケズリ。 ○体部内面はハケメの後、ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
			394	○口26.7(復) ○高15.9(残)	○形態は391と同様。 ○口縁部外面には3条の凹線をもつ。 ○鏝はやや外上方へ伸びる。	○調整は391と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
	器	羽釜 J	395	○口23.7(復) ○高11.1(残)	○形態は391と同様。 ○口縁部外面には3条の段をもつ。	○調整は391と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		羽釜 L	396	○口15.3(復) ○高 6.0(残)	○体部の張りは少なく、口縁部が内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鏝は外上方へ短く伸び、端面が面をもつ。 ○体部に棒状を呈する脚がつく。本来は3本である。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	羽 釜	397	○口19.6(復) ○高 3.1(残)	○形態は 396 とほぼ同様であるが、口縁端部が丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。 ○体部外面は指押え。内面は横方向のハケメ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。
		398	○口19.6(復) ○高 4.6(残)	○形態は397と同様。	○調整は397と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		399	○口18.8(復) ○高 6.1(残)	○形態は397と同様。	○調整は397と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
	L	400	○高13.9(残)	○脚部のみ残存。 ○棒状を呈し、端部に向かって細くなる。	○ナデで終る。	○精緻。1～6mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
		401	○高11.9(残)	○形態は400と同様。	○調整は400と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗灰色。
		402	○高11.4(残)	○形態は400と同様。	○調整は400と同様。	○精緻。1～4mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。
土師器	ミニチュア・羽釜	403	○口 6.8(復) ○高 2.2(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鏝は短く水平方向に伸び、断面形が三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○淡黄茶色。
瓦器	ミニチュア・羽釜	404	○口 6.4(復) ○高 3.7(残)	○球形の体部より口縁部が内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○口縁部外面にゆるい段が1条つく。 ○鏝は短く水平方向に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は横ナデ。内面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗青灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	羽 釜	405	○口25.1 ○高 7.0(残)	○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○口縁部外面に2条の凹線をもつ。 ○鏝は水平方向に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面は横方向のハケメ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
		406	○口26.7(復) ○高 7.5(残)	○形態は405と同様。 ○口縁部外面に3条の凹線をもつ。	○調整は405と同様。	○精緻。1～4mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
土 師 器	羽 釜 G	407	○口28.4(復) ○高 5.5(残)	○口縁部は内湾した後、わずかに外反する。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。 ○鏝は水平方向に伸び、端面は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、雲母、黒色砂粒を含む。 ○淡茶褐色。
		408	○口14.1(復) ○高 3.3(残)	○口縁部は内湾する。 ○口縁端部は外側へ肥厚する。 ○鏝は外上方へ伸び、端面が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○暗灰白色。
	羽 釜 C	409	○口15.9(復) ○高 3.4(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が内傾した後、さらに水平方向へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鏝は水平方向に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は横ナデ。内面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○黄灰色。
		410	○口23.8(復) ○高 4.4(残)	○形態は409と同様。	○調整は409と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰白色。
羽 釜 E	411	○口25.5(復) ○高 3.7(残)	○張りの少ない体部より、口縁部がくの字形に外折する。 ○口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。 ○鏝は欠損する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメの後ナデ。内面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○褐色。	
	412	○口19.9(復) ○高 3.7(残)	○形態は411とほぼ同様であるが、体部の張りが強い。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面は横方向のハケメ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黄灰色。	

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土器	羽釜	413	○口18.1(復) ○高 4.2(残)	○形態は411 とほぼ同様であるが、口縁端部の肥厚が少ない。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰白色。
		414	○口18.2(復) ○高 4.2(残)	○形態は413と同様。	○調整は413と同様。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○乳灰色。
		415	○口17.8(復) ○高 3.9(残)	○形態は413と同様。	○調整は413と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○褐灰色。
瓦器	甕	416	○口33.5(復) ○高10.2(残)	○張りのある体部より、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は上下へ拡張し、幅広の面をもつ。 ○口縁端部内面に1条の沈線がめぐる。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は綾杉状のタタキ。内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
		417	○口30.3(復) ○高 4.4(残)	○張りのある体部より、口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は下方へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は並行のタタキ。内面は横方向のハケメ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。
		418	○口40.3(復) ○高 7.0(残)	○張りのある体部より、口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は並行のタタキ。内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰色。
		419	○口21.1(復) ○高 8.2(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は並行のタタキ。内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰色。
		420	○口24.5(復) ○高 2.7(残)	○張りのある体部より、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
土師器	小皿 B ₁	421 } 426	○口 8.0(平) ○高 1.1(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 器	小皿 B ₂	427 } 431	○口 8.2(平) ○高 1.3(平)	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもつものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒のクサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	小皿 B ₃	432 } 438	○口 8.2(平) ○高 1.0(平)	○平底の底部より口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	小皿 C ₁	439 } 448	○口 8.1(平) ○高 1.6(平)	○底部は平底と上げ底を呈するものがある。 ○体部は大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は尖り気味のものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	小皿 C ₂	449 } 471	○口 8.7(平) ○高 1.6(平)	○底部は平底と上げ底を呈するものがある。 ○口縁部が大きく逆八字形に開いた後、内弯する。 ○口縁端部は尖り気味のものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。
	中皿 B ₂	472 ・ 473	○口11.4(平) ○高 1.7(平)	○形態は427と同様。	○調整は427と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 B ₃	474	○口10.5(復) ○高 1.8	○形態は432と同様。	○調整は432と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 C ₁	475 ・ 476	○口10.2(平) ○高 1.8(平)	○形態は439と同様。	○調整は439と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中皿 C ₂	477 } 484	○口10.7(平) ○高 1.6(平)	○形態は449と同様。	○調整は449と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	大皿 B ₁	485	○口12.4(復) ○高 1.2	○形態は421と同様。	○調整は421と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
輸入磁器	青磁	486	○口16.9(復) ○高 5.0(残)	○体部がやや内弯気味に外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。 ○体部外面はヘラ描きによる蓮弁文。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 ○釉 灰緑色。
	碗	487	○高 2.0(残) ○底 6.2(復)	○底部のみ残存。 ○高台は低く、断面形が方形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○底部裏面外は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 ○釉 灰緑色。
	碗	488	○高 2.2(残) ○底 4.8(復)	○底部のみ残存。 ○高台は低く、断面形が逆台形を呈する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 ○釉 灰緑色。

No.4 トレンチ自然流路 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	碗	489	○口13.0 ○高 3.4 ○底 2.8 ○径26.2	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面形が逆台形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みは4条の平行線の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。
	B ₄	490	○口14.4 ○高 4.0 ○底 3.3 ○径27.8	○形態は489と同様。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○調整は489と同様。 ○見込みは3条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
	碗 B ₅	491	○口13.4 ○高 3.4 ○底 3.2 ○径25.4	○形態は489と同様。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、4重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰褐色。
	碗 B ₄	492	○口14.1(復) ○高 3.3 ○底 3.9(復) ○径23.4	○形態は489と同様。	○調整は489と同様。 ○見込みはジグザグ状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
瓦器	椀	493	○口14.3 ○高 3.2 ○底 3.2 ○径22.4	○形態は489と同様。	○調整は491と同様。 ○体部内面は4重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○灰色。	
			B ₅	494	○口13.3(復) ○高 3.3 ○底 4.1 ○径24.8	○形態は489と同様。	○調整は491と同様。 ○体部内面は4重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。
	椀	B ₄			495	○口13.6(復) ○高 3.3 ○底 3.5(復) ○径24.3	○形態は489と同様。
土師器	小皿	B ₂	496 498	○口 8.4(平) ○高 1.1(平)	○平底の底部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもつものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
				中皿	B ₁	499	○口11.6 ○高 2.8
	中皿	B ₂	500 501	○口11.9(平) ○高 2.0(平)	○形態は496と同様。	○調整は496と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

No.4 トレンチ土墳墓 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
瓦器	椀	B ₃	502	○口15.1 ○高 4.4 ○底 3.4 ○径29.1	○平底の底部より、体部がやや深く立ち上がる。口縁端部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○底部は低く、断面形が逆台形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面は横ナデの後、やや粗いヘラミガキ。 ○見込みはジグザグ状の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
土師器	小皿			B ₁	503 505	○口 8.4(平) ○高 1.3(平)	○平底及びやや上げ底を呈する底部より、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終るものと面をもつものがある。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B ₂	506 ・ 507	○口 8.2(平) ○高 1.3(平)	○やや上げ底を呈する底部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終るものと面をもつものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母を含む。 ○褐色系。

No.4 トレンチSK13 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B ₁	508 } 513	○口 8.3(平) ○高 1.3(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖り気味のものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○粗なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

No.4 トレンチSK18 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	羽釜 L	514	○高11.0(残)	○羽釜の脚部である。 ○棒状を呈し、端部に向かって細くなる。端部でくの字形に曲がる。	○ナデで終る。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。
土師器	小皿 B ₁	515 ・ 516	○口 8.0(平) ○高 1.4(平)	○平底の底部より、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖り気味のものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。

No.4 トレンチSK2 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 C ₁	517	○口 8.2 ○高 1.9	○上げ底の底部より、口縁部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化が著しいので調整法は不明。	○粗。1～3mmの石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

No. 4 トレンチSK 4 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 B ₁	518	○口10.6(復) ○高 1.7	○平底の底部より、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。

No. 4 トレンチSP16 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 C ₁	519	○口 8.1 ○高 1.8	○上げ底を呈する底部より、口縁部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○やや粗。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

No. 4 トレンチSP133 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	小皿 B ₂	520	○口 8.9 ○高 1.3	○平底の底部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫、雲母を含む。 ○褐色系。

No. 4 トレンチSP23 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	壺	521	○口 6.6(復) ○高 3.5(残)	○張りのある体部より、口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は外側へやや肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。 ○体部外面に直線と連続するU字状の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。

No. 4 トレンチSP98 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
輸入磁器	青磁・椀	522	○高 5.2(残) ○底 6.8(復)	○体部は内弯気味に立ち上がる。 ○高台はやや高く、断面形が方形を呈する。	○底部以外は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 ○釉 黄緑色。

No.4 トレンチSD1 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	小 皿 B ₁	523	○口 8.2(復) ○高 1.2	○平底の底部より、口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。
	小 皿 C ₁	524	○口 7.8(復) ○高 1.6(残)	○口縁部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫を含む。 ○褐色系。
瓦 器	摺 鉢	525	○口25.7(復) ○高 6.3(残)	○体部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部はやや面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。 ○体部内面に5条のおろし目を施す。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
	B	526	○口30.1(復) ○高 6.7(残)	○形態は525と同様。	○調整は525と同様。 ○体部内面に7条のおろし目を施す。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。

No.4 トレンチSD2 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	小 皿 C ₂	527	○口 8.5 ○高 1.8	○上げ底の底部より、口縁部が外反した後、内弯する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。
	中 皿 C ₁	528	○口10.4 ○高 2.3	○平底の底部より、口縁部が大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○風化が著しいので調整法は不明。	○粗。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

No.4 トレンチSD4 (第60図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	椀 B ₆	529	○口11.8(復) ○高 2.3 ○径19.5	○丸底に近い平底より、体部が浅い皿状を呈する。 口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は消失する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、2重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰色。

No.4 トレンチ土器溜り (第61図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考		
器	椀	B ₄	530	○口14.2 ○高 3.8 ○底 3.3 ○径26.8	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面形が逆台形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みは6条の平行線の暗文。	○精緻。1~2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。	
			531	○口12.6(復) ○高 3.9 ○底 1.7 ○径31.0	○形態は530と同様。	○調整は530と同様。 ○見込みは平行線の暗文。2条残存。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1~2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰褐色。	
		532	○口13.8 ○高 3.5 ○底 3.8 ○径25.4	○形態は530と同様。	○調整は530と同様。 ○見込みはジグザグ状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。		
		椀	B ₅	533	○口14.3(復) ○高 3.5 ○底14.7 ○径24.5	○形態は530と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、5重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。
				534	○口14.2 ○高 3.6 ○底 3.1 ○径25.4	○形態は530と同様。	○調整は533と同様。 ○体部内面に6重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。
		535	○口14.0 ○高 3.5 ○底 3.0 ○径25.0	○形態は530と同様。	○調整は533と同様。 ○体部内面に4重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。		
	椀	B ₄	536	○口13.7(復) ○高 3.5 ○底 3.0 ○径25.5	○形態は530と同様。	○調整は530と同様。 ○見込みは7条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
			537	○口14.0(復) ○高 4.5 ○底 3.6 ○径32.1	○形態は530と同様。	○調整は530と同様。 ○見込みは平行線の暗文。3条残存。	○精緻。1~2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。	
		538	○口14.8(復) ○高 3.2 ○底 4.0 ○径21.6	○形態は530と同様。	○調整は533と同様。 ○体部内面に6重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。		

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦	椀	539	○口14.4(復) ○高 3.1 ○底 2.8 ○径21.5	○形態は530と同様。	○調整は533と同様。 ○体部内面に6重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒褐色。
		540	○口14.0(復) ○高 3.2 ○底 4.0 ○径22.9	○形態は530と同様。	○調整は533と同様。 ○体部内面に5重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。
		B ₅ 541	○口13.1(復) ○高 3.3 ○底 4.4 ○径25.2	○形態は530と同様。	○調整は533と同様。 ○体部内面に3重の渦巻状の暗文。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。
	椀	542	○口13.4(復) ○高 3.1 ○底 4.0 ○径23.1	○形態は530と同様。	○調整は530と同様。 ○見込みは平行線の暗文。4条残存。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。
		B ₄ 543	○口14.0 ○高 3.3 ○底 3.1 ○径23.6	○形態は530と同様。	○調整は530と同様。 ○見込みは7条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰色。
器	椀	544	○口13.7(復) ○高 4.2 ○底 5.6 ○径30.7	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、端面に沈線をめぐらす。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部外面は横ナデの後、粗いヘラミガキ。内面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、外面より密なヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○暗灰色。
		545	○口13.2 ○高 4.0 ○底 5.1 ○径30.3	○形態は544と同様。	○調整は544と同様。 ○見込みは連結輪状の暗文を施すが、風化のため不明な部分が多い。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫、黒色砂粒を含む。 ○桃灰色。
	A ₅ 546	○口13.8(復) ○高 3.1(残)	○形態は544と同様。	○調整は544と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡褐色。	
土師器	小皿 B ₂	547 } 550	○口 9.0(平) ○高 1.5(平)	○平底の底部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終るものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒のクサリ礫、雲母を含む。 ○褐色系。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	中皿 B ₁	551・552	○口11.6(平) ○高 2.1(平)	○平底の底部より、口縁部が上方へ伸びる。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。

No.4 トレンチ (第62～67図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考		
土師器	羽	553	○口33.1(復) ○高 6.3(残)	○張りのある体部より、口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鏝はやや下方へ伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○橙褐色。 ○第3層出土。		
			釜	554	○口29.1(復) ○高 4.3(残)	○形態は553と同様。	○調整は553と同様。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○淡赤褐色。 ○第2層出土。
					F	555	○口26.5(復) ○高 6.5(残)	○形態は553と同様。 ○鏝の端面は面をもつ。
	羽	556	○口32.0(復) ○高 9.0(残)	○やや張りのある体部より、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。 ○鏝は短く、断面形が三角形を呈する。			○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○乳褐色。 ○第2層出土。
			釜	557	○口32.3(復) ○高 3.8(残)	○形態は556と同様。	○調整は556と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母、クサリ礫を含む。 ○灰褐色。 ○第2層出土。
					E	558	○口30.2(復) ○高 5.3(残)	○形態は556と同様。 ○鏝の断面形が台形を呈する。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	羽 釜	559	○口28.1(復) ○高 4.2(残)	○形態は556と同様。	○調整は556と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○乳褐色。 ○第2層出土。
		E 560	○口28.5(復) ○高 5.1(残)	○形態は556と同様。	○調整は556と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、クサリ礫を含む。 ○灰褐色。 ○第2層出土。
	羽 釜 B	561	○口25.3(復) ○高 6.0(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が強く内弯する。 ○口縁端部は外側へ折り曲げるように肥厚する。 ○鏝は水平方向に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○乳褐色。 ○第2層出土。
		562	○口19.3(復) ○高 3.5(残)	○形態は561と同様。 ○鏝の端面が面をもつ。	○調整は561と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰褐色。 ○出土層位は不明。
		563	○口20.7(復) ○高 4.3(残)	○形態は561と同様。 ○鏝は短い。	○調整は561と同様。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○乳褐色。 ○出土層位は不明。
羽 釜 H	564	○口20.1 ○高13.5	○張りの少ない体部より、口縁部が内傾する。 ○口縁端部が丸く終る。 ○鏝は水平方向に伸び、端面が丸く終る。 ○口縁部に焼成後の小円孔を相対する位置に1孔づつ穿つ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○茶褐色。 ○第2層出土。	
瓦 器	羽 釜 L	565	○口22.3(復) ○高 6.2(残)	○体部が球形を呈し、口縁部が内傾する。 ○口縁端部が面をもつ。 ○鏝は外上方へ伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横方向のハケメ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○出土層位は不明。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦	羽釜 K	566	○口24.8(復) ○高 8.1(残)	○張りの少ない体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鏝は口縁端部直下につく。 鏝は短く水平方向に伸び、端面が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、雲母を含む。 ○灰色。 ○第2層出土。
	羽釜 J	567	○口21.4(復) ○高 4.7(残)	○口縁部は内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○口縁部外面に3条の段をもつ。 ○鏝はやや外上方へ伸び、端面が面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○赤灰色。 ○第2層出土。
	羽釜	568	○口13.8(復) ○高 5.0(残)	○球形の体部より、口縁部が内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○鏝は外上方へ伸び、端面が丸く終る。	○風化が著しいので調整法は不明。	○粗。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。
		L	569	○口13.3(復) ○高 4.7(残)	○形態は568と同様。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横方向のハケメ。
	羽釜 K	570	○口15.9(復) ○高 3.1(残)	○張りの少ない体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○鏝は口縁端部直下につく。 鏝は短く水平方向に伸び、端面が面をもつ。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横ナデの後、横方向のハケメ。 ○体部外面は指押え。内面は横方向のハケメ。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。
器	ミニチュア・羽釜	571	○口 5.1(復) ○高 2.7(残)	○口縁部が内傾する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○口縁部外面に3条の段をもつ。 ○鏝は水平方向に伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第2層出土。
	土師器	ミニチュア・羽釜	572	○口 7.8(復) ○高 4.8(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が内傾する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。 ○鏝は水平方向に伸び、端面が尖る。	○風化が著しいので調整法は不明。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考		
瓦	羽	573	○口25.2(復) ○高10.6(残)	○張りの少ない体部より、口縁部がやや内傾する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○口縁部外面に2条の凹線をもつ。 ○鏝はやや下方へ伸び、端面が丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横方向のハケメ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第2層出土。		
		574	○口28.9(復) ○高6.2(残)	○形態は573と同様。 ○鏝は水平方向に伸びる。	○調整は573と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰色。 ○出土層位は不明。		
		575	○口28.5(復) ○高10.9(残)	○形態は573と同様。 ○鏝はやや外上方へ伸びる。	○調整は573と同様。	○精緻。1～4mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰褐色。 ○出土層位は不明。		
		576	○口32.8(復) ○高9.2(残)	○形態は573と同様。 ○口縁部外面に3条の凹線をもつ。 ○鏝はやや外上方へ伸びる。	○調整は573と同様。	○精緻。1～8mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○出土層位は不明。		
	I	鍋	577	○口29.8(復) ○高4.1(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が外反した後、角度を変えて上方へ伸びる。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面は横方向のハケメ。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○淡灰色。 ○第2層出土。	
			A ₅	578	○口12.9 ○高4.3 ○底5.0 ○径33.3	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、端面に沈線をめぐらす。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部外面は横ナデの後、粗いヘラミガキ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、外面より密なヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第3層出土。
				579	○口13.2 ○高4.3 ○底4.5 ○径32.6	○形態は578と同様。	○調整は578と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡灰色。 ○第3層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	椀 A ₅	580	○口14.1(復) ○高 3.5 ○底 4.8(復) ○径24.8	○形態は578と同様。	○調整は578と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第2層出土。
		椀 B ₄	581	○口14.0(復) ○高 3.9 ○底 2.8 ○径27.9	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みは5条の平行線の暗文。
	582		○口13.8 ○高 3.7 ○底 3.1 ○径26.8	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは5条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第3層出土。
	583		○口14.4 ○高 3.7 ○底 3.3 ○径25.7	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは5条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。
	584		○口13.9 ○高 3.6 ○底 3.7 ○径25.9	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは5条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。 ○第2層出土。
	585		○口14.0 ○高 3.5 ○底 4.0 ○径25.0	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは7条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰色。 ○第3層出土。
	586		○口14.0 ○高 3.5 ○底 2.7 ○径25.0	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは7条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第3層出土。
	587		○口13.5 ○高 3.9 ○底 3.0 ○径28.9	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは11条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰褐色。 ○第3層出土。
	588		○口13.9(復) ○高 4.3 ○底 3.6 ○径30.9	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは3条の平行線の暗文。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第3層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
瓦	椀	589	○口13.9(復) ○高 4.1 ○底20.5(復) ○径29.5	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは孤状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第4層出土。	
		590	○口12.8 ○高 3.1 ○底 2.0 ○径24.2	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは2条の平行線の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1~2mmの石英、長石を含む。 ○灰色。 ○第2層出土。	
		591	○口13.8(復) ○高 3.3 ○底 3.4(復) ○径23.9	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みはジグザグ状の暗文。	○精緻。1~2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。	
		592	○口12.8 ○高 3.1 ○底 3.0 ○径24.2	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは4条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第2層出土。	
		593	○口13.0(復) ○高 3.6 ○底 3.0 ○径27.7	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは7条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第2層出土。	
	B ₄	594	○口12.8(復) ○高 3.6 ○底 4.8 ○径28.1	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは8条の平行線の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。	
		595	○口12.3(復) ○高 3.7 ○底 2.2(復) ○径30.1	○形態は581と同様。	○調整は581と同様。 ○見込みは平行線の暗文。3条残存。	○粗。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○出土層位は不明。	
		椀	596	○口13.5 ○高 3.0 ○径22.2	○浅い皿状を呈する体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は消失する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、8重の渦巻状の暗文。	○精緻。1~3mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。
			B ₅ 597	○口12.3 ○高 3.1 ○径25.2	○形態は596と同様。	○調整は596と同様。 ○体部内面は6重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第2層出土。
		器					

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
瓦	椀	598	○口11.7 ○高 2.5 ○径21.4	○形態は596と同様。	○調整は596と同様。 ○体部内面は5重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。	
		599	○口11.6(復) ○高 2.7 ○径23.3	○形態は596と同様。	○調整は596と同様。 ○体部内面に4重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。 ○第2層出土。	
		600	○口10.6 ○高 3.0 ○径28.3	○形態は596と同様。	○調整は596と同様。 ○体部内面に2重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第2層出土。	
		601	○口11.2(復) ○高 2.4(残)	○形態は596と同様。	○調整は596と同様。 ○体部内面に2重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。 ○第2層出土。	
		602	○口 9.9(復) ○高 2.4(残)	○形態は596と同様。	○調整は596と同様。 ○体部内面に2重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。 ○第2層出土。	
	皿	603	○口 7.9 ○高 1.5	○丸底に近い平底の底部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○出土層位は不明。	
		摺鉢	604	○口29.3(復) ○高 8.6(残)	○体部が逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。 ○体部内面に5条のおろし目を施す。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○出土層位は不明。
	B		605	○口25.9(復) ○高 7.9(残)	○形態は604と同様。	○調整は604と同様。 ○体部内面に4条のおろし目を施す。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○灰褐色。 ○出土層位は不明。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
瓦	摺鉢	606	○口29.8(復) ○高 7.2(残)	○形態は604と同様。	○調整は604と同様。 ○体部内面に5条のおろし目を施す。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○出土層位は不明。	
		B 607	○口28.9(復) ○高 4.2(残)	○形態は604と同様。	○調整は604と同様。 ○体部内面に7条のおろし目を施す。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第4層出土。	
	摺鉢	608	○口34.4(復) ○高 8.5(残)	○体部は逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は幅広の面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は横方向のヘラケズリ。内面はナデ。 ○体部内面におろし目を施す。17条残存。	○精緻。1～5mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。 ○出土層位は不明。	
			609	○口26.4(復) ○高 9.1(残)	○形態は608と同様。	○体部内面は横方向のハケメ。 ○体部内面に15条のおろし目を施す。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第2層出土。
		鉢	610	○口31.3(復) ○高 9.0(残)	○形態は608と同様。	○調整は608と同様。 ○体部内面に15条のおろし目を施す。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰褐色。 ○出土層位は不明。
				A	611	○口28.1(復) ○高 6.3(残)	○形態は608と同様。
		612	○口29.3(復) ○高 5.1(残)			○形態は608と同様。	○調整は608と同様。 ○体部内面に7条のおろし目を施す。
		須恵器	捏鉢	C 613	○口27.2(復) ○高10.7 ○底10.8(復)	○平底の底部より体部が逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は内側へ肥厚する。 ○片口部が残る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面は横ナデ。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須 恵 器	捏鉢	614	○口29.5(復) ○高11.4 ○底 8.3(復)	○平底の底部より体部が逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は上方へ拡張し、幅広の面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○灰白色。 ○出土層位は不明。
	E	615	○口26.8(復) ○高11.9 ○底 7.4(復)	○形態は614と同様。	○調整は614と同様。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○淡青灰色。 ○出土層位は不明。
陶 器	備前焼・摺鉢F	616	○口34.9(復) ○高11.4 ○底17.0(復)	○平底の底部より体部が逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は上方へ拡張し、幅広の面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデ。内面は横ナデ。 ○体部内面に9条のおろし目を施す。	○精緻。1～5mmの石英、長石、黄色砂粒を含む。 ○紫灰色。 ○第2層出土。
	備前焼・壺	617	○口19.0 ○高33.8(残)	○体部は外上方へ伸びた後、肩部で内傾する。口縁部は短く外反する。 ○口縁端部は外側へ肥厚し、玉縁状を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面は横ナデ。 ○肩部外面に櫛描きの文様を2帯施す。	○精緻。1～5mmの石英、長石を含む。 ○灰茶色。 ○第2層出土。
瓦 器	椀 A ₆	618	○口 9.4 ○高 3.4(残)	○丸底に近い平底の底部より体部が内弯する。口縁部はわずかに外反する。 ○口縁端部は丸く終り、内側に浅い沈線をめぐらす。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○体部内面はナデの後、6重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の雲母、石英、長石を含む。 ○暗青灰色。 ○第2層出土。
	椀	619	○口 9.6(復) ○高 3.3 ○径34.4	○形態は618と同様。 ○高台は消失する。	○調整は618と同様。 ○体部内面に9重の渦巻状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○青灰色。 ○第2層出土。
	A ₇	620	○口 8.8(復) ○高 3.8 ○径43.2	○形態は618と同様。 ○高台は消失する。	○調整は618と同様。 ○体部内面に6重の渦巻状の暗文。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○灰白色。 ○第2k層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦	椀	621	○口 8.5(復) ○高 3.1(残)	○形態は618と同様。	○調整は618と同様。 ○体部内面に渦巻状の暗文。 4重残存。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○灰白色。 ○第2層出土。
		622	○口 9.1(復) ○高 2.3(残)	○形態は618と同様。	○調整は618と同様。 ○体部内面に渦巻状の暗文。 5重残存。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。
		623	○口 8.2(復) ○高 3.0(残)	○形態は618と同様。	○調整は618と同様。 ○体部内面に渦巻状の暗文。 8重残存。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。
	壺	624	○口 7.8(復) ○高 3.4(残)	○張りのある体部より、口縁部が上方へ伸びた後、短く外反する。 ○口縁端部はやや面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第2層出土。
器	青	625	○口15.4(復) ○高 3.1(残)	○体部が逆八字形に伸び、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○内外面はロクロナデ。 ○体部外面にヘラ描きの蓮弁文。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰色。 釉 黄緑色。 ○第2k層出土。
		626	○高 2.0(残) ○底 5.5(復)	○底部のみ残存。 ○高台は低く、やや逆八字形に開く。	○内外面はロクロナデ。 ○底部裏面以外は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 釉 青白色。 ○第2層出土。
	磁	627	○高 2.8(残) ○底 5.1(復)	○底部のみ残存。 ○高台は高く、逆八字形に開く。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 釉 暗灰緑色。 ○第2層出土。
		628	○高 1.8(残) ○底 5.7	○底部のみ残存。 ○高台は低く、下方へ伸びる。	○内外面はロクロナデ。 ○底部裏面以外は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 釉 淡灰緑色。 ○出土層位は不明。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
輸入磁器	白磁・台付皿	629	○高 1.4(残) ○底 4.0(復)	○底部のみ残存。 ○高台は低く、アーチ状に挟る。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 ○釉 乳白色。 ○出土層位は不明。	
		630	○高 2.3(残) ○底 4.4(復)	○底部のみ残存。 ○高台は低く、逆八字形に開く。	○内外面はロクロナデ。 ○内面は施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 ○釉 緑茶色。 ○出土層位は不明。	
陶器	瀬戸焼・椀	631	○高 1.3(残) ○底 4.6(復)	○底部のみ残存。 ○平底を底する。	○内外面はロクロナデ。 ○内外面に施釉。	○精緻。砂粒を含まない。 ○素地 灰白色。 ○釉 灰緑色。 ○出土層位は不明。	
		632 642	○口 8.1(平) ○高 1.4(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。 ○第2～4層出土。	
土師器	小皿	B ₁	643 650	○口 8.2(平) ○高 1.5(平)	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終るものと面をもつものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。 ○第2層出土。
		B ₂	651 652	○口 8.3(平) ○高 1.3(平)	○平底の底部より口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○651は第2層、652は第4層出土。
		B ₁	653 660	○口 8.2(平) ○高 1.3(平)	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○口縁部と体部の境に明瞭な段がつく。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。 ○第2～4層出土。
		B ₃					

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 器	小皿 B ₄	661 ・ 662	○口 7.6(平) ○高 1.4(平)	○平底の底部より口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部が内側へ肥厚する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第2層出土。
	小皿 B ₃	663 } 665	○口 8.6(平) ○高 1.2(平)	○形態は653と同様。	○調整は653と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第2~4層出土。
	小皿 C ₁	666 } 681	○口 8.2(平) ○高 1.5(平)	○底部は平底と上げ底を呈するものがある。 ○口縁部は大きく逆八字形に伸びる。 ○口縁端部は丸く終るものと尖り気味のものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。 ○第2~4層出土。
	小皿 C ₂	682 } 703	○口 8.3(平) ○高 1.7(平)	○底部は平底と上げ底を呈するものがある。 ○口縁部は大きく逆八字形に開いた後、内弯する。 ○口縁端部は尖り気味のものと丸く終るものがある。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はナデか指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。 ○第2~4層出土。
	中皿 B ₁	704 ・ 705	○口11.8(平) ○高 2.0(平)	○形態は632と同様。	○調整は632と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第3層出土。
	中皿 B ₂	706	○口11.9 ○高 1.5	○形態は643と同様。	○調整は643と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○出土層位は不明。
	中皿 B ₃	707 ・ 708	○口10.7(平) ○高 2.2(平)	○形態は653と同様。	○調整は653と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第2層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土 師 器	中 皿 C ₁	709 ┆ 714	○口10.9(平) ○高 1.9(平)	○形態は666と同様。	○調整は666と同様。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。 ○第2～4層出土。
	中 皿 C ₂	715 ┆ 719	○口10.4(平) ○高 2.2(平)	○形態は682と同様。	○調整は682と同様。	○精緻なものが多い。微粒の雲母、クサリ礫を含むものが多い。 ○褐色系。 ○第2～4層出土。
	大 皿 B ₁	720 ┆ 723	○口13.9(平) ○高 2.3(平)	○形態は632と同様。	○調整は632と同様。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第2～4層出土。

No.5 トレンチ (第68図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦 器	椀 B ₂	724	○口15.5(復) ○高 4.5(残)	○深い椀状を呈する体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押えの後、上半を粗いヘラミガキ。内面は外面より密なヘラミガキ。 ○見込みは平行線の暗文。8条残存。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第3層出土。
	椀 B ₃	725	○口15.3(復) ○高 3.7 ○底 4.3(復) ○径24.2	○平底の底部より体部が浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。内面はナデの後、粗いヘラミガキ。 ○見込みは平行線の暗文。8条残存。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第10層出土。
		726	○口13.9(復) ○高 3.5(残)	○形態は725と同様。	○調整は725と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第10層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦	椀	727	○口14.2(復) ○高 2.1(残)	○形態は725と同様。	○調整は725と同様。 ○炭素の付着が悪い。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○灰色。 ○第10層出土。
	椀	728	○口14.7(復) ○高 2.6(残)	○口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、内面に沈線をめぐらす。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横ナデの後、密なヘラミガキ。 ○体部外面はやや粗いヘラミガキ。内面は密なヘラミガキ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第12層出土。
	椀	729	○口15.1(復) ○高 5.1 ○底 5.5 ○径33.8	○平底の底部より、体部がやや浅く立ち上がる。口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、内側に沈線をめぐらす。 ○高台は低く、断面形が三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデの後、外面が粗、内面が密なヘラミガキ。 ○体部外面は指押え。内面は密なヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第13層出土。
土師器	甕	730	○口15.0(復) ○高 4.2(残)	○張りのある体部より、口縁部が外折する。 ○口縁端部は外側へやや肥厚する。	○口縁部外面は横ナデの後、縦方向のハケメ。内面は横ナデ。 ○体部外面は縦方向のハケメ。内面はナデ。	○粗。1～2mmの石英、長石、クサリ礫、黒色砂粒を含む。 ○灰橙色。 ○第16a層出土。
須恵器	杯	731	○口11.5(復) ○高 4.9(残)	○受部は水平方向に伸び、端部が尖り気味に終る。 ○口縁部は内弯した後、ゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面の下半は回転ヘラケズリ。上半は横ナデ。内面は横ナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○暗青灰色。 ○第21層出土。
	蓋	732	○口14.3(復) ○高 3.7(残)	○やや平坦な天井部より、口縁部が内弯気味に終る。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○天井部の上半は回転ヘラケズリ。下半は横ナデ。内面は横ナデ。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗青灰色。 ○第21層出土。
	杯	733	○口12.4(復) ○高 1.5(残)	○受部は水平方向に伸び、端部が内側へ肥厚する。 ○口縁部は短く外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○内外面は横ナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第21層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
須恵器	杯	734	○口10.4(復) ○高 1.9(残)	○形態は733と同様。	○調整は733と同様。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第21層出土。
土師器	小皿 B ₂	735	○口 9.5 ○高 1.9	○丸底に近い平底の底部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は尖り気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○出土層位は不明。
黒色土器	椀	736	○高 1.0(残) ○底 7.8	○底部のみ残存。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○風化が著しいので調整法は不明。	○粗。1mm大の石英、長石、雲母を含む。 ○外面は褐色。内面は黒色。 ○出土層位は不明。
瓦器	椀 A ₃	737	○口17.2(復) ○高 5.0(残)	○深い体部より、口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、沈線をめぐらす。	○口縁部内外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面は分割のヘラミガキ。分割数は不明。内面は密なヘラミガキ。	○精緻。微粒の石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○黒灰色。 ○出土層位は不明。
	椀 A ₄	738	○口15.1(復) ○高 3.4(残)	○やや浅い体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、内側に沈線をめぐらす。	○口縁部内外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面は指押えの後、上半を粗いヘラミガキ。内面は密なヘラミガキ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○出土層位は不明。
	椀 B ₂	739	○口13.9(復) ○高 4.3(残)	○やや浅い体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押えの後、粗いヘラミガキ。内面はナデの後、粗いヘラミガキ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○出土層位は不明。

No.6 トレンチ (第69図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 B ₂	740	○口15.5 ○高 4.9 ○底 5.4(復) ○径31.6	○やや深い体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。 ○高台はやや高く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面は指押えの後、上半を粗いヘラミガキ。内面はナデの後、密なヘラミガキ。 ○見込みは斜格子の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第12層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A ₄	741	○口14.3 ○高 4.3 ○底 4.9 ○径30.1	○やや深い体部より、口縁部がわずかに外反する。 ○口縁端部は面をもち、内側に沈線をめぐらす。 ○高台はやや高く、断面形が逆三角形を呈する。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押えの後、上半を粗いヘラミガキ。内面はナデの後、密なヘラミガキ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第12層出土。
土師器	杯	742	○口10.6(復) ○高 3.3	○やや尖り気味の平底より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○淡灰茶色。 ○第11層出土。
	大皿 B ₂	743	○口15.2 ○高 3.3	○丸底に近い平底の底部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母を含む。 ○褐色系。 ○第13層出土。
	小皿 B ₁	744	○口10.0 ○高 1.9	○平底の底部より、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第14層出土。
	大皿 B ₂	745	○口12.4(復) ○高 2.4(残)	○口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は指押え。 ○見込みはナデ。	○精緻。微粒の雲母、クサリ礫を含む。 ○褐色系。 ○第15層出土。
縄文土器	深鉢	746 755	○口 — ○高 — ○底 —	○同一個体である。 ○頸部はややくびれる。 ○口縁部は内弯気味に立ち上がる。 ○口縁端部は丸く終る。	○上半部に直線と曲線を組み合わせたヘラ描き沈線を施す。沈線間に縄文を施し、他は研磨する。 ○中津式土器。	○粗。1～3mmの石英、長石、角閃石を含む。 ○暗茶褐色。 ○第17層出土。

No. 7 トレンチ (第70図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A ₅	756	○高 3.7(残) ○底 5.3(復)	○平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。 ○高台は低く、断面形が逆三角形を呈する。	○体部外面は指押え。内面はナデの後、ヘラミガキ。 ○見込みは連結輪状の暗文。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○暗灰色。 ○第6層出土。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀 A ₄	757	○口13.8(復) ○高 2.9(残)	○口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもち、内側に沈線をめぐらす。	○口縁部内外面は横ナデの後、ヘラミガキ。 ○体部外面は指押えの後、粗いヘラミガキ。内面は密なヘラミガキ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○黒灰色。 ○第7層出土。
須恵器	杯	758	○口10.5 ○高 3.2 ○底 6.7	○上げ底の底部より、口縁部が外上方へ伸びる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○見込みと底部外面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○青灰色。 ○第10層出土。
弥生土器	鉢	759	○口27.1(復) ○高14.4(残)	○体部が外上方へ伸び、口縁部がやや上方へ立ち上がる。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横ナデの後、横方向のハケメ。 ○体部外面は縦方向のハケメ。内面はナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、角閃石、雲母、クサリ礫を含む。 ○茶灰色。 ○第16層出土。

No.8 トレンチ落ち込み (第71~73図)

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	壺	760	○口15.0(復) ○高 3.4(残)	○口縁部が短く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ。内面はヘラミガキ。 ○頸部外面は縦方向のハケメの後、ヘラミガキ。	○精緻。1~2mmの石英、長石、茶色砂粒を含む。 ○暗黄褐色。 ○第I様式。
		761	○口20.2(復) ○高 5.3(残)	○口縁部は大きく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口頸部内外面はヘラミガキ。 ○口縁端部に1条のヘラ描き沈線文を施す。	○精緻。1~5mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗茶褐色。 ○第I様式。
		762	○口23.1(復) ○高 8.8(残)	○頸部が上方へ立ち上がり、口縁部が外反する。 ○頸部と口縁部の境に段がつく。	○口頸部内外面はヘラミガキ。	○精緻。1~5mmの石英、長石、角閃石、雲母、クサリ礫を含む。 ○茶褐色。 ○第I様式。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考	
弥生土器	壺	763	○口26.9(復) ○高 4.2(残)	○口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口頸部内外面は横ナデ。 ○頸部外面に1条のヘラ描き沈線文を施す。	○粗。1～3mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○灰褐色。 ○第Ⅰ様式。	
		764	○口20.6 ○高 3.2	○口頸部が大きく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。 ○頸部外面は縦方向のハケメの後ナデ。内面は横方向のハケメ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗黄褐色。 ○第Ⅰ様式。	
		765	○口31.3(復) ○高14.0(残)	○口頸部が大きく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部外面は横ナデ。内面は横方向のハケメ。 ○頸部外面は縦方向のハケメ。内面は上半を横方向のハケメ。下半をナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○淡茶褐色。 ○第Ⅱ様式。	
		766	○口11.9(復) ○高10.9(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が短く外折する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○胴部外面はヘラミガキ。内面は指押え。接合痕が顕著に残る。	○精緻。1mm大の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○茶褐色。 ○第Ⅱ様式。	
	無頸壺	767	○口12.2(復) ○高 5.3(残)	○体部が内傾する。 ○口縁部が下方へ外折し、段状を呈する。 ○口縁端部は面をもつ。 ○口縁部直下に小円孔(2孔1対)を穿つ。	○口縁部外面は横ナデ。内面はヘラミガキ。 ○体部外面はナデ。内面はナデの後、部分的なヘラミガキ。 ○体部外面には原体数8本の櫛描き直線文を施す。4帯残存。	○微粒の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○淡褐色。 ○第Ⅲ様式。	
		小形鉢	768	○口 6.0 ○高 4.1 ○底 2.8	○平底の底部より、体部が外上方へ伸び口縁部に至る。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラミガキ。内面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、雲母、角閃石を含む。 ○褐色。 ○第Ⅱ様式。
		鉢	769	○口30.4(復) ○高 7.8(残)	○張りの少ない体部より、口縁部がくの字形に外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメ。内面はナデ。	○精緻。微粒の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗褐色。 ○第Ⅱ様式。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生	鉢	770	○口38.4(復) ○高16.5(残)	○体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部に至る。 ○口縁端部は面をもつ。	○内外面はヘラミガキ。 ○体部外面に接合痕が残る。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母、クサリ礫を含む。 ○暗灰褐色。 ○第Ⅱ様式。
		771	○口31.0(復) ○高13.4(残)	○体部は外上方へ伸びた後、内傾する。口縁部は強く外折する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はヘラミガキ。 ○口縁端部に1帯、体部に2帯の櫛描き簾状文を施す。原体数13本。文様帯間は研磨。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母、クサリ礫を含む。 ○灰褐色。 ○第Ⅲ様式。
	甕	772	○口17.2(復) ○高 5.9(残)	○張りの少ない体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメの後ナデ。内面はナデ。 ○体部外面にヘラ描き沈線文を施す。1条残存。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○乳灰色。 ○第Ⅰ様式。
		773	○口18.0(復) ○高 4.9(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。 ○口縁端部にキザミ目、体部外面に4条のヘラ描き沈線文を施す。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○灰白色。 ○第Ⅰ様式。
		774	○口27.2(復) ○高 6.2(残)	○やや張りのある体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。 ○口縁端部にキザミ目、体部外面に3条のヘラ描き沈線文を施す。	○精緻。1～5mmの石英、長石、角閃石、雲母、クサリ礫を含む。 ○暗灰褐色。 ○第Ⅰ様式。
		775	○口18.4(復) ○高 5.0(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はナデ。 ○口縁端部にキザミ目、体部外面に4条のヘラ描き沈線文を施す。	○精緻。1～3mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗灰褐色。 ○第Ⅰ様式。
776	○口21.6(復) ○高 4.5(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメ。内面はハケメの後、ナデ。 ○口縁端部にキザミ目を施す。	○精緻。1～2mmの石英、長石、雲母を含む。 ○茶灰色。 ○第Ⅰ様式。		

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生土器	甕	777	○口18.7(復) ○高 6.6(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が強く外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメ。内面はナデ。 ○口縁端部にキザミ目を施す。	○粗。1～5mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗褐色。 ○第Ⅰ様式。
		778	○口23.8(復) ○高 2.8(残)	○口縁部はゆるく外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメ。内面はナデ。 ○口縁端部にキザミ目を施す。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗褐色。 ○第Ⅱ様式。
		779	○口20.8(復) ○高 6.7(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメ。内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石を含む。 ○乳灰色。 ○第Ⅱ様式。
		780	○口22.4(復) ○高17.0(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はハケメ、内面はナデ。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母、クサリ礫を含む。 ○暗褐色。 ○第Ⅱ様式。
		781	○口24.5(復) ○高 7.8(残)	○張りの少ない体部より、口縁部がゆるく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○口縁部外面は横ナデ。内面はヘラミガキ。 ○体部外面はハケメ。内面はナデの後、ヘラミガキ。	○精緻。1～5mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗灰褐色。 ○第Ⅱ様式。
		782	○口22.1(復) ○高 3.1(残)	○張りの少ない体部より、口縁部が大きく外反する。 ○口縁端部は丸く終る。	○内外面はヘラミガキ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗茶褐色。 ○第Ⅱ様式。
		783	○口13.8(復) ○高 4.0(残)	○やや張る体部より、口縁部が強く外折する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面は煤が付着しているので調整法は不明。内面はナデ。接合痕が残る。	○精緻。1～2mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗褐色。 ○第Ⅱ様式。

種類	器種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
弥生	甕	784	○口19.4(復) ○高 9.5(残)	○張りのある体部より、口縁部がくの字形に外反する。 ○口縁端部はやや上方へつまみ上げ気味に終る。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部内外面はハケメ。	○精緻。微粒の石英、長石を含む。 ○淡灰褐色。 ○第Ⅲ様式。
		785	○口17.9(復) ○高12.3(残)	○張りのある体部より、口縁部がくの字形に外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラミガキ。内面はハケメ。	○精緻。微粒の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗灰褐色。 ○第Ⅲ様式。
		786	○口17.7(復) ○高 5.2(残)	○張りのある体部より、口縁部がくの字形に外反する。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面は横ナデ。 ○体部外面はヘラミガキ。内面はナデ。	○精緻。1mm大の石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗灰褐色。 ○第Ⅲ様式。
		787	○高20.6(残) ○底 6.2	○平底の底部より、体部が外上方へ伸びる。	○体部外面はヘラミガキ。内面はハケメの後、ヘラミガキ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○淡赤灰色。 ○第Ⅲ様式。
土器	甕蓋	788	○口19.2(復) ○高 3.8(残)	○体部の立ち上がりは少なく、口縁部が裾広がりになる。 ○口縁端部は丸く終る。	○外面はハケメの後、ヘラミガキ。内面はヘラミガキ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、黒色砂粒を含む。 ○乳灰色。 ○第Ⅱ様式。
		底部	789	○高 2.9(残) ○底 4.7(復)	○平底の底部である。	○内外面はナデ。
790	○高 1.3(残) ○底 5.1(復)		○平底の底部である。	○内外面はナデ。	○精緻。1～3mmの石英、長石、角閃石、雲母を含む。 ○暗灰色。	
791	○高 3.3(残) ○底 7.6		○平底の底部である。	○外面はハケメの後、ナデ。内面は風化のため調整法は不明。	○精緻。1～3mmの石英、長石を含む。 ○乳灰色。	

版 図



1. SD1



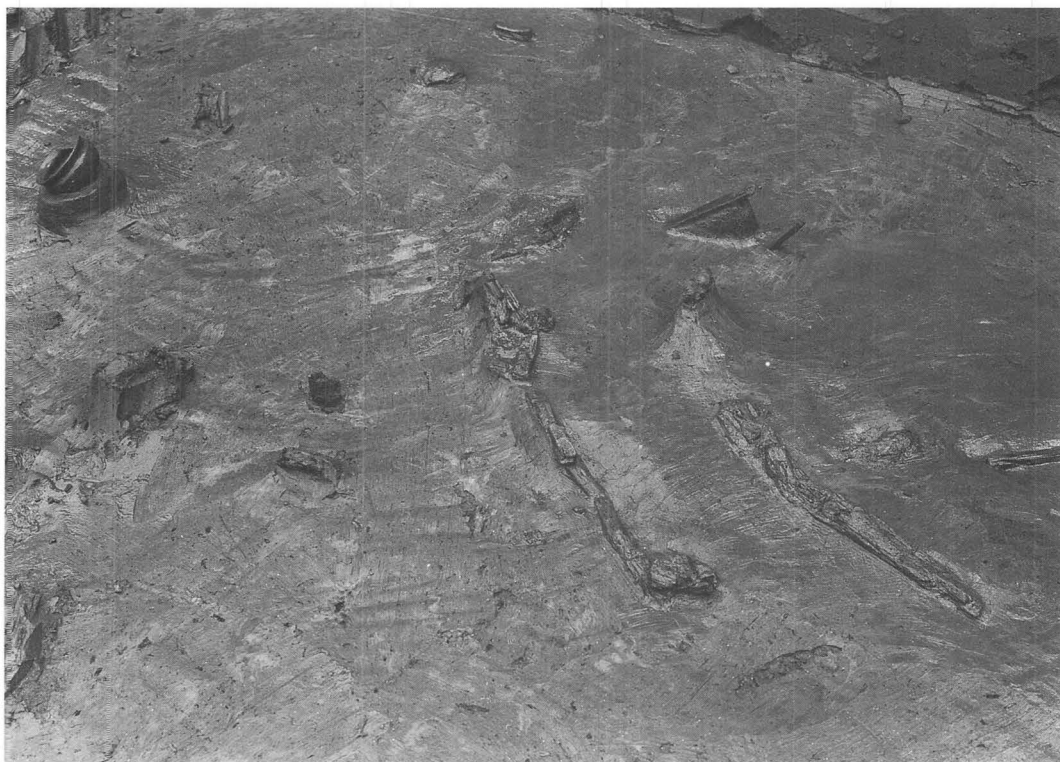
2. SD2

図版2

No. 1トレンチ遺構



2. 足跡



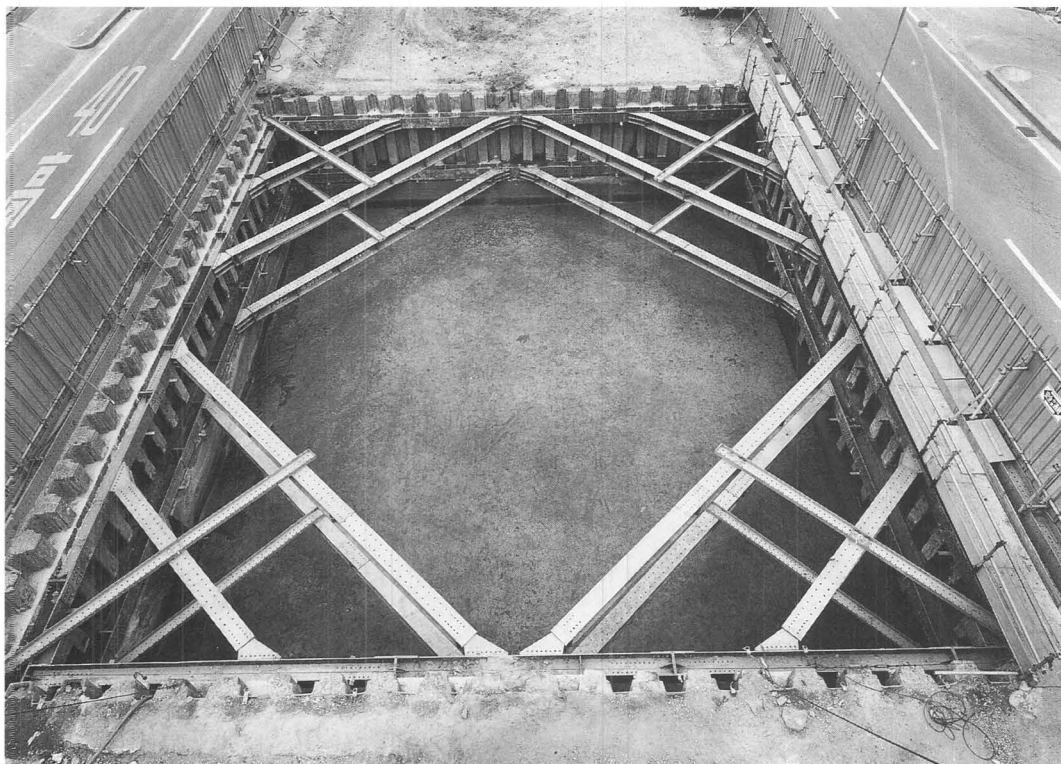
2. 第10層遺物出土状況



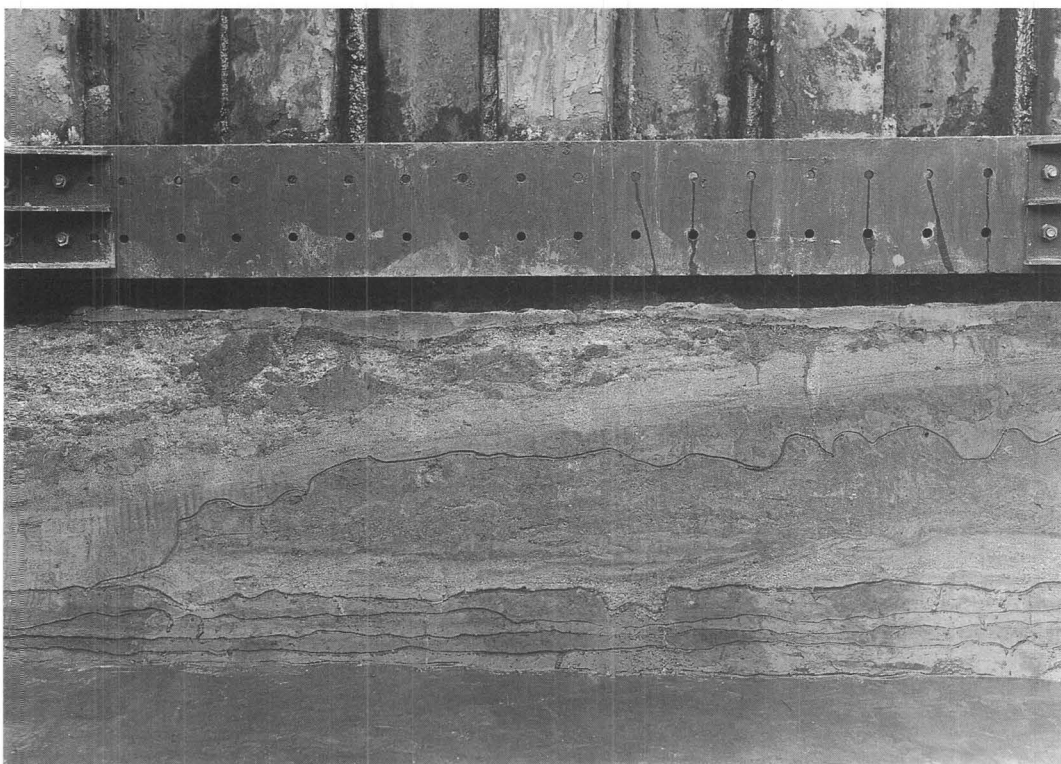
1. 第10層鉄斧出土状況



2. 第10層刀子出土状況



1. 第2トレンチ全景



2 第2トレンチ南壁断面



1. トレンチ全景(東より)



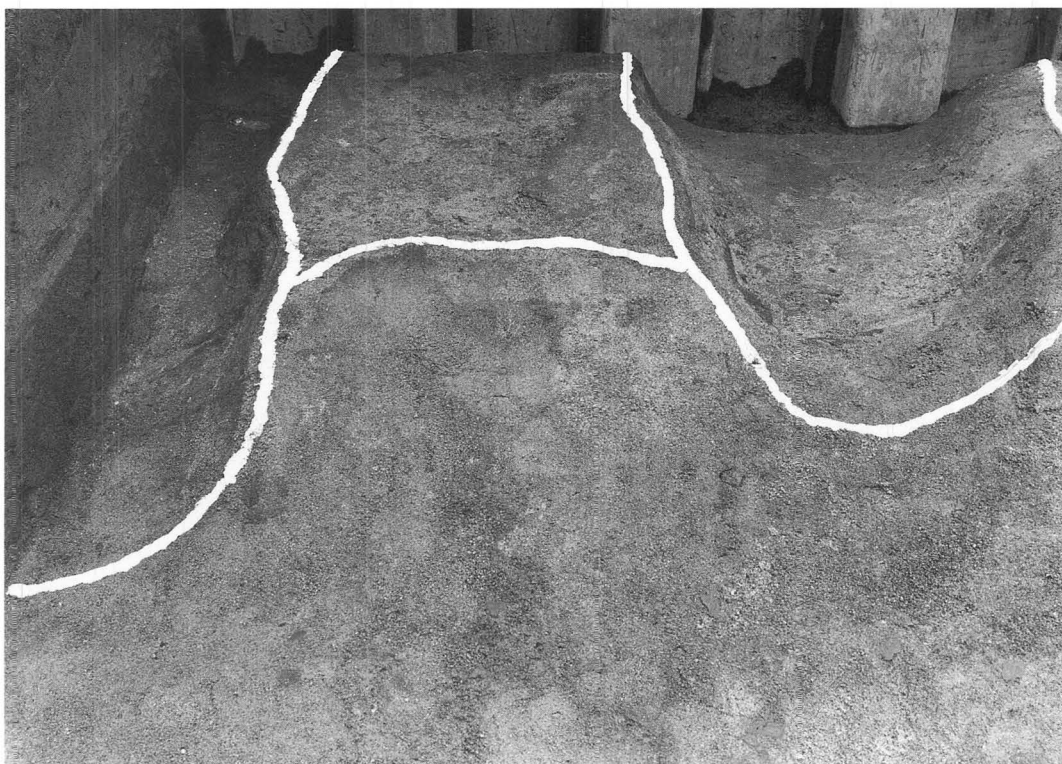
2. 足跡面1遺構

図版 6

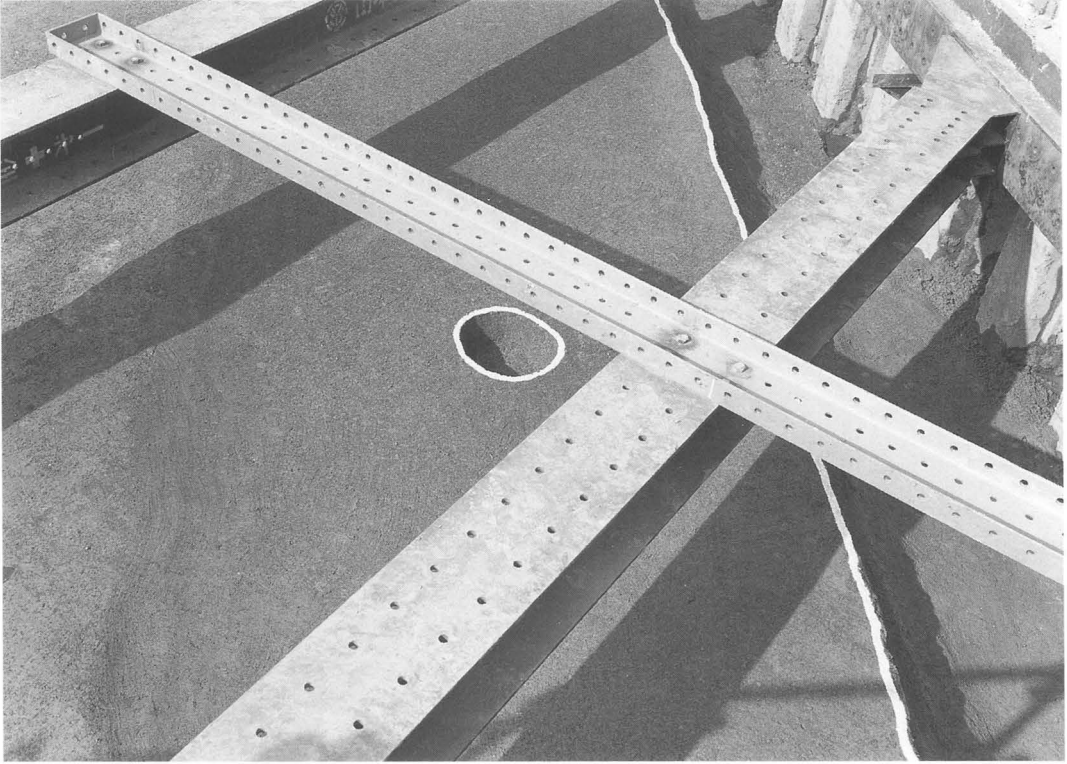
No. 3 トレンチ遺構



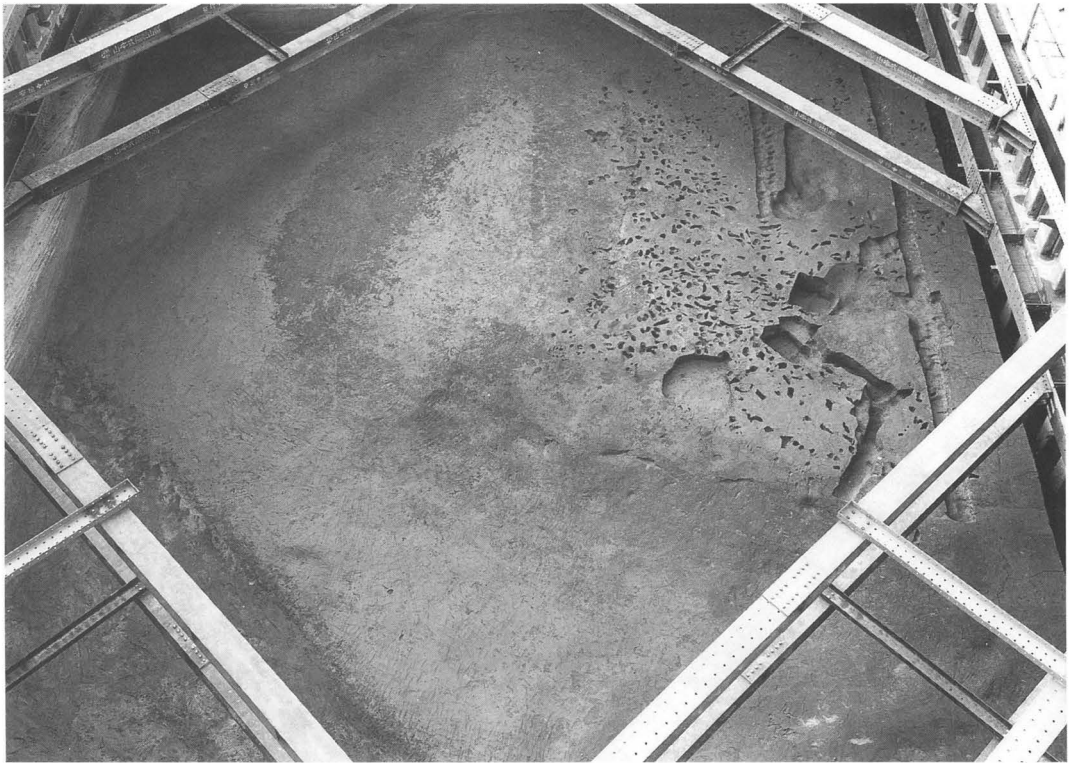
1. 足跡面1遺構



2. 足跡面1遺構



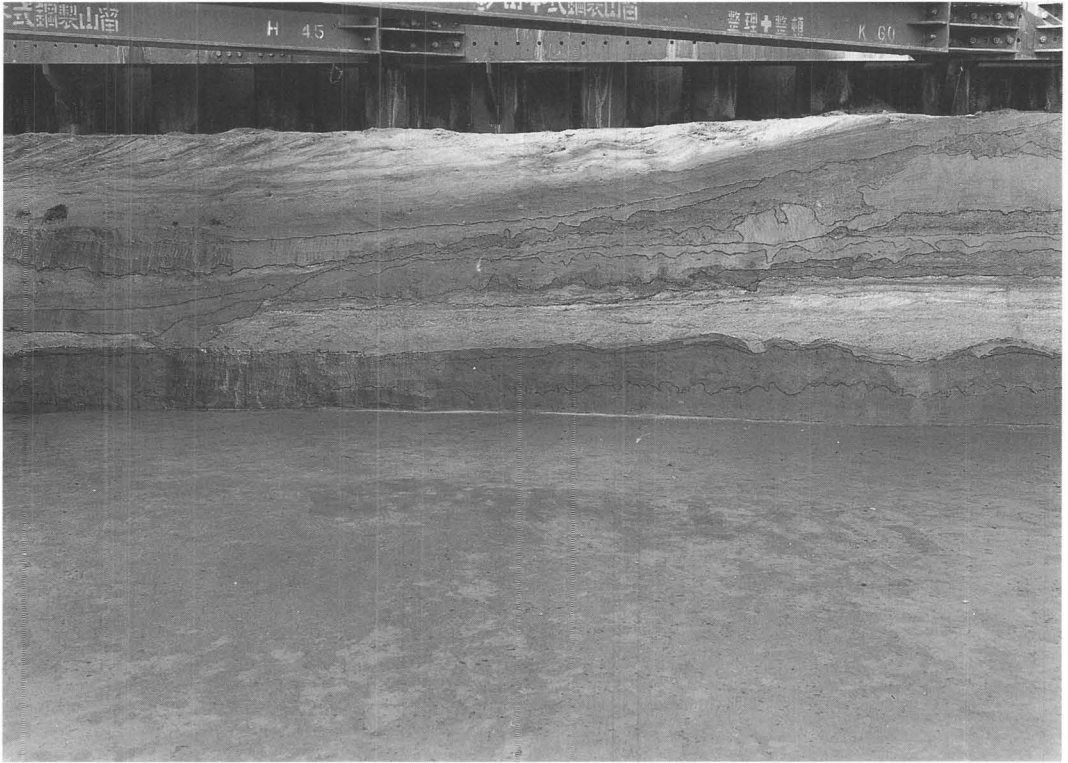
1. 足跡面 1 遺構



2. 足跡面 1 遺構

版
8

No. 3
トレンチ
遺構



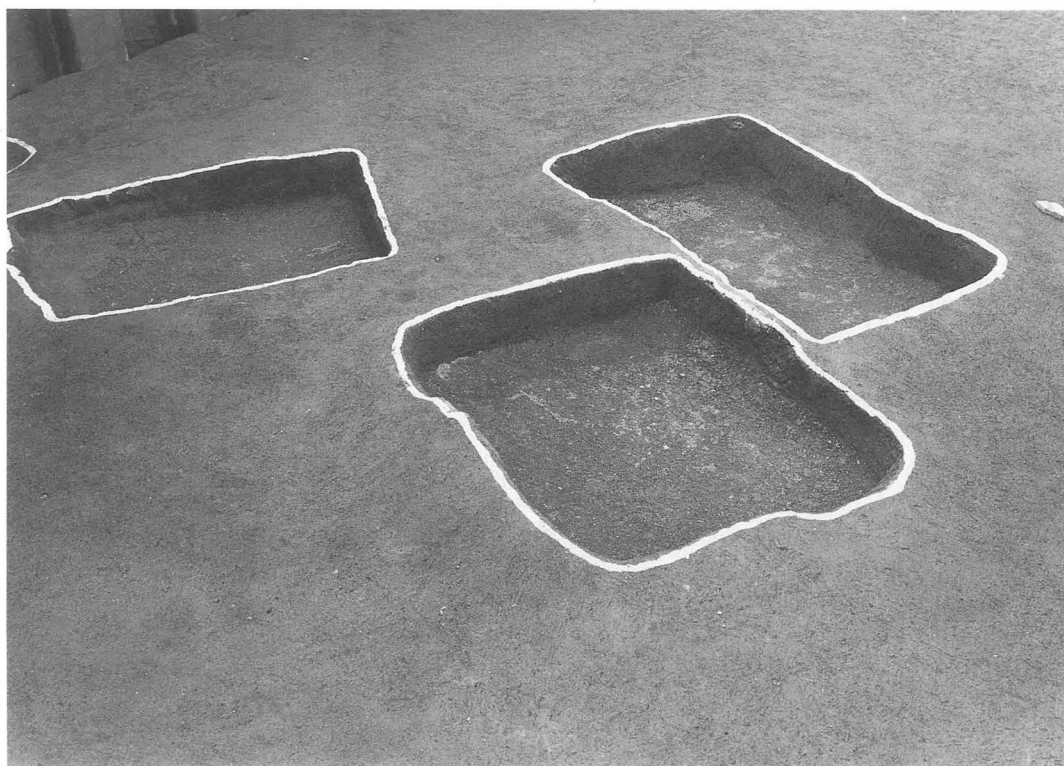
1. 西壁断面



2. 足跡面 2



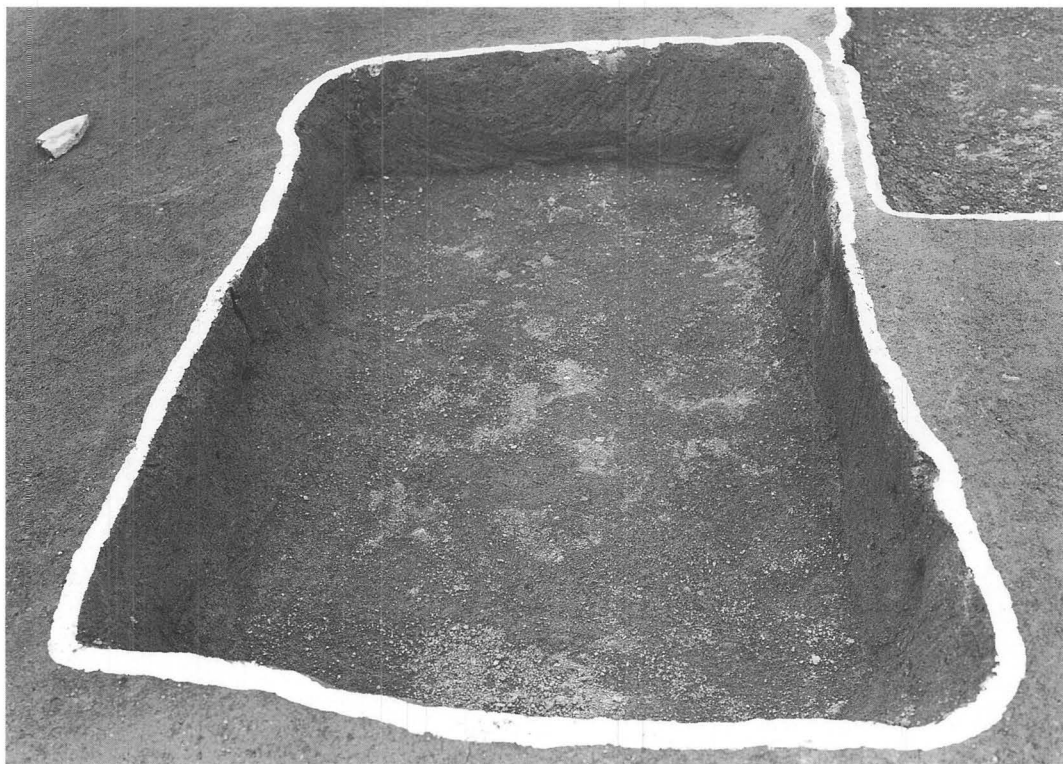
1. 遺構面 1・1'



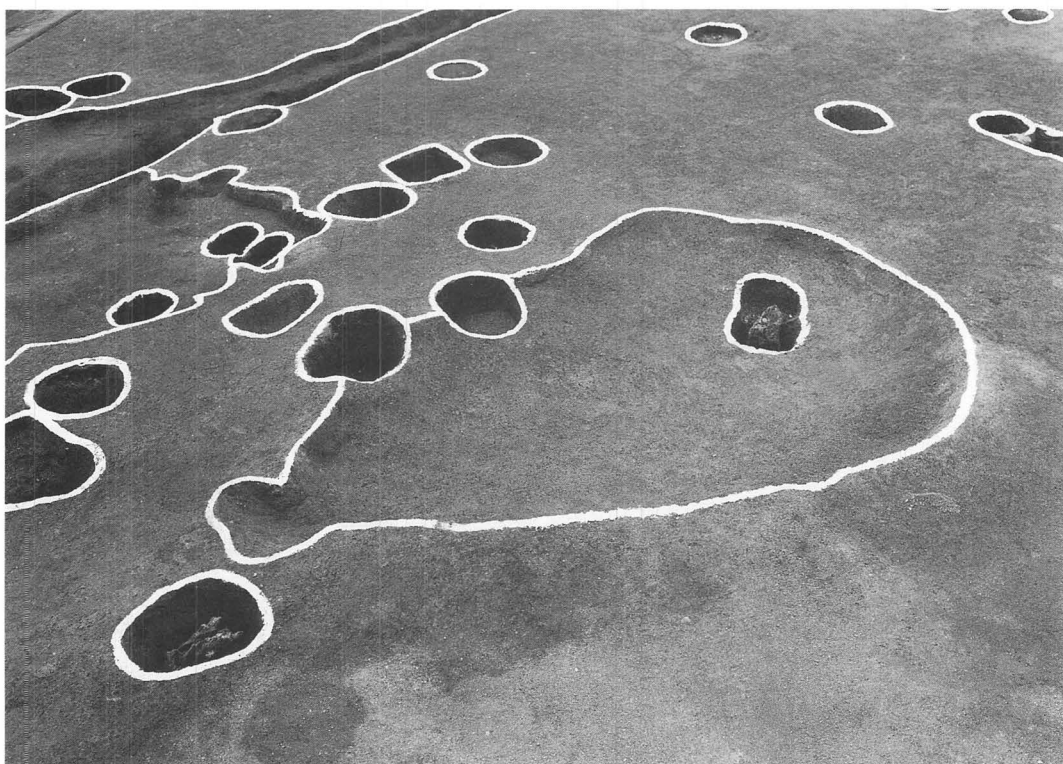
2. 遺構面 1 落ち込み 1・2・4

図版
10

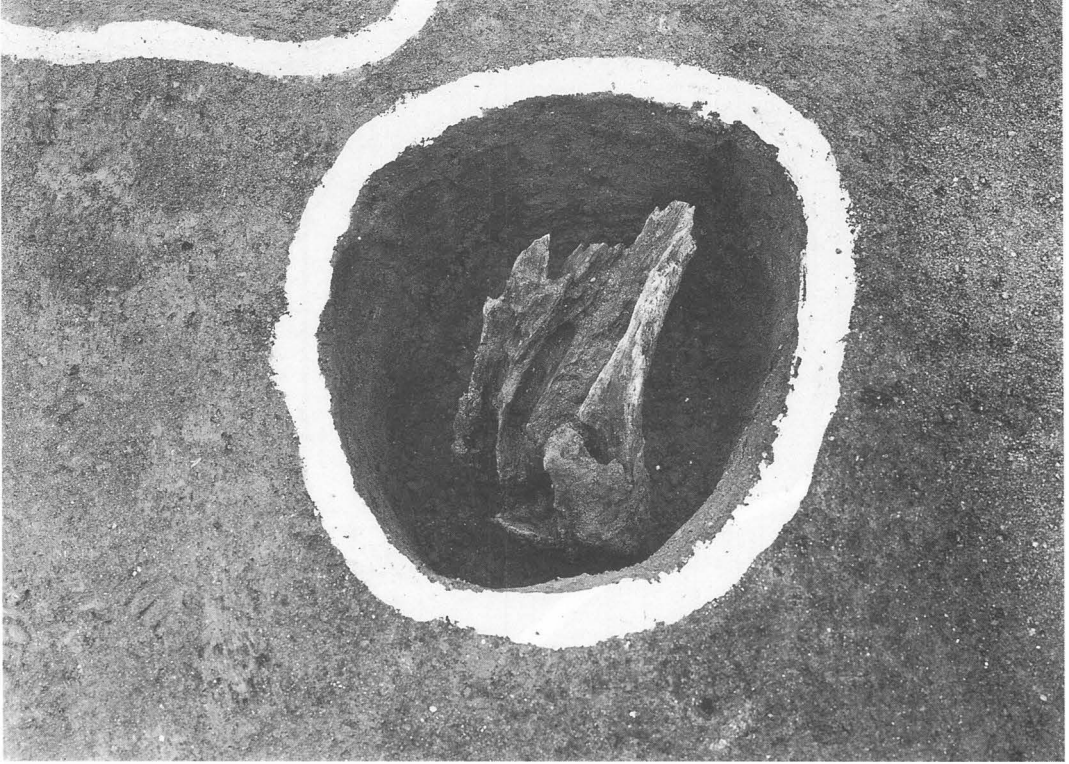
No. 4
トレンチ
遺構



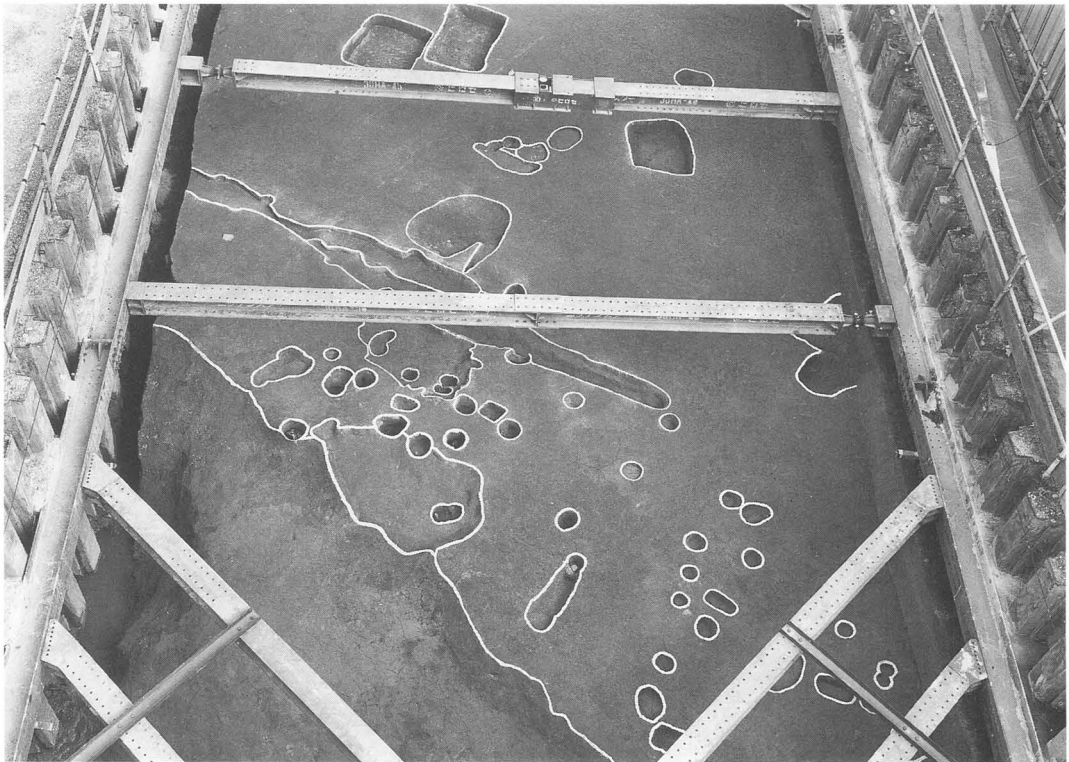
1. 遺構面1 落ち込み1



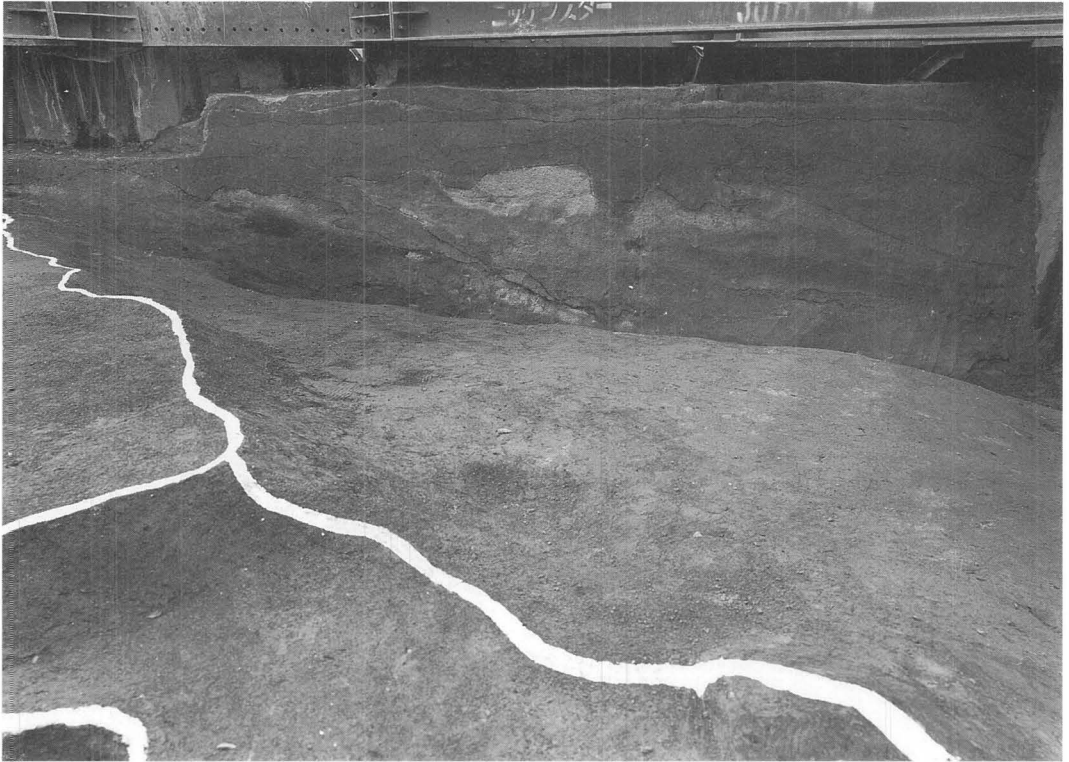
2. 遺構面1 SK3他



1. 遺構面1 柱穴



2. 遺構面1・1'



1. 遺構面2 SK17



2. 遺構面1'・2



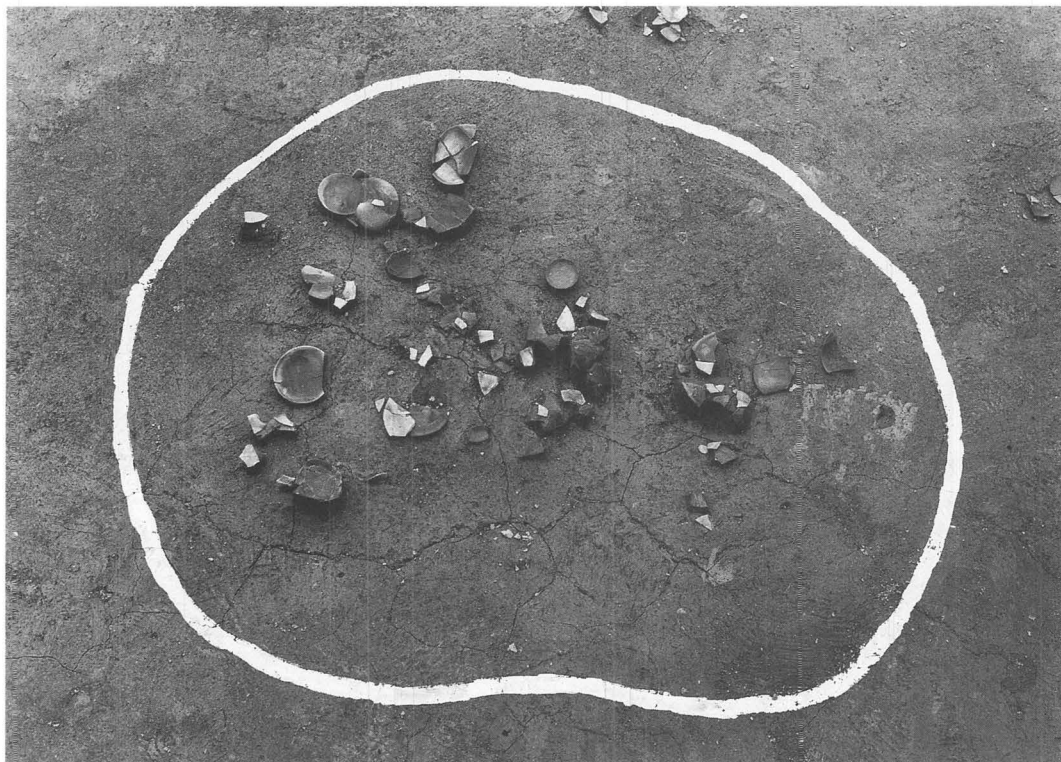
1. 遺構面1・1' 柱穴・土器溜り



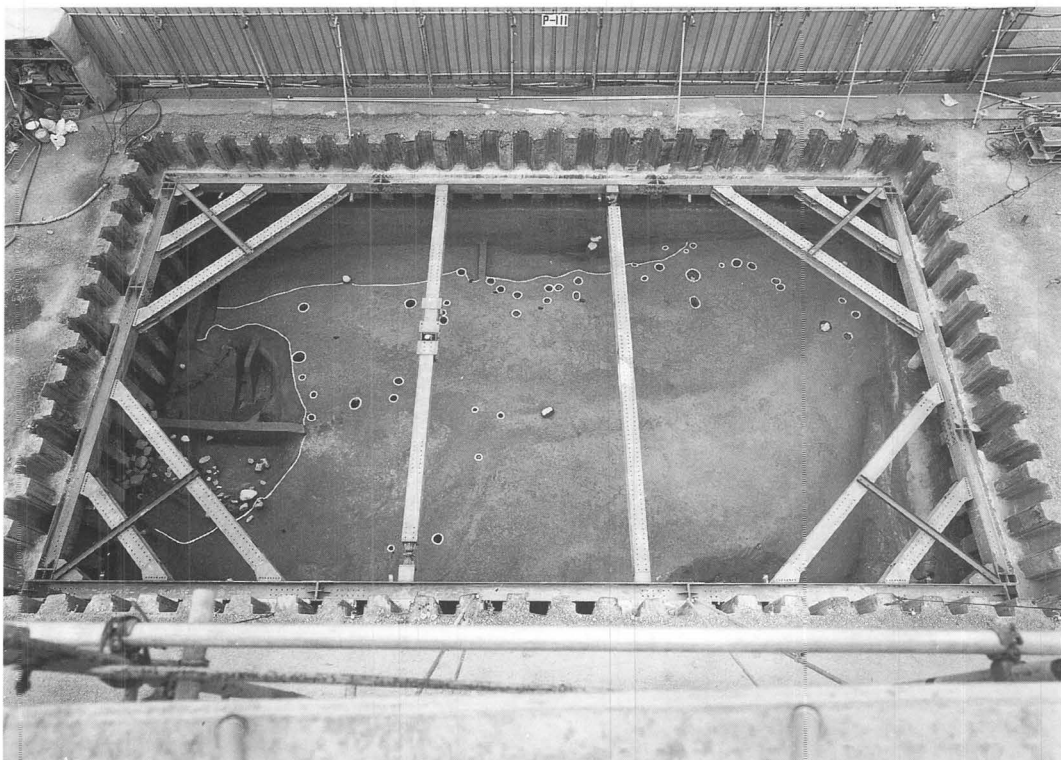
2. 遺構面1・1' 柱穴

図版
14

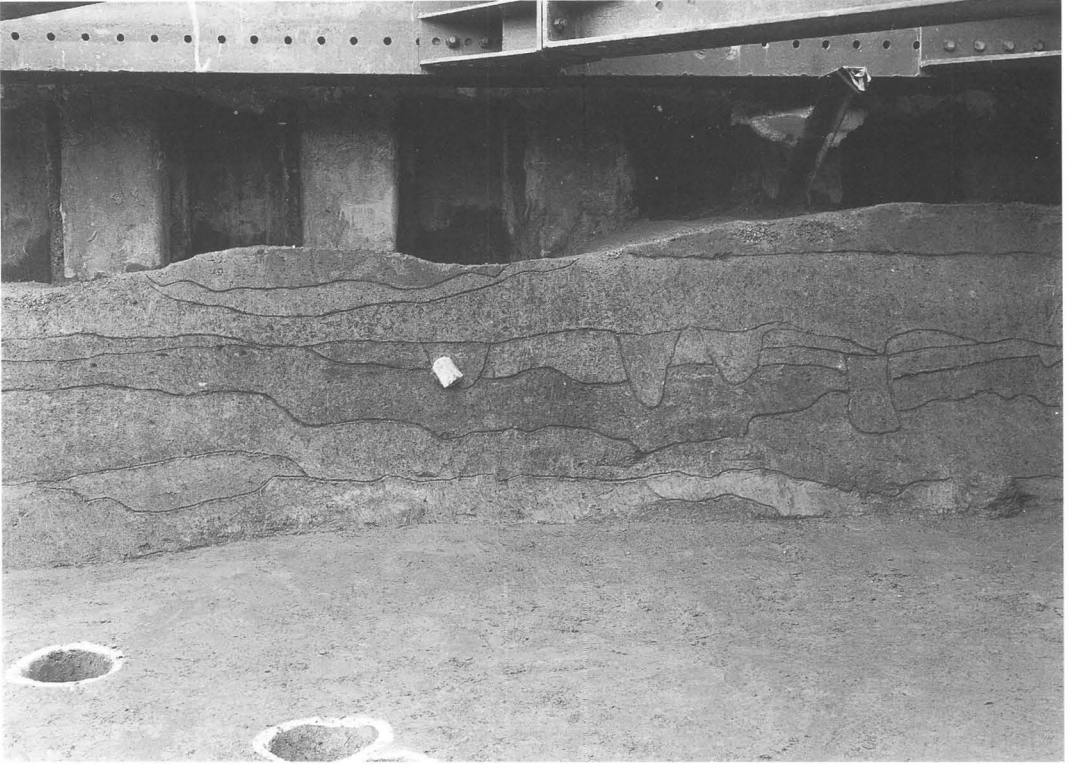
No. 4
トレンチ
遺構



1. 遺構面 1・1' 土器溜り



2. 遺構面 2



1. 南壁断面



2. 南壁断面、SK17



1. 遺構面 2 遺物出土状況



2. 遺構面 2 遺物出土状況



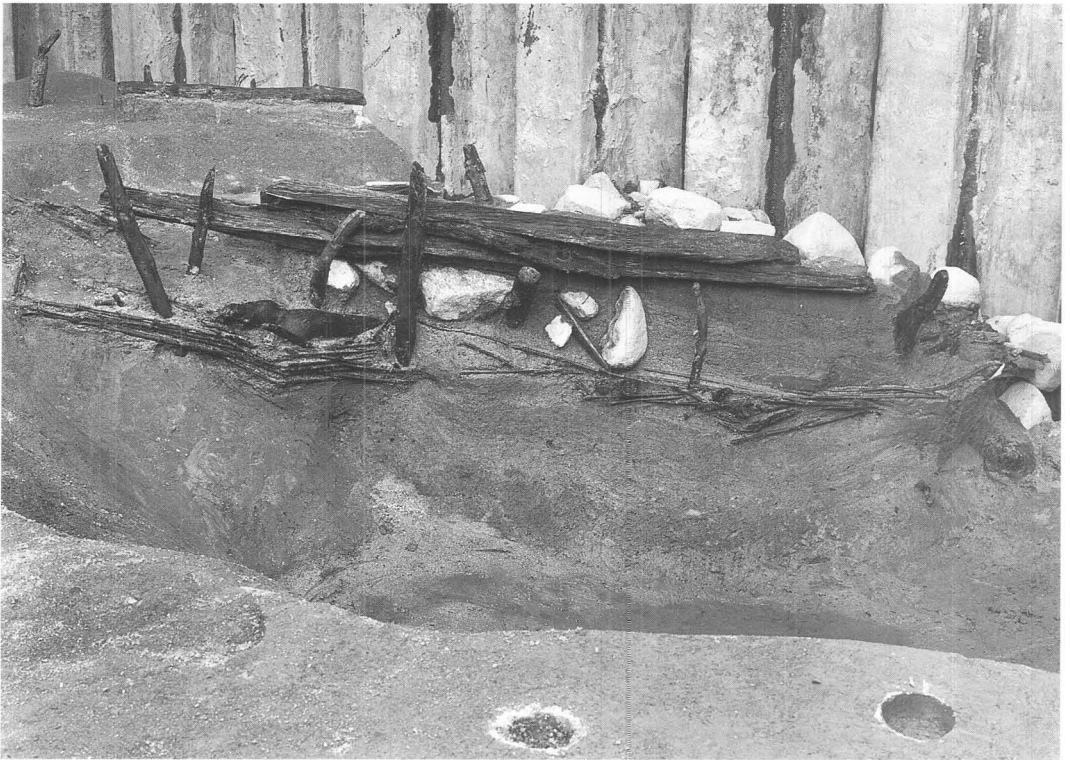
1. SK16・18全景



2. SK16断面



1. SK16杭列



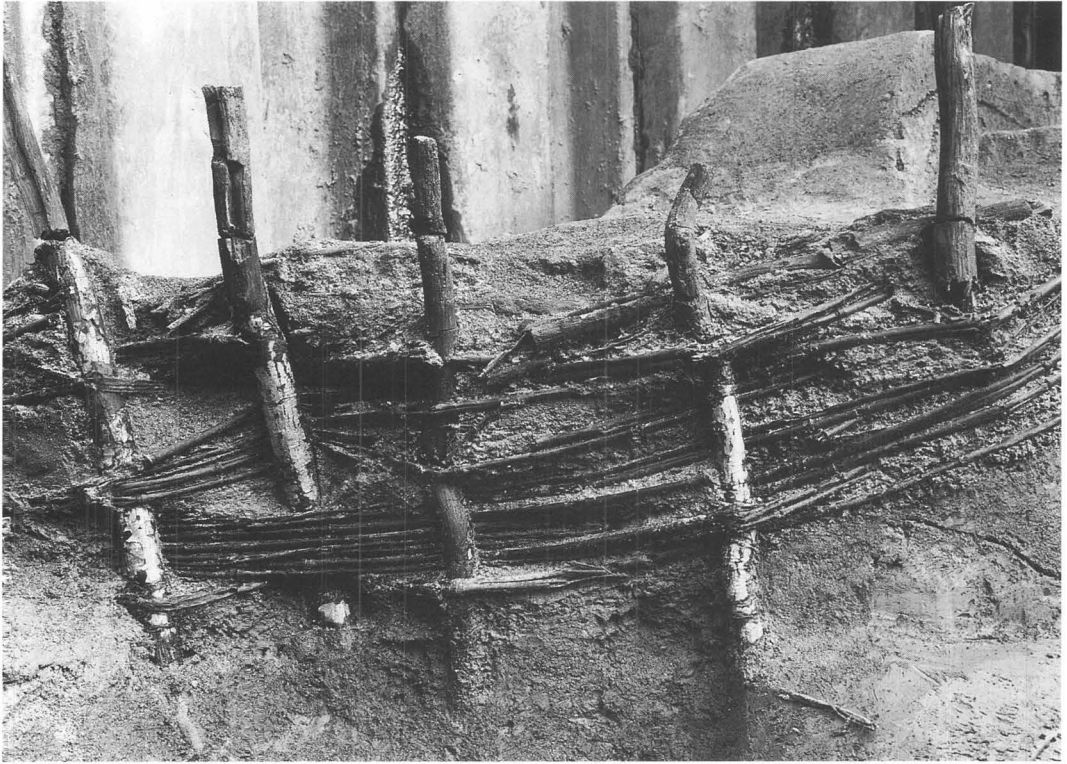
2. SK16北側施設



1. SK16北側施設



2. SK16北側施設



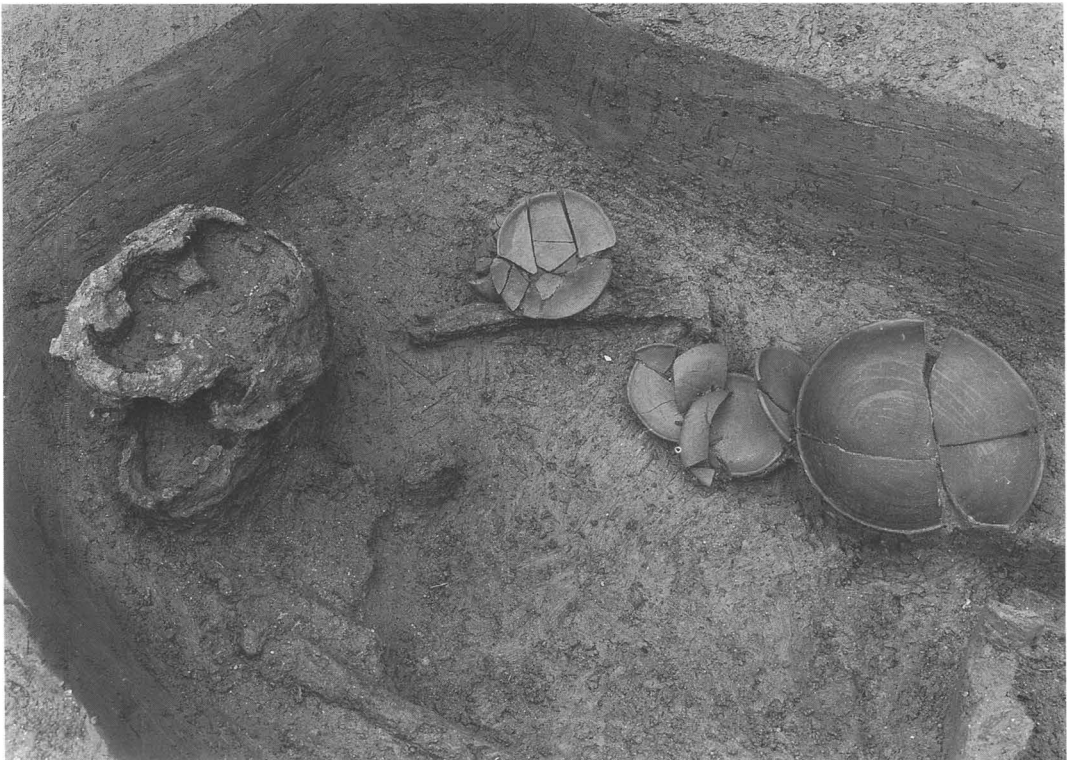
1. SK16南側施設



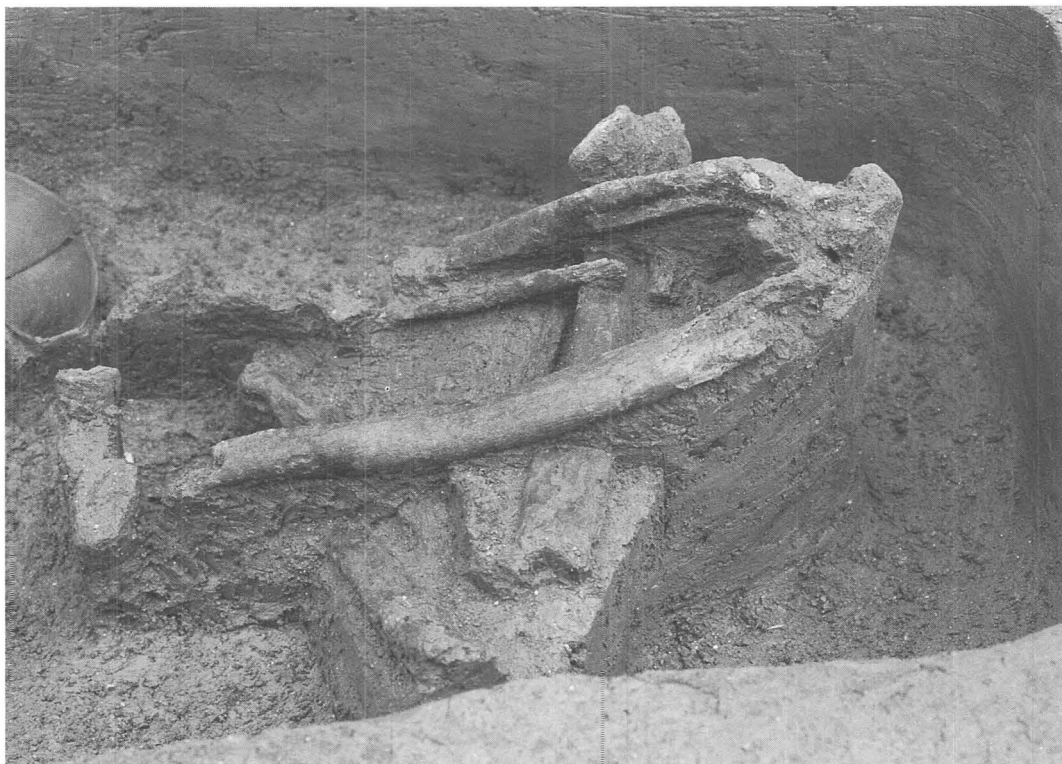
2. SK16・18全景



1. 土塚墓全景



2. 土塚墓人骨頭部



1. 土壇墓人骨下半



2. 土壇墓人骨下半



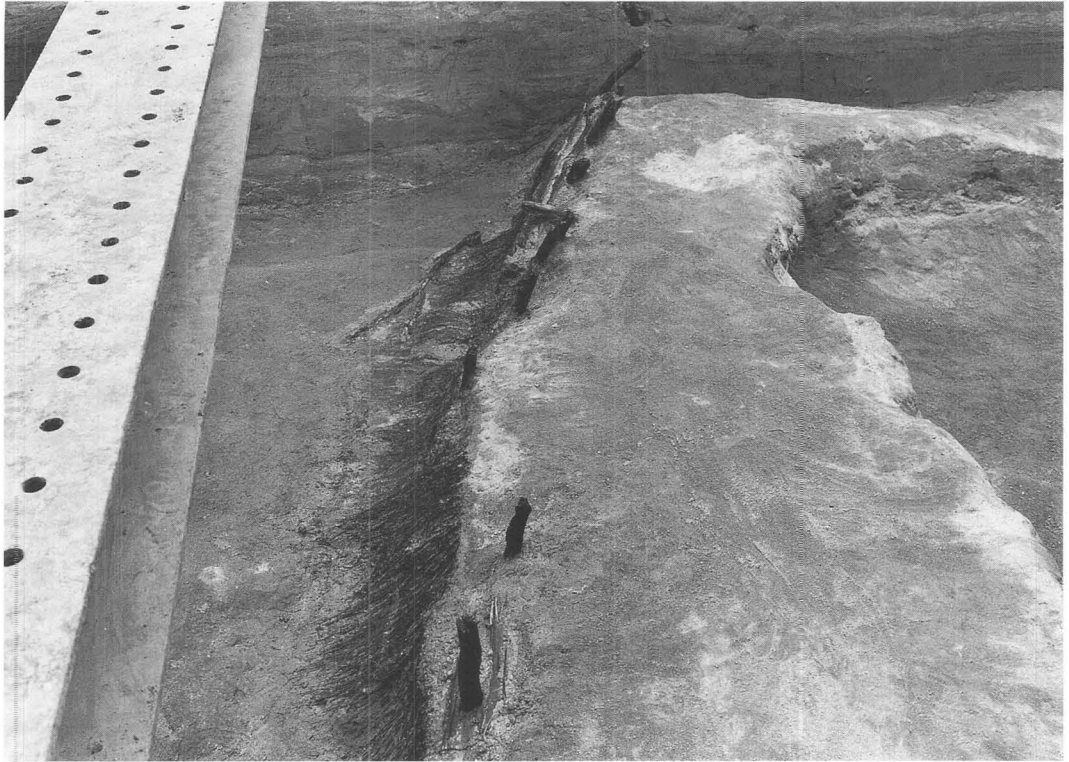
1. 堤防



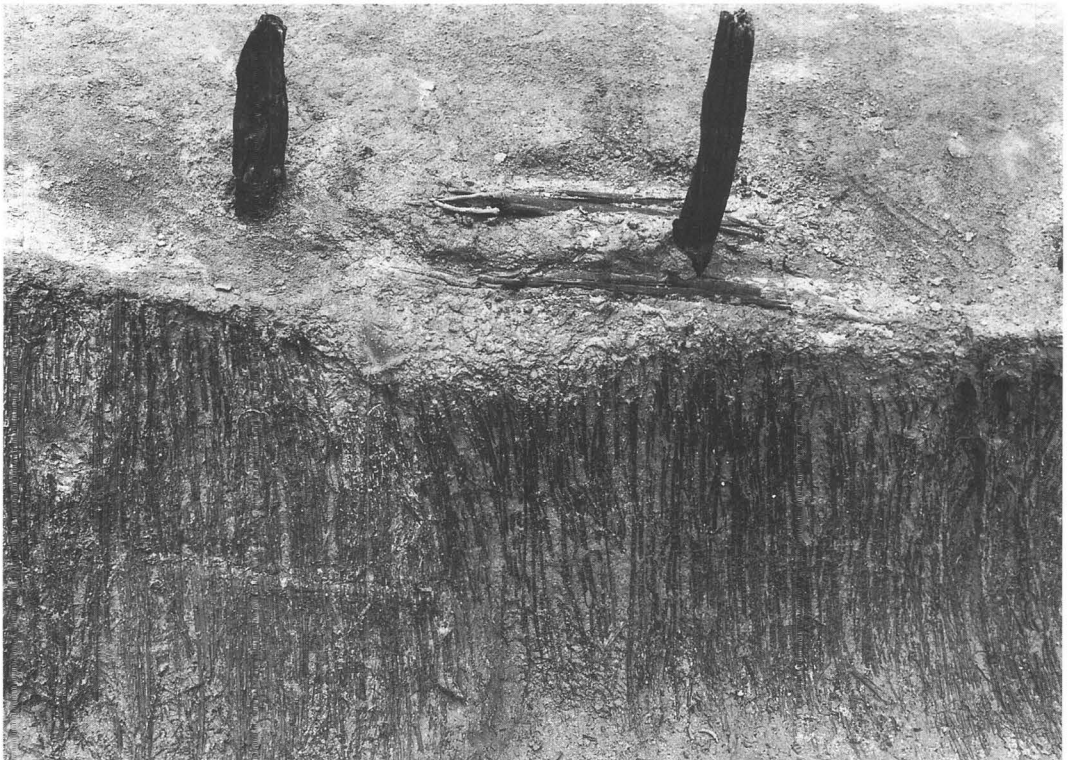
2. 堤防

図版
24

No. 5
トレンチ遺構



1. 堤防上面



2. 堤防東面杭列、葦



1. 堤防東面杭列、葦、前面杭列



2. 堤防東面杭列、葦



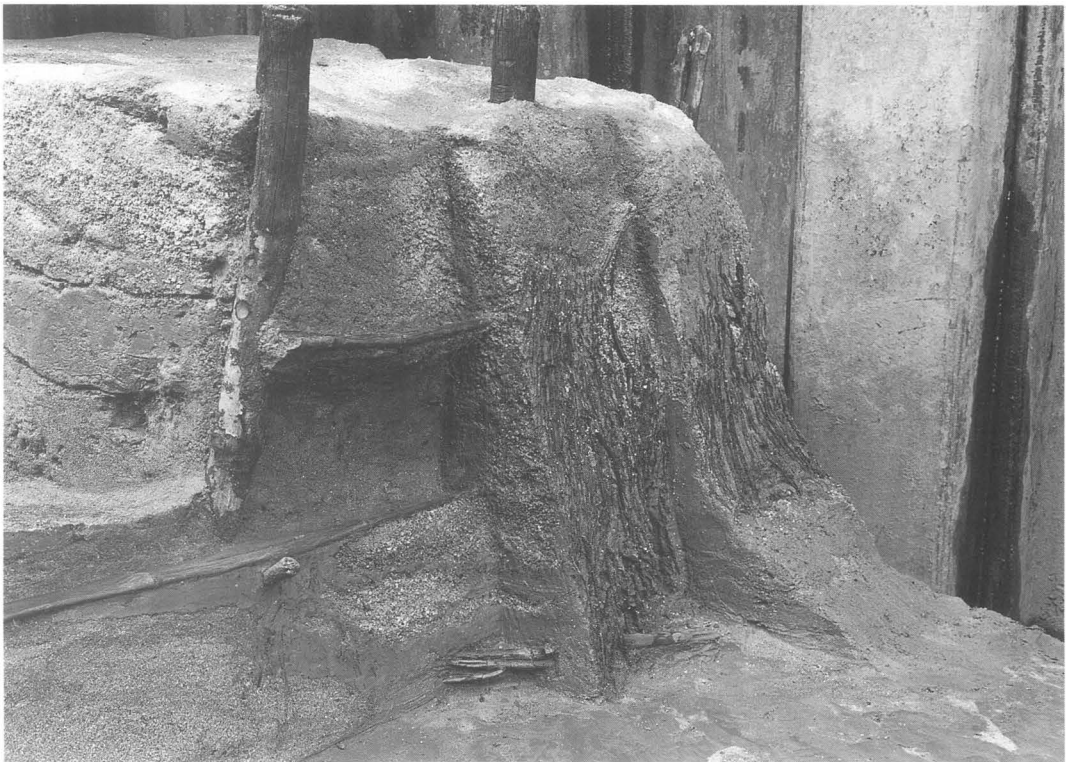
1. 堤防東面杭列、葦、前面杭列



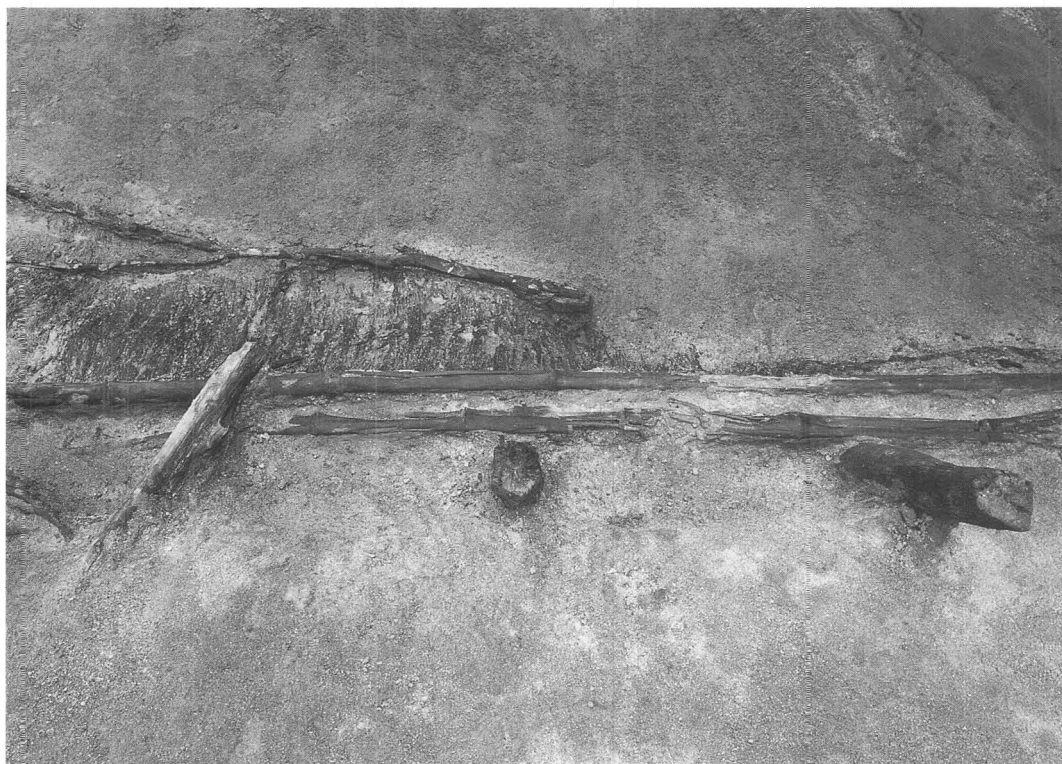
2. 堤防東面杭列、葦、前面杭列



1. 堤防東面杭列、葦



2. 堤防東面杭列、葦断面



1. 堤防東面杭列、葦



2. 堤防東面杭列、葦断面



1. 堤防東面内部



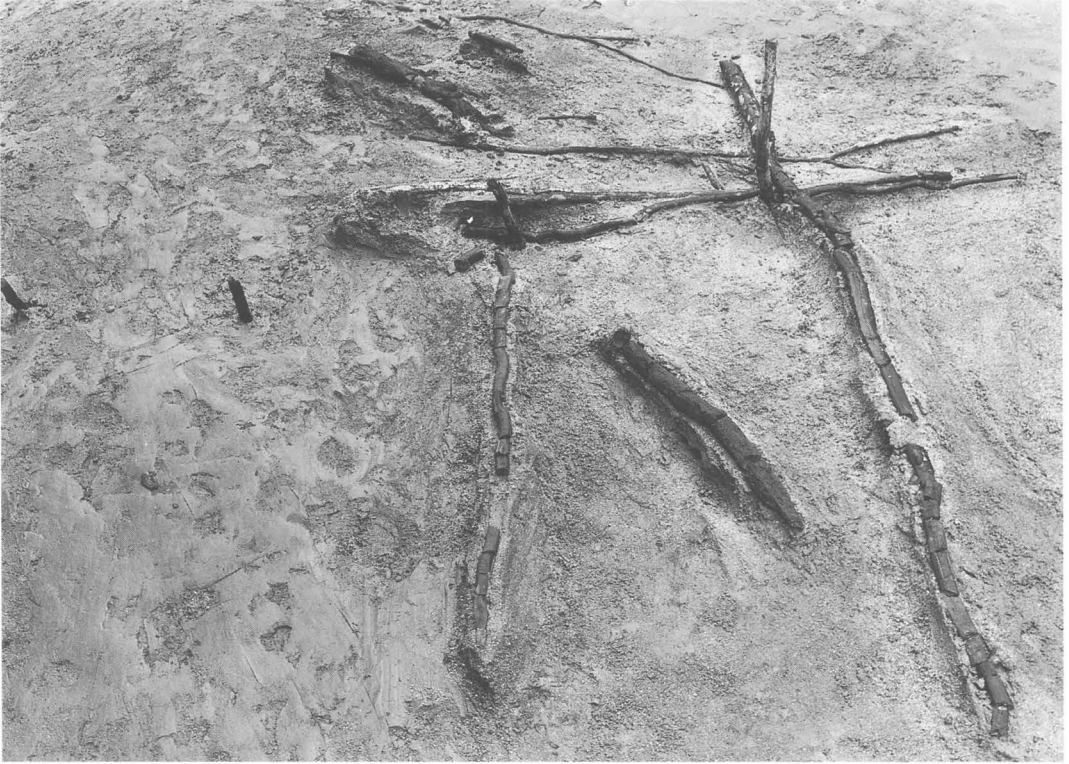
2. 堤防基礎部



1. 堤防基礎部



2. 堤防基礎部



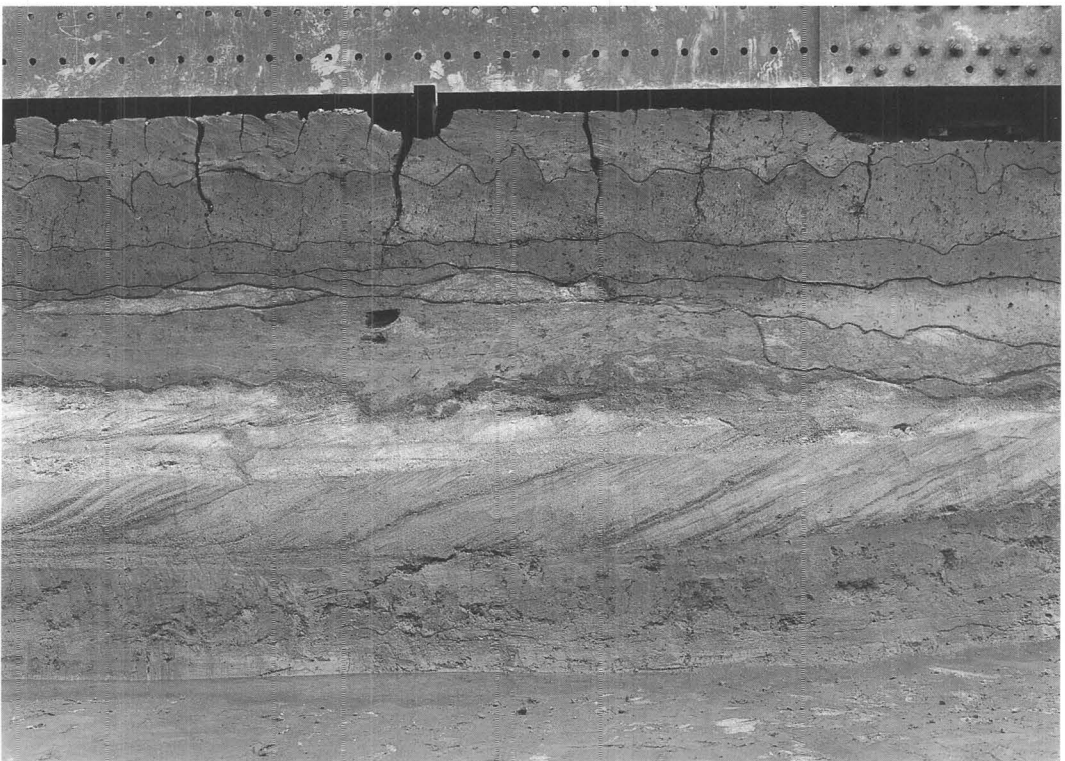
1. 堤防基礎部



2. 堤防断面



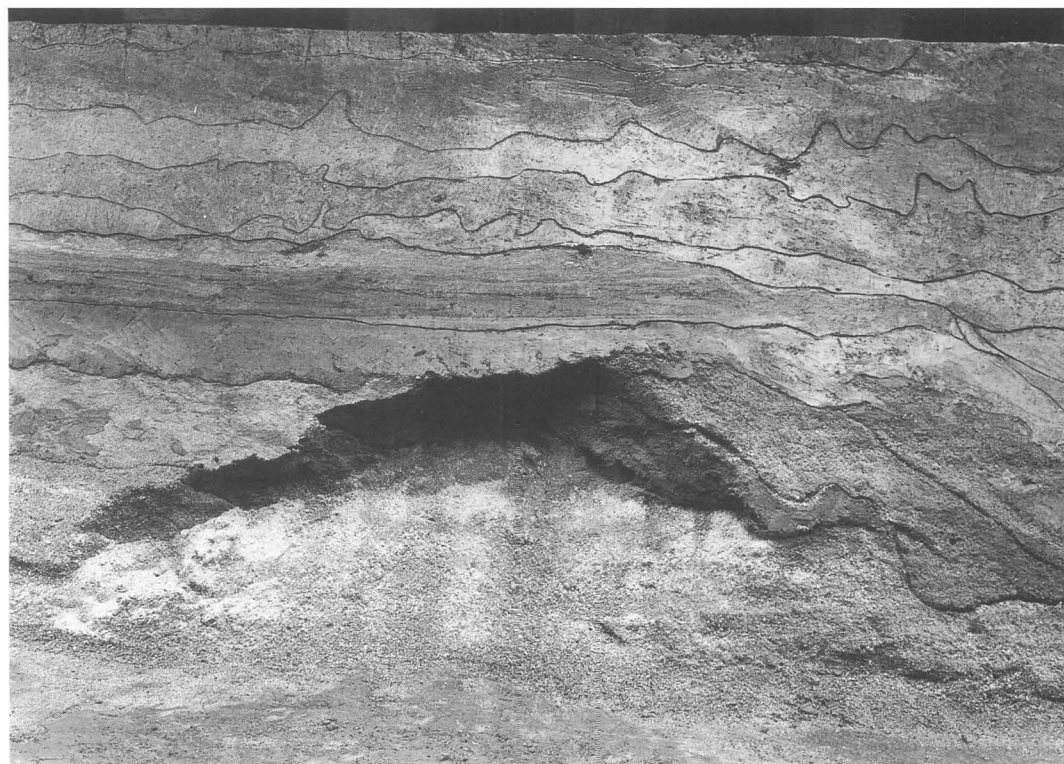
1. 南壁断面



2. 南壁断面



1. 南壁断面



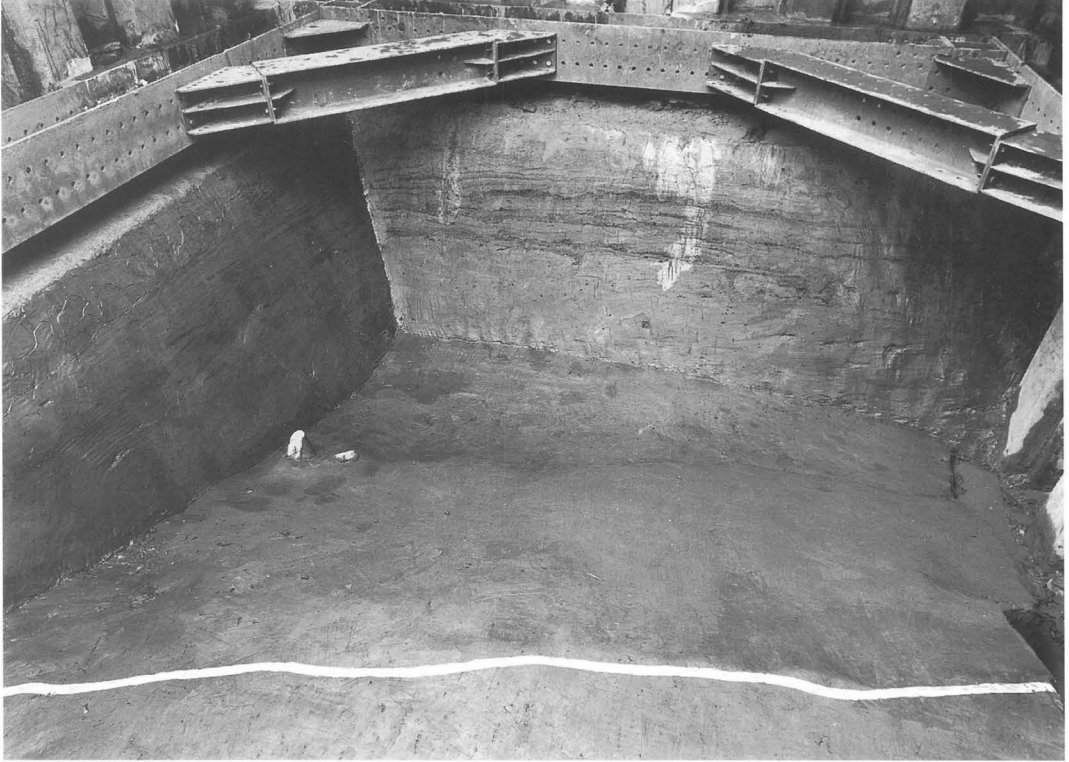
2. 南壁断面



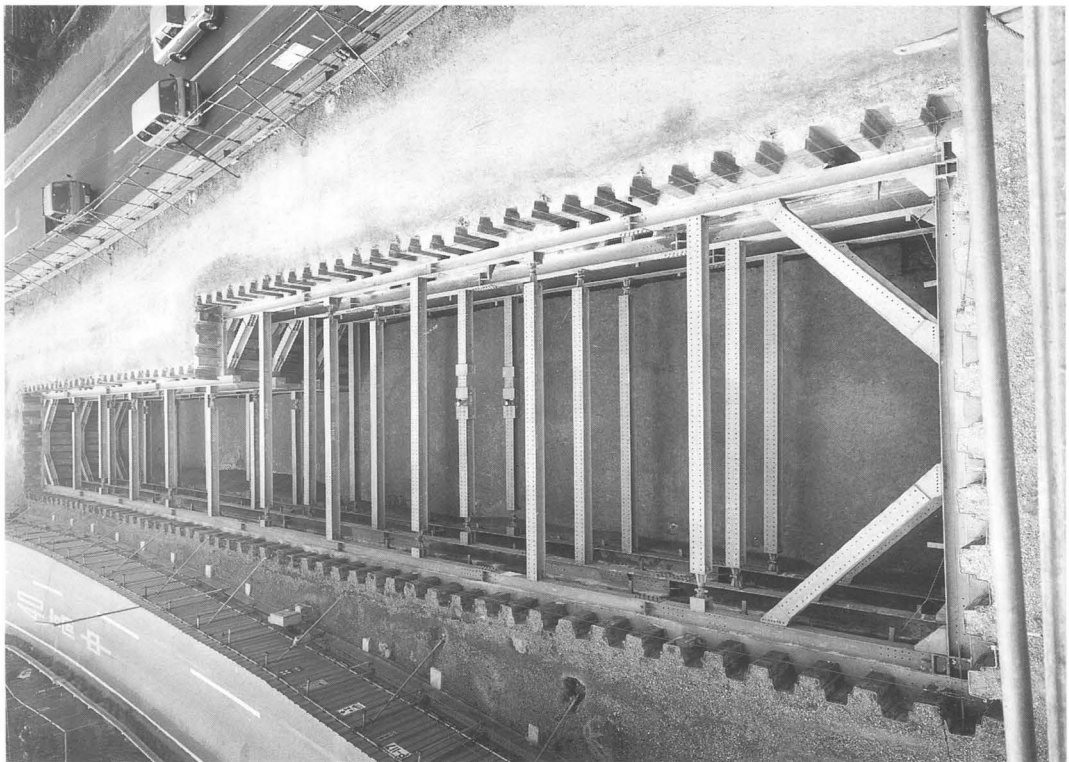
2. 最下層落ち込み



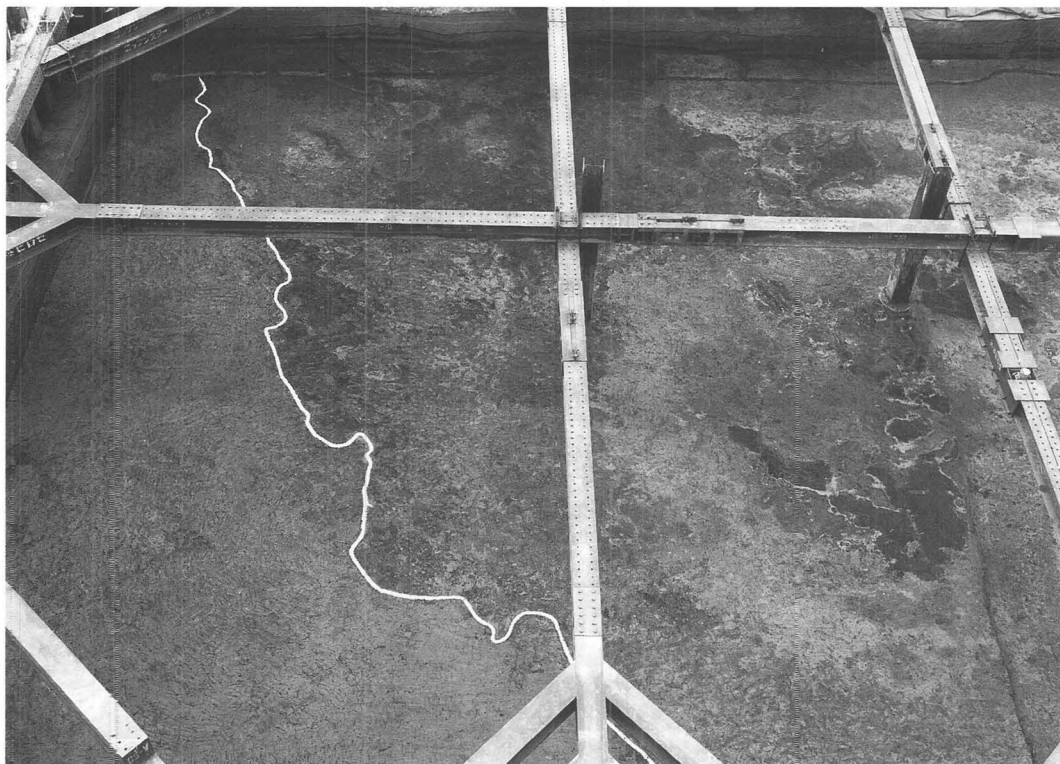
2. 最下層落ち込み断面



1. 西壁断面



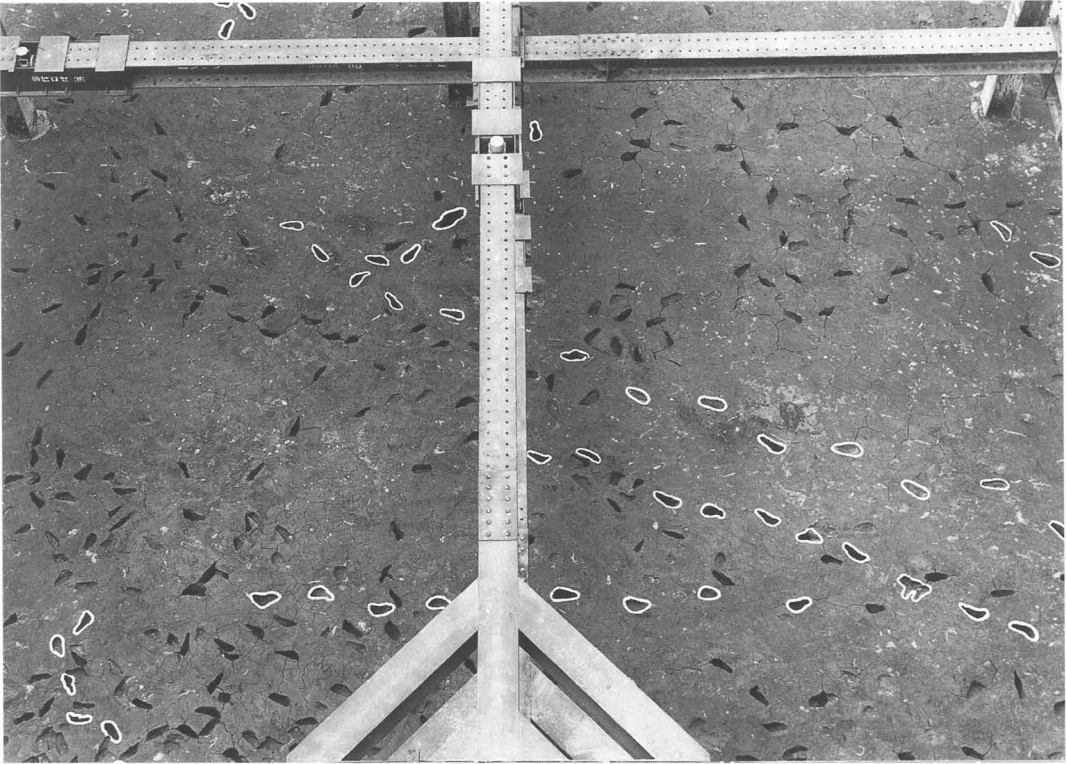
2. トレンチ全景



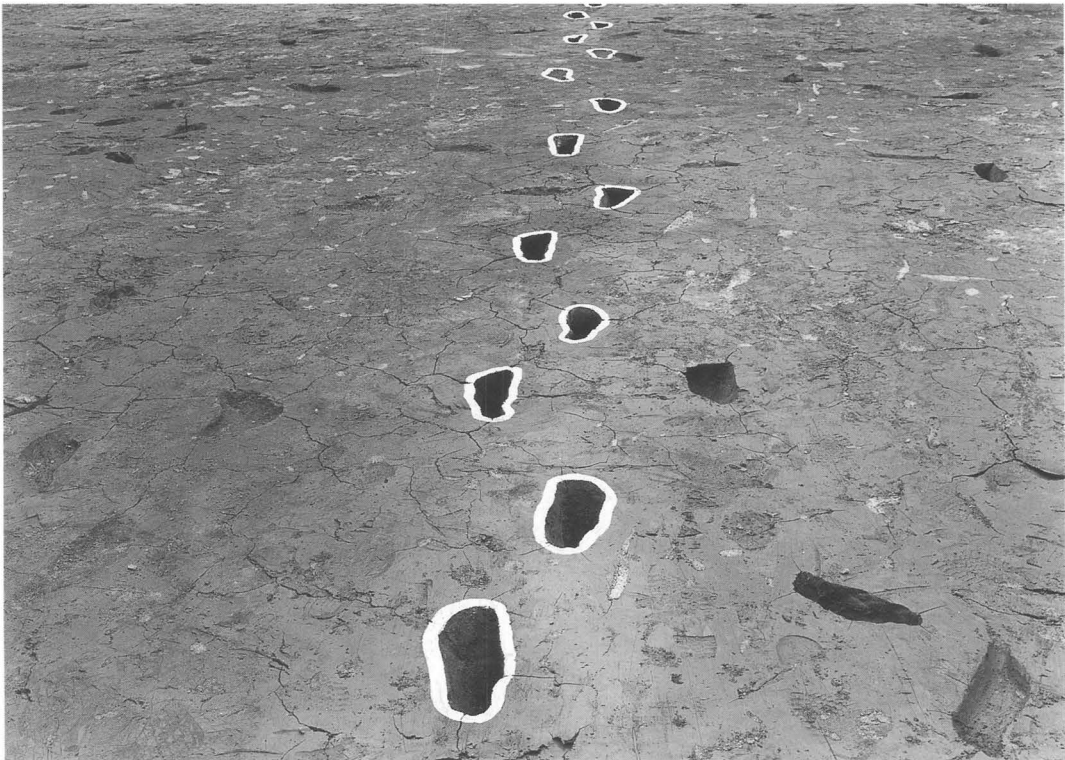
1. 落ち込み



2. 足跡



1. 足跡



2. 足跡



1. 第10層遺物出土状況



2. 第10層遺物出土状況



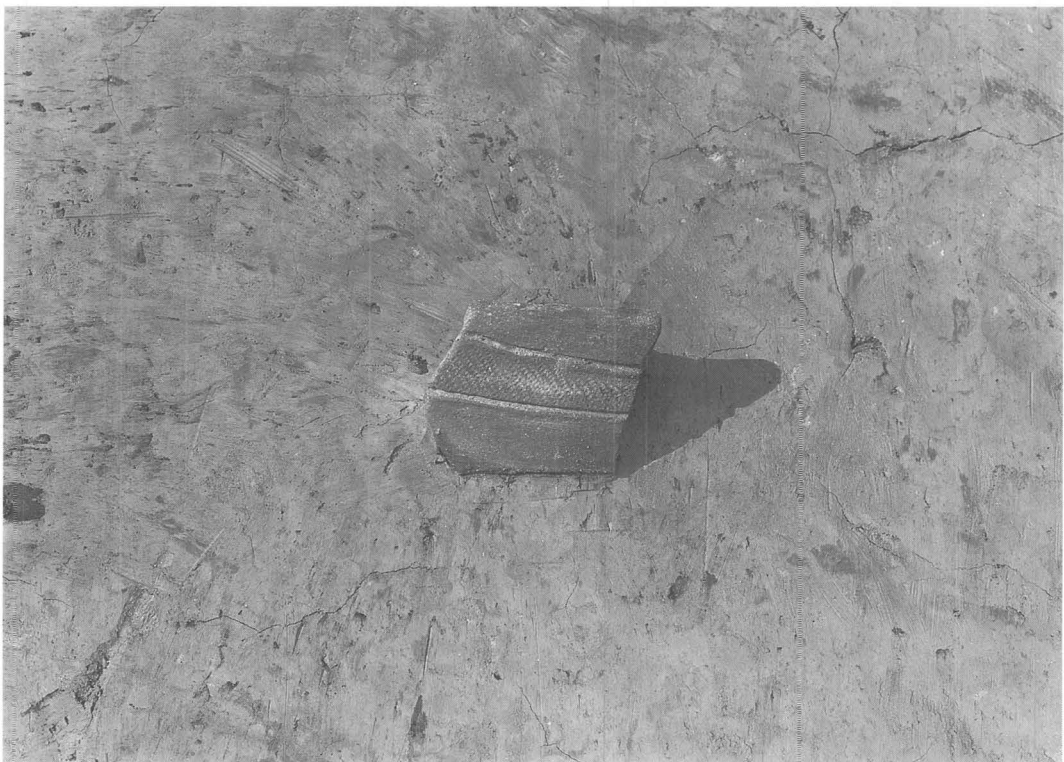
1. 第10層遺物出土状況



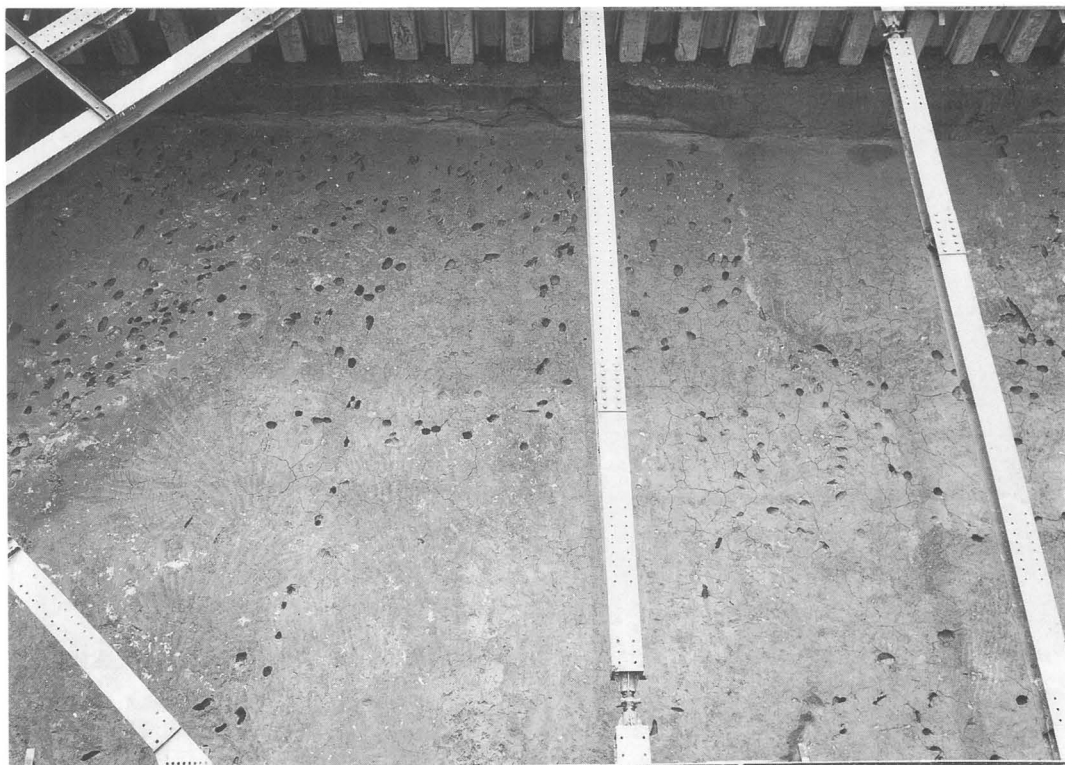
2. 第10層遺物出土状況



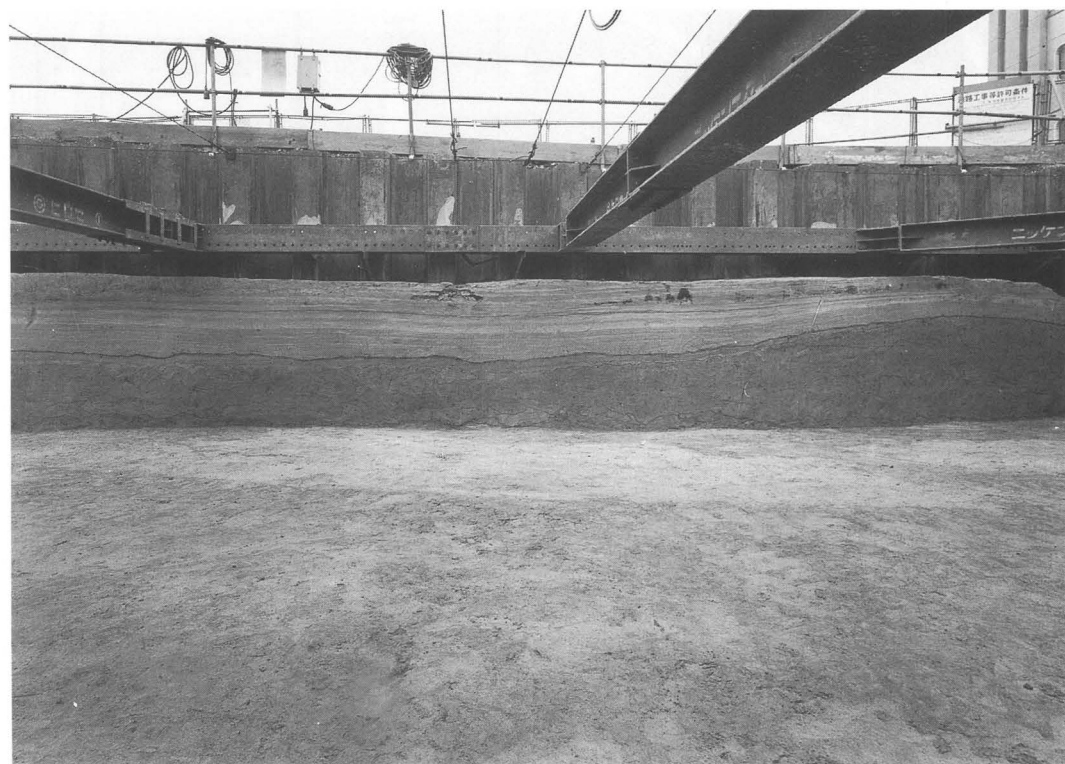
1. 第10層遺物出土状況



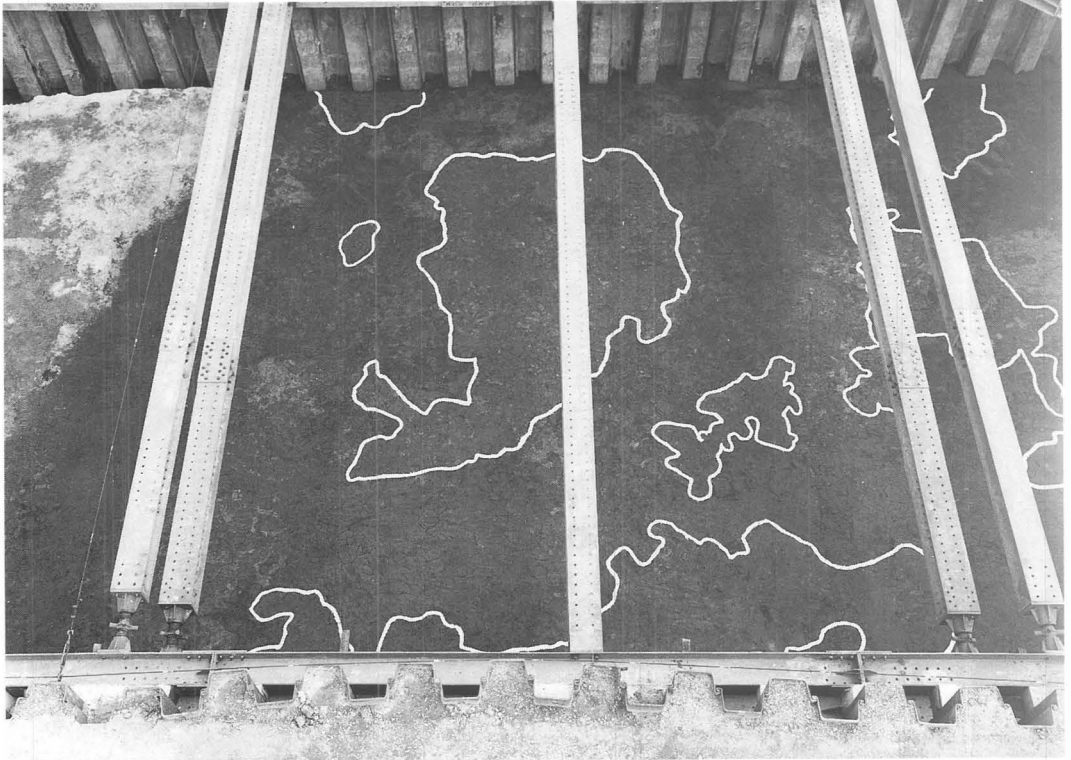
2. 第17層縄文土器出土状況



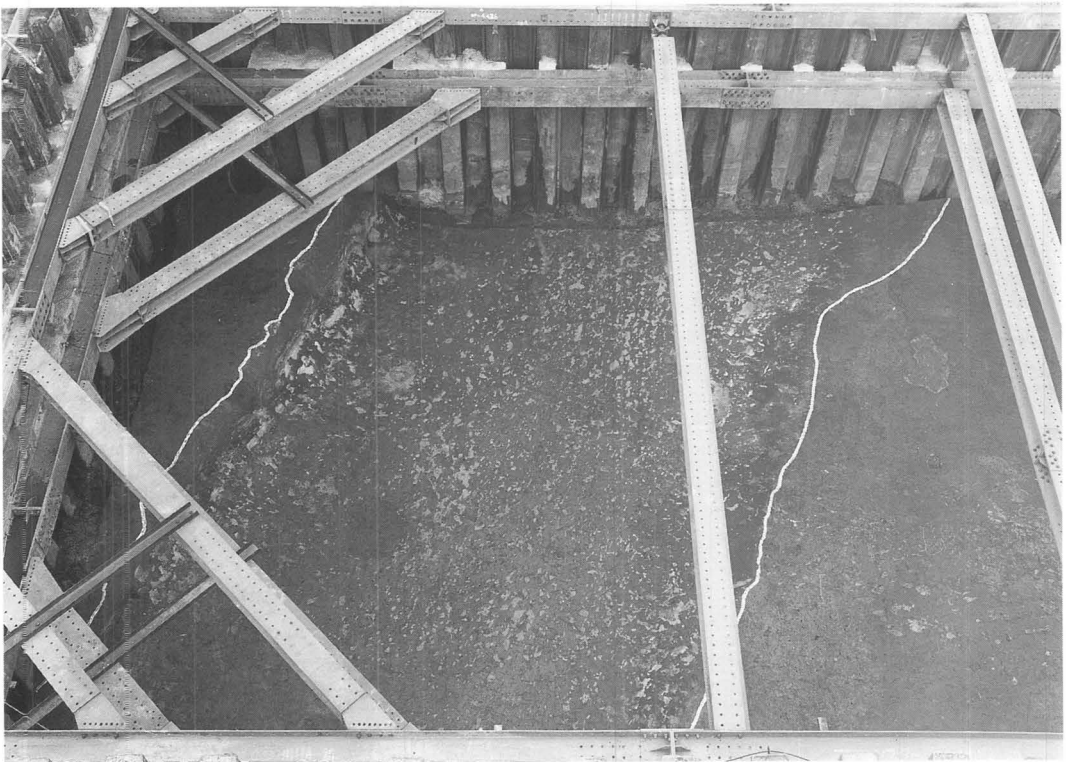
1. 足跡



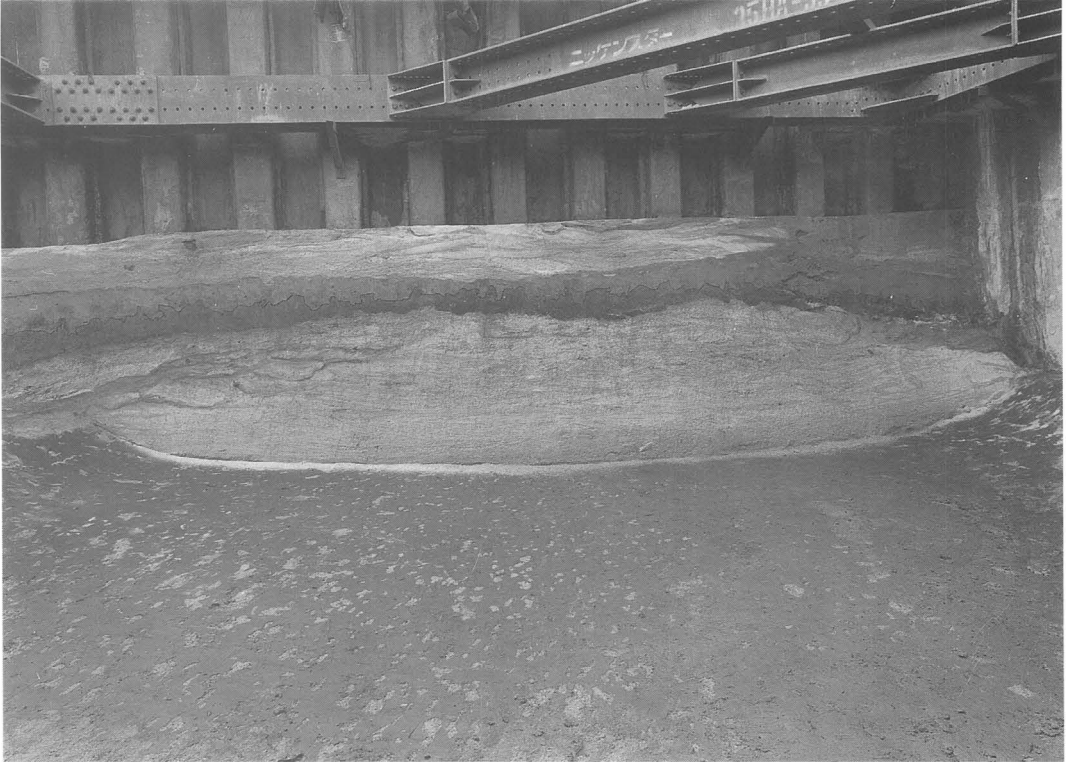
2. 西壁断面



1 第17・18層上面攪乱状況



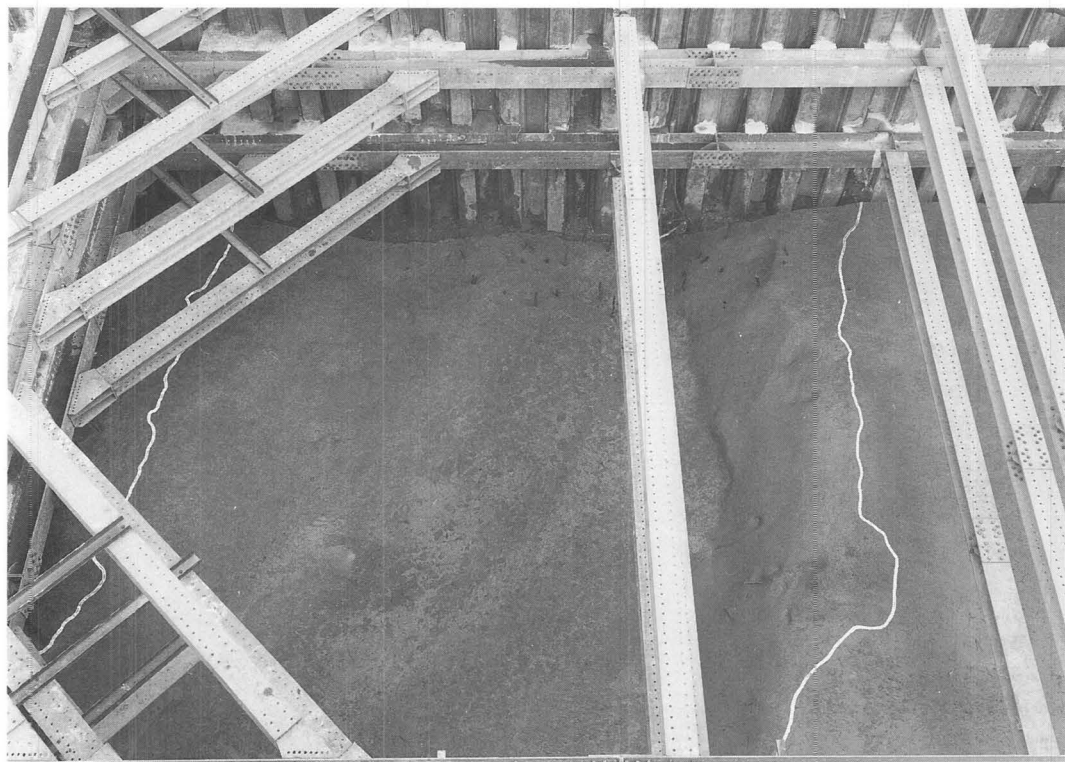
2. 自然流路



1. 自然流路断面



2. 西壁断面



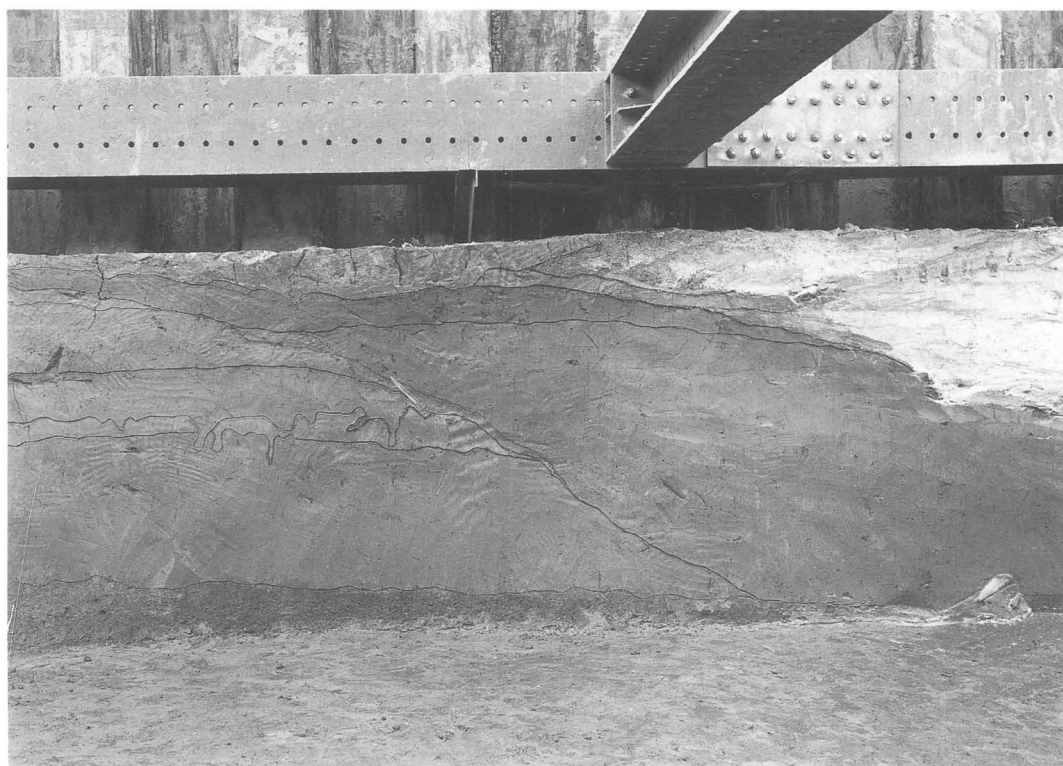
1. 落ち込み



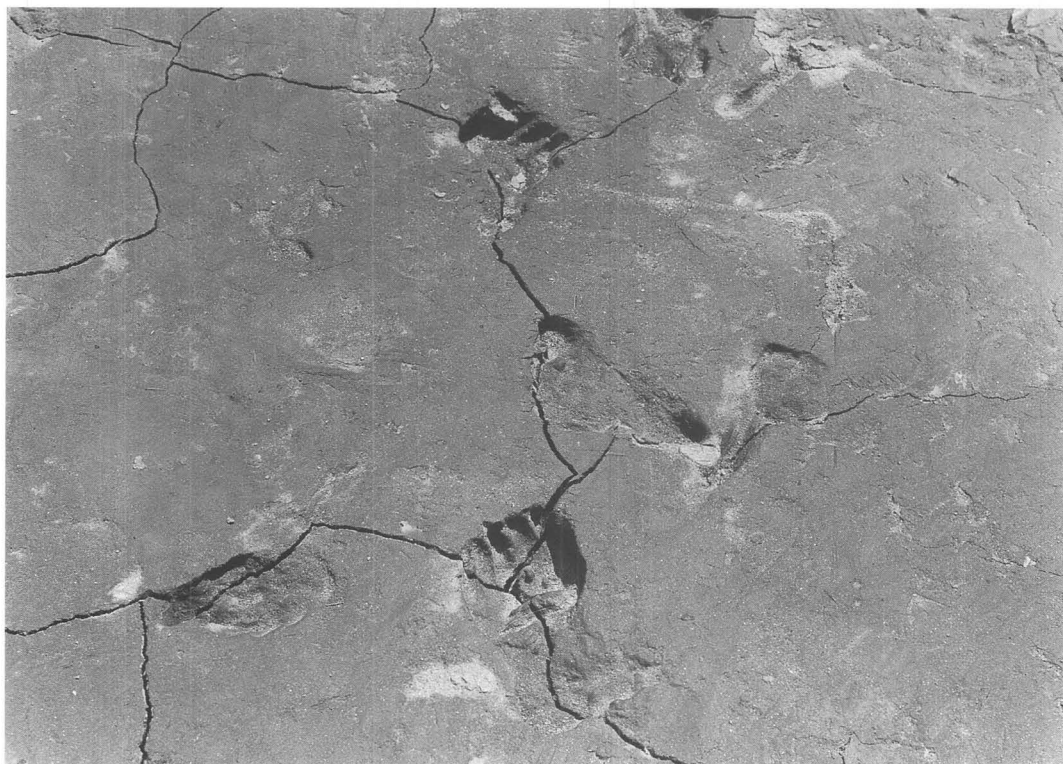
2. 落ち込み内杭列



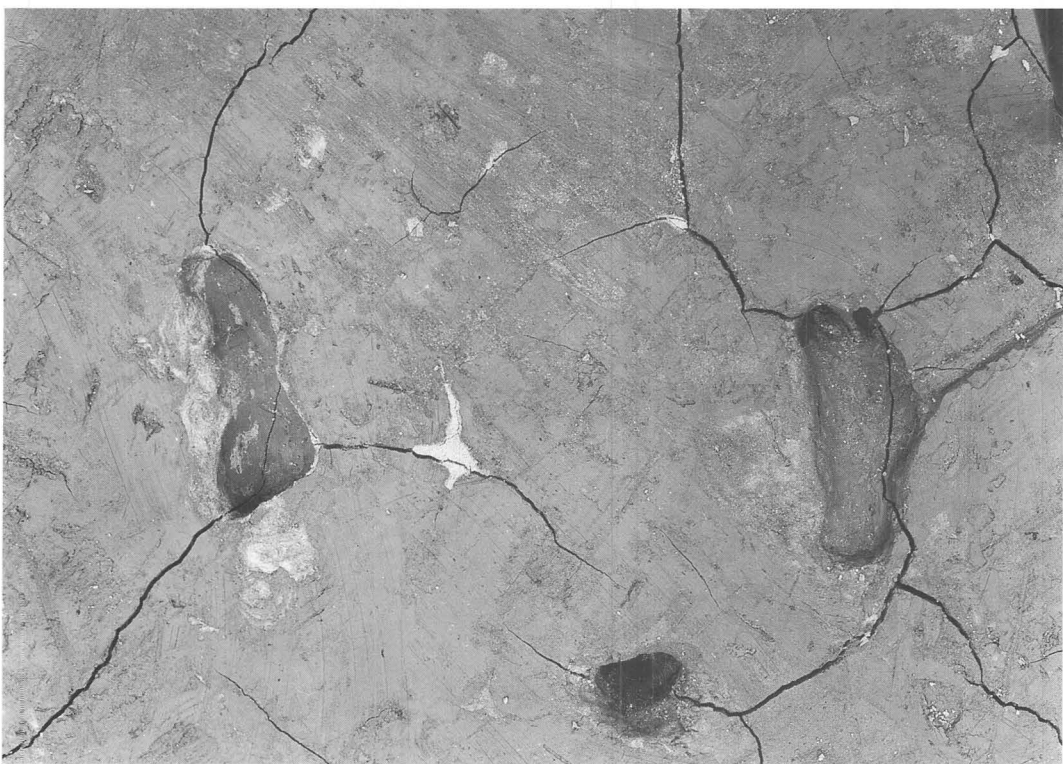
1. 落ち込み内杭列



2. 落ち込み西壁断面



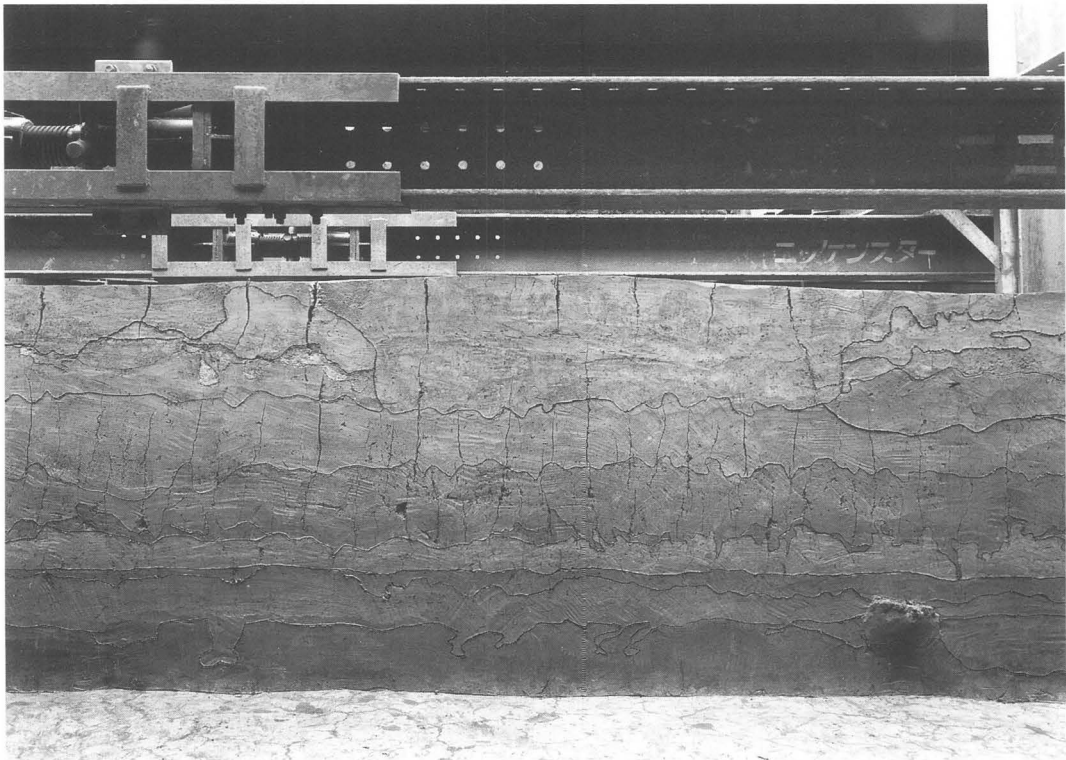
1. 足跡



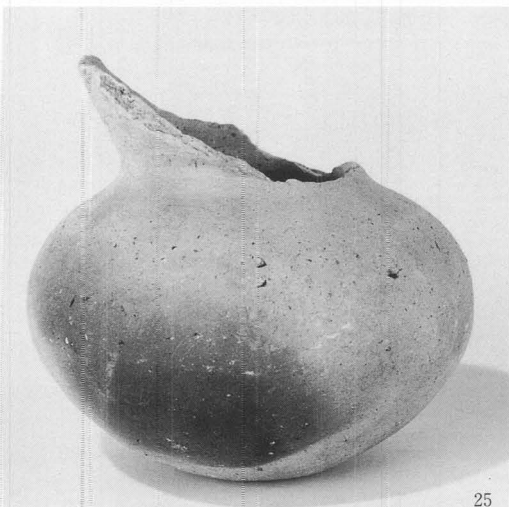
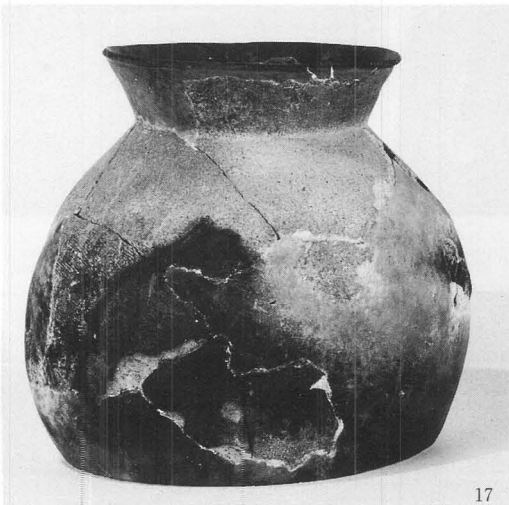
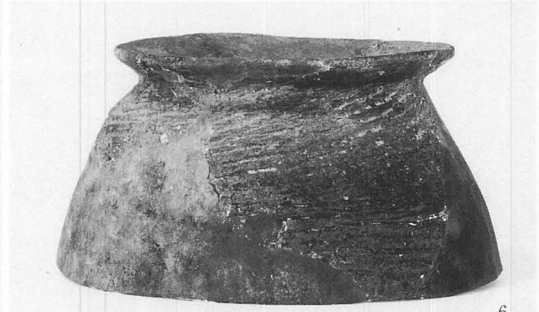
2. 足跡



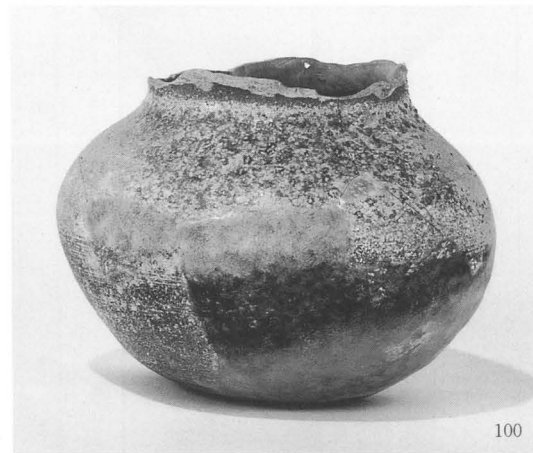
1. 河道全景



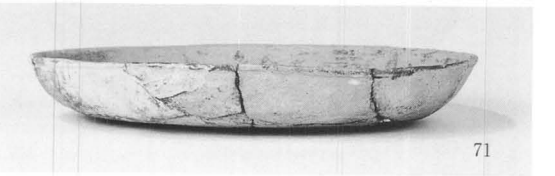
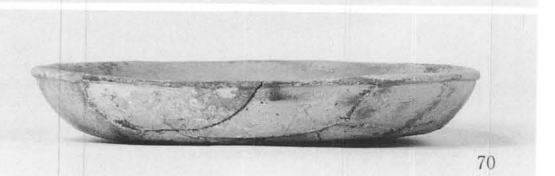
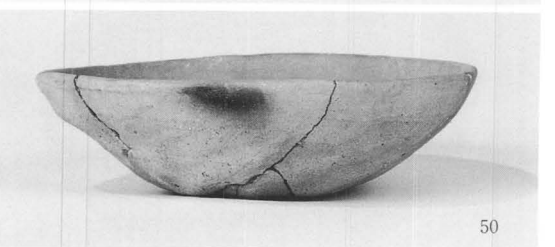
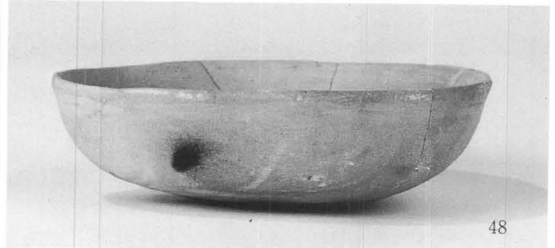
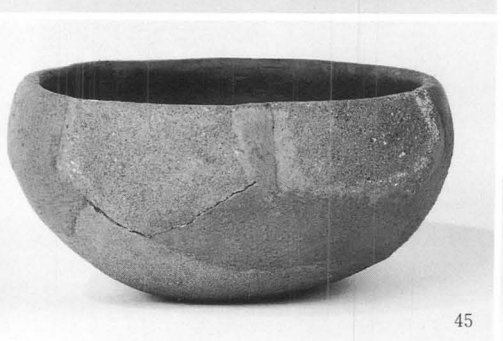
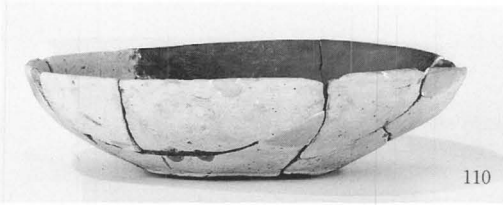
2. 北壁断面



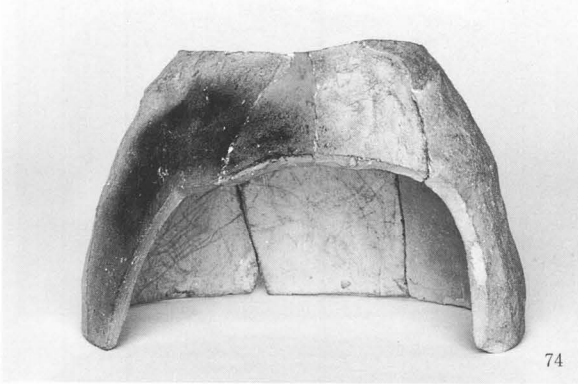
No 1 トレンチ出土土器 弥生土器・布留式土器



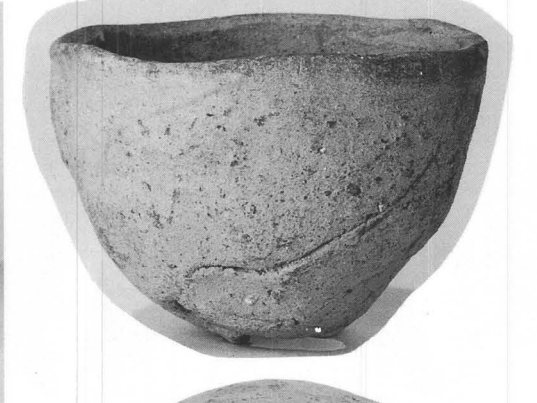
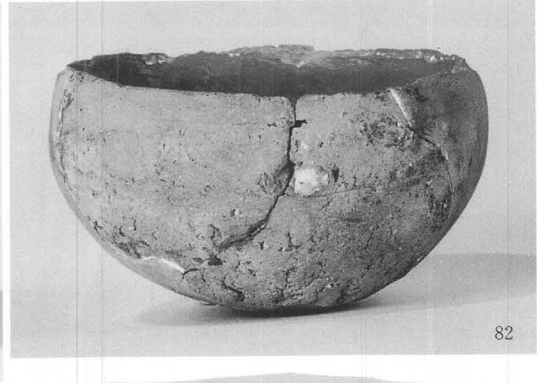
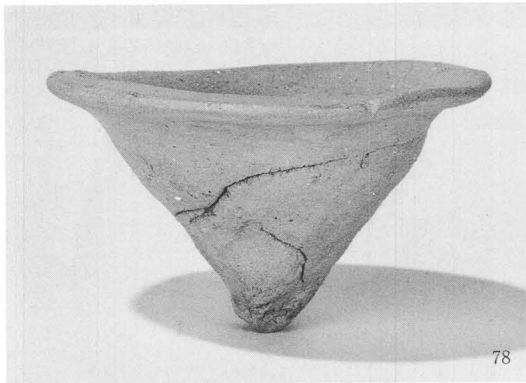
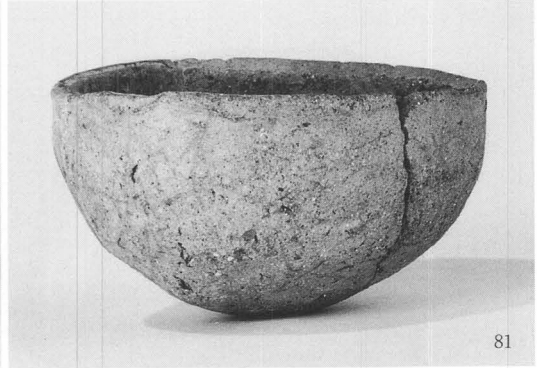
No 1 トレンチ出土土器 土師器・須恵器・製塩土器



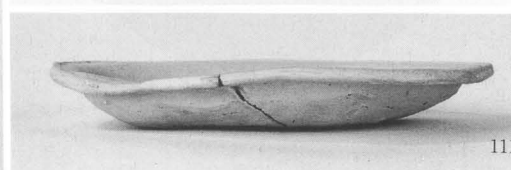
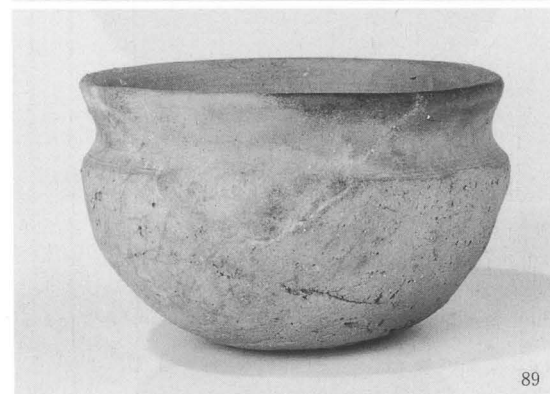
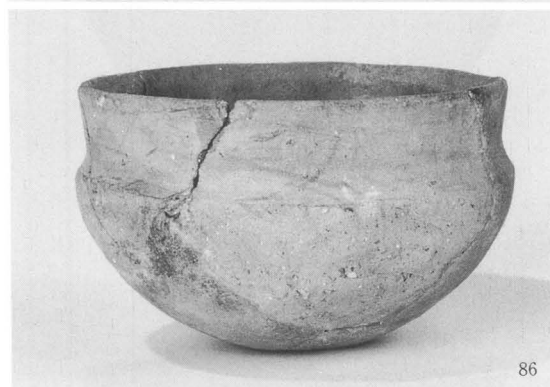
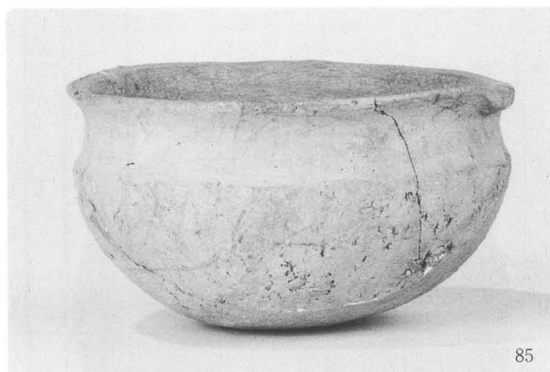
No 1 トレンチ出土土器 土師器

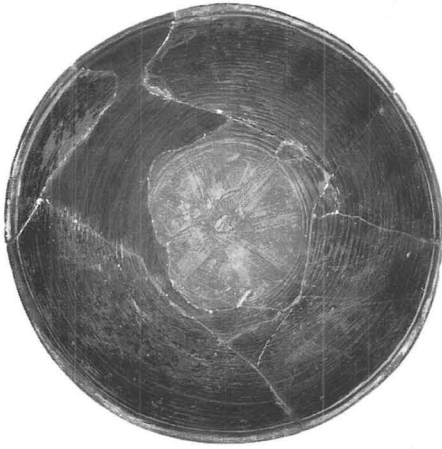


No 1 トレンチ出土土器 土師器



No 1 トレンチ出土土器 土師器





113'



114'



113



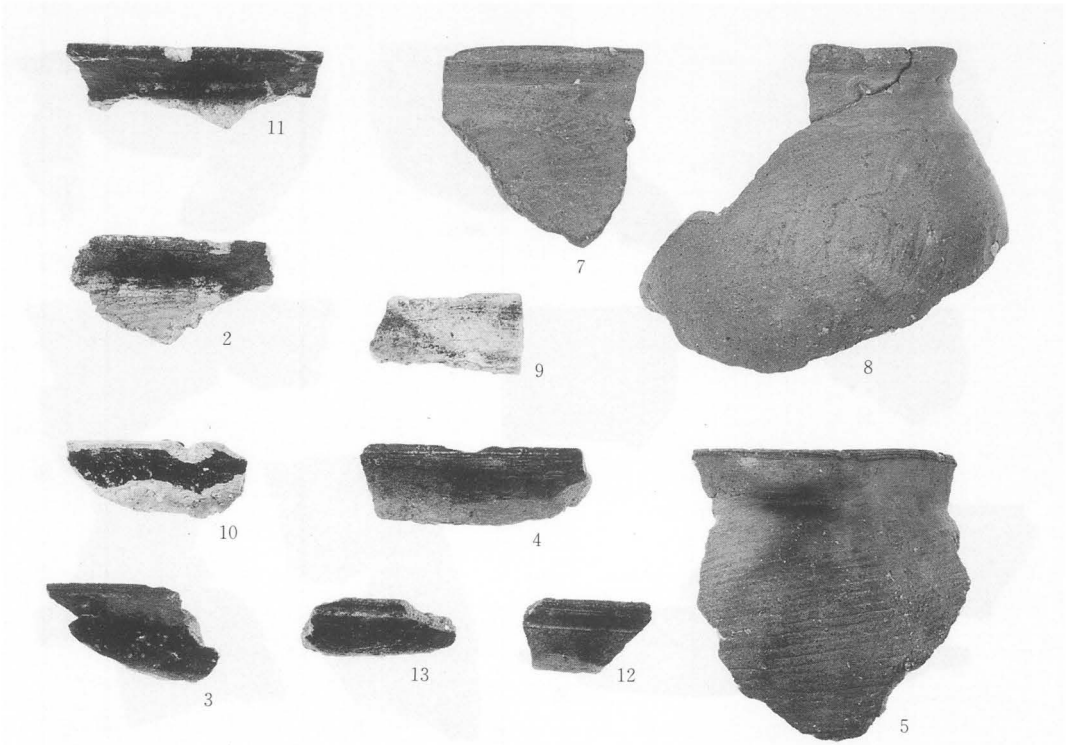
114



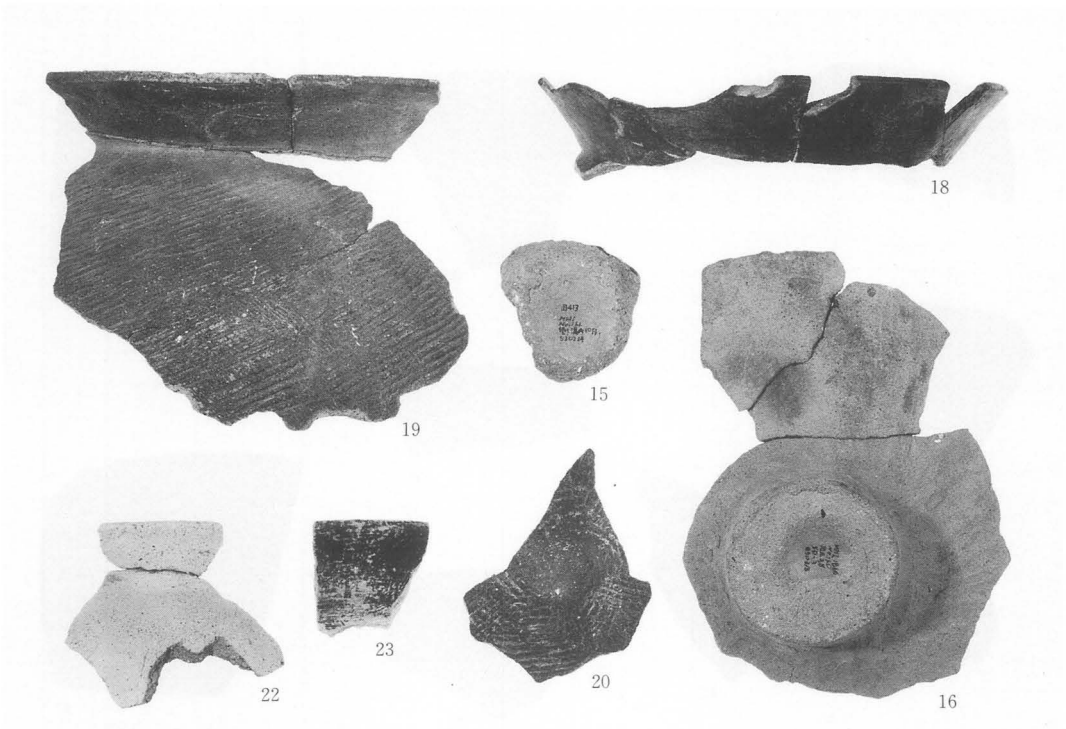
113''



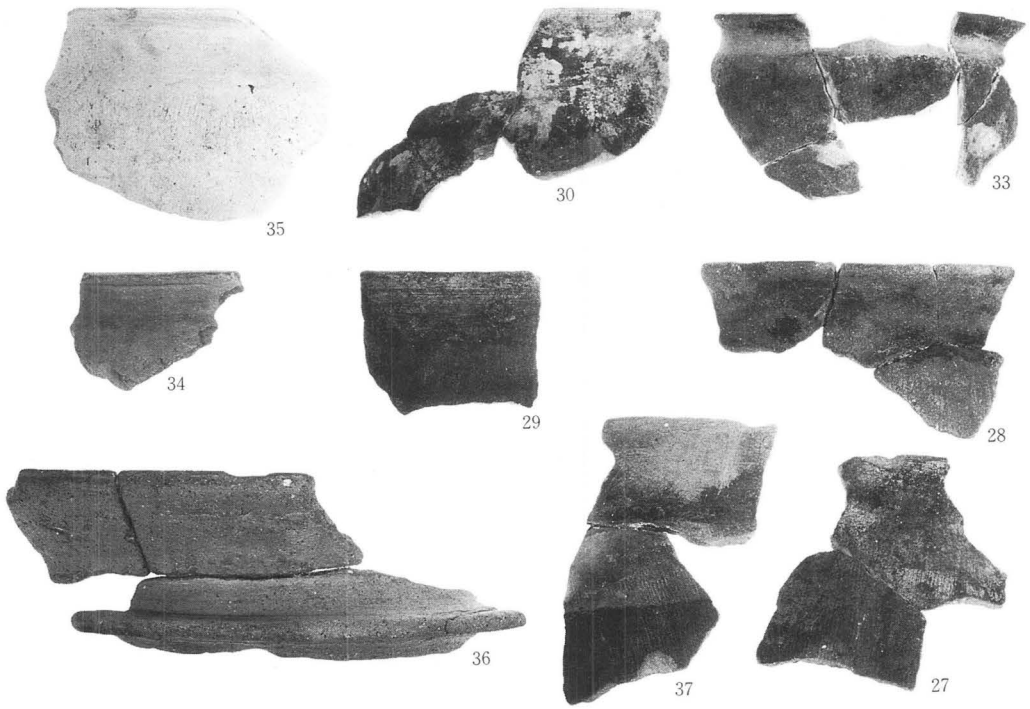
114''



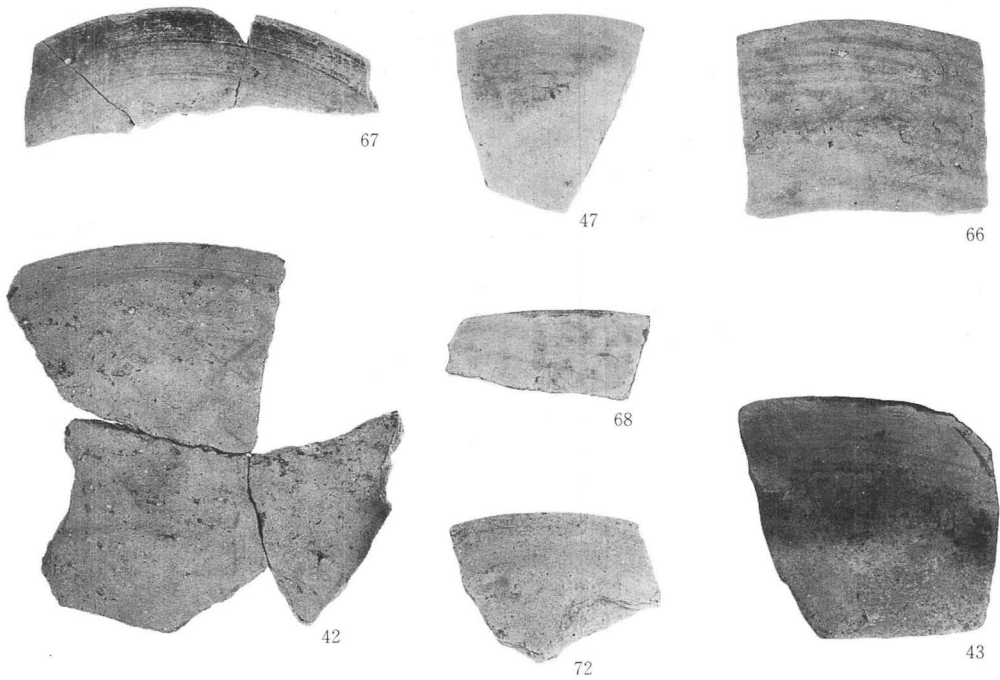
1. No 1 トレンチ出土土器 弥生土器



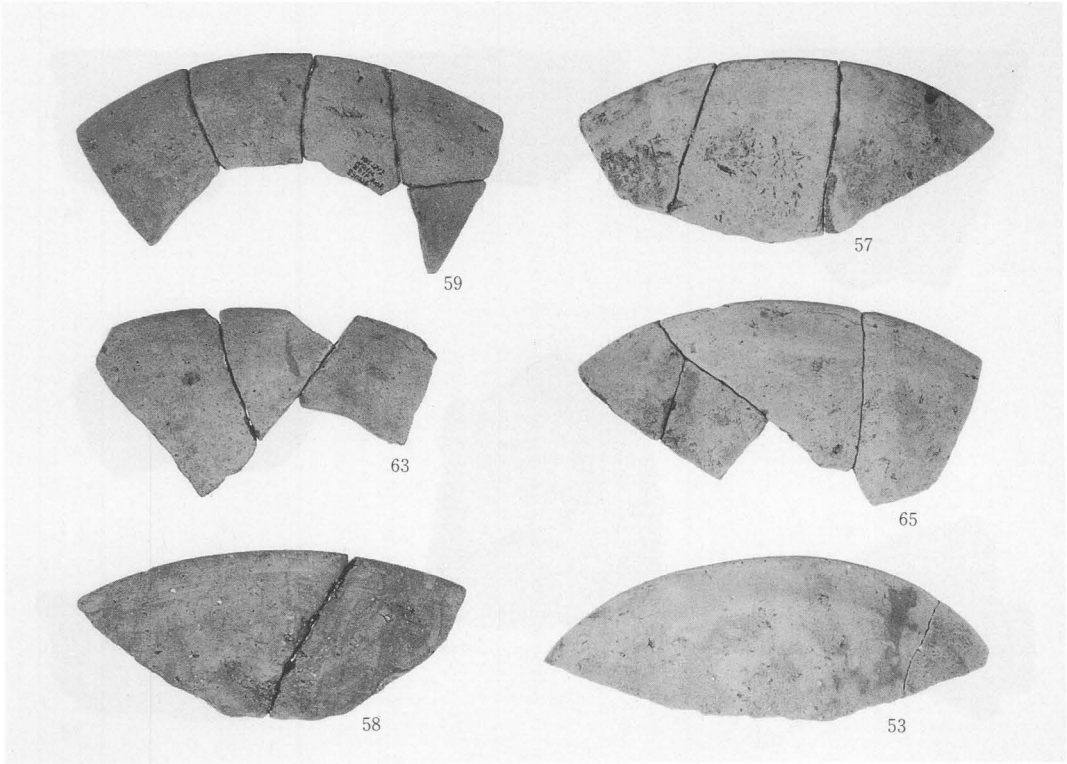
2. No 1 トレンチ出土土器 弥生土器・庄内式土器・布留式土器



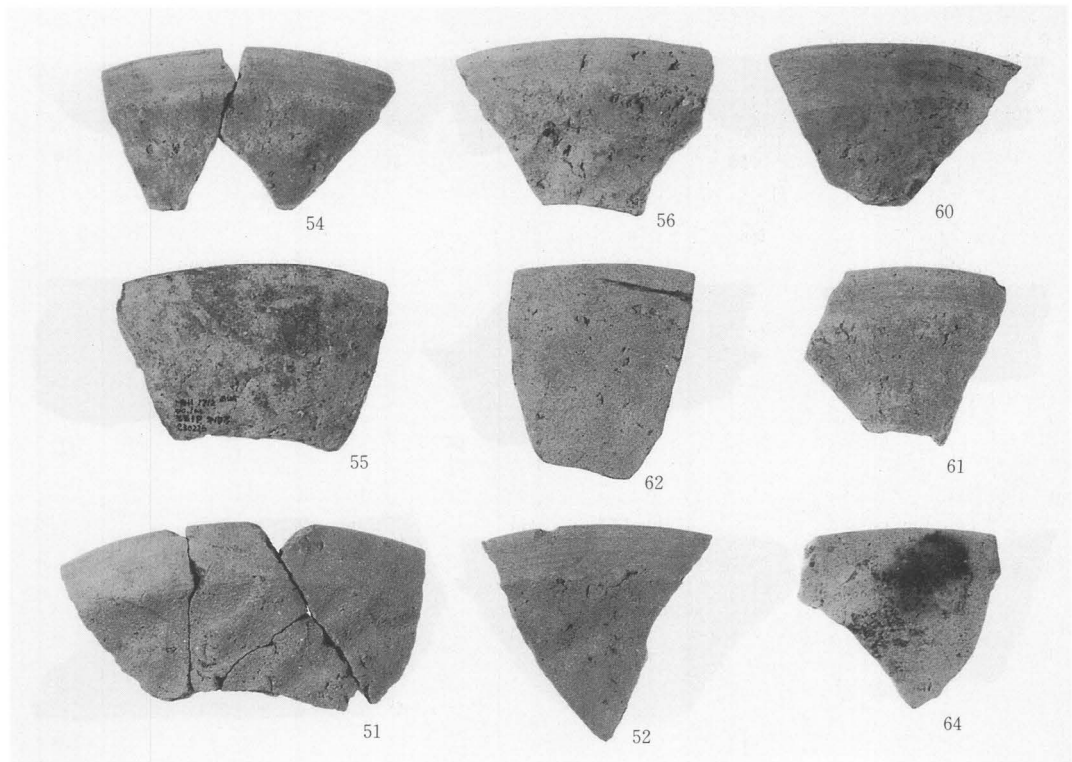
1. No 1 トレンチ出土土器 土師器



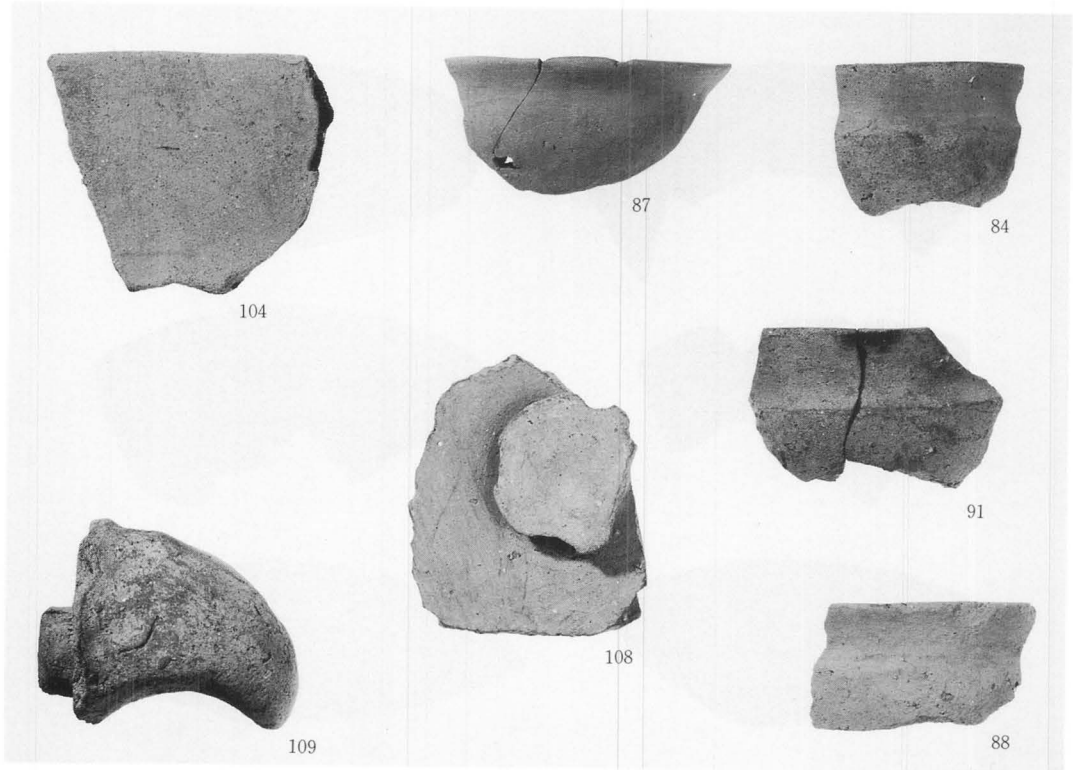
2. No 1 トレンチ出土土器 土師器



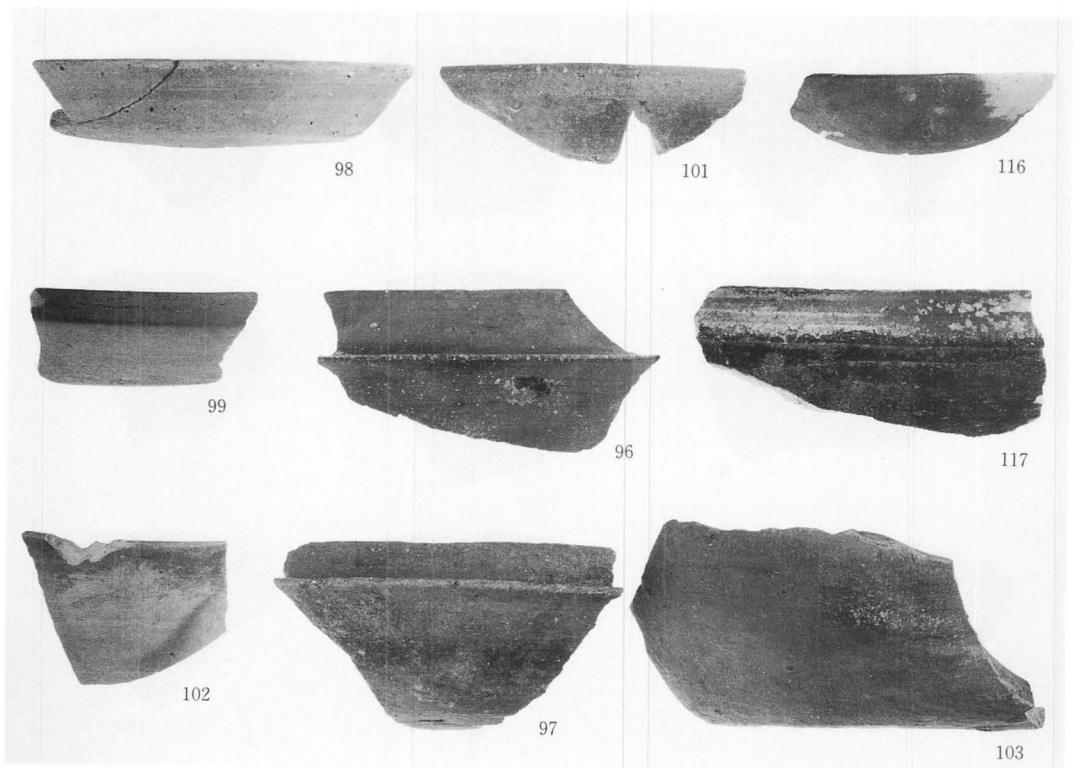
1. No 1 トレンチ出土土器 土師器



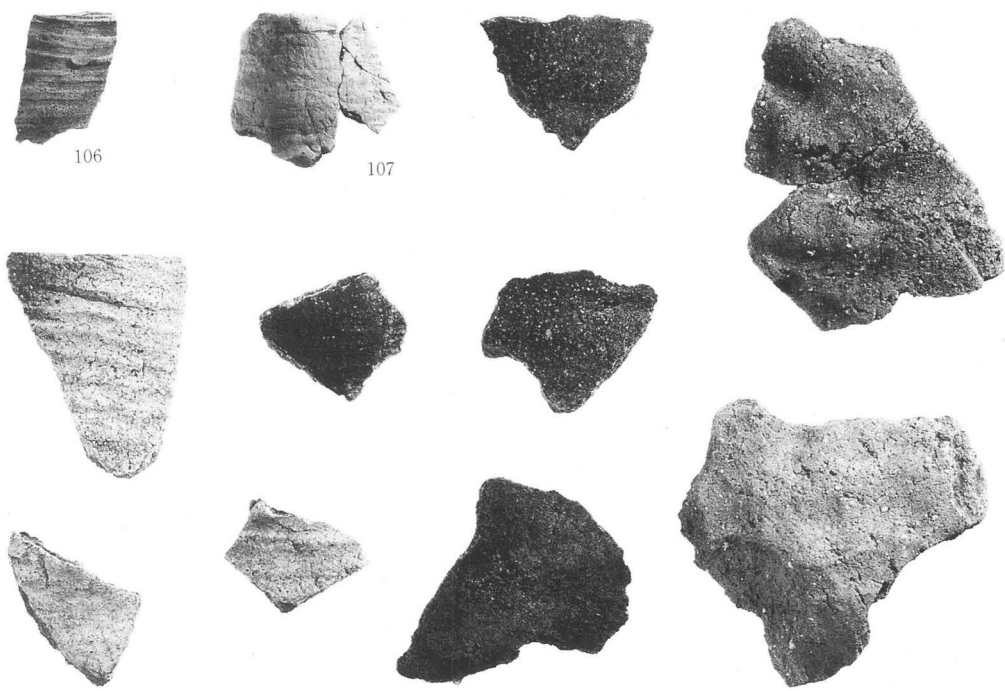
2. No 1 トレンチ出土土器 土師器



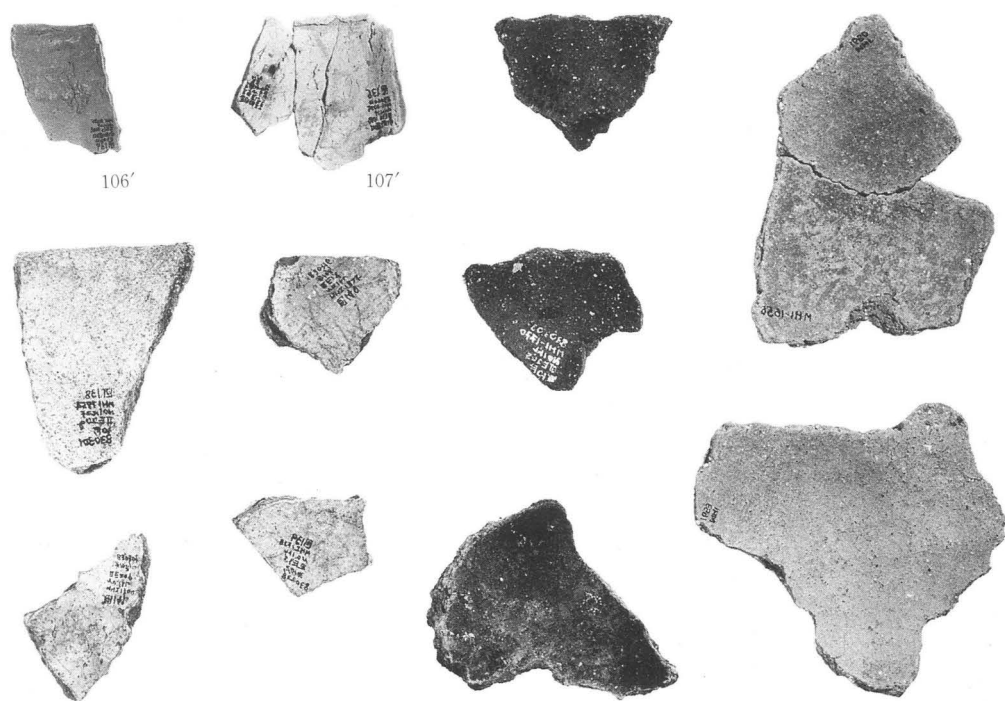
1. No 1 トレンチ出土土器 土師器



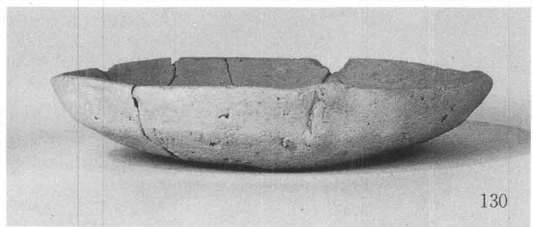
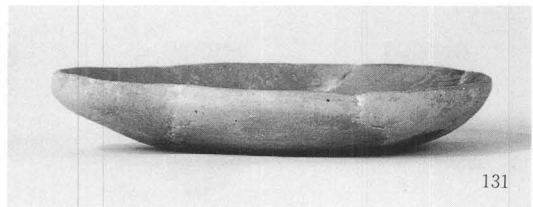
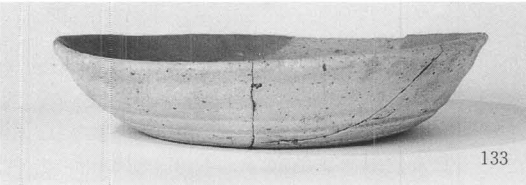
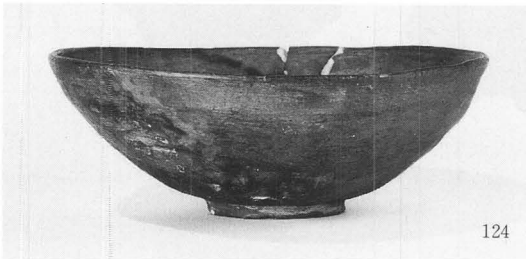
2. No 1 トレンチ出土土器 須恵器・瓦器

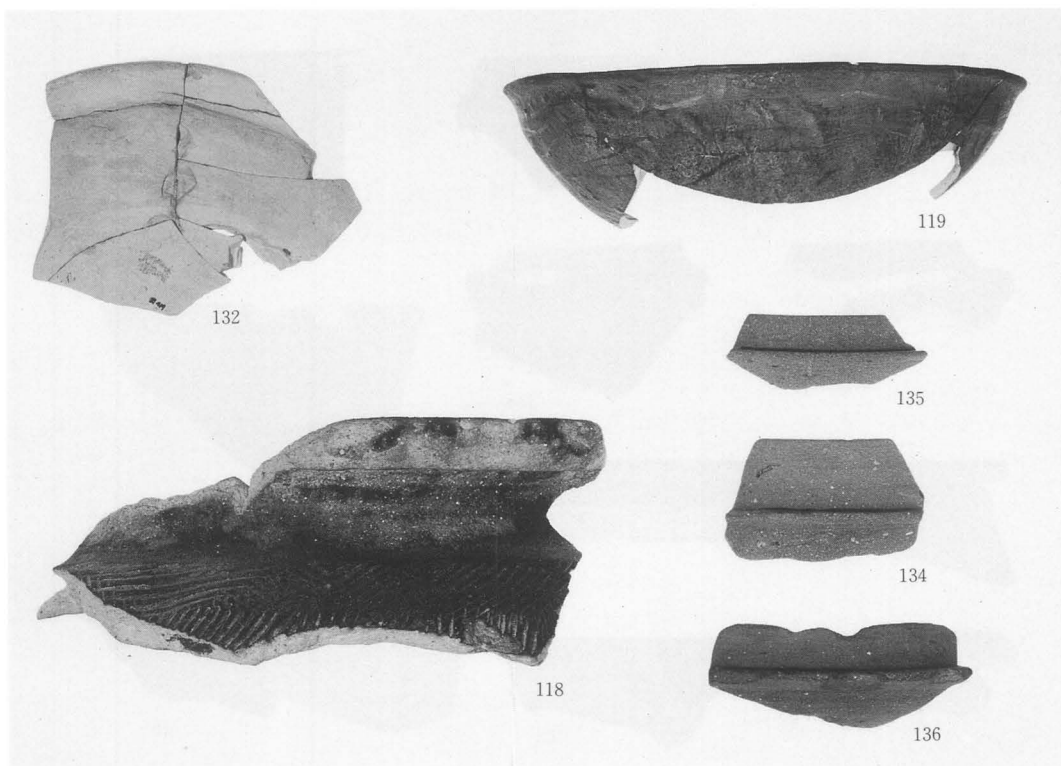


1. No 1 トレンチ出土土器 製塩土器(表)

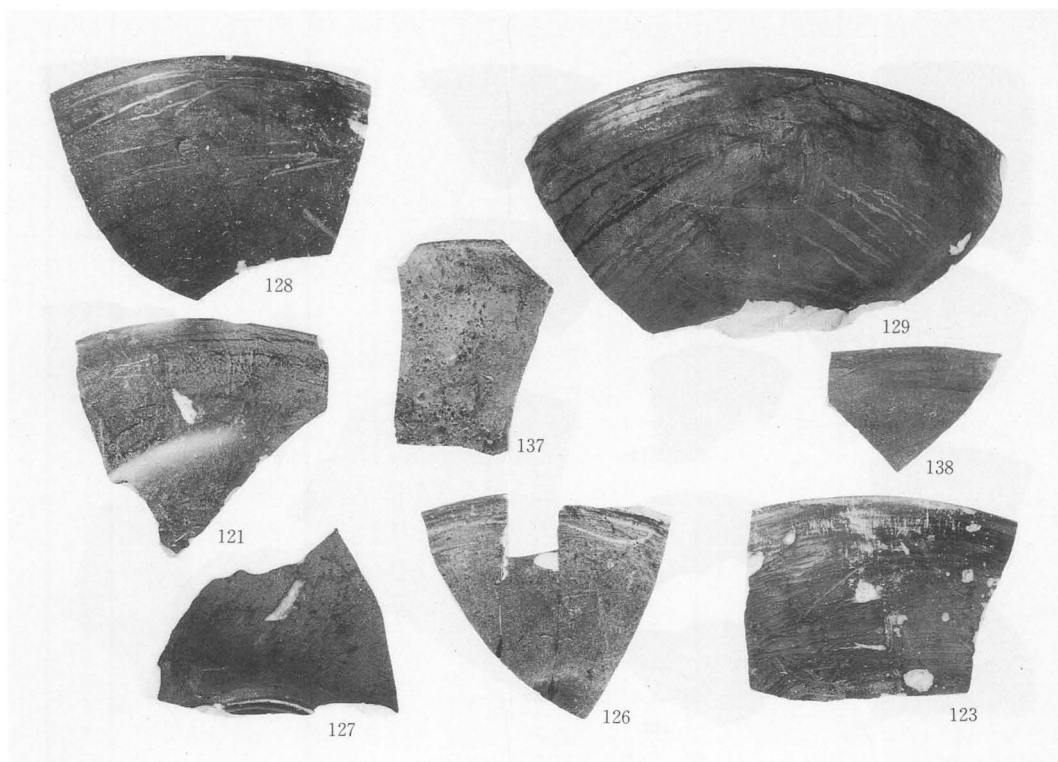


2. No 1 トレンチ出土土器 製塩土器(裏)

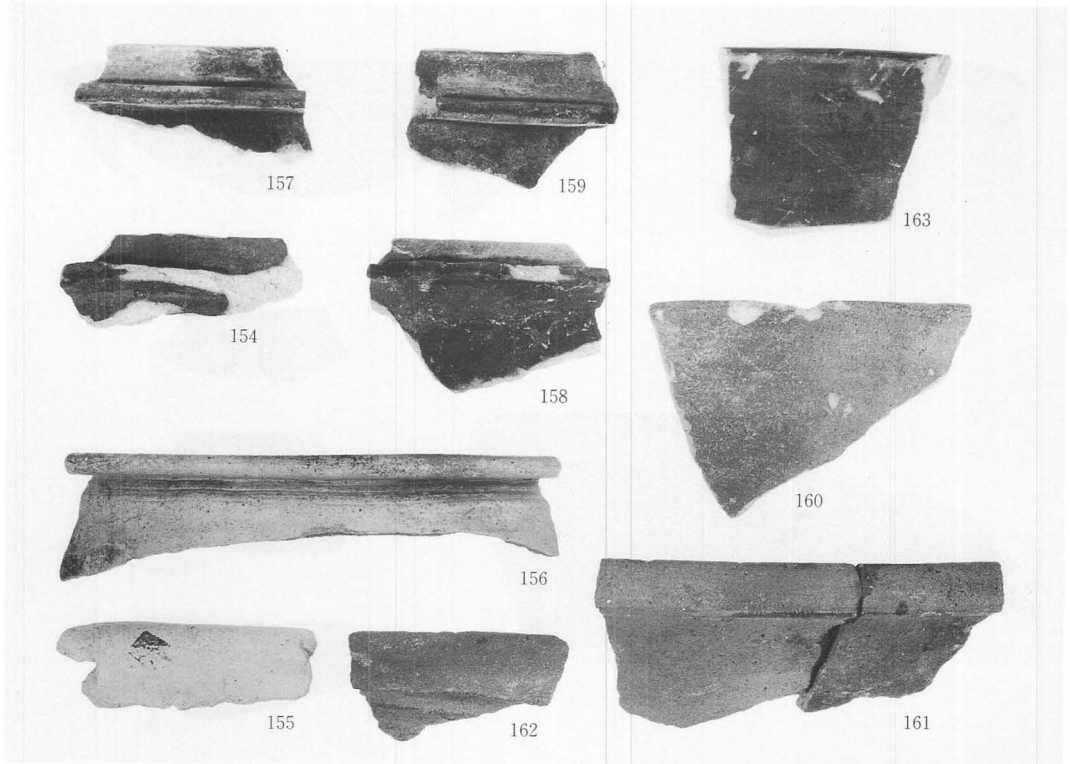




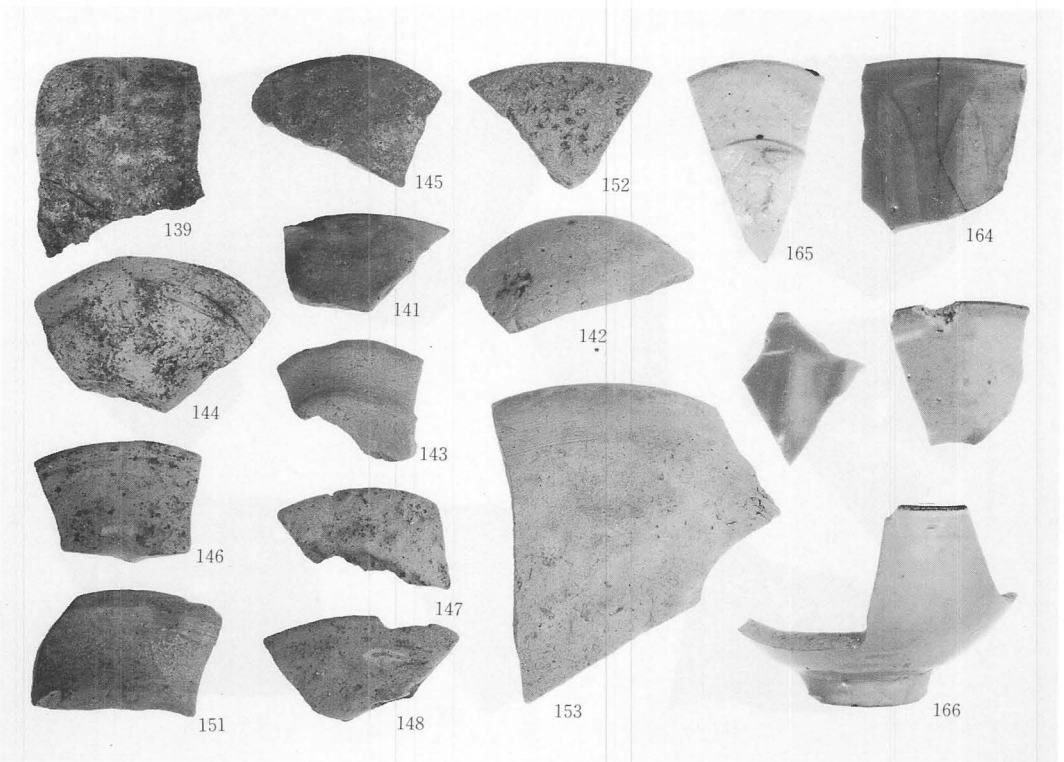
1. No 2 トレンチ出土土器 須恵器・土師器・瓦器



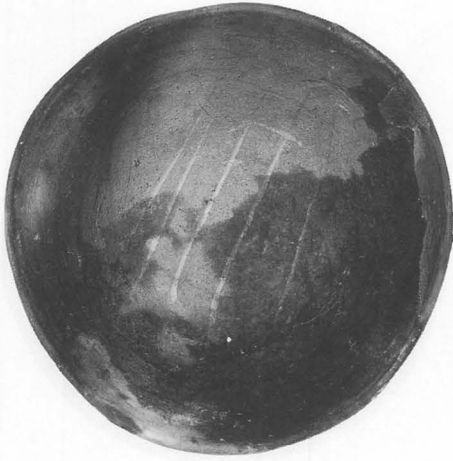
2. No 2 トレンチ出土土器 瓦器



1. No 3 トレンチ出土土器 須恵器・土師器・瓦器



2. No 3 トレンチ出土土器 土師器・輸入磁器



189'



190'



189



190



189''



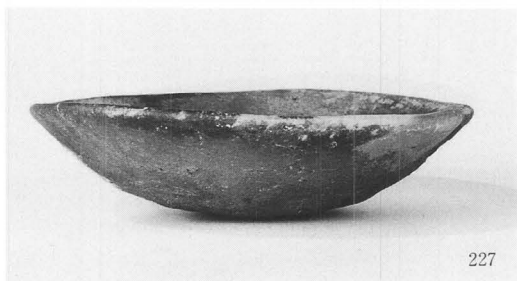
190''



227'



231'



227



231



227''



231''



187



186



182



177



176



180



191



174



181



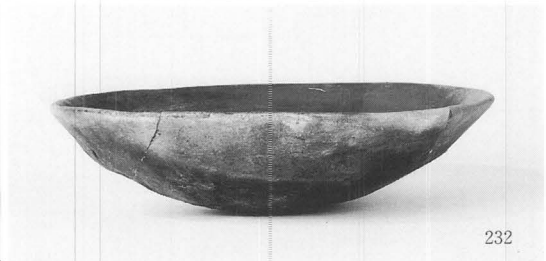
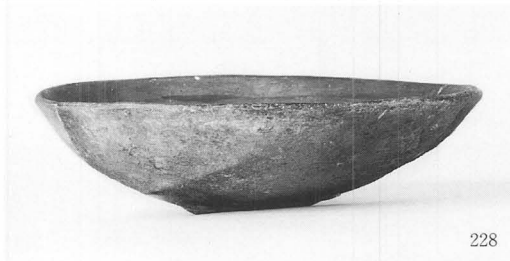
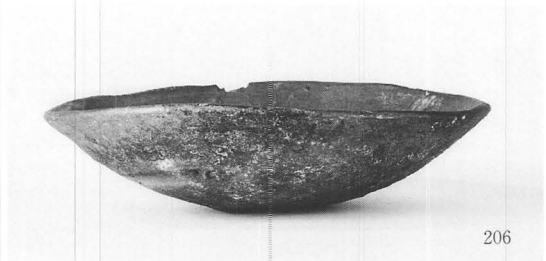
184



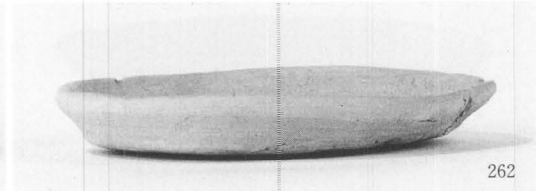
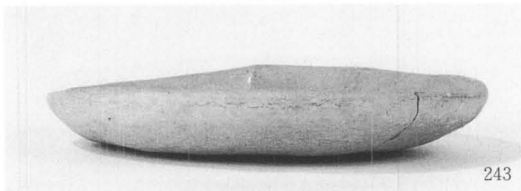
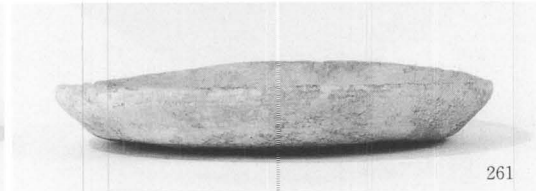
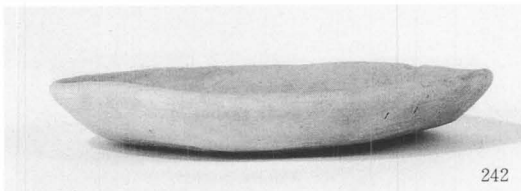
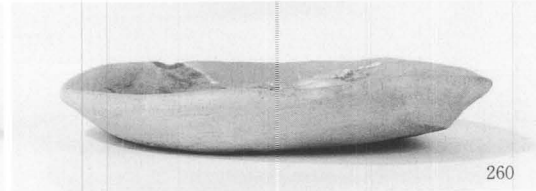
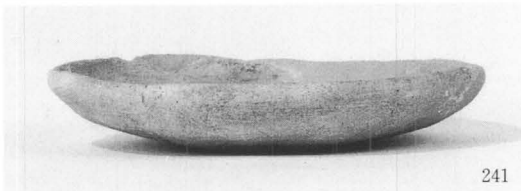
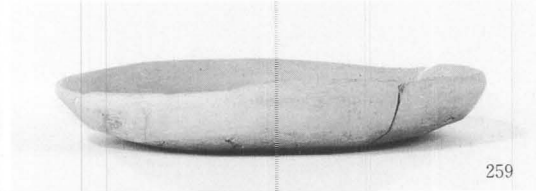
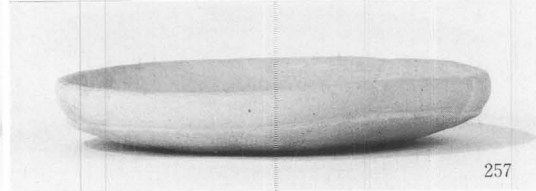
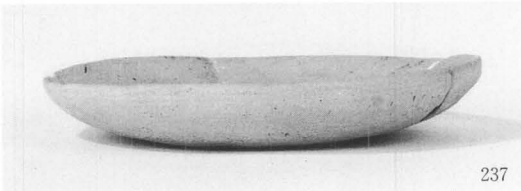
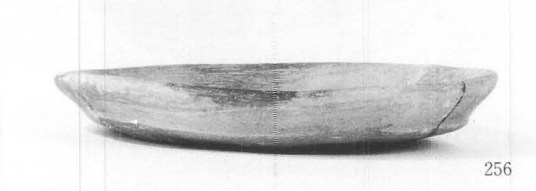
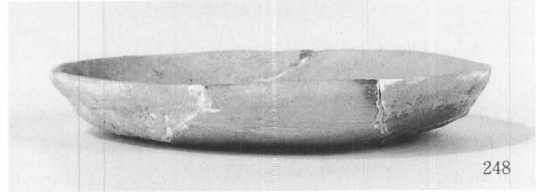
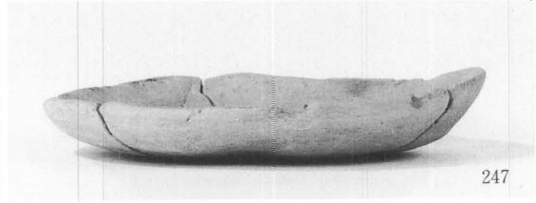
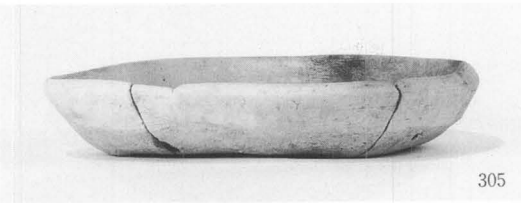
185

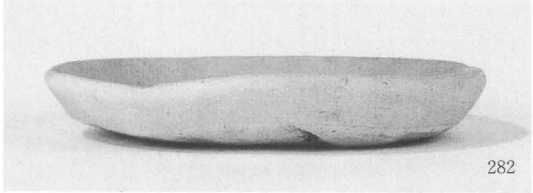
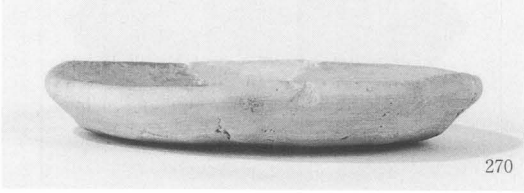
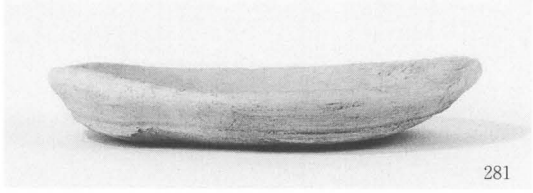
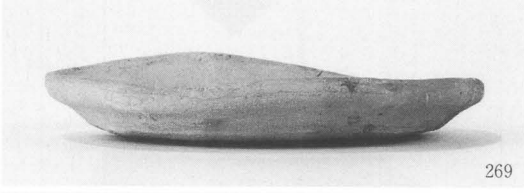
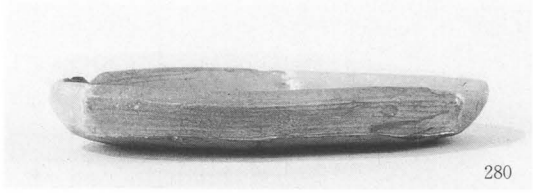
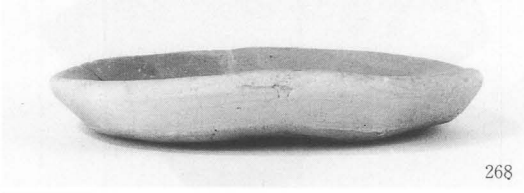
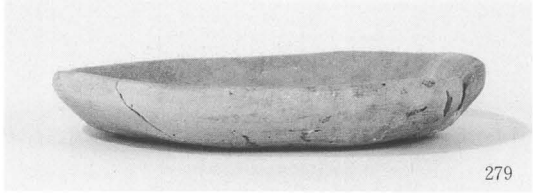
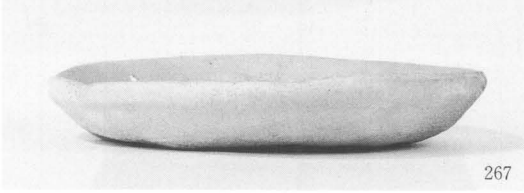
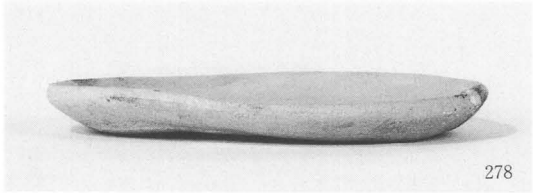
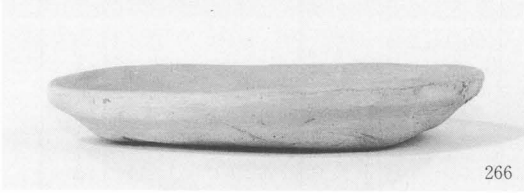
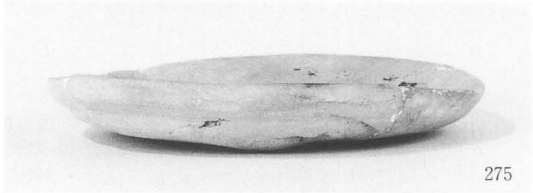
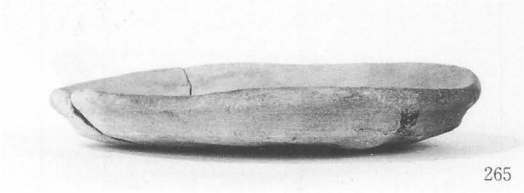
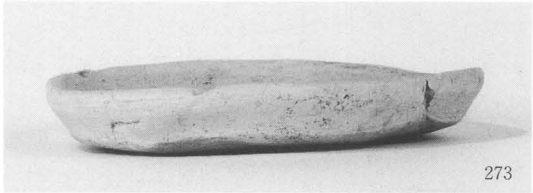
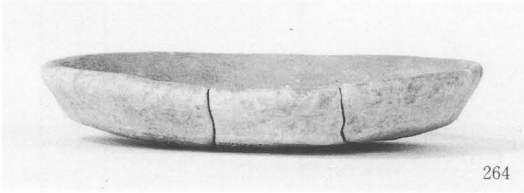
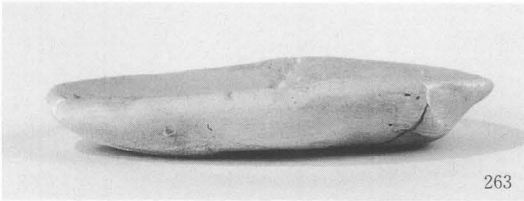


192

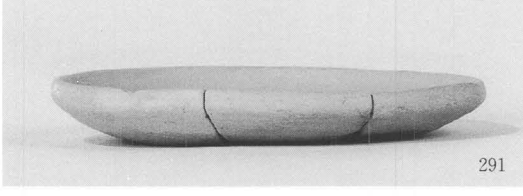
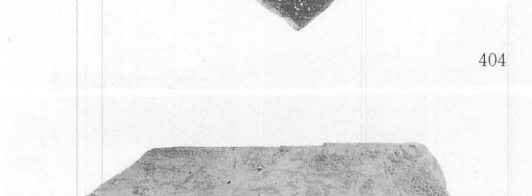
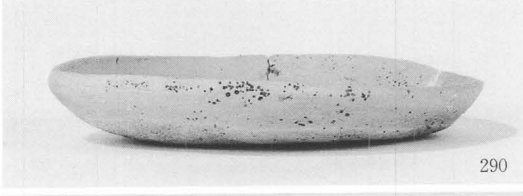
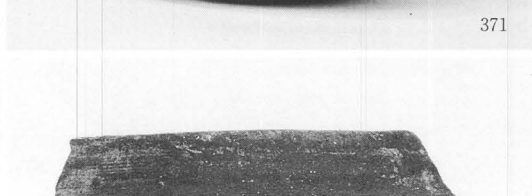
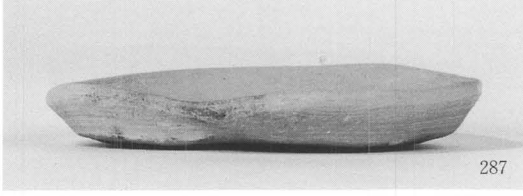
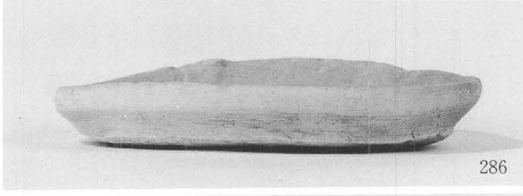
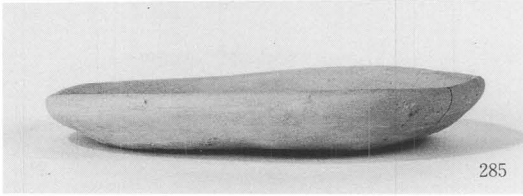
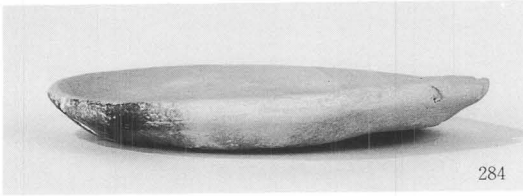
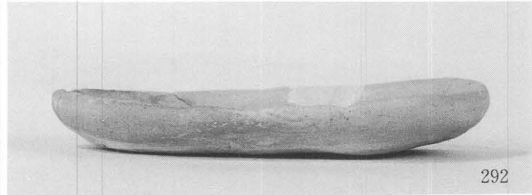
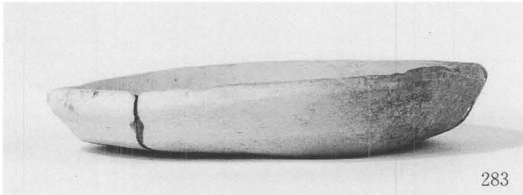




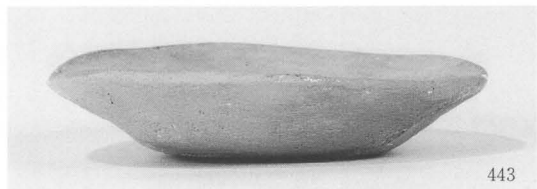
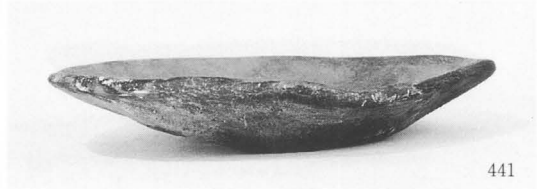
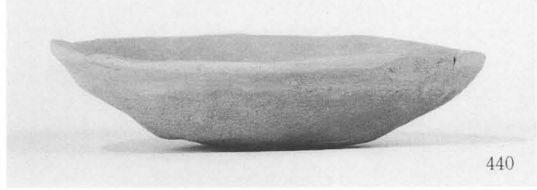




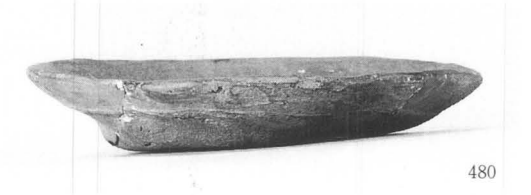
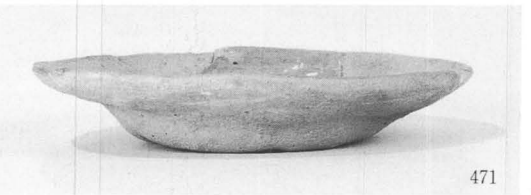
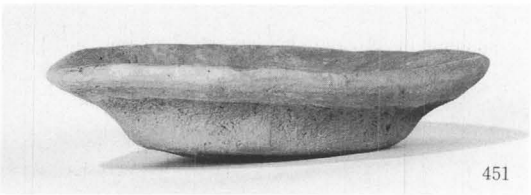
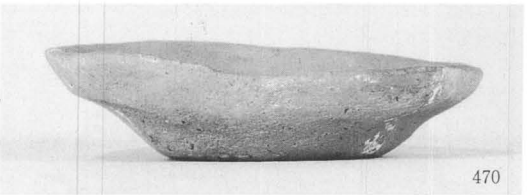
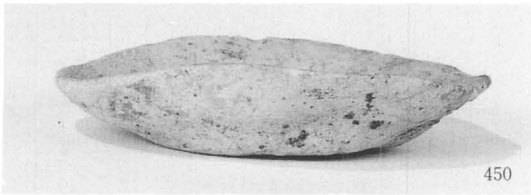
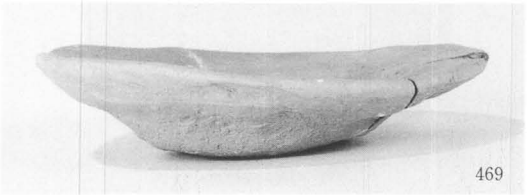
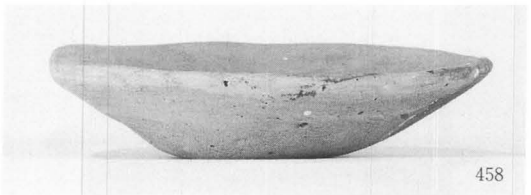
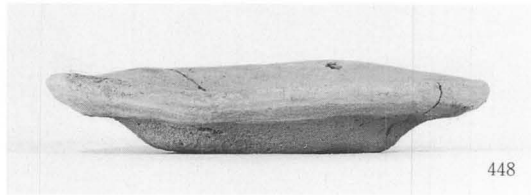
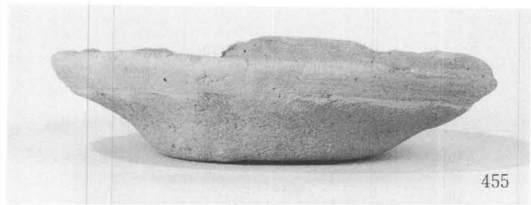
No 4 トレンチSK17出土土器 土師器



No 4 トレンチSK16・17出土土器 土師器・瓦器



No 4 トレンチSK16出土土器 瓦器・須恵器・土師器





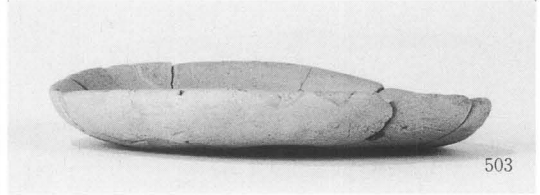
502'



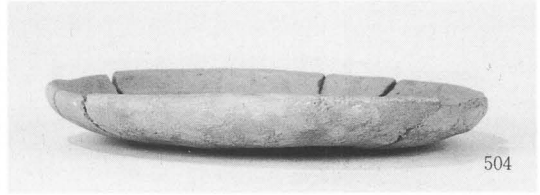
502



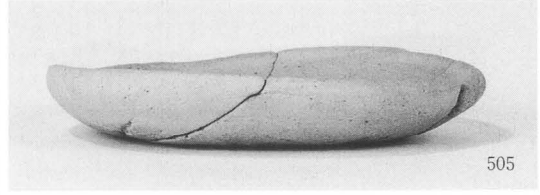
502''



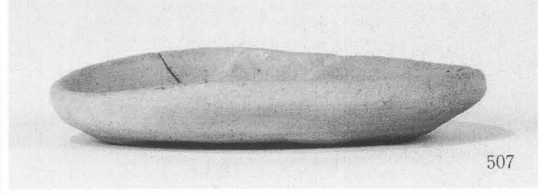
503



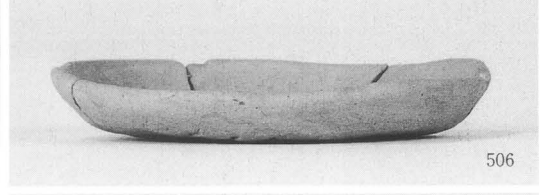
504



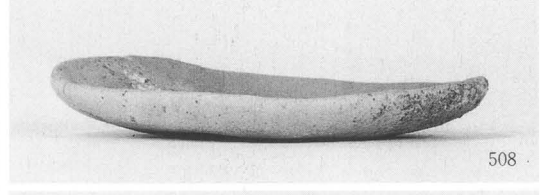
505



507



506



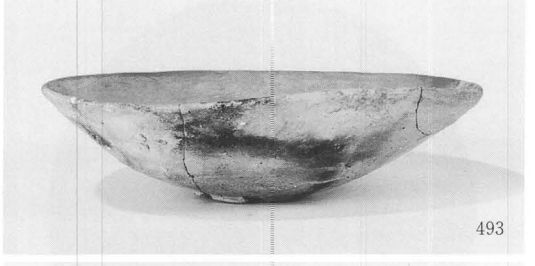
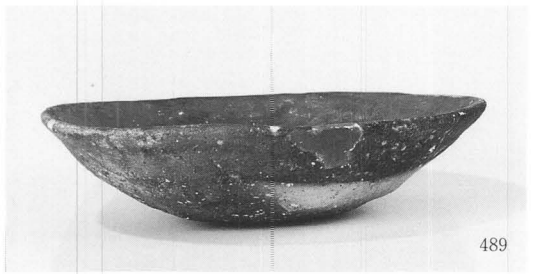
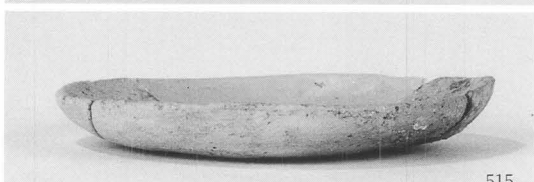
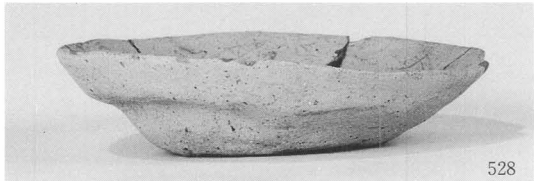
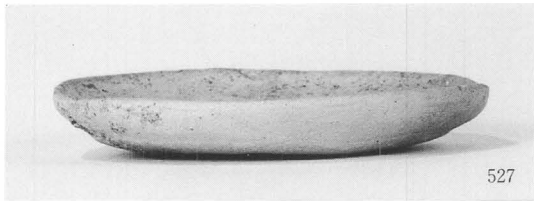
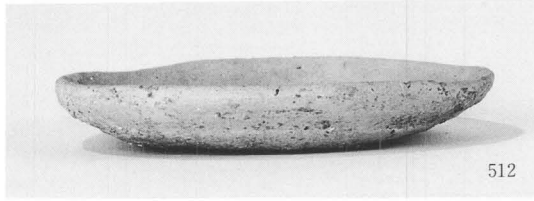
508



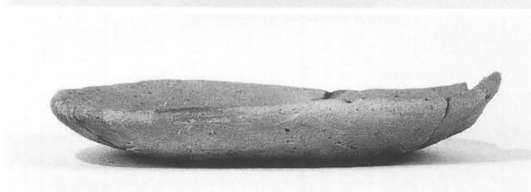
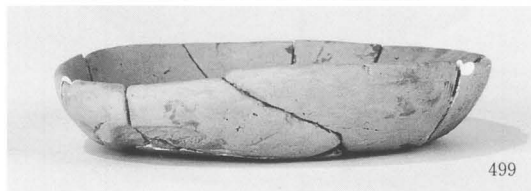
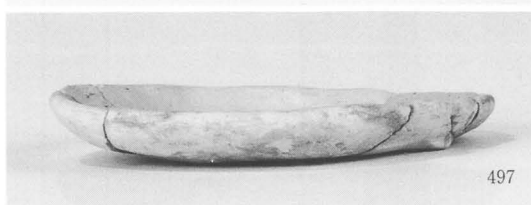
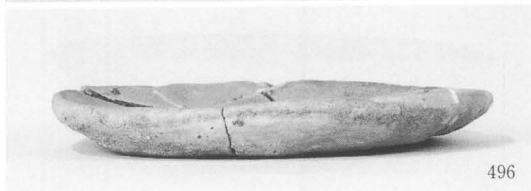
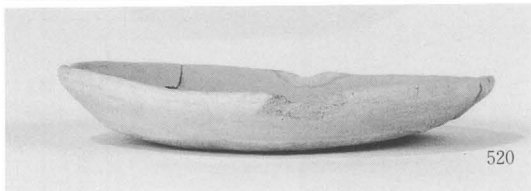
509



510



№4 トレンチSK 2・13・18、SD 2、自然流路出土土器 土師器・瓦器



No 4 トレンチ自然流路、SP16・133、土器溜り出土土器 土師器・瓦器



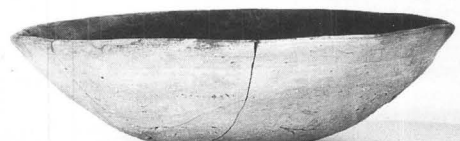
535



541



536



542



537



543



539



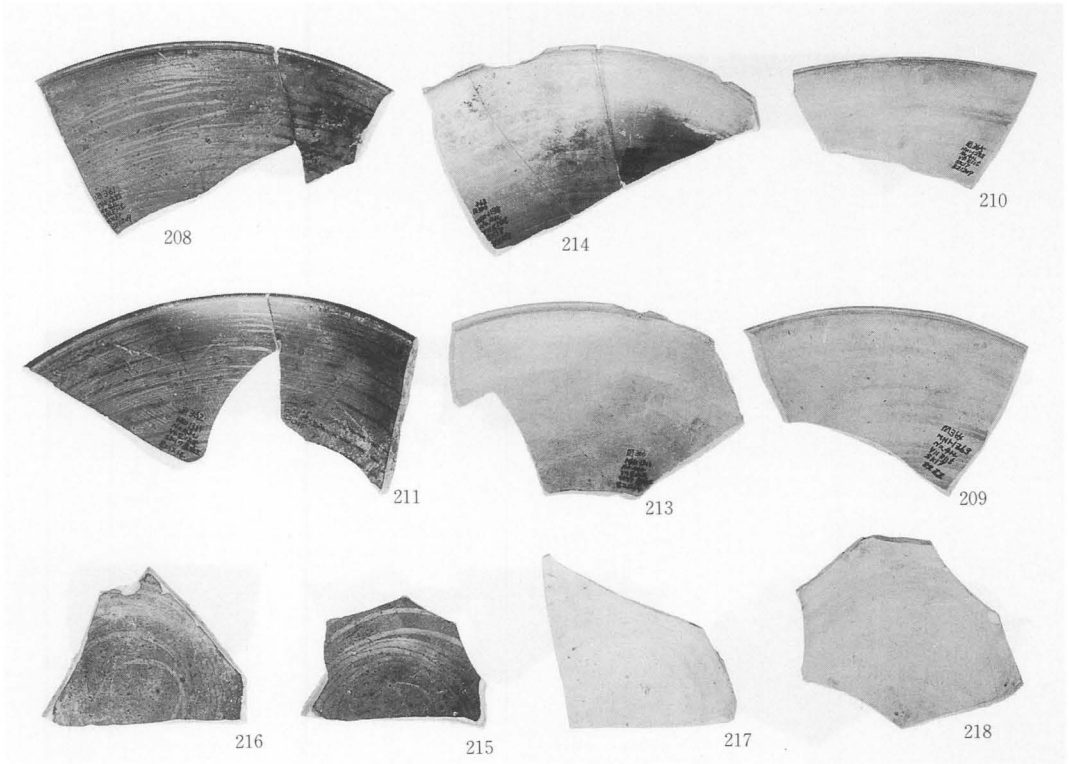
544



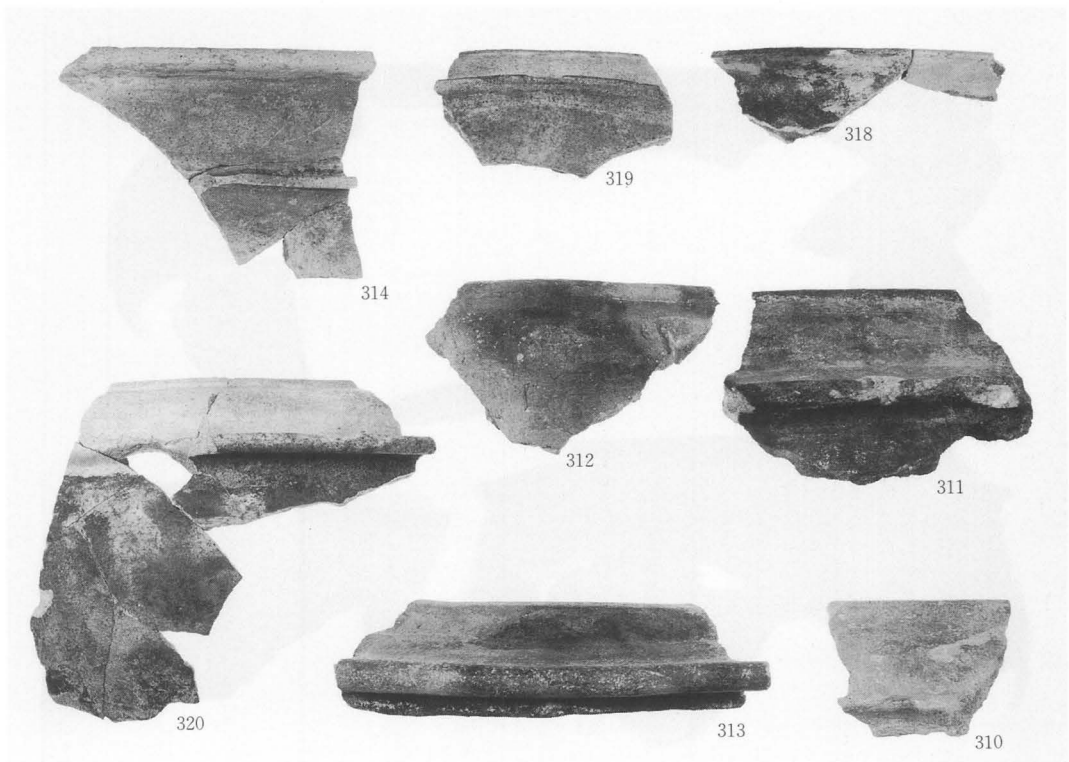
540



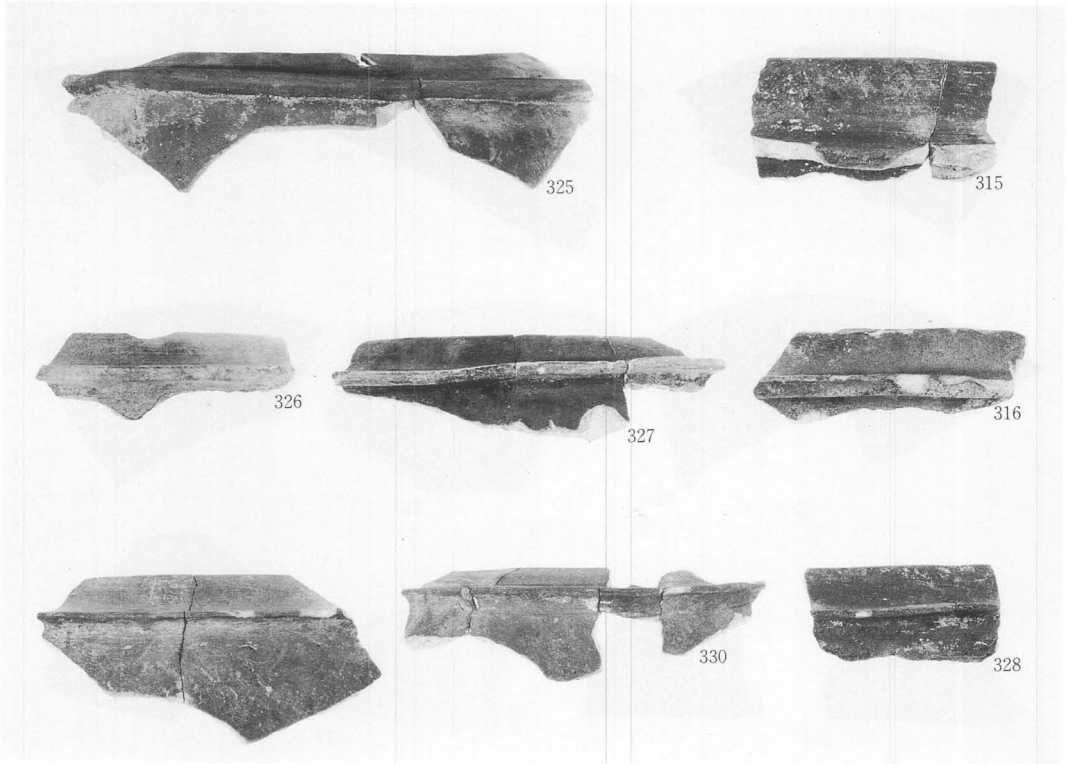
545



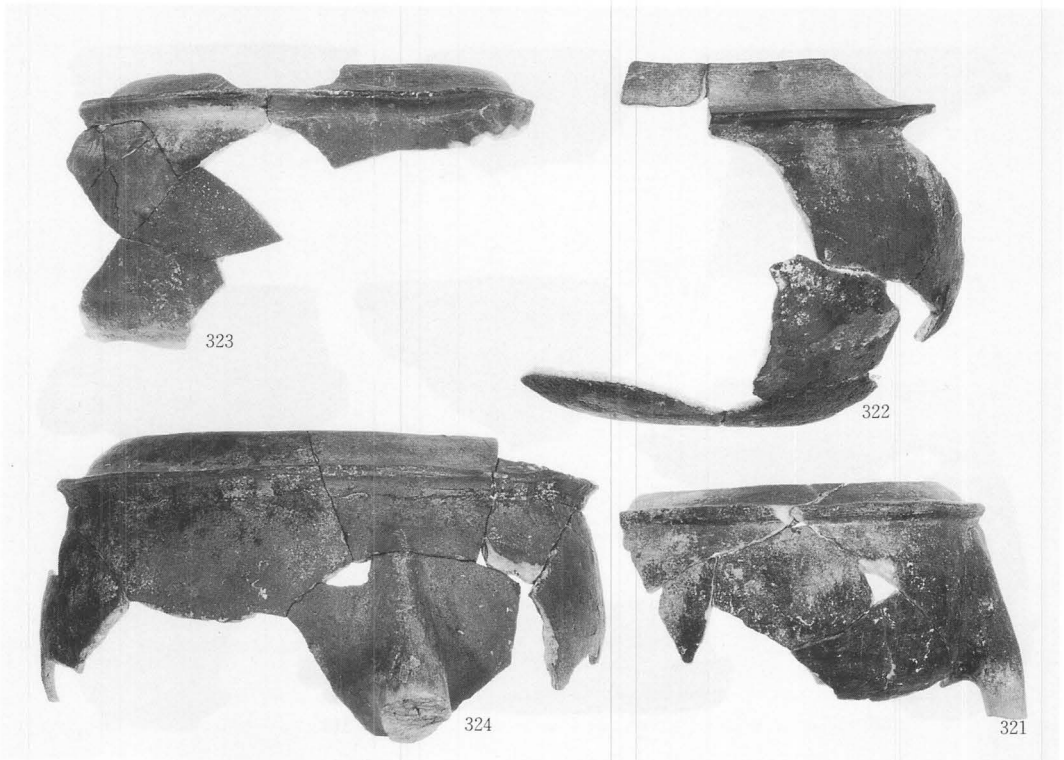
1. No 4 トレンチSK17出土土器 瓦器



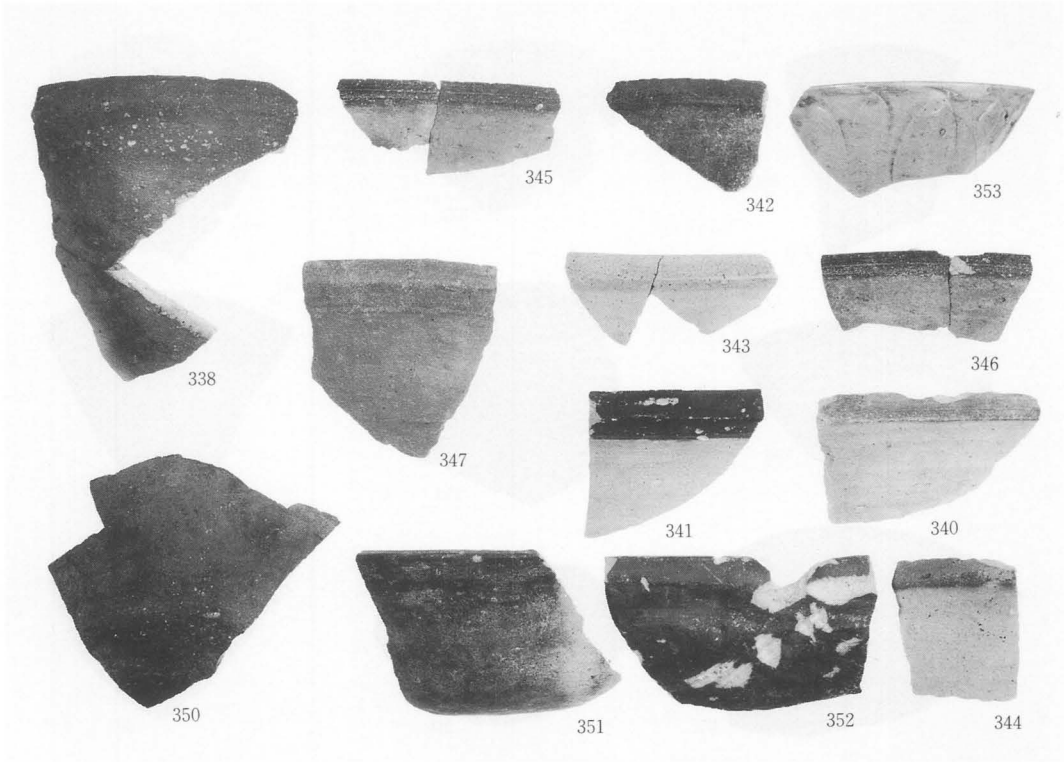
2. No 4 トレンチSK17出土土器 土師器



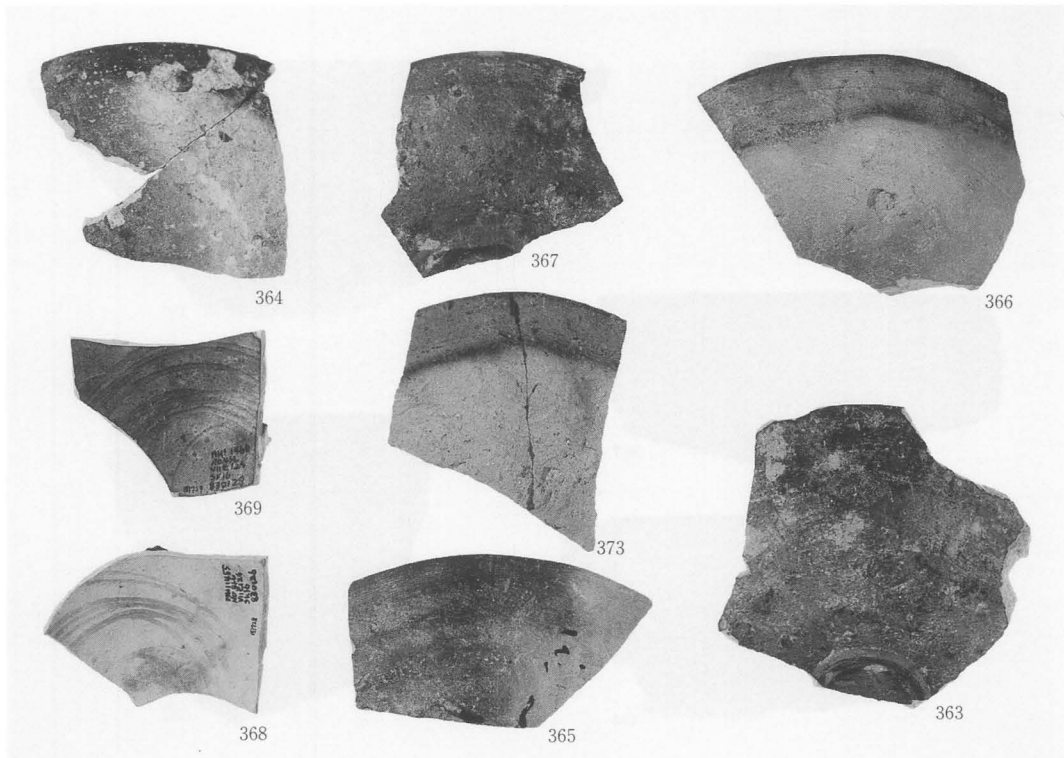
1. No 4 トレンチSK17出土土器 瓦器



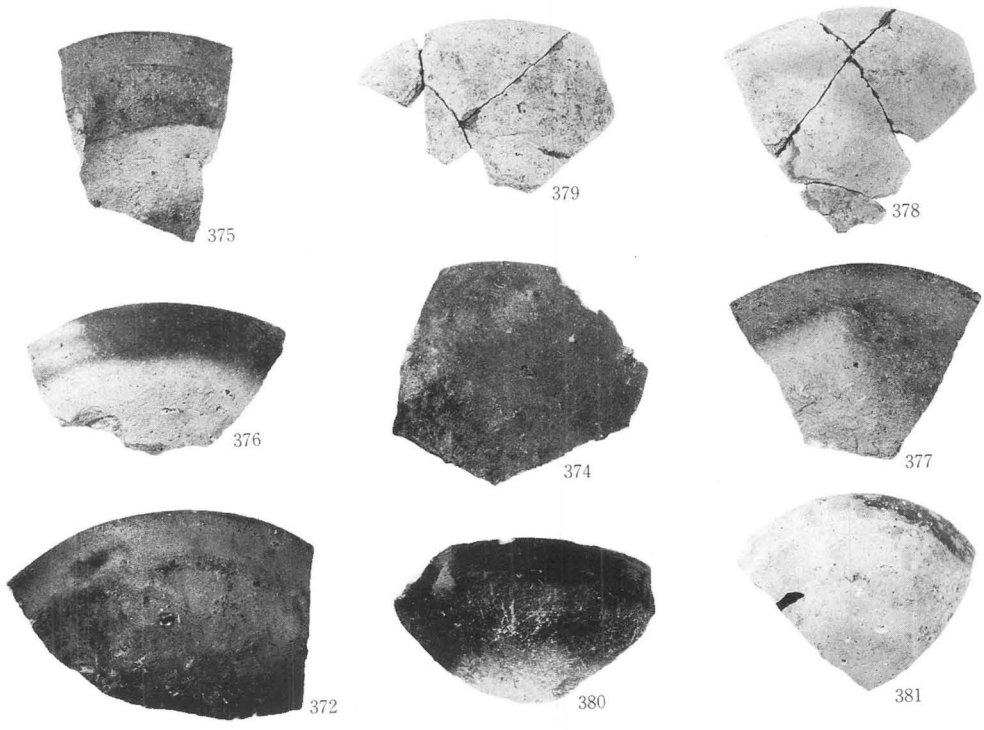
2. No 4 トレンチSK17出土土器 瓦器



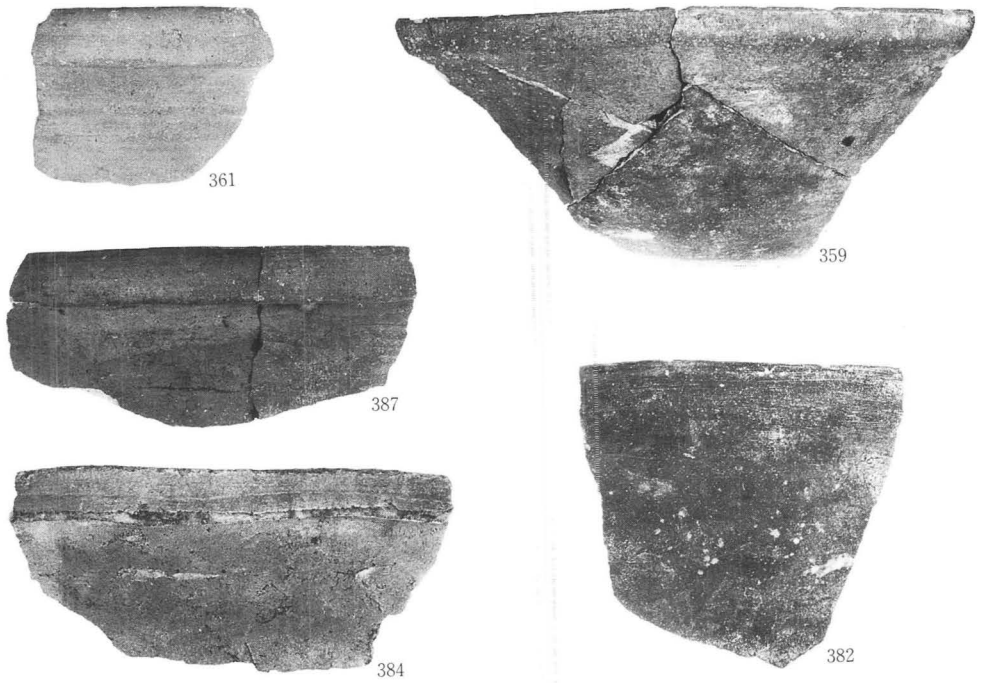
1. No 4 トレンチSK17出土土器 須恵器・瓦器・陶器・輸入磁器



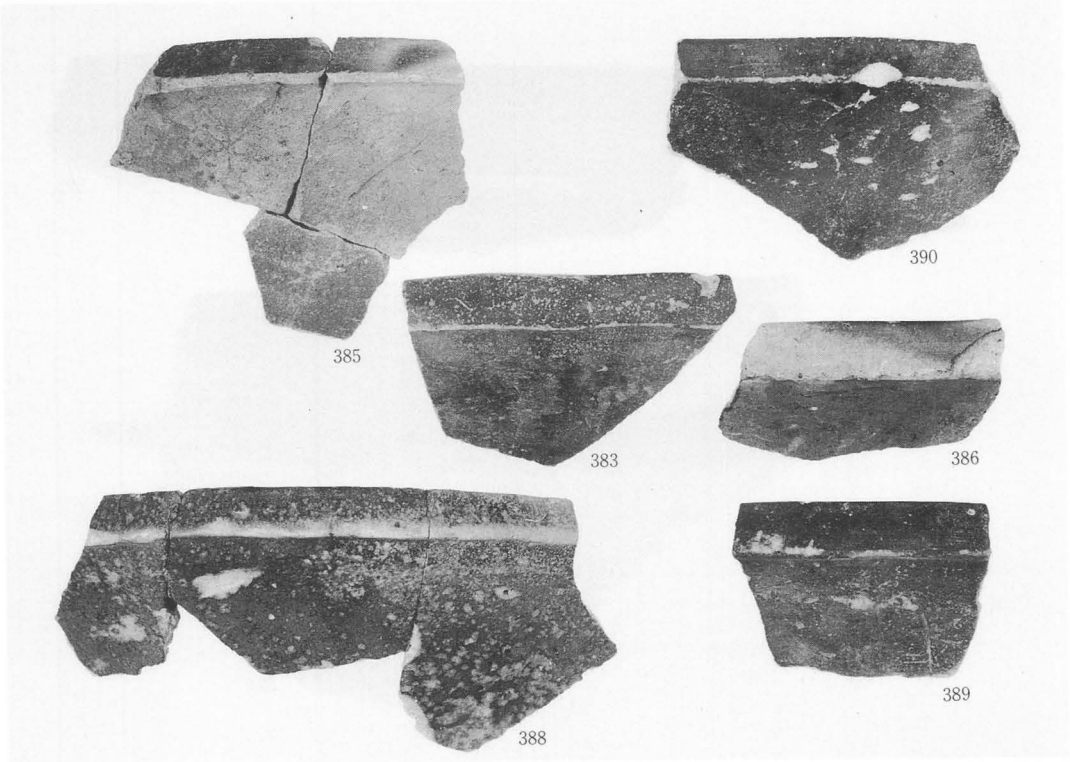
2. No 4 トレンチSK16出土土器 瓦器



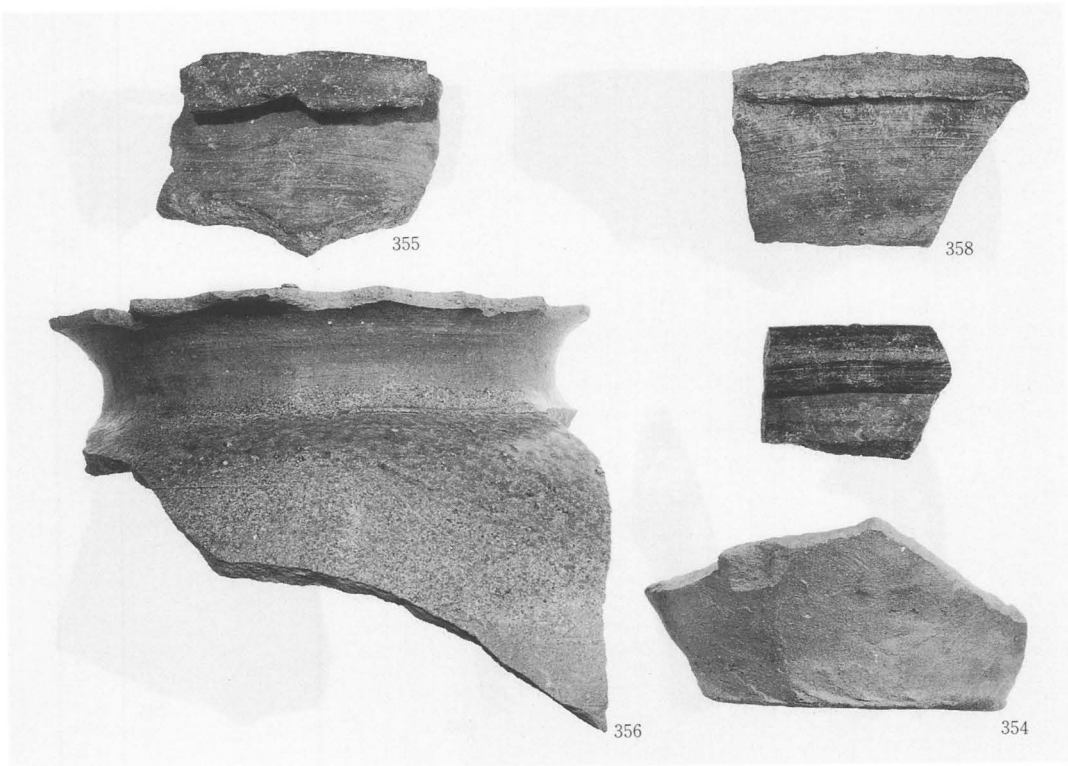
1. No 4 トレンチSK16出土土器 瓦器



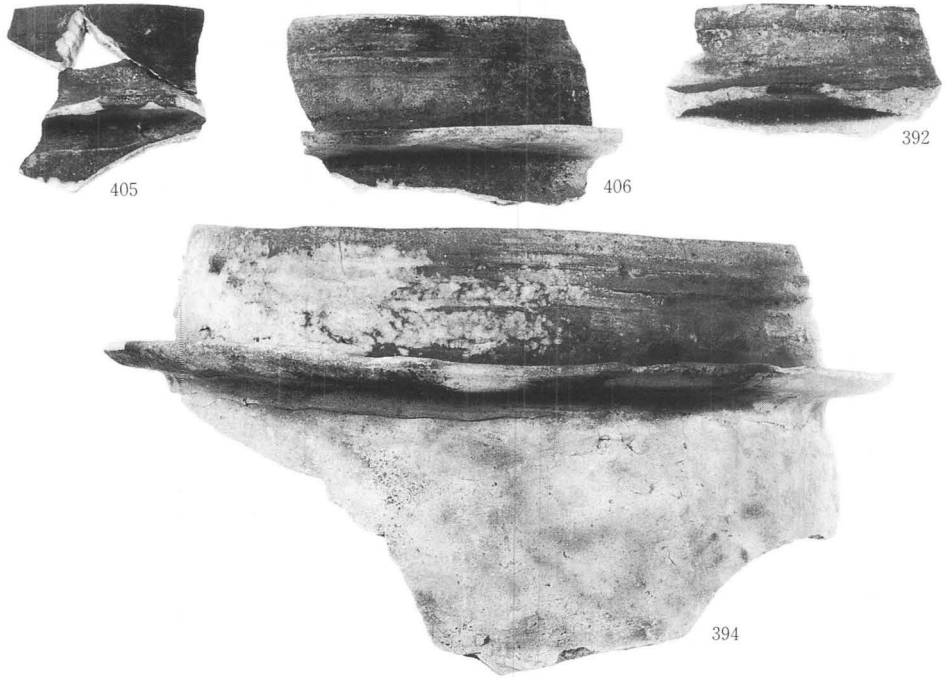
2. No 4 トレンチSK16出土土器 須恵器・瓦器



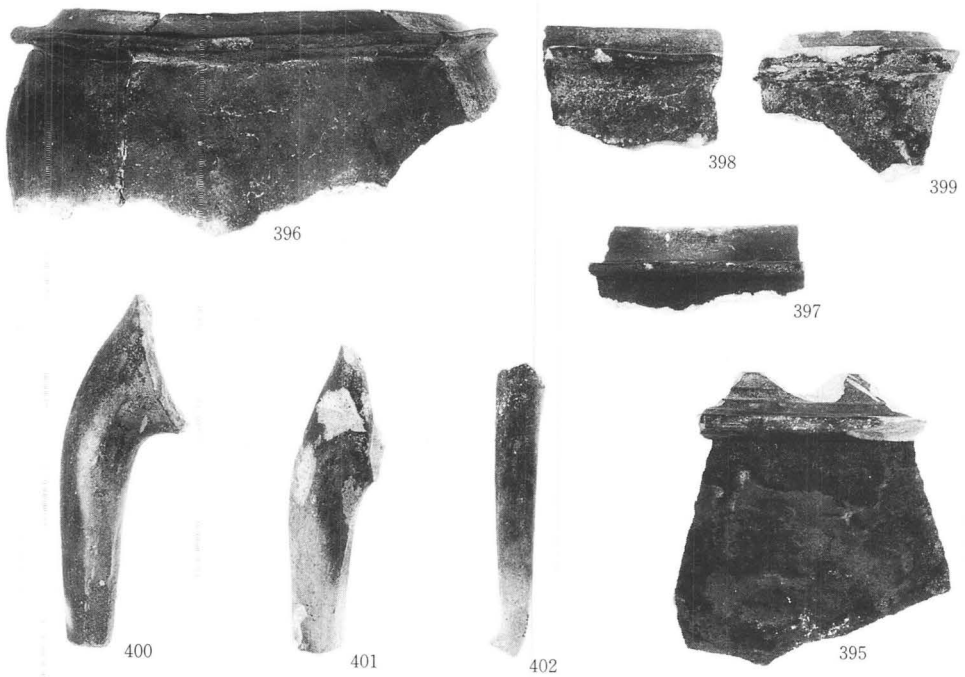
1. No 4 トレンチSK16出土土器 瓦器



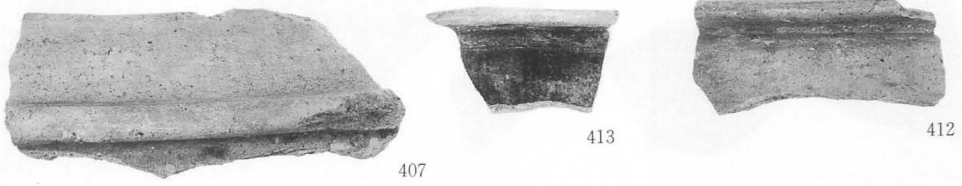
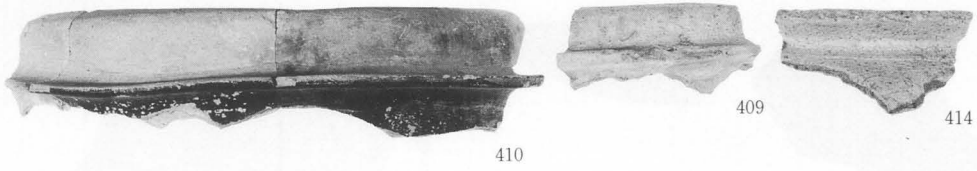
2. No 4 トレンチSK16出土土器 陶器



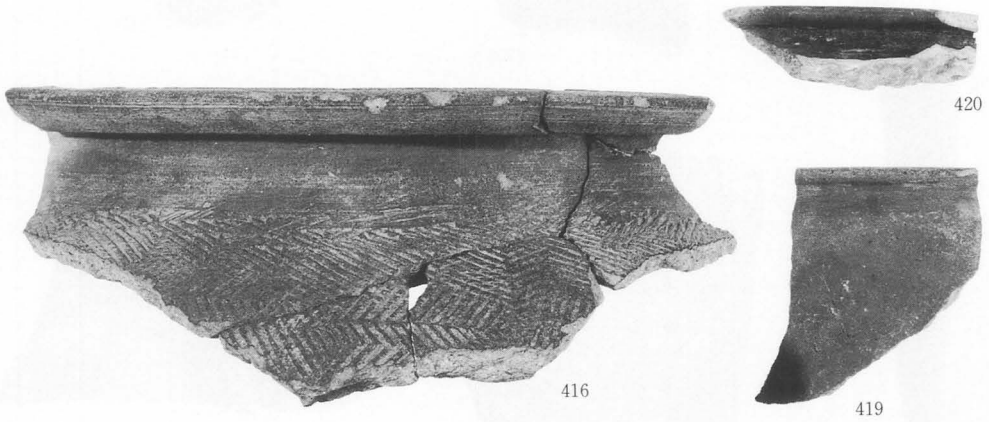
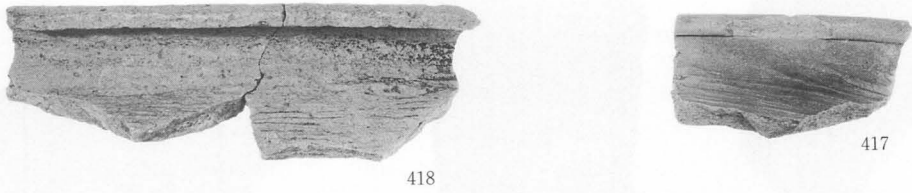
1. No 4 トレンチSK16出土土器 瓦器



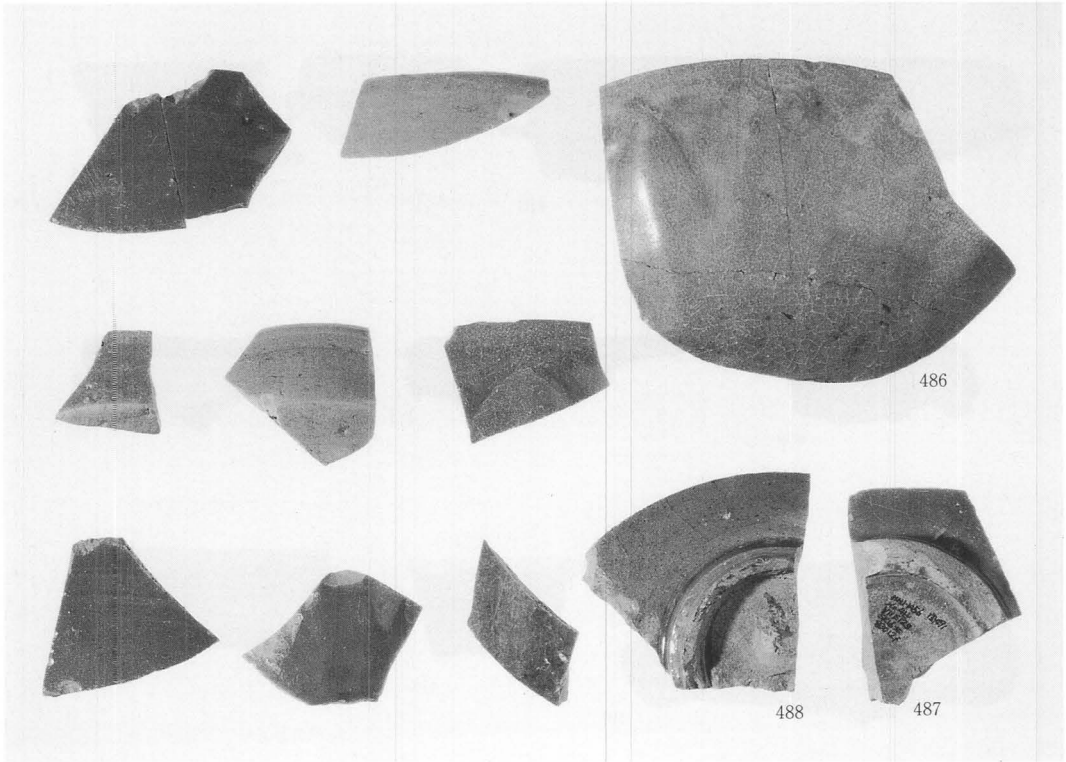
2. No 4 トレンチSK16出土土器 瓦器



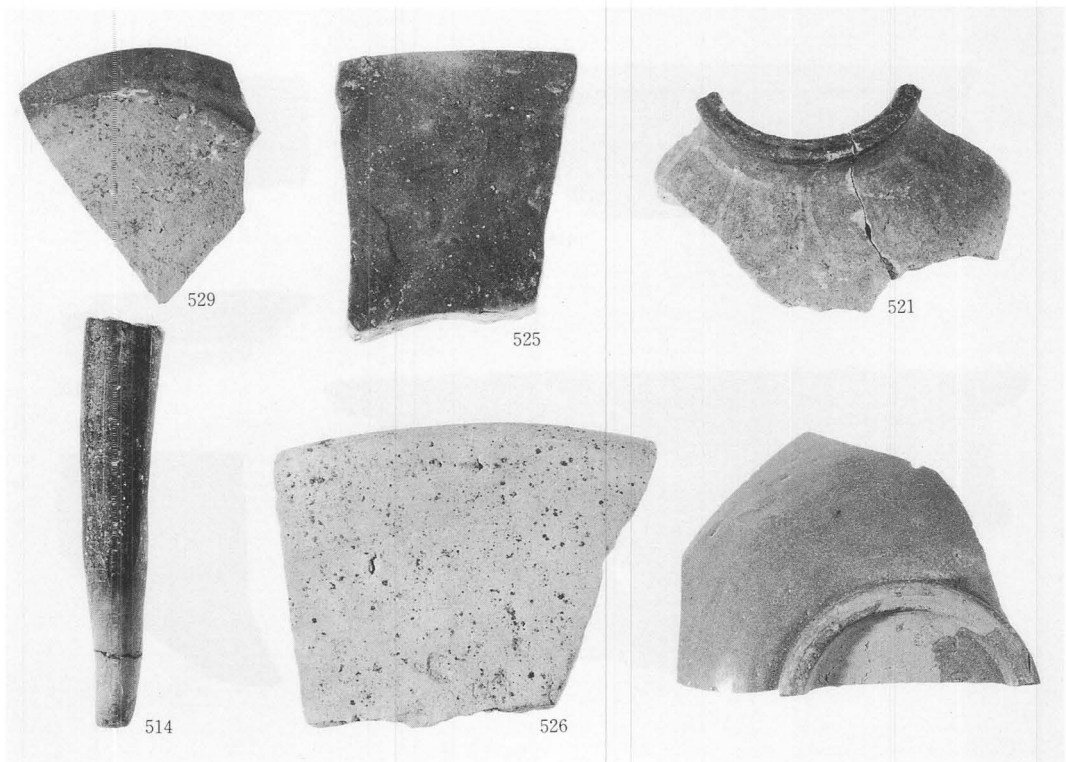
1. No 4 トレンチSK16出土土器 土師器



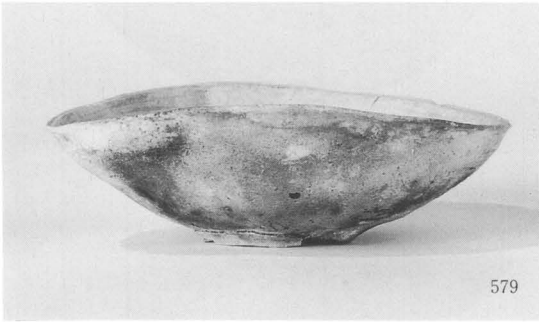
2. No 4 トレンチSK16出土土器 瓦器

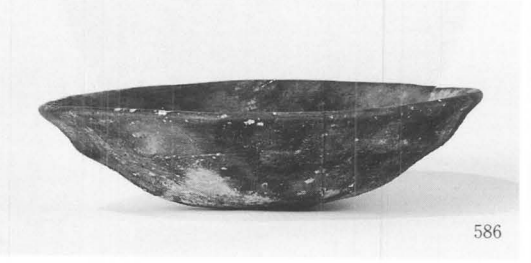
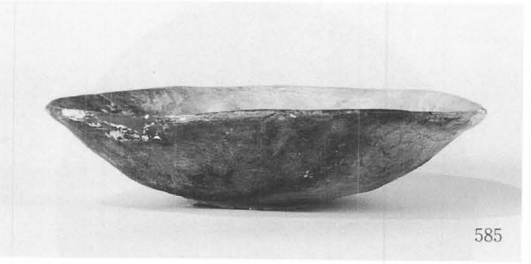


1. No 4 トレンチSK16出土土器 輸入磁器

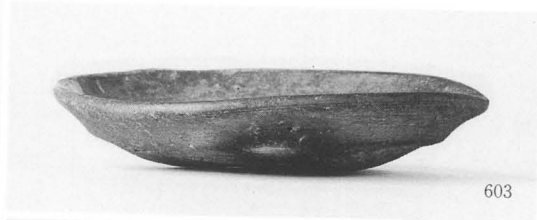


2. No 4 トレンチSD1・4、SK18、SP23・98出土土器 瓦器・輸入磁器

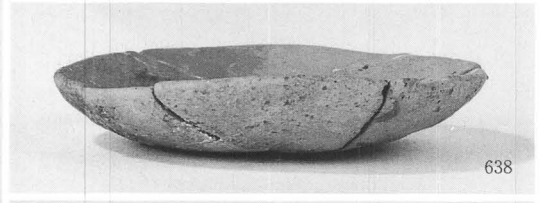
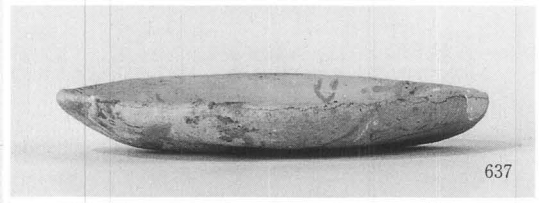
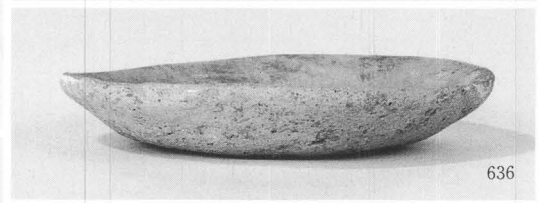
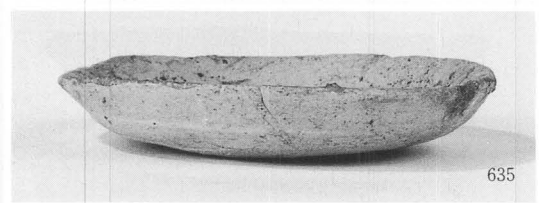
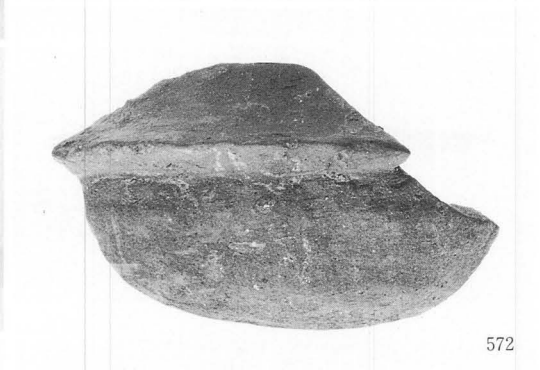
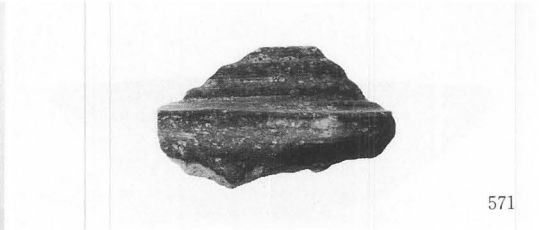


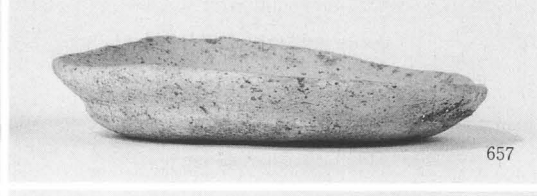
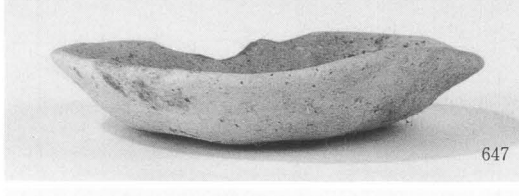
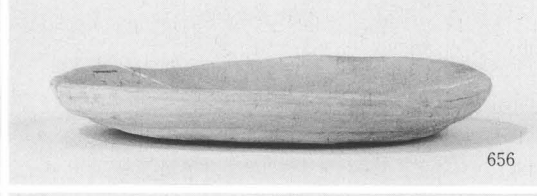
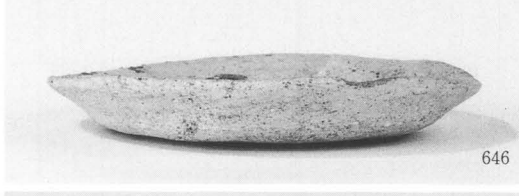
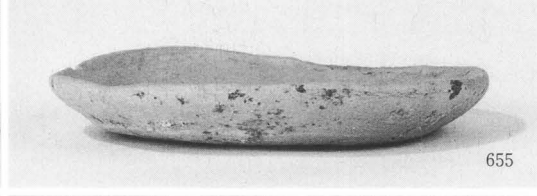
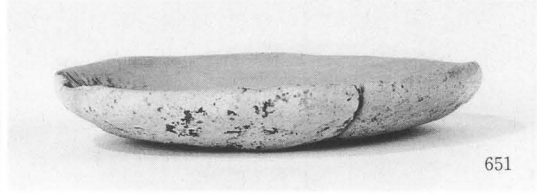
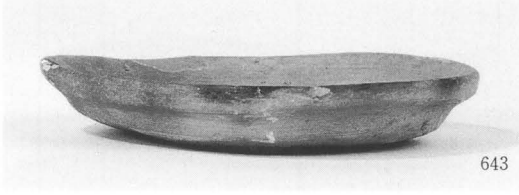
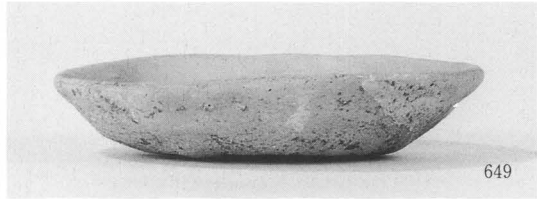
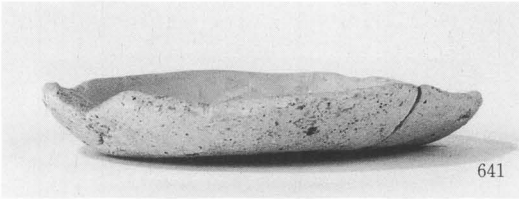


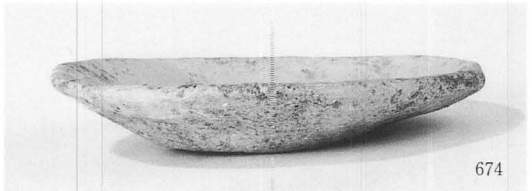
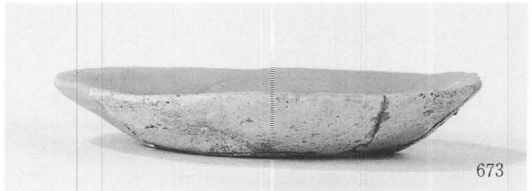
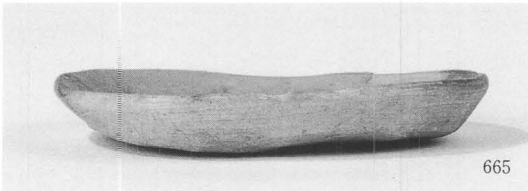
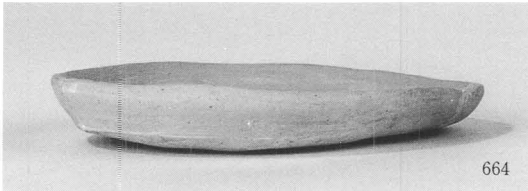
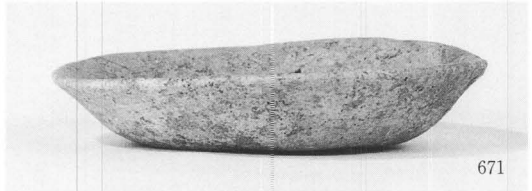
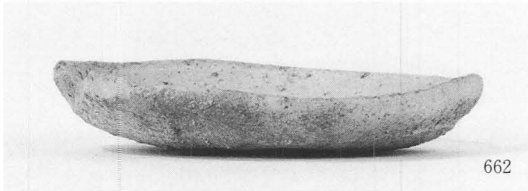
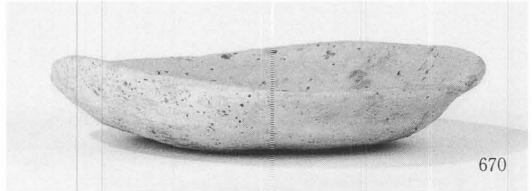
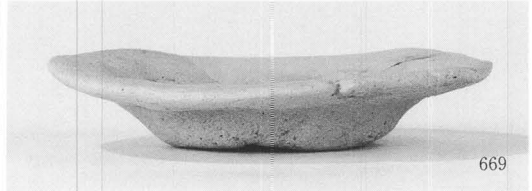
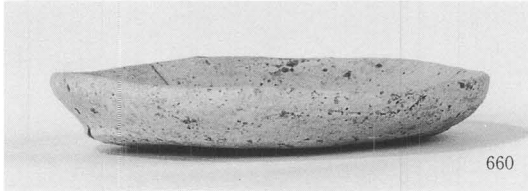
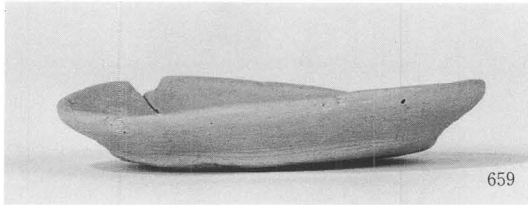
No 4 トレンチ包含層出土土器 瓦器

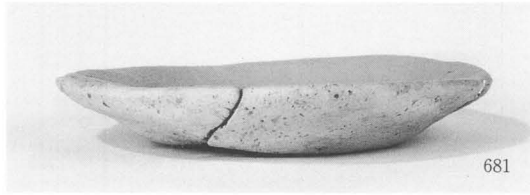


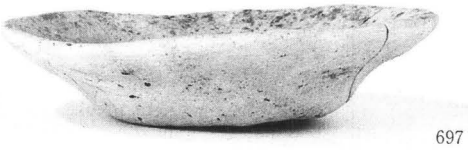
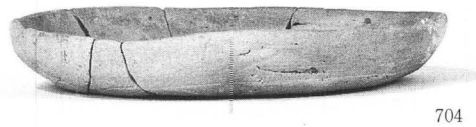
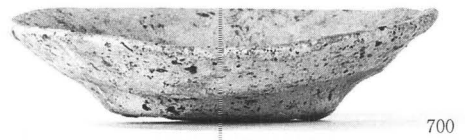
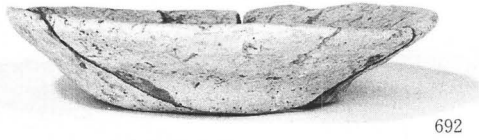
No 4 トレンチ包含層出土土器 瓦器

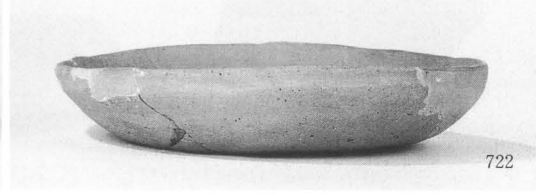
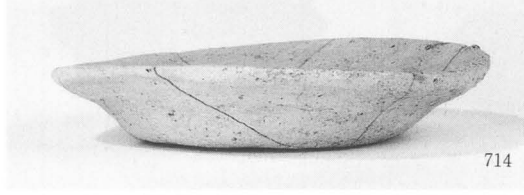
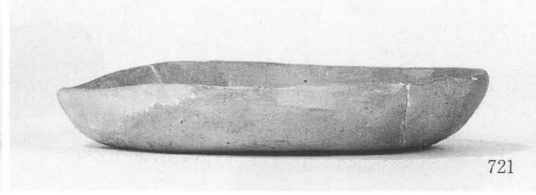
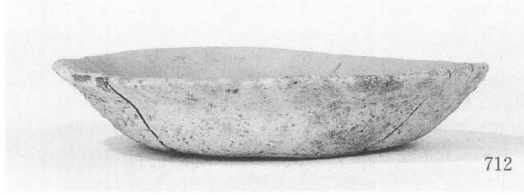
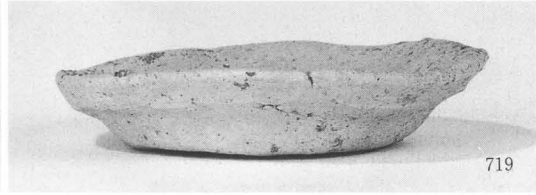
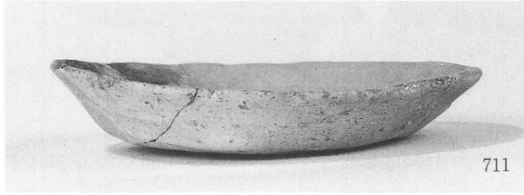
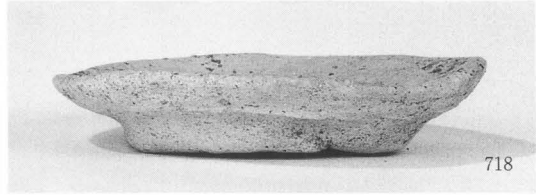
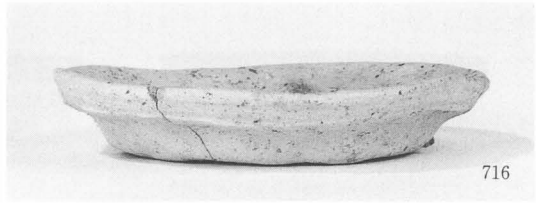




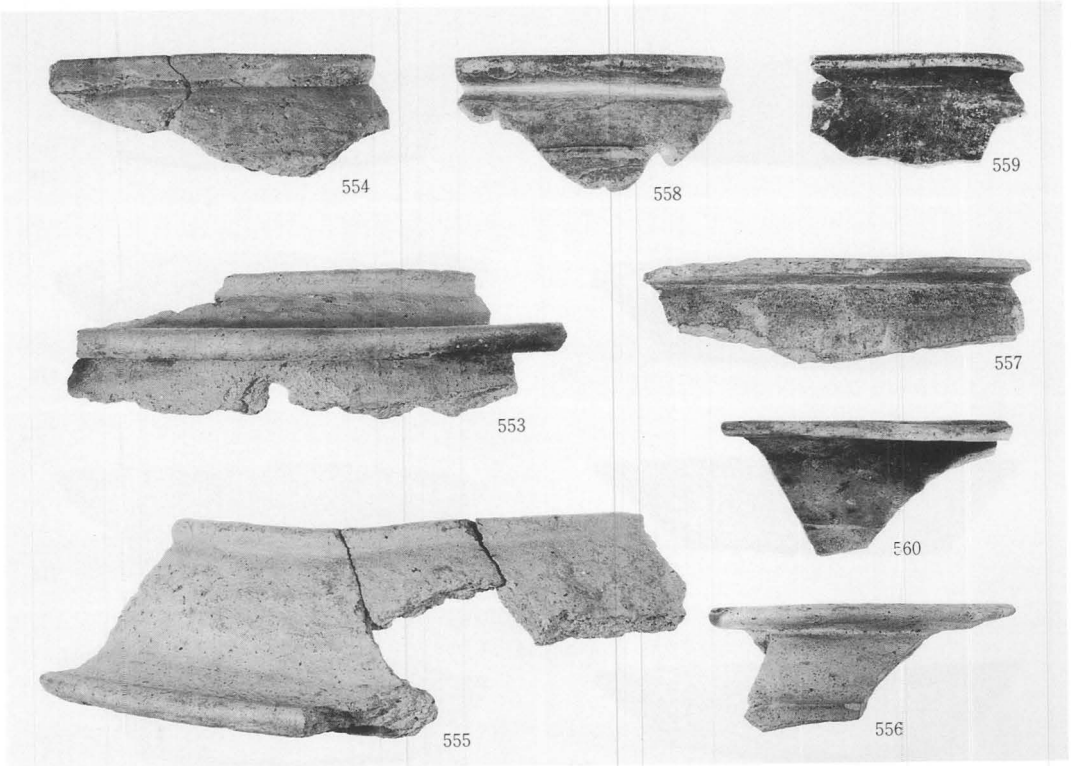




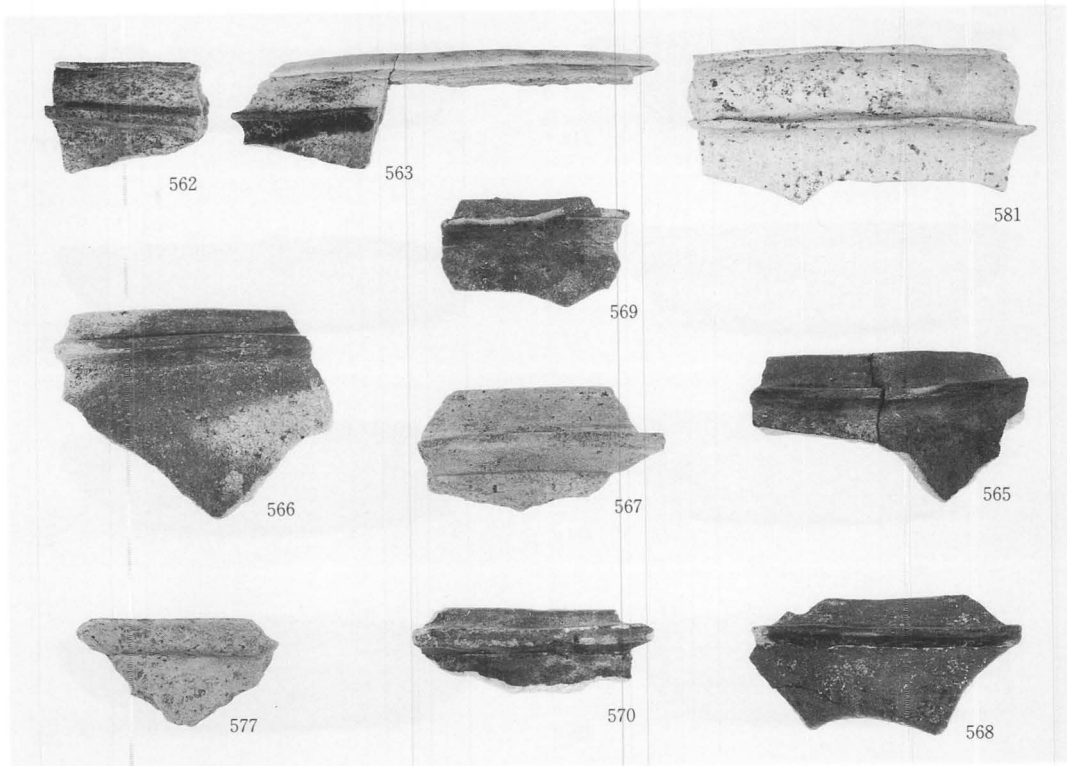




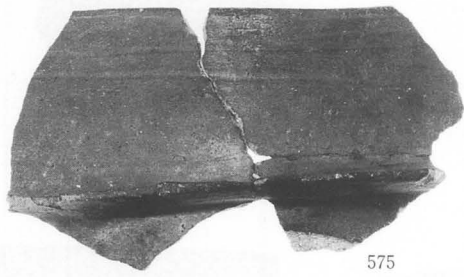
No 4 トレンチ包含層出土土器 土師器



1. No 4 トレンチ包含層出土土器 土師器



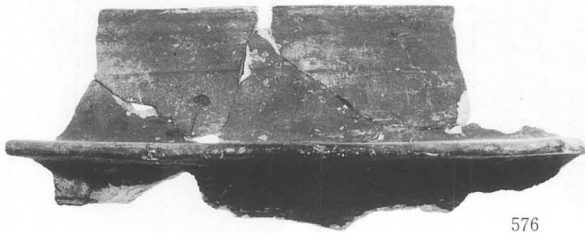
2. No 4 トレンチ包含層出土土器 土師器・瓦器



575



574



576



573

1. No 4 トレンチ包含層出土土器 瓦器



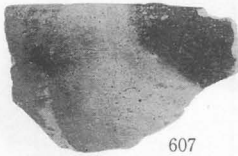
608



605



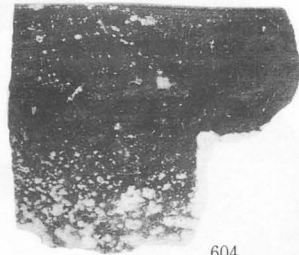
606



607



609

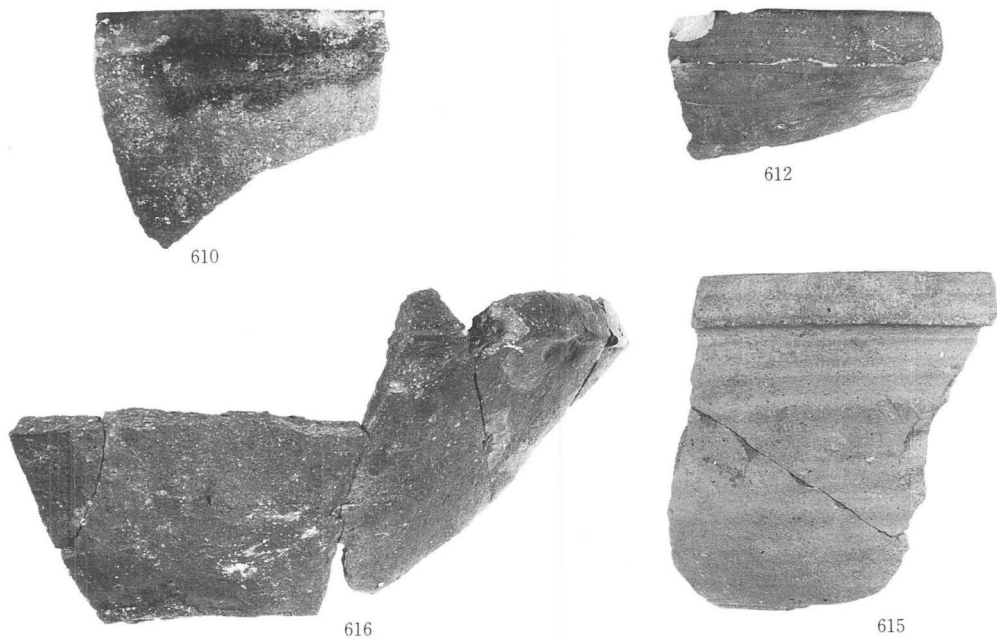


604

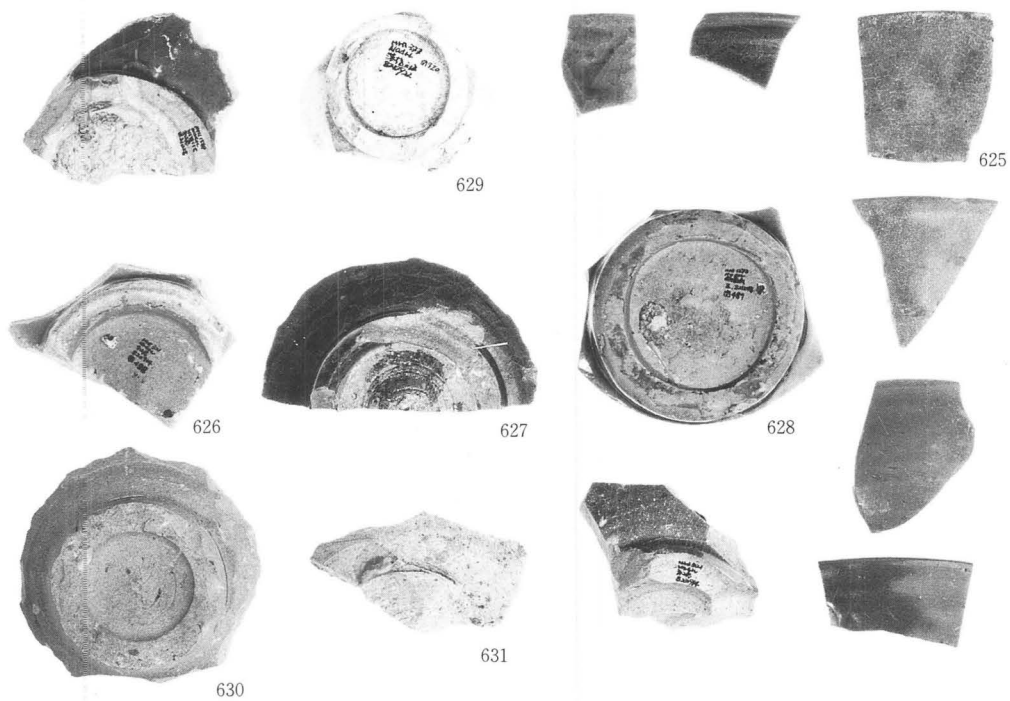


611

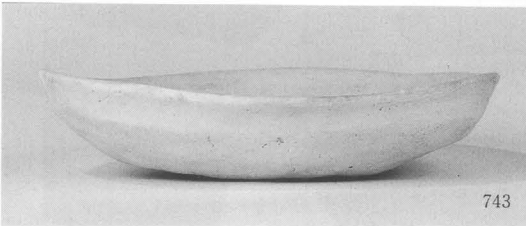
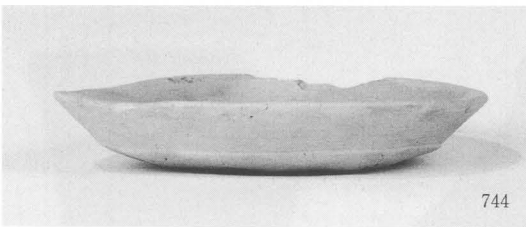
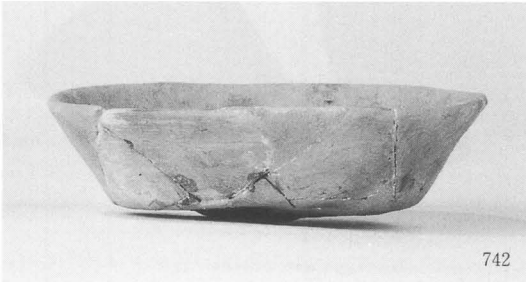
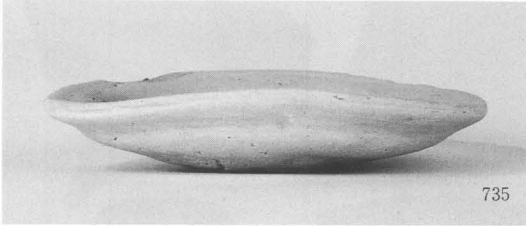
2. No 4 トレンチ包含層出土土器 瓦器



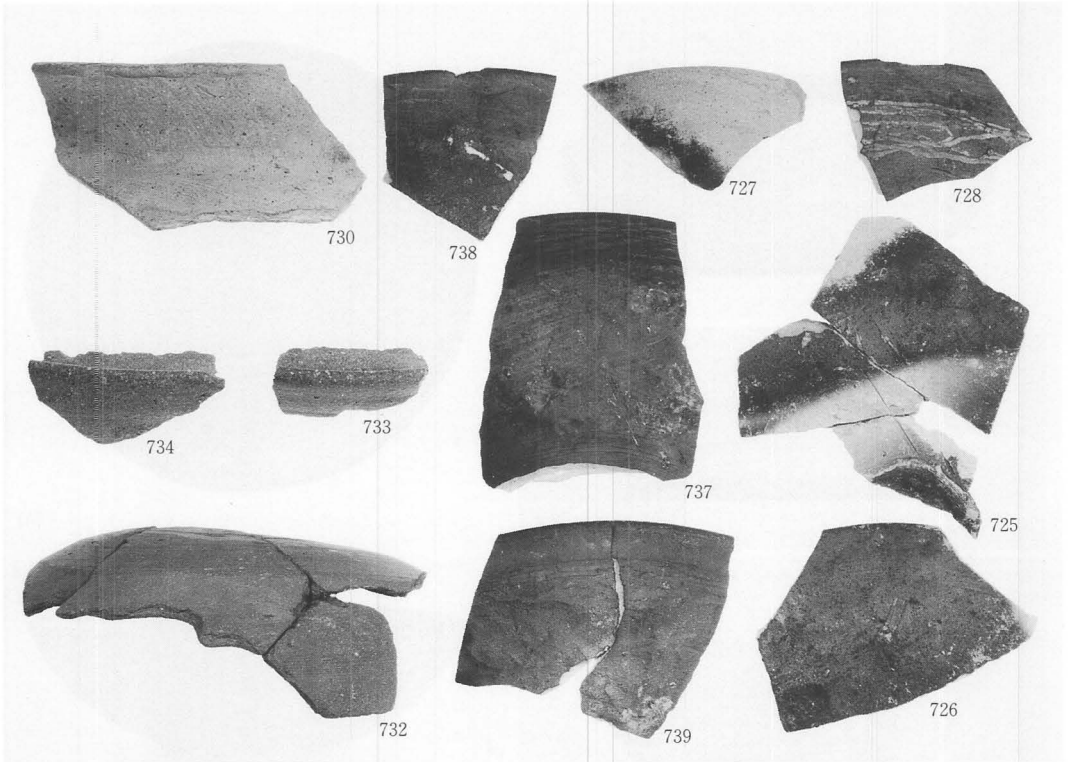
1. No 4 トレンチ包含層出土土器 須恵器・陶器・瓦器



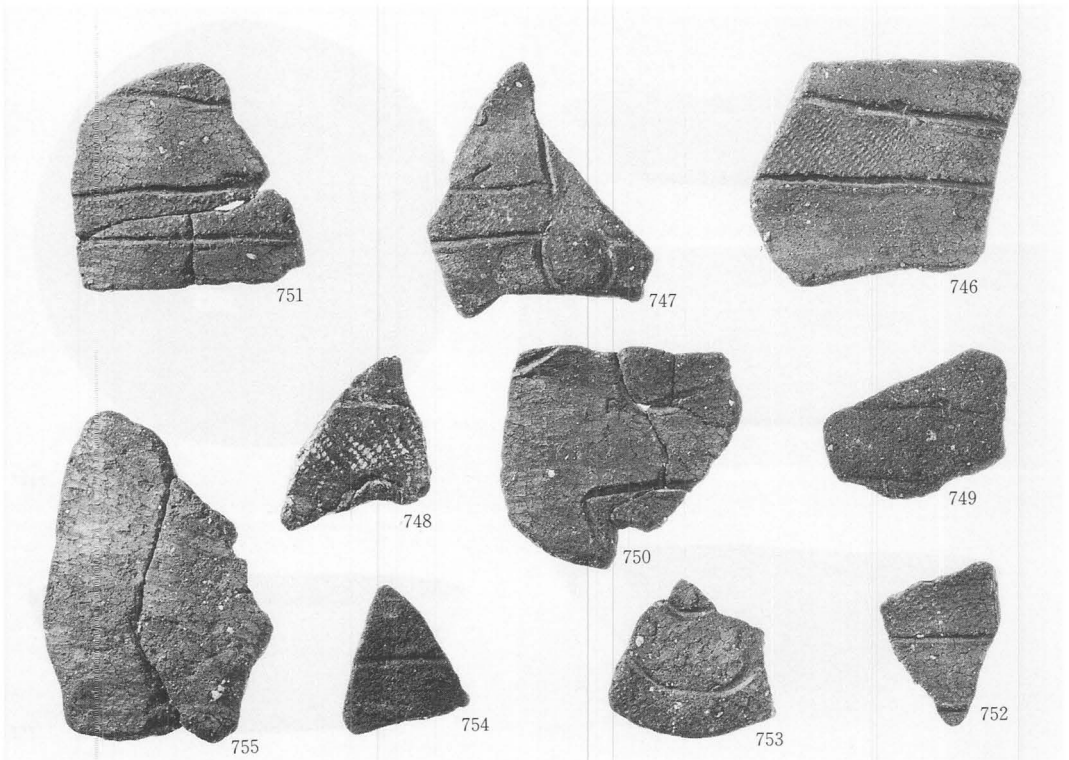
2. No 4 トレンチ包含層出土土器 陶器・輸入磁器



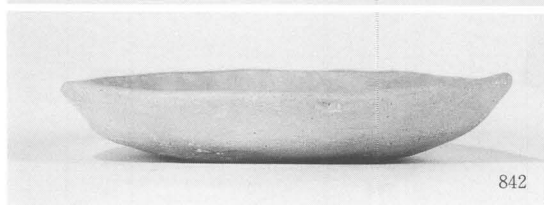
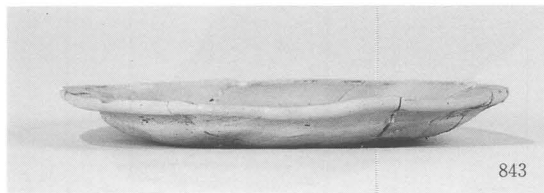
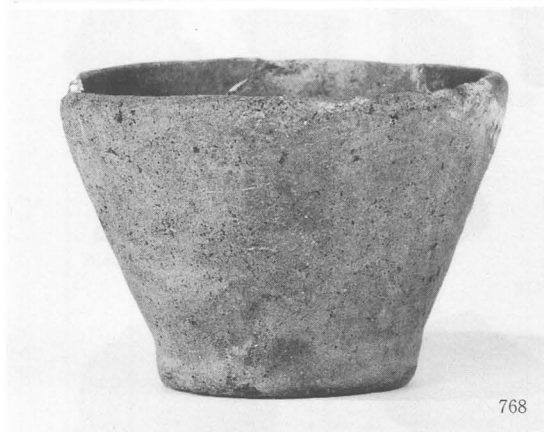
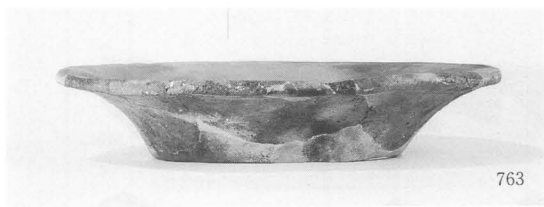
No 5～7 トレンチ出土土器 須恵器・土師器・瓦器

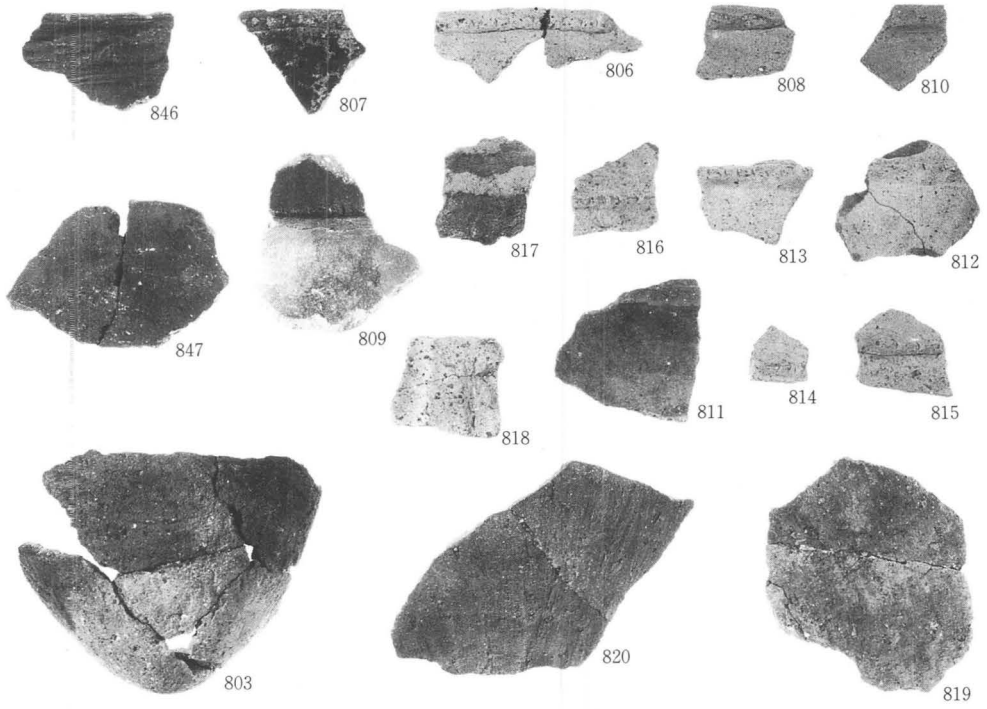


1. No 5 トレンチ出土土器 須恵器・土師器・瓦器

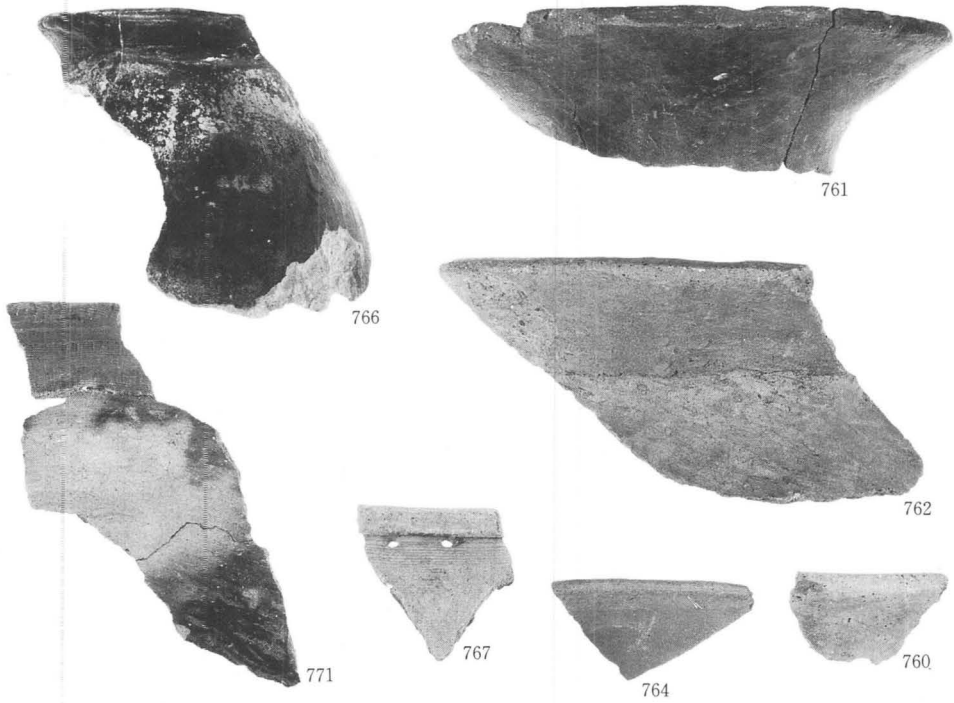


2. No 6 トレンチ出土土器 縄文土器

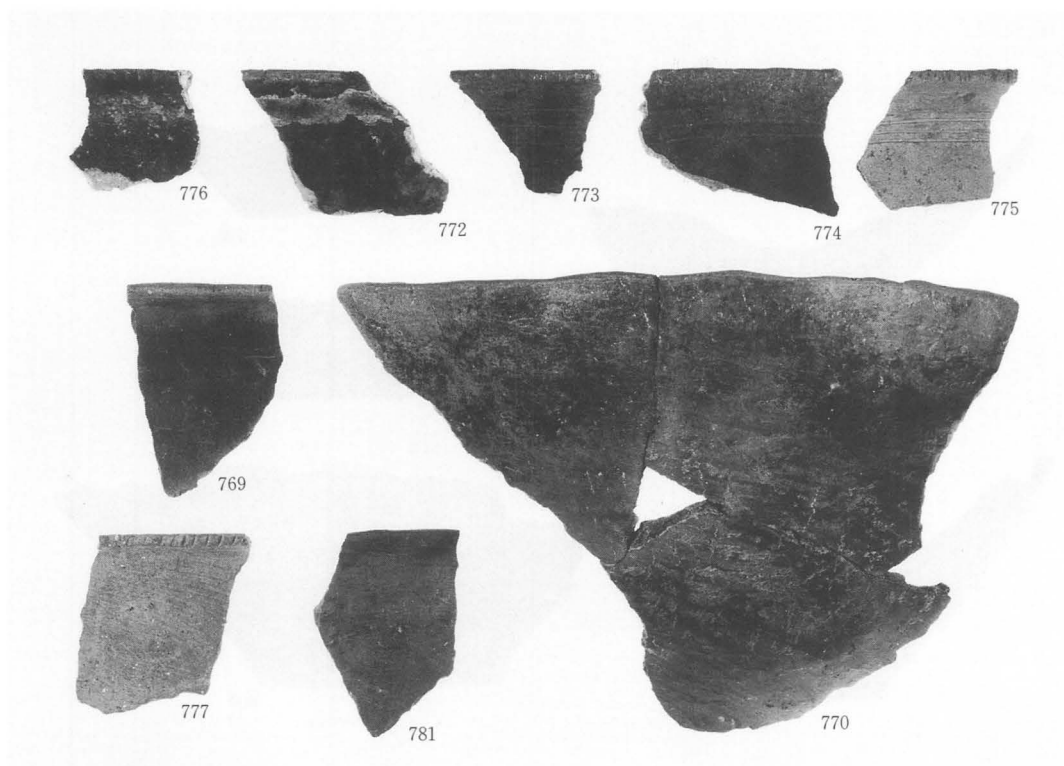




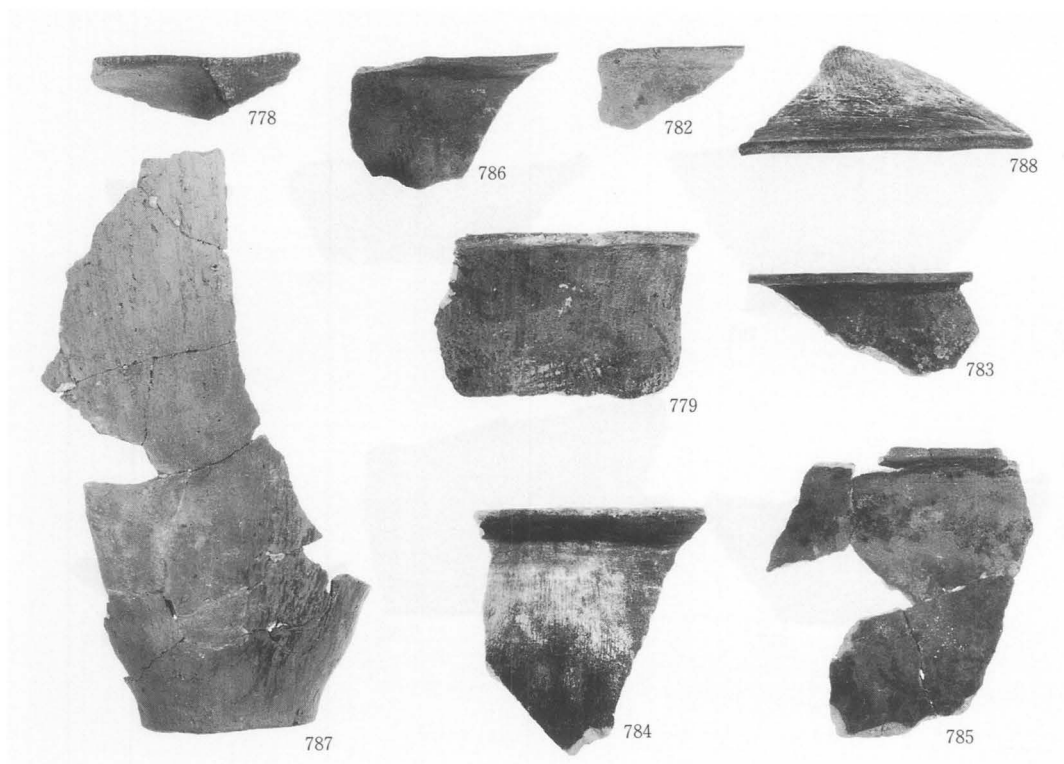
1. No 8 トレンチ出土土器 縄文土器



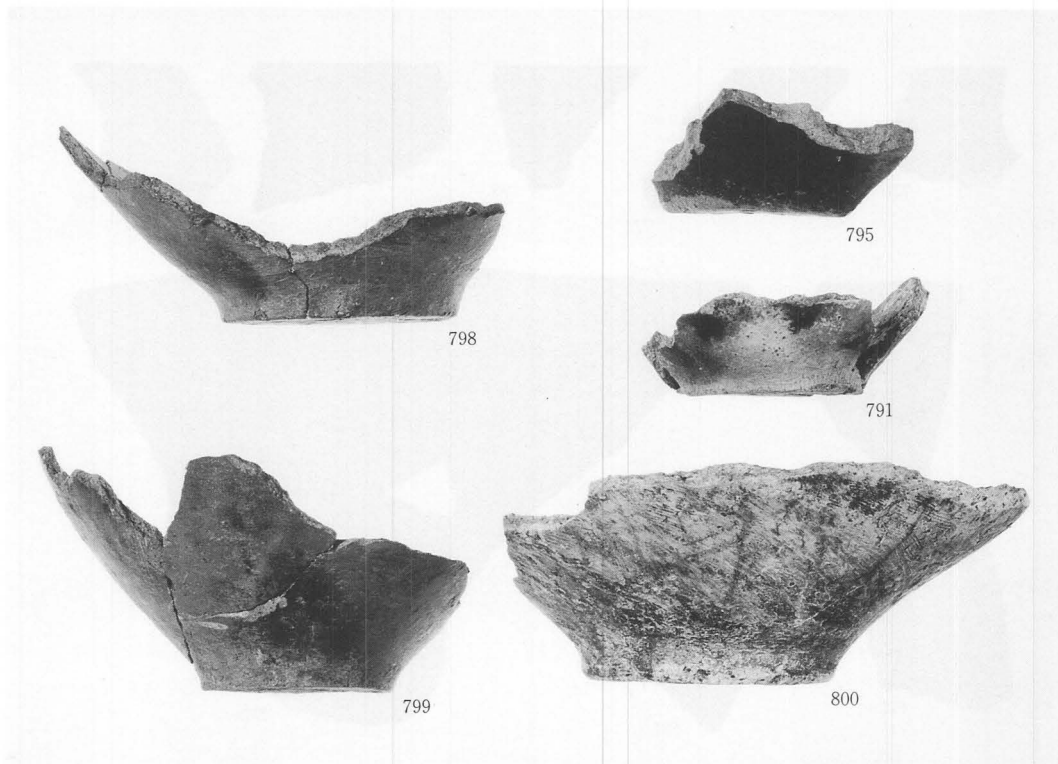
2. No 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器



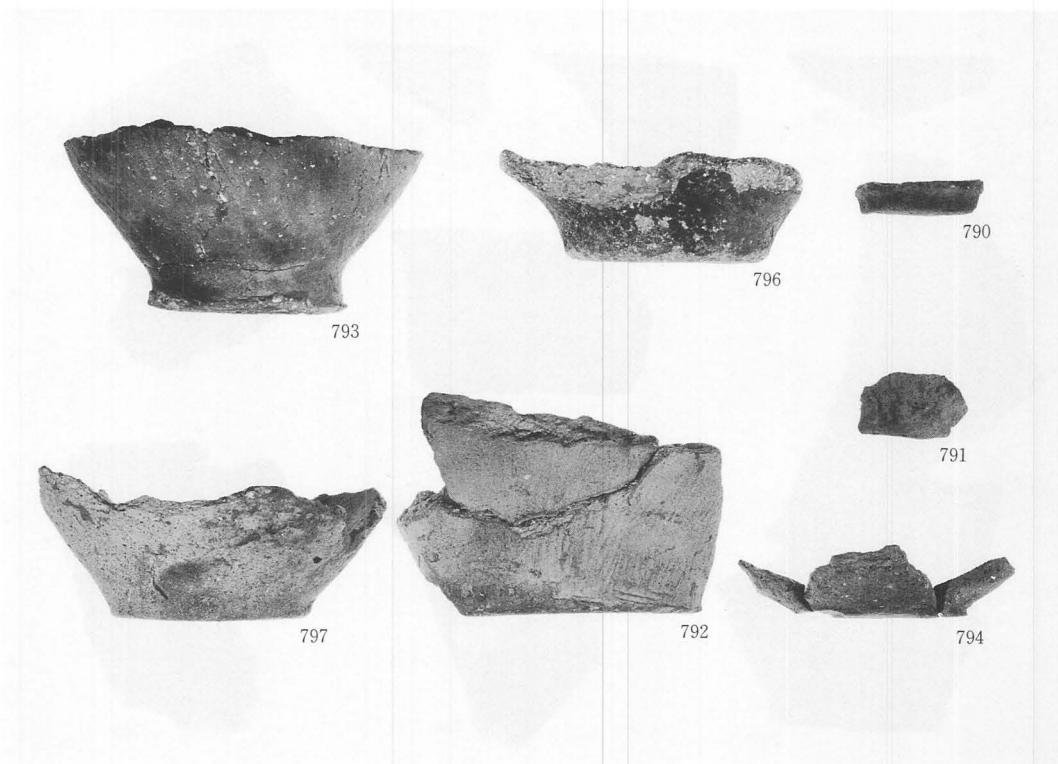
1. No 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器



2. No 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器



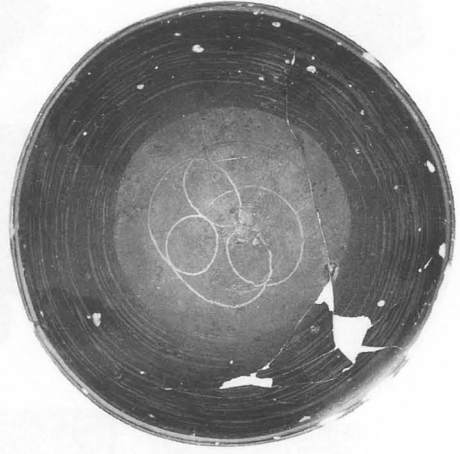
1. No 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器



2. No 8 トレンチ落ち込み出土土器 弥生土器



852'



848'



852



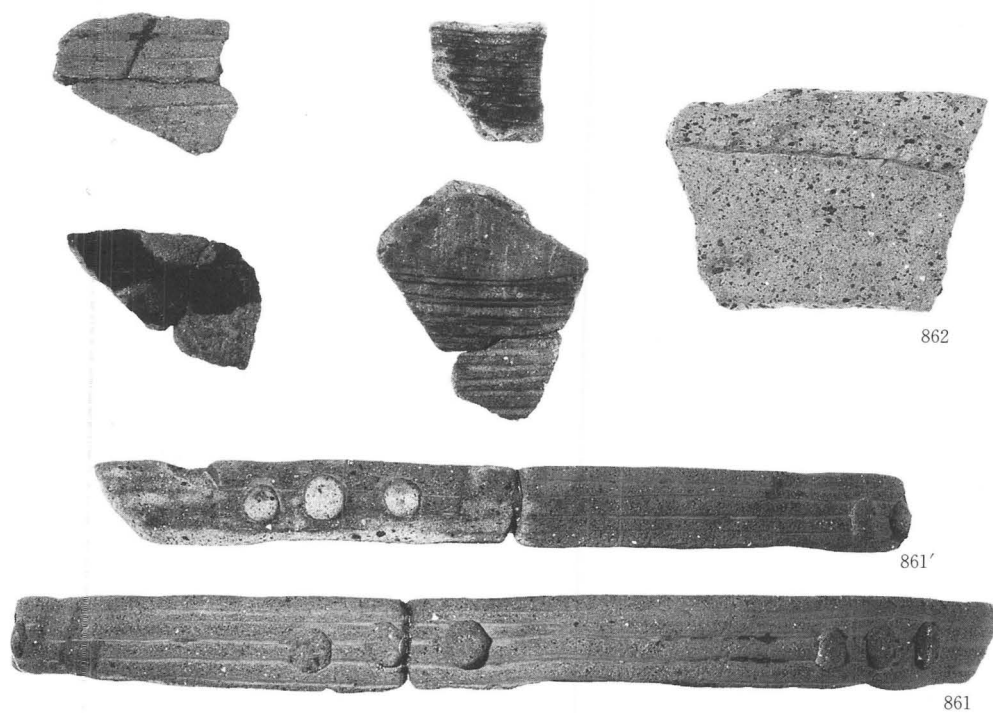
848



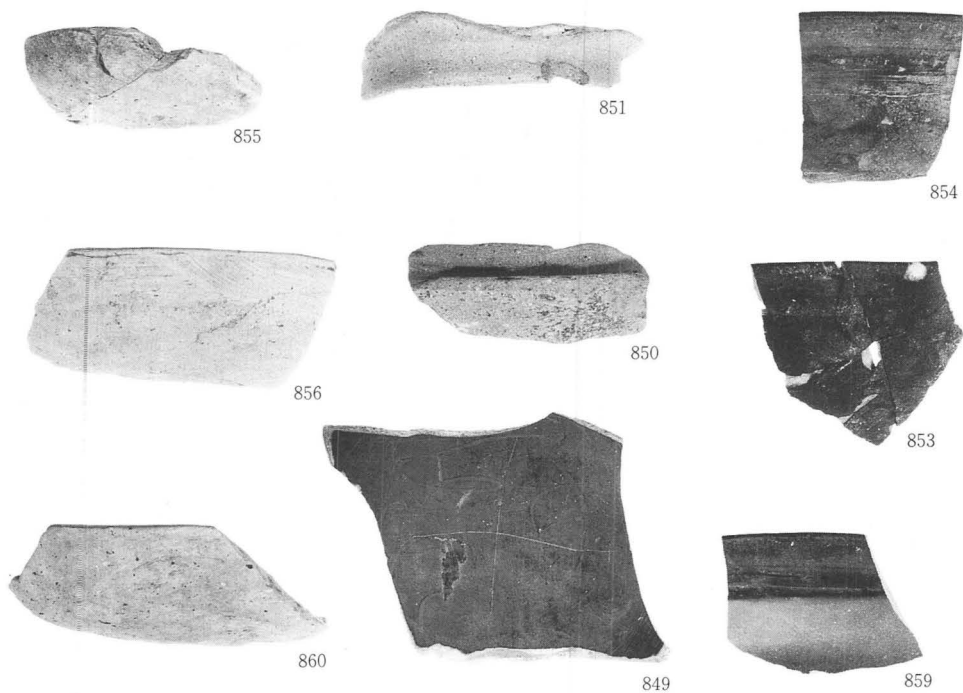
852''



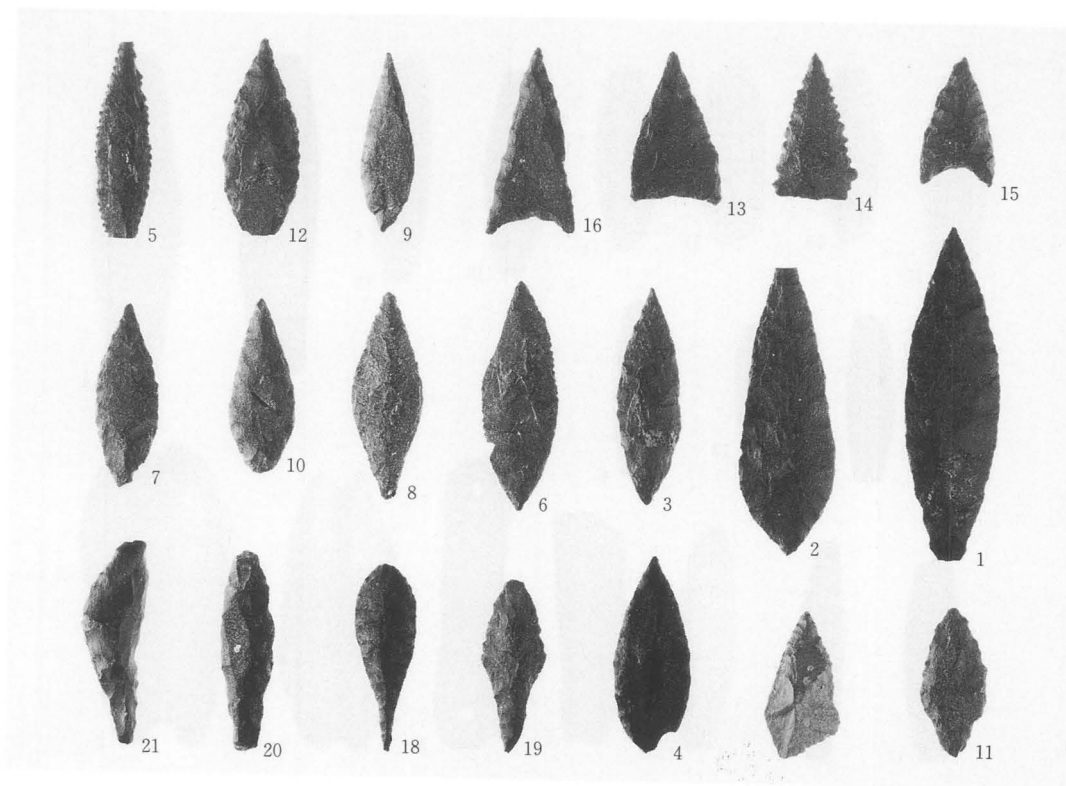
848''



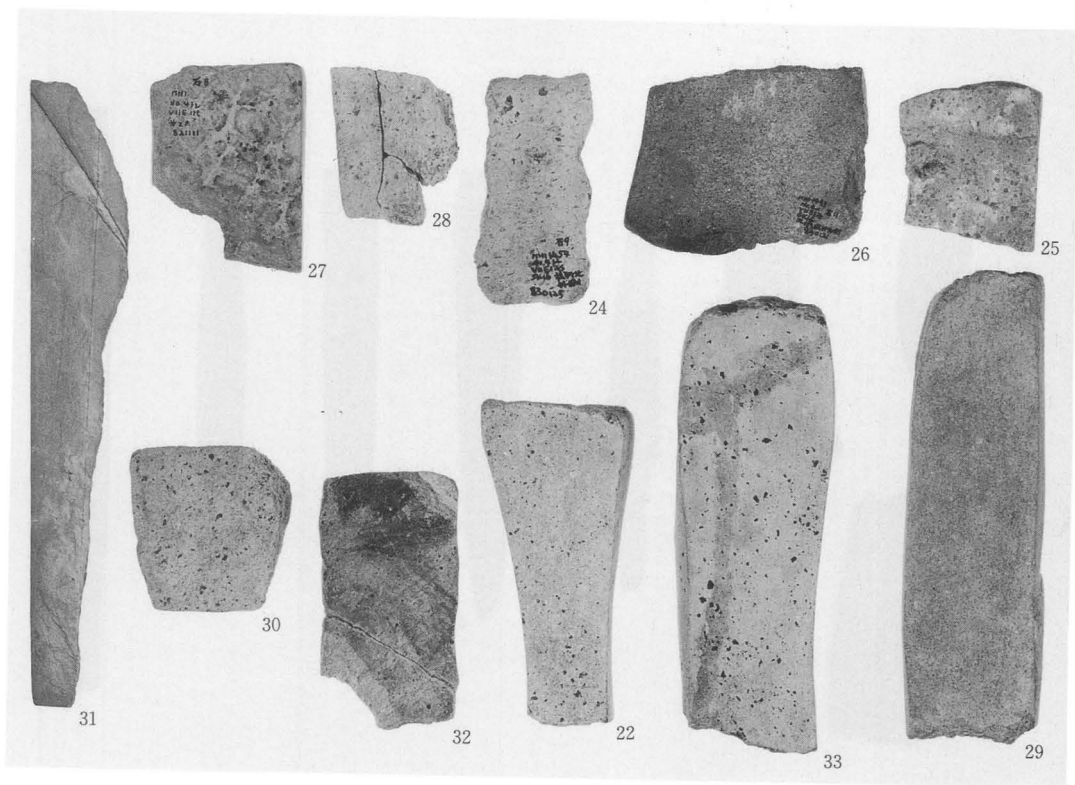
1. No 9 トレンチ出土土器 縄文土器・弥生土器



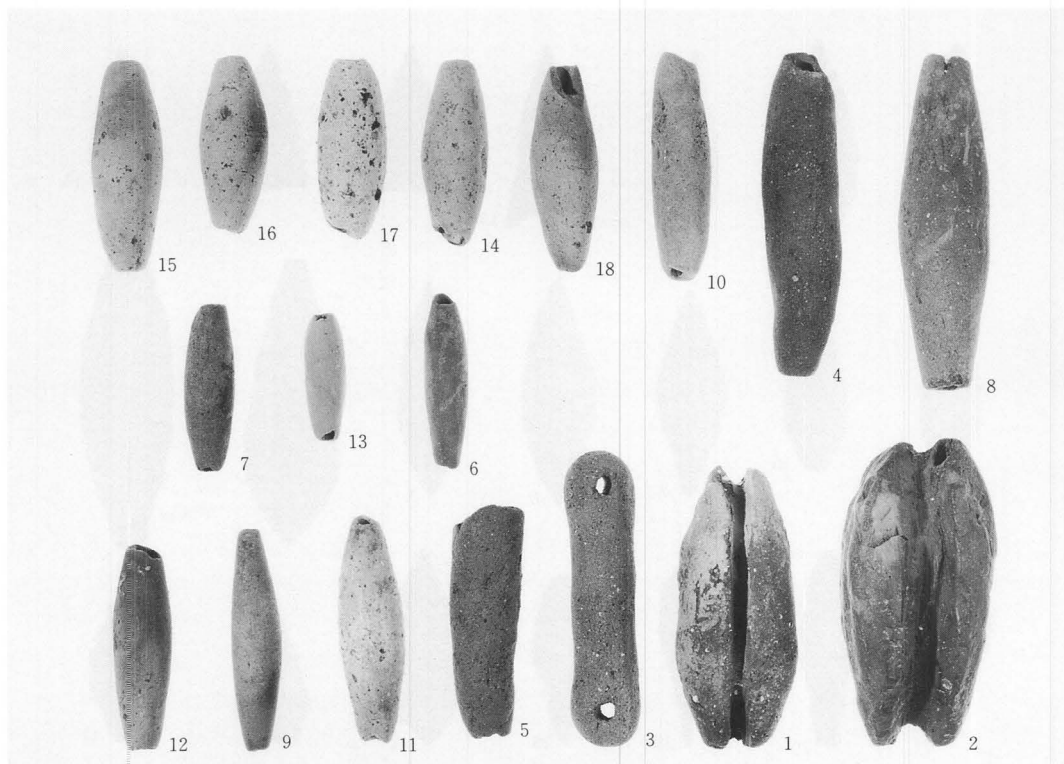
2. No 9 トレンチ出土土器 黒色土器・瓦器・土師器・須恵器



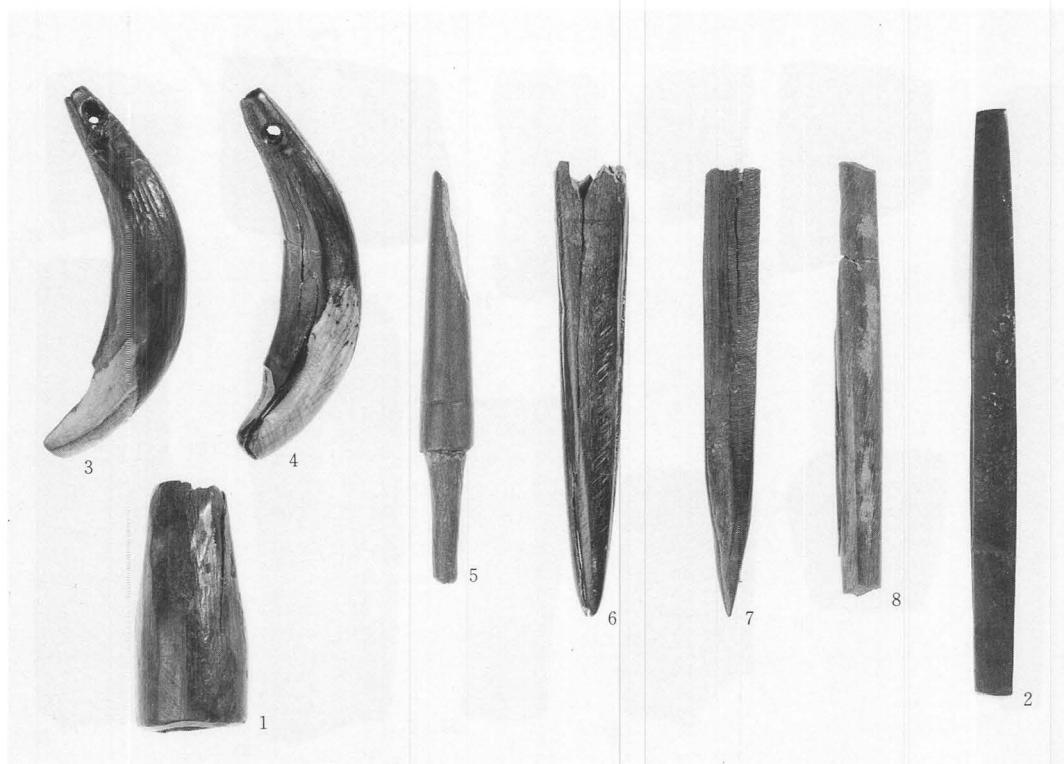
1. No 1・6・8・9 トレンチ出土石製品



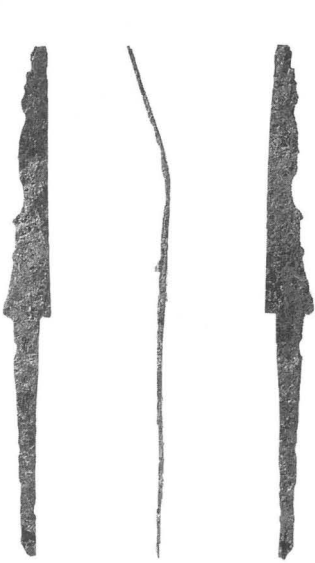
2. No 1・3・4・6・8 トレンチ出土石製品



1. No 1～4 トレンチ出土土製品



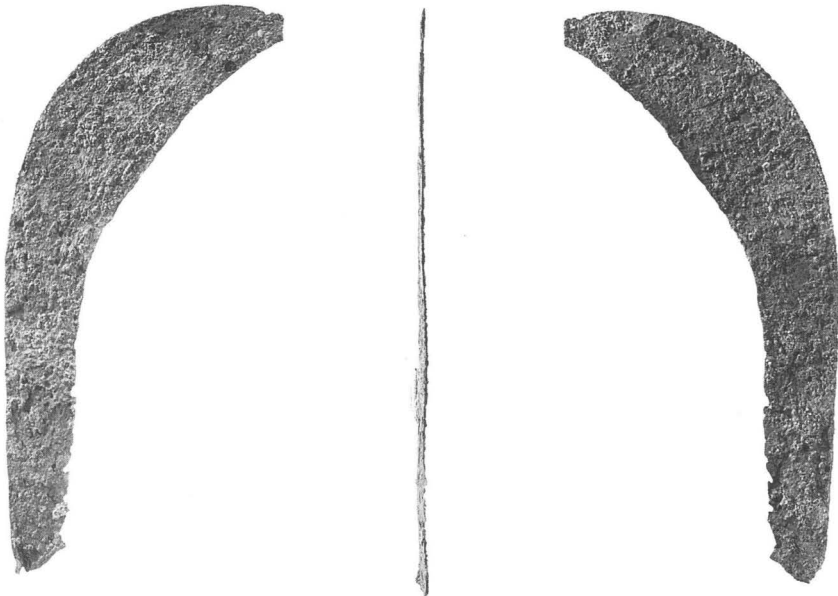
2. No 1・8 トレンチ出土骨・角・牙製品



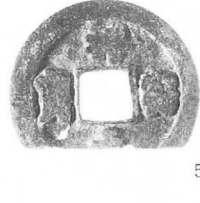
12



7



9



10



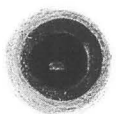
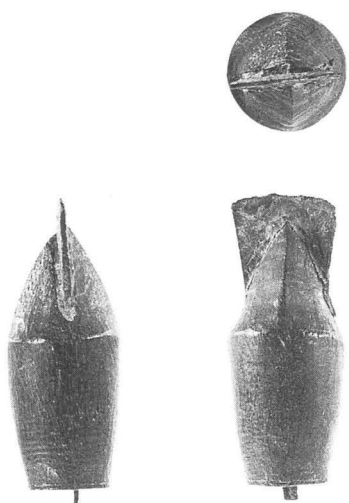
13



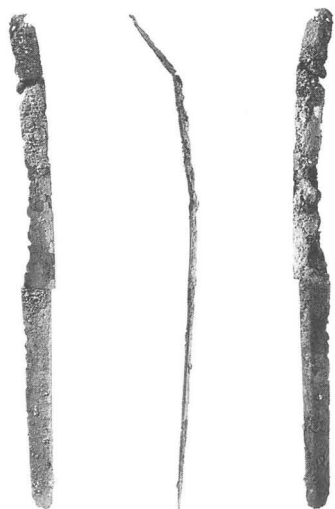
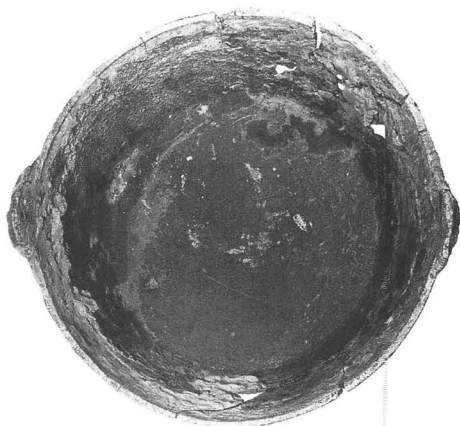
16



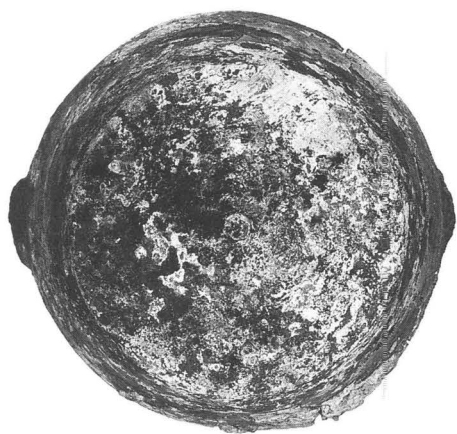
15



14

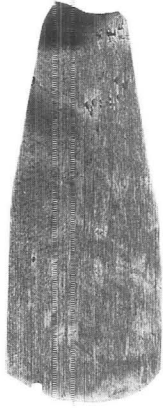


12



17

図版
110
遺物



4



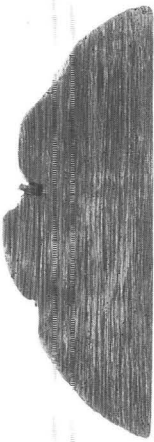
7



5



6



10



11



8



9



20

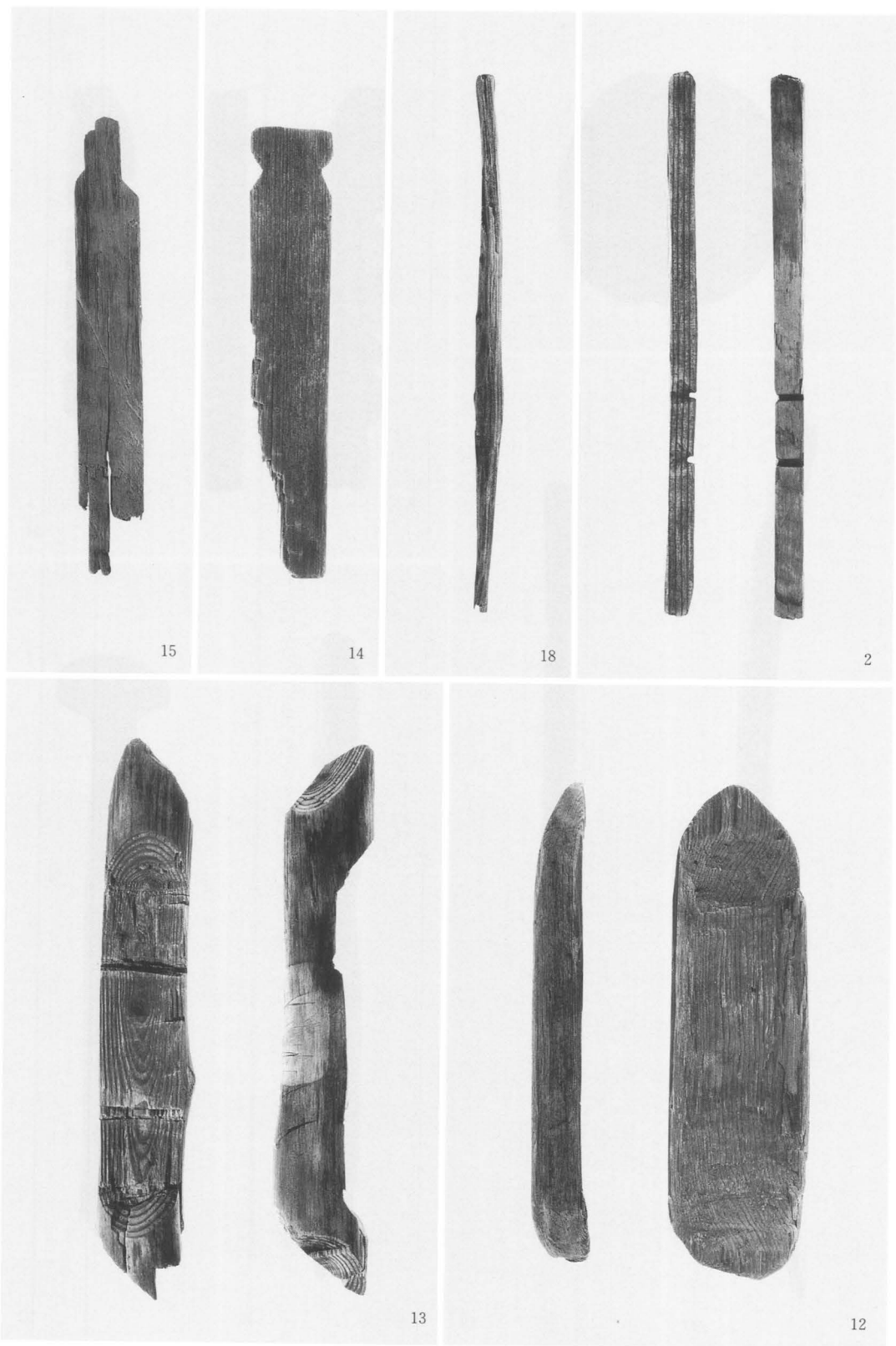


3

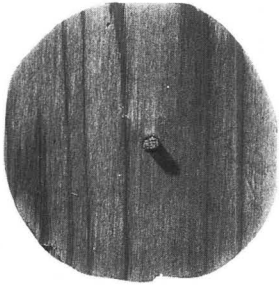


1

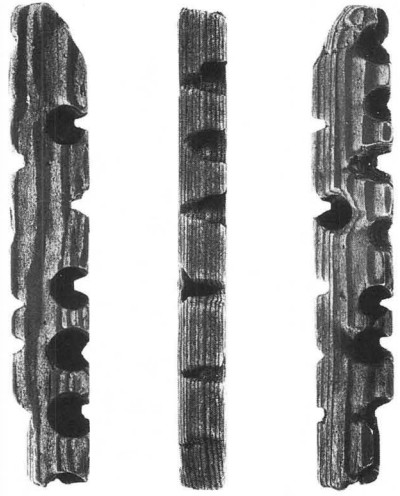




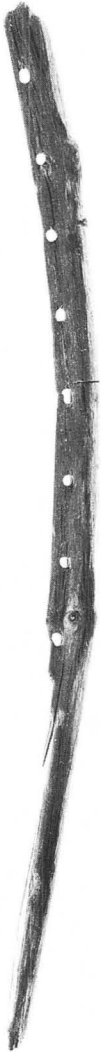
No 1 トレンチ出土木製品



25



24



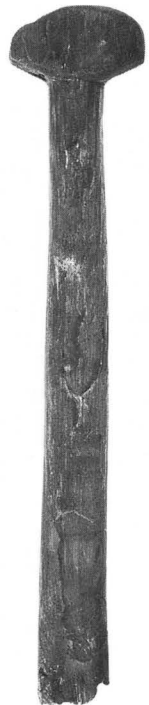
17



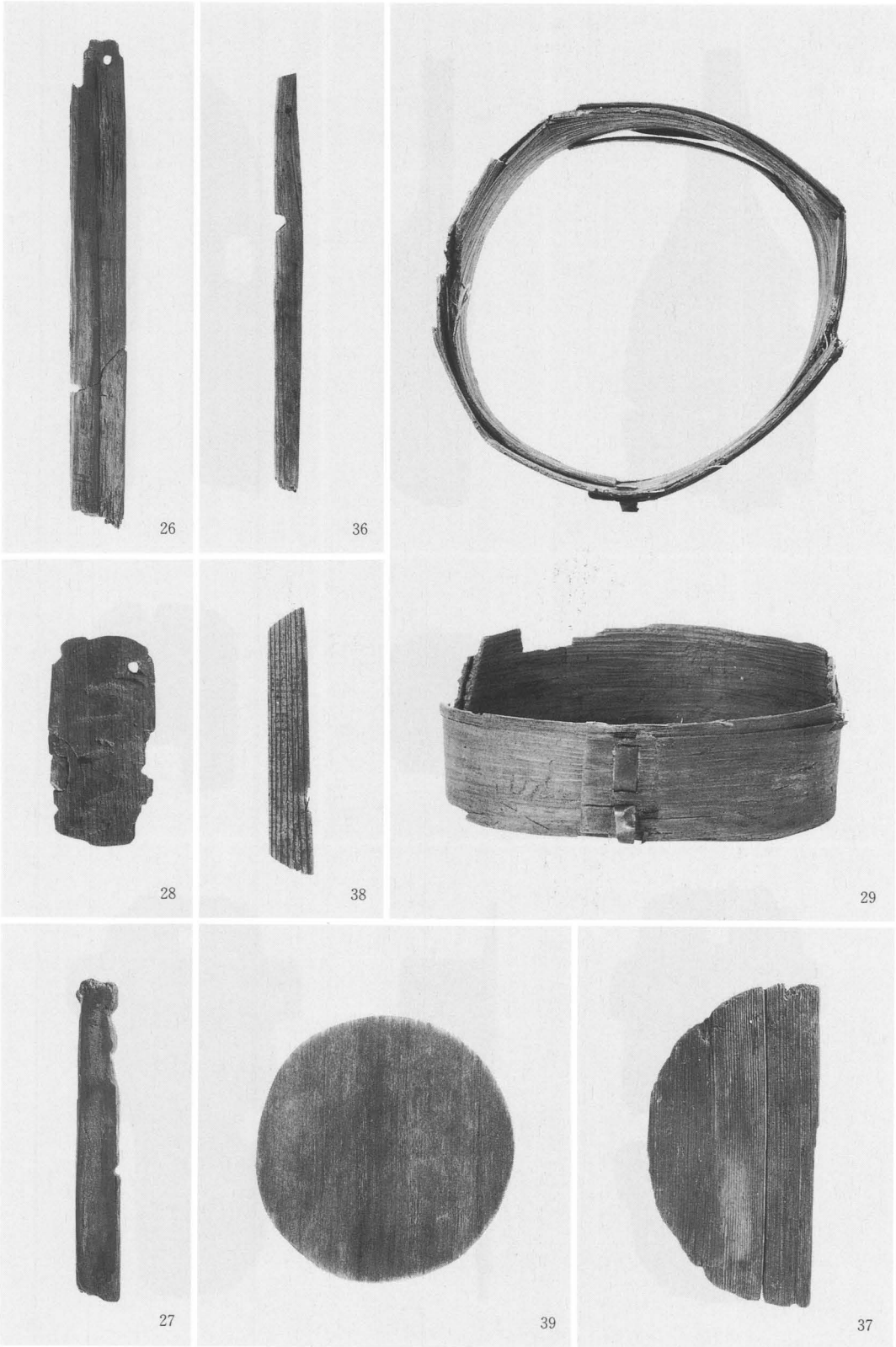
19



16



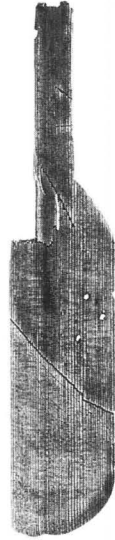
22



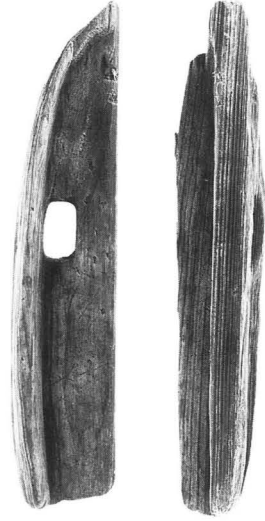
No 3・4 トレンチ出土木製品



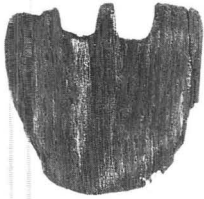
32



33



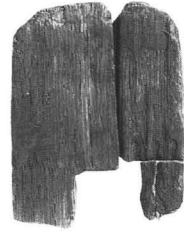
40



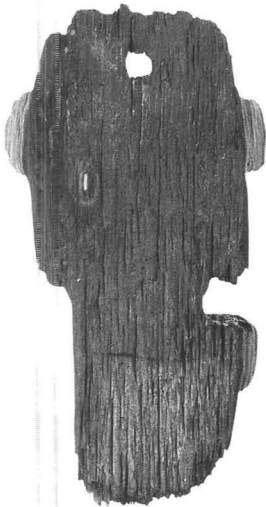
31



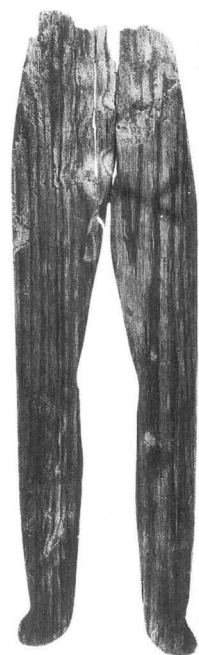
35



34

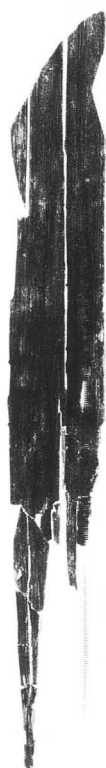
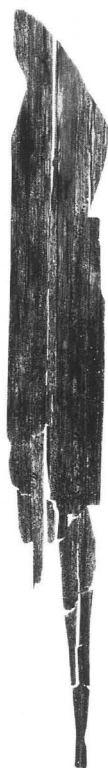


30



44

41



48

43

図版
116
遺物



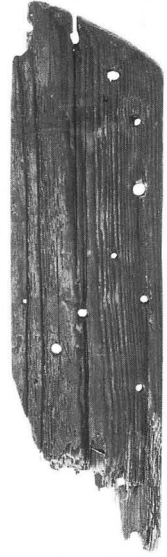
42



46



45



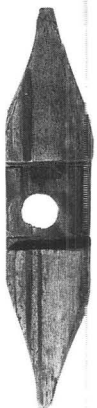
52



55



54



49



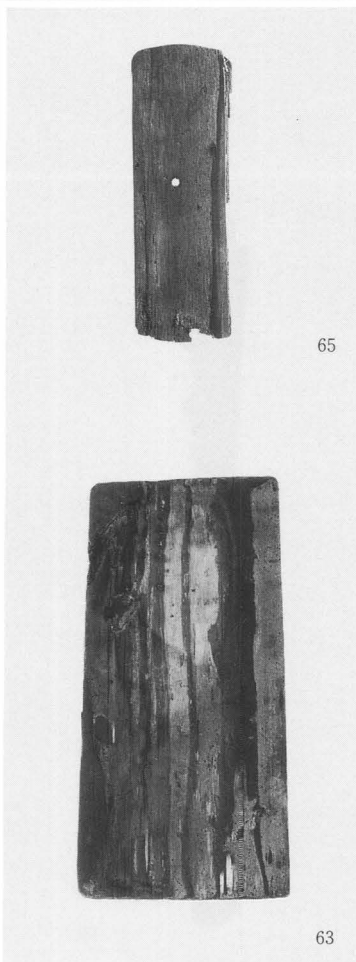
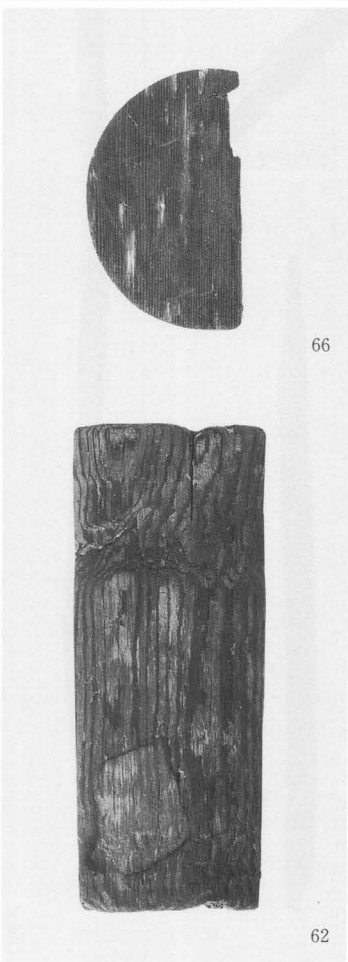
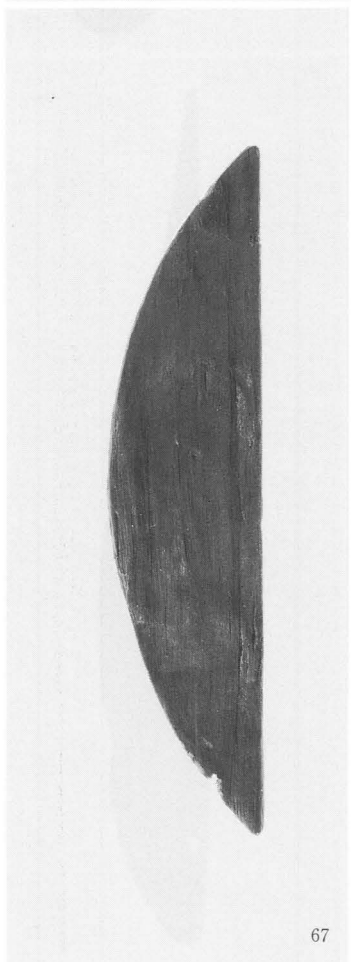
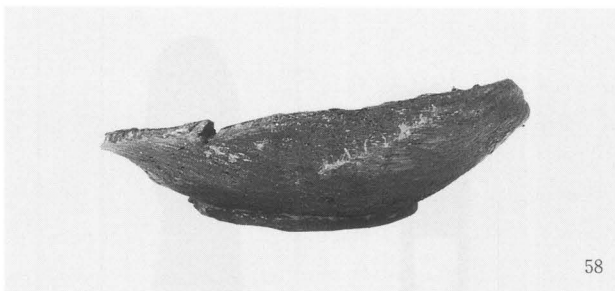
50

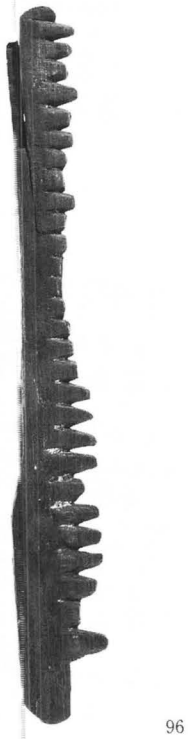


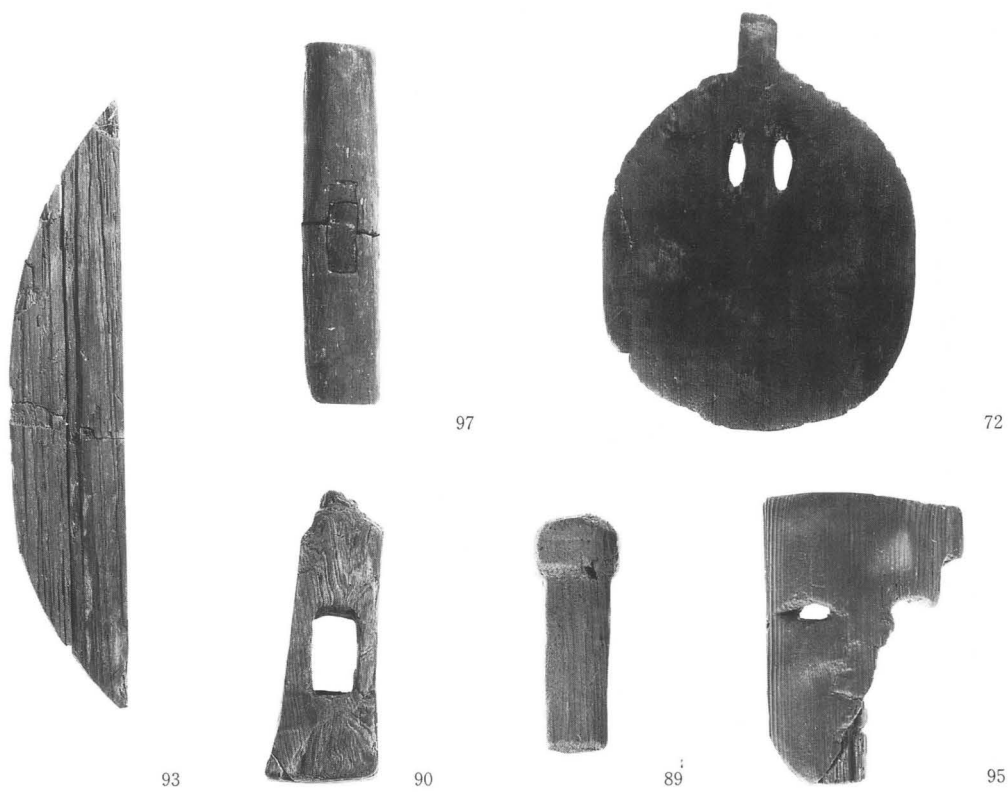
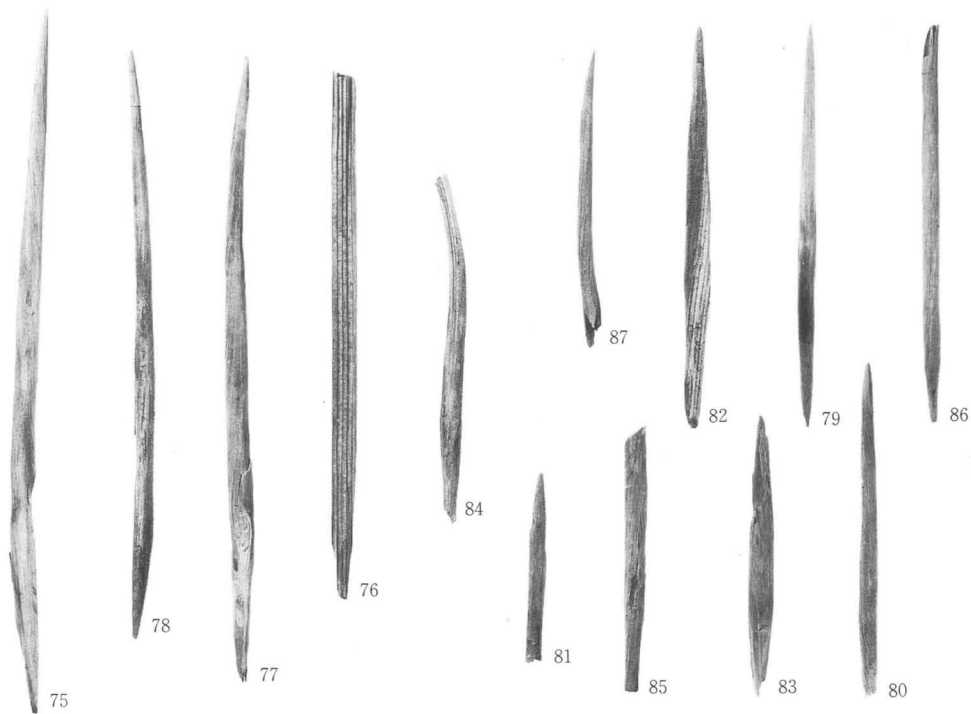
51

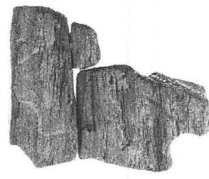


56

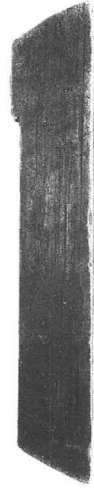
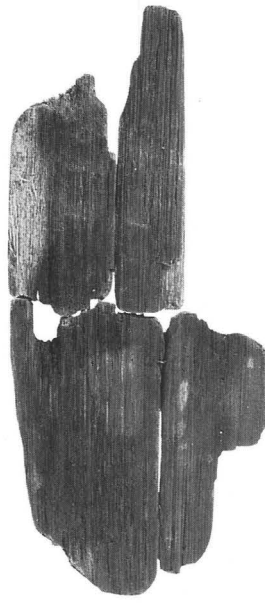
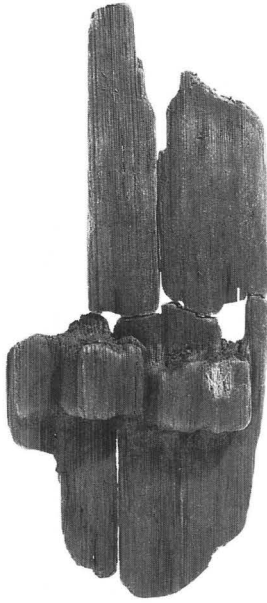








91



94

92



101



100



102



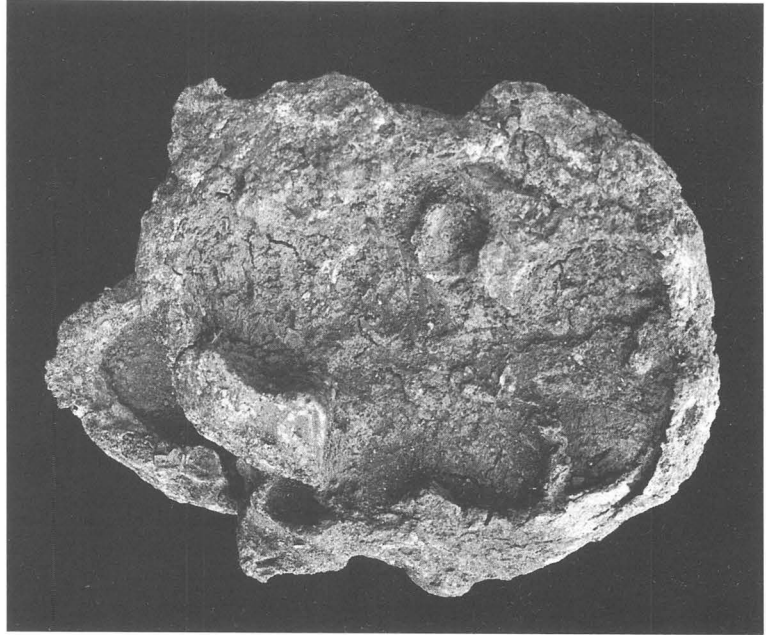
99



98



103



1. 頭蓋骨の上面観。頭蓋腔内の土は取り除くことができなかった。



2. 四肢骨。左から順に、左大腿骨、左脛骨、右脛骨、右腓骨、右大腿骨（以上いずれも後面）、左上腕骨（前面）。

水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告

1992年 3 月31日

発行所 財団法人東大阪市文化財協会
東大阪市教育委員会

印刷所 明文堂工業株式会社